
透明なひと

床

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透明なひと

【Nコード】

N0118H

【作者名】

床

【あらすじ】

幽霊の存在が認められた時代。そんな時代に取り遅れた質屋の男は浄霊屋の少女と出会い、平穏な日常から引つ張り出されて行く。近未来オカルティックファンタジー。完結済。もらったイラスト上げました。必見。

第一章 指輪に憑いた想い 一

持ち込まれた時から、怪しいとは思っていたのだ。ショーケースに並べられたダイヤの指輪は、新品同様の輝きを放っている。同じ棚に陳列された商品が、すべて色褪せて見える程に。

質屋に売られてきたのだから、この指輪は中古に決まっている。元の持ち主がどれほど几帳面な人間であったのだとしても、これほどまで綺麗には保てないだろう。

何よりそんな几帳面な人間が、こんな胡散臭い質屋に売りに来るとは到底思えなかった。携帯一つで全て事足りる時代だから、わざわざ質屋まで足を運ぶ物好きも、なかなかお目にかかれない。

本来なら、傷一つないような状態で質に入れられる事など、そうそうない。昔はこういった貴金属類は庶民でも買えるものだったようだが、今は高級品とは買う意味のないもの、という風潮が高まっている。結婚指輪以外の、高価な装飾品は必要ないのだ。

だからこういった希少価値の高い貴金属類やブランド物を売買するのは、一部のコレクターに限られている。その物好きな蒐集家達も、飽きれば別の人間に売り払ってしまう。人々の手を渡り歩く内に、自然と物には傷がついて行く。

質屋に流れてくる商品は、そんな傷物ばかりだ。質屋が取り扱うような物を売る人間も、買う人間もないから、どちらも貴重ではある。貴重ではあるが高価であるが故に、慎重にならざるを得ない。疑ってはいたのに、何故あの時易々と受け取ってしまったのだろう。藤堂匡（とうどうまこと）はカウンターからショーケースを眺めながら、ぼんやりと考える。

女好きのしそうな精悍な顔付きだが、瞼が眠たげに落ちている為か、どこか間が抜けて見える。無精髭と伸びかけで不揃いな長さの髪が、それを助長させていた。だらしなく頬杖をついた手元では、吸いさしの煙草が燻っている。

「ネットオークションにでも、出しちまおうかね……」

ぼやきながら藤堂は、カウンターの隅に置かれた灰皿に煙草をねじ込む。この時代、質屋は暇なのだ。全く儲からない。

とはいえこういった自営業を営む人間が、近年目に見えて減少傾向にある為、国からは助成金が出る。けれど、その稼業でもそれなりに稼がなければ、楽には暮らして行かない。国から出る金のお陰で、ようやく食って行けている。家賃さえも、食費を切り詰めてやっと出しているような有様だ。

藤堂は指輪から視線を逸らし、欠伸を噛み殺した。この所、寝付きが悪い。普段なら布団に入れば三秒で寝付ける彼の不眠の理由は、恐らくあの指輪。

返せ。

そう言われているような気がする。気がするのだから、恐らく言われているのだろう。しかしどこに返せと言うのか。残念ながら藤堂には霊感がないので、幽霊の意図など分からない。

幽霊。数十年前までは、それが本当に存在するのかどうか、分からなかったという。けれど人類の殆どが霊感を持って生まれるようになった今となつては、世間的にも幽霊の存在が認められている。

幼い頃から霊感がない事で揶揄われてきた藤堂には、昔は限られた一部の人間しか霊感を持たなかったという事が、不思議に思える。しかし祖父などは霊の存在自体を不思議がっていたから、本当の事なのだろう。妙な時代になつたものだと、祖父は幽霊退治屋の看板を見る度に呟いていた。

見えない藤堂からしてみれば、時代よりも、見える人間の方が不思議に思える。見えない事で時代遅れだなどと言われるのにも、正直なところ、辟易していた。

最近では、儲かるのは幽霊関係の商売ばかりだ。霊の言葉を聞き、生者に伝える霊媒師や、生前最後の望みを叶える拝み屋など、多種多様の職業が存在する。その中でも、悪霊を退治する退治屋は、相当儲かるのだという。

悪霊といえば、生者に害をなすもの。退治屋が儲かるのは、危険な職業であるが故だろう。

危険ではあるものの、幽霊関係の職業は、今や万人の憧れの的であると言っても過言ではない。だから国が救済措置として、それ以外の自営業を営む会社へ、助成金を出すようになった。退治屋や除霊屋を目指す人間が、近年圧倒的に増え始めたからであるという。国民の血税で賄われる雀の涙ほどの助成金など、何の役にも立たないのだが。

幽霊の存在やその影響が認められた今では、警察にまで幽霊討伐部が置かれている。しかし実際動いているのは、退治屋と呼ばれる悪霊専門の業者だ。嫌な時代に生まれてしまったものだと、藤堂は己の稼ぎを見る度にそう思う。

「ああ、うるせえな畜生」

寝不足のせいか指輪に憑いた霊の仕業か、止まない耳鳴りを払うように、藤堂は頭を振りながら吐き捨てる。煙草を銜えながら苛立たしげに立ち上がり、横目でショーケースをちらりと見た。いつそ盗られてしまえばいいのにと、そう思う。

銜え煙草に火を点けながら店を出て、藤堂はふと、我が家を見上げた。三階建てのビルの一階が彼の店兼自宅で、二階と三階を使用している会社は皆、幽霊関係の仕事をしている。

藤堂が借りている一階は、元々は大家が自宅として使っていた。しかし数年前、息子夫婦と同居するに当たって一階も貸し出す事となり、後から店舗スペースを作ったそうだ。だから店舗自体は綺麗なものだが、奥の居住スペースはかなりガタがきている。それでも家があるだけでした。

質屋という廃れた業種であるにも関わらず、一階の一番広いスペースを独占させてもらっているのは、大家が古いタイプの人間であるからに他ならない。幽霊なんて見えないし、見えないものは信じないというのが持論であるそうだが、今時それもないだろうと藤堂は思う。

思うが、間借りさせてもらっている恩があるので、言った事は無い。何より藤堂自身も、そうだった古いタイプの人間だ。見えないものは見えないで、仕方がないと思っっている。頑固な祖父のように幽霊を信じていない訳ではないが。

店を出たはいいが、特に行く当てはない。夕飯でも食べに行こうかと繁華街の方へ足を向けた時、路地の方から高らかな足音が聞こえた。濃い眉を怪訝に顰め、藤堂はそちらを見る。まだ人影は現れない。

「いでっ！」

何かがぶつかったような鈍い衝撃に、藤堂は思わず声を上げた。続いて体の右側から左側へ、冷たい感触が通り過ぎる。自分にぶつかったものさえ見えなかったが、見えないという事は幽霊なのだろう。よろけながら、藤堂は迷惑そうに顔をしかめた。

後ろからは更に、足音が近付いてくる。アスファルトを叩く硬い音は、女物の靴が立てるそれだ。

「伏せろ！」

ハスキーな女の声が響き渡った刹那、藤堂の頭に再び痛みが走った。今度は耳鳴りではない。

ぐう、だかぐえ、だかと奇妙な声を漏らしながら、藤堂はつんめって情けなくその場に膝をつく。火の点いた煙草がアスファルトに落ちたので、慌てて摘んで揉み消した。迷惑そうに顔をしかめて頭上を見た彼の視界に入ったのは、黒いパンプスのヒール。

藤堂の目には、全てがスローに見えた。視界を通り過ぎる長い足。黒いパンツスーツを纏ったしなやかな体躯。目前で翻る、銀色の長い髪。しゃがみ込んだ藤堂の頭上を通り過ぎた人物は、進行方向へ素早く足を突き出した。

何かが破裂したような音が、藤堂の耳に届いた。軽やかな身のこなしで着地した女が何か蹴ったのだらうと推測したが、藤堂には何も見えなかった。自分に見えないものを蹴ったという事は退治屋だらうかと、些か混乱した頭でそう考える。

通常、幽体に直接的なダメージを与える事は出来ない。だから拝み屋は幽霊の未練を断ち切ることで彼らを成仏させるのだが、退治屋は文字通り、幽霊を『退治』する。

彼らは特殊な道具や呪文を使って、幽体に物理的ダメージを与えられるようにすると聞く。それ以外の詳しい事など、藤堂は知らない。見えない上に質屋を営む彼には、別次元の話なのだ。何より幽霊に迷惑をかけられた事がないし、靈感がないから退治屋を志したことも、興味もない。

「済まない。踏み台にしてしまった」

頭上から掛けられた声に我に返った藤堂の目前へ、白い手袋を嵌めた手が差し出されている。声がした方へ視線を向けると、申し訳なさそうに眉尻を下げた女が手を差し伸べていた。藤堂はその顔を見て、思わず息を呑む。

「大丈夫か？」

形の良い唇が動くのを、藤堂は呆然と見上げていた。

白い細面に、瞳の色の薄い切れ長の目。すっと通った鼻筋。むらなく色を抜かれた銀髪は、途中で蟠る事もなく真っ直ぐに腰まで伸ばされている。髪色の自由が認められた今ではそう珍しい色ではないが、ここまで傷む事なく保たれている事は稀だ。

目元涼やかな凜々しい美人だったが、藤堂の目はそれよりも、スーツ越しにも目立って見える豊満な胸の方に行った。形も良さそうだと考えながら、藤堂は思わず生唾を飲む。飲み込んで喉が鳴った所で、慌てて差し出された手を取った。

「まあ……あんた何だ、退治屋か」

藤堂は手を引かれて立ち上がったから、ジーンズの膝を叩いて汚れを落としながら聞いた。頷いた女の身長は彼と殆ど変わらなかつたが、腰の位置は大分違う。日本人ではないのだろうか、自分の足が短い事を認めたくない藤堂はそう考える。

「ああ……怪我はないか？ あれとぶつかっただろう」

「アレって言われても、俺分かんねんだけど」

女は一瞬怪訝に片眉を寄せたが、すぐに得心が行ったようで、ああ、と呟いた。

「あなたは見えないのか、珍しいな」

明るい茶色の目が、藤堂の背後を見た。切れ長の双眸はすつと細められた後、すぐに戻って藤堂の目を真っ直ぐに見つめる。端正な顔と見詰め合っていると、なんとなく気恥ずかしいような気持ちになつて、藤堂は視線を逸らした。

こんな美人と会話するなど、滅多にない事だ。そもそも客以外の女とは、最近はめつきり関わり合わない。無駄に使えるような金がないので、恋人を作ろうとも思わない。それでも煙草と酒だけは、やめられないのだが。

「水子が大勢憑いているな」

藤堂は思わず目を丸くした。

「は？」

問い返すと、女は指先を顎に当てて首を捻る。よくよく見てみれば彼女が両手に嵌めた白い手袋には、細かな文字で呪文のようなものが書き連ねられていた。

「いや、子供か。なに、悪意はなさそうだ。危害を加える事はないさ。それに、子供に好かれるのはいい事……」

その先は途切れた。水子に憑かれるような覚えなど、藤堂にはない。そこまで女にだらしないつもりはない。困惑する藤堂を尻目に、女は背筋を伸ばして、藤堂の肩越しに何かを見ていた。

「シロガネ」

怪訝に思った藤堂が振り返る前に、男の声が聞こえた。女の肩越しに見た先にいたのは、きつちりとスーツを着込んだ初老の男性。ゆっくりとした歩みで近付いて来る男の顔立ちは優しげに見えたが、藤堂は何故だか威圧感を覚えた。

「終わったかね？」

男の柔らかな声が、藤堂を通り越して女に掛けられる。白銀しろがねと呼ばれた女は一步下がって藤堂から離れると、深々と頭を下げた。

「はい」

「そうか。……その方は？」

唐突に振られ、藤堂は意味もなく姿勢を正した。どことなく居心地が悪いのは男が発する威圧感のせいか、赤の他人に挟まれているというこの状況のせいか。

「その……逃げた霊と、接触してしまって」

男の眉が顰められた。その険しい表情に、藤堂は何かしでかしてしまったのだろうかと不安を覚えるが、白銀は動じない。性別も違う上、年齢も大分離れていそうな二人を見ながら、どういった関係なのだろうか、藤堂は疑問に思う。

「怪我は？」

「ないようです」

「ならいい」

白銀が答えると、男は大仰に頷いてから、藤堂に向かって頭を下げた。白髪混じりの頭を見下ろしながら、藤堂は困惑して首の後ろを掻く。どう言葉を発していいものやら迷っている内に、男の方が口を開いた。

「ご迷惑をお掛け致しました」

言いながら顔を上げ、男は懐から名刺を取り出して藤堂に差し出した。一分の隙もない、流れるような動作だ。それがまた、藤堂に緊張感を抱かせる。

反射的に受け取ったものの、藤堂は名刺など持ち合わせていない。携帯さえあれば全て事足りるこの情報化社会において、名刺を持ち歩いている方が稀だ。

「お困りの事があれば、是非当社に。お詫びとして、無料で承りましょう」

「……はあ」

儲かってますね、と口を突いて嫌味が出そうになったが、流石に堪えた。態度や物言いから察するに、彼らは退治屋の上司と部下という関係なのだろう。

気の抜けた声で藤堂が返すと、男はもう一度慇懃に頭を下げ、白銀へ目配せした。それだけで意図を酌んだのか、彼女は頷いてから、元来た方へ歩き出す。

白銀はすれ違いざま、藤堂に軽く会釈をした。さらりと流れた髪からふわわりと漂った芳香につられ、藤堂は思わず目で彼女の背を追う。毅然とした長身の女は、一度も振り返らずに去って行った。

第一章 指輪に憑いた想い 二

藤堂は二人が去って行った方を暫く眺めた後、肩に入っていた力を抜くように溜息を吐いた。

「……いい乳だったなア」

あの女は、藤堂に水子が憑いていると言った。思い当たる節はない。確かに学生の時は女性関係がきつちりしていると云えたものでもなかったが、だらしなかつたとも言いがたい。それ以前に要領の悪い藤堂は顔でもとても長続きする方ではないし、水子に憑かれるような原因が思い当たらない。

憑かれているとするなら、あの指輪にではないのだろうか。憑くのは霊だが、指輪に憑いている霊が藤堂の安眠を妨害しているのだから、指輪に憑かれているのだと彼は思っている。

藤堂はあの指輪が欲しいと思った訳ではない。既存商品さえ売れないからこれ以上欲しくはないが、売られて来たから買い取っただけだ。そもそもあれは巡り巡って質屋に売られてきただけで、指輪に憑いた霊は恐らく、彼自身とは何の関係もない。迷惑千万だ。

所々跳ねた髪を苛立たしげにかき混ぜて、藤堂は歩き出した。考えているだけで腹が立つ。何の関係もない人間に、何故害を為すのか。藤堂にはそれが理解し難い。

自殺者の霊が抱いていた怨みの念が踏切事故に影響しているのだ、海難事故の犠牲者が他人を引きずり込むのだ、そういった話はよく聞く。しかし腑に落ちない。死んだ人間が、霊になってまで赤の他人を怨むのは、お門違いだと思っからだ。

生前怨んでいた人間を殺すなら分かる。それは単純な復讐心から来るものだし、少なくとも赤の他人に危害が及ぶ事はない。しかし何の関係もない所で、他人と一緒にたにされて憑かれるという事が、藤堂には無性に腹立だしく思えるのだ。自分には関係がないし、怨まれるような事をした覚えもない。

人通りの多い繁華街に出てから、さつきの退治屋に指輪の除霊を頼めば良かった、と後悔した。どうせいつ依頼してもタダなのだから、また明日連絡すればいいだけの話だ。しかし何しろ金がないから、たった数円の電話代さえ勿体無いと感じる。例えば数円だろうと、藤堂にとつては大金だ。

馴染みの定食屋へ入って適当な席に着くと、カウンターの向こうから店主の野太い声が掛けられる。不機嫌そうな声を聞いてみても、愛想のない態度を見ても、お世辞にも接客態度がいいとは言いがたいが、作る飯は美味い。流行っているとは到底言えない飯屋だが、この親父の味に惚れた常連客が通い詰めるお陰で、なんとか潰れずに済んでいるようだ。

藤堂も常連の一人ではあるが、通う理由は他の客と違う。自宅から近い事と、値段が安い事。飯などは食べればいいし、食べない程不味いものなど、この世には存在しないと彼は思っている。しかし自分で作るのは面倒なので、度々ここへ訪れる。

いつもの定食を注文して早々懐から煙草を出したついでに、退治屋に貰った名刺を見た。カウンターに紙片を置いて、煙草に火を点けながら視線を落とす。「堤久礼太^{つみくれた}」と名前が書かれた上に、小さく常務と肩書きがあった。管理職だったのかと藤堂は少々感心したが、名前を見る限り歳は行っていそつだ。

今の時代に、こんな奇抜な名前をつける親はいない。読み辛い名前は大昔に流行っていたようだが、今では廃れてしまった。藤堂の親の名前も妙だが、彼らはそれが嫌で子供に堅苦しい名前を付けたのだとぼやいていた。

「質屋よ、お前質屋のくせに、鳳^{おおとり}コーポレーションの常務と知り合っただったのかよ」

近くから聞こえたダミ声に驚いて横を見ると、この定食屋の常連客である中年男性が、藤堂の肩口から顔を出して名刺を覗き込んでいた。つるりとした禿頭が、外から差し込む光を反射して輝いている。藤堂は思わず眩しげに目を細めた。

「何だよカネさん、脅かすなよ」

「ああ、悪い悪い」

藤堂は迷惑そうにそう言っつて、少し身を引く。男は深い皺の刻まれた顔に、にやりと笑みを浮かべた。

カネさんと藤堂は呼んだが、これは本名ではない。金貸しをやっているそうだから、単純にカネさんと呼んでいる。この店で偶然会えば世間話をするぐらいで、お互いの名前は知らないし、言つつもりもない。だから向こうも、藤堂を質屋と呼ぶ。

気楽な間柄だ。友人関係とはその程度でいいと、藤堂は考えている。そのぐらいの方が愚痴を言いやすいし、個人的な事に関して深く突っ込まれる事もない。たまに会って軽口を叩ける程度の関係が、彼にとつては一番望ましい。

「別に知り合いじゃねえよ。偶然。つうか、鳳コーポレーションで何だ」

「お前鳳知らねえのか。ホント時代に逆らつてんな」

藤堂は軽く肩を竦めて、深く吸い込んだ煙を長く吐き出した。自分が時代遅れである事ぐらい、彼は重々承知している。

「鳳つていやア、退治屋ん中じゃ一番の会社よ。日本と言わず世界中に支店持つてやがつてな。取締役社長は毎年、世界規模の長者番付で、十位以内」

「なんだそりゃ。幾ら稼いでんだか全然想像出来ねえ」
「俺もだ」

金貸しは大声を上げて快活に笑った。その笑い声を聞きながら、金貸しというのはいつから儲からなくなったのだろうと、藤堂は考える。昔はそれなりに儲かっていたような印象があるのだが、時代が違つという事なのだろうか。

なににせよ、質屋も金貸しと同じようなものだ。質屋が儲からなくて首が回らない状態なのだから、金貸しも似たような状況だろう。金がないのに明るいこの金貸しを見てみると、自分も腐つてはいられないと藤堂は思う。

思うだけで元来無気力な藤堂は、何をするわけでもないのだが。精々大型デパートや他の質屋と提携して、年に二、三度バーゲンを催すぐらいだ。

「でもなあ質屋よ。俺らはこの仕事してて命の危険に晒される事なんか、ねえだろう。あちらさんは違うからなあ」

「ああ……そうねえ」

藤堂の生返事にも、金貸しは大様に頷いた。

一瞬会話が止まったのを見計らったように、厨房にいた店主がカウンターに塩鮭定食の膳を置く。藤堂は煙草をもみ消しながら軽く片手を挙げ、親父に挨拶してから、カウンターに備え付けの割箸を取った。

「幽霊関係の仕事なんざごまんとあるが、退治屋が一番儲かるのは、その辺が理由だわな。下手すりゃ死ぬかもわからねえ。あぶねえから依頼料も弾む」

切り身の鮭を口に運びながら、藤堂は投げやりに頷く。話に興味がない訳でも、中年親父の蘊蓄めいた長話を鬱陶しいと思っっている訳でもないが、彼は喋るのがあまり得意ではない。つまりは口下手なのだが、口から産まれたような男よりはいいはずだと、本人は思っている。

「まあ、国に金まで出してもらってダラダラ仕事してる俺らじゃ、奴ら羨むのもおかしな話だな」

金貸しがそう締めくくった時、彼の前にも膳が出された。艶やかに照り輝いて一粒一粒から湯気を立てる白飯を見て、金貸しは舌なめずりをする。

藤堂はそれを横目で見ながら、黙々と箸を進めた。金貸しという職業には実に似つかわしい仕草だと、どうでもいい事を考える。藤堂は時代劇ファンだ。

「おじさん」

隣で生姜焼きを口にかき込んでいた金貸しが、声のした方に視線を遣る。つられて藤堂も、そちらを見た。

「元気？ 儲かってる？」

澆刺とした声で言いながら近付いてきたのは、セーラー服姿の少女だった。今時珍しい黒髪は肩口で真っ直ぐに切り揃えられ、歩度にさらさらと揺れる。大きな垂れ目に、幅の広い唇。緩やかなラインを描く頬は薄紅色に染まっており、少女の整った顔立ちを際立たせていた。

しかし藤堂の目はその可愛らしい容貌よりも、制服の薄い生地を押し上げる胸の方に行った。そこそこ、と心中独りごちる。紺の襟に白い袖、赤いリボンとのコントラストがやけに眩しく見え、藤堂は思わず目を細めた。

「相変わらずだ。メイちゃんは……儲かってるよなあ」

少女は大きな目を細くして、快活に笑った。

どういふ関係なのかと藤堂は訝しんだが、この少女が常連だとすれば、やたらと人懐こいこの中年親父と仲がいいのも頷ける。彼女の歳で、こんな親父の憩いの場のような定食屋に入り浸っているというのも、考えにくいのだが。

「いつも通りだよ。……隣の人、知り合いなの？」

メイと呼ばれた少女は金貸しの横に腰を下ろし、カウンターに身を乗り出して藤堂を見上げた。

儲かっているかと聞いたという事は、この少女も何かしらの職に就いているのだろう。才能ある人材を教育するという名目で、心霊関係の企業による青田買いが流行っている昨今では、高校生が正社員として雇われる事も少なくはない。

「会つとよく話すんだよ。質屋やっててな、こいつも貧乏だ」

「一言余計だつての」

味噌汁を啜っていた藤堂は、横目で迷惑そうに金貸しを見てぼやいた。メイはふうん、と呟いて、金貸しの向こうから藤堂の顔を覗き込む。物怖じする様子もなくじろじろと己を観察するその視線に、彼は居心地の悪さを感じた。

「あなた随分、疲れた顔してる」

がつがつと飯を食いながら、金貸しはつられて藤堂を見る。言われた当の本人は二人の視線には応えず、実に不味そうに漬け物を齧った。実際に不味い訳ではない。

「こいつはいつもこんな顔だよ」

「そうじゃなくて、霊障が……」

メイはそこで言葉を止めて、首を捻った。怪訝な面持ちだ。

霊障と言われたら、藤堂にも心当たりはある。しかしタダでなんとかして貰おうという腹積もりなので、この少女が退治屋や除霊を主な仕事とする祈祷師のような類であったとしても、指輪の件を任せるつもりはない。何か言われたら面倒だと考えながら、藤堂は箸を置く。

「お兄さん、子供の霊が沢山憑いてる。子供に好かれるんだね」

煙草に火を点けようとした藤堂の手が、止まった。金貸しが片眉を顰めて、口の中のものを咀嚼しながら藤堂の顔を覗き込む。一体何の事なのだろうか、藤堂は些か辟易する。

「さっきも言われたぞ、それ。退治屋に」

藤堂は改めてタバコに火を吐け、煙を吐き出しながら疲れた調子で言った。金貸しが箸を持ったまま、合点が行ったとばかりに手を打つ。

「ああ、それで鳳の名刺貰ったのか」

「鳳？ 鳳コーポレーション？」

メイは更に身を乗り出して、金貸しに聞き返す。

「そうそう、常務と偶然会って名刺貰ったつづつから、何があったのかと思っただわ。商売敵だよなあ、メイちゃん」

藤堂の位置からメイの様子は窺えなかったが、商売敵という事はやはり退治屋なのだろうと彼は考える。こんな少女まで命を張るような職に就かなければならないとは、嫌な時代になったものだ。

しかし藤堂にとつてはそれも、別次元の話だ。どうせ幽霊など見えないのだから、実害さえなければ、子供が憑いていようがいまいが関係ない。

「そうだよ。私、仕事取られて大変なんだから。でも、常務で良かったね、お兄さん」

「なんで？」

「気のない調子で問い返すと、メイは体ごと藤堂の方を向いて、椅子から身を乗り出した。」

「他の過激派グループだったら、問答無用で退治されてたよ。その子たち」

藤堂は視線だけをメイに向けて、怪訝に表情を変えた。

「社内でグループに分かれてんのかよ」

「そう。常務のグループには白銀様がいるから、悪意のない霊には、無闇に手を出したりしないの」

「シロガネサマ？」

その響きに、藤堂は一瞬神社を思い浮かべた。しかし金貸しがメイを見たので、それ以上口は挟まない。元々、余計な事は言わない主義だ。

「退治屋だの拝み屋だのやってる女の子は皆、憧れてるんだっただけな」

金貸しが補足すると、メイは目を輝かせて何度も頷いた。藤堂は彼女から視線を外し、立ち上る煙を目で追う。

「……あのねーちゃん、そんなにすげえのか」

確かに男よりは女に好かれそうだと思いつながら呟くと、メイの表情が変わった。孫でも相手にするように、にこやかに彼女を見ていた金貸しが、驚いた様子で身を引く。藤堂は片眉を上げて、メイの方へ顔を向けた。

「会ったの？」

メイの声は真剣そのものだった。上げた眉を更に怪訝に歪め、藤堂は短く聞き返す。

「は？」

「背が高くて、銀髪で、凜々しくって」

「巨乳？ 会ったけど」

藤堂の発言に突っ込もうと金貸しが口を開いたが、言葉を発するより先に、メイが椅子から飛び降りて藤堂の腕を掴んだ。引つ張られて椅子から転げ落ちそうになりながら、藤堂は慌ててその場に踏みとどまる。

「ちよ、何よ。危ねえよ」

「どこで会ったの？ 案内して！」

「はあ？ もういねえだろ、流石に」

「いいから早く！」

藤堂はメイに引つ張られるまま、まろびながら店の出口へ向かう。随分と押しの強い娘だと、銜えたままの煙草を指先で摘みながら呑気に考える。そしてふと、カウンターで呆然とする金貸しを振り返った。

「あ。カネさん、金払つといて。次会った時返すわ」

「流されやすい奴だな」

メイに引きずられるようにして出て行く藤堂の背中を見ながら、金貸しは呆れた声で呟いた。

第一章 指輪に憑いた想い 三

藤堂はメイに引つ張られるまま鳳の二人を探し回ったが、結局見つからなかった。諦めて定食屋付近まで戻ってきたメイは、肩を落として駐車場の隅にしゃがみ込む。疲れた溜息を漏らしていたが、そう疲れているようには見えなかった。息が上がっているような様子もない。若さゆえだろう。

反対に疲れきった表情の藤堂は、懐から煙草を取り出して火を点けながら空を仰ぎ見た。定食屋を出た時はまだ西日が差していたが、今はもう、かなり暗くなっている。何時間探していたのか、考えたくもない。

藤堂は銜え煙草のまま、傍らにあつた自動販売機から缶コーヒーを二つ買い、片方をメイに差し出した。ふてくされたような表情で膝に頬杖をついていたメイは、目を丸くして彼を見上げる。その顔を見下ろしながら、目が零れ落ちそうだと藤堂は思う。

「だから言つたら、もういねえって」

「うん……ごめんねお兄さん。ありがと」

おずおずと両手でコーヒーを受け取ったメイは、曖昧に藤堂へ微笑みかけた。元々垂れ気味の目尻が更に下がって稚児のような顔になるが、反面、表情の作り方が随分と大人びている。

藤堂は違和感も覚えたが、仕事をしているならそうもなるだろうと、敢えて何か言う事もしなかった。あまり若い娘に余計な事を言うと、セクハラだなどと糾弾されて一方的に訴えられてしまう。覚えがあるわけではないが、身の回りでは何人か、慰謝料を請求された人間がいる。

「そういえば、名前も聞いてなかった」

缶を両の手のひらで挟み、メイは思い出したように言った。コーヒーを一口飲み、ああ、と藤堂は生返事をする。随分と今更だ。

「藤堂。藤堂匡」

「知恩院明よ。……ごめんね藤堂さん、連れ回しちゃって」

申し訳なさそうな声に、反省はしているのかと、藤堂は些か意外に思う。あれだけ自分勝手に藤堂を連れ回した娘と、同じ人間には見えなかった。

「芸能人追っ掛けるのと同じような感覚だろ。よくわかんねえけど。まあ、いいよ」

適当に答えると、明は益々肩を落とした。藤堂は気を遣うのが苦手だ。

「ごめんなさい」

そこで、会話が止まった。元々余計な口は利かない主義の藤堂はなんとも思わないが、若い明は気まずいだろう。

「……あの、お兄さん、ほんとに知らないの？」

「何？」

躊躇いがちな問いかけに、藤堂は短く問い返した。我ながら全く愛想がないと、彼は自分に呆れる。

「白銀さんのこと」

そういえば探している最中に、そんなに有名なのかと聞いたら、当たり前だと突っぱねられた気がする。どうもこの娘は大人しそうな外見の割に、一度熱くなったら周りが見えなくなるようだ。

「知らねえ」

「テレビによく出てるよ？」

「俺、滅多にテレビ点けねえから」

明は残念そうに、そっか、と呟いた。コーヒーの缶を見つめたまま、彼女は小さく唸る。やはり無言の間は苦手のようだ。藤堂は申し訳ないような気分になったが、この場で切り出せるような話題もないので、結局黙っていた。

「鳳コーポレーションで、結構悪評が立ってるの。誰も頼んでないのに勝手に幽霊退治して、退治してやったんだからって、お金巻き上げたりするって……まあ鳳に限らず、退治屋って大体みんなそうなんだけど」

「へエ」

生返事をしながら排水溝に煙草を捨て、藤堂は新しいものに火を点ける。繁華街から少し逸れた人気のない静かな路地に、安いライターの音が響いた。

嫌煙家が声高に煙草を根絶しろと叫ぶ昨今だが、反面、タバコの煙が悪霊を遠ざけるというデータが出ているのも事実だ。別段、その為に吸っている訳ではないが。

「でも、あの人は違うの。幽霊と見れば見境なしの過激派グループに対抗して、皆の為に悪霊を退治するの」

「そんなん、皆知ってんのか。社内の事情だろ」

明は静かに首を振った。

「鳳の社員しか知らないよ。私、社員に友達がいるから」

「ああ……」

藤堂が納得した声を漏らすと、明は満足そうに笑って、更に続けた。自分の事ではないのに自慢話でもしているような、得意げな表情だ。よっぱど好きなのだろう。

「あの人、凄く強い。テレビとか出てるのも、鳳の社内で一番凄い退治屋だから。憧れるよ、こういう仕事してたら」

生憎藤堂は退治屋ではないどころか霊感もないので、明の気持ちは分からない。しかし強いものに憧れるというのは、子供らしくて良いと藤堂は思う。

引きずり回されていた時は迷惑甚だしいとは思えなかったが、理由を聞いてみれば、微笑ましくも感じられる。あれほどまでに熱狂する気持ちは、やっぱり理解し難いのだが。

「あそこ、藤堂さんのお店？」

ふと明が指さした先は、確かに藤堂が経営する質屋だった。一瞬何故分かったのかと疑問に思ったが、そういえば金貸しの親父が、藤堂を質屋だと紹介していた。今時質屋など滅多に見かけないから、明でなくともすぐに分かるだろう。

「見てもいい？」

「店？」

怪訝に眉を顰め、藤堂は携帯灰皿に煙草をねじ込む。

「見たって面白いモンなんかねえぞ」

「面白いかも知れないよ。いい？」

ふうんと鼻を鳴らして、藤堂はコーヒーの缶に口を付けながら店へ向かう。ひよいと立ち上がった明は、急ぎ足でその後を追った。

明がついて来ているのを肩越しに確認して、藤堂は自動ドアの鍵を開ける。出掛ける時にシャッターを閉め忘れていた事を、今更思い出した。シャッターを開けていようが閉めていようが、客が来ない事には変わらない。

店内は狭くも広くもないが、両の壁際に大きなガラス製のキャビネットが置かれてあるせいで、圧迫感があった。大人の腰ほどの高さのショーケースが中央に並び、その中に売られてきた品々が所狭しと陳列されている。明は大きな目を輝かせて、壁際のキャビネットに近付いた。

「すごい！ きれいな」

陳列された貴金属類を覗き込みながら、明は感嘆の声を上げた。

藤堂は首を捻って、困ったように顎を搔く。

こうして商品を褒められるのは珍しい事ではないが、結局誰も買っに行かないのだから複雑な気分になる。明に買えとは言わないが、美術館などと同じように思われても、店主としては困りものだ。

「過去の遺物だよ。売れやしねえ」

「でも、きれいだよ。……あれ？」

キャビネットに沿って横移動していた明が、怪訝な声を漏らした。

藤堂はその背中越しに、陳列された商品を見る。

明が見ていたのは、あの指輪だった。シルバーの土台に小さなダイヤが嵌った上品な意匠のものだが、どこか禍々しい空気を纏っている。靈感のない藤堂が見ても底知れない不安を覚えるのだから、退治屋の明が見れば、そこに何が憑いているのかなど、一目瞭然だろう。

指輪を見詰める明の表情が、段々と険しくなっていく。そんなに嫌なものが憑いているのだろうか。

「どうしてこんなもの、放っておいたの」

振り返って藤堂を見上げた明は、怒りも露わに眉をつり上げていた。どうしてと言われても、どうしようもなかったとしか答えようがない。除霊を頼む金など藤堂にはないし、売り払おうにも買い手がつかない。客に何も説明しないまま、売り払ってしまった方がいいという話でもないが。

霊が憑いていると知りながら物を売れば、罰せられる。靈感のない藤堂が糾弾されることはないだろうが、寝覚めは悪い。

藤堂は困ったように顔をしかめ、明から視線を逸らす。あまり易々と言いたいような事ではないが、責められるのは嫌だ。

「見えねえんだよ、俺。そいつも、ついこないだ買い取ったばかりで、詳しい事は知らねえの」

「見えないの?……そう」

ださいと言われるかと身構えていた藤堂は、少々拍子抜けして明を見下ろす。彼女は既にショーケースの方を向いており、藤堂の位置からは小さな頭しか見えなくなっていた。

見えない事で、ださいだの時代遅れだのと言われる事が嫌で、藤堂は余計な口を利かない。世間の風評を知らない事で時代遅れだと言われるのは、特に気にはならない。それは藤堂自身が知ろうとしないのが理由だからだ。

しかし靈感を持たずに生まれてしまった事をなじられても、藤堂にはどうする事も出来ない。霊が見えない事で困ったような覚えはないし、見えてどうなる、という気持ちもある。負け惜しみに過ぎないのも、分かってはいるが。

「生霊」

神秘的な面持ちで指輪を見つめていた明は、唐突にそう呟いた。藤堂は怪訝に眉を顰める。幽霊関係に疎い藤堂でも、それが穏やかならぬ単語である事は分かった。

「生霊が憑いてる。これ、借金のカタに取られてからずっと、色々な人の所を転々としてるみたい。早くなんとかしないと、大変な事になるよ」

訝しげな表情のまま、藤堂は指輪に視線を移した。生霊といえば人間に憑くものと思っていたのだが、それとは違うのだろうか。知識も見識も浅い彼には、よく分からない。

なんとかしないと、と言われても、生霊をどうすればいいのか、藤堂は知らない。困り果てて顎を掻きながら、首を捻る。

「除霊すりゃいいのか？」

「排除してもムダだよ」

呆れたような声だった。こころ表情が変わるのは、若い証拠だろうか。

「そうじゃなくて、本来の持ち主に返すの。『生霊』だから、持ち主は死んでないはず……そうだ、迷惑かけたお詫びにタダでやるよ。どう？」

タダという単語に反応した藤堂が一も二もなく頷くと、明は少し笑った。

「それじゃあちよっと、調べてみるね。その指輪、触っちゃダメだよ。危ないから」

「悪いね嬢ちゃん」

切り揃えられた黒髪を揺らして、明は左右に首を振った。

「お詫びだから、気にしないで。何か分かったら連絡するね。番号教えて」

言いながら、明は制服の胸ポケットから携帯を取り出した。最後に異性と番号を交換したのはいつだっただろうか、藤堂はどうでもいい事を考える。異性どころか同性とさえ、ここ数年出会っていないような気もする。

藤堂は元来ものぐさな性分で、他者との交流さえ面倒だと思つような人間だ。親が経営していた質屋を継ぐと決めた時は、当時つるんでいた友人達から一斉に止められた。

皆、お前に接客は無理だと口を揃えて言った。顔だけならホストにでもなんでもなれたのにと、力一杯残念がられた。残念なのは藤堂だ。

「それじゃ、またね」

携帯を閉じて胸ポケットへ落とすと、明は手を振りながら店を出て行った。藤堂はおう、だかああ、だかと曖昧な返事をして、スカートを翻して去って行く明の背中を見送る。

口下手でさえなければと、思う事もある。思うが、直す気はない。今のところはこれでなんとかやって行けているし、幸い顔がいいから、喋らなくとも女性関係で不自由した事はない。余計な事を言わない代わりに、周囲に流されるままだったらと生きるのが、当然のようになっていた。

それを不満に思った事はない。寧ろ、どうでもいいと考えている。そうして割り切らなければ、見えないものに蝕まれたこの世界では生き辛い。

「……………くだらねえ」

吐き捨てるように呟いてから、藤堂は今度こそシャッターを閉めるべく、店の入り口へ向かった。

第一章 指輪に憑いた想い 四

退治屋の娘に指輪の件を任せてから、早三日。未だに音沙汰はなく、藤堂の寝不足は続く。欠伸は止まらず、消費する煙草の本数も日を追う毎に増えて行く。既に店を開けるのも億劫になつていたが、それでも閉めておく事は出来ない。休めば休んだだけ、稼ぎが減る。商品が売れない限りは稼ぎなどないのだが、休んでいる内に客が来たらと思うと、おちおち寝込んでもらえない。

藤堂は吸いさしの煙草を灰皿に押し付けて、カウンターに突っ伏した。毎晩、布団に入った瞬間に、声が聞こえるのだ。ろくに眠れもしない。しかし昼間に寝てもいられない。ここ二日間は、カウンターで転寝をする回数が増えていた。

辛い。眠いのには眠れないというのは、こんなにも辛いものだったのだろうか。藤堂はあの指輪が店に来るまで毎日快眠だったから、余計に寝不足が辛かった。出来ることなら、今すぐ布団に入って眠ってしまいたい。だがそんな事をしたら、店を閉めなければいけない。最早シャツターを閉める事さえ、億劫になつていた。

とうとう舟を漕ぎ始めた時、自動ドアが開いた。藤堂は弾かれたように顔を上げたが、入店してきた人物を見るなり、落胆して肩を落とした。

「久しぶり、藤堂君」

髪を赤みがかった茶色に染めた女は、能気なまでに明るい調子で藤堂に声を掛けた。癖のある高い声が、寝不足の頭に響く。思わず額を押さえてから、藤堂は小さく溜息を吐いた。

「祐子さんさ、ムダ話しに来るのやめてくんねえか」

新藤祐子しんとうゆうこは不思議そうに目を丸くして、まじまじと藤堂を見た。

目と目の間が少々近く、彫りの深い顔立ちからは年齢の判断がつかない。活発なショートヘアと地黒であるらしい肌の為か、スーツを着ている割に若々しく見えた。

「キミ、いつもそんな事言わないじゃん。どうしたの、今日は。機嫌悪いの？」

祐子は真っ直ぐカウンターへ近付いて、再び突っ伏した藤堂の頭を見下ろした。

常にスーツ姿で現れる彼女は、この店の常連客だ。しかし年中訪ねて来ては世間話をして行くだけで、一度も商品を買ったことはない。何をしに来ているのかと問えば、目の保養と言う。藤堂には、その為に一週間に一度は店に通う祐子の気が知れない。

店主である自分に会いに来ているのかと、思っていたこともある。実際、そう聞いた。しかし彼女は盛大に笑って、そんなわけないと答えた。彼氏がいるから、あんたにかまけている暇なんてないよ、と。それならこんな寂れた質屋に顔を出さず、その彼氏の所へ行けばいいだろうに。

「眠いんだよ。ほっといてくれ」

「どうしたの、眠れないの？ 珍しい」

祐子は子供にするような手つきで藤堂の頭を撫でた後、カウンタ―に肘をついて身を乗り出した。腹の辺りで腕を組んでいる為、自然と豊満な胸が強調される。

顔を上げた藤堂は目の前に迫ったそれを見て、思わず姿勢を正した。大きく開けられたシャツの胸元から、寄せられた胸の谷間がくつきりと見える。視線が釘付けになった藤堂の顔を覗き込み、祐子は可笑しそうに笑った。

「元氣出た？」

「一部だけ……じゃなくてさ、今日はカンベンして。会話する気しねえから」

「何言ってるの、いつもじゃない」

目前に広がる楽園から視線を逸らして、藤堂は渋い顔をした。

確かに口下手で話すのが得意ではない藤堂は、祐子に対して年中同じような事を言っている。しかし今日ばかりは、口下手が理由ではないのだ。

祐子は訝しそうに藤堂の顔を眺めて、困ったように眉根を寄せた。藤堂の顔に表れた疲労感を見て取ったのだろう。

「疲れてるわね。そんなに景気悪い？」

「悪い」

短く肯定すると、祐子は苦笑いした。

「ま、しょうがないわね。ここだけじゃないわ、どの会社も不景気よ。幽霊関係以外は」

言いながら体を起こし、祐子はカウンターに凭れかかった。藤堂はちらりと祐子を見て、先ほどの光景をもっとよく目に焼き付けておけば良かったと後悔する。

不景気である事は、藤堂もよく分かっている。というより、藤堂が一番よく理解している。嗜好品も高級品も、今の時代は売れない。そこに金を注ぎ込む代わりに、死後の為に貯めておく人間が増えたからだ。坊主丸儲けとはこのことだろうか、藤堂は考える。霊媒師や退治屋は坊主ではないが。

「アタシもさ、申し訳ないと思ってるのよ。貧乏な藤堂君の為に、バッグ一つ買ってあげられないし」

「そう思うなら買ってよ」

「無茶言わないでよ、見るだけでじゅーぶん。女の一人暮らしはね、何かとお金かかるの」

男だろぅが女だろぅが、金がかかるのは変わらないだろうと藤堂は思ったが、何も言わなかった。代わりに大きな欠伸を漏らす。眠気覚ましにと淹れたコーヒ―は、もう飲み干してしまっている。新たに淹れる気も起きない。

祐子は藤堂の疲れきった溜息を聞いて、驚いた声を漏らした。

「やだ、そんなに疲れてんの？ クマ出来てるわよ」

「さつきからそう言ってるんだろ」

祐子は軽く肩を竦めて、店内をぐるりと見渡した。キャビネットの隅にぽつんと置かれた指輪に視線を止め、首を傾げる。

「……あれ、新しいの？」

物珍しそうに呟いて、祐子はそちらへ近付いて行く。あの指輪だと藤堂は思ったが、どうせ鍵の掛けられたキャビネットから出さなければ、商品には触れない。見るだけなら、問題はないだろう。

「ついこないだ買い取った。新しくはねえよ」

「分かっているわよ」

ガラスに鼻先がつくほど顔を近づけて、祐子は値踏みするように指輪を覗き込む。藤堂はストッキングに包まれた肉感的な足を、ぼんやりと見ていた。藤堂より年上だという割に、年齢を微塵も感じさせない見事な体つきだ。

祐子は暫く指輪を眺めた後、不思議そうに首を捻って藤堂を振り返った。不躰な視線を送っていた藤堂は、慌てて目を逸らす。余計に怪しまれそうだと後悔したが、祐子は気付かなかったようで、藤堂に向かって手招きしながらショーケースを指差した。

「これ、なんか書いてあるわよ」

は、と怪訝な声を漏らして立ち上がり、藤堂は祐子に近付く。曲げた指の関節でガラスを叩く祐子の視線の先、発光ダイオードの明かりに照らし出された指輪を覗き込んで、藤堂は目を凝らす。

彼は視力がいい方ではないのでよく見えないが、指輪の内側には確かに、文字のようなものが刻まれていた。

「なんだこりゃ。なんて彫ってある？」

「光っちゃって読めないけど、イニシャルに見えるなあ。出してよ、これ」

急かすように人差し指の先でガラスを叩く祐子に、藤堂は曖昧な返事をした。

ショーケースから出すわけには行かない。触るのもためらわれるし、まさか生霊の憑いた指輪です、とも言えない。そんなものを並べておくなど、叱られるに決まっている。

「蓋開けんのだるい」

「あんたってその内、息すんのも面倒とか言っつて、死んじやいそうよね」

馬鹿にしたような声に、藤堂は反応しなかった。

祐子は指輪に視線を注いだままショーケースから顔を離し、腕組みをして首を捻る。

「エンゲージリングなのかな？ ていうか、なんで気付かないのよ。ちゃんと見なさいよ」

「言い値でいって言われたら、適当に言うだろ。俺に出せる額なんか限られてるし」

大きく溜息を吐いて、祐子は嘆かわしげに首を振った。嘆きたいのは、こんなものを掴まされた藤堂の方だ。

「やあねホント、どこもかしこも適当な店ばつかでさ。こないだ酒屋行ったら、お釣りちよるまかされそうになっちゃったし」

祐子は呆れた調子でばやいて、キャビネットを背にして扉に寄りかかる。適当な店ばかりと言われれば、その通りなのだろうと藤堂は思う。

「やる気ないのかな。キミは元々だけど」

「まあね」

彼女の言うとおりで。稼ぎがなくとも助成金が出るから、自営業の店は大抵やる気がない。やる気があるうがなかるうが、客が来ない事には変わらないのだ。消費者側の立場としては、安心して使えるのは、大手コンビニエンスストアぐらいのものだろう。あちらは客があっても、働き手が少ないのが問題のようだが。

「それよりあんたどうするのよ、こんなの買い取っちゃって。買い手つかないわよ」

「どうもしない」

藤堂の返答に不思議そうな顔をした後、祐子はふと手首を反らせて時計を見る。白い革ベルトの華奢な時計は、彼女の浅黒い肌によく映えていた。

「あら、もうこんな時間」

祐子は肩から提げていたハンドバッグの紐を掛け直し、入り口を向いてから藤堂を振り返った。

「仕事戻るね。寝てちゃダメよ」

「ああ。次は彼氏連れてきて、なんか買ってきてくれ」

「バカ」

愉快そうに笑って、祐子は外へ出て行った。開いたUVカットのガラス戸から店内へ差し込む光が、やけに眩しく感じられる。藤堂は目を細めたまま、入り口から視線を逸らした。カウンターの上に放置された携帯が、視界に入る。

携帯は一向に鳴らないし、待ち人も現れない。しかし指輪に憑いた生霊は確実に、藤堂を蝕んでいく。正直なところ、明から連絡が来るまで体が保つかどうか、不安だった。

藤堂はジーンズの尻ポケットからキーケースを取り出して、慣れた手つきで鍵束の中から一つを選ぶ。触るのもここから出すのも嫌だったが、指輪に何が彫つてあるのかだけでも確認したかった。

それが指輪の持ち主を探す手がかりになるかどうかは別として、単純な好奇心からの行動だ。本当なら、買い取る前に確認すべき事柄である筈なのだが。

手探りでキャビネットに掛けた鍵を開け、ガラスの扉を開く。棚の一番端に置かれた指輪は、生霊が憑いているとは到底思えないほど見事に輝いている。しかし藤堂には、その輝きが不気味に見えた。藤堂に霊感はないし人一倍鈍感な方だから、憑いていると知っているから、そう思うのだろう。

要は気の持ちようだと分かっていたが、やはり、指輪に触れるのはためらわれた。何より明から、指輪には触るなどあらかじめ警告を受けている。

藤堂は慎重に指輪へ顔を近付け、目を細くした。指輪の内側に彫り込まれた細かな文字は、光に反射して読み取りづらい。

「S・T……」

眩いた瞬間、突如として立ち眩みに襲われ、藤堂は目を瞑る。続けてひどい耳鳴りが頭の奥で響き、思わず両手で耳を塞いだ。

「痛ってえ……チクシヨウ」

藤堂は腹立たしげに吐き捨てた。すぐにも扉を閉めてしまったかったが、靄がかかったように視界がかすんで、差したままの鍵がどこにあるのかも分からない。霊感がない事をこれほどまでに悔やんだ事は、未だかつてなかった。

否、霊感がないから、これだけで済んでいるのかも知れない。霊感が強ければ強いほど霊の攻撃に対する抵抗力は上がるが、自衛の術がなければ、霊が居る事によって受ける影響は大きくなる。

耳元で、声がする。

返せ、と、そう言っている。

しかし、どこへ返せというのだ。

「ほんと、カンベンしてくんねえかな」

藤堂の首に、冷たいものが触れた。背筋を悪寒が駆け上がり、一気に全身の肌が粟立つ。冷たい指が、首に絡まったような感触だった。これは死ぬな、と、藤堂は痛む頭を抱えながら考える。

見えないものに殺されるなど、考えてもみなかった。自分とは関係のない事だと思っていたのだ。しかし何故、自分が殺されなければならぬのか。返せるものなら返したいと、藤堂はそう思っているのに。

「藤堂さん！」

巡る思考と寒気に頭の中が真っ白になった時、店の入り口から悲鳴じみた声が届いた。視線だけをそちらに向けて声の主を確認したが、藤堂には最早、助けを求めることはおろか、返事さえ出来なくなっている。

首に絡んだ見えない指が、徐々に気道を圧迫して行く。どくどくと響く自分の鼓動の音だけが頭に響き、藤堂はその場に膝をついた。頭痛がひどくて、振り払う事も出来ない。

徐々に圧迫感が増して行き、とうとう呼吸が出来なくなる。こんな不条理があつていいものかと、藤堂は心中憤った。

その時一瞬、耳鳴りが遠くなる。

やめて。

耳鳴りの代わりに頭の奥で響いたのは、小さな、小さな声だった。耳に残る甲高い声に、あどけない口調。子供の声だと直感した瞬間、呼吸が楽になった。大きく息を吸うと、ひゅ、と喉が音を立て、藤堂は激しく咳き込む。

肺が痛むほど深く呼吸を繰り返してようやく、藤堂の咳は止まった。胸に手を当てると、未だ心臓は激しく脈打っている。首を絞めていた冷たい感触は、いつしか消えていた。

「と、藤堂さん、大丈夫？」

駆け寄ってきた明は、肩を上下させて深呼吸を繰り返す藤堂の傍らにしゃがんで、心配そうに顔を覗き込んだ。藤堂は苦しげに顔をしかめたまま、視線だけを上げる。明は彼ではなく、その背後を見ている。

「ねえ……今の……」

藤堂は左右に首を振る。どちらに対して聞かれているのか分からなかったが、どちらにせよ、藤堂は何も知らない。

深く溜息を吐いて、藤堂は立ち上がった。不安げな表情で見上げてくる明へ曖昧な笑みを浮かべて見せ、ガラス戸を開け放ったまま、カウンターに戻る。藤堂には何が起こっていたのかさえ分からないが、命拾いした事だけは理解していた。

鈍く肺が痛んでいたが、とにかく今は落ち着きたかった。倒れこむようにイスに腰を下ろして、藤堂は煙草に火を点ける。

「その子たち、あなたの守護霊なんだね」

深く煙を吸い込んで落ち着いてから、藤堂は感心したように呟く。明に視線を向ける。相変わらず制服姿の少女は、開いたままのガラス戸を閉めて、差したままだった鍵を掛けた。

「藤堂さんの事、守ったよ。生霊を、あなたから引き剥がした」

「守護霊って何？」

藤堂は差し出されたキーケースを受け取り、無造作にポケットへねじ込んだ。明の表情が呆れたようなものになる。そんな顔をされても、知らないものは知らないのだ。

「そのままだよ、護ってくれる霊。いつでも傍にいるの。……座敷童みたい。子供の守護霊なんて、初めて見た」

ふうん、と興味のない様子で鼻を鳴らした藤堂の背後を、明はじつと見つめていた。そして唐突に、にっこりと微笑む。自分に向けられた表情ではないと分かってはいたが、藤堂はその愛らしい微笑に、些か動揺した。

「でも藤堂さん、何してたの？」

今度は責めるような口調だった。藤堂は困ったように頭を掻き、灰皿の上で煙草を弾く。

「常連に言われて気付いたんだが、その指輪、内側に文字が彫ってあったんだよ。S・Tだったか」

明は目を丸くして、指輪を振り返った。そして藤堂に向き直り、カウンターに手を付いて顔を近付ける。思わず身を引いた藤堂は、次に明の口から出た台詞を聞いて、耳を疑った。

「わかった！ 一緒に行こう、藤堂さん」

「は？」

聞き返した藤堂に、明は再び、笑みを浮かべて見せた。

第一章 指輪に憑いた想い 五

藤堂は久々の爽快感に、幸せを噛みしめていた。不眠の原因となっていたあの忌まわしい指輪を、調べると言つて明が持つて行つてくれたお陰で、ゆつくりと眠る事が出来た。

やはり睡眠は大事だ。よく眠れば、自分で作つた味気ない飯でも美味しく感じる。更に食後の一服は至福のひとつときだ。何気ない日常とはこんなにも有難いものだったのだと、藤堂はのんびりと煙草を吹かしながら、改めて実感する。

しかし彼のそんなささやかな幸せは、長くは続かなかつた。

「藤堂さん！」

店の方から聞こえた少女の声に、藤堂は煙草の火を消して溜息を吐いた。もうそんな時間になつてしまつたのかと考えながら、のっそりと立ち上がる。時計を見てみれば、確かにもう約束の時間を差していた。時間の流れが早く感じるのは、歳のせいだろうか。

手早く食器を片付けて、藤堂は家を出る。何故店を閉めてまで、一緒に行かなければならないのだろう。そんな疑問も残つてはいたが、素直に従つてしまつのが藤堂という男なのだ。長いものには巻かれるというのが彼の基本スタンスであり、座右の銘だった。明を長いものと言うには、些か弱いような気もするが。

シャッターを開けると、真つ先に制服姿の明が視界に入った。白いセーラー服が日光を反射してやけに眩しく見え、藤堂は思わず目を細める。

「おはよう藤堂さん。よく眠れた？」

「まあ……」

朝も早い時間だというのに、明は眠そうな素振り一つ見せなかつた。無邪気に笑いかけて来る少女に曖昧な返事をして、藤堂は下を向いて欠伸を噛み殺す。俯いたまま目を開けた瞬間、彼女が手に持つた物が視界に飛び込んで来て、思わず身を引く。

「……明ちゃん、何それ」

「これ？」

明が目線の高さまで上げてみせたそれは、木製のバットだった。藤堂は顔を引きつらせて、バットと明を見比べる。明は藤堂の反応が不思議だとも言わんばかりに、首を傾げた。不思議に思うべきなのは藤堂の方だ。

異様な光景だった。セーラー服の美少女が、バットを持って質屋の前に立っている。しかもこれから行こうとしているのは病院だ。あまりにも、不釣り合いではないか。

「バットだけだ」

明は事も無げにそう言った。藤堂は更に頬を引きつらせる。そんな事を聞いている訳ではない。

「見りゃわかる。なんでそんなモン持つてんの」

「私、これで浄霊するの。使わなきゃいけないような事に、ならなきゃいいんだけど……行こう」

そう言っつて背を向けた明は、呆気にとられる藤堂を尻目に、さつさと歩き出してしまふ。腑に落ちない藤堂は眉間に皺を寄せたまま、その後を追った。

明から説明を受けはしたが、藤堂には未だに理解出来ない。理解力に乏しい訳ではないが、靈感のない彼には分からないのだ。

巷が幽霊で溢れ返ったこの時代、藤堂はそれらと何の関係もない世界で生きてきた。それが突然生霊の憑いた指輪を所持する羽目になり、訳が分からないまま殺されかけた。事実には憤りこそすれ、何故こんな事になっているのかは、結局分かっていない。

指輪に憑いた生霊は生きているが、本人は死んでいる。だから生霊を体の元へ呼び戻し、浄化する。明の説明はそんなものだった筈だが、藤堂は未だに悩んでいる。

生霊は生きているのに本人が死んでいるとは、どういう事なのか。死んでいるなら、体に生霊を返したらゾンビになるのではないのか。そもそも体が死んでいるなら、何故病院に行くのか。

そこまで考えて、藤堂は諦めた。どんなに考えても、彼には分からない。全て終わってから、改めて明に聞けば良い。

ついで行こうと思つたのも、何も分からないまま勝手に事が終わるのは、寝覚めが悪いと思つたからだ。事が終わってから改めて明に説明されたところで、その内容を理解出来るかどうかは、また別の問題だが。

「その病院だね」

明の声に我に返つた藤堂は、顔を上げて彼女が指した先を見た。大きな白い建物は一目で病院と判るものだったが、何故だか威圧感を覚える。

退治屋だと言えば、入れてもらえるものなのだろうか。病院の職員に説明している時間は、果たしてあるのだろうか。藤堂の不安をよそに、明は臆面もなく敷地内へ足を踏み入れる。

バットを持ったまま。

「……あのさ、そのバット、なんかかないの？」

中庭を散歩していた患者達の視線が、全身に突き刺さる。藤堂は肩を竦めて情けない声を出したが、明は悠々と正面玄関までの道を歩いていた。存外、豪胆な娘のようだ。

「藤堂さん、走って」

「は？ なん……」

なんで、と聞こうとしたが、言い終わる前に明が走り出した。面食らつた藤堂は、慌ててその後を追う。

明は正面玄関の自動ドアを駆け抜け、待合室を通り過ぎる。受付に座っていた看護師が慌てた様子で何か言っていたが、彼女は振り返らなかつた。大学を卒業して以来運動とは縁のない生活をしている藤堂は、既に息を上げている。

「ちよつと！」

エレベーターに乗ろうとした明の前に、大柄な医師が立ちはだかつた。ぶつかりそうになつた明は、慌てて立ち止まる。そしてその後、明が発した言葉に、藤堂は耳を疑つた。

「通して下さい！ お母さんが、お母さんが！」

二人の少し後ろで上がった呼吸を整えていた藤堂は、はあ、と疲れた声を漏らした。この娘は何を言っているのか。そもそも受付をすっ飛ばして病室へ向かう人間がどこにいるのか。それよりも果たして、目的の病室がどこなのか分かってきているのだろうか。

狼狽する藤堂をよそに、医師は落ち着き払った声で明を諫めた。
「ちょっと落ち着きなさいよ君。そのバットは何？」

明は芝居がかった仕草で、医師の胸元に掴みかかる。

「死んだ弟の形見なんです！ 早く行かないと、お母さんが……あ、もう時間がないわ！ お兄ちゃん、早く！」

もう滅茶苦茶だ。藤堂は女子高生にお兄ちゃんと呼ばれていいよ
うな年齢でもない。

慌てた声でまくし立てる明の剣幕に気圧されたのか、初老の医師は僅かに怯んだ。明はその隙に、藤堂の腕を掴んで再び駆け出す。藤堂はつんのめりながらもなんとか堪え、明に引つ張られるまま、開いたエレベーターの中へ滑り込んだ。

叫ぶ医師を横目に、明は階数ボタンを押す。慌てた医師が腕を伸ばすが、その手が辿り着く前に、扉は閉まった。

無事動き出したエレベーターの中で、明は安堵したように脱力する。膝に手を付いて前傾姿勢になった藤堂は、荒い呼吸を繰り返しながら、明に恨めしげな視線を向けた。

「なんだよ、いきなり……あのね明ちゃん、おじさんを走らせるもんじゃないの」

息も絶え絶えの藤堂に、明は呆れた視線を向けた。呆れたいのはこっちだと、藤堂はげんなりと肩を落とす。明が疲れた素振りも見せないのは、若いからだろうか。

こんなに走ったのは、何年ぶりだったろう。日がな一日中カウンターに座って、ぼんやりするだけの生活に慣れていた藤堂の体は、所々で悲鳴を上げている。運動した後の爽快感など、微塵も感じない。煙草のせいもあるのだと、藤堂は心中言い訳をした。

「藤堂さん、おじさんでトシでもないでしょ」

「いや……そ、そうじゃなくて」

未だに整わない息を無理矢理抑えて、藤堂は短く突っ込む。疲労感たっぷり藤堂とは対照的に、明は涼しい顔で乱れた髪を梳いていた。否応なしに年齢を感じさせられ、藤堂は些か落ち込む。

若いつもりはないが、現実を突きつけられると複雑な心境になる。年齢というのは、そういうものだ。

「……こっち」

エレベーターから降りた明は、扉を押さえながら藤堂を振り返った。言われるがままについて行く藤堂は、もうどうにでもなれ、という気になっている。

どうにでも、なってしまうばいいのだ。ここまで来てどうにもならなかったら、それはそれで困る。

廊下に出た途端、病院特有の微かな薬品臭が鼻を突く。清潔感のある白で統一された廊下は静寂に包まれており、靴底が立てる足音さえ煩く感じられた。今の藤堂には医者を振り切って来てしまった罪悪感もあるから、余計にそれが響いて聞こえる。

明は迷う事なく廊下の一番奥まで進むと、どん詰まりに位置する病室の戸を開けた。室内の光景に、藤堂は一瞬怯む。

「なあ、明ちゃん。こりゃ……」

心電図が立てる電子音だけが響く狭い病室に、ベッドは一つしか置かれていなかった。開け放たれた窓から差し込む光が、真っ白な室内を眩しい程に照らし出している。窓から吹き抜ける春風は温かったが、藤堂の腕には鳥肌が立っていた。

どうしてか、寒気がする。季節は春だし、ここはきっちりと空調の整えられた室内だ。寒い筈がないのに、藤堂は半袖のシャツから伸びる腕を摩る。白で統一された部屋であるにも関わらず、空気が淀んでいるように感じられた。

「魂が生霊となって指輪に憑いていたから、心臓は動いているの。でも、もう脳は死んでしまってる。体も動かない」

明は静かに言つて、病室へと足を踏み入れる。続いて入室した藤堂の背後で、扉が閉まった。

ベッドの上に横たわっていたのは、紙のように白い顔をした老婆だった。掛けられた布団の下から幾つもチューブが伸び、ベッドの傍らで電子音を立てる機械に繋がれている。枕にもベッド全体を覆う布団にも皺一つなく、老婆が自らの意思では動けないであろう事は明白だった。

藤堂は生の匂いを感じさせない老婆を見下ろして、痛ましげに眉を顰めた。こうまでして生きていたくはないものだと思つたが、今こうして生きている事は、本人の意思とは無関係なのだろう。

「丹沢冴子さん。指輪をお返しします」

明がポケットから指輪を取り出した瞬間、冷たい風が藤堂の横を通り過ぎた。足下から背筋を伝つて、首元へと悪寒が這い上がる。聞こえ始めた微かな耳鳴りに、嫌な予感がした。

表情を曇らせた明は、胸ポケットから黒縁の眼鏡を取り出した。ベッドに横たわる老婆を注視したまま、眼鏡を藤堂に押し付ける。

「ダメ、全部忘れてる。それ、掛けて。頑張つて逃げてね」

「は？」

藤堂は押し付けられるままに眼鏡を受け取つて、怪訝な声を漏らした。険しい表情を浮かべた明は藤堂の胸を押し、その場から飛び退く。

バランスを崩した藤堂が床に尻を着いた瞬間、その頭上を何かが掠める。何が触れたのか藤堂には全く分からなかったが、良くないものである事だけは感じ取れた。明が藤堂を押しつけたのは、彼の頭上を通り過ぎたものから逃がす為だったのだろう。

明は胸ポケットに指輪を落とし、バットに手を掛ける。藤堂は木製バットの下から現れたものを見て、我が目を疑った。

第一章 指輪に憑いた想い 六

「藤堂さん、霊視眼鏡掛けて。見えなきゃ逃げられないよ」

明が持っていたものは、バットではなかった。持ち手部分を二十センチほど残して外された白木の下から出て来たのは、うつすらと燐光を放つ見事な刀身。藤堂は時代劇の中でしか見た事がなかったが、それは紛れもなく、日本刀の刃だった。

藤堂は冷たい床に情けなく尻を着いたまま、呆然と明を見詰めていた。あんなものを持ち歩いているのがばれたら、間違いなく銃刀法違反で捕まるだろうと、全く場違いな事を考えながら。

それも、現実逃避でしかないのだろう。目の前の光景を、現実と認めなくなかった。

「早く！」

明の怒鳴り声に我に返った藤堂は、慌てて押し付けられた眼鏡を掛けた。言われたからそうした訳ではないし、霊視眼鏡とやらがどういった効力を発揮するのも分からない。けれどそうするしかなかったので、反射的にそうした。そして藤堂は、絶句する。

レンズ越しに見えたものは、藤堂の幽霊に対する想像を遥かに超える異形だった。何もない空中に浮かんだ、竄れて青ざめた女の顔。頬はげっそりと瘦け、唇は乾いてひび割れ、肌は紙のように白い。落ち窪んで生気の感じられない目には光がなく、どこを見ているのかさえ分からない。

その頭部、本来なら耳のある位置から直接伸びる、骨と皮だけになった異様に長い腕。そこにはぬらぬらと光る、長い黒髪が絡み付いている。なまじ半端に人間の形を残しているだけ、余計に気味が悪い。

それよりも藤堂を恐怖させたのは、赤ん坊ほどもある巨大な手。枯れ枝のように節くれ立っている以外、形自体は殆ど人間の手と変わりなかったが、左手の薬指だけが、際立って長かった。

「なん……何、これ」

呆然と呟く藤堂には、立ち上がる気力もなかった。立ち上がるうにも情けない事に、体が竦んで動かない。何かに対してこれほどまでに嫌悪感を覚えたのは、生まれて初めてのことだった。

「生霊ってというのは普通悪霊化しないんだけど、魂が体から離れる時間が長すぎたんだよ」

藤堂はそんな事を聞いた訳ではなかったのだが、訂正して改めて問う気力もなかった。説明されても理解出来ないであろうほど、混乱している。

「長い間指輪の事だけを考えていたせいで、それしか考えられなくなって、悪霊化したの。自分が何だったのかも忘れてる。こうなったらもう、体には戻せない」

早口にそう言い切った明は、異形に向かって駆け出した。女の顔が明の方を向き、巨大な腕を振る。その大きさからは想像も出来ないほど、素早い動きだった。

明は反射的に飛び上がり、足を狙って地面すれすれに迫って来る腕を避けたが、着地の際、足元に這っていたコードを踏みそうになる。慌ててベッドの端に手を着くと、パイプ製のベッドが軋む音がした。

明に避けられた腕は、そのまま失速する事なく壁に激突した。藤堂の目にはかなりの衝撃があったように見えたが、壁はびくともせず、当たったような音もしなかった。明が避けたという事は人間には当たるとは思えないが、無機物には触れないのだろうか。

銀色の光を放つ日本刀が、壁に当たった腕に迫る。繰り出された刃はしかし、開かれた大きな掌の、指の間をすり抜けた。明は小さく舌打ちを漏らし、刃を反転させて中指から小指までを切り落とす。床に落ちた指は、跡形もなく消え失せた。

自身を構成する一部を失っても、異形の悪霊はその動きを止めなかった。浮かんだままの女の顔の眉ひとつ動かないし、腕は更に逃げる明を追う。幽体は痛みを感じないのだろうか。

長い指の爪先が、明の頬を掠めた。黒髪が僅かに切れて床に落ち、桃色の頬に赤い筋が付く。明は頬を伝い落ちる血を横目で見て僅かに眉を顰めたが、呻き声ひとつ上げなかった。

返せ。

また、恨めしげな声が藤堂の耳に届く。頭の中へ直接響いているのか、耳に届いているのか、最早定かではない。地獄の底から響いて来るような声に身震いした藤堂は、思わず尻をついたまま後退りする。

藤堂が僅かに動いた瞬間、その眼前に、不気味な女の顔が恐ろしいスピードで迫った。突如として視界一杯に広がったその顔に、藤堂は眼球が零れ落ちんばかりに目を見開く。人間本当に恐怖すると悲鳴すら出ないのだと、藤堂はどこか他人ごとのように思う。

「藤堂さん！」

慌てた明の声が、遠くに聞こえた。乾いて所々が切れた女の唇から、血が滲んでいる。その口唇が、スロー再生のようにゆっくりと、弧を描いた。

金縛りにあつたように体が動かなかつたが、実際これは金縛りなのかも知れない。不気味な笑みを浮かべた女の顔を見て、藤堂は死を覚悟する。

やめて。

それは昨日も聞いた、あの声だった。あどけない子供の、切実に願う声。藤堂はその声を聞いて、何故か安堵した。

視界一杯に広がっていた女の顔が、苦しそうに歪んだ。そして迫った時と同じ速さで、藤堂から遠ざかって行く。離れた事で全体が見えるようになった異形の体には、半透明の子供達が纏わりついていた。

空中に浮かんでいた顔が徐々に高度を下げて行き、大きな手が床に落ちる。しがみついていた子供等が、それ以上動かすまいとするかに、巨大な腕を床に押し付けた。

「守護霊ちゃん、ナイス！」

異形の動きを止めた小さな守護霊達の内、一番年長と思われる額にほくろのある子供が、明を見て微笑んだ。明はそれを見て僅かに頷き、目線の高さに浮かんだままの女の顔と向き合う。

「あなたがした事はあの世でもこの世でも、罪に問われず。でも、私があなたの魂も罪も、ちゃんと綺麗にします。だから、心配しないで」

明は片手に持った日本刀をゆっくりと持ち上げて逆手に持ち替えると、女の額にそつと突き刺した。その刃が深く食い込むにつれて女の顔が歪んで行き、悲痛な表情に変わる。

「どうか、安らかに」

静かな明の声が響くと同時、女の瞼が閉じて行った。頭が消え、鼻が消え、腕が消え、最後に長い薬指が消えた頃には、藤堂の守護霊達も消えていた。

心電図が立っていた電子音が、規則的なものから死亡を示す長いものへ変わる。明は刀身をバットの形をした鞘に納め、胸ポケットから指輪を取り出した。そしてふと、何かに気付いたようにベッドを見る。

「それは、差し上げます」

静かな老婆の声だった。藤堂が声のした方へ視線を移すと、寝間着姿の老婆が痩せた顔に穏やかな笑みを浮かべ、ベッドの上に立っているのがレンズ越しに見えた。その体は半分透けており、向こう側の壁がうつすらと見えている。

霊が見えるのは、明から渡された眼鏡のお陰だろうか。ようやく落ち着きを取り戻し始めた藤堂は、ぼんやりとそう考える。

「こんな事になるのなら、あんな指輪など、早く諦めてしまえば良かったわ。旦那に先立たれて尚、目を覚ませなかった自分が恥ずかしい」

穏やかな声は、かすかに震えていた。

「あなた方には、ご迷惑をお掛けしました。ですからそれは、せめてものお詫びの印です」

応えない明を一瞥してから、藤堂はゆっくりと立ち上がり、老婆の霊を見上げた。この期に及んで吹っ切れたような心境になる自分を、可笑しいとも感じる。

「元々は、あなたの持ち物だろ。あんたが持ってた方がいいんじゃないねえの。大事なものなんだろ」

丹沢冴子はゆっくりと左右に首を振り、藤堂を真っ直ぐに見詰めた。あの異形とは似ても似つかぬ、穏やかで、優しげな老婦人の顔だった。

「あなたの元に売られたのですから、今はあなたの持ち物です。私は、あなたを殺そうとさえしてしまっただけ。そんなものでその罪が拭えるとは思っておりませんが、どうかお受け取り下さい。それに……」

冴子は天井を見上げ、深く息を吐いた。

「あなたの可愛らしい守護霊達に、教わりました。そんな指輪には代え難いものが、向こうで待っているって」

藤堂は怪訝に片眉を寄せたが、明は満足そうに微笑んだ。

「向こうで、お幸せに」

冴子は明の笑顔に応えるように、皺だらけの顔に柔和な笑みを浮かべて見せた。

「ありがとう、お嬢さん」

藤堂に向き直った冴子は、しばらく彼を見つめた後、深く頷いた。口元には未だ、淡い笑みが窺える。

「あなた、そのイニシャルの方と出会ったら、その縁を大事にしてくださいね」

「へ？」

藤堂は怪訝に問い返したが、冴子はそれ以上何も言わなかった。言えなかったのかも知れない。

冴子の足が、徐々に消えて行く。半透明だった体が更に透けて行き、彼女が深々と頭を下げた後には、完全に見えなくなった。

第一章 指輪に憑いた想い 七

指輪に憑いた生霊、丹沢冴子が成仏した直後の事だ。期を見計らったかのように医師達が雪崩れ込んで来て、静まり返っていた病室は一転、大騒ぎとなった。どう逃げるかと悩む藤堂を尻目に、明はきっぱりと、この人は無事に成仏しましたと宣言した。

それで万事解決した上に感謝までされてしまったから、最初から退治屋だと名乗れば良かっただろうにと、藤堂は呆れた。もしかしたら明も、病院の職員に説明するのが面倒だったのかも知れない。時間がなかったのもあるだろう。

丹沢婦人の遺体を引き取って行った娘夫婦に、明と藤堂はいたく感謝された。なんでも、母親が指輪に固執していた事は知っていたらしい。しかし指輪の行方が分からず、手の打ちようがなかったようだ。だから植物状態の彼女に延命治療を施し、生かしておいたのかも知れない。

藤堂は娘夫婦に指輪を返そうとしたが、えらく恐縮され、依頼料として受け取って欲しいと強く言われた。実際の所、彼らは退治屋に払う依頼料の心配をしていたのではないかと藤堂は考えたが、明が何も言わなかったので、それ以上は言えなかった。

娘夫婦は藤堂に、葬式に出て欲しいと願い出たが、彼はやんわりと断った。退治屋について行っただけで何もしていない藤堂が、葬式に出るのは妙だと思っただけからだ。

しかし代わりに墓参りに行く約束してしまったので、彼は今、自宅から電車を二回ほど乗り継いだ先にある墓地に居る。

丹沢家の墓はついこの間掃除されたばかりのようで、その周囲は雑草も目立たず、整然と片付けられていた。久しく嗅いでいなかった青臭い土の匂いに、藤堂は郷愁に駆られる。といっても彼の故郷は住宅が密集するベッドタウンなので、思い起こしたのは小学校のグラウンドだったが。

花入れの中で枯れかけていた花を捨て、藤堂は途中で買ってきた仏花を供える。故人と直接的な縁はなかったが、墓の前に立つと無意識の内、神妙な面持ちになった。

藤堂は銜え煙草の火を線香に移し、墓前に供えた。もうもうと立ち上る煙が風に煽られ拡散し、空気に溶けて行く。独特の粉っぽい香りが鼻を突いた。

「藤堂さん」

確認する前に、その柔らかな声の主が誰であるか、予想はついていた。若い娘の知り合いなど、藤堂には一人しかいない。振り向くと、予想通りの人物が立っていた。

「ちゃんと来てたんだね」

相変わらず制服姿の明は、藤堂を見上げて悪戯っぽく笑った。元々垂れ気味の目尻が更に下がり、おかつぱ頭も相まって稚児のように見える。膝上文のスカートが、風に靡いてはためいた。

「約束、しちまつたし」

言いながら藤堂は、携帯灰皿に煙草をねじ込んだ。流石に墓場に吸い殻を捨てるような、罰当たりな真似は出来ない。

「来ないと思ってた」

からかうような明の口振りに、藤堂は軽く肩を竦めて見せた。

「まあ、このぐらいはね」

困ったような苦笑いを浮かべて、藤堂は柄杓が刺さったままの手桶を持ち上げる。明は快活に笑った。

その場から離れて出口へ歩いて行く藤堂の背を、明はのんびりとした歩調で追う。

雲一つない晴天だった。頬を掠める爽やかな風に、藤堂は思わず目を細くする。ついこの間、命の危険に晒されるような出来事が立て続けに起きたとは、到底思えないほど気分が良かった。

出口付近の通路脇に並んだ水子地蔵の前で立ち止まり、藤堂は桶を地面に置く。手を合わせて目を閉じた藤堂を見て僅かに微笑むと、明は藤堂と同じく地蔵に向き合って黙禱を捧げた。

「あの指輪ね、やっぱり婚約指輪だったみたい」

明は唐突にそう言っ、振り向いた藤堂に微笑を浮かべて見せた。その表情はどこか、悲しそうにも見える。果たしてどこで聞いてきたものかと、藤堂は訝る。

「でも旦那さんの仕事が上手く行かなくて、結局売るハメになっちゃったの。その後仕事はなんとか持ち直したんだけど、指輪は次々転売されて行方知れず。冴子さんは、ずっとあの指輪を探し回ってたんだよ」

「よくそんなに買い手がついたな」

「イニシャルが彫ってあったから、隠してネットオークションで売られちゃっただけじゃないの？ とにかく、指輪を探し回る冴子さんの念だけが指輪に辿り着いて、強い想いが生霊になった。返さなくて、逆に良かったかも知れないね」

墓地から駅までの道のりは大した距離ではなかったが、藤堂にはやけに長く感じられた。

「なんで？」

短く問い返すと、明は少し困ったような顔をした。藤堂は頭の回転が良くないので、遠回しにものを言われても理解出来ない。こと幽霊に関しては、元から知識もない。

「そんなに強く想ってた指輪だよ。持って行ったら、向こうでばれちゃう」

向こうというのがどこの事なのか藤堂には分からないが、罪がばれるという事なら、確かにそうかも知れないと思った。

成仏した霊は皆、幽世かくじよと呼ばれるあの世とこの世の狭間で、一旦滞留する。そこがどんな場所なのか、何の為に存在するのかがそこへ行った霊しか知らないし、彼らは黙して語ろうとはしない。何より一度幽世へ行った霊は、概ね口が利けなくなる。

幽世については様々な憶測が飛び交っているが、一般的な見解は、そこが裁判所であるというものだ。極楽へ行くか地獄へ行くか、そこで判断がなされるのだとされている。

そこへ罪の証である指輪を持って行ったら、どうなっていただろう。彼女の罪は糾弾され、地獄へ落ちていたかもしれない。それは苦勞して浄化したことが全て、無に帰してしまふ。存在を消されるのとどちらが恐ろしいだろうと、藤堂は思う。

一人の女性が長い間思い続けた指輪は今、藤堂の家のタンスの隅にしまい込まれている。買い取ったのだから、また商品として並べても良かったが、イニシャルが彫つてあるものなど売れない。

イニシャルを隠して売る事も、出来る事には出来る。けれど、それも故人に対して申し訳ない気がした。女物の指輪など持つていても仕方ないが、藤堂は、もらったものは取つておく主義だ。

十字路に差し掛かった時、明は駅とは違う方向を指差して藤堂を見上げた。大きな目が悪戯っぽく輝いている。

「ねえ、この先、海があるの。行かない？」

藤堂は軽く肩を竦め、指差した方向へ足を向ける明の後をついて行く。断る理由もないし、ここで別れるのも、あっさりしすぎて味気ないような気がした。

墓地から続く緩やかな勾配の坂道を下りきると、急に視界が開けた。道路の先に、小さく海が見える。

シャツの胸ポケットに入った煙草の箱から直接一本取り出し、藤堂は明に声を掛ける。

「お前さ、なんであの婆ちゃんだつて分かったの？」

明は困つたような表情で、煙草に火を点ける藤堂を見ていた。言い辛い事なのだろうかと、藤堂は思う。

舗装された道路は永遠に続いて行くように思えたが、意外に早くガードレールにぶつかる。正面に広がる海から漂ってくる微かな潮の香りに目を細め、藤堂はガードレールを跨いで歩道に入った。

「最初に見た時には、生霊を飛ばしてる人が植物状態だつて事は判つたの。霊体がかかなり変質していたから。それから大きい病院を当たつて、そういう患者を探したんだけど、名前が分からないから、特定出来なくて」

植物状態の家族を生き長らえさせる人間は、そう多くない。昔は延命治療の中断は躊躇われていたし、中断することで、罪に問われることさえあったという。けれど死後の世界が存在すると一般的に認知された今、安楽死は家族の了承さえあれば、法的にも認められる。

何しろ成仏することが、人間が目指すべき幸福であると広く認知される時代だ。死者の魂は常世で幸せになるのだと信じられているから、高い金をかけて生かし続ける者はいない。どちらがいいのかは、藤堂には分かりかねる。

「イニシャルで特定したのか」

明は小さく頷き、海の方を向いてガードレールに凭れかかった。

おかつぱの黒髪が風に靡いて、さらさらと流れる。

太陽の光を反射して煌めく水面が、眼前に広がっている。風に乗って耳に届く、寄せては返す波の音を聞いていると妙に感傷的な気分になり、藤堂は海に背中を向けた。

「ねえ藤堂さん。質屋、儲からないんでしょ」

藤堂は視線だけを明に移した。

「そりゃな」

「だったら、私と浄霊屋やろうよ」

藤堂は明に向き直り、訝しげな視線を落とした。真っ直ぐに見上げて来る明の大きな目には、曇りが無い。

「一人で浄霊屋やるには、限界があるの。私、見ての通り若いですよ。事務所も借りられないから、いまいちお客さんに信用してもらえなくて」

フリーだったのかと、藤堂は少々驚いた。歳が若いから、どこかの会社で働いているのだとばかり思っていた。

「……浄霊屋って何」

藤堂の問いに、明は面食らったようだった。目を丸くして、まじまじと藤堂を見る。

「知らないの？」

「拝み屋と霊媒師と退治屋ぐらいしか知らねえ。あと陰陽師か」

明は何故知らないのかと言わんばかりに表情を歪めたが、藤堂は当たり前のように知らなかった。

彼には靈感がないから興味もないし、その辺りの仕事を志したこともない。職業の区別に関しては学校の授業で聞いたような覚えもあるが、碌に聞いていなかった。そもそも、まともに授業を受けるような子供でもなかった。

「あのね、拝み屋は幽霊からの依頼を受けて、この世への未練を断ち切ってあげるの。成仏させるのね。こういう仕事の中で今一番多いのは、拝み屋かな」

「ああ……」

そういえばそんな話を聞いたような気もするが、何しろ藤堂にとっては十年以上前の話だ。まともに授業を受けていたとしても、覚えてはいなかっただろう。

「退治屋は、幽霊を退治するでしょ。生きてる人から依頼を受けて、悪霊を退治する。これはただ、存在を抹消するだけ。退治屋って一番有名だけど、大きいのは鳳ぐらいだよ」

藤堂は黙ったまま頷く。確かに、話に聞く限りでは退治屋の知名度が一番のようだが、その中で随一だという鳳コーポレーションの名前さえ、藤堂はついこの間まで知らなかった。

「それから霊媒師。これはふつう、遺族か霊本人から依頼を請けて自分の体に降霊するの。成仏した霊も対象だから需要はあるんだけど、供給が足りて行ってないんだよね」

「降霊？」

「いわゆる口寄せだよ。喋れない霊の言葉を、生きてる人に伝えるの。恐山のイタコとか、有名でしょ。知ってるよね？」

藤堂は顎を掻きながら、曖昧に頷いた。いまいち理解していないような彼の様子に、明は呆れた顔をする。

「……まあいいけど。それで、霊媒師の中でも力の強い人は、悪霊を体内に封じ込めて浄化する事が出来る」

「そりゃ初耳だ」

「職種の事なんか、四十年ぐらい前から学校で習うようになってる筈だけど……浄霊屋は、退治屋と霊媒師の間みたいなものだよ。生きてる人から依頼を請けて、悪霊を浄化する。絶対数は少ないけど仕事の内容が危険だから、一番依頼料取れるよ」

藤堂は眉間に皺を寄せて、明から視線を外した。

「あ……よくわかんねえけど分かった」

「わかってないじゃない」

明の呆れた視線が、藤堂には少々痛い。まさか十七、八の小娘に社会の常識を教えられるとは思っていなかった。知ろうとしなかった自分が悪いから、余計に忍びない。

「まあいいや。藤堂さんには霊感ないけど、守護霊の方には素質あるよ。動きを止めてくれるだけでも、充分やりやすくなるから」

「……それ、俺に得あんの？」

怪訝に聞いた藤堂の顔を覗き込み、明は指を二本立てて見せた。両の口角が、どこか楽しげに上がっている。

「依頼料二等分でどう？ 手伝ってくれるだけでいいの。その代わりに、お店を事務所代わりに使わせて」

依頼料というのがどの程度の金額なのか、藤堂は知らない。相場はそれぞれあるようだが、退治屋や拝み屋の厄介になる事がなかったので、知る機会がなかった。何れ質屋だけをやっているよりは、収入自体は増えるだろう。

しかし幽霊関係の仕事を始めてしまえば、国からの助成金は貰えなくなる。どちらが得なのか、藤堂には分からなかった。

「表向きは質屋って事にしておけばいいよ。そうすれば助成金が出るでしょ。私に事務所の住所さえ貸してくれば」

藤堂の懸念を見越したようで、明は朗らかにそう言った。しかし藤堂は表情を歪める。

「明ちゃんそれ、詐欺って言うの。つーかバレルから」

「メイって呼んで。宜しくね、藤堂さん」

藤堂の突っ込みを軽く流して、明は片手を差し出す。藤堂はその手を暫く渋い表情で見詰めた後、軽く握り返した。

第二章 旅立つ娘 一

ブランド物のバッグや高価な貴金属類が所狭しと並ぶ、質屋の店内。整然と片付いてはいるのは、店主が几帳面な為ではなく、商品が動かないからだ。壁の両側に大きなキャビネットが置かれているせいで少々狭く見えるが、実際は見た目よりかなり広い。静かな室内には換気扇の音だけが、やけに大きく響いていた。

入口の正面、一番奥にはカウンターが置かれており、そこには常に、眠たげな顔の男が座っていた。濃い眉と目の間が狭く、よくよく見れば精悍な顔付きをしている。しかし奥二重の瞼が半ばまで落ちている為、どこか間が抜けて見えた。まばらに生えた無精髭と、短いとも長いとも言えない中途半端な長さの髪が、更にそれを助長させている。だらしない男なのだ。

カウンターに頬杖をついて煙草を吹かす藤堂匡は、紛れもなくこの質屋の店主だ。しかし彼には、接客をしようという姿勢が全く見られない。気張っても客は来ないのだから、怠けていても同じだというのが、彼の持論だった。

細くたなびくタバコの煙が、カウンターの真上に設置された換気扇に吸い込まれて行く。それを目で追いながら、藤堂の横に畏まった少女はひっきりなしに薄紅色の唇を動かしていた。

「だから悪霊っていうのは、靈魂が変質したものなの」

彼女は渋い表情の藤堂へ、先ほどからひっきりなしに話しかけていた。物分りの悪い彼にも呆れることなく、根気よく悪霊について説明している。

少女のセーラー服の白い生地と、赤いスカーフの対比が眩しい。彼女を強く印象付けるのは、大きな垂れ目と幅の広い唇。緩やかな曲線を描く頬はばら色に染まり、娘らしさを際立たせていた。

「幽霊に人間だった自覚がなくなると、凶暴化して、形も変わっちゃうの。生前罪を犯した人も、そうなるかな」

「ああ、だからあの婆ちゃんあんななつてたのか」

納得したような藤堂の声に、知恩院明は深く頷いた。肩の位置で切り揃えられた黒髪が、さらりと流れて元に戻る。

「そう。悪霊に人間だった事を思い出させて罪を理解させて、その罪を浄化するのが私達の仕事。浄霊屋の役目なの」

「それがよく分かんない。悪霊つてのは、体を欲しがらる。なんで人間だったこと忘れてんの？」

明は困ったように首を傾けて竦め、藤堂から視線を外した。

「自我が崩壊してると言えはいいのかな、欲望しなくなっちゃうんだよ。物欲か食欲に分けられるけど、悪霊の殆どは物を欲しがらるタイプなの。でも、霊は無機物に触れないでしょ？」

「それでなんで、人の体なの」

「理由は知らない。悪霊は体を欲しがるの。そういうものなの」

ふうんと鼻を鳴らして、藤堂は煙草を灰皿に押し付けた。興味のなさそうなその素振りに、明は僅かに頬を膨らます。散々説明させておいてこの反応では誰でも怒るだろうが、藤堂は興味がなかった訳でも、聞いていなかった訳でもない。元々、何を言われても薄い反応しか返せないのだ。

明は拗ねたように両手で頬杖をつき、入口へ視線を向ける。疲れきって肩を落とした中年のサラリーマンが、足を引きずるようにして店の前を通り過ぎて行く。繁華街から少し外れたこの辺りは、通行人もまばらだ。

静かなものだ。客は来ないし、電話も鳴らない。客が来ないのは藤堂にとっていつもの事だが、明はそろそろ、こうするのにも飽きて来ているだろう。

浄霊屋を始めて一週間が経つが、明は何だかんだと煩わしい手続きに追われていたようで、店に顔を出したのは今日が初めてだ。藤堂は、明がいない間に依頼人が来たらどう対応すべきかと心配していた。けれど依頼人どころか、質屋の方の客さえ来ないような有り様だった。

茶でも煎れてきてやろうか。藤堂がそう思った時、明が顔を上げて彼に微笑みかけた。見上げてくる大きな目には、既に先程までの不機嫌そうな色がなくなっている。

初めて会った時も思ったが、大人しそうな外見の割には快活な少女だ。秋の空のようにころころ変わる彼女の表情を見ているのも、中々楽しいと藤堂は思う。

「浄霊屋だって、そんなにぼんぼん人が来るようなものじゃないよ。ここは、知名度がないんだから」

果たしてこの娘は心を読めるのかと疑いたくなるような台詞に、藤堂は眉を顰めた。

「なに、いきなり」

「心配そうな顔してたから」

ああ、と呟いて、藤堂は心中、安堵の息を吐いた。当たり前だが、心が読める訳ではなかったらしい。

「優しいね」

藤堂は思わず、どきりとした。それは彼が何度となく、女性から言われてきた言葉だ。普通なら、言われて嫌な気分にはならないだろう。寧ろ喜ぶ筈だ。しかし藤堂は、その言葉を言葉のままの意味で使われた事が殆どない。

あなたは優しいから。それは藤堂にとって、別れの常套句なのだ。あなたは優しすぎて、私には勿体無い。あなたは誰にでも優しいから、やきもきするのに疲れてしまった。

それは全て、別れる際に言われた台詞だ。無論彼女達が真にそう考えていたとは、藤堂は思っていない。そこまで愚かではないし、彼女等が別れを切り出した本当の理由も、藤堂は気付いていた。

要は、藤堂に意思がないのが問題なのだ。甲斐性もない。流されるままぼんやりと生きて、何かを問われれば肯定も否定もせず曖昧に濁し、強く主張する事もない。だから告白されるままに誰かと恋人関係になり、そんな藤堂に嫌気が差した相手の方から、別れを切り出す。そんな付き合いばかりを繰り返して来た。

流されるままに生きる彼を優しいと、彼女達は言った。それは言わば比喩のようなもので、実際そう思っている訳ではなかった筈だ。しかし負け惜しみではないが、藤堂の方にも、別れる際特に未練などはなかった。元々好きでもないのに、告白されたからという理由だけで付き合っていたのだから、当然ではある。

「……藤堂さん？」

明の怪訝な声に、藤堂は困ったように頭を掻いた。知らず渋い表情になっていたのだろう。明は不安そうな面持ちで、藤堂を見上げている。こういう時、上手い言い訳も思い付かない自分が、歯痒く思えた。

「私、変な事言った？」

「いや、そうじゃなくて……大人の事情っつーかなんっつか」

説明し辛い。大人の事情とは無縁そうな小娘に、説明する気も更々ない。しかし明のことだから、このまま納得の行く答えが出るまで、延々問い詰めてきそうだ。

「済みません」

明が弾かれたように入口を向き、藤堂は視線だけを流した。助かったと、藤堂はそう思う。

「浄霊屋さんは、こちらでしょうか」

申し訳なさそうな声だった。ゆっくりとした足取りでカウンターに近付いて来る女は、藤堂の目には二十代後半に見えたが、女の年齢は見た目だけでは判断出来ない。緩やかにウェーブしたクリーム色の髪と、白いタイトスカートが良く似合っていた。

それにしても奇抜な色の髪というのは、やはり違和感がある。物心ついた時から見慣れているというのに。

「いらっしやいませ。お掛けになって下さい」

何も言わない藤堂を見かね、明が立ち上がって椅子を勧めた。女はすみませんと小さく言っつて、キャスター付きの椅子を引く。どことなく落ち着かない明と、座って息を吐いた女性を交互に見ながら、藤堂は首を捻る。

明は慣れているものと思っていた。一人で浄霊屋をやっていたというから、慣れていて当然と考えていた。しかし今の彼女の様子を見る限り、そうでもなさそうだ。

そわそわと落ち着かない明と、依頼人の視線が合った。同時に口を開く二人を見て、藤堂は眉をひそめる。

「知恩院と申します」

「あの、娘が」

声が被った。同時に言葉を止め、二人は気まずそうに俯く。藤堂は溜息を吐きたくなるのを堪えて、姿勢を正した。

「あー……藤堂です。まずはお名前を」

藤堂が聞き直すと、女はおずおずと顔を上げて彼を見た。垂れ下がった眉尻を見て、幸薄そうな女だと藤堂は思う。

「黒江愛と申します……その、娘が……」

愛はそこで、言葉を詰まらせた。見る見るうちに涙ぐむ依頼人に、明は痛ましげに眉根を寄せる。

しかし藤堂は、一気に白けた。彼は誰かが泣くのをみると一歩引いてしまうタッチで、貰い泣きとは縁がない。振られるのは得意だが、泣かれるのは苦手なのだ。

茶でも煎れに引っ込んでしまおうかと思ったが、愛が涙声で言葉を続けてしまったので、それも行かなかった。藤堂は心持ち居住まいを正し、表情を引き締める。

「娘が……悪霊に取り憑かれてしまって。毎日部屋に閉じこもって出て来てはくれないし、家族を見て暴れ出す始末で……もう、どうしたらいいのか……」

鞆から取り出したハンカチで目元を抑えながら、愛は搾り出すように悲痛な声を漏らす。明は劣るような手つきで、愛の肩にそっと手を置いた。

「大丈夫ですよ、黒江さん。お嬢さんは、私達が必ず、救って見せます」

「知恩院さん……」

目尻に涙を溜め、愛は縋るような目で明を見詰めた。それに応えるように、明は大きく頷いて見せる。

齒の浮くような台詞だと考えながら、藤堂は引いた目で二人を見ていた。藤堂はお涙頂戴のチープな劇を厭う。しかも訪ねて来て早々これでは、彼でなくとも引いてしまっただろう。明のように依頼人に同情出来れば良かったのだが、無条件に感情移入出来るほど、藤堂は若くない。己の順応性の低さが恨めしかった。

藤堂は流されるまま浄霊屋となった事を、今更ながら後悔する。考えてみれば、藤堂自身には何もするべき事がないのだ。出来る事といえば、守護霊を貸し出す事だけだろう。しかし依頼人が来てしまった後では、やっぱりやめると言う訳にも行かない。

「まずはお嬢さんの状態を確認しに、一度伺いたいと思います。ご希望のお日にちは？」

「はい、ええと……」

愛が鞆から取り出した携帯電話を開いた所で、藤堂は依頼受付用紙があつた事を思い出した。話を聞くだけでは忘れるからと、明が用意してきたものだ。記入を促さなかつた所を見ると、忘れていたのだろう。

何やら前途多難だ。しかし呆れている訳にも行かない。

「こちらに、ご記入頂けますか」

藤堂はカウンターの隅に置かれた用紙にペンを乗せて、愛の前に差し出した。それを見て、明がしまったというような顔をする。頷いて記入を始めた愛と藤堂を交互に見比べた後、明は藤堂に向かってペロりと舌を出す。

依頼人に気付かれないように溜息を吐いた藤堂はふと、憑いた霊をどうやって浄化するのだろうと考える。断らなかつたから出来るのだろうが、まさか憑かれた人間ごとあの刀を刺すのだろうか。流石にそれは両親の精神衛生上、良くないような気もする。

少女が書くような丸文字で用紙を埋めた愛は、明の方にそれを差し出した。明はそれを受け取って確認すると、小さく頷く。

「……確かに。当日また、こちらの番号にご連絡します」

顔を上げた明が微笑んでみせると、愛はほっとしたように表情を緩めた。

「よろしくお願いします」

深々と頭を下げ、愛は席を立つ。物腰の柔らかな女だが、藤堂には、どこか陰があるように見えた。

明は愛の背中に向かって、ありがとうございますと声を掛けた。依頼人が店内から出て行ったのを確認して、藤堂は煙草に火を点ける。

「依頼料の話は、しなくていいのか？」

肩の力を抜くついでに全身から脱力した明は、藤堂に向き直って僅かに唇を尖らせる。

「お金の話は、被害者の状態を確認してから。話だけじゃ、どれだけもらったらいいか分からないじゃない」

「ああ……そりゃそうか」

気のない藤堂の声に、明は少し膨れた。

「忘れたと思っただんでしょ」

拗ねたようにそっぽを向いた明は、カウンターに両手で頬杖をついた。藤堂は確かにそう考えていたが、果たして拗ねるような事だろうかと疑問に思う。

「仕方ないじゃない。私今までお客さんとは、メールか電話でしかやり取りしなかったんだから」

藤堂は煙を吐き出しながらくもった声で、ああ、と呟いた。だからさこちなかったのか、と納得する。客と面と向かって話す機会が少なかったのであれば、対応が不自然なものも仕方のない事だろう。それより未だに接客に慣れない藤堂の方が問題だ。

下らない事で拗ねる辺りは、子供らしい。子供と言っていていいような年齢でもないのだろうが、藤堂はそれで幾分、安心した。何しろ大人びた娘だから、年上の威厳が、などと下らない事を考えていたのだ。

藤堂はふてくされた明の頭に掌を置いて、宥めるように軽く叩いてやる。明は一瞬驚いたように藤堂を見上げたが、少し笑って、力ウンターに視線を落とした。

第二章 旅立つ娘 二

藤堂が浄霊屋になってから初めて請けた依頼は、悪霊に取り憑かれた娘を救って欲しい、というものだった。巷でよく聞く話だが、明が言うには、生きている人間が悪霊に取り憑かれる事などそうでもないようだ。噂に聞くのは大体が作り話か狂言、または当事者の思い込みであるという。

それでも確実に、取り憑かれる人間というのは存在する。憑かれる原因としては、病気や怪我などで極端に体が弱っているという事。また、精神的に弱っていても体に乗っ取られることがある。

けれど取り憑かれる人間の過半数は、憑かれ易い体質であるとされている。体調的な理由か体質的なものであるかは、初めて憑かれた時期による。親に庇護され、本来なら悪霊が寄り付けない筈の赤ん坊の内に取り憑かれれば、それは体質だ。またそういった体質の人間には、総じて霊媒師の素質がある。

退治屋や拝み屋には靈感さえ強ければなれるものだが、霊媒師はそうは行かない。靈感の有る無しに関わらず、憑かれる体質でなければ降霊する事が出来ない。

そこから浄霊まで出来るようになるには、生まれつきの靈感の強さが問われる。だから霊媒師というのは、世間が思っているより遙かに就き辛い職業なのだ。

「それにしても、様子がおかしくなり始めてから一ヶ月も経ってるなんて、変だよ」

依頼人宅への道すがら、霊媒師についての講釈を延々垂れていた明は、不思議そうにぼやいた。足を投げ出すようにのろのろと歩いていた藤堂は、聞き返すでもなく明を見下ろす。

「普通、一ヶ月も体に乗っ取られていたら、かなり弱っちゃうはずだよ」

「なんで？」

明はスカートポケットから折り畳まれた受付用紙を取り出して、藤堂の目の前に広げた。見せられても藤堂には分からない。

「たまに本人が戻るって書いてあるでしょ」

備考欄を指差して、明は言う。藤堂は首を捻ったが、うん、と呟いた。

「憑かれると、一つの体に魂が二つ入ってる状態になるの。でも悪霊の方が人間じゃなくなってる分強いから、一ヶ月も経つと同居されてる本人は弱ってくるのね。悪霊を押しつけて、本人に戻る筈がないの」

「ふうん……」

分かったような分からないような曖昧な返事に、明は呆れた溜め息を吐いた。基本的に藤堂は、意思の読み取り辛い反応しか見せない。特に理由はないが、そういう性格なのだ。

「もう……ほんと、藤堂さんて何も知らないんだね」

呆れた表情だったが、責めるような口振りではなかった。諦められているのかも知れないと、藤堂は思う。逐一呆れる割に丁寧に説明してくれるから、年齢にそぐわず律儀な性格なのだろう。

「おじさんもういい歳だから、脳細胞死んでんの」

「藤堂さんまだ三十でしょ」

「お前から見りゃおじさんだろ」

口を噤んで困った顔をした明は、返答に窮しているようだった。

彼女の性格的に、肯定も出来ないだろう。その辺りも見越してそんな台詞を吐くから、藤堂は大概たちが悪いのだ。

依頼人の家は、閑静な住宅街の中にあつた。流行りの縦に長い家が密集して建ち並んでいるから、初めて訪れた人間には、どれがどの家なのか見分けがつかない。

「あ、黒江さん」

明が唐突に声を上げた。数メートル先の家からひよいと顔を出した人物は、確かに先日事務所を訪れた依頼人のようだ。しかしどこか、浮かない顔をしている。二人は自然と、早足になった。

愛はしばらくきよろきよろと辺りを見回した後、二人を見付けると慌てた様子で駆け寄ってきた。藤堂と明は、怪訝に顔を見合わせる。

「と、藤堂さん、知恩院さん！」

藤堂と明に駆け寄りながら、愛はひどく慌てた様子で二人の名を叫んだ。距離が一メートルほどにまで縮まってからようやく立ち止まった愛は、深々と頭を下げる。亜麻色の髪がさらりと流れて、顔を隠した。

「本当に、申し訳ありません」

「どうかなさつたんですか？」

怪訝な声で明が問うと、愛はおずおずと顔を上げた。申し訳なさそうなその表情に、藤堂の心中を嫌な予感がよぎる。

「あの、実は、夫が鳳さんの方にも依頼していたらしくて……」

「鳳ですか！」

明が驚いた声を上げると、愛は更に頭を下げた。藤堂は困惑した面持ちで頭を掻く。つまり重複して別の業者に依頼してしまったという事なのだろう。大企業だという鳳相手では、こちらに勝ち目はない。

それなら尻尾を巻いて逃げ帰るしかない。藤堂はそう考えたが、愛は意外な言葉を口にした。

「それで、その……もう鳳さんは中にいらっしやるんですが、差し支えなければ、上がって頂けますか？」

これには藤堂も驚いたが、明の方が驚愕した表情を浮かべていた。そんな二人をちらりと見てから、愛は俯いたまま続ける。

「私は悪霊といえど、退治してしまうのは可哀相だと思うのです。変質しているとはいえ、元は人間でしょう？ だから、浄霊屋であるあなた方に、なんとかして頂きたかつたんです……だから」

目を丸くしていた明の表情が、徐々に穏やかなものへと変わって行く。藤堂の目には、どこか嬉しそうにも見えた。

「いいんですよ、黒江さん」

愛は俯いたまま、上目遣いに明を見上げる。

「私達に任せて頂けるなら、鳳さんほどには手際良くやれませんが、誠意を持って対応させて頂きますから。まずは、お嬢さんの状態を確認します」

「ああ……」

心の底から安堵したような溜め息を漏らし、愛は重ねて礼をした。水飲み鳥のようだと、藤堂は思う。

「ありがとうございます……どうぞ、こちらです」

愛は自宅の玄関先まで二人を案内し、扉を開けた。お邪魔します、と言っ藤堂と明の声が被る。

玄関に一步足を踏み入れた瞬間、明があからさまに顔をしかめた。愛は彼女の変化には気付かず、廊下を進む。藤堂は明に理由を聞くとしたが、あまりにも苦い彼女の表情に首を捻った。暫し悩んで結局、依頼人にこの表情を見られてはまずいと思い直して口を噤む。「娘の部屋は、三階です。狭いので、気をつけて」

愛が自家用エレベーターのボタンを押すと、すぐに扉が開いた。最近のエレベーターなど、どの家にも設置されているが、藤堂はこれを見る度複雑な心境になる。

実家は三階建てだったが恐ろしく狭く、エレベーターが設置出来なかった。幼い頃は、よくエレベーターをつける駄々をこねたものだ。無論、真実欲しかったわけではなく、自分の家にだけ無いのが嫌だったのだ。明も愛も緊張した面持ちだが、藤堂は一人、そんなどうでもいい事を考える。

小さな機械音が響く中、明は思い詰めたような暗い表情で俯いていた。何かあるのだろうかと藤堂は思ったが、何かあるからここに来ているのだ。

それにしても明のこの様子は、不自然すぎるように思える。疑問に思っても依頼人の前で聞くのは憚られたし、藤堂に霊的な事は分からない。明の変化が依頼人にばれるのも、なんとなく、いけないような気がした。

ゆつくりと動いていたエレベーターの扉が開いた瞬間、耳をつんざくような悲鳴が聞こえ、藤堂は思わず顔をしかめた。悲鳴では誰の声とも判断出来ない。しかし愛が血相を変えて正面の扉を勢い良く開いたので、娘の声だったのだろうと、藤堂は思う。それにしては、しわがれた声であったようにも感じられた。

開かれた扉から、冷たい空気が一気に流れ出した。冷気は足元を這うように通り過ぎ、閉じたエレベーターの扉に当たり、瞬く間に廊下を冷やして行く。藤堂は這い上がる寒気に体を震わせ、明は室内の光景に息を呑んだ。

空き巣にでも入られた後のように荒れた室内には、四人の男が立っていた。スーツ姿の三人は何かを囲むように立ち、口々に何事か呟いている。何も分からない藤堂でも、その様子が尋常でない事は理解出来た。

唯一Ｔシャツ姿の男は祈るように両手を組み、三人を見詰めたまま壁際で震えている。これが黒江氏だろう。

スーツの三人が囲んでいたのは、十三、四歳の少女だった。子供らしい丸みを帯びた顔に、形の丸い大きな目。多少太めだが、への字に下がった眉は、母親のものとよく似ている。普通の状態であれば、可愛らしい少女なのだろう。しかし悪霊に憑かれた今、彼女の顔は糞れきっていた。

鳥の巣のように絡まった、くすんだ水色に染められた髪。瞳孔の開いた目は大きく見開かれ、飛び回る蠅のように、瞳だけがぐるぐると忙しなく動いている。ぽっかりと開かれた唇は紫色に変色し、小刻みに震えていた。華奢な体は何重にも巻かれた注連縄で椅子に縛り付けられ、時折小さく痙攣する。

「なんだ、こりゃ」

藤堂は思わず、そう呟いた。あまりの惨状に、一瞬呼吸をする事さえ忘れた。何をしているのかさえ分からないが、娘が真に取り憑かれているであろう事は、尋常ではないその様子から明確に感じ取れる。

藤堂の声に振り返った黒江の顔からは、完全に血の気が失せていた。入口に立ち尽くしたまま呆然としていた愛が、その顔を見て弾かれたように夫の元へ駆け寄る。握り締めたままの両手を震わせる夫の背中を宥めるように撫でてから、愛は入口を振り返った。絶るような目が、藤堂と明を交互に見る。

そんな目で見られても、自分には何も出来ない。藤堂は困り果てて壁側へ一歩下がったが、呆然としていた明は、彼女の表情を見て目的を思い出したようだった。

切り揃えられた黒髪が揺れる。左右に首を振った明は、眉間に皺を寄せて身を乗り出した。

「あ……あなた達、なんて事するの！ 無理矢理引き剥がしたらその子の魂に影響が出るって、知らない訳じゃないでしょ！」

愛の顔色が一変した。黒江は驚愕に目を見開き、声を上げた明を注視する。

明の悲鳴じみた声にも、鳳の社員達は何ら反応を示さなかった。ただ淡々と、抑揚のない声で何ごとかをぶつぶつと呟いている。明の声が耳に入っていないのか、単に答えないだけなのか、傍目には判断がつかない。

困惑した表情を浮かべた藤堂が横を見ると、華奢な明の肩が震えていた。限界まで眉をつり上げているから、怒りによるものだろう。「あれは強制的に、体から霊を引き剥がす時に使う術なの。追い出す術なんて、他に幾らでもあるのに……」

「止めらんねえのか」

藤堂が聞くと、明は眉根を寄せたまま彼を見上げた。

「呪文が最終段階に入っちゃってるの。今止めたら、尚更あの子が危ない」

世界の終わりが訪れたかのように、愛は悲愴な表情を浮かべた。

黒江は頭を抱え、その場に蹲る。

最早彼らには、見守る事しか出来なかった。

第二章 旅立つ娘 三

高いような低いような、抑揚のない声が、室内と言わず廊下にまで響き渡る。三者三様に緩急を付けて唱えられる長い呪文は、聞く者を落ち着かない気分にした。彼らが淀みなく発する呪文の意味が解るのは、明だけだろう。

黒江夫婦は肩を抱き合い、時折口汚く退治屋を罵っては全身を震わせる愛娘を、心配そうな面持ちで見詰めていた。明は彼らと同じく不安げに眉根を寄せ、成り行きを見守っている。その表情は訝しげにも見えた。

藤堂は、ここにはいけないような気分になっていた。外国人だらけの部屋の中に一人放り込まれたような、心細い気分だ。

彼は恐らく、この場にいる人間の中でただ一人だけ、靈感を持たない。そんな木偶の坊がここにも、何も出来る事はない。精々見守るだけが関の山だが、見守るうにも人一倍霊的な事に疎い藤堂には、何かがあっても何が起きたのか分からない。そもそも幽霊など見えない。

藤堂は胸ポケットにしまい込まれていた眼鏡を取り出し、暫し悩んだ後、結局掛けた。黒いセルフレームの眼鏡は明から譲り受けたもので、靈感がない者でも霊が見えるようになるという代物だ。

藤堂はその存在すら知らなかったから、明が特別に用意したものと思い込んでいた。しかしよくよく聞いてみれば、防犯グッズとして一般的に売られているらしい。藤堂のように靈感を持たない人間も、少なからずいるという事なのだろうが、それにしても全く便利な道具があるものだ。

眼鏡を掛けても、視界に変化はなかった。靈感が備わるわけではなく、霊が見えるようになるだけのようだから、それも当然だろう。悪霊は今、椅子に縛り付けられた娘に憑いているのだから、見える筈がない。

「長い……」

明がぼつりと呟く。きつく拳を握った華奢な手は、痛々しいほど白く変色していた。

退治屋達の額にうつすらと汗が浮いているのが、離れた位置からでも見て取れた。そこで藤堂は、ようやく明が呟いた言葉の意味を理解する。

除霊が長引いているという、その事実が何を意味するのか考える間もなく、娘が雄叫びを上げた。その小さな体から発せられているとは思えないような、野太い不気味な声。息継ぎもされないまま長々と続く叫び声は聞くに耐えず、藤堂は耳を塞いだ。

全身の毛穴が開いたように、触覚が過敏になっている。空気の震えが直に皮膚に伝わり、指先が震える。

霊感がないということは、即ち霊の害意に対して抵抗する術がないということ。強く影響を受けるのは霊感がある者の方だが、彼らはそれなりに、抵抗する術を持っている。だから藤堂には、腹の底から湧き上がる嫌悪感と背筋を這う悪寒に、どう対抗すればいいのか分からない。

「出た！」

明が小さく声を上げ、僅かに身を乗り出した。藤堂は耳を塞いだまま、目を凝らす。

レンズ越しに見た少女は、顎が外れるのではないかと心配になる程大きく口を開き、尚も声を上げていた。その喉の奥から、濃い灰色の塊が吐き出される。

まず見えたのは先の尖った長い爪と、枯れ枝のように節くれ立った指だった。そして、干物のように乾いた皮膚。ただの塊に見えたのは、拳を握っていた為だろう。

少女の口から出てきたのは、手だった。灰色に変色した、骨と皮ばかりの腕。それが際限なく幾つも幾つものように少女の体内から這い出して来る。体内から追い出された腕は何かを探すように空中を彷徨い、退治屋達が作った円の中で這い回った。

吐き出されたものがなんなのか認識すると同時に、藤堂は反射的に顔をしかめた。幾つもの手が、退治屋の声に呼応するかにのた打ち回る。苦しんでいるようにも思えたが、何しろ手だから、実際の所どういふ状態なのか見た目には判断出来なかった。

体内から異形の霊を吐き出し終えた少女が、がつくりとうなだれた。退治屋の内の一人が自らの腕を前に突き出し、手刀で手の群を切るような動作をする。その手の甲には、緻密な紋様が描かれていた。皮膚に直接描かれているので、刺青か何かだろう。

絹を裂くような悲鳴が木霊する。きつく目を閉じた藤堂は、耳を塞いだままの両手を更に強く押し付けた。

永遠に続くのではないかと思われる程長く続いた悲鳴が途切れると同時に、耳が痛くなるほどの静寂が室内に落ちた。

「終わりました」

静かな声に目を開けると、あれほど大量に浮かんでいた腕は、影も形もなくなっていた。退治屋の一人が身なりを整え、もう一人が少女を縛っていた縄をほどく。最後の一人、手の甲に刺青の入った男が振り返って、黒江に近付いた。

それまで固唾を呑んで見守っていた愛が飛び出し、椅子から下ろされた娘の体を抱く。口元に掌を当てて呼吸を確認した後、深く安堵の息をついた。

「小田原さん、ゆなは……」

黒江は不安そうに問う。乱れた白髪混じりの髪を撫でつけながら、小田原と呼ばれた退治屋は鷹揚に頷いた。彼のスーツの襟元では、羽を広げる鳳凰を模った徽章が光っている。鳳コーポレーションの社員章だろう。

「大事ありません。そこのお嬢さんに心配されるまでも、ありませんでしたよ」

明がむっとしたように眉をつり上げた。向こうは答えなかっただけで、聞こえてはいたようだ。答えられなかったのかも知れないが、何にせよ嫌味たらしい。

「今回は上手く行ったかも知れないけど、このまま同じ方法で続けていたら、どうなるか分かりませんよ」

肩を怒らせて反論した明を、小田原は鼻で笑った。仕草が逐一、明の癪に障るようだった。

「結果が全てですよ……黒江さん、依頼料の件ですが」

明は暫くの間、黒江と向き合って電卓を叩く小田原を睨み付けていたが、やがて藤堂へ向き直った。頬が紅潮し、これ以上ないほど眉がつり上がっている。

相当怒っている。客の目の前で電卓を叩く小田原の遠慮のなさにも、藤堂はうんざりする。彼の行動が頭にきても、明にかけてやる言葉は見付からない。

なんと言って宥めればいいのか、口下手な藤堂には思い付かないのだ。目で訴えられても上手い言葉は掛けられないし、小田原に言い返す事も出来ない。

「藤堂さん、知恩院さん」

力の抜けた娘の体を抱きしめたまま、愛が二人を呼ぶ。藤堂は明から視線を外し、体ごと愛を向いた。

「済みません、ご足労お掛けしまして……また何かあったら、お世話になります」

愛は少し、疲れた顔をしていた。彼女に文句は言えない。彼女には何の落ち度もないし、結局期待に応えられなかったのはこちらだ。謝るべきは寧ろ、藤堂達の方だろう。

明は藤堂の方を向いたまま、顔を隠すように俯いている。藤堂は困り果てて小さく頷き、頭を掻いた。

「何かあったら、連絡下さい。すいません、何も出来なくて……それじゃ、これで」

複雑な表情を浮かべ、愛は深々と頭を下げた。それにつられたように頭を下げ、藤堂は踵を返す。彼が部屋から出ると、明は黙ってついて来た。

そのまま二人は、家の外へ出た。複雑な心境だった。

「もう信じらんない！」

黒江家から少し離れた所で、明が唐突に声を上げた。藤堂は肩を竦めて、少し後ろにいた明を振り返る。

「何よあの悪徳業者、あんなやり方じゃいつか被害者殺しちゃうよ！ 最後だつて、追いつただけだもの！」

「……………そうなの？」

歩きながら聞き返すと、明は上目遣いに藤堂を見上げて小走りに近付き、横へ並んだ。藤堂は明の歩幅に合わせて、少し歩調を緩める。

「そうだよ。何のつもりよ、あれ……………ちょっと大きい会社だからつて、何よ威張っちゃつて！ あれ絶対、依頼料ばつたくるつもりだよ」

「いやそれは……………」

返答が全て愚痴になっている。今の明に説明を求めても無駄だろう。

憤慨する明に、藤堂はほとほと困り果てて溜息を吐いた。怒る理由も分からなくはないが、こつも一人で憤られては、藤堂が困惑するだけだ。何も解決しない。

そしてふと、思い立って明を見下ろす。

「追いつただけなら、また憑かれるかも知れないって事？」

「可能性はあるよ」

「それが狙いなんじゃね？」

目を丸くして藤堂を見上げ、明は忙しなく瞬きを繰り返した。そして徐々に、その表情を変えて行く。また怒らせてしまった。

「ひどすぎる！」

明は更に憤慨して語気を荒げた。藤堂には最早、何を言う気も起きない。怒らせようと思つてした発言ではなかった。

言つてから冷静になつて考えてみれば確かに、火に油を注ぐだけの発言だつたと思えるのだが。

「悪徳業者みたいなやり方した上に初歩的な除霊しか出来ないなんて、何が大手退治屋よ。これだから大きい企業って嫌い。白銀様見習って欲しいよ」

発言が矛盾している。彼女が敬愛する白銀も、鳳の社員の筈だ。藤堂は口を挟むのも嫌になつて、明から視線を逸らした。

「大体支店によつて落差が激しすぎるよあそこ。人材を均一に振り分ければいいのに、人事もなつてない」

言いたい放題だ。これでは頭が冷えるまで、何を言っても無駄だろう。

藤堂は宥める事も諦め、明が延々愚痴るのを黙って聞いていた。

第二章 旅立つ娘 四

黒江家を出てから延々と鳳への悪態を吐いていた明は、調べてみると言つてそのままどこかへ行つてしまつた。何を調べるのだろうと藤堂は思ったが、下手に口を出してまた連れ回されるのも嫌だったので、何も言わずに見送つた。

その後藤堂は真つ直ぐ店へ戻つたが、明は閉店時間を過ぎても、歸つてこなかつた。

翌日昼過ぎに事務所に現れた明は、ひどく疲れた顔をしていた。珍しい事だと藤堂は思ったが、そういう日もあるだろう。また昨日のように延々と愚痴を吐かれるのではないかと懸念していた彼は、寧ろほつとした。ただでさえ腹がくちて眠くなるような憂鬱な時間帯に、他人の愚痴など聞きたくはない。

そもそも明は、話が長い。懇切丁寧に説明してくれるのは有難いのだが、用語の分からない藤堂の頭には、上手く入つてこない。更についてに長々と吐き続ける愚痴は、迷惑でしかないのだ。

何も聞かずに煙草を吹かす藤堂を見て、明は安心したような笑みを浮かべた。聞かれたくなかつたのだろう。

おはようと言つて、明は藤堂の横に置かれた椅子へ腰を下ろす。そういえば明の私服姿は見た事がないと、藤堂はぼんやりと考えた。

相変わらず、暇だ。そろそろ冷やかしくらい来てもいいのではないかと藤堂は思うが、冷やかしにだけ来られても困る。冷やかしいでに、何か買って欲しい。

「やっぱりあの子ね、なんか変だよ」

挨拶をしてからずつと黙り込んでいた明は、唐突にそう切り出した。藤堂は気のない表情のまま、彼女へ顔を向ける。

「あんな強い悪霊が一ヶ月も憑いてたのに、あの脆弱な術で何の障害もなく剥がせたなんて、信じられない」

「でも、時間掛かってただろ」

「霊が強ければ時間はかかるよ、高等な術じゃないんだから。あの子……ゆなちゃんだっけ。あの子に、影響が出てもおかしくなかった。ううん、出てなきやおかしいの」

藤堂が首を捻ると、明は呆れた溜息を吐いた。既に昨日の講釈の内容さえ、すっかり頭から抜けている。それどころか藤堂は、昨日の夕飯のメニューさえ覚えていない。つい数秒前に自分が言った事さえ、忘れることもある。

「昨日説明したじゃない。あのね、憑かれると時間が経つにつれて、霊体と魂が融合して行くの。だから無理矢理剥がすと、どっちかに傷が付く」

藤堂にとっては、何もかもが初耳だった。霊媒師はよく平気でいられるものだと思うが、だから訓練するのだろう。知れば知るほど、質屋とはなんと楽な職業なのだろうと思う。無論質屋としてやって行くのにも、それなりの努力は必要だが。

「でも生きてる人の魂の方が弱いから、傷つくのは必ず、取り憑かれた人の方なんだよ」

藤堂なら間違いなく疑問を抱く事もなく、傷つかなくて良かったと、そう思ってしまうだろう。おかしいと思うのは、明の感性が若いからか、鳳への私怨が混じっているからなのか。それとも世間一般的には、そう思われるのか。一般的な見解さえ持ち合わせていない藤堂には、考えても分からない。

「それが、どうなの」

煙草を揉み消しながら、短く問う。明は一瞬訝しげに表情を歪めたが、暫く考えると合点が行ったようで、ええと、と呟いた。

「だから、あの子分かって取り憑かせてたんじゃないかって事。当人の意思で霊を操って憑かせたなら、融合はしないから」

「分かってて？」

今度は藤堂が怪訝な声を漏らした。悪霊と分かかっていて憑かせた、という事だろうか。しかし。

「でも、理由がわかんないよね。そんな事しても、なんの意味もない」

明は俯いて、考え込むように顎に指先を当てた。藤堂も頷く。悪霊をわざわざ取り憑かせたのだと考えると、妙な話になってくる。憑かれて変わる事といえば人格ぐらいのもので、更に当人の意思で動けなくなるから、得はない筈だ。ゆなが憑かれたのではなく憑かせたのだとすると、何を目的としたのかが問題となる。

もしそうだとするなら、憑かれる事自体が目的だった訳ではないのだろう。憑かせて一体、何をしようとしたのか。

小娘の考えは分からない。藤堂は片手で煙草を箱から抜き取り、唇に挟みながら独りごちる。そもそも藤堂には女心が分からない。元々鈍いのだ。

「反抗かなあ……」

明がぼやくとほぼ同時に、自動ドアが開いた。慌てて姿勢を正した明は、来店した女の顔を見て黙り込む。視線を上げてそちらを確認すると、藤堂は残念そうに肩を落とした。

「何よ嫌そうな顔して、失礼ね。こっちは客よ、一応」

むっとした口調で言う新藤祐子は、真っ直ぐにカウンターに近付いて来る。銜えたまま放置されていた煙草に火を点けながら、藤堂は軽く肩を竦めた。明が訝しげに藤堂を見る。

「誰が客よ、何も買った事ねえくせに」

地黒の肌、赤みがかつた茶髪。両目の間が狭く彫りの深い顔立ちの為か、藤堂より年上だと言う割に若々しく見える。肉感的な体はスーツで被われているが、ワイシャツの胸元は大きく開けられており、深い谷間が覗いていた。

祐子は明の顔をしげしげと眺めてから、表情を硬くした。明は何故か身構える。

「あんた、いくら女つ気ないからって女子高生は……」

「ちげーよ、なんでそうなるんだよ」

呆れた声で突っ込むと、祐子は朗らかに笑った。

「冗談よ。零感質屋が事もあるうちに、浄霊屋なんて始めたつて言うから冷やかしに来ただけ、藤堂君が浄霊するワケじゃないみたいね」

「そりゃそうだ」

祐子はくつきりとした二重瞼の目を大きく開いて、明の顔を覗き込んだ。

「可愛い、市松人形みたいね。この人どう？ 喋らないでしょ」

意図の酌みづらい比喻で明を褒めた祐子は、藤堂を指差して楽しそうに言う。明は曖昧に笑い返し、頷いた。完全に圧倒されている。

藤堂は祐子に向かって虫でも追い払うように手を振ると、銜え煙草のまま頬杖をついた。

「若い子イジメなよ。歳？」

「イジメてないわよ。女に歳の事言つもんじゃないわよあんた、ほんとデリカシーないんだから」

追い払われて明から顔を離し、祐子は怒ったように眉を釣り上げた。藤堂は鼻で笑う。悪態を吐き合うなどいつもの事だが、そんな事など知らない明は困り顔だった。店主が客と軽口を叩き合っていたら、明でなくとも困惑するだろう。

きっかけは、よく覚えていない。藤堂がこうして祐子と戯れるようになったのがいつからだっただか、それすらも記憶していなかった。彼は不必要な事はすぐに忘れるし、覚えていようともしないが、それで困る事はないと思っている。

「そつえばさ、幽霊屋敷知ってる？」

藤堂は答える代わりに首を捻った。黙りこくっていた明が唐突に身乗り出し、祐子を見上げる。

「場所、分かるんですか？」

明の問いかけに、祐子は意外そうに目を丸くした。

「知らないわよ。人づてにウワサ聞いただけ。……なあに、場所探してるの？」

「あ、いいえ……ひどいって聞いたから」

「結構有名なのかな。でも、アタシも場所は分かんないから。ゴメンね」

祐子は困ったように眉根を寄せ、腕を組んだ。思案するように視線を流す彼女を見て、女というのはどうしてこう、身にもならないような噂話が好きなのだろうかと藤堂は考える。

「それが何？」

藤堂が聞くと、祐子は思い出したように視線を彼へ向けた。

「ああ、それがね、近隣の町内会でお金集めて、除霊屋頼もうとしてるっていうのね。でもそんな事、公表出来ないでしょ。地域全体に悪い噂立つちゃうから」

除霊屋というのは、退治屋と浄霊屋、更に陰陽師を加えた三つの職業の総称だ。人や物に憑いた霊を取り除き、その上で退治や浄霊をするからそう呼ぶ。藤堂は明に説明されるまで、除霊屋という職業があるものと勘違いしていた。

「人の噂はすぐ伝わるモンだからな」

「そう。だからどこの町内会なのか分かれば、あんたんところが申し出たらいいんじゃないかと思ったんだけど……そっか、そっちも知らないのか」

残念そうな祐子の顔を見るでもなく眺めながら、存外お節介焼きだと藤堂は思う。姉御肌で心配性だから、貧乏な藤堂の生活を少なからず気にしているのかも知れない。間違いなく年下に好かれるタイプだろう。

横目で明の様子を窺うと、何やら思案するような表情を浮かべていた。場所が分からないのなら、手の出しようもない。けれど、調べれば分からないでもない筈だ。自治体が包み隠しているなら、容易ではないかも知れないが。

そこまでして金が欲しいかといえば、そうでもない。藤堂は明日の食い扶持に困らなければそれでいいし、恐らく明も同じだろう。彼女が気にしているのは恐らく、被害を受けている住民のことである筈だ。

「ま、依頼がありややるよ。メイが」

「他人任せねえ。でもま、大口の依頼なら鳳に行くんじゃないの？
その道で一番有名だし、世間的に信用もあるし」

明の表情が険しくなった。鳳の名は、今の明にとっては禁句だ。

「ああ……そーね」

当たり障りのない返答をして、藤堂は煙草を灰皿に押し付ける。

ステンレス製の灰皿には薄く水を張っており、火の吐いた先端が水面に触れると、じゅ、と小さな音を立てた。

火を消して間をおかず煙草の箱に手を伸ばすと、祐子が顔をしかめた。

「あんた、吸いすぎ。早死にするよ」

「幽霊避け」

「浄霊屋が何言ってるのよ……あれ」

スーツの内ポケットで振動する携帯電話を取り出し、祐子は液晶を見る。メールだろうかと考えながら、今し方注意されたにも関わらず煙草に火を点ける藤堂の目の前で、祐子の表情が段々と渋いものへ変わって行った。

不満そうに唇を尖らせた祐子は、元通り携帯をしまった。鞆を抱え直し、彼女は藤堂に笑いかける。忙しく表情の変わる女だ。

「呼び出されたから行くわ。じゃーね、頑張ってる」

「あー頑張る頑張る。メイが」

手を振る祐子にやる気のない声を掛けながら、藤堂は追い払うような仕草をした。店を出て行く背中を見送った後、明に視線を落とした藤堂は、訝しげに片眉を寄せる。

「メイ？」

藤堂の怪訝な呼びかけにも、明は俯いたまま顔を上げなかった。まだ幽霊屋敷の事を考えているのだろうか。

「あの人……」

そう言っただけもった明は、再び顔をしかめる。何かを思い出そうとしているようにも見えた。

「何よ。うちの常連だつて言つたら」

「それは分かるけど……」

明の携帯が鳴った。カウンターの上で振動する携帯を掴み、暗い表情のまま、明は電話を取る。

「……え、黒江さん？」

一瞬、謝罪の電話だろうかと思つた。しかし曇つていた明の表情が徐々に驚愕へ変化して行くのを見て、何事かと訝る。明は相槌を打つばかりで、会話の内容は予測できなかった。

何かあつたのだろうか。段々と青褪めて行く明から視線を外し、藤堂は時計を見る。時刻は、午後四時をとうに回つていた。そろそろ閉店しなければならぬ時間だ。

「分かりました、行きます」

藤堂は目を丸くして、再び明を見た。電話を切つた彼女の顔色は、蒼白になっている。

「どうしたの」

「ゆなちゃんが……」

呆けたように呟いた後、明は自分の声を聞いて我に返つたかのように、慌てて立ち上がった。藤堂はカウンターの内側から出た明を、視線で追う。

「ゆなちゃんが、また憑かれたつて。行かなきゃ、藤堂さん」

明はカウンターの脇に立てかけてあつたバットを取り、藤堂を促す。彼は少し迷つた後、結局億劫そうに立ち上がった。

第二章 旅立つ娘 五

藤堂には、黒江家までの電車で三駅の距離が、恐ろしく長く感じられた。明はそわそわと落ち着かないし、藤堂は彼女が持ったバットを奇異の目で見る周囲の視線に晒され、やはり落ち着かない。店先で埃を被っているバイクにでも乗ってくれば良かったと後悔したが、バットを持ったまま乗ったら、それはそれで変な目で見られるだろう。

それ以前に藤堂のバイクは二人乗りではないので、そんな事をしたら奇異の目で見られるどころか、警察のお世話になってしまいそうだ。二人乗りは禁止されているし、ヘルメットも二つはない。流石に捕まっては困る。

電車の中で既にそわそわしていた明は、駅を出た瞬間駆け出した。碌に話を聞かされていない藤堂は、勘弁してくれ、と閉口しながらもその後を追う。何があつたのかさえ判らないのに、何故走っているのかと疑問を抱く。

駅前の人ごみを器用にすり抜け、スカートの裾がはためくのも気にせず、明は住宅街を疾走する。翻ったプリーツのスカートから伸びる、白い太腿が僅かに見えた。恥ずかしくはないのだろうか、藤堂は呆れる。気にならないほど必死なのかも知れない。

「あの、メイさん、ちよつと……」

藤堂の呼びかけに、明は反応しなかった。ただひたすら前だけを見て、黒江家を目指す。明と出会ってから走ってばかりいると、藤堂はうんざりした。

「知恩院さん、藤堂さん！」

玄関先で待っていたらしい愛が、二人の姿を見つけて大声で叫んだ。相当切羽詰った様子だったが、藤堂は既に疲弊しきっていたので、反応出来ない。明が家の前まで辿り着くの見届けると、面倒になって走るのをやめた。

荒い呼吸を繰り返しながらゆっくりと歩く藤堂を振り返り、明が溜息を吐いた。溜息など吐かれても、藤堂は明のように若くはないのだ。持久力がないし、そもそも体力さえない。人間、昔のままではいられない。

重い足取りの藤堂がようやく二人の元に辿り着くと、愛は彼と明に向かつて、深々と頭を下げた。

「突然呼び出してしまって、申し訳ありません……まさかまた、こんな事になるなんて」

愛は元々下がり気味の眉尻を更に下げ、震える声で言った。目に見えて狼狽する彼女を落ち着かせようと、明はその両肩に手を添える。藤堂はまだ、しつこく肩で息をしていた。

「いいんです。それより、ゆなちゃんは……」

明が問うと、愛は大きな目いっぱい涙を溜め、小さく息を吐いた。見るからに辛そうなその様子に、藤堂は呼吸を整えながら痛ましげに眉根を寄せる。

「中にいます。どうか……どうか、助けてください。私もう、見てもらえないの……」

両手で顔を覆い、愛は左右に首を振ってよろめいた。藤堂は慌ててその体を支える。細い体は、小刻みに震えていた。

泣き崩れた愛を支えて途方に暮れる藤堂と顔を見合わせた後、明は玄関の扉を開けた。室内の空気に触れると同時に、彼女は昨日ここへ来た時と同じように、あからさまに顔をしかめる。結局聞きそびれたままだったが、今日は藤堂にもその理由が分かった。明らかに、空気が淀んでいる。

どことなく重たい空気を怪訝に思い、藤堂は明の背後から玄関を覗き込む。しかしその奥の光景を見る前に、この世のものとは思えないような叫び声が聞こえ、藤堂は思わず身を引いた。明は反射的に玄関へ飛び込んで行ったが、愛を支える藤堂は、その場から動くことが出来なかった。閉まりかけた扉を慌てて足で押さえ、室内を覗き込む。

廊下の奥、リビングでは、黒江が娘を羽交い絞めにして押さえ付けていた。悲痛に歪む父親の表情とは対照的に、ゆなの顔は憎しみに歪んでいる。

何があったのかと藤堂が思うより先に、飛び込んで行った明がゆなの首へ手を伸ばした。触るな、と凡そ少女の発したものは思えないような怒鳴り声が聞こえてくる。あれは少女に憑いた霊が発した声なのだろうか。

激しく暴れる娘を、黒江は更に力を込めて押さえつける。表情が苦しげなのは、消耗しているせいだけではないのだろう。明は怒鳴り声にも構わず、後頭部に掌を添えてうなじを握った。

途端、娘の動きが目に見えて鈍くなる。具体的に何をしたのか藤堂の位置からは確認出来なかったが、ああすることで大人しくなってしまうものなのだろうか。

黒江が明に向かって、済みません、と呟くのが聞こえた。謝っている場合でもないだろうと藤堂は思うが、向こうは彼より遙かに動揺している筈だ。狼狽して怒鳴られなかっただけ良いだろう。

「藤堂さん、来て！」

明がゆなの後頭部を押さえつけたまま、玄関先に立ち尽くす藤堂を振り返って怒鳴った。来いと言われても、藤堂は愛を放り出して行ける程非情ではない。どうするべきかと悩む藤堂の、その背後を見た明の表情が、驚愕に歪んだ。

「失礼しますよ」

掛けられた声に振り返る間もなく、背後から黒い影が藤堂の横をすり抜けて室内へ入った。鬼の形相で明を睨みつけていたゆなが廊下へ顔を向け、更に苦々しく表情を歪める。

「鳳……」

明が驚いた声を漏らすと、藤堂に支えられるようにして立っていた愛が、涙に濡れた顔を上げた。しかし醜く変貌した愛娘の顔を目にした瞬間、再び深く俯いてしまう。困り果てる藤堂は結局、離れた位置から室内の様子を見守るしかなかった。

黒江が疲れた顔をスーツの男に向ける。昨日は三人いたものと記憶しているが、今日は一人しか来ていないようだ。

「ああ、小田原さん……」

「また憑かれたのですね。残念です」

あまりにも白々しいその台詞を聞いた瞬間、明の目つきがきつと厳しくなり、小田原を睨みつけた。

「何言ってるの、除霊しただけのくせに！ これも、昨日のと同じ霊じゃない！」

小田原は語気を荒げる明を無表情に一瞥したが、その言葉には反応しなかった。代わりに沈痛な面持ちで、黒江に深く頭を下げる。散々明の愚痴を聞いていたせいも、藤堂にはその姿がどうにも嘘臭く思えてしまう。

「再びこうなったのも、私どもの不手際が原因。贖罪の意味を込めて、今回も誠心誠意努めます。お嬢さんは、この鳳にお任せ願えませんか」

藤堂は耳を疑った。この状況で、悠長に何を言っているのだろうか。これでは明が怒る理由も分かる。

黒江はしかし困惑したような表情で、頭を下げる小田原を真っ直ぐ見ていた。何も知らない者からすれば、昨日の除霊は成功していたのだから、彼が迷うのも当然だろう。何しろ藤堂にだって、成功したように見えたのだ。

明はきつく歯噛みして、小田原に掴みかかろうとした。

しかし。

「ゆな！」

愛が突然、悲鳴じみた叫び声を上げた。藤堂には、一瞬何が起きたのか分からなかった。

明が手を離れた瞬間、ゆなは父親の手を振りほどいて駆け出した。黒江は青褪め、明はあきらかに狼狽する。小田原は慌ててゆなを捕まえようと腕を伸ばしたが、彼女はその手をすり抜けて廊下へ飛び出した。

突然の事に反応できないでいる藤堂の横をゆなが通り過ぎた刹那、愛が反射的に身を翻して娘を追った。ついさつきまで泣きじゃくっていたとは思えないような機敏な動きに、藤堂は母の想いを感じる。そんな事を考えている場合ではないのだが、動揺するあまり、頭の中が真っ白になっていた。

小田原が廊下を振り返り、愛の後を追うように駆け出した。我に返った明と黒江は、慌ててその後を追う。藤堂は明に背中を叩かれたところで、また走るのかと少々うんざりした。しかしそうも言うてはいられない。

これも仕事だと腹をくくった藤堂は、明と黒江が玄関を出た後、ドアを閉めて彼らの後を追う。ゆなも愛も小田原も、既に姿が見えなくなっていた。

「すみません皆さん、僕がすっかり、あの子を捕まえていなかったばっかりに……」

耳元をかすめる風切り音と忙しい己の呼吸音に混じって、申し訳なさそうな黒江の声が聞こえた。既に息を上げている藤堂には、何も答えられない。

「いいんです。気にしないで下さい、仕事ですから……でも、絶対に変だよ。ねえ藤堂さん」

同意を求められても、藤堂には頷く事しか出来なかった。頷きはしたが、何が変なのか藤堂は分かっていない。昼間の話は覚えているが、結局疑問を残したままだったように思う。

結構な速度で走っているにも関わらず、明の声は平常時と少しも差がなかった。よほど腹筋が強いのだろう。

「あれは昨日の霊だったよ。あんな強い霊があの子にこだわる理由なんてないし、よっぽど居心地が良かったのかな……でも昨日の今日じゃ流石に早すぎるし、もう、何なのよあいつ！」

苛立ち紛れに怒鳴りながら、明は片手に持ったバットを振った。目の前を掠めたバットに怯えた表情を浮かべた黒江は、走る速度を落とす。疲れた訳ではなく、明と並ぶのが怖かったのだろう。

藤堂は、早くも息切れしていた。黒江の方がどう見ても歳上と思われるが、忙しく辺りを見回しながら一定の速度を保っているのを見る限り、彼はまだそう疲れてはいないはずだ。藤堂は己の体力のなさを呪う。

空はもう、大半が藍色に染まっていた。黄昏時の薄闇を必死の形相で駆け抜ける彼らは、傍から見たら異様だったろう。しかもその内の一人は、片手にバットを持っている。

穏やかならぬ光景だ。犯罪の匂いさえする。主婦達がそろそろ夕飯の支度に取り掛かるであろう時間帯で、通行人が疎らだったのが唯一の救いだらう。

路地を曲がった所で、ブロック塀に手をついて肩で息をする愛の姿が見えた。彼女は地面にしゃがみ込み、頭痛を堪えるように額を押さえている。

愛を見た途端黒江の表情が凍りつき、慌てて明を抜かして行った。まだそんな体力があつたのかと、藤堂は呆れる。

「愛、大丈夫か？ ゆなと小田原さんは……」

「小吉くん……」

愛は立ち止まって傍らに屈みこんだ夫を潤んだ目で見上げ、途方に暮れたように呟いた。少し遅れて黒江に追いついた明が、足を止めて二人を見下ろす。

「ゆなちゃんと鳳の人は、どっちに行きました？」

顔を上げて明を見た愛は、無言のまま三叉路の右側を指差す。相変わらず息一つ切らしていない明は大きく頷いて、のろのろと歩いてくる藤堂を振り返った。彼には最早、走る気力もない。

「行こう、藤堂さん！」

明確に疲労感を表す藤堂の顔が、更に疲れきったものへ変わった。そんな彼に、黒江は哀れんだ視線を送る。愛は心なしか気まずそうに、藤堂から視線を逸らした。

再び駆け出す明に、藤堂は深い溜息を吐いた。済みませんという愛の声に答える気力は、もう残されていない。

「後から僕らも行きますから！」

背後から黒江の声が聞こえたが、藤堂は振り返らなかった。振り返る事が出来なかった、と言った方が正しいかも知れない。それほど疲弊している。

なんだってこうも走ってばかりいるのだろうと、藤堂は茹だった頭で考える。しかし酸素不足でまともな思考も出来ないの、半ば自棄になって明の背中を追った。

三叉路を右に曲がると、突き当たりに公園が見えた。明はそちらへ駆けていく。あの公園にいてくれればいいのにと考えながら、藤堂は最後の力を振り絞って追いかける。自分の呼吸音だけが、やけに煩く聞こえていた。

「藤堂さん、遅い！」

公園の入り口で立ち止まった明が、振り返って藤堂を怒鳴りつける。そう言われても歳が違うのだと思っただが、事実なので何も言えなかった。走るの速い方だったのだが、やはり十年近い月日は、人を老化させるに充分という事だろう。

「早くして！……ああ！」

公園と藤堂を忙しく交互に見ていた明は、何かを見て大声を上げた。ようやく追いついた藤堂は、肩で息をしながら明の視線の先を見る。

「な、何やってんの、アレ」

藤堂の目には、小田原がゆなの頭を地面に押さえつけているようにしか見えなかった。うつ伏せに倒れた少女の細い腕が小田原に掴まれ、背後で捻り上げられている。僅かに上げられたゆなの顔は、退治屋に対する憎悪に歪んでいた。

周りに人気はない。公園の中央に設置された時計は、午後五時半を差している。何の変哲もない静かな公園の中で、彼ら二人だけが異質だった。

「取り憑いた霊を、無理矢理追い出そうとしてるんだよ……あれじや意味ないのに」

小田原の手が、ゆなの背中の上で九字を切る。野太い絶叫が、ゆなの口から発せられた。

「だ、ダメよそんなんじゃ！ 今すぐやめなさい！」

バットを握り締めたままその様子を見守っていた明が、慌てた声を上げて二人に駆け寄った。その瞬間。

「やめろ、小田原」

凜としたよく通る声が、場を静まらせた。ゆなを押さえ込んでいた小田原が、驚愕に目を見開く。それは明と藤堂にとっては初めて見る表情だったが、二人はそれよりも声の主を探していた。

明は不思議そうな顔をしているが、藤堂はこの声に、聞き覚えがあった。いつの間に現れたのか、公園の入り口には黒塗りの車が停まっている。声は確かに、あの中から聞こえてきた。

車のドアが開いた瞬間、明が息を呑んだ。

第二章 旅立つ娘 六

見る者に威圧感を抱かせる黒塗りの車から降りてきたのは、見事な銀髪の女だった。すらりとした長身を黒のスーツで包み、長い髪を夕刻の冷えた風に靡かせている。

白い細面に凜々しくつり上がった眉と、切れ長の目。整った顔立ちからはしかし、髪の色もあってか冷たい印象を受ける。色素の薄い瞳が小田原を見据えると、彼は小さく悲鳴を上げた。

「その子はその浄霊屋に任せる。お前は手出し無用だ」

女にしては低い声が冷たく告げると、小田原はゆなを押さえたまま身を竦ませた。

「しかし、課長……これは、当支店が請けた件です」

課長だったのか、と藤堂はどうでもいい事を考えた。初対面の時、は気付かなかったが、よくよく見れば彼女のスーツの襟には、鳳の社員章が付けられている。

白銀がゆっくりと近付いて来ると、小田原の表情が明らかに強張った。彼女は藤堂の横を通り過ぎる際、軽く目礼する。覚えていたのだろうか。

「依頼を請けたのは確かに東京南第三支店だが、お前はもう社員ではない」

小田原の表情が凍りついた。彼に押さえつけられたままのゆなは、不思議と抵抗しなくなっている。この威圧感の前では、悪霊も黙るより他ないのかも知れない。それよりも、白銀に熱い眼差しを送ったまま黙り込んでいる明の方が、藤堂には不気味に思えた。

「人事部長から連絡があった。この件について、最終的な決定権は私にある。お前は黙っている」

白銀は明に視線を向けて、僅かに頭を下げた。明がびくりと肩を震わせる。

「うちの者が邪魔をして済まなかった。今の内に、浄霊を」

落ち着いた声が告げてからも、明は暫く硬直したまま動かなかつた。白銀が怪訝に眉を顰めるのを見てやっと、我に返る。

「と、藤堂さん、メガネ！」

「は？」

裏返った声で明が叫ぶと藤堂は一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに得心が行って、胸ポケットから眼鏡を取り出した。しかし何故掛けなければならぬのかと、藤堂は考える。黒いセルフレームの眼鏡を掛けた藤堂を見て、白銀は何故か意外そうに眉を上げた。

レンズ越しに、藤堂はゆなを見た。こちらを睨みつける目は相変わらずだが、その背後にどす黒いものが渦巻いているのが見える。昨日は何も見えなかったから、小田原が何かしていたのが効いたのだろう。

白銀は数歩下がり、ゆなから離れた。明がバットの先端に手を掛け、刀を引き抜く。小田原が薄い眉を上げ、白銀は目を細めた。

「藤堂さん、こっち来て。小田原さんだっけ？」

明は視線を落として小田原を見ると、軽く顎を上げた。おかつぱの黒髪がさらりと揺れる。

「子供達が押さえたら、すぐに退いて下さいね」

公園に設置されたライトの光を反射して銀色に輝く刀身へ視線を注いだまま、小田原は無言で頷いた。明はそれを見ると同じように頷いて、再び藤堂を振り返る。

「コウ君、出来る？」

明が口にした名前が誰のものなのか、藤堂は知らなかった。少なくとも藤堂の名前ではない。しかし藤堂の背後からは、肯定の声が聞こえた。これも、聞き覚えのある幼い声。

「だいじょうぶだよ、おねえちゃん。」

確かに、そう聞こえた。そして声の主たちは藤堂の背後から一斉に飛び出し、ゆなの体に纏わりつく。子供達は藤堂と違って、聞かずとも何をすべきか分かっているようで、少女の背後の黒い霧を小さな手で掴んだ。

ゆなの口から、悲鳴が上がる。暫し呆然としていた小田原は、その声が響いた瞬間、慌てて飛び退いた。

子供らの手が、少女に取り憑いていた霊をずると引きずり出していく。それはやっぱり灰色に変色した手だったが、昨日のように幾つも這い出して来る訳ではなかった。

「それが本体だね。そのまま掴んで」

干からびた手が、何も無い虚空を掴むような仕草をする。明は構わず刀の先端を掌に突きつけ、表情を消した。

「何があつたのか知らないけど、しつこいよ。浄化するから、ちゃんと成仏してよね」

言いながら、明は灰色の掌に刀の先端を埋める。骨張った指先に力が入って慄き、刀身が腕の方へと刺し込まれて行くにつれ、灰色だった肌の色が白く変化する。

見開かれていたゆなの瞼が、ゆっくりと閉じて行く。それが完全に閉じられると同時に、白く変わった腕から力が抜け、霧に隠されるかのように消えて行く。藤堂の守護霊達はそれを見届けると、それぞれ顔を見合わせて、満足そうに頷いてから姿を消した。藤堂の下へ帰つたのだろう。

「ゆな！」

背後から聞こえた悲鳴じみた声に振り返る藤堂の横を、愛が駆け抜けて行った。黒江も慌ててゆなに走り寄る。両名共、ひどく緊張した面持ちだった。

地面にためらいもなく膝を着いた愛は、険しい表情のまま娘を抱き起こして呼吸を確認すると、深く息を吐いた。ゆなの小さな頭に頬を寄せ、目を閉じる。大事な宝物を抱きしめるような、いとおいげな仕草だった。

彼女は暫くそうしていたが、やがてゆっくりと、明を見上げた。

「もう、大丈夫なんですよね？」

明は愛に向かって笑いかけ、大きく頷いた。愛は安堵したように再び息を吐き、顔を綻ばせて行く。

「ありがとうございます」

愛は娘を抱き締めたまま、明に向かって深々と頭を下げた。妻子の傍らにしゃがみ込んだ黒江は、安らかな表情で目を閉じるゆなを見て微笑んでから、同じく頭を下げる。しかし顔を上げたところで見慣れぬ人物が視界に入り、怪訝な顔をした。

「あの……そちらの方はまさか」

愛がつられて、夫の視線の先を見る。そして今気付いたとでもいうように、口元に手を当てた。

神妙な面持ちで家族を見守っていた白銀は、唐突に振られて目を丸くした。藤堂はなんとなく蚊帳の外のような気がして、輪から少しだけ離れる。所在なげに佇む小田原と目が合ったが、気まずくなつてすぐに逸らした。お互い居辛いようだ。

「済みません、申し遅れました。鳳コーポレーション本社よりお詫びに参りました、白銀と申します」

静かに言つて、白銀は夫婦に向かって深々と頭を下げた。恐ろしく姿勢がいい。

黒江夫婦は驚愕の表情を浮かべて、顔を見合わせる。

「し、白銀？ あの、白銀さんですか？」

「本物？」

夫婦が口々に言うのを聞いて、白銀は苦笑した。そこまで有名だったのかと、藤堂は無知な己を恥じる。明は刀をしまうのも忘れ、相変わらず白銀に熱い視線を送っていた。

何やら明が怖い。つい一週間前の暴走ぶりを考えると、何を言い出すか分からない。

「この度は、弊社の者がご迷惑をお掛けしました。先日お振込み頂いた依頼料は、全額お返し致します」

「な！」

これには藤堂も驚いたが、小田原はそれ以上に驚いたようだった。驚愕の声を上げた元部下を肩越しに振り返って睨み、白銀は冷たく言い放つ。

「お前は口を出すなと言っただろう」

「し、しかし私は何も……」

白銀が双眸を細くすると、小田原は息を呑んで黙り込んだ。傍目に見ているだけでも背筋が伸びる思いがするのにも、実際睨まれたらそれどころでは済まないだろう。

「これから本社へ行って、社長に直談判させてやつても構わないんだ、同じ言い訳を社長の前で吐けるならな。解雇で済むだけ有難いと思うがいい」

解雇で済まない時はどうなるのだろうと藤堂は思ったが、白銀の迫力を前にして、口を挟む勇氣はなかった。小田原は暫く黙り込んで上司を睨んだ後、がっくりと肩を落とす。

やはりこの男は明が怪しんでいたように、解雇されるだけの事をしていたのだろう。実際の所それがなんなのか気になりはしたが、まさか社内の事情を聞くわけにも行くまい。

結局藤堂は、何も口を出さなかった。この場に留まり続けているのも妙なので、帰ってしまったおつかと視線を移した所で、白銀と目が合う。厳しい表情を浮かべていた彼女は、眉間に籠もっていた力を緩めて二三度忙しなく瞬きした。

思わず身を強張らせた藤堂を見て、白銀は口を開きかけた。しかし言葉を発する前に横からの衝撃を受けて全身を震わせ、口を噤む。流石に驚いたようで目を見張った彼女は、ぶつかって来たものを確認すべく視線を落とした。

「白銀様、本物ですよ本当に本物なんですよね！」

白銀の腕に取り付いていたのは、大きな目をきらきらと輝かせた明だった。やっと我に返ったようだが、藤堂の目から見ると、我に返る前の方がまともであったように思える。

長身の白銀を見上げ、彼女は掴んだ腕を胸に抱きこんでいる。藤堂の表情が引きつったが、白銀は微笑を浮かべて頷いた。慣れているのかも知れない。

「ああ、私ずっと好きだったんです！抱いて下さい」

言い放った本人以外の全員が、一様に硬直した。流石に白銀もこれは予測していなかっただろう。藤堂には己の顔から血の気が引いていく音が、聞こえたような気がした。

白銀は僅かに身を引き、明を困ったような顔で見下ろしていた。なんと答えていいのか判らないといった表情だったが、藤堂の位置からは、その頬が僅かに赤らんでいるように見えた。

「ああ……いやその……ええと」

口ごもりながら、声望高い退治屋は目を輝かせる少女から視線を逸らした。そして何故か、藤堂を見る。助けを求めるような目だった。

しかし藤堂にも、なんと行って明を止めればいいのか判らない。無論明とて本気ではないだろう。そう思いたい。それよりも僅かな変化ながら、赤面した彼女を意外に思う。

場が一瞬、静まり返った。

「何故成仏させてしまったのです」

弾かれたように、白銀が声のした方へ顔を向けた。明は彼女の腕を抱き締めたまま、顔を強張らせる。

「ゆなは一言も、あのひとを成仏させてくれとは、言っていないのです」

それは少女本来の、愛らしい声だった。しかし全員が全員、彼女の両親までもが、再び凍りついた。

第二章 旅立つ娘 七

全員が黙り込んだまま視線を注ぐ中、ゆなは母の腕から身を起し、パフスリーブのワンピースに付いた砂を払いながらゆっくりと立ち上がった。どこか動作がぎこちないのは、長く取り憑かれていたせいだろうか。

ゆなの大きな目は瞳孔との境が分からない程の漆黒で、どこを見ているのか分からない。尻を隠すほど伸ばされた髪はくすんだ水色に染められており、つい先ほどまで暴れていた為か、乱れて鳥の巣のように絡まっている。ふっくらとした頬は幼さを残しているが、肌は不健康に青白い。長い睫毛は日本人形のように真っ直ぐに生え、太めの眉はへの字に下がっていた。

「ゆな、何を……」

愛は唇を慄かせ、緊張した声で呟いた。ゆなは呆然と見上げてくる母を、無感動に見下ろす。作られた無表情ではなく、元々表情の変化に乏しい娘なのかも知れない。

「母上様は、ゆなの事を全くわかっておりません。父上様もです」

黒江が怯えたように、びくりと肩を震わせた。二人が何も言い返さない所を見ると、思い当たる節があるのかも知れないと、藤堂は考える。

「ゆなは霊媒師になりたいのです。せつかくこの体質に生まれたのですから、宝の持ち腐れはいけないのです」

藤堂は成る程と、そう思った。確かにこの娘は憑かれていたのではなく、憑かせていたのだらう。それが反抗の為か霊媒師になる為かはまだ不明瞭だが、明の言った通りである事は分かった。

明は複雑な表情を浮かべたまま、ゆなを注視していた。しかし白銀の腕は離さない。明に片腕を取られたまま、白銀は困惑したような面持ちで家族を見ていた。

「世のため人のために、ゆなは霊媒師さんの下へ弟子入りしたかったのです。許してくれないから、ゆなは独学で勉強をしていました。それを何故止めるのです」

ゆなの小さな唇が責めるような言葉を吐く度、夫婦の顔は青ざめて行く。しまいには彼らは肩を落とす、気まずそうに娘から視線を逸らした。そしてお互い、顔を見合わせる。

「勉強するにしても、そんなやり方はないだろう！　そ、そんな……一ヶ月も憑かれたままにしておくなんて……」

声を震わせた黒江は、それを振り払うかのように語気を荒げる。しかし、ゆなの冷めた目と目が合うと、その言葉は徐々に勢いをなくして行った。

「だって弟子入りを許可してもらえないのなら、それしかないではありませんか」

愛は知っていたのではないかと、藤堂は考える。ゆなが憑かれたのではなく憑かせたのだという事も、その理由も。だから最初に依頼をしに訪れた時、どことなく陰があったのではないか。あれは真実を隠したまま浄霊を頼むという、罪悪感から来るものだったのではないだろうか。

何れ真意は知れない。ゆなのそれも実際はただの反抗だったのではないかと思っただが、咎める気はなかった。そんな事をする義理はないし、親子の問題に口を出す権利は、藤堂のように三十を過ぎて所帯を持つとしないような男にはない。

「ゆな、あなたはまだ十四歳じゃない。中学校を卒業してから、霊媒師の方に弟子入りすればいいと言ったじゃないの。どうしてそんなに焦るの？」

愛は悲しげに眉根を寄せ、悲痛な面持ちで娘に訴えかける。目尻に浮かぶ涙を拭おうともしないまま。

「この時代、義務教育にどれほどの意味がありますか。ゆなには分かりません。それよりもゆなは、ゆなのような人を助けてあげたいのです」

言っている事は尤もだと、藤堂は思った。藤堂自身も教育に意味はないと斜に構えて、碌に勉強もしない子供だった。しかしそれとこれとは、話が違うのではないかとも思える。

勉強に意味はない。幽霊という、対抗する術を持たない一般人には太刀打ちできないものに脅かされる時代に生まれて、呑気に学習している暇はない。生きていく上で必要な知識と一般常識さえ備われば、他の知識は必要ない。退治屋達に教えを乞うて、自身を守る術を身につけさせるべきである。そう声高に主張する親も多い。

日本政府は昔と変わらず教育を義務とする反面、次代を担う若者達に、出来る限り自衛の術を身につけさせるべきだ、とも提唱している。勉強と、除霊の術を身につけること。それらを両立出来ないとは思わないが、難しい事ではあるだろう。

退治屋になるには並々ならぬ努力が必要だし、霊媒師にはゆなの言つとおり、生まれつきの素質が要る。霊を哀れむ心がなければ、浄霊屋も勤まらないのだと明は言っていた。

藤堂にはそれが無いし、そもそも靈感もないから、幽霊関係の仕事に就くことは早い内から諦めていた。それでも自分の将来について、彼は何一つ考えてはいなかった。

藤堂は高校も三年になってようやく、このままでは食い扶持を稼げなくなると気付いたのだ。学習することの必要性を理解して、すぐに就職すれば良いところを大学に通った。だから結局藤堂は今も、勉強に励むことは有益であると考えている。

「ゆなは生まれた時から悪いひとたちに囲まれていました。憑かれるのを怖がっているのは、ダメなのです。そんな自分は嫌なのです。ゆなは早く助けてあげたいのです」

「あのね、お嬢ちゃん」

一斉に視線が集まり、藤堂ははっとした後、困ったように頭を掻いた。意図して発した言葉ではない。いつしか昂っていた感情に流されるように、気がついたら呼び掛けていた。だから、次ぐ台詞もまとまっていない。

昔を思い出して、感傷的になつていたのかも知れない。だから咄嗟に、言葉が口を突いて出たのだ。藤堂は半ば、自棄になつた。

「助けたいってのはいい事だよ。でもなあ、その為に親泣かせてどうすんの」

訝しげに藤堂を見上げていたゆなは、大きな目を更に見開いた。こんな得体の知れない男に説教などされたくないだろうと藤堂は後悔したが、今更止められないので更に続ける。

「ワガママ言つて母さん泣かせる霊媒師に、誰が救えんの。父さんだって、あんなに心配してたじゃねえか。子供は難しい事考えず、一番身近な人に孝行しろ。な」

目を丸くしたゆなが、忙しく瞬きを繰り返した。驚いたような各人の視線が、藤堂の全身に刺さる。たまに長い言葉を喋ると、珍獣でも見るような目で見られる。自分が普段口を利かないのが悪いのだが、これだから嫌だと、藤堂は途方に暮れた。

ゆなは暫くまじまじと藤堂を見詰めた後、ゆっくりと彼に歩み寄る。藤堂は少々身構えた。

「ビビツとききました」

「……は？」

一瞬遅れて問い返す。ゆなは真つ直ぐに藤堂を見上げ、頬を赤らめている。藤堂は一気に青くなつた。

「ゆなはそんなふうにならされたのは初めてです」

藤堂は思わず、黒江夫婦を見た。愛は気まずそうに視線を外したが、黒江は呆然としている。娘の発言が信じられないといった表情だったが、当然だろう。こんなうだつの上からない三十路男に、娘を取られようとしているのだ。

否、こちらからすれば、そういう問題ではない。

「好きです。あわよくば、ゆなをあなたの将来設計に組み込んで頂きたく……」

「ままま、待ちなさいゆな！ 早まるんじゃない！」

ようやく我に返つた黒江が、動揺した声を上げる。

「その人の年齢はお父さんと大して変わらないぞ！ お父さんにしておきなさい！」

明が嘖き出した。笑い事ではないと、藤堂はうんざりと空を仰ぐ。藤堂を見る小田原の目が、哀れみの色を湛えていた。お前に哀れまれたらおしまいだと藤堂は思ったが、喋る気力もなかった。

何故にこうなってしまうのだ。口から出たのでとりあえず適当に言っておこう、と思つて発した言葉のせいでこんな事になるとは、予想もしていない。藤堂はよく考えて発言しない己を呪つた。

疲れ果てた藤堂をよそに、父子の会話は更にヒートアップして行く。

「愛があれば年の差なんて」

「そつという問題じゃない！」

「愛に障害はつきものです。大きければ大きいほど、燃え上がるのです」

そこで黒江は、ぐつと言葉に詰まつた。愛が更に俯いた所を見ると、身に覚えがあるのかも知れない。

疲れきつた表情を浮かべる藤堂を見ていた白銀が、下を向いて小さく嘖き出した。その横で、明が笑いを堪えて肩を震わせている。藤堂は更に肩を落とした。

「笑つてないで助けてくれないかな」

「いいじゃない藤堂さん、幸せになつ……ぶ」

言い掛けて再び嘖き出した明はどうも、困り顔の藤堂が可笑しいらしい。箸が転がっても可笑しい年頃とはこの事かと、藤堂は現実逃避気味に思う。

「……藤堂さん」

落ち着いたのか、白銀が呟いて顔を上げる。名前を教えただろうかと一瞬考えたが、そういえば先ほどから、明が連呼していた。

藤堂はその端正な顔に浮かべられた笑みを見て、息を呑む。笑つたせい、白い頬が僅かに紅潮していた。

「あなたは真つ直ぐな人だ。子供らが懐く理由もわかる」

褒められているのか、からかわれているのか、藤堂には分からなかった。しかし笑うと可愛いと、ぼんやりと思う。彼女の胸しか見ていなかった自分を恥じた。

惚ける藤堂には気付かなかったようで、彼からすぐに視線を逸らし、白銀は黒江夫妻に向き直った。

「黒江さん、学業を修めることは大事です。子供を退治屋にしようとして、無理に会社へ入れようとする親御さんも大勢いる」

それは社会問題にまで発展しているのだが、何しろ政府が奨励しているものだから、会社の方も断りきれない部分がある。彼らも慢性的な人手不足を子供達で埋めようとしているようだから、一概に迷惑しているとは言えないだろう。

「子供の知識力低下が危ぶまれている中、今時珍しく賢明なご判断だ。しかし、お嬢さんの言う事にも一理ある」

気がつくくと、黒江父子の言い合いは、ぴたりと止んでいた。

「今後お嬢さんに何かある度に逐一、退治屋や浄霊屋を依頼されるとなると、ご両親にはかなりの負担になるでしょう。ご自身に霊を跳ね除ける力がないと、正直なところ、娘さんの体にも精神状態にも影響が出る」

黒江は驚いたようにゆなを見下ろした。ゆなは首を傾げるが、藤堂は既に影響が出ているのではないかと訝る。

「重ねて申しますが、勉強は大事です。しかしお嬢さんは、他の家庭のお子さんとは少々事情が違う。自身を守る術だけでも、身に付けさせてあげた方が宜しいかと」

見た目こそ若いように見えるが、白銀の言葉は逐一重たく感じられた。死と隣り合わせに生きる退治屋と、安穩たる日々を過ごす質屋では、言葉の重みに差異が出るのは当然の事だ。けれど年下である彼女の言葉と比べた己の言動の軽さに、藤堂は落ち込んだ。

顔だけを白銀に向けていたゆなが、所在なげに佇む藤堂へ体ごと向いた。

「それでは、是非とも浄霊屋さんにご指導をお願いしたく」

藤堂は嫌な顔をした。明が驚いて目を丸くする。戸惑ったように口元に手を当てていた愛が娘を見た後、意見を求めるように白銀を見た。愛の視線を受けて、彼女は小さく頷く。

「大きな会社に依頼するよりは、自由が利くでしょう。その浄霊屋は実力もある……少なくとも、うちの教育課よりは」

自虐的な呟きには気付かなかったようで、明が嬉しそうな顔をした。実力があるという言葉に対してなのだろうが、そこに反応している場合ではないだろうと藤堂は思う。

愛は藤堂と明を交互に見た後、背筋を伸ばした。

「娘を、よろしく願います」

愛は静かにそう言っ、深々と頭を下げた。これには黒江が非難混じりに驚愕の声を上げる。対照的に、ゆなの顔はぱっと明るくなつた。

「な、何言ってるんだ愛！」

「うちの負担は覚悟していた事だけど、ゆなに影響が出るというなら、学校にだけ通わせておけばいいというものではないわ」

「でも……」

「先生にも言われたじゃない。霊媒師になるなら、それ相応の対処はするって。先生きつと、ご存知だったんだわ……よろしいでしょうか、お二人とも」

大きく瞬きを繰り返していた明の表情が、徐々に和らいでいく。

そしてようやく白銀の腕を解放し、体ごとゆなを向いて、にっこりと微笑んだ。

「構いませんよ。ね、藤堂さん」

ゆなの目が輝いている。明の笑顔が眩しく見える。愛は不安げに藤堂を見ている。複雑な表情を浮かべた黒江は、半ば諦めているようだ。

これは断つたら一気に白けるだろう。しかし悩まずにはいられない。この申し出を安易に受けてしまったらどうなるか、目に見えている。結局藤堂は何も出来ないのだ。

懊悩する藤堂に、ようやく明から解放された白銀がゆっくりと歩み寄った。落ち着かせるように、そっとその肩に手を置く。今日は手袋をはめていなかった。

「心配しなくとも、あなたのパートナーは有能だ。あなたが何もしなくとも、しっかりやってくれるさ」

見抜かれている。

藤堂は肩に置かれた白い手を暫く眺めた後、諦めたように溜息を吐いた。

「責任を持って、お嬢さんを立派な霊媒師にしてみせます……メイが」

ゆなが歓声を上げた。

第二章 旅立つ娘 八

白銀が小田原と共に去った後、藤堂と明は詳しい話を話し合いたいと黒江家に誘われたが、丁重に断った。もうすっかり暗くなっていたので、このままでは夕飯を振るまわれる羽目になると思ったのだ。それは流石に忍びない。

それよりも藤堂は、ゆなの熱い視線が怖かった。夕飯をご馳走になるならそれはそれで良かったが、それよりも、早くあの場から逃げ出したかった。しかしあるうことか、明日また二人で伺いますと明が言ったので、最早腹を括るしかなかった。その日藤堂は、憂鬱な気持ちのまま帰路についた。

翌日藤堂は、明に尻を叩かれながら嫌々黒江家を訪れた。家主は仕事に出ていて不在だったが、ゆなはしつかり待っていた。弟子入りする本人がいなくては訪ねる意味もないから、当たり前だが。

自営業の藤堂には曜日の感覚がないので気付かなかったが、昨日一昨日は世間的に休みだったのだ。正月と盆以外に定休日を設ける余裕のない藤堂は、羨ましくも思った。

「ゆなちゃんの霊感は、かなり強いと思いますよ」

浄霊屋についての説明を一通り終えた明は、にこやかにそう言った。

「霊媒体質の方は普通、何の修行もなしに、自分の意思で霊を憑かせる事は出来ません」

愛が驚いた顔をして、ゆなを見た。彼女は小さな頭を傾けて、不思議そうに明を見上げる。自覚はなかったようだ。それであれだけ暴れていたのだから大したものだと、藤堂は感心する。感心している事ではないのだが。

ゆなの頭には、札が幾重にも貼り付けられたヘルメットが被せられていた。愛は悪霊避けと言っていたが、それにしてもゆなの細い首が支えるには重たそうだ。

もつとも、ゆなは幼少の頃からずっとこれを被って生活していた
そうだから、慣れているのかも知れない。

「私はただの浄霊屋ですから、そういった方法は知らないの……
ちよつと不安だったんですが、浄霊の方法だけなら、私にも教えて
あげられます」

「済みません、重ね重ねご迷惑をお掛けして……」

愛が頭を下げようとすると、明は慌てて顔の前で手を振り、それ
を制した。二人の会話に口を挟む余地のない藤堂は、先ほどから蚊
帳の外だ。店番でもしていれば良かったと後悔したが、事務所長は
藤堂という事になっているので、そういう訳にも行かない。親御さ
んへ説明しに行くのだから、所長は同行すべきだという明の言葉に
負けたのだ。

ちらちらと向けられる、ゆなの熱の籠もった視線が痛い。それを
遮るように、藤堂はカップの底に残った紅茶を飲み干す。非常に居
心地が悪かった。何が悲しくて、中学生の熱情の視線に怯えなけれ
ばならないのだろう。

「いいんですよ！ 法外な依頼料まで頂いてしまいましたし、寧ろ
こつちが申し訳ないです」

「お金のことは、どうかお気になさらないで」

昨日の帰り際、藤堂の三ヶ月分の稼ぎを遥かに超える額の依頼料
を、あるうことか先方から提示された。明は泡を食って断ったが、
黒江夫妻は授業料だと言って一歩も引かなかった。藤堂はといえば、
啞然としたまま何も言えなかった。

押し付けられるまま受け取った分厚い封筒は今、藤堂の懐に収ま
っている。鳳から返金された分も入っているのかも知れないと、彼
はぼんやり考えていた。何かしら考えていないと、ゆなの視線に負
けそうになる。

愛もこの視線には気付いているのだろうが、止めようとはしなか
った。藤堂は漏れそうになる溜息を抑え込みながら、空のカップに
視線を落とす。

「藤堂さんにも、ご迷惑をお掛けするかと思いますが」

唐突に振られて、藤堂は面食らった。ああ、とぼやいて頭を搔く藤堂に、明が苦笑する。彼女も大分、藤堂の性格を理解してきたようだ。藤堂からしてみれば、理解されたくもなかったが。

「俺は何も出来ないんで」

困り顔の藤堂に、それまで黙り込んでいたゆなが唐突に身を乗り出してきた。無遠慮に見上げて来る大きな目に怯んで、藤堂は椅子の背もたれに背中を押し付ける。

「藤堂さんはゆなに、つもり積もった大人の事情などを教えてくださいなれば」

「ないから」

藤堂は間髪容れずに拒否したが、娘の突飛な発言に、愛の表情は凍り付いた。明が慌てて声を張り上げる。

「わ、私が全て請け負いますから！」

明を見た愛の表情は、疲れきっていた。当然だろう。これではどちらを叱ればいいのかも、判らないはずだ。藤堂が叱られるような謂れはないが。

前途多難である。藤堂は胸から込み上げる溜息を堪える事が出来ず、ゆっくりと吐き出した。

まさかこんな事になるとは、思ってもみなかった。流されるまま浄霊屋になってみたら、本業である質屋の方の営業は疎かになるし、依頼人に娘は任されるし、あまつさえその娘に迫られている。身の周りの環境が目まぐるしく変わりすぎて、ついに行けていない。懐の依頼料がなければ、藤堂は逃げ出していただろう。

客から報酬をもらって仕事をする限りは、責任を持って務めなければならぬ。そう頭で理解してはいるものの、藤堂は急激な変化について行けていなかった。ついに行けという方が無理だ。

だがこれにもその内、慣れるのだろうか。慣れるのもあまり良くないような気がしていた。

暫く愛と雑談した後、藤堂と明は黒江家を出た。明は明日迎えに来ると約束したが、ゆなは少々不満そうだった。藤堂に迎えに来て欲しかったのだろうか。しかし藤堂は何も言わなかったし、明も苦笑いするばかりだった。

「藤堂さん、もてるね」

帰路について早々明がにこやかに放った言葉に、藤堂はがっくりと肩を落とした。

「中学生にモテてもねえ……」

「ほやく藤堂を、明は声を上げて笑う。

「いいじゃない、女つ気ないよりは」

「あのね、俺これでも昔はそれなりにモテたのよ。今じゃ見る影もねえけど」

自分で言っておいて悲しくなった藤堂は、憂鬱な溜め息を吐いた。二十代半ばを過ぎてから、自虐的な発言が増えたように思う。これも老化の一種だろうか。

明は朗らかに笑って、風に靡いてふわりと浮き上がった襟を押さえた。プリーツのスカートが翻って白い太腿が露わになるが、そこからはあまり気にしていないようだ。目のやり場に困り、藤堂は彼女から視線を逸らす。

「大丈夫だよ。藤堂さん、まだ若いんだから。その内いい人が現れるって」

「そうだといいけどね」

そうは言っても日々生きるのに精一杯で、色恋にかまけていられる程、藤堂には余裕がなかった。心にも生活にも、今は蟻一匹入り込む隙間がない。対して財布の中身は余裕ばかりで、溜め息を吐く回数も増えるというものだ。

それにしても何故、明に恋愛相談をするような会話になっているのだろうか。こんな話をする気などなかったのだが、気がついたら明に乗せられていた。

「でも分かるなあ、なんとなく」

藤堂は僅かに眉を顰めて渋い顔をした。明が笑って、彼の背中を軽く叩く。

「藤堂さん、いい人だし。自分の意思ないけど」

「一言余計」

「あはは。年上に憧れるっていうか、そういうのじゃないかなあ。大丈夫大丈夫」

何がどう大丈夫なのか、藤堂には分からなかった。そもそも何故、一回りは年の離れた娘に慰められているのだろう。藤堂は別に、もてない事を憂えている訳ではない。

惚れたはれたというのは、どうでもいい範疇の事ではある。問題は相手が中学生であることと、父親が娘を溺愛していること。このままの調子でいたら、ゆなの弟子入りも破算になってしまうのではないかと、藤堂は心配している。

「霊媒師になりたいっていうのも、憧れなのかもね」

明に視線を戻すと、彼女は真っ直ぐ前を見ていた。幼さの残る頬のラインも、微かな濁りすらない澄んだ瞳も、藤堂にはやけに眩しく見える。

「周りが見えなくなるんだよね。私もだけど」

「それよりはもうちょっと、個人的な問題じゃねえの？ あの子の場合」

「どんな？」

聞き返されて、少々困った。余計な事を言わない割に、たまに口を開くと自分の首を絞めるような発言しか出来ない。

不器用なのだ。不器用で口下手で要領も悪い。それを愚痴ると友人は、男なんて皆そんなものだと笑う。しかし藤堂は少なくとも、自分以外の人間を不器用で口下手だなどと思った事はない。

「自尊心っつーか。負けたくなかったんだろ、霊に」

ふうん、と鼻を鳴らして、明は納得の行かないような表情を見せた。結局、奇麗事が好きなのかも知れない。擦れた藤堂には、少女を納得させられるような台詞は、永遠に吐けないだろう。

「憧れ、ねえ……」

藤堂は反芻するように、それでいて素っ気なく、ぽつりと眩く。それは、藤堂がなくしたものだ。歳をとるにつれて、少しずつ失って行ったもの。欲しくはなかったが、時折思い起こして懐かしく感じるような、その程度のものだった。

干からびた彼には、それが恐ろしいほど眩しいもののように感じられる。恥ずかしげもなく恋愛を語る明から目を逸らしたのも、その姿が眩しく見えたからに違いない。

藤堂には明のような若さもなし、希望もない。常に何かを諦め、それを悔いる事もなく、淡々とした日々を過ごしている。今に始まった事ではなく、昔からそうだった。明と同じ位の歳の頃からどこか達観して、何かに憧れる事も自身の未来に希望を抱くこともなくなるようにしかならないと斜に構えていた。

だから尚更、明が眩しく見えるのかも知れない。大人からすれば下らない言葉を恥ずかしげもなく口にし、誰かを救う事に躍起になる。誰かの夢を叶えてやろうとさえる。そして憧れがあり、強い意思がある。

自分には何もなし。意思もなければ甲斐性もないし、夢もない。そう考えると、藤堂には明と肩を並べて歩いている事が、不思議に思えた。

「……藤堂さんはさ、まだ若いよ」

出会ってから何度言われた台詞だろう。藤堂は目を細めて、怪訝な表情を浮かべる。時々この娘は、藤堂の心を読んだかのような言葉をお口にす。

それが、自分が求めていた言葉であるのかどうかは、藤堂にも分からない。けれど少しだけ、心が軽くなったように思えた。

「そーね。バリバリ働きますか」

「たまには休んでね」

明は笑って、また藤堂の背中を叩く。この手が押してくれるならこのまま進むのもいいと、藤堂は少し、口元を緩めた。

第三章 向こうは見ない 一

「ゆな、やっぱり今日も行くの?」

学校から帰宅して早々、荷物を放り出して再び玄関へ向かった娘に、黒江愛は不安げに問いかけた。夫である黒江小吉も、どこか浮かぬ顔をしている。人形のように無表情の少女は、両親を振り返って胸を張った。

「ゆなには天から与えられた使命があるのです。どんなに名残惜しくとも、行かねばなりません」

娘はゆっくりと、言い聞かせるようにそう言った。

「そんな……」

愛はがっくりと肩を落とし、その場に座り込んだ。力の抜けた妻の肩を抱き、小吉は毅然として立つ娘を見上げる。

「ゆな、やっぱりあの男はダメだ。お父さんにしておきなさい、同じ三十路じゃないか」

「近親相姦はいけません。それにゆなは、あの人が好きなのです。

何人たりとも、この想いを妨げる事など出来ませぬ」

「ゆ、ゆな……」

悲痛な面持ちで、小吉は呟く。そして打ちのめされたように、妻と同じく肩を落とした。彼女の意思は、岩のように硬いのだ。最早夫婦に、娘を止める事など不可能だった。

「父上様母上様、さらばっ」

「ああっ、ゆな!」

三文芝居を繰り広げる家族を、知恩院明は開け放たれた扉の向こうから、冷めた目で眺めていた。

「何してるんですか……」

黒江ゆなは力の抜けた声で呟いた明を振り返り、何事もなかったかのように行きましようと言った。明は俯く黒江夫妻をちらりと見てから、頷いて扉を閉める。

明がゆなを迎えに来たのは初めてではないが、この場面に出くわしたのは初めてだ。人攫いにでもなったような気分だった。

「ねえ、毎日あなの？」

ゆなは長い前髪の隙間から、上目遣いに明を見上げた。

「はい。概ね」

明は更に脱力し、頭痛を堪えるように額を押さえた。彼女の見た目は十七、八の少女だが、都内でも有数の浄霊屋だ。常に長袖のセーラー服を着ており、浄霊もこの格好のまま行方。学生の正装は制服だから、不自然ではない。

目尻の下がった大きな垂れ目も、おかつぱに切り揃えられた髪も今時珍しく真っ黒で、彼女の生真面目さを窺わせる。整った顔立ちを、ばら色の頬が幼く見せていた。

「どうかしましたか」

歩みの遅い明を振り返り、ゆなは細い首を傾げる。その頭全体を覆う、幾重にも札が貼り付けられた大きなヘルメットが、僅かに傾いた。

彼女はつい数週間前、大手退治屋と明が営む浄霊屋を巻き込んで大騒ぎを起こした張本人だった。黒目がちな大きな目も、垂れ下がった眉も表情に乏しく、ぱっと見では感情が読めない。くすんだ水色に染められた尻を覆う程長く伸びた髪は、傷んで所々跳ねている。丸い頬のラインも小さな唇もふっくらとしており、華奢な体とのコントラストが、少女ゆえの危うさを感じさせた。

「なんでもないの、なんでも……」

明は疲れたような表情で首を振り、少し早足になってゆなの横へ並んだ。黒江一家は、明の理解の範疇を遥かに超えている。見ている方が脱力してしまうのに、毎日あんな事をしていて疲れないのだろうか。

電車に乗り込んだゆなは、どこか険しい表情を浮かべていた。明は俯く彼女を怪訝に見ていたが、やがて下を向いていた顔が徐に上げられると、驚いて僅かに身を引く。

「メイさんは、藤堂さんとはどういったご関係ですか」

いつか聞かれるような気はしていた。明は困ったように、曖昧な笑みを浮かべる。ゆなの表情は真剣そのものだったが、感情が読み取り難いからそう見えるだけかも知れない。

「パートナーだよ」

「それは人生においての伴侶という意味で」

「違うから。そんな深い関係じゃないから」

明は僅かに顔を赤らめ、怒った素振りでもう、と呟く。ゆなが浄霊の勉強を始めてからというもの、先生役を買って出た明は、彼女の突飛な発言に振り回されてばかりいる。藤堂との支離滅裂な会話を聞いている分には面白いのだが、自分に矛先が向くと恐ろしく疲れてしまう。

二人は並んで電車を降り、藤堂の店兼、浄霊屋事務所へ向かう。

ゆなは足が遅いので、明だけなら二十分で済む距離も、ゆなに十分はかかる。

「藤堂さんはね、依頼人だったの」

ゆなは大きな目で明を見上げ、小首を傾げた。口は挟まず聞く姿勢を保っているので、明はそのまま続ける。

「あの人流されやすいでしょ。私未成年だし、事務所欲しかったし、誘ったら流されてくれるかなと思って」

「己の私利私欲の為に、靈感のない哀れな藤堂さんを巻き込んだのですか」

責めるようなゆなの言葉に、明は小さく肩を竦めた。自分でも、良くなかったとは思う。けれど藤堂を見ていたら、声を掛けずにはいられなかった。

「なんかあの時は、藤堂さんが寂しそうに見えたの。言い訳じゃないけど」

ゆなは不思議そうに首を傾げた。言い訳ではないと言ったが、言い訳していると、明は自分でも思う。

「今は、孤独な人が多い時代だから」

ぼつりと呟いた明を、ゆなは相変わらず無表情のまま見つめていた。思う所があつたのか、それとも理解し難いままなのか。

定かではないが、分かつてもらえなくてもいいと、明は思う。なにせよ、藤堂に恋するこの少女にとって、明は障害でしかないだろう。そう考えると、明には寂しくも感じられた。

「……メイさん」

見ると、ゆなの華奢な指が、明の制服の裾をちよんと摘んでいた。「ゆなは、メイさんの優しいところ、好きです」

明は目を丸くして、まじまじとゆなを見た。見上げてくる視線は真つ直ぐで、迷いが無い。しかし常から紙のように白い頬が、僅かに紅潮していた。

自然と頬が緩むのを抑えきれず、明ははにかんだように笑う。ゆなも少し、唇の端を上げた。

ようやく辿り着いた質屋のドアをくぐると、見慣れたカウンターが視界に入った。換気扇が強力なので気にはならないが、微かに煙草の臭いがする。

「お疲れ様、藤堂さん」

「こんにちは」

カウンターで書き物をしていた店主が顔を上げ、おう、と素っ気なく返した。しかし反応はそれだけで、すぐに手元へ視線を落とすしてしまう。珍しく熱心に頭を捻っている。

「何してるの？」

怪訝に思った明が近付いてカウンターを覗き込むと、藤堂が熱心に書き込んでいたのは懸賞雑誌だった。賭事はやらないようだが、それにしても随分渋い趣味だと明は思う。

「ここまできたらね、運に頼るしかねえの」

藤堂匡は視線だけ上げて二人を見ると、銜え煙草のままにやりと笑った。目と眉の間が近い精悍な顔付きだが、奥二重の瞼が常に半ばまで落ちている為、どこか間が抜けて見える。まばらに生えた無精髭と中途半端な長さの髪が、更にそれを助長させていた。

目さえしつかり開けば、それなりだ。本人も言っていたが、確かに昔はもてたのだろうと明は思う。しかし今は親父と呼ばれる年齢に片足を突っ込んだ、だらしない男にしか見えない。実際の年齢より老けて見えるのは、間違いなく髭のせいだろう。

「そんな事をせずとも、ゆなが今に物凄い霊媒師になって、ガツポガツポと稼いで差し上げるのに」

「遠慮しとく」

「何故です。藤堂さんには、死ぬまで楽な暮らしをさせてあげますよ」

ゆなはカウンターの内側へ入り、煙草を持った腕に両手を回して抱き込んだ。藤堂は、あぶね、と小さく声を上げる。呆れた明の視線にも藤堂の迷惑そうな表情にも、ゆなは動じない。

「仮にも客商売でしょ。カウンターでクロスワードなんて、銭湯の番台じゃないんだから」

藤堂は明を見ないまま、鉛筆を持った手を軽く振った。

「パチンコだの競馬だのでスるより堅実だろ」

「今時そんな事する人あんまりいないよ」

「ゆなは藤堂さんのそういう所も好きです」

「はいはい。痛えよ」

ヘルメットを被った頭を擦り寄せるゆなに、藤堂は非難の声を上げた。しかし振り払おうとはしない辺りが藤堂らしいと、明は思う。ただ単に面倒なだけなのだろうが、そういう態度が勘違いさせるのだ。

基本的に藤堂は優しい人間だと、明は思っている。だから彼を慕って集まった子供の霊が、守護霊として彼に憑いている。これほど強力な守護霊がいるのに、貧乏な理由が分からないのだが。

「依頼人は？」

明が聞くと、藤堂は緩く首を横に振った。明は肩を落として落胆する。諦めているのか客が来ない事に慣れているのか、藤堂は平然としていた。恐らく後者だろう。

「……そういや、白銀ってアレ、本名？」

きょとんと目を丸くして、明はカウンターに鉛筆を置く藤堂の指先を見る。藤堂は空いた手に煙草を持ち替え、火種を灰皿に押し付けた。きな臭い煙を吸い込むのが嫌で、明は藤堂から少し距離を取る。

「違うよ。世間的な認知度が高いのに、本名出して仕事してたら危ないじゃない」

「ああ……そうか」

自分で聞いた割に、さして興味もなさそうな口振りだった。しかし何を言ってもこういう反応しか見せないから、藤堂が実際どう思っているのかは分からない。

彼が何かについて聞くという事は、少しでも興味があるということなのだろうか。何に対しても興味がなさそうだから、明には些か意外だった。芸能人に興味を持つようなタイプでもないし、考えれば考えるほど訝しく思う。

「ごめんください」

明が怪訝に口を開きかけた時、入口から声が掛かる。三人同時に顔を上げたが、その声にはいと応えたのは明だけだった。藤堂は元々反応が鈍いし、ゆなは厳密には従業員ではない。しかし明は、そんな二人に呆れた。

「あの……こちらで浄霊して頂けると伺ったのだけど」

不安げに店内を見回す中年の女性は、ためらいがちに言いながらカウンターへ近付いて来る。ふくよかな体格だが頬が少々こけており、顔色も悪い。

「ここは一見高価な品が並ぶ質屋ですが、実は質屋です」

「結局質屋じゃない」

ゆなの発言に、明は思わず突っ込んだ。女性は怪訝に眉を顰める。

「はい？」

「ゆな、ややこしくなるから黙ってる。……すみません、浄霊屋です」

藤堂はゆなを制して訂正し、ついでに明の肩を掴んでカウンター
の正面から退かした。藤堂は、こういう時だけはきびきびと動く。
意外にも思えるが、元々客商売をやっているのだから、このぐら
いはやって貰わないと明が困る。

明は慌ててカウンターの下から椅子を引き出し、女性に勧めた。
訝しげに表情を歪めながらも、依頼人は腰を下ろす。

「藤堂です。それは知恩院、こっちは気にしないで下さい。まずは
こちらにご記入を」

藤堂は雑誌を隅へ避け、受付用紙と先ほどまで使っていた鉛筆を
女性の前に出した。明に任せるとまた締りがなくなると理解したの
だろうが、明本人は不満気な表情を浮かべていた。

「はあ、すみません」

女性が言われるまま記入を始めると、藤堂はゆなに向かって虫で
も払うように手を振る。腕にくつついたままだったのだ。藤堂に払
われると、ゆなは存外素直に離れた。

記入を終えた女性が用紙を差し出すと、明がそれを受け取った。

藤堂にはかり任せていては、接客には慣れないと思っただのだ。

「村形梓さん……ですね。……人形の髪が伸びる？」

思わず声を上げた明は、その先を読み進める内、徐々に表情を険
しいものへと変えて行った。ゆなが用紙を覗き込み、ことりと首を
傾げる。藤堂はどうでも良さそうだった。

「ええ、よく聞く話でしょう。でもまさか、自分の身に起こるなん
て、思わなかったものだから」

村形は溜息を一つ漏らした後、小さく咳き込んだ。

「娘さんの毛髪を、使われたんですか」

「ええ、形見のようなものよ。……昨年、病気で先立たれてしまっ
て」

「それは……」

明が弔辞を述べようとすると、村形は首を横に振ってそれを制し
た。藤堂の表情が俄かに曇る。

「人形は形見だから、お払いを頼む訳にも行かないでしょう。もつとも何が憑いているのか、生憎私はそう霊感が強くないから、分からないんだけど」

「娘さん、という可能性は？」

明が聞くと、村形はまた咳をした。具合が悪いのだろうか、明は心配になる。

「そうかも知れませんが、でもねえ、お人形に憑いていたら、娘は成仏してないって事でしょう。お人形に憑いて髪を伸ばすなんて悪さをしているとしたら、もしかしたら……」

その先は、明には容易に想像が出来た。藤堂は怪訝な面持ちだが、ゆなは表情を硬くしている。ここ数週間でかなりの事を教えたから、彼女にも分かるのだろう。

物に取り憑く霊は、悪霊と決まっている。人に憑いた場合は悪さをすると悪霊、護るなら守護霊となり、後者の場合は無理に成仏させる必要はない。

しかし前者の場合は、そうは行かない。悪霊は必ず人に害を為す。巷に蔓延する怨念を吸って、甚大な被害を出すようになる前に浄霊するか、存在を抹消させるしかない。それを知っているから、村形は浄霊屋に訪れたのだろう。

「わかりました、伺います」

「そう、良かった。出来れば今日、いらして頂きたいのだけど」

明は面食らって、思わず藤堂を振り返った。藤堂は眉間に皺を寄せている。

「ゆなと行って来い、勉強がてら」

「藤堂さんは？」

「俺にはわかんねえ。店番してるわ」

言うだろうと思った。明は溜息を吐いて依頼人へ向き直り、わかりました、と答えた。

第三章 向こうは見ない 二

ゆなが異論を唱えなかつたので、依頼人宅へは結局、二人で行く事となつてしまった。藤堂もとい、藤堂の守護霊がいないと時間が掛かるので、出来ればついて来て欲しかったのだが、よくわからないと言われてしまつてはあまり我が儘も言えない。まさか守護霊だけ連れて来るわけにも行かなかつた。

何よりあの子供達は藤堂を守る為に存在しているので、彼らの好意に甘えてばかりはいられない。守護霊をそれが守る人間から引き離すのは、たとえ短時間でも良くないことだ。それでも手間が省けるというのは、明にとっては魅力的だつた。

物に憑いた霊を浄化するには、まず除霊してからでないとならぬ。せないので、時間も手間もかかる。しかし藤堂の守護霊は、悪霊に直接接触れる事が出来る。つまり、憑いた靈魂だけを直接引つ張り出す事が出来るから、除霊の手間が省ける。普通なら数時間掛かるものが、数分で終わってしまうのだ。

とはいえ今まではずっと、除霊まで明一人で行つて来た。藤堂がいなくて不自由する事はないが、依頼人を不安にさせる除霊の時間を短縮出来るなら、それに越した事はない。

「ここから近いのですか？」

村形に先導されて明と共に歩いていたゆなは、依頼人を見上げて聞いた。ふくよかな顔が肩越しに振り返り、柔和に微笑む。

「すぐなのよ。ごめんなさいね、歩かせて」

「構いません。たまには歩かないと、体が鈍つてしまいます。ゆなは一ヶ月ほど動かないでいたので、すっかり足腰が弱つてしまいました」

「え？」

問い返した村形に、ゆなは緩く左右に首を振つてみせた。今度は何を言い出すかと、明は逐一はらはらする。

「典型的な引きこもりの症状です」

引きこもっていた人間が回復して早々、浄霊屋に居着いたりするものか。明は突っ込みたくてたまらなかったが、村形が再び笑顔を見せたので、口をつぐんだ。

「あら……良かったわね、外に出られるようになって」

「はい。娑婆の空気はやっぱり最高です」

納得してしまったようだ。この女性もどこかずれていると、明は思う。そういえば勉強してこいという藤堂の言葉にも、彼女は何も言わなかった。見習いだとも思われたのだろうか。あながち間違っではないが。

村形は繁華街を行く道すがら、何度か咳き込んだ。大丈夫かと聞くと喉が弱いただけと言うので、明は少々ほっとする。

道中、村形は娘に似せて人形を作ってもらった事や、マンションに一人で暮らしている事などを饒舌に語った。一人暮らしで寂しかったのかも知れない。彼女がゆったりと間延びした口調で語っている間は、明もゆなも、口を挟まなかった。

しかし彼女からは、娘を失って悲しいという感情が、見えて来なかった。所詮、今時の人という事なのかも知れない。成仏する事こそが万人の目指すべき幸福であるとされる今の時代、肉親が死んで寂しいとは思えど、悲しむ人はあまりいない。むしろ、喜ぶような人が増えてきている。

成仏することが人の幸せだという『常識』が、明には受け入れ難い。彼女は浄霊屋になる為に生まれてきたようなものだから、親からは誰かの死を悲しめるように教育された。成仏さえしてしまえば盆にはまた会えるのに、何故死が悲しいのかと聞かれれば、返答に窮してしまうだろうが。

繁華街を抜けた先には、細長いマンションが密集して建ち並んでいた。土地が足りない事が問題となっている昨今では、このような高層マンションが所狭しと建ち並ぶ様子をよく見掛ける。日当たりが悪そうだと、明はぼんやりと考えた。

「うちは一階なのよ」

言いながら村形はマンションの自動ドアをくぐり、エントランスホールへ入った。さながらホテルのロビーのような、小綺麗な造りだ。その奥にあるガラス戸はオートロック式のように、扉の横に取り付けられた機械のスリットへ、村形はカードキーを差し込んでスライドさせる。ゆなは物珍しそうにその様子を眺めていた。

「狭い所ですが、上がって下さい」

「お邪魔します」

村形の部屋は、日当たりの悪いLDKだった。室内は彼女の几帳面さを象徴するかのように、整然と保たれている。三階建ての持ち家で暮らしているゆなは、マンションのこぢんまりとした室内が珍しいようで、不躰な視線を巡らせている。

促されるまま小さめのダイニングテーブルに着くと、正面のタンスの上に置かれた市松人形が目に入った。大人びた上品な顔は丁寧に描かれており、纏った衣装も見事で、作り手の腕の良さを窺わせる。ただ一つ髪の毛の長さが不揃いな点を除けば、何一つ違和感のない人形だった。

果たしてこれが、村形の言う人形なのだろうか。髪が伸びたと言われたら、確かにそうなのかも知れないと明は思う。普通の人形なら、おかつぱの髪はしっかりと切り揃えられている筈だ。

「ああ、さすがにもうお気付きですか」

並んで椅子に腰掛けた二人の前にジュースの入ったコップを置きながら、村形は感心したように言った。明とゆなは何も言わずに顔を見合わせる。

「だがしかし、ゆなには何も感じられませぬ」

何がしかしなのか明には分からないが、ゆなの言う通りだった。人形からは何も感じられないし、何かが憑いているような気配も全くない。それどころか、この部屋には霊の気配さえない。

村形はゆなの言葉に、顔を赤らめて口元を掌で覆った。

「それじゃあお人形の髪が伸びたのは、まさか私の見間違いない？」

申し訳なさそうに眉尻を下げる村形に、明は首を左右に振って見せた。再び人形へ視線を移し、首を捻る。

「でも確かに、髪が伸びているような気はします。お人形を作る方だって、こんな不揃いな髪のまま、納品したりはしないでしょっから」

ゆなが頷いた。頭を傾けた拍子にヘルメットが僅かにずれたので、彼女は両手で被り直す。重そうな上に何かと不便そうだと明は思うが、ゆなはもう慣れてしまっているのだろう。

村形はまだ、不安げに表情を曇らせていた。確かに勘違いで依頼をしてしまったなら、とんだ赤っ恥だ。その気持ちは明にも分かるが、明もゆなも気にはしないたちなので、逆に当惑する。

どうするべきなのだろう。霊の気配は微塵も感じない。けれど、人形の髪は確かに伸びている。この事実をどう取ればいいのか、明には分からなかった。藤堂を引つ張ってこなかった事を一瞬悔やんだが、どうせ彼にも分からないだろうと思ひ直す。

藤堂を思い出した所で明はふと、テーブルから顔を背けて小さく咳をする村形へ視線を移す。疲れた様子ではあるが、何かに憑かれているようなふうでもない。そんな気配もなかったし、憑かれているのであれば、彼女が事務所へ来た時に気付いただろう。

明は目を細めて、彼女を注視した。その背後にうつすらと淡い光が見え、白い靄が体全体を覆っているのが確認出来る。

弱い守護霊が憑いていると、稀にこういったものが見える事がある。守護霊自身の、護りたいという強い想いが全身を覆っているのだと一般的には言われているが、詳しい事は誰も知らない。

そもそも幽霊自体についても、誰もが靈感を持っているからこそ、と世間的に認知されているだけだ。その存在や実態について科学的には何一つ解明されていない。

目を細める明を見て、村形は少し驚いたような顔をした。しかしすぐに霊視されているのだと気付いたようで、何も言わず、そのまま動かない。

村形の守護霊は、どんなに目を凝らしてみても、全く姿形が見えなかった。よほど弱いのか、藤堂の、コウ以外の守護霊達のように、隠れているだけなのか。判然としなかったが、明は二三度忙しなく瞬きをした後、村形に向かって笑いかけた。

「お嬢さんですね。力は弱いけど、確かにあなたを護ってます」
目を丸くして、村形はゆなと明を交互に見た。ゆなは相変わらず無表情のまま、小さく頷く。

「お嬢さんが亡くなってから、何か変わった事は？」

明が問うと、村形は思案するように視線を流した。俯いて少し咳をして、はたと顔を上げる。

「ああ、そういえば、持病の腰痛が治ったんだわ。あの子のお陰だったのかしら」

「そうでしょうね。喉もそのうち、治るでしょう」

明が微笑むと、村形は安堵の息を吐いて、自分の肩に手を置いた。ゆっくりと肩へ視線を落とし、いとおしげに撫でる。娘の手を撫でているような仕草だった。

その姿を見て、明の表情が曇る。ゆなはそれを見て首を傾げたが見てはいけないと思ったのか、室内へと顔を向けた。そして部屋の隅に置かれた円筒形の機械に目を留め、首を捻る。

「あれはなんですか？」

ゆなの問いに、明と村形が同時に視線を向けた。ああ、と村形が声を漏らす。

「加湿器よ。私、喉が弱いから、乾燥すると本当にダメで。この時期は夜しか使わないけれど」

「なるほど」

続いてゆなは人形を見て、納得したように頷いた。そして明を見上げる。

「わかりました」

「何が？」

ゆなは渋い顔をした。

「師匠、何の為にここへ来たのですか。人形ですよ、人形の髪が伸びた理由です」

はっとして目を丸くする明をよそに、ゆなは立ち尽くしたままの村形へ向き直った。自然と見上げる形になって、ヘルメットがずれたので、両手で支える。

「大昔の人形にはビニールではなく人毛が使われていたので、昔の人形師さん達は、お人形を作り終えた後、髪を切り直してから売ったそうです」

明は怪訝に眉を顰めた。何故そんな無駄な知識があるのかとでも言いたげな表情だったが、ゆなは気にせず続ける。

「人の髪というのはですね、湿気で多少なりとも伸びるのです。水分を吸って伸びます。ゆなの髪も、梅雨などそれはもう大変です。その人形には、娘さんの髪の手を使っているのでしょうか」

「ああ……そうなの、それで伸びたのね」
村形は納得した声を上げ、ぼんと手を打った。ゆなはどこか満足そうに、出されたジュースを一口飲んだ。

明とゆなは暫く雑談した後、村形家を出た。依頼料を押し付けられそうになったので、慌てて帰る格好となってしまう。結局何もしていないので、お金を貰う訳には行かない。

帰路に着いてから明はどこか、ぼんやりとしていた。眉根を少しだけ寄せて唇を引き結び、考え込むような表情を浮かべている。

俯いた彼女を怪訝に思ったのか、ゆなは首を捻った。しかし明の様子が普段と違うので、聞きづらかったのだろう。うつぶと唸ってから、首を傾げたまま顔を覗き込むように明を見上げる。

「守護霊がいるのには、理由があるのですよね」

ゆなは結局、関係のない事を聞いた。明はうん、と短く答える。

胸がもやもやとする。両親と死別してからかなりの時間が経ったが、明は今も、時折思い出しては悔恨の念に駆られる。自分のせいではないけれど、明の胸にあるのはやっぱり、悔しさだった。

「あの人は多分、体が弱いんだね。お嬢さんはそれを心配して、ああいう形で守護霊になつてたみたい」

「藤堂さんも、そうなのですか？」

明の顔を覗き込むゆなは、小首を傾げてそう聞いた。明は顎に手を当てて、うつんと唸る。

正直なところ、明は藤堂の事をよく知らない。他愛ない雑談こそすれど、藤堂は元々よく喋る方ではないし、お互いの話をした事も殆どない。何故守護霊がいるのかと疑問を覚えた事もあったが、何しろ年端も行かない子供の霊達だから、藤堂の優しい性根に惹かれて集まつたものとはかり思っていた。

改めて聞かれてみると、確かに疑問だ。惹かれて集まつたという理由なら、ただなんとなく周囲を浮遊しているだけの筈だ。それなのに、あの子供達は守護霊となっている。更に少し目を凝らせば明確に姿形が見て取れる上、自由意思を持って動き回れるほど強力なのだ。

「……そういえば、どうしてかな」

「帰ったら、聞いてみましょう」

ゆなの提案に、明は苦笑いを浮かべた。

「藤堂さんにだってわかんないよ。あの人、自分に守護霊がいる事さえ知らなかつたんだから」

ゆなは腕組みをして、首を捻った。どうやら真剣に考えているようだ、その姿が可愛らしく見え、明は小さく笑った。

「あの人流されやすいから、悪い方向に行かないように、軌道修正してあげてるんじゃないかな」

「結局流されているではないですか」

ゆなの突っ込みに、明はまた朗らかに笑った。今は楽しいので、どうでもいいかな、と彼女は思う。こうして他愛ない雑談をしながら歩けるといふなんでもないことが、仕事ばかりしていた明には楽しく感じられた。

第三章 向こうは見ない 三

明とゆなが出て行ってからも、藤堂は相変わらずクロスワードパズルを解いていた。こんな静かなのは久しぶりだ。ゆなが明を師と仰ぎ始めてから店番は一人でしていたが、二人はカウンター裏の扉から続く藤堂宅で、何やかやと騒がしかった。だから今日は本当に久々に、店内が静寂に包まれている。

換気扇の音だけが微かに響く中でパズルに頭を悩ませる藤堂は、分らない言葉を現役の学生達に聞いておけば良かったと、後悔する。少なくとも藤堂よりは、ちゃんと言葉を知っているだろう。

暫くそのまま考えていたが、やがて鉛筆を置いてのっそりと立ち上がった。分らないものは考えても仕方がないのだ。藤堂の取り得は、諦めの早さだけだ。

藤堂は背後の扉を開き、家の中へと入って行く。程なくして戻ってきたその手には、雑巾が握られていた。たまには拭かないと、シヨーケースのガラスが黄ばむばかりなのだ。ガラスが曇っていると一度常連に怒られて以来、定期的に掃除するようになっていた。

騒がしいのは好きではないが、いないなら寂しいものだと、藤堂は思う。一人でのんびりと店番をするのが常だった筈なのだが、案外少女等が居る事に慣れてしまっていたようだ。少し、可笑しくも思う。

藤堂が億劫そうにシヨーケースを拭き始めて間もなく、自動ドアが開いた。気のない視線を入店してきた人物に向け、藤堂はあからさまに顔をしかめる。

「何だよタヌキ、珍しい」

狸と呼ばれた男は髭を蓄えた顔に人なつこい笑みを浮かべ、ようと軽く挨拶した。

「相変わらず儲かってなさそうだな、匡。もっと愛想良くしろってば」

「なんで客でもねえ奴に愛敬振り撒かなきゃなんねえんだよ。俺に歓迎して欲しけりゃ、なんか買つてけ」

突っぱねるような藤堂の言葉を豪快に笑い飛ばした男は、狸ではなく建設会社の社長だ。名前を鹿倉清澄しかくろきよすみというが、全く似合っていないので誰からも狸と呼ばれている。聞けば部下からもそう呼ばれているらしいから、呆れたものだ。

狸というあだ名に恥じない丸々と太った体型と、常に柔和に細められた目。髪は短く刈り上げられており、頭の丸い形が際立って見える。体格のせいかどう見ても中年の親父なのだが、彼は藤堂と中学の同期なので、そう歳は行っていない。

「そりゃ無理だわ、カミさんに殺されちまう」

言いながら鹿倉はカウンターに近付き、手前の椅子を引くなり、どつかと腰を下ろした。椅子が壊れるのではないかと心配になる程大きな音が聞こえたが、藤堂は気にしない。

「お前、零感のくせに浄霊屋始めたんだってな。同窓会で話題になつてたぞ」

もうそこまで広まっていたのかと、藤堂は少々驚いた。客が少ない割に、噂が広まるのは早いものだ。明もそれなりに、宣伝しているという事だろう。

藤堂は中学校の同窓会など、大学生の時に一度しか行った事が無い。社交辞令の誘いは来るが休みが取れないので、社会人になってからは行った例がなかった。そもそも影の薄い子供だったから、自分の事など忘れられているものとばかり思っていた。

藤堂は懐から煙草を取り出す鹿倉を振り返って、肩を竦める。

「成り行き。金もらえなくなっちまったし、客もそんな来ねえし、いい事ねえよ」

「バカ言つな、少なくとも俺らよりは遥かに儲かってんだろ。ただでさえ普通の仕事するヤツ少ねえのに、これ以上減るんじゃないよ」

「俺のせいじゃないって……まあ、酒屋がどんどん減ってくのは困るけど」

確かに、あまり良くないことではある。幽霊関係の仕事ばかりが流行るから、政府も助成金を出して他の仕事を推奨するしかないのが現状だ。大手スーパーや葬儀屋、IT関係はともかく、家具屋や工務店、滅多に使わないがいずれは必要になる店が、かなりの速度で減っているという。日本は昔から幽霊と共に生きてきたような国だから、そちらの仕事が普及するのも早かったようだ。

学校で習ったものの何年前の事なのか藤堂は忘れたが、不況の煽りを受けて多くの会社が倒産した所へ、幽霊問題が上ってきたそうだ。元々は倒産した会社に勤めていた人々が、起死回生をかけて創めた幽霊退治という仕事が、今やここまで普遍化している。

最初に始めた者からすれば大成功だろうが、社会的には大問題だ。生活に必要な職業に携わる人が減り、死後の問題を解決する職に就く人ばかりが、増え続けているのだから。

死ぬために生きている。そんな言葉が、藤堂の脳裏をよぎる。現代人の傾向として、学者達が好んで使う言葉だ。それは決して哲学的な意味ではなく、言葉のままの意味で使われている。ならば今生きているこの時間は無駄なのだろうか、考えたりもする。

「女子高生と二人で営業してるんだって？ いや羨ましい」

黙りこんだ藤堂を見かねてか、鹿倉はにやにやと笑みを浮かべて問いかけた。反対に、藤堂は嫌な顔をする。

「このロリコン。俺だって好きで女子高生と仕事してるワケじゃないの」

何故にそこまで知れ渡っているのかと、藤堂は些か辟易した。明はどこまで公表しているのかと訝しんだが、何れ人の口に戸は立てられない。浄霊屋など珍しいようだから、仕方のないことなのだろう。

藤堂は雑巾をカウンターに置いて、灰皿を引き寄せながら腰を下ろした。

「またまた。嬉しいよ俺は、巨乳好きのお前もやっと、膨らみかけの素晴らしさに目覚めてくれたん」

「ないから。大は小を兼ねるから」

鹿倉の言葉を遮り、藤堂は早口にそう言った。言いながらカウンターの隅に置かれていた煙草を取って、火を点ける。

「つつか何、そんな事言いに来たの？」

カウンターに頬杖をつくとき、鹿倉が身を乗り出して来たので慌て避けた。迷惑そうに眉を顰める藤堂とは対照的に、鹿倉は真剣な表情を浮かべている。何やら嫌な予感がした。

「そうじゃなくてな、依頼しに来たんだよ。依頼を」

「依頼イ？」

問い返した藤堂の声が裏返った。鹿倉は吸いさしの煙草を揉み消しながら、大きく頷く。

「そう。うちの事務所の近所にな、幽霊屋敷があるんだよ。そこに屯してる霊がここ数年、やたらと悪さするようになって来てよ。一応近所にも退治屋はいるんだが、強力すぎて手出せねえって言うんだこれが」

「……そんでまさか、自治体を代表して来たってんじゃないやねえよな」

鹿倉が驚いたように眉を上げると、藤堂の顔が引きつった。

間違いない。ついこの間、祐子が話していた件だ。自分とは無関係と思っていた事がこんなにも身近なものだったのかと、藤堂は心中溜息を吐く。

「なんだよお前、そういう話疎いくせに。知ってんのか」

「ああ……まあ」

曖昧に濁して、藤堂はざらざらとした感触の顎を撫でる。果たして安請け合ひしているものなのか、迷っていた。明は幽霊屋敷がどこにあるのか知りたがっていたようだから、元々どうにかしたいと思っただけだろうか。

しかしそれほど有名な幽霊屋敷を、二人でどうにか出来るとは藤堂には思えなかった。それならまだ、鳳に任せてこちらは大人しくしていた方がいい筈だ。

「っーかな、なんでうち？ 鳳に任せろよ」

「ああ、それがさ、あつちに依頼はしてあるんだよ。でも白銀さんが忙しいとかで、先延ばしにされてよう……」

語尾に近づくにつれ、鹿倉の声が段々と小さくなって行つた。情けなく眉尻を下げた彼が真実困つてゐるのは、その声から充分に理解出来る。鳳には白銀しかいないのかと、藤堂は訝つた。

「こつちも切羽詰まつてるんだけどなあ。どんどん評判悪くなるし、最近じゃ引つ越す奴も増えてきちまつた」

つまり、向こうが駄目だからこちら、という事だろう。プライドなど欠片ほども持たない藤堂でも、消去法で依頼されるという事に、あまりいい気はしない。

思わず渋い顔をした藤堂を見て、鹿倉は両手を合わせて額の高さまで上げた。彼がよくする、懇願の姿勢だ。

「頼むよ匡ちゃん、他にねえんだって請けてくれるところが！」
「結局消去法かよ」

藤堂は、鹿倉のこの仕草に弱い。滅多に顔を合わせなくなった今では、昔から変わらないこの仕草が、懐かしく感じられてしまつたらだ。

思えば鹿倉とは、随分と長い付き合いなのだ。性格も趣味嗜好も正反対だが、なんだかんだと関係が続いている。相反するからこそ、反発しないでいられるのかも知れない。

藤堂は溜息と一緒に煙を吐き出して、これも運命、と心中独り言ちる。

「俺は別にいいんだけどさあ、どうせ何もしねえし」

「他人任せなのは相変わらずか」

「いちいち口挟むんじゃねえようるせえな……メイがなんつーか」

「女子高生？」

「いちいちうるせえよロリコ……あ」

鹿倉の巨体の向こうで、自動ドアが開いた。思わず声を上げた藤堂につられて鹿倉が振り向き、硬直する。

「ただいまです」

言ったのは、ゆなだった。後からドアをくぐった明は、鹿倉を見て目を丸くする。続けて依頼人が訪れる事など、今までなかったからだろう。

「あ、ご依頼ですか？」

明が問うと、鹿倉は無言のまま頷いた。藤堂はあからさまに嫌な顔をする。

「藤堂さん、ただいまと言ったらおかえりと返すのが伴侶の責務なのです」

「知らないからそんな責務。誰が伴侶だよ」

小走りに藤堂に近づくゆなの姿を追って、鹿倉の頭が動いた。藤堂の腕にしがみついたゆなは、鹿倉を見て首を傾げる。この熱い眼差しを受けて、変に思わない方が変だろう。

「この防犯カメラのような動きの方はなんですか。人里に降りてきた熊か何かですか」

「ちよ、ちよつとゆなちゃん！」

慌てて咎める明に、藤堂は顔の前で手を振って見せた。

「いいのこれ、俺の知り合いだから。あとタヌキ……じゃねえ、鹿倉な」

「おやまあ、狸でしたか。これは大変失礼をば致しました」

顔を強ばらせていた明が、ゆなの発言に脱力した。そのままカウンターの中へ入り、通路側に置かれた椅子に腰を下ろす。そこで改めて鹿倉を見て、明は怪訝な表情を浮かべる。

藤堂は一層、嫌そうに表情を歪めた。鹿倉の肩がわなわなと震えている。

「女子高生と女子中学生に囲まれて仕事たア、いいご身分だな匡。両手に花かコラ」

「いや俺どつちにも興味な……」

鹿倉が大きな手で、カウンターを叩いた。明の肩がびくりと震えるが、ゆなは冷めた目で、今にも泣き出しそうな表情の鹿倉を見ていた。彼女は藤堂以外の人間に、あまり興味を示さない。

「ふざけんなよおめエ、俺なんか、むせえオツサンとつるせえヤンキー共に囲まれて仕事してんだぞ。なんだよこの差は、天国と地獄じゃねえか。交換しろ！」

「職場を？ 従業員を？」

藤堂は鹿倉から目を逸らし、溜息混じりに問い返す。鹿倉は答えなかったが、代わりに恨めしげな視線を藤堂に注いでいる。これさえなければいい奴なのにと、藤堂は思う。

ゆなの小さな頭が、藤堂の顔を覗き込んだ。彼は視線だけを、ゆなの人形めいた無表情に向ける。

「なるほどこの方は、いたいけな少女に性的興奮を覚えるような、ある種倒錯的な嗜好をお持ちの方なのですな」

「ある種じゃなくて充分倒錯してんだろ」

「違います。少女とは見て楽しむものです」

「黙ってるロリコン」

三人のやり取りを呆れた表情で眺めていた明が、深々と溜息を吐いた。鹿倉は彼女に視線を移して、何故か姿勢を正す。

「あの、依頼の件はどうなったんですか？」

鹿倉はおお、と手を打って、恥ずかしそうに頭を掻いた。彼が何か言いかけるのを見て、藤堂は遮るように口を開く。

「ああ、もう請けちゃった。幽霊屋敷の件だよ」

新しい煙草に火を点けながら藤堂が言うと、明は目を見開いてカウンターに身を乗り出した。藤堂は慌てて煙草を避ける。明はどうも、興奮すると周りが見えなくなるようだ。

「本当！ いいんですか鹿倉さん、鳳さんじゃなくて」

「勿論。お嬢さん方に請けて頂けるなら、至極光栄……」

藤堂は下げられた鹿倉の頭を、拳の裏で小突いた。

「キャラ変わってんぞタヌキ。依頼の話しろ依頼の話」

鹿倉は迷惑そうに藤堂を見たが、藤堂はその日焼けした顔から視線を逸らした。迷惑なのはこちらの方だと、藤堂は思う。仕事さえ持って来なければ、追い返していただろう。

ひとつ咳払いをして、鹿倉は懐から擦り切れた手帳を取り出した。かなり使い込まれているようで、黒い革製の表紙は手垢や泥で汚れ、所々破れている。携帯を持つと汚れて壊れ放題だから、彼は今時珍しくスケジュール帳を持ち歩いている。

「ええと、依頼は幽霊屋敷に集まった幽霊の退治……いや、ここは浄霊屋だから、浄霊すんだな」

「退治も出来ますよ」

え、と藤堂が呟いた。ゆなも珍しく、目を丸くしている。初耳だった。

「なんで驚くの？ ただの悪霊なら、浄化する必要ないじゃない。基本的に悪いことしてるんだから。今までは理由があったから、浄化してただけだよ」

驚く二人に、明は不思議そうに言った。そういえば、指輪の時は生霊だったし、ゆなの時は依頼人本人が、浄化してくれと申し出てきていたのだ。

明の言葉に、鹿倉は大きく頷いた。

「そう。ただの悪霊なんだ、あそこに屯してるのは。靈感の強い奴が言うには、生前悪行を重ねてた輩が死んで、ああして悪霊になって集まってるそうだ」

「悪霊は一箇所に溜まりますからね。そういう事なら、遠慮する必要なさそうだけど……」

明の表情が僅かに曇った。

「でもそうなると、私達だけで出来るとは思えない」

それは藤堂も、懸念していた。ゆなの件での彼らの行動を見る限りでの推測だが、鳳が渋るという事は、相当な場所なのだろう。白銀がないという事が主だった原因なのかも知れないが、なんにせよ、それだけ危ないという事には違いない。

鹿倉は少し考えた後、それなら、と呟いた。

「なら、一緒に来てくれねえかな。見に行けば、出来るか出来ないか分かるだろう」

明は藤堂と顔を見合わせ、少し悩んだ後、首を縦に振った。

第三章 向こうは見ない 四

鹿倉からの依頼を請けた翌日、三人は彼と最寄り駅で待ち合わせで現地へ行く事となった。明は霊媒体質のゆなの同行を嫌がったが、本人がどうしても行くと言うので、渋々連れて行った。

何事もなければいいと、藤堂は思う。何かあるから行くのだが、下見だけに止まらないような事態に遭遇したら、大変困る。何よりゆなに何かあったら、娘を溺愛する両親に顔向け出来ない。

何かあっても、明がなんとかしてくれるだろう。藤堂はそんな甘い考えで鹿倉と雑談していたが、現地へ近付くにつれ、明の表情が険しくなってきた。元々歩みの遅いゆなの足取りも、段々と重くなっている。

「ゆなちゃん、大丈夫？」

鹿倉と並んで歩く藤堂の後ろから、明の心配そうな声が聞こえた。「ノープロブレム、です。憑かれないように弾くのも、霊媒師のつとめ」

「気をつけてね」

しかし大丈夫だと言うゆなの声は、僅かに掠れていた。

想像以上に嫌な空気だ。無論藤堂には何も感じられないが、背後の重い空気が、靈感のない藤堂にさえ危機感を覚えさせる。歩きながら、鹿倉は黙り込んだまま少し後ろをついて来る少女達を、心配そうに何度も振り返った。

なんとなく、足が重い。それが霊障なのか気持ちの問題なのか、藤堂には判断出来ない。しかし一同の歩みが遅くなっている事は、確かだった。

ふと思いついて、藤堂は眼鏡を掛けた。レンズ越しの視界に、ふらふらとさまよう浮遊霊が映る。それも一人二人といった数ではない。大通りを行き交う車の台数より、遥かに多い。通行人が誰一人としてそれを気に留めていない事が、異様に思えた。

「なんだこりゃ」

呆れた藤堂の声に、鹿倉が頭を掻いた。

「悪いなあ、こんな所に来さしちまって。依頼料弾むからよ」

「そりゃいいんだけど……」

良くはない。依頼料が弾むからといって、危険な目に遭わされては堪らない。何しろこちらには、未成年者が二人もいるのだ。今までは危機感など全く覚えなかったが、今回ばかりは、嫌でも危ないのだと思わされる。

言い淀んだ藤堂は、ふと足元を見る。そして目を丸くした。驚く藤堂に気付いて、視線を落としていた明が彼を見上げる。

「コウ君さつきから、ずつとくつついてるよ。藤堂さんのこと、屋敷に近付けたくないみたい」

藤堂の腰にしがみつくようにして、少年の霊がきよるきよると辺りを見回していた。どうやら周囲を警戒しているらしい。その足は歩くように動いていたが、足で歩いている訳ではなさそうだ。藤堂に引つ張られるようにして、地面を滑るように並行している。

藤堂の視線に気付いたのか、明にコウと呼ばれた少年は、おずおずと顔を上げて藤堂を見た。小学校低学年程度の年齢だろうか。彼の丸い額には、中央にほくろがある。生霊を浄霊した時に明に応えた、あの少年だった。

コウは小さな唇をきゅっと引き結び、不安そうに藤堂を見上げていた。思わず頭を撫でてやりたくなかったが、然るべき術を用いなければ、霊には触れない。困ったように眉尻を下げる藤堂の足に、コウはぐりぐりと顔を押し付けた。

その仕草に込み上げるものが胸を詰まらせたが、藤堂は彼に何も出来ない。寧ろ藤堂が護ってもらっている方なのだ。それが彼を、歯がゆいような切ないような、不思議な気持ちにさせる。

「コウくん、怖いんだね」

明がぼつりとそう言った。コウは答えず、その小さな手で藤堂の服を握るような仕草をした。

「あそこだ。……おいお嬢さん方、平気か？」

やがて見えてきた薄汚れた建物を指差して、鹿倉は振り返った。しかし暗い表情でのろのろと歩く明とゆなを見て、顔をしかめる。ゆなは両手でヘルメットを押さえていた。

「この人たちは、よくこんな所で暮らしておられますね」

僅かに震える声でゆなが言くと、鹿倉は困った顔をした。

「そう言われてもなあ、俺自身は霊感弱いから。幽霊屋敷って言われても実際、よくわかんねえんだ」

「慣れてるんですね、この環境に。さつきから人通りが少ないし、見る限り、店先に灰皿が多いです。身を守る術が、自然と身に付いているんでしょう」

明は丁寧に説明したが、その表情は強張っていた。藤堂が鹿倉を見ると、彼は訝しげに表情を変えた。

確かに普通の繁華街より、設置されている灰皿の数は多いだろう。繁華街でなく普通の商店街だからこの数なのだと、藤堂は思っていたが、そういう訳でもないようだ。

「理由は分かりませんが、霊はタバコの煙を嫌うようです。喫煙者の七割は霊の影響を受けやすい、または霊媒体質という統計も出ているくらいですから、信憑性はあるでしょうね」

鹿倉は首を捻った。煙草など、意識して吸っていた訳ではないだろう。藤堂も鹿倉も、周りに喫煙者が多かったからそうなった、というだけだ。

屋敷へ近付くにつれ、浮遊霊の数が明らかに減って行く。引き寄せられてはいるものの、浮遊霊の方も危ない場所へは近付きたくないということだろうか。

徐々に、空気が重たくなって行くように感じる。靈感のない藤堂でもそう思うのだから、明とゆなには、余計に強く感じられているはずだ。

屋敷の周囲は空き地や駐車場ばかりで、住民の姿も見当たらない。この一角だけ、異様な空気が漂っていた。

「相変わらず暗いなこの辺は……んん？」

ぼやいた鹿倉は、ようやく全貌が覗えるようになった屋敷の前に屯す人々を見て、目を凝らした。透けていないから、霊ではないだろう。

「全員スーツだな、誰だ？」

鹿倉は更に怪訝な声を漏らす。藤堂はつられて目を凝らしたが、視力があまり良くないので見えない。見えてもどうせ、誰なのかは分からないだろうが。

屋敷の門前で話し込む人々の内一人が、藤堂等に気付いたらしく、体ごと振り返った。明が目を丸くする。

「あれ、鳳じゃない」

こちらを窺う男の襟には、確かに金色の徽章が付けられている。形までは見えなかったが、全員が全員喪服のような黒いスーツに社員章を付けているようだから、確かに鳳の社員なのだろう。今時スーツ着用義務のある会社というのも、中々珍しい。

藤堂は背後の明を振り返って、様子を窺った。目が合ったが何も言わなかったので、そのまま近付いて行く。

不意に、こちらを向いていた男が頭を下げた。つられて鹿倉が会釈する。律儀というよりは、サラリーマンの条件反射だろう。難儀なものだと藤堂は思う。

「この辺りの方ですか？」

青白い顔をした男は、細い目を更に細めて笑みを浮かべていた。瞼は厚いが眉は薄く、見るからに気の弱そうな顔立ちだ。しかしそれでも身構えてしまうのは、鳳の社員という先入観があるせいだろうか。

鹿倉は三人より一步前へ進み出て、はあ、と曖昧に返事をした。

「この三人は違うよ。……なんだいあんたら、鳳かい。受付の子には、暫く待ってくれて言われてた筈なんだが」

「ええ……ですが、急を要す事態と判断致しましたので、不肖この私ども、東京北第五支店が参りました。ご迷惑でしたか？」

慇懃な返答にペースを乱されたようで、鹿倉は困ったように太い眉を顰めて、頭を掻いた。迷惑という事はないだろう。寧ろ喜ぶべきだ。何しろ鹿倉は初め、鳳に依頼しようとしていたのだから。

困惑した表情のまま、鹿倉は三人を振り返った。藤堂は同じく困り顔だし、ゆなは青白い顔を俯かせている。明は相変わらず硬い表情を浮かべていたが、真っ直ぐに鹿倉を見上げた。

「鹿倉さん、私達には無理です。鳳さんに任せた方がいいかと……お役に立てず、申し訳ありません」

明が頭を下げると、鹿倉は何故か藤堂を見た。見られても藤堂には何も判断出来ない。

眉間に皺を寄せ、藤堂は足元に視線を落とす。腰にしがみついたままのコウが、怯えた表情で何度も大きく頷いた。止めておいた方がいいという事なのだろう。

最早長居は無用だ。明もゆなも様子がおかしいし、何より藤堂自身、嫌な胸騒ぎを感じていた。あまり長い時間、ここにいたくない。人気がないのも野良猫一匹いないのも、皆この空気に晒されたくないからなのだろう。

「無理ったら無理なんだよ俺らにや」

「え、いいのお前、百万だよ」

「だから無理なんだっての。正式にそちらさんに依頼しろ。……メイ、ゆな、帰んぞ」

藤堂が促すと、二人は何も言わずに踵を返した。藤堂にぴつたりとくつついたコウも、早く帰ろうと言わんばかりに小さく飛び跳ねている。

「なんか、悪いな」

「ああ、無駄足だったわ。電車代ムダになったから、今度なんか奢って」

藤堂が口角を上げると、鹿倉は安堵したような笑みを浮かべた。じゃあな、と呟いて、藤堂も踵を返した。

「ねえ藤堂さん……本当に、何も感じないの？」

並んで人気のない通りを歩きながら、明がおずおずと聞いた。藤堂は首を捻って視線を宙に流し、思案する。

感じていたといえ、そうだろう。しかしなんとなく嫌だと思っただけで、明やゆなのように、何が危ないのかまでは分からなかった。我ながら鈍いものだと思う。

「わかんねえな。イヤーな雰囲気ではあったけど」

「雰囲気どころじゃないよ。ひどいよあそこ、あんなにひどいの見た事ない」

俯いたまま、ゆなが小さく頷いた。

「すぐく、うるさかったのです。師匠に跳ね返す方法を教わっていたお陰で、なんとか大丈夫でしたが」

「うん……あの人達、大丈夫なのかな。任せちゃったけど」

明は暗い表情で俯き、不安げに呟く。またぞろ仕事を取られたなとど怒り出すものと思っていた藤堂は、少々驚いた。

「見たとこ十人はいたじゃねえか。あんだけいりゃ、なんとかしちまうんじゃないの？」

「全員、退治屋としてそんなに強そうには見えなかったよ」

明の言葉に同意するように、ゆなが再び頷く。靈感があると、そんな事まで分かるのだろうか。

「あそこは数で攻めてどうにかなるような場所じゃないよ」

「師匠が三人ぐらいいないとダメなのです。多分」

そう言われても、藤堂にはそれがどれ程の事なのか分からない。

明が強いのか弱いのかさえ分からないのだ。そもそも強い弱いと評していいものなのかさえ、彼は知らない。

駅まで辿り着いてようやく、明は深い溜息を吐いて振り返った。

生温い風が、彼女の黒髪を撫でて行く。

「何事もなければ、いいんだけど」

明の声が、藤堂にはやけに悲しそうに聞こえた。三人はそのまま終始一言も喋る事なく、帰路に着いた。

第三章 向こうは見ない 五

幽霊屋敷へ下見に行ったはいいがとんぼ返りした翌日、藤堂はゆなと馴染みの定食屋にいた。明が遅くなると言うので一人で来たゆなは、事務所へ入ってくるなり腹が減つたと騒ぎ出し、しまいには無理矢理藤堂を引つ張り出した。ここ数年昼飯はずっとコンビニ弁当か自炊で済ませていた藤堂は、たまにはいいかと、流されるまま定食屋へ入ったのだ。

昼飯時から少し外れた時間帯だった為か、店主の親父は暇そうにテレビを見ていた。入店した藤堂と一緒に入ってきたゆなを見て、彼は怪訝な面持ちで僅かに身を乗り出す。

不思議に思うのも、当然だ。傍から見れば、うだつの上がらない三十路男が、妹とも娘ともつかない少女と一緒に寂れた定食屋へ入ってくる光景など、異様でしかないだろう。

藤堂は言い訳をするのも妙な気がして、カウンター席に着くなり、味噌カツ、と親父に伝えた。ゆなは藤堂の真横に腰を下ろし、物珍しそうに店内を見回している。

ゆなはどうも箱入り娘のようだから、こんな親父の憩いの場のような定食屋になど、入った事もなかっただろう。小娘の好きそうなファミリーレストランにでも入れば良かったと、藤堂は少々後悔した。つい癖で、いつもの定食屋を選んでしまったのだ。

「おう質屋。モテねえからって、とうとう少女愛好に走ったかこの人攫い」

顔をしかめて藤堂が見た先では、禿頭の親父がにやにやと嫌な笑みを浮かべていた。調子のいいこの男は藤堂と同じくこの常連で金融業を営んでいるらしいが、藤堂は詳しい事を知らない。知り合つて随分経つが、お互い名前も知らないままだ。

ゆなが店主を呼びとめ、焼きほっけ、と注文した。ファミリーレストランに連れて行かなくて良かったと、藤堂は思う。

「ちげえよ。俺の巨乳好き知ってんだろ」

「人の好みなんていくらでも変わるモンだよお前。俺だって昔はデカイ方が良かったが、今じゃ乳ならなんでもいいもんなあ」

そう言つて、金貸しの親父は豪快に笑った。金貸しという職業に違わず、品のない男なのだ。藤堂も大差ないが。

ゆなが藤堂の横から顔を出し、金貸しを見て不思議そうに首を傾げた。

「そうなのですか、変わるのですか」

顔色一つ変えずに下品な会話に割り込んだゆなに、金貸しは満面の笑みを浮かべてみせた。

「そうだよお嬢ちゃん、気をつけなよ」

「それは良い事を聞きました」

ゆなは藤堂に向き直り、真っ直ぐに見上げた。呆れた表情を浮かべる藤堂は、大きな目から視線を逸らす。

「藤堂さん、今すぐ好みを変えてください。ゆなの自分でも驚くぐらいの貧相な乳で満足出来るように」

「無理」

へえ、と金貸しが藤堂の顔を覗き込む。二人に挟まれた藤堂はどこに避ければいいかわからず、結局身を反らした。

「モテるな質屋よ。いやあ、羨ましい」

「本気でそう思ってたねえだろ」

「思ってるって。……そういやお前、メイちゃんと浄霊屋始めたんだってな」

またその話かと、心中呆れる。藤堂は些か辟易しながら、味噌カツ定食をカウンターに置いた親父に向かって、軽く片手を挙げる。箸を割りつつ、ゆなをちらりと見てから金貸しに向き直った。

「それ。こいつメイの弟子」

ほう、と感嘆の声を上げ、金貸しは目を丸くして、まじまじとゆなを見た。ゆなは感情の読み取れない無表情で、親父を見ている。その視線はどちらかというと、輝く禿頭の方に向けられていた。

「小さいのに頑張るねえ」

金貸しの言葉に、ゆなは頷いて胸を張った。藤堂は苦笑しながら、炊き立ての飯が盛られた丼を持ち上げる。

「軽く言うけどな、昨日なんか大変だったんだぞ」

「その通りです。色んな方が我先に小さなゆなの中に入ろうと」

「お前は黙ってる」

箸を持った手で、藤堂はゆなのヘルメットを押し付けるように叩いた。何を勘違いしたか、金貸しの表情が引きつっている。藤堂は脱力して、白米を頬張った。弁解する気も起きない。

目の前に盆が置かれると、ゆなは何事もなかったかのように手を合わせ、いただきますと言った。

「……何が大変だったんだ？」

金貸しはおずおずと、藤堂の顔を覗き込んで聞いた。気のない視線がそちらへと向けられ、すぐに逸れる。

「幽霊屋敷行ったんだよ、知ってる？」

「ああ、アレの事か？」

藤堂は思わず、金貸しが指差した先を見た。ゆなもつられてそちらを見上げる。そして同時に、目を丸くした。

カウンター端に置かれたテレビの画面には、『謎の幽霊屋敷』と、でかでかとタイトルが出ていた。しかし彼らを驚かせたのは、画面下に出たテロップの方だ。

「お……鳳の奴らが全滅？」

呆然と呟いた藤堂の隣で、ゆながあらまあと呟いた。さして驚いてはいなさそうな口調だったが、箸を取り落とした所を見ると、彼女なりに動揺しているらしい。

明が懸念していた事が、現実のものとなってしまった。何事もないどころではない。死者二人、残りの六人は重軽傷となると、大事だ。あの鳳がという驚きもあったが、藤堂には寧ろ、そんな危ない所で鹿倉が暮らしている事の方が、問題のように思えた。これでは明も泣くはずだ。

「へえ、すげえトコもあるもんだなあ」

金貸しの呑気な声が、別世界のもののように聞こえた。彼にとっては、テレビから流れるニュースの方が別の世界の事だろう。しかし藤堂には、あちらの方が現実なのだ。つい昨日自分があの場所にいたことが、信じられないとも思う。

藤堂はゆなと顔を見合わせ、再びテレビへ視線を移した。ゆなは食い入るように画面を見つめているが、藤堂はテレビを見ながら飯を食っている。

「所長、テレビ局が退治屋に依頼するようです」

黙々と箸を進める藤堂に気付いてか、ゆながそう実況した。藤堂は頷いて、からりと揚がったカツを一口齧る。所長という呼び名には突っ込まなかった。

画面が切り替わり、スタジオが映った。そこには二人のアナウンサーと、金髪の女が並んで座っている。

「あ、あのオネーちゃん有名な退治屋だな。なんつったつけ？」

「あの性格の悪そうな顔は高屋敷家の人ですね」

「なんだそりゃ」

「陰陽道の流れを汲んだ、まっこと不可思議な術を使う人たちです。困ったらあそこか鳳に頼めと学校で言われました。鳳さんみたいに会社としてやってるわけじゃないみたいですが、明さんの話では、かなりやり手だそうですね」

長々と説明して興味をなくしたのか、ゆなはようやく定食を食べ始めた。明が言うくらいだから、実力はあるのだろうと藤堂は思う。それなら、また鹿倉に泣きつかれる心配はないだろう。二度とあんな所には行きたくない。

「一人で行くのか、大変だなあ」

金貸しの呟く声に、藤堂はもう反応しなかった。腹がいつぱいになったと言うゆなの食べ残しを摘んだ後、箸を置く。何やら眠くなってきたしまった。

「明さん、もう来ていますかね」

ゆなの問いかけに、藤堂は煙草に火を点けながら、ああと呟く。すっかり忘れていた。

「ああ、こんな所にいた！」

店内に響いた大声に店の入り口を見ると、明が藤堂を指差して眉をつり上げていた。藤堂はまた、呑気にああと返す。

「ワリ、腹減っちまって」

「もう……探したんだから」

おかつぱの黒髪を揺らして、明はカウンターへ歩み寄る。そこでようやく金貸しの姿に気がついたらしく、あれ、と声を上げた。

「おじさん、いたんだ」

「おう、メイちゃん」

金貸しは深く皺の刻まれた顔に柔和な笑みを浮かべ、明に向かって片手を挙げた。

「大変だなあ。あの幽霊屋敷、結局取られちゃったな」

藤堂は僅かに眉を上げた。明が探していた事を、知っていたのだろうか。益々どういった付き合いなのか、訝しく思えてくる。

「あれ、知ってるの？」

「今ニュースでやってたぞ。鳳は全滅したつてよ」

藤堂を通り越して金貸しの横に腰を下ろした明は、俄かに表情を曇らせた。昨日事務所へ戻ってから、鳳の面々を一番心配していたのは、他ならぬ明だった。

明は俯いて、悲愴を湛えた目を伏せた。

「そう……ダメだったんだ」

おかつぱの髪が流れて、明の顔を隠す。金貸しは驚いたような表情で藤堂を振り返ったが、彼はのんびりと煙草を吹かすばかりだった。ゆなは元々下がった眉尻を更に下げ、心配そうに明を見つめている。

心優しい娘なのだと、藤堂は思う。ゆなの時あれほど激昂したのは、鳳の横暴に対してではなく、彼女を心配しての事だったのだろう。

金貸しは困ったような笑みを浮かべ、明の顔を覗き込んだ。

「でも高屋敷の子が退治するらしいから、そんなに心配しなくて大丈夫だと思うぞ。な」

弾かれたように顔を上げた明は、限界まで目を見開いていた。金貸しが一瞬たじろぐ。

「ちよつとそれ、どういうこと！ あそこの人が行くの？ いつの話よ！」

「え、ちよ、落ち着いてよちよつと」

どうもこの娘は、感情の起伏が激しすぎる。激情家というなら、そうなのだろう。

藤堂は我関せずとばかりに、騒ぐ二人から視線を逸らす。一度勢いづいた明はなかなか止まらない事を、藤堂は嫌と言うほど思い知らされている。

「一人で行かれるそうなのです。テレビで見ただけなので、いつ行くのかは分かりませんが」

ゆなが口を挟むと、明は驚愕の表情を浮かべたまま、一瞬凍りついた。店内の客が一樣にして、彼らの様子を見守っている。店主は迷惑そうな顔をしていた。

嫌な予感がする。藤堂は昔から、下らない勘だけはいい。ジャンケンほぼ負けなشتたし、体育祭でどの組が勝つか賭けた時も一人勝ちした。そして嫌な予感というのは、大抵当たってしまうものなのだ。

「止めなきや、藤堂さん」

藤堂は煙草を灰皿に押し付けながら、深い溜息と共に肩を落とす。もう何度聞いた台詞だろう。

「またそれかよ。今日はいねえだろ流石に」

「調べてくる。ほら、事務所戻るよ！」

椅子から飛び降りた明は、藤堂とゆなを問答無用でカウンターから引き剥がす。ゆなは素直に従ったが、藤堂は呆れた表情を浮かべていた。

「オヤジ、ツケで」

店主はさつさと行けとばかりに、虫でも払うような仕草をした。黒江夫妻から貰った金で滞納した家賃は完済したが、ツケは返すのを忘れていた。

明に促されるまま帰る間際、金貸しにも金を返していないことに気付いたが、藤堂は気にしない事にした。

第三章 向こうは見ない 六

高屋敷がいつ幽霊屋敷へ行くのか調べると言った翌日、明はまたもや事務所に現れなかった。成り行きで立ち上げた浄霊屋とはいえ、自由なものだ。店には明どころか客が来る気配もなく、藤堂とゆなは一日中クロスワードパズルを解いたり掃除をしたりと、有意義に過ごした。

更にその翌朝ゆなを伴って現れた明は、バットを持っていた。やはり行く気なのだと、藤堂は心中嘆く。

「……………今日なの？」

半分目を閉じたままの藤堂が聞くと、明は真剣な表情で頷いた。バットを持ったまま真面目な顔をされると、なにやら怖い。

日曜日の朝早くから迎えに来られたゆなは、欠伸を噛み殺していた。ゆなを連れて来る必要はあったのだろうか？と藤堂は思ったが、連れて行かなければ呪うなどと言っていたので、明も律儀に迎えに行っただらう。

「高屋敷さんは今日、下見に行くみたい。今ならまだ間に合うよ」
藤堂は一体どうやって調べたのかと疑問を抱く。しかし漏れた欠伸に邪魔をされて、質問の言葉は出なかった。

屋敷の最寄り駅で降りた瞬間、体の奥から這い上がってきた悪寒が、全身を駆け巡った。顔をしかめた藤堂は、寒気の原因を確かめようと眼鏡を掛ける。

「……………あれ？」

レンズ越しの視界には、ごく普通の風景しか映らなかった。駅構内には、浮遊霊さえ見当たらない。

さては故障かと訝って歩きながら足元へ視線を落とすと、最初ここを訪れた時と同じように、コウが腰にしがみついているのが見えたら。壊れたのではないらしい。首を捻って、少女らを振り返る。しかし二人の怯えきった表情を見て、藤堂は思わず眉を上げた。

「おい、大丈夫か」

明は今まで見た事もないような、不安げな表情を浮かべていた。肩を竦め、身を固くして周囲を窺っている。藤堂には、行き交う通行人の姿しか見えないのだが。

被ったヘルメットを両手で押さえるゆなの足取りは、目に見えて分かるほど重かった。普段から青白い顔が、更に青褪めている。

二人の様子を見る限り、この間より状況が悪化している事は明白だった。それにしても、あれほどふらふらと浮遊していた霊の姿が全く見えないのは、一体どういった見なのだろうか。人間霊どころか、動物霊さえ見当たらない。いるのはそこかしこで喧しく鳴き喚くカラスと、暗い表情の住人ばかりだ。

「屋敷の方から、いやな空気が漂ってきます。タヌキの方は、果たして生きていらっしやるでしょうか」

藤堂の表情が凍りついた。ゆなは最早、足を引きずるようにして歩いている。

「不安を煽るような事言わないの。大丈夫だよ藤堂さん、いきなりころっと死んじゃうことなんてないから」

いきなりでなければ、死ぬ可能性があるのだろうか。藤堂は明の言葉に、更に不安を覚える。

見えてきた屋敷を睨むような目で見つめたまま、明は唇を引き結んだ。こちらも顔が青褪めている。常なら血色の良いはずの頬は、紙のように白くなっていた。

「高屋敷さん、大丈夫なのかな」

明の言葉に、ゆながふうむと呟いた。

「高屋敷さんが屋敷で幽霊退治とは、なかなか寒いシヤレですね」
全身から、一気に力が抜けた。明も呆れた顔をしている。ゆなには緊張感というものが無いのだろうか。

肩の力が抜けた明は、よし、と小声で意気込んだ。いつもの顔に戻っている。ゆなの場違いな発言もたまには役に立つものだ、藤堂は感心する。

「止めに行くだけなんだから、大丈夫よ。大丈夫。行こ！」

自分に言い聞かせるような台詞だった。同時に、明の足取りは軽くなる。吹っ切れたのか自棄になったのか、藤堂には判断出来なかった。しかし彼女のその姿を、心強く思う。明のお節介に振り回されているという状況にある事など、既に忘れていた。

屋敷の前には、黒塗りのリムジンが止められていた。この細い路地にどうやって入ってきたのか、藤堂は疑問に思う。

錆びて朽ちかけた門扉の前に、道路を背にして金髪の女が立っていた。きつめに巻かれた髪は背中まで伸び、優美な曲線を描いている。これが、高屋敷だろうか。

「渚さん」

びくりと肩を竦めて振り返った女は、西洋人めいた顔立ちをしていた。つり上がった細い眉に、尖った顎。くつきりとした二重のつり目は上を向いた長い睫毛に縁取られ、重たそうにも見えた。確かにゆなの言う通り、性格の悪そうな顔だ。

ブラウスの胸元を彩るフリルが風に靡き、さざ波のように揺れている。黒のミニスカートから伸びる足はすらりと細く、華奢なヒールがよく似合っていた。

「あら……知恩院さん」

高屋敷渚はそれまで浮かべていた、驚いたような表情を消して、華やかに微笑んだ。明を知っているのだろうかと藤堂は思ったが、そういえば明も、彼女を下の名前で呼んでいた。しかし高屋敷の面々は家族で退治屋を営んでいるそうだから、一般的に名前で呼ぶのかも知れない。

「どうなさったの？ 怖い顔をして」

「聞きましたよ。一人でやるそうですね」

渚の言葉にも明の返答にも、どこか棘があるように思われた。因縁でもあるのだろうか。

「それが何か？ また私が仕事を取ったなどと、言いがかりを付け始めるのではないでしょうね」

藤堂はゆなと顔を見合わせて、脱力した。明はそんな事ばかりしているのだろうか。

「違うよ！……ここは、やめた方がいいと思うの。あなた一人じゃ無理だよ」

渚の表情が引きつった。見る限りプライドが高そうだから、それは怒るだろうと藤堂は思う。

「相変わらず失礼な方ね」

渚は徐に門扉へ向き直り、そつと手をついて扉の片側を開けた。

洋館自体には鍵がかかっていると鹿倉から聞いたが、門には取り付けられていないのだろうか。

錆びた門扉が立てる軋んだ音を聞いて、ゆなが小さく震える。そのまま敷地内へ踏み込んでいく渚を見て、明は目を見開いた。

「ちよつと、やめなさいつたら！」

「お黙り！ バットで幽霊退治するような野蛮な小娘に、止められる筋合いはありませんわ」

「退治じゃないよ、浄霊よ！」

「同じ事でしょう！」

門の向こうには、びっしりと蔦が這った洋館が構えている。所々朽ちて漆喰が剥がれてはいるものの、藤堂はその威圧感に圧倒された。割れた窓ガラスの向こうに、ちらちらと黒い影が動くのが見える。レンズ越しという点を抜きにしても視界が悪いのは、屋敷を覆うように立ち込める霧のせいだろうか。

靈感のない藤堂でさえ、敷地内へ足を踏み入れることを躊躇った。ここには入るべきではない。足元に縋りついたコウモ、緊張した面持ちで洋館を見つめている。

敷地内の様子を一目見た瞬間、ゆなが小さく悲鳴を上げ、一步下がった。藤堂は彼女を振り返って、宥めるような手つきで、ヘルメット越しに軽く頭を撫でる。

「そこにいろ」

ゆなは不安そうな目で藤堂を見上げたが、首を横に振った。

「ゆなも行くのです。師匠ばかりを危ない目に遭わせるわけには参りません。これも修行です」

軽く肩を竦め、藤堂は敷地内へ一步、足を踏み入れた。全身に纏わりつくような粘度の高い空気に、思わず顔をしかめる。湿度が高いのとは違う、重たい空気だった。

「だから危ないって言ってるじゃない、分ならず屋！」

洋館の扉の前で、明と渚が睨み合っていた。怒鳴る明に更に目つきをきつくして、渚も負けじと声を張り上げる。

「いずれ誰かがやらなければならぬ事ですわ！ 私がやって何が悪いというの！」

「だからそれが無理だっというの！」

大声で言い合う二人を見て、藤堂は更に肩を落とした。緊張感の欠片もない。果たしてこんな事をしていいのだろうか。ゆなが怯えているのが嘘のように感じられるが、藤堂自身、異様な気配だけは感じ取っていた。

「ああもうちょっと、藤堂さん！ なんとか言ってよ！」

唐突に振られて、藤堂は嫌な顔をした。渚は彼を見て一瞬驚いたように眉を上げたが、すぐに険しい表情を浮かべる。溜息を吐いて足元を見ると、コウは洋館を見上げていた。藤堂は困り果てて顎を掻く。

「あー……色気はあるけど、胸がねえな」

空気が凍った。藤堂を促した明さえ、呆れた視線を送っている。

渚は呆然と口を開けたまま、藤堂を見つめていた。

しまったと、藤堂は後悔した。言うに困ると、思っていた事がそのまま口を突いて出てしまうのだ。性分だから仕方ないと、心中言いつくす。

渚の頬が、徐々に紅潮して行く。怒りの為か羞恥の為かは、判断出来なかった。ゆなが溜息を吐くのが聞こえる。

「なっ……何なんですこの男は！ 無礼すぎますわ！」

「ああ、足はなかなかいいと思うよ」

藤堂はフォローしたつもりだったが、渚は益々眉をつり上げた。怒りのせいか、肩が震えている。

「そういう問題じゃないよ、藤堂さん……」

明は力なく突っ込んで、助けを求めるようにゆなを見た。しかし彼女はコウと一緒に、屋敷を見上げている。くだらない争いには関わり合いたくないようだ。

怒りに体を震わせる渚は、ブラウスの胸ポケットから札を取り出した。流れるような筆文字で漢字ばかりがびっしりと書き連ねられた白い札を見て、明が顔を強ばらせる。

「もう分かりましたわ！ そんなに言うなら、うちの執事を倒してご覧なさい。そうしたら、引き下がってあげますわ」

渚は更に眉をつり上げていた。説得に来ただけの筈が何故こんな事になってしまうのかと、藤堂は呆れる。しかし、種は彼が蒔いたようなものだ。

もう、と苛立たしげに吐き捨てて、明はバットの形をした鞘から刀を抜いた。ここまで来てしまったら、彼女も引き下がれないのだろう。

銀色に輝く刃を目にした渚の表情が、俄かに硬くなる。廃屋を見つめていたコウが、明を見た。少年が何を思うのか、藤堂には量れない。

明の刀が、鋭く光る。周囲を包み込んでいた霧が、僅かに薄くなったように見えた。振り回さなくとも、刀身自体に浄化の力があるのだろう。

「じいや！」

叫んだ渚の声は、僅かに震えていた。その言葉に、藤堂は燕尾服を着たロマンスグレーの紳士を想像した。そんなものが果たしてこの場で何の役に立つものかと思う。

しかし渚の札からずると這い出して来たものは、藤堂の想像したものとは似ても似つかなかった。明が驚愕に目を見開き、ゆなが顔をしかめる。コウは緊張した面持ちで、それを見ていた。

札から這い出してきたのは、確かに燕尾服を着たロマンスグレーの紳士だった。いや、僅かに透けているから霊なのだろう。

しかし彼が纏ったスーツの両袖は破れ、そこから筋肉隆々の腕が伸びている。胸板は鳩のそれのように隆起して分厚く、両足は明の腰ほどもありそうな程太かった。

これのどこがじいやだ。藤堂は言葉には出さず心中で突っ込んだが、明も同じように思ったらしく、強張った顔を引きつらせていた。これが相手では、流石の明も駄目かもしれない。

執事の鋭い双眸が、冷酷な光を放つ。はちきれんばかりに盛り上がった両足の筋肉が動くさまが、生地越しても明確に見て取れた。あれをどう倒せというのだろうと、藤堂は呆然とする。

今にも飛びかからんばかりの執事を見て、明は慌てて刀を構える。ヤケになっているのかも知れなかった。

「じいや、行きなさい」

明へ優雅に人差し指を向ける渚とは対照的に、執事の動きは素早かった。その大きな体からは想像も出来ない程の速さで詰め寄り、拳を振りかざす執事に、明はたまらずその場から飛び退く。藤堂は呆気にとられ、ぼかんと口を開けた。

振り上げられた大きな拳は明の足下へと突き刺さり、地面を穿った。衝撃で舞った土くれが明の視界を遮り、次の一手への反応を遅らせる。

土煙の中で目を凝らしていた明は、気付けば目の前に迫っていた拳を、咄嗟に刀の刃を横にして受け止めた。鋭い刃に阻まれた拳は大きく弾かれ、執事がよるめいて二三歩後退する。そのまま追撃するのは危ないと判断したのか、相手が後ろへ足を着いた際に、明は間合いの外へ逃げ出した。

「……なんで地面に穴空くの？」

呆然と二人を見つめていた藤堂が、ゆなに問い掛けた。霊は物体には触れられない筈だ。固唾を呑んで見守っていたゆなは、唐突に話しかけられて、一瞬身を竦める。

「あのおじいさんの霊は、実体化しているのです。悪霊を使役する方々を霊飼いと呼びますが、あれとはちょっと違うのです。高屋敷の人たちは、普通の霊を使役し、悪霊を退治するのです」

「何で実体化させんの？」

「反逆を防ぐためです。霊を実体化させれば、普通の包丁だろうがなんだろうが効きます」

藤堂に説明するゆなの目の前で、再び砂煙が舞った。明は姿勢を低くし、抜き身の刀を執事の足に向かって繰り出したが、刃が触れる寸前で避けられた。明は小さく舌打ちを漏らす。

「コウ君そいつ止めて！」

明の怒鳴り声に反応し、藤堂の背後から守護霊達が飛び出して行く。執事は目を丸くして、腕にしがみついた子供を振り払おうと足掻いたが、彼らはびくともしなかった。

執事に群がる子供等を見て、憎憎しげに唇を噛んでいた渚がふと顔を上げ、薄く笑みを浮かべた。

「そうは行きませんわ」

渚は再び胸ポケットから札を取り出し、目の前に掲げた。執事の頭を掴んでいたコウが弾かれたように顔を上げ、藤堂を見る。明とゆなの顔が、同時に青ざめた。

「封印」

弧を描いた桃色の唇が、短く発声する。瞬間、守護霊達が掃除機にでも吸い込まれるように、渚の札へと吸い寄せられて行く。

吸い寄せられた守護霊達は、札に触れた者から順にその姿を消して行った。最後に残ったコウが悲しげな表情で伸ばした手に向かって、藤堂は思わず腕を伸ばす。しかしコウも、そのまま札の中に吸い込まれた。

げ、と呟いた藤堂は、直後頭の中に響いた耳鳴りに、顔をしかめた。生霊に襲われた時と似た感覚だが、あちらより遙かに酷い。周りの音が聞こえなくなる程、ひどい耳鳴りだった。

「やめて！ お願い返して！」

明の悲痛な叫び声が木霊するが、藤堂の耳にはおぼろげにしか聞こえなかった。藤堂はその場に膝を着き、視界にノイズが走ったかのような、目眩にも似た感覚に耐えようとする。慌てて屈み込んだゆなが心配そうに覗き込む顔が、照明を落としたように暗い視界へ入った。

「低俗な男のくせに守護霊がいるなんて、生意気にも程がありますわ」

勝ち誇ったような渚の声が、どこか遠くで聞こえた。

第三章 向こうは見ない 七（前書き）

途中、多少グロ描写があるのでお気をつけ下さい。

まずいと思ったら読み飛ばして下さい。差し支えありません。
多分。

第三章 向こうは見ない 七

守護霊を封じた札を渚がしまい込むのを見て、明は彼女を睨み付けた。噛みつかんばかりの形相に、渚は一瞬たじろぐ。しかしすぐに取り繕って見下すような笑みを浮かべ、肩に掛かった髪を背中へ跳ね除けた。

「返して欲しくば、じいやを倒してご覧なさい」

執事を封じていた札を目の前に掲げ、渚は冷たく告げた。子供等に掴まれたせいで乱れた前髪を両手で後ろへ撫で付けてから、執事は再び明に向かって行く。明は齒噛みして肩を怒らせた。

「危ないって知ってるくせに、分からず屋！」

怒鳴った明は、繰り出された執事の蹴りをその場でターンして紙一重で避け、そのまま通り過ぎようとした巨体を振り向きざまに斬りつけた。執事の燕尾服が、中に着ていたシャツごと破れて逞しい背中が露わになり、大きく裂けた傷口から鮮血が滴り落ちる。執事の様子が、憤怒に歪んだ。

斬りつけた勢いで横に流した刃の向きを変え、明は体を反転させて更に執事の腹へ斬りかかる。般若のような形相の執事は高く飛び上がって刃を避け、降下しながら拳を握った。明の表情が俄かに凍り付く。刀を横一文字に構えて上空へ向けた刃を掲げ、防御の姿勢を取るが一瞬遅れ、勢いづいた拳が恐ろしい速さで顔面へ迫る。ゆながら悲鳴を上げた。

「く……っ」

明はすんでの所で頭を大きく傾け、拳を避けていた。衝撃で頬に一筋赤い線が走り、切れた髪が地面へ落ちる。傷口から頬を伝い落ちた血が制服の襟を汚したが、傷になど構っていられないとばかりに、明は着地した執事の追撃を刀で弾き飛ばした。

「靈飼いだかなんだか知らないけど、成仏出来る霊を悪戯に現世に留めて苦しめて、何が退治屋よ！」

「私だって、好きでじいやの霊を飼っている訳じゃないわ！」

その言葉に、明がはっと息を呑む。驚いた隙に執事の拳が飛んできたが、明は慌てて避けた。横をすり抜けて行った腕を上段から斬りつけようと刀を振り下ろすが、執事は身を屈めて迫り来る刃から逃れる。

繰り返される激しい攻防に目を奪われていたゆなは、隣でうずくまる藤堂を見て、小さく声を上げた。

「藤堂さん！」

その悲鳴は、藤堂の耳には届かなかった。色が抜けたように白くなった顔に苦悶の表情を浮かべ、藤堂は耳鳴りと頭痛に耐える。

高熱を出した時のように途切れる事のない悪寒と、耳元で何者かが囁く声。目を開いても闇しか映らず、耳鳴りのせいで何も聞こえない。背中に手を添えるゆなの掌の温度が、辛うじて伝わってくるお陰で、自我を保っていられるようなものだった。

閉じた瞼の裏に、何故か小洒落たバーが映る。カウンターの内側に設置されたバーラックにはボトルが並んでいたが、その全てが割れるか傾いているかのどちらかで、震災にでも遭ったかのように散らかっていた。壁際に並んだテールも、カウンターも閑散としており、床には割れたウイスキーのボトルやコップが転がって、水溜りを作っている。複数の人物の笑い声と共に、その床へ誰かが倒れこんだ。割れたガラスの破片がワイシャツの背に刺さり、所々から血が滲む。男の顔は赤紫色に腫れ上がり、額からは血が流れていた。視界の端から現れた柄の悪い男が、倒れこんだ男の腹を力いっぱい踏みつける。零れ落ちんばかりに目を見開いた男が、血混じりの吐瀉物を口から噴出した。嫌な笑い声と共に、踏みつけた男が舌打ちを漏らす。その足は吐き出された汚物で汚れていた。倒れた男がふらつきながら上半身を起こし、怯えた表情を浮かべる。下卑た笑い声が木霊し、腫れ上がった男の額を爪先で小突く。再び無様に床へ倒れた男の頭上に靴の踵が乗せられ、こつこつと確かめるように叩いた後、高々と足が掲げられた。

足が振り下ろされた瞬間、藤堂は冷や汗を流しながら目を見開いた。しかし真つ暗な視界には、何も映らない。背中に冷や水を入れられたかのように、ひどく寒い。あれは一体、何をしていたのだろうか。あの男は、どうなったのだろうか。

混乱した頭で考えながら、藤堂は朦朧とする意識を繋ぎ止める事に必死になっていた。そしてテレビの電源を入れた時のように、真つ暗であつた筈の視界に再び何か映る。

そこは古びたアパートの一室だつた。苛立つたような声は何事か喚いているが、あまりに早口の為、聞き取れない。室内にはゴミ袋や衣類が散乱し、そこかしこで蠅が飛び交っている。部屋の隅に見えた破れた襖へ、視界の端から現れた男が近付く。勢い良く開かれた襖の向こうは、和室になっていた。男が足を踏み入れると、畳が沈む。ぶよぶよとした畳は全体が黒ずんでおり、大量に湧いた蠅が煩い羽音を立てている。舌打ちの音が聞こえる。和室の梁には口ーブが二本、きつく結び付けられていた。そこにぶら下がった、力なく揺れる二人の男女。膨れ上がった顔には気がなく、眼球もない。虚ろに開いた眼窩からは蛆虫が這い出し、開かれた唇からは白い舌がだらりと垂れ下がっていた。上半身は骨と皮ばかりになっている。が、反対に、下半身には全身の水分が溜まって膨れ上がっている。ベルトを締めた男の腹は膨張し、今にも弾け飛んでしまいそうだつた。さも可笑しそうに笑う声が、蠅の羽音に満たされた室内に響き渡る。

視界が真つ暗に変わった。藤堂は頭を抱え、力なく首を左右に振る。何の冗談だ。藤堂は吐き気を催して、掌で口元を覆った。瞬間、声が聞こえる。

「藤堂さん！」

目を見開いた瞬間、視界が晴れた。光を取り戻した目に最初に映つたのは、不安げに覗き込んで来るゆなの、小さな顔。そして、真つ黒な靄。藤堂を囲むように立ち込める靄は、人の顔のように見えだが、しつかりと全貌を確認する事は出来なかつた。

「下腹に力入れて。狙ってるから、絶対動いちゃダメだよ」

藤堂を呼び戻したのは、明の声だった。顔を上げて見た先で、彼女は顔をしかめている。執事は所々傷を負っているが、顔色一つ変えてはいなかった。

とてつもなく長い時間、意識が飛んでいたように感じる。しかし実際は、違ったのだろう。明にも執事にも少々疲労が見られるものの、状況が大きく変わっているような様子はない。

「ゆなちゃん、声かけててあげて」
「わかりました」

ゆつくりと肩の力を抜いた明が、執事と睨み合う。二人の纏う空気は、見ている方が冷や汗を流すほど緊張していた。両者とも微動だにしないまま、相手の出方を窺っている。

敷地の外から、バイクの音が近付いてくる。

刀を両手に持ち替えた明が、執事に向かって駆け出す。傷だらけの執事はしかし最初と変わらぬ速度で、明に飛び掛った。

瞬間、バイクが敷地内へ飛び込んで来た。フルフェイスのヘルメットを被った人物が、ブレーキをかける間もなくバイクから飛び降りて二人に駆け寄り、進路を塞ぐように間に立った。乗り捨てられたバイクが横転して地面を滑った先の塀に当たり、凄まじい音を立てる。あれは壊れただろうと、藤堂は混乱した頭でそう考える。

明も執事も、突然の介入者を見て驚愕に目を見開いたが、一度付いた勢いは止まらない。両側から迫る拳と刃に慌てる事もなく、割り込んだ人物は両側に掌を翳した。

「きゃ！」

当たると、藤堂がそう思った瞬間だった。刀を黒い革手袋を嵌めた手に弾かれ、悲鳴と共に明がよろける。あの刀は生身を切れないのだろうか。

一方執事の方は、勢いづいた拳を翳された薄い掌にいとも簡単に止められ、目を丸くしていた。長い指が落ち着かせようとすることに、執事の拳を軽く叩く。

大人しくなつた執事の拳からゆっくりと手を離した介入者は、おもむろにヘルメットへ手を掛ける。するりと外されたその中から零れ落ちたのは、長い銀色の髪。そしてこれまで何度も見た、凜とした美貌。

すらりとした長身の背中を覆う銀髪に、凛々しくつり上がった眉。瞳の色の薄い切れ長の目と、すつと通つた鼻筋。余程慌てていたのだらう、抜けるように白い細面は、僅かに上気している。

レザーのライダースーツを纏つた体の見事な曲線美に、藤堂は思わず生唾を呑んだ。豊かな胸とは対照的に、腰は大きくくびれて引き締まつている。尻は少々硬そうだが、そこから伸びる足は細すぎず太すぎず、上半身とのバランスを保っていた。しかし出来れば胸元はもう少し開けて欲しいものだと、藤堂は場違いな事を考える。

脱いだヘルメットを小脇に抱え、白銀は小さく息を吐いた。刀を持ったまま、明が呆然と彼女を見上げる。

白銀は地面にうづくまる藤堂を見て目を丸くした後、勢いよく渚を振り返つた。

「何を遊んでいるんだ高屋敷！」

女にしては低めの声に怒鳴られた瞬間、渚の肩がびくりと震えた。鋭い双眸に睨まれた彼女は、視線を宙にさまよわせ、深く俯く。

「さつさとその人に守護霊を返せ！ 何の為に守護霊が存在するのか、退治屋のお前が知らない訳ではないだらう！」

「す、すみません白銀さん……今すぐ」

白銀に凄まれた渚は慌てて胸ポケットから札を取り出し、戻りなさい、と囁いた。次から次へと這い出して来る子供等は、一斉に藤堂の元へ戻つて行く。藤堂の周囲を覆っていた黒い靄がかき消え、耳鳴りも寒気も、嘘のように収まつた。

安堵の息を吐いた白銀はゆっくりと藤堂に歩み寄り、屈んでその顔を覗き込んだ。心配そうに眉を下げるその顔は、先ほど渚を怒鳴りつけたのと同じ女のものとは、到底思えない。

「大丈夫か？」

反射的に頷いた藤堂の目は、相変わらず彼女の胸を見ていた。しかしその視線に気付いたのは、傍で見ていたゆなだけだったようだ。彼女はどこか不満げに、唇を尖らせる。

「ヤなモン見たけど、問題ない」

「それなら、良かった」

白銀は大きく頷いて立ち上がり、再び渚へ視線を向けた。渚の表情が強張る。

「もうすぐ独立するからと張り切るのはいいが、私はここへは来るなど言つた筈だ。お前一人でどうにかなると思つたのか？」

険しい表情を浮かべる白銀を見て、渚は俯いて唇を噛んだ。執事は心配そうに、事の成り行きを見守っている。霸王のような風体だが、ちゃんとお嬢様を心配しているらしい。それなら何故渚の暴拳を止めなかつたのだろうと、藤堂は思う。

明は相変わらず、白銀に熱い視線を送っていた。大人しくしてきてくれと、藤堂は切に願う。この張り詰めた空気の中、余計な事を言つたら恥をかくのは明だ。

「己の力量を過信するな。お前は確かにいい退治屋だが、それでも無謀すぎる」

「はい……済みません」

白銀を前にしおらしくなった渚に、藤堂は意外そうに眉を上げた。姉に叱られる妹のようだ。退治屋なら誰でも懂れるという明の言葉は、強ち嘘でもなかつたのだろう。

藤堂はふと洋館を見上げて、首を捻った。先ほどの光景は一体、何だったのだろうか。あれほど気味の悪い夢など見た事がない。夢だったのかさえ分からないが、少なくとも、二度と見たくない類のものではあつた。

「しかしまさか、こんな所にあつたとはな……近くにありすぎて、分からなんだ」

呟く白銀に気のない視線を向け、藤堂は億劫そうに立ち上がった。隣のゆなは、未だにしゃがみ込んでいる。

「灯台下暗しってヤツ？　なあ、あんた。ここどうにかなんねえのか」

藤堂を見た白銀の表情が曇った。

「無理だな。私一人では、どうにもならん。すぐに来られれば良かったんだが、少々社内がごたごたして置いてな」

「そんな……白銀様でも無理だなんて」

肩を落として呟いた明を見て、白銀は一瞬表情を強張らせた。ついこの間、暴走した彼女に困らされた事を思い出したのだろう。人氣者も大変だと、藤堂はぼんやりと考える。

「と、とにかく今は、うちの陰陽師が封だけ施す。準備が整ったら、後日改めて……」

身を守るようにヘルメットを抱き締め、どもりながら白銀が言った瞬間、けたたましい笑い声が木霊した。全員の視線が声のした方へ向き、げ、と呟いた藤堂がその場から離れる。

「封印されちゃ、困るんだよ」

ゆらりと立ち上がったゆなが、彼女のものとは思えないような低い声で、楽しそうに言った。

第三章 向こうは見ない 八

ゆなが、憑かれた。ずっと明が彼女に付ききりで、霊媒師としての勉強をさせていたというのに。それを全て否定されてしまったような、絶望的な心境だった。

彼女は今、本来なら有り得ないような、嫌な笑みを浮かべている。そもそもゆなは元々表情の変化に乏しいので、憑かれればすぐに分かる。判別しやすくいいといえはそうなのだが、その分周囲の動揺も激しくなる。否、良くはない。

その場にいた全員が一様にして、呆然とゆなを見つめていたが、一番動揺したのは明だったろう。藤堂とて、信じたくなかった。あれほど毎日、懇切丁寧に様々なことを教えていたというのに。直接関わっていたわけではないが、藤堂自身、ゆな本人の熱心さを思うと、目の前の光景が信じられなかった。

ゆなの小さな唇は酷薄な笑みを浮かべているが、目が笑っていない。どう見ても、ゆなが浮かべるような表情ではなかった。彼女の両親から、依頼を請けた時と同じだ。

「な……ゆなちゃん！ どうして……」
悲しげな声だった。明は刀を握り締めたまま、悲痛な面持ちでゆなを真っ直ぐに見つめる。

「優しい子だなあ。話がしたいって言ったら、素直に入れてくれたぜ。話なんて、ありやしねえってのにな」

ゆなに憑いた者は、再び笑い声を上げる。聞き覚えのある声だと、藤堂は訝しげに首を捻った。さも愉快そうな笑い声に、白銀が顔をしかめる。

「下衆が」

細い眉を限界までつり上げて、白銀はゆなを睨んだ。短く吐き捨てられた罵声を聞くと、ゆなは下から上目遣いに彼女を見上げ、更に口角を上げた。

「あんたら退治屋だな。余計な事しない方がいいぜ、ここの主はお前らが思ってる程甘かねえ」

明は呆然と立ち尽くし、渚が悔しげに歯噛みする。今の今まで敵対していたものの、目の前で憑かれたとあつては、退治屋である渚も悔しいだろう。

ゆなはふと藤堂を見て、にやり、と笑った。

「あんた、見たろう」

白昼夢が、フラッシュバックした。苦しげに歪む男の顔に、下卑た笑い声。死体の顔にぽっかりと開いた二つの虚と、飛び交う蠅の耳障りな羽音。藤堂は思わず、吐き気を堪えるように掌で口元を覆って顔をしかめ、ゆなから目を逸らす。この声は、あの光景の中で聞いた声だったのだ。

明がはっとして、俯かせていた顔を上げた。そして青ざめた藤堂をまじまじと見た後、苦々しく表情を歪める。藤堂に何が起きたのか、彼女は気付いたのだろうか。

明はゆっくりとゆなに歩み寄り、刀の切っ先を彼女に突きつけた。ゆなは微動だにせず、嫌な笑みを浮かべている。

「コウ君、引つ張り出して」

藤堂の背後から、小さな守護霊達が飛んでいく。しかしゆなは相変わらず嫌な笑みを浮かべたまま、その場から逃げようともしなかつた。

小さな唇が、おもむろに窄められる。胸いっぱい息を吸い込み、体内で留めた。

明が怪訝に片眉を顰めた瞬間、子供らへ向かって吹きかけられたものは、息ではなかった。藤堂の周りに漂っていたものとよく似た、どす黒い靄。それは瞬く間に、子供等の周囲を覆って行く。

幼い悲鳴が、遠くに聞こえた。

「な、またなの……」

子供達は、黒い靄に阻まれて身動きが取れなくなっていた。明が呆然と呟くと、ゆなが笑う。渚が苦々しく舌打ちした。

「じいや、あれを捕まえなさい！」

頷いた執事が、渚の横から飛び出してゆなに掴みかかる。しかし彼女は腕をすり抜け、軽やかに飛び上がった。人間業とは思えない跳躍は、霊の力のせいなのだろうか。

守護霊を失った藤堂は再び、目眩に襲われた。一体これは何なのだろうと思う。しかし先ほどのように、光景が瞼の裏に浮かぶ事はなく、代わりに強い悔恨の念が頭の中に流れ込んできた。

悔やみ、悩み、苦悶する。深い悲しみと、自責の念。やがて映像ではなく画像として脳裏に浮かんだ、深い後悔の念に駆られては、それを誤魔化すように酒を呷る男の姿。藤堂には彼が何を悔やんでいるのか、分かったような気がした。

執事は鋭い目を更に細くして、ゆなを睨んだ。跳躍した彼女が降下するのを見計らって手を伸ばすが、ゆなはその手を踏み台にして更に高く跳ぶ。小ばかにするようなその動きに、執事の顔に怒りの色が浮かんだ。

執事の顔色を見て、険しい表情で事の次第を見守っていた白銀が、ようやく動いた。ヘルメットを地面に置いてから渚の肩に手を添え、執事の手から逃げ回るゆなを真っ直ぐに見据える。

「やめさせる。お前の執事では、あの子を傷付ける」

渚は素直に頷いて、執事に向かって制止するように掌を翳した。

執事は主人を振り返って困惑した表情を浮かべた後、ゆなを見て体の力を抜く。藤堂の目には、溜息を吐いたように見えた。

着地したゆなは、ゆっくりとした足取りで近付いて来る白銀を見て、僅かに眉を曇らせた。そして大きく息を吸い込み、黒い靄を吐き出す。長い足が、地を蹴った。

「この主は確かに凄いだろうがな、お前自身はどうだ？」

横へ飛び退いて靄を避けた白銀はそう言いながら、ゆなに向かって腕を伸ばす。忌々しげに舌打ちしたゆなはその手を避けて跳躍し、再び黒煙を吐き出した。腕を伸ばした白銀が、すぐさま手刀でそれを切り裂く。裂かれて拡散した靄はそのまま、かき消えた。

驚愕に目を見開いたゆなは降下しながら、白銀に向かって蹴りを繰り返した。傍目にはかなりの速さのように思われたが、白銀は軽々と避け、再び腕を伸ばす。指先が足に触れた所で、ゆなはその手を思い切り蹴り上げた。

「甘いな」

指先を蹴られたにも関わらず、白銀は眉ひとつ動かさずに呟いた。形の良い唇が、緩やかな弧を描いている。

甲高い叫び声を上げたのは、ゆなの方だった。地面に倒れこんで爪先を押さえ、その場を転げまわる。苦しんでいるのは中にいる悪霊の方とはいえ、藤堂にはその姿が痛々しく見えた。

やがてゆなの両手が、己の首に回される。大きく開いた口からは黒い靄が吐き出されて行くが、先ほどまでのものと違い、次々と出て来ては徐々に形を成して行った。

同時に、子供らを覆っていた靄が消える。守護霊達は慌てた様子で、藤堂の下へ戻った。藤堂も彼らも、結局今回は何もしていなかった。

「除霊も退治屋の仕事の内だ」

白銀は、指を揃えた掌を黒い塊の上に振りかざした。額を押さえていた藤堂が、はっとして身を乗り出す。

「やめろ！」

振り下ろされかけていた白銀の手が、ぴたりと止まった。同時に、驚いた三人の目が藤堂に向けられる。またこれだと、藤堂は困ったように顎を掻いた。どう説明したらいいのか、自分でもよく判らない。

「見たんだね、藤堂さん」

明の問いに、藤堂は曖昧に頷いた。見たのかと聞かれても、あれが何なのか藤堂には分からない。分からないがあれが真実だとするなら、このまま抹消させるにはあまりに哀れな気がした。

真つ直ぐに己を見つめる三人の視線に、藤堂は何もない虚空を見上げた。ああ、とぼやく。

「あのなあ、そいつ多分、借金取りだったんだな」

渚が不思議そうに首を捻る。白銀は合点が行ったようで、体ごと藤堂を向いた。

「あなたは精神感應者だったのか」

「何ソレ」

「サイコメトリーだ。霊の記憶を見る一種の超能力だが、近付くだけで全てを見てしまうから、精神に異常を来たす者が多いと聞く。それで守護霊がいたのか」

藤堂は軽く肩を竦めた。それでいたのかと言われても、藤堂にはよく分からない。

「さあ？ まあ、色々やってみてえだな……思い出したくねえけど。おいお前、笑ってたな」

黒い塊は、男の顔を形作っていた。ぼんやりとしか見えないが、その表情はどこか悲しそうに歪んでいる。

霊体が靄の形を取っていたのは、彼の心に澱が溜まっていたせいなのだろう。悩み苦しみ、激しく悔やんだからこそ、彼は悪霊となってしまうたのだろう。

「イヤだったから、笑ったんだろ。自分がしてる事が罪だって、ちゃんと分かってたんだろ。泣けも怒れもしねえ、仲間誤魔化すにはそりゃ笑うしかねえもんな」

男の顔は、何も答えなかった。殆どの霊は口が利けないというから、当然かも知れない。

静かな藤堂の声を聞く渚の表情が、戸惑ったようなものへ変わっていた。藤堂は静寂を破るように、更に続ける。

「罪を悔い改めはしたが、後悔するあまり、そうやって悪霊になっちまったんだろ。違うか」

そこまで言って、藤堂は明を見た。その意を察したようで、明は小さく頷く。

「業が深すぎて、悪霊になったんだね。話がしたかったのは、本心だったんだ」

「後悔して苦しんだなら、もういいだろ」

明が男の顔に歩み寄ると、白銀がその場から離れた。悲愴な表情を湛えたまま、男は何も言わない。明の刀の切っ先が突きつけられ、逃げようとはしなかった。

「あの世では、後悔しないようにね」

銀色に輝く刃が、男の額に埋められて行く。何の抵抗もなく進む切っ先が深く突き刺さって行くにつれ、男は目を閉じて行き、霧は徐々に白く変わる。

やがて先端が頭部の反対側へ突き抜け、男の目が完全に閉じられる。眠るように安らかな表情を浮かべた男の顔は、空気に拡散して消えた。

男の顔が穏やかな表情で消え失せるのを見届けた白銀が、口元に微かな笑みを浮かべる。いつの間にか起き上がったのか、ゆなが目を閉じて手を合わせていた。

呆然と浄霊の様子を眺めていた渚が、力が抜けたようによろめく隣に控えていた執事が、咄嗟に片手で主人を支えた。

「あんな風に、浄霊するのね」

ぼつりと呟いた渚に、全員の視線が集まった。明が鞘に刀をしまいながら、体ごと彼女へ向き直る。

「私、存じませんでしたの。浄霊も退治も、そう変わらないと思っていたわ……退治屋のことしか、勉強して来なかったから」

ゆなと白銀が、顔を見合わせた。知らなかったのか、とでも言いたげな表情だ。浄霊という言葉さえ知らなかった藤堂からすれば、知らなくても無理はないと思えてしまうのだが。

「浄霊っていうのは、罪を浄化して成仏させる事だよ」

暫くそのまま呆然としていた渚は、ゆっくりと執事の腕から離れ、明に歩み寄った。少し背の高い彼女と、明は僅かに顔を上げて視線を合わせる。

「あんな安らかな顔で消える霊は、初めて見ましたわ。浄霊というのは、こういう事でしたのね」

渚は腹の前で指先を組み、明に向かって優美な仕草で頭を下げた。明が目丸くしたが、藤堂はそれ以上に驚いた。

「私を浄霊屋にして下さいませ」

え、と明が小さく呟く。執事が慌てて渚に近付き、眉間に皺を寄せた。何も言わないところを見ると、口は利けないようだ。

渚はゆっくりと顔を上げ、戸惑う明と再び向き合う。真っ直ぐな目だった。

「私はこういう家に生まれましたから、霊を悪戯に苦しめるようなやり方しか出来ませんの」

ちらりと執事に視線を遣り、渚は躊躇いがちに微笑した。執事が困ったような顔をする。

「このやり方は変えられませんし、上の許しがなければ、じいやを解放してあげる事も出来ません。ですからせめて、浄霊屋としてやって行きたいの」

「それは……いいけど……」

真摯な渚の態度に戸惑いながら、明は言い淀んで視線を彷徨わせる。ちらりと見たのは、執事の顔。

「あなた、家には何も言われない？」

「あら、何も言わせませんわ。ねえ、じいや？」

自信に満ちた笑みを向けられた執事は、大様に頷いた。そして明と向き合い、ほぼ直角に近い角度まで腰を折る。粗野な外見だがやはり執事らしく、その仕草はやけに様になっていた。

明は頷いて、藤堂を見た。ゆなも期待に満ちた目で、藤堂を見上げている。またこの選択かと、彼は溜息を吐いた。しかし嫌な気はしない。

「まあ、人数増えて悪いこたないんじゃない？」

口元に笑みを浮かべた藤堂を見て、渚はさつと顔を赤らめて視線を逸らした。そんな彼女に気付いたのかそうではなかったのか、明が満面の笑みで、掌を差し出す。二人はそのまま、長く握手を交わしていた。

渚を微笑ましく見守っていた白銀が、ふと表情を消して門扉を振り返った。車の音が近付いて来る。

「来たな。いいタイミングだ」

呟いて、白銀は訝しげな面々に向き直る。

「うちの者が来たようだ。封を施すので、済まんが敷地の外へ出てくれないか。……高屋敷」

呼ばれて、渚は姿勢を正す。白銀は優しげな微笑を浮かべた。

「頑張れよ」

労いの言葉に、渚は目を丸くした後、はにかんだような笑みを見せた。

第三章 向こうは見ない 九

鳳が幽霊屋敷に屯す霊を一時的に封じた、翌々日の朝。藤堂の店へ、上機嫌な鹿倉が訪ねて来た。開店準備をしていた藤堂は面倒臭そうに突っぱねたが、鹿倉が礼をしたいと言って引き下がらなかった。結局店内に入れた。

カウンターへ向かい合わせに腰を下ろして早々、鹿倉は両手をついて、額をぶつけんばかりの勢いで頭を下げた。藤堂は煙草に火を点けながら、怪訝に眉を顰める。

「何よ」

顔を上げた鹿倉は、熊のような顔に満面の笑みを浮かべていた。

藤堂は更に訝る。

「お前らがやってくれたんだってな」

「は？」

藤堂は間の抜けた声で問い返ししながら、首を突き出した。唐突に何を言い出すのかと思えば、何の事やらさっぱり分からない。

何をしたかと問わずとも、鹿倉が幽霊屋敷の事を言っているのは分かる。しかし、身に覚えがない。

確かに屋敷には行ったが、藤堂達は何もしていない。無謀に突っ込もうとした渚を勝手に止めに行つて、成り行きで筋肉達磨の執事と格闘しただけだ。全く鹿倉の役には立っていない。

拳げ句、ゆなが憑かれたから屋敷に集まった悪霊の内の、たった一人を浄化しただけに過ぎない。更に屋敷の霊を封じたのは鳳だし、それも結局、根本的な解決には至っていない。

「一昨日鳳のおねーちゃんが来てな、お前らがなんとかしたからって聞いたぞ」

「俺ら何もしてないけど。応急処置したの鳳だし」

「またまた謙遜すんなんて。そうそうこれ、半分鳳に渡したから、少ねえけど貰ってくれ」

鹿倉が尻ポケットから取り出した封筒は、藤堂の目にはかなりの厚さがあるように見えた。困り果てて更に眉根を寄せ、藤堂は身を引く。

「いやだから何もしてな……」

「いーからいーから！ 取っときなさいよ、な！ どうせ俺の金じやねえし」

胸に叩き付けられた封筒を衝撃でむせながら渋々受け取り、藤堂は困ったように頭を掻いた。罪悪感はあるが、封筒の厚みには勝てない。

何より、鹿倉は金を突っ返した所で易々と受け取ったりはしないのだ。こういう時は絶対に引き下がないのが鹿倉という男で、いつも簡単に引いてしまうのが藤堂だ。

藤堂らが騒動を収めたと本当に勘違いしているのか、無駄足を踏ませた事を申し訳なく思っているのか、定かではない。どちらにせよ鹿倉は嬉しそうなので、まあいいか、と藤堂は思う。

「確かに応急処置だとは言われたが、徐々に清々しい気分だよ。依頼して良かったわ」

鹿倉が何年あの辺りに住んでいるのか、藤堂は知らない。けれどこの表情を見る限り、そう短い年月ではないのだろう。あの屋敷に悪霊が溜まるようになったのは数年前だというのが、一年二年という話ではないはずだ。

あんな陰気な街には、藤堂なら一年といられない。鹿倉には妻も子もいるし、あそこには小さいながら、彼の事務所がある。易々と街を離れる訳には行かなかったのだろう。鹿倉など、昔は少しでも嫌な事があると怒り出すような、堪え性のない子供だった。人とは変わるものだと、藤堂は不思議な気分になる。

あの頃の友人は、皆変わった。内気でいつもびくびくと何かに怯えていた少年がプロボクサーになり、不良ぶって教師を困らせていた少年は、弁護士になった。殆ど連絡を取り合っていないが、それくらいの話は風に乗って伝わってくる。

今は丸くなつた鹿倉も、昔は弟や後輩を泣かせてばかりいた。責任感の欠片もなく、学校で出された宿題など、一度たりともやった例がない。それが今では一児の親となり、息子を目に入れても痛くないほど可愛がつている。社長という常に責任を問われる立場にあり、あだ名で呼ばれるほど部下に懐かれ、信頼されている。

昔の姿からは到底、想像も出来ないことだった。鹿倉のこういつた姿を見る度に、人とは成長するものなのだと感慨深く思う。

一方自分は、何か変わっただろうか。嬉しそうに近況を語る鹿倉の話に斜め聞きしながら、藤堂はそう考える。

この流されやすい性分は、全く変わっていない。何事に対しても斜に構えていた辺りは、少々改善されたかも知れない。昔より更に流され易くなつただけかも知れないが。

悪い所がなかったのだといえば、そうなのだろう。しかし昔から真人間だったかといえ、それでもない。無論今も、真面目な性分とは到底言えない。変わったのは彼を取り巻く環境と、年齢ぐらいのものだ。

変化を恐れている訳ではない。その分変わらない自分を情けなくも思うが、嬉しそうな鹿倉を見てなんとなく、藤堂も嬉しくなる。昔は誰かが嬉しそうにしているもなんとも思わなかったから、これもまた、成長と呼べるだろう。他と比べると、些細な変化ではあるが。

「まあ、その内鳳の奴らが、ぱーっと一掃してくれんじゃねえの。

一先ずは、良かったな」

おう、と言って、鹿倉は不揃いな歯並びを見せて笑った。藤堂もつられて笑みを浮かべる。

「あ、鹿倉さん」

耳慣れた明の声が聞こえたので顔を上げると、駆け寄ってくるゆなが目に入った。ゆなは慢性的に不足している霊媒師になるべくして明の下で勉強している為、学校からは半日での帰宅を許されている。修行しないと危ないから、という理由もあるようだ。

それでも毎日、ゆなが事務所に来る頃には一時を回っている。単純計算、店を開けてから二時間は経っている事になるだろう。そんなに長く雑談していたのかと、藤堂は少々驚いた。

ゆなは真つ直ぐにカウンターのの中へ入って藤堂の腕にしがみついた後、鹿倉を見上げて小さく挨拶の言葉を口にした。鹿倉の表情が、だらしなく弛緩する。この男が授かったのが男の子で良かったと、藤堂は心の底から思う。

「もう、大丈夫なんですか？」

鹿倉はカウンターの中へ入って腰を下ろした明を見て、大きく頷いた。髭をたつぷりと蓄えた顔が、にやけている。これさえなければと、藤堂はつくづく思う。

「良かった。藤堂さん、渚さん今日から来るって」

渚本人から聞いた話では、彼女は二十歳の誕生日を迎えたばかりで、独立の準備をしていたそうだ。しかし彼女は元々、善良な霊を札に封じて使役する高屋敷の在り方に疑問を抱いており、退治屋を開業する事にも、抵抗があったのだと言う。執事を解放したいと言っていたのも、本来なら成仏出来る筈の彼を、現世に引き留めている事を忍びなく思っていた為だ。

その矢先に浄霊の場面を見たものだから、これだ、と思ってしまう。つたらしい。彷徨える悪霊を浄霊する事が、執事への贖罪になると考えたのかも知れない。

浅い考えだと藤堂は思ったが、そう考えられるだけ、今まで出会った高屋敷家の誰より遥かにいい人だと明は言った。高屋敷の人とというのは、一体どういう人間なのだろう。

「案外早かったな」

引越しの準備があるというから、もう少し長くかかると思っていた。藤堂が呟くと何に反応したのか、鹿倉が凄まじい形相でカウンターへ身を乗り出す。眼前に迫ったむさ苦しい顔を見て、藤堂は反射的に身を引いた。

「まアた女の子かてめえ」

地獄に落ちた人間が天国の様子を見て発しているような、恨めしげな声だった。藤堂は片眉を上げ、間拔けな声で聞き返す。

「は？ 違……いや、そうだけど」

「ふざけんなよおお！」

語尾の方は、殆ど涙声だった。藤堂はその大声と剣幕に、思わず椅子を引く。背もたれが壁に当たって、ごつんと音がした。

「今度は何だ小学生か？ なんだよお前ばかりいい目見やがって、ちよつとは俺に分けるよ少女分をよ」

鹿倉の表情は真剣そのものだったが、明と藤堂は引いていた。ゆなは前回と同じく、冷めた目で彼を見ている。

「別に好きで女増やした訳じゃないから。つつか少女分てなんだよ、何その日本語」

「うるせーこの野郎！ お前って奴ア昔っからそうだったよ匡、一回だけ合コンした時だって皆お前狙いだったじゃねえかミステリアスでいいとか言っちゃってよオ畜生女つてやつア！」

息継ぎなしで言い切った鹿倉は、流石に苦しかったのか、肩で息をしていた。一体何年前の話を持ち出して来るのかと、藤堂は呆れる。そもそも彼にそんな記憶はない。

冷めた無言の間の後、藤堂の傍らで黙って聞いていたゆなが、徐々に口を開いた。

「それは聞き捨てなりません。藤堂さんはゆなにだけもてていれば良いのです」

両手を藤堂の腕に絡めて見下ろしてくるゆなは、相変わらず無表情だった。それが余計に怖い。

「過去の栄光だろ。お前はいい加減諦めろ」

額がぶつかる程の距離まで顔を近づけ、ゆなは藤堂の腕を引っ張る。藤堂は嫌そうに顔をしかめて顎を引いた。

「それはなりません。想いは必ず成就するのです」

「させねえぞ俺のメンツにかけて」

「どんな面子よ」

呆れた声で突っ込んだ明が、ふと上体を傾けて鹿倉の向こう側へ視線を移す。藤堂の位置からは鹿倉のずんぐりとした図体が邪魔で見えないが、誰か来たのだろう。

「ごきげんよう、皆さん」

涼やかな声を聞いて、鹿倉が反射的に振り返った。そして硬直する。

「こんにちは。早かったんだね」

鹿倉の向こうから顔を出す明に、渚は目を細めて微笑んで見せた。丸襟のブラウスに黒のコルセット、同じく黒いフレアスカートを合わせた彼女の出で立ちは、良家の子女を思わせる。実際そうなのだが。

「荷造りから業者を頼みましたから、直ぐに終わりましたわ。……その方は？」

腹の前で両腕を組んだ渚は、鹿倉を見て怪訝に問い掛けた。鹿倉はゆっくりと藤堂に向き直り、恨みの籠もった視線を向ける。藤堂は一瞬怯んだ。

「どういうこつたてめえ！ 素晴らしいスレンダーボディじゃ」

「黙ってるタヌキ」

藤堂は勢い込んで声を荒げた鹿倉の頭を鷲掴み、カウンターに叩き付けた。ようやくまともに姿が見えるようになった渚の表情が、明らかに引きつっている。

「よっ」

言っに事欠いた藤堂は、鹿倉の額をカウンターに押し付けたまま、軽い調子で声を掛けた。明は呆れた目で鹿倉を見ている。伸びた彼の頭を、ゆなが人差し指でつついた。

藤堂の顔を見て暫く固まっていた渚は、フンと鼻を鳴らして顔を背けた。逸らした先に陳列された商品が目に入り、今気付いたかのように、キャビネットへ近付く。

「本当に質屋でしたのね。エルメスのバーキンじゃない、普通のお店ではなかなか売ってませんわ」

ガラスに指先をついて、渚は感嘆の息を漏らす。キャビネットを拭いておいて良かったと、藤堂は内心安堵する。

「メーカーがマニア向けに細々復刻版出してんのが、こっちに流れ来んだよ。そうやって見る奴は多いが、値段が値段だからさっぱり売れねえ」

「あら……そうなの」

振り向いた渚は、意外そうな顔をしていた。明が笑う。

「藤堂さん貧乏だもんね」

「うるせえよ」

「……私が買って差し上げて宜しくてよ」

非難の目を明に向けていた藤堂は、驚いて渚へ視線を移した。本気かと訝しんでまじまじと見ている内、彼女の頬が段々と紅潮して行く。

「べ、別にあなたの為じゃありませんわ！ 私が欲しいから買うだけよ！」

「いや、そんな事言っていないけど。どれ？」

藤堂が立ち上がると、ゆなは掴んでいた腕を放した。カウンターの外へ出てキャビネットを開け、藤堂は俯いた渚が指したバッグに手を伸ばす。

藤堂を見上げる渚の惚けたような表情をじっと見つめていたゆなは、唇だけでにやりと笑った。

「相手にとって不足なし、です」

明は虚を突かれたような表情でゆなを見た後、赤面する渚を見て、鹿倉の様子を確認する。それから渚に商品を差し出す藤堂を見て、憂鬱な溜息を吐いた。

父が死んだ。その死因は老衰でもなければ、病死でもない。

他殺である。殺されたのだ。危うい状況にあるのは知っていたが、まさかここまでとは、彼女自身思ってもみなかった。忙しさにかまけて、何一つ手を打たなかった自分の落ち度だ。自分一人が何がしかの行動に出た所でどうにもならない事も知っていたが、そう思わずにいらなかった。

この目で見たにも関わらず、父が死んだという、その事実が信じられなかった。仕事を終えて帰宅してみたら、数多の霊に囲まれて父は息を引き取っていた。否、その時にはまだ、息があった。父は逃れようと懸命に腕を伸ばしていたが、呆然と立ち尽くす彼女に気付くと、今まさに己を喰らわんとする者に、文字通り魂を引き裂かれながら、最後の力を振り絞って逃げると言った。そして握り締めていた位牌を彼女の方へ滑らせ、事切れた。

その声を聞いて霊飼い共が飛び出して来た時、彼女は逃げた。母の位牌を拾い上げ、脇目も振らず逃げた。逃げてしまった。あの数の悪霊相手に何か出来ると思える程、彼女は愚かではなかったし、一矢でも報いたとして、死んだ者は戻らない。

彼女を産んですぐに母が死んでから、父は男手一つで彼女を育てた。二十歳の誕生日には飲みに行こうと誘われたが、父は無言で、ひたすら杯を重ねるばかりだった。流石に酩酊して前後不覚になつた父に肩を貸しながらの帰路で、彼はようやく、お前は母さんにそっくりだと呟いた。そんな不器用な父が、好きだった。

何故、自分は追われているのだろうか。いずれこうなるのではないかという懸念はいつでも胸の内にあつたが、まさかここまでとは、考えてもみなかった。考え得るところか、予想だにしなかった最悪の事態だ。彼らにとって自分は確かに、邪魔なだけの存在だったろう。しかしまさか、殺意まで向けられるとは。

飛び出してしまふのではないかと不安に思う程、強く打ち続ける心臓が痛い。忙しく酸素を取り込む肺が、悲鳴を上げる。込み上げる涙を堪えているせいか、喉が焼け付くように熱い。泣くのを堪えてまで走らなければならぬこの状況に、無性に腹が立った。

路地へ入り、背後を振り返って追っ手を確認する。まだ姿は見えない。逃れるように薄暗い裏道へ入ってようやく、彼女は深く息を吐いた。

心臓が、早鐘のように打っている。体力はある方なのだが、これほど走ったのは久々だったせいか、足が痺れたように痛む。己の荒い呼吸音だけが、耳障りな程響いている。静まり返った夜の闇に包まれていると、五感の全てが研ぎ澄まされて行くような、不気味な感覚を抱く。

これは恐怖なのだと思いついた瞬間、背筋を悪寒が這い上がった。手にしたままの位牌を握り締め、彼女は呼吸を整えようと何度も深呼吸を繰り返す。けれど一度恐怖を覚えてしまうと、駄目だった。胸を叩く鼓動につられるように、上がった息は更に荒くなって行く。怖いものなど、ないと思っていた。初めて感じる死への恐怖に総毛立ち、息を殺しながら身を竦ませる。

死は恐ろしい。そんな当たり前の事さえ、忘れてしまっていた。騒がしい足音が近付いて来るのが分かった。よもやここまでかと考えた時、脳裏を男の顔がよぎる。自嘲気味に笑みを浮かべ、彼女は静かに目を閉じた。

終わりになき連鎖 一

「有り得なくない、毎晩毎晩夢枕に誰か立つのよ！ ホント気持ち悪い！」

ヒステリックに叫んだ女は、やけに細い眉をつり上げて店主の方へ身乗り出した。近付いて見た彼女の金髪は、可哀相に思えるほど傷んでいる。香水の強い匂いが、店主の顔をしかめさせた。

藤堂匡は濃い眉を下げて、呆れた表情で依頼人の話を聞いていた。話というよりは、殆ど愚痴だ。何をしにここへ来たのかと訝つてしまうが、依頼人、小磯里佳はこいそりかどうも、家に出るようになった靈をなんとかして欲しいようだ。

「あたし靈感弱いから何言ってるかわかんないし、ホントムカつく！」

里佳は再び苛立ったように叫んで、カウンターを掌で叩いた。朝早くに訪れて来てから、ずっとこの調子だ。勝手に話を進められる事には慣れている藤堂も、流石に閉口する。

藤堂は本来、質屋の店主だ。精悍な顔付きの割に常にどこか気だるげな佇まいの、凡そ客商売には向かない男だが、つい二ヶ月ほど前、新たな商売を始めた。最近では本業の質屋よりそちらの方が軌道に乗ってしまっているから、本人の心境としては複雑だ。

「アレ絶対、こないだあたしの事ずっと見てた浮遊靈だし！ ウザいから早く退治しちやってよ！」

この間と言われても、藤堂は知らない。目に落ち掛かる前髪をかき上げて、うんざりと溜息を吐いた。

「あのねお姉さん、うちは退治屋じゃなくて浄霊……」

「どつちも同じでしょ！」

確かに大差はない。靈を排除するという点においては、同じようなものだろう。しかし退治しろと言われれば、従業員の気持ちを考えてと渋るより他はない。

「そう言われましてもね……」

ぼやく藤堂が何の気なしに顔を上げると、呆れた表情の女が視界に入った。ガラス製のキャビネットに凭れて立ち尽くしているが、いつからいたのだろうか。

「いたのか高屋敷、ちよつとこちらさんの話聞いてあげて」

藤堂が手招きすると、高屋敷渚は整った眉を困ったように歪めてゆつくりと近付いて来た。途中から聞いていたようだから当然だが、関わり合いたくなさそうな表情だ。

目尻がつり上がっているが、くつきりとした二重瞼のせいか、目つきが悪いという印象はない。隙間なく生えた長い睫毛は綺麗に上を向いており、フランス人形を思わせる。背中まで伸ばされた金髪はきつめに巻かれ、一步踏み出す度に風を孕んで揺れた。

「大体聞いてはいましたけれどね、依頼人の話を聞くのは、所長の仕事ではありませんこと？」

「何も分かんねえ俺が聞いてどうすんの、こういうのはメイの仕事なんだって……小磯さん、高屋敷です」

渚が軽く頭を下げると、里佳はどうもと素っ気なく言った。渚の表情が俄かに硬くなる。態度が気に食わなかったのだろう。この二人は馬が合わなさそうだと、藤堂はげんなりする。

早くも場の空気が冷え切っている。残りの二人が早く来てくれなものかと藤堂は思うが、片方は余計に状況を悪化させてしまいうだ。

「……夢枕に立つと仰ってましたけど、それだけなんですか？」

流星に無言のままではまずいと思ったのか、渚はそう聞いた。明よりは遙かに堪え性がありそうだが、彼女の口調からは刺々しさを感じる。

里佳は椅子に浅く腰掛けて腕を組んだまま、億劫そうに首を捻った。もう説明する気が失せたようだ。

「多分それだけ。さつきも言ったけどさあ、あたし靈感弱いから。なんかあっても分かんないんだよね」

「変ですわね。ストーキングするような悪質な霊なら、気付いて貰えるようにラップ音を鳴らしたりするものですけど」

顎を持ち上げて、見下すような視線を里佳へ向ける渚の言葉は、藤堂の耳には嫌味にしか聞こえなかった。里佳も言葉に含まれた棘に気付いたようで、表情を引きつらせる。

藤堂は激しく後悔した。何故、渚を話に入らせてしまったのだろう。さつきと受付用紙に必要な事項だけ記入させて、帰らせれば良かったのだ。後は明がなんとかしてくれた筈だ。

「そうじゃないのもいるかも知れないじゃん。困るんだよね、あたし彼氏いるし」

里佳は指先に髪を巻き付けながら顎を引いて渚を見上げ、両の口角をつり上げて意地の悪い笑みを浮かべた。今度は渚の表情が引きつる。つまり渚は今フリーなのだろう。しかしそんな事はどうでも良い。

藤堂はこの場から逃げ出したい衝動に駆られていた。張り詰めた空気が、全身に容赦なく突き刺さる。無言の間にさえ、底知れない恐怖を覚える。

女の争いは恐ろしい。その理由がどんな事であっても、藤堂は女の喧嘩にだけは、挟まれないように生きてきたつもりだった。それなのに何故、従業員と依頼人の冷戦に関わっているのだろう。

仕事中的なことから、現実から逃げてはいけない。分かってはいても、逃げざるを得ない状況だった。

不意に、里佳と睨み合っていた渚が顔を上げた。天の助けとばかりに、藤堂は縋るような目で入り口を見る。

「……何この空気」

顔をしかめたおかつぱの少女が、呆然と呟いた。幅の広い唇が、呆気に取りられたようにぼかんと開いている。彼女は流石に、冷え切った室内の空気に気付いたようだ。その垂れ目は恐る恐る藤堂を見たが、彼が浮かべた情けない表情に気付くと、さっと目を逸らした。天然記念物のような美少女だ。髪も目も今時珍しい漆黒で、そろそろ梅雨に入るといいうのに、長袖のセーラー服を着ている。大人びた空気を纏っているものの、膝丈のスカートから伸びる両足は、少女の面影を残していた。

日本人形めいた顔立ちを困惑したように歪め、知恩院明はまっすぐにカウンターへ近付いた。札が幾重にも貼り付けられたヘルメットを被った少女がその横をすり抜け、藤堂の腕にしがみつく。大きな目が渚をちらりと見て、眉尻を下げたまま藤堂を見下ろした。

「ゆなが来たからには、もう大丈夫です」

黒江ゆなは張り詰めた空気から何を感じ取ったのか、抑揚のない声でそう言った。感情というものを感じさせない無表情だが、ふつくらとした頬と小さな唇は、まさしく少女のそれだ。

「何がどう大丈夫なのかわかんねんだけど」

「隠さなくとも良いのです。藤堂さんの貞操の危機なのでしよう。お天道様が許しても、ゆなは許さないので。この手で必ず守り抜いて見せます」

場の空気が更に凍った。この数週間でゆなの突飛な発言に大分慣れた渚は、赤面するだけで済んでいる。しかしゆなを知らない里佳は、口を開けたまま絶句していた。動じない明や藤堂がおかしいのかも知れない。

「あのねゆなちゃん、お兄さんお前が思ってるほど清らかな体じゃな……」

「藤堂さん！」

明の鋭い怒声が飛ぶ。藤堂は奥二重の目を明に向け、軽く肩を竦めた。ゆなは咎めないのに何故自分は咎めるのかと、藤堂は怪訝に思う。そもその原因は全て、ゆなにある筈だ。

はっとして依頼人を見た明は、一つ小さく咳払いをして、誤魔化すように空々しい笑みを浮かべた。里佳は黙り込んだまま、呆れた目で藤堂とゆなを交互に見ている。

「……ねえお兄さん、ここ大丈夫？」

里佳の問いに、藤堂は無精髭を生やした顎を撫でながら目を逸らした。大丈夫かと聞かれても、大丈夫だとは言い難い。

「ココ？」

藤堂がゆなの頭を指差すと、里佳は小さく嘖き出して、人差し指でカウンターを叩いた。ああ、と藤堂は得心が行ったような声を漏らす。

「あんまり大丈夫じゃねえなあ、儲かんねえし……頭と発言はアレだが、腕は確かだから安心して下さい」

言って藤堂は、視線を流して明を見上げた。

「おい、三人で行って来い」

突っ込みたそうにうずうずしていた明は、その言葉に首を捻る。

「藤堂さんは？」

「俺は留守番」

ゆなが不満そうな面持ちで藤堂を見た。傍目にはいつもの無表情と大差ないが、常に近くで見ている為か、藤堂には最近ようやく、その変化が分かるようになってきた。

しかし藤堂は、その表情を無視した。ゆなをいちいち気にしていたら、何も進まない。あからさまに嫌そうな顔をした渚も、しかし不平を述べないので放っておく。最近では依頼があっても、藤堂自身は店を出ない事になっている。

そもそも、全員で出かけていた今までがおかしかったのだ。店番も置かないで出かけるのは、あまりいい事ではない。

「話は高屋敷から聞いてね。今からでいいですか、小磯さん」

「ああ、丁度今日しかヒマなかつたの。じゃ、ウチ来て」

気軽にそう言って、里佳は椅子から立ち上がる。明が不満そうな面持ちで渋々カウンターから離れる二人を見て、うんざりと肩を落とした。

第四章 終わりなき連鎖 二

かしまし娘等が依頼人と共に出て行つてから、藤堂はカウンターに座つたまま、ぼんやりと外を眺めていた。眠たげに欠伸を噛み殺し、店の前を通る人影をドア越しに目で追う。

客を期待しているわけではない。期待したところで誰も来ないことなど、分かりきっている。

何より渚がバッグを買ってくれたのと、友人から依頼料にと貰つた金がまだ残っているので、当面は食費の心配をしなくていい。預金残高は今月の家賃を払うには足りない額なのだが、食費が手元にあるだけで安心して、すっかり仕事をする気が失せてしまった。元々大した仕事もしていないのだが。

濃み疲れたサラリーマンが、重い足取りで店の前を通り過ぎて行く。買い物袋を提げた主婦達が足早に、それを追い越した。店内から見える空は、季節を象徴するかのようにとんよりと雲つており、今にも泣き出しそうだ。出て行つた従業員たちが、帰りに雨に降られなければいいと思う。

代わり映えない風景だ。自分の何が変わつても、ここから見える人々の姿は変わらない。藤堂は何故だか、それを感慨深く思う。周囲の様子が変わった所で藤堂は流されるだけだが、その分、変わらない事が嬉しくもあつた。

藤堂のそれは、安心しているだけなのかも知れない。平坦な日常をだらだらと繰り返していた筈の藤堂に、急激な変化が訪れたのはつい最近の事だ。身の回りが目まぐるしく変わって行く事に、彼はひどく疲れてしまっていた。

落ち着いたと思つたら、また別の人間が現れては引つ掻き回し、何故か藤堂の手が届く場所に居座る。無論彼女らを疎ましく思っている訳ではないし、これはこれで楽しいと思う。けれど流されるばかりの彼は、これでいいのだろうかとも考える。

良かろうが良くなかろうが、受け入れるしか道がない事を、藤堂は理解している。強く主張するような事はしたくないし、拒絶するのは尚のこと苦手だ。時折、何故こんな風になってしまったのかと考えたりもするが、これが生まれつきの性分なのだと、藤堂は自分をそう納得させている。

ガラス扉越しに、見慣れた人影が見えた。店外を見る藤堂に気付くと、彼女は軽く手を振る。

「ヒマそうね、藤堂くん」

黒のジャケットを片手に持った、色の黒い女だった。赤みがかつた茶に染められた髪はさっぱりと短く切られているが、襟足が僅かに伸びて来ている。タイトなミニスカートから伸びる、ストッキングに包まれた肉感的な足に、藤堂は目を奪われた。

新藤祐子はパンプスのヒールが立てる軽やかな音を響かせながらカウンターに近付き、渋い表情の藤堂を見て笑った。彫りの深い顔立ちの為か、一見年齢の判断がつかない。

「いつも通り」

短く返すと、祐子は藤堂を見下ろして首を捻った。藤堂の視線は彼女の顔よりも、見上げる形になった豊満な胸へ行く。

「最近儲かってるって聞いたけど？」

「どうだか」

祐子は呆れたように小さく息を吐いた。

「結構お客さん入ってるじゃない。アタシが来ると、大体ここに誰かいるわよ」

言いながら、祐子はカウンター手前の椅子を軽く叩き、その背もたれにジャケットを引っ掛けた。座る気はないようだ。

事務所の経理面を全面的に受け持っているのは藤堂だが、儲かっているという実感はあまりない。実際儲かっているという程金が入ってくる訳ではないし、始めた頃よりは客が増えたというだけの話だ。生活は大分楽になったが、それでも毎月家賃を捻出するのに苦労している。

「ああ、だからあんた最近来なかったのか」

祐子は更に呆れた視線を藤堂に向けた。逐一気にかけてくれるのは有難いが、この目はやめて欲しいものだと思う。

「もう……君ってホント、何にも興味ないのね」

「そんな事ないけど」

「ヒトの胸見ながら言わないでよ」

軽く握った祐子の拳が、藤堂の額を小突いた。いて、と呟いて額を撫でる藤堂を見て、祐子はさも楽しそうに笑う。

そう言われても、目の前に見事な胸があれば自然と視線が向いてしまう。祐子の場合、常に見て下さいと言わんばかりにワイシャツの胸元を大きく開けているから、見なければ失礼だという気にさえなる。それも藤堂の勝手な考えだが。

「祐子さんには興味ありますぐらい言えないワケ？」

「祐子さんの胸には興味あります」

「本気で行くわよ」

「カンベンして」

拳を振りかざした祐子に、藤堂は肩を竦める。今回は冗談だと分かっているが、たまに本気でひっぱたくから気が抜けない。

「そんなにヒマなら、実家帰ればいいじゃない。ご両親健在でしょ？」

藤堂は思わず眉間に皺を寄せる。祐子に家族の事について口を出されたのは、初めてだった。

「盆と正月には帰ってるけど」

帰った所で一日中ごろごろしている藤堂を待っているのは、母親の小言と姉の愚痴ばかりだ。早く結婚しろだの仕送りを増やせだのという母の苛立ったような口振り、鬼のような形相が思い出され、藤堂は更に渋面を作る。

帰ったら帰ったで、いちいち帰って来るなと言つのが藤堂の親だ。父親は藤堂と同じく無口だし、姉夫婦は、わざわざ口下手な弟と話そうとはしない。帰らないとそれはそれで、電話口で小言を言われ

るのだが。

「たまにはふらつと帰ってみたら？ 喜ぶよ」

「……何いきなり」

怪訝に問い返すと、祐子は誤魔化すように苦笑した。藤堂は祐子の家族構成を知らないし、聞いた事も無い。仲が良いとはいえず、常連客とそんな込み入った話をするのも気が引けた。

そういえば、と、藤堂は祐子から視線を逸らす。

明の家族構成も、彼は知らない。年中制服でいる割に、学校へ通っている様子もないので気になってはいたが、明は殆ど自分の事を喋らないから、聞きそびれていた。

しかし今更聞くのも、妙な按配ではある。聞いてはならないような事だつたらと思うと、余計に聞きづらい。最近是一片親の子供が多いから、家庭の事情に首を突っ込む羽目になつたら面倒だ。

目を逸らした藤堂を見て、祐子は何を思ったのか、彼の頭を軽く撫でる。驚いて顔を上げると、祐子はどこか、寂しそうに笑っていた。初めて見るその表情に、藤堂は思わず身を硬くする。

「藤堂君さ、いい人だつて言われるでしょ」

返答に困った。確かによく言われる類の言葉ではあるが、言葉通りのいい意味で使われる事は滅多にない。明に言われた時も、本気なのか揶揄われているのかさっぱり分からなかった。

祐子は前髪をかき上げながら、視線をカウンターに落とした。憂えているようなその仕草が、やけに艶っぽく見える。

「でもね、話聞いて欲しい時もあるのよ。たまには」

「センチな気分？ なんかあつたの」

「そーかもね」

藤堂はそれ以上言及しなかった。しつこく問いただすのは好きではないし、言いたくない事なら、匂わせたりはしないだろう。言いたいなら、こちらが何も言わなくとも、祐子は話すだろうと思っていた。

黙り込んだ藤堂に、祐子は曖昧に笑って見せた。

「……一ヶ月ぐらい前だったかな、父親が死んでさ」

藤堂は目を丸くして、まじまじと祐子を見た。切り出された話の内容自体に驚いたのではなく、祐子がそんな重い話を自分に打ち明けた事が意外だった。

「うち母親いなくてさ。兄弟もないから、アタシと父だけだったのよ」

ふうん、と生返事をして、藤堂は煙草に火を点ける。真面目に話を聞くのが照れくさいような、申し訳ないような気分だった。何より祐子の方も、真面目に聞く姿勢を取らない藤堂だから、こうして話しているのだろう。

誰かに聞かせるには照れ臭くなるような愚痴や悩みを聞いてもらう相手には、興味のない態度を取る人間が適している。真摯な態度で聞かれると、余計に恥ずかしくなるからだ。

そして誰にも秘密をばらさないような、口数の少ない者。その点自分はお訛え向きの人間なのだろうと、藤堂は思っている。昔から藤堂は、仲間内でそういう役割を担っていた。

「だから上京するの止められたんだけど、都会への憧れがあったせ。ハタチの時、大喧嘩して家出たの。それからつい半年前まで、連絡も取ってなかった」

祐子はどこか懐かしそうに、目を細めた。泣きたいのかも知れないと藤堂は思ったが、何と言ったらいいか分からないので、口は挟まない。慰めの言葉も浮かばない自分が齒痒かったが、この不器用さが功を奏す事もある。

「それで半年前、父が倒れたって叔母から連絡があつてね。急いで戻ってみたら、お父さん、昔の面影もないぐらい痩せちゃってた。アタシの顔見て怒ったけど、すごい泣いてた」

祐子の声は、僅かに震えていた。藤堂が姿勢を落とした先で、カウターに着いていた両手の指先が握り込まれる。何かを堪えるような仕草だった。

「バカだったって、思った。でも仕事があるから、結局向こうには

戻れなくてさ。それでも一週間に一回ぐらいは、会いに行つたのよ」
視線だけを上げて盗み見た祐子は、タバコの煙に霞んで見えた。

懐古するような表情を浮かべて上を向いた彼女の姿が、別人のように小さく感じられる。藤堂は口を開きかけたが、結局やめた。

「死に目には会えなかつた。なんかね、よく覚えてないの。そこんとこ。お父さん、気がついたら、小さくなつててさ」

再び俯いた藤堂は、祐子の顔を見る事が出来なかつた。もし今祐子が泣いていたとしたら、彼女はその顔を見られたくないだろうと思ふ。見てはいけないような気がした。

藤堂に彼女を叱る権利はないし、慰める術もない。祐子が果たして叱咤して欲しかつたのか、それとも胸を貸して欲しかつたのか、藤堂には分からない。けれど話を聞いて欲しいのだと言われたからには、そうするだけに留めておくのが最良だと思つた。

祐子が何を思つて藤堂に懺悔を始めたのか、彼には分からない。分からないが、彼女の一言一言が胸に沁みだした。黙っているよりほかはなかつた。

「さ、どこまでホントだと思つて？」

藤堂は反射的に顔を上げ、は、と呟いた。呆然と見上げる藤堂を見て、祐子は朗らかに笑う。

「何よう、情けない顔しちゃつて。あんた冷めてるくせに、意外とこういふ話弱い？」

悪戯を企む子供のような笑みを浮かべ、祐子は藤堂の顔を覗き込んだ。開いた口が塞がらない。

「……何ソ、あつち！」

いつの間にか燃え尽きようとしていた煙草の火が、藤堂の指まで届いて皮膚に触れた。驚いた藤堂が煙草を取り落としたのを見て、祐子は慌ててカウンターを転がるそれを摘み、未だ燻る火種を灰皿に押し付けた。

火傷した指に息を吹きかけて冷ましながら、藤堂は恨みがましい目で祐子を見る。彼女は赤くなつた藤堂の指先を見ながら、少し首

を竦めた。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫じゃねえよ、痛え……」

唸る藤堂を暫く困ったような面持ちで見つめていた祐子は、ふと口元に笑みを浮かべた。藤堂は訝しげに片眉を寄せる。

「キミのそういう優しいところ、似てる」

主語が抜けた台詞に、父親の事だろうかと藤堂は思う。嘘なのか本当なのか判らない話だったが、騙された恨みより、信じたい気持ちの方が強かった。敢えて真偽を問う事もしないが。

祐子は椅子に掛けてあったジャケットを取り、藤堂の頭にぽんと手を置いた。

「ごめんね。ありがとう」

何に對しての礼なのか、藤堂には分からなかった。祐子は怪訝な表情を浮かべる藤堂に背を向け、入り口に向かって歩き出す。片腕に引つ掛けられたジャケットがなびいた瞬間、藤堂は目を見開いて咄嗟に立ち上がった。

「ゆ、祐子さ……」

藤堂の声に気付かなかったのか、祐子はそのまま出て行った。藤堂は暫くの間、そのまま呆然と立ち尽くしていたが、やがて力が抜けたように椅子へ腰を下ろす。

祐子のジャケットの襟で光っていた金色の徽章には、嫌と言うほど見覚えがあった。見間違う筈もない。

「まさか、商売敵とはね……」

そう独りごちて、藤堂は椅子の背に凭れ、天井を仰いだ。

第四章 終わりなき連鎖 三

何の説明もないまま事務所を追い出された明は、道中で繰り返される依頼人の愚痴に閉口していた。自己紹介して早々のマシンガントークは、相手を黙らせる為に行っているのではないかと勘ぐってしまふ程だ。流石のゆなも、耳を塞ぎたくなるのを必死で堪えているような、苦々しい表情を浮かべている。

これでは藤堂も嫌な顔をするはずだ。渚など、あからさまに不機嫌そうな面持ちのまま、一言も口を利かない。しかし踵を返す事なく黙ってついて来る辺りは、彼女も昔よりは大人になったという事だろう。

明が渚と初めて会ったのは二年前、彼女が十八の時だった。彼女はあの頃、傍から見ていて心配になるほど不安定で、がむしゃらに霊体を抹消し続けて、同業者を困らせる事もままあった。明も何度か仕事を取られて、高屋敷家へ殴りこみに行ったことさえある。

しかしつい一年前執事が死んで、彼を使役するようになってから、彼女は変わった。渚にとって執事がどんな存在だったのか、明には知る由もない。けれどその死によって変化が起きるということは、大事な人ではあったのだろう。

随分と、丸くなったものだ。明は彼女の変化を嬉しくも思ったが、こうして今仲間として働いている事が、不思議なように思えた。昔の彼女なら、仲間などいらなと言っただろう。

だから浄霊屋にしてくれと言われた時は、本当に驚いた。共闘しようと思っ掛けても決して首を縦に振らなかつた彼女が、執事の死によってこんなにも変わったのだ。彼の死自体を喜ばしい事だとは到底思えないが、それに影響を受けて渚が変わった事が、明には嬉しく思える。

知らず知らずの内に笑みを浮かべていた明は、顔を覗き込むゆなに気付いて目を丸くした。

「な、なに？」

ゆなは愛らしい仕草で小首を傾げて明を見上げ、前方を指差した。明は大きく瞬きする。

「着いたようなのですが」

慌てて目の前のアパートを見上げてから、明は依頼人の姿を探した。里佳は呆れた表情を浮かべて立っている。その横では、渚が有り得ないものを見るような目で古ぼけたアパートを眺めていた。

明は怒鳴り込みに行った時に見た、高屋敷の家を思い出す。東京の一等地に堂々と構えるあの屋敷とここでは、雲泥の差がある。

生まれた時からあの広大な屋敷で暮らしていた事を考えれば、渚の反応も頷けるが、失礼に当たるとなるような事はしないで欲しい。里佳が気付いていなくて本当に良かった。

「大丈夫？」

里佳の怪訝な声に、明は我に返った。

「す、すいませんっ」

明は反射的に頭を下げ、溜息を吐いて外階段を上り始める里佳の後を追った。ゆなと渚が不思議そうに顔を見合わせ、軽く肩を竦める。

「今時エレベーターないとか、有り得くない？ そこ手すり危ないから、触っちゃダメだよ」

見れば確かに階段は老朽化が進み、全体に赤錆が浮いている。一歩踏み出す度に軋む音を立てる階段に触るのも躊躇われて、明は結局手すりを使わなかった。

階段を上りきってからふと下を見ると、ゆなが渚の手を取って介助してやっていた。足下が悪いのもあるだろうが、お嬢様育ちの渚は、普段階段など使ったりはしないだろう。

「だいじょぶ？ こっち、上がった」

いつの間にか自室に入った里佳が、ドアから顔を出して手招きしていた。怒ってさえいなければ普通の女性のようにだ。

「お邪魔します」

ようやく階段を上りきった二人を伴って、明は里佳の部屋へ入る。玄関に入った瞬間、室内に充滿した香水の香りが鼻を突き、ゆなが顔をしかめた。その匂いに混じり、おぼろげな霊の気配が感じられる。明はワンルールの室内を見回しながら、首を捻る。

気配はあれど、姿が見えない。明は怪訝な面持ちで部屋の隅々まで観察した後、意見を求めようと渚を振り返った。

「…………大丈夫？」

しかし明の口からは、気遣いの台詞が出た。見るからに疲れ切った様子でぐったりした渚は、ゆなに支えられるようにして立っている。階段を上っただけでこれかと、明は些か呆れた。

「問題ありませんわ」

毅然と言い切る渚の顔は、心なしか青ざめていた。これは少し走るだけで息切れする藤堂より、遙かに体力がなさそうだ。藤堂どころか、ゆなと比べても劣っているように思える。

「気配はあるのに、姿が見えませぬ」

首を傾げたまま、ゆなが呟いた。大きな目はどこを見ているのか分からないが、霊の気配はしつかりと感じ取っているようだ。

「そうだね……存在が希薄っていうか、逃げ回ってるのかな」

こんな狭い部屋で霊を探す羽目になるとは、思ってもみなかった。アパートを見た時点で部屋は狭いだらうと予想していたから、楽な仕事になりそうだと、勝手に考えていたのだが。

「やっぱ、いるんだ」

明につられて室内を見回していた里佳の表情が、徐々に硬くなっ
て行く。居るといふ確信を持たされて、不安になったのかも知れな
い。

ようやく回復した渚が、不思議そうに首を捻った。

「先ほどから、ちらちらと視界の端にいるのですけど……逃げ足が速いのかしら」

「呼んだら止まってくれないものでしょうか。るーるーるー」

「キツネ呼んでどうするの」

明が突っ込むと、ゆなは首を傾げて渚を見た。その視線を受けて困惑したように柳眉を顰めた彼女は、おもむろに胸ポケットから札を取り出す。

「とにかく、捕まえなくっちゃ始まりませんわね……じいや」

渚の声に反応して、札から燕尾服の老紳士がずるりと出て来る。

じいやという呼び名に相応しいのは、整髪料でしっかりと撫でつけられた総白髪だけだ。破り取られた袖から伸びる丸太のような腕も、狼のように鋭い双眸も、凡そ似つかわしくない。

老紳士と呼ぶには体格が良すぎるその姿を見て、里佳が小さく悲鳴を上げた。

「な、何それ！」

「霊ですわ。あなた高屋敷家をご存知ありませんの？」

小ばかにしたような台詞を吐いた渚を、明が咎めるように睨んだ。ふん、と渚が鼻を鳴らす。

「じいや、さつさと捕まえてしまいなさい」

執事が素早く腕を伸ばした。明は目の前を通り過ぎた微かな気配に、驚いて小さく肩を竦める。ゆなはようやく霊の姿を目で捉えたのか、部屋の隅を人差し指で指し示した。執事がゆなに向かって頷いた後、指された方へ駆け出す。

執事は部屋の角に置かれていた化粧台を避け、壁を蹴って方向転換した。その腕が気配を掴もうと伸ばされたが、間に合わなかったようで、悔しげに拳を握る。

明には目で追う事も不可能だから、渚がいて良かったと安堵する。下手をすれば、刀でそこら中を傷つけてしまいかねない。

「っつーか超マッチョじゃん。超カッコイイ」

暫く執事をまじまじと見ていた里佳は、やけに呑気にそう言った。明は思わず脱力する。

何故こんな狭い部屋で、こんな事をしなければならぬのだろう。明は段々とばかりしくなってきた。執事が大真面目に追い掛けているのが、余計に馬鹿馬鹿しく感じられる。

しかしこれも仕事だ。真面目にやらなければ里佳の話を一人で聞いていたという藤堂に、申し訳が立たない。一人駆け回る執事を見ながら、明は表情を引き締める。

「こちらです」

ゆながヘルメットを外し、執事に向かって手招きした。明と渚は怪訝に眉を歪めたが、執事だけはゆなの意図を察したようで、僅かに頷いて見せた。

ゆなが大きく両手を広げる。執事の腕が伸び、その掌が逃げ回っていた霊の背を叩くのが見えた。やっと明の目にも見えたその姿は、初老の男性のように見える。

男性の霊は執事に背中を押され、ゆなの方へ向かって吹っ飛んだ。ゆなの唇が、にやりと笑みを浮かべる。

「かもんべいべー」

棒読みでゆなが言った瞬間、室内に悲鳴が木霊した。そういえばゆなは既に降霊する事が出来るのだと、明は今更思い出す。しかし先ほどの悲鳴は、何だったのだろうか。霊が上げた悲鳴だろうか。

ゆなはその場に、がっくりと膝をついた。里佳が目を見開いて、両手で口元を覆っている。ゆなが上げた悲鳴だと思ったのだろうか。

「入ったね。小磯さん、大丈夫ですよ。この子の悲鳴じゃありません。降霊しただけです」

明がそう説明すると、里佳は口元を覆っていた掌をゆっくりと下げ、恐る恐るゆなへ視線を落とす。役目を終えた執事は渚に歩み寄り、傍らで畏まった。

四人が神妙な面持ちで見守る中、ゆながゆっくりと顔を上げ、表情を引きつらせた。その仕草は、明らかにゆなものではない。間違いない霊が入っている。

「な……何だてめえら、何じゃこりゃ！」

ゆなの口から出た幽霊の第一声に、全員が脱力した。しかし里佳だけが、驚愕に目を見開く。

「お、お父さん！」

これには他の三人が一樣に、目を丸くした。里佳は慌ててゆなに駆け寄り、床に膝を着いてその両肩を掴む。

「その声、お父さんでしょ！ 何なのよ、なんでこんな……」

ゆなは眉間に皺を寄せて渋い表情になり、里佳から気まずそうに目を逸らした。呆然としている渚の肩を軽く叩いてから、明は二人の傍らにしゃがみこむ。

「お父さんなんですか？」

逸らした視線の先に屈んだ明を見上げ、ゆなに憑いた霊はおずおずと頷いた。無言で肯定の意を示した父を見て、里佳が眉をつり上げる。大きく息を吸い込む音がした。

「どうして逃げたのよ！ あたしが靈感弱いのが知ってんでしょ、言いたい事があるなら、この人達に伝えてくれれば良かったじゃん！」

畳み掛けるように怒鳴る娘に、父親の表情が険しいものへと変わった。先ほどまでしおらしくかったというのに、随分ころころと表情が変わるものだ。血の気の多い家系なのかも知れない。

「突然大勢乗り込んで来たら、退治屋かと思うだろうが！ そりゃ逃げるっつーの」

「何よ臆病者！」

「あの、すいません、親子喧嘩はその辺で……」

見るに見かねて明がたしなめると、二人は同時に彼女を見て、同じタイミングで肩を落とした。叱られて素直に静まった父子に、明はほっと肩の力を抜く。

「ええと、お父さん。言いたい事があるなら、今の内に」

明に促されると、ゆなに憑いた父親はちらりと娘を見てから、改めて彼女に向き直る。そのままその場で正座した後、厳しい表情を浮かべた。里佳は僅かに身を硬くする。

「父さん言つたよな、あの男はやめろって」

里佳は一瞬目を丸くした後、父親から視線を逸らした。思うところがあるのか、悲しげに眉根を寄せている。

「お前、あいつがどんな男かまだ分かってないのか」

唇を噛み締め、里佳は暗い表情で深く俯く。思い当たる節があるのかも知れない。

父親の口振りと里佳の反応から察するに、里佳の恋人の事なのだろうと明は推測する。介入するどころか、第三者が聞くのも悪いような話になって来てしまった。

しかし今の内にと言ったからには、会話を止める訳にも行かないゆなを残して部屋を去るのもいけないし、何も解決していないのに出て行くのは、依頼人に申し訳ないような気がした。しかし、そ知らぬふりで聞いている訳にも行かない。

結局明は気まずそうにゆっくりと立ち上がって、渚の横へ立つ。渚も同じく、居心地悪そうに視線を宙にさまよわせていた。

「あのな、あいつは多額の借金を背負ってる。お前がいくら貢いでも無駄だ、ギャンブル狂いは直りやしねえ」

里佳が弾かれたように顔を上げる。明は父が夢枕に立ってまで言わんとしていた事を、なんとなく理解した。

「そ、そんなのウソ！」

「嘘じゃねえよ、俺アこの目で見た。あいつはただのギャンブル狂だ。お前が貢いでる金は全部、馬やらパチンコやらに注ぎ込まれてんぞ」

里佳はぼかんと口を開けたまま、何も言い返さなかった。

何故、こんな話を聞かされているのだろう。浮遊霊がストーカーグすることは決して珍しい事ではないから、てっきりその類だと思っていたのだ。

聞いてはいけない事を聞いてしまったような気になり、明は隣で立ち尽くす渚の顔を盗み見る。執事はさすがに居心地が悪かったようで既にいなくなっており、渚は複雑な表情を浮かべていた。

存在が希薄になっていく事から考えるに、この父親は恐らく、亡くなつてから四十九日をとうに過ぎている。娘の様子を見る限り供養はきちんとしているのだろうが、四十九日を過ぎて尚、彼は現世に留まっているようだ。

霊自身にこの世への未練があつても、四十九日の法要を迎えてさえいれば、強い念を抱いていない限りは天に昇る。摂理に逆らつてまで現世に留まれば、霊体が消滅してもおかしくはない。存在こそ希薄になつてゐるものの、それが今まで現世にいたのだから、よほど娘を心配してゐたのだろう。

「……これが言いたかつただけだ。悪かつたな、お嬢ちゃん方」

俯いたままぼんやりとしていた明は、慌てて視線をゆなに移した。里佳は未だ呆然と肩を落としている。

「もう……いいんですか？」

「ああ、後はこの馬鹿娘の判断に任せるさ。この子にも、礼言つといてくれ」

父親の霊は体を間借りしたゆなの顔を指差し、寂しそうに笑つた。その表情に、明は胸が締め付けられるような感覚に襲われる。

「じゃ、盆には帰つて来らア。達者で暮らせよ、里佳」

父の手が娘の頭に伸び、軽く叩くように撫でた。里佳はゆっくりと瞬きを繰り返す。

ゆなの体から、ふっと力が抜けた。糸の切れた人形のようにがっくりと頂垂れ、ゆなはその場に倒れこむ。しかし明が駆け寄るとすぐに目を開けて、横たわつたまま彼女の顔を見上げた。

里佳は父に名前を呼ばれた事でようやく我に返り、ゆなの口から抜け出た白い靄に手を伸ばす。しかし、触れることは叶わなかつた。里佳の指先は虚しく空を切り、靄は逃れるように天井へ上つて行く。明の目には、その靄は寂しそうに笑う男性の顔に見えたが、果たして里佳は気付いてゐたのだろうか。

慌てて立ち上がった里佳の目からは、大粒の涙が零れていた。

「お父さん、あたしカレと別れる！ 別れるから、安心して！」

次から次へと溢れる涙を拭おうともしないまま、里佳は大声で叫んだ。父を追うように伸ばされた里佳の手は、しかし何も掴む事がない。靄は了解の意を示すように、天井付近で円を描くように漂つた後、消え失せた。

第四章 終わりなき連鎖 四

重い瞼をこじ開けて無理矢理開かせた目に入ったのは、真っ白な天井だった。閉め切られたカーテンの生地越しに差し込む光に、芹香は眩しそうに目を細める。未だぼんやりと覚醒しきらない頭で、見慣れない光景だと考えた。それが当然だった。最近の家でゆっくり眠れる事も滅多にないほど、忙しかった。

帰宅するのが面倒になって、社宅の空き部屋を使うことなどざらだった。田舎の山中まで遠出した時などは、車内で一晩過ごす事もままあった。こんなによく眠ったのは、久しぶりだ。

そう考えた瞬間、芹香は弾かれたように上半身を起こして室内を見回した。よく眠れる筈がないのだ。

しかし全身を走る鈍い痛みで顔をしかめ、思わず背中を丸める。血管に鉛を流し込まれたように体が重く感じる上、四肢が熱を持っている。視界を暗転させる立ち眩みのような感覚を厭い、きつく目を瞑って、頭を左右に振った。

ここはどこだ。痛みを堪えるように毛布をきつく握り締め、彼女はそう考える。こめかみが鋭く痛んで、上手く頭が回らない。脳が思い出すことを拒んでいるような、奇妙な感覚だった。

「もつ目が覚めたんですか？」

反射的に声のした方を振り返ったが、芹香は再び襲った目眩に眉根を寄せた。一瞬狭まった視野が開けるのを待って、改めて声の主を見る。

「まだ起き上がらない方がいいわ」

女は困ったようにそう言って、ベッドへ近付いた。よく日に焼けた小麦色の肌に、赤みがかつた茶髪。手にはコップと、粥の入った皿が置かれた盆を持っている。

見覚えのある顔だった。覚えがあるどころではない、よく知っている。

「新藤主任……か」

祐子は呟いた。芹香を見て微笑み、小さく頷いた。勤務地が違うからそう親しくはないが、何度か一緒に仕事をしたことがある。あの時本人から悪い印象は受けなかったが、彼女が使役する霊にはかなり問題があるように思われたから、よく覚えていた。

鳳の退治課では、提携関係にある高屋敷家指導の下、殆どの社員が祐子のように霊飼いとなる。それ以外、元々の霊感が強い人材は会社役員の下で対霊体用の術を修め、管理職への道を歩む。

実力を付けるしか昇格の術がない鳳では、最初の篩いで大体の道が決まる。定年まで平社員でいるか、芹香のように異例の昇格を遂げるか。全てが生まれ持った才能如何であると言っても、過言ではない。元々の霊感が強くないと、技術の身につけようがないからだ。そんな中、祐子のような霊飼いが管理職に就くという事は、極めて稀だ。研修期間中に余程の功績を残したのだからと芹香は思っていたが、一緒に仕事をしてみて、違ふと悟った。理由は祐子が使役する、霊の方にありそうだ。

「あなたが助けてくれたのか」

祐子は苦笑いを浮かべ、首を横に振った。

「私は何もしていません。本社の執行部長があなたを抱えて来て、匿ってやってってくれて」

「……部長が」

芹香は複雑な表情を浮かべ、祐子がベッド脇のナイトテーブルへ盆を置くのを眺めていた。社員になつてから、部長には良くして貰っていた。しかしよくぞ見つけれられたものだと思う。

「路地でうずくまっている所を、見つけられたそうです。たまたま家が近かったので、私の所へ連れて来られたようですが」

「そうか……濟まない」

頭を下げようとすると、祐子は手を振ってそれを制止した。

「聞きましたよ、過激派の反乱ですって？ 穏健派の大多数がいなくなっただと思っただら……危ない所だったそうですね」

祐子はどこか、悲しそうな表情を浮かべていた。芹香は黙って頷く。

「人事が小田原支店長を切っただろう。あれから、向こうの動きが活発化してな。退治課が人手不足で、処理に奔走していたから内情は良く知らなかったが、気がついていたらこのザマだ」

何故人手が不足しているのかも、彼女は知らなかった。誰が居なくなっただのかさえ、きちんと把握していない。

覚えていなかったわけではない。確認するために帰社する暇さえなかったのだ。早朝から現場へ直行して何件かを渡り歩き、夜遅くに直帰する。ここ数年、そんな生活が続いていた。

「焦ったんでしょね、向こうも。それにしたって、まさかあなたを……」

祐子は口ごもって、少し俯いた。しかし無理はないと、芹香は思う。彼らにとつて一番邪魔なのは、他ならぬ芹香だった。追われる身になるとは到底予期していなかったが、疎む気持ちは分かる。

過激派の面々は、その殆どが霊に近い人間を殺された遺族だ。当然霊を憎むだろうし、根絶やしにしたいと思うだろう。ただの浮遊霊を、出鱈目に抹消しているわけでもない知っている。

それでも、悪霊にはそうなただけけの理由がある。生前の行いが崇つてそうなた者だけでなく、恨みを持って死んだ為に、悪霊となってしまう者も、少なからずいる。誰にも供養してもらえず、浮かばれない霊が負の感情に晒されて、悪霊となるケースもある。そういつた哀れな悪霊を、浄霊屋や霊媒師に任せればいいものをわざわざ出向いて行って抹消するから、会社には自然と悪評が立つ。

悪い噂は良い噂より、数倍早く広まってしまふ。会社の信用を取り戻す為には、彼らを阻止する人間が必要だった。

そんな過激派を止める為に集まったのが、『白銀』を筆頭とする穏健派の面々だった。こちらはただ単に、白銀の傘下に在りたいが為に手を貸す者も少なからずいたが、中には過激派の横暴に被害を被った者も存在する。

怨みを抱いて誰かが暴走すれば、全く関係のない誰かが悲しみ、また新たな怨念を生む。終わりのない負の連鎖を、止めてやりたかった。それが、こんな結果を生んでしまうとは。

疲れた溜息を吐いた芹香の背を、祐子の手がそつと撫でた。子供にでもするような手つきだ。

「あなた、過労ですって。働き過ぎですよ。お忙しいのは分かりませんが、最近は何にひどかった。ロクに会社にもいらつしやらなかったんでしょう？ もう少し、ご自分を省みて下さい」

母親か配偶者のような口振りに、芹香は苦笑した。こんな事を言ってくれるのは、父親ぐらいのものだった。

ここ最近は何が溜まったように気分が晴れず、ひたすら仕事に打ち込んでいた。忙しいのは事実だったが、自己管理がなっていなかったという事だろう。風邪や病気とは縁がないと思っていたし、気をつけてもいたが、過労で倒れてしまっただけは元も子もない。

祐子はナイトテーブルに置いた盆から、水の入ったコップを取って、芹香に差し出した。

「とにかく、何か口に入れて下さい。早く戻らないと、あなたの不在なんてマスコミがすぐに嗅ぎつけてしまいますよ」

芹香はコップを受け取りながら、緩く左右に首を振った。

「騒がれるのは申し訳ないが、社には戻れない」

続けて皿を取ろうとした祐子は、驚いてその動きを止めた。芹香はコップの中身を一息に飲み干す。渴いた体に冷たい水が浸透し、心なしか四肢の熱が冷めたような気がした。

「私がいると、また同じような事になる。私がいなければ、残った穏健派も目につくような動きはしなくなるだろう」

「でも、常務がなんとかして下さるんじゃない……」

「無理だな。……とにかく見付かる前に、私はここを出る。あなたは中立の立場だろう。迷惑は掛けられない」

祐子は眉をつり上げ、厳しい表情で芹香を見た。

「いけません」

叱るような口調に、芹香は驚いて眉を上げた。両手を彼女の肩に添え、祐子は背中を丸めて屈み込む。

「身の振り方が決まるまでは、ここに居て下さい」

「どうせ一人になるんだ。あなたの厚意に甘えてはいられない」

祐子の目が、すつと細められた。芹香は思わず身を硬くする。

「いけませんよ、そんな体で」

肩に添えられた手が、シャツの上を滑るように下りて行く。蛇が這うようなその手つきに、芹香は身震いした。祐子の赤い唇が、ゆつくりと弧を描く。

「あなたの身になにかあつたら、皆困ります」

柔らかな掌が、胸の上に乗せられるような形で止まる。己の頬が熱くなつて行くのを、芹香は呆然としたまま知覚した。

「ね、課長？」

胸に触れた指先に、僅かに力が込められる。痛いわけでもなく、ただ皮膚が沈む感覚に耐え切れず、芹香は息を呑んで後ずさった。

「わ、分かった！ 分かったから……」

「良かった」

祐子はにつこりと微笑み、立ち上がってナイトテーブルを指差した。

「食べて下さいね。私仕事に行きますから、部屋は適当に使ってください」

赤い顔のまま芹香が頷くと、祐子は部屋を出て行った。ドアが完全に閉まって漸く安堵の息を吐き、芹香はベッドから足を下ろす。火照った素足には、フローリングの床がやけに冷たく感じられた。

ナイトテーブルに視線を移すと、先ほどまでは気付かなかったが、皿に隠されるように位牌が置かれているのが見えた。祐子が置いてくれたのだろう。

皿を取りながら、部長は無事であるだろうかと、芹香はぼんやりと考える。本部長は中立派だから、直接危害が及ぶ心配はないだろうが、もしばれたら、どうなるか分からない。

全てが自分の不始末のような気がしていた。正義漢ぶってここま
で来たはいいが、それが正しいことなのかどうかなど、彼女には分
からなかった。こうなってしまう以上、正しくはなかったのかも
知れない。しかし向こうが正しいとも言えないし、言いたくはない。
仮にそうだったとしても、信じたくはない。

何が正しくて何が間違っているのかなど、今はどうでもいい。彼
女の厚意に甘えてばかりもいられない。しかし当面は、ここで厄介
になるとして。

そこではたと、芹香は粥を口に運ぶ手を止めた。

どうすればいいのだろうか。行く当てもないし、そもそも父親以
外に身寄りもない。頼れる人間は社内には存在せず、それも自分
が頼ってしまえば、必ず矛先が向くだろう。それだけは、避けなけ
ればならなかった。

芹香に私生活と呼べるものは、殆どなかった。ひたすら仕事に打
ち込み、たまに休みがあれば、一日中眠る。そんな毎日を過ごして
いたから、会社では特定の友人も作らなかった。死んだ父以外に親
類はおらず、その父が死んで、本当に一人になってしまった。

仕事をなくし、帰る家もなくし、たった一人の父さえ奪われた。

突如として訪れた孤独が、背筋を冷やす。

何も、なくなってしまうた。喪失感だけが胸を満たし、芹香は震
える。

「……惨めだな」

空になった皿を置き、芹香は自棄になったようにベッドへ仰向け
に倒れこんだ。最早涙も出ない。今の今まで抱いていた喪失感さえ
もすっかり消え失せ、残ったのは自責の念だけだ。辛いとも悲しい
とも、不思議と思わなかった。

あの時、高屋敷本家の一人娘が浄霊屋となる道を選んだ時、羨ま
しいとさえ思った。彼女は今、自由だ。自由な人の下で、自由に生
きている。窮屈な社内、針の筵に座るような思いをすることもな
いのだろう。

自分は何をしていたのだろう。忙しさにかまけて、自分を省みることもなかった。自分自身の事など、どうでもいいとさえ思っていた。夢はあつたけれど、それは永遠に夢のままだと、叶える前から諦めてもいた。

常に前へ進んでいるつもりでその実、ただ同じ場所をぐるぐると回っているだけに過ぎなかったのではないだろうか。総てを知っているつもりでいて、本当は鳳コーポレーションという、狭い世界の事しか知らなかったのではないか。

浄霊屋のあの娘も、霊媒師になると言つた少女も、家を飛び出した彼女も。今は恐らく、芹香よりは広い世界を見ている。そして気がついたら浄霊屋になつていた、彼も。

鳳という大きいようで狭い世界の中で暮らしていた彼女は、それ以外の事など知る由もなかった。ひと時の暇をどのようにして使えばいいのかも、分からない。とにかく今は体を休めることが先決なのだろうが、動いていないと落ち着かなかつた。

中身がない人間なのだ。白銀という屈強な殻の中には、何も存在しない。その名前だけが一人歩きして、芹香自身には、何もなかった。幽霊退治以外の事は、何も分からない。

その名前を、何度恨んだだろう。それが自分でなければいいとさえ思っていた。憧憬の目を向けられるのも、賞賛されるのも、嫌だつた。それはただの退治屋であつて、芹香ではなかつたからだ。

だから、だつたのだろう。あんたは何だと聞かれた時、嬉しかったのは。白銀という退治屋を知らない人がいた事が、嬉しかった。そして、思った。彼なら芹香を、芹香として見てくれはしないだろうかと。

そんな事を考えている場合では、ないというのに。彼女のそれは、現実逃避だつたのだろう。境遇を憂えている訳ではないし、自分を哀れんでいる訳でもない。

ただ鳳に居場所を失くした今、次に働くのならあの人のところがいいと、そう思った。

「白銀は初心だって、本当だったのね」

祐子は愉快そうに小声で呟きながら、ジャケットを羽織った。その襟には、金色の徽章が光っている。

「申し訳ないけど、大人しくして貰わないと困るのよ」

誰に聞かせるでもないその独り言は、自分に言い聞かせているようにも聞こえた。祐子は姿見の前で身形を整え、軽い足取りで玄関へ向かう。

ようやく、悲願が成就する。そう思うと、心ばかりでなく体まで軽くなったような気がした。

「もうすぐよ、俊樹。やっと見つけたの。邪魔も入らない。やっとここまで強くなれた。もうすぐ終わるわ」

パンプスに爪先を滑り込ませながら、靴箱の上で微笑む青年の写真を一撫でし、祐子は玄関から出た。マンションの廊下は静寂に包まれており、彼女のヒールが立てる音だけが響く。

「待ってなさい、知恩院明」

呟いた祐子の声は、到着したエレベーターが立てた高らかな音に掻き消された。

第四章 終わりなき連鎖 五

夕方頃、里佳の家から戻ってきた三人は、それぞれ何故か憂鬱そうに肩を落としていた。渚は疲れきった表情で黙り込んだまま時折溜息を吐き、ゆなは藤堂の正面で客用の椅子に座り、カウンターに突っ伏している。すっかり定位置になった藤堂の隣に腰を下ろした明は、頬杖をついて遠い目をしていた。三人が三人ともこの状態では、何があつたのか聞く事も躊躇われる。

空気が重い。藤堂は煙草を灰皿に押し付けながら、重苦しい空気を打ち消すように深い溜息を吐いた。何があつたのか知らないが、戻るなりこれでは困る。何か言われない限りは黙っているのが藤堂の基本スタンスだが、流石に放っておく訳にも行かなかった。

「何お前ら、報告もナシ？」

明が虚ろな視線を藤堂へ向け、すぐに逸らした。暫く何か言いたげに口が動いていたが、結局何も言わず、疲れ切ったようにうなだれる。全員先ほどから、溜息ばかり吐いていた。

「ゆなは疲れました」

伸ばした両腕の間から顔だけを上げて、ゆなが呟いた。大きな目が半分閉じられており、こちらも言葉の通り、珍しく疲れ果てているようだ。

「あれが修羅場というものなんですわね……」

呆然と独りごちた渚は、頭痛を堪えるように額を押さえていた。そう言われても、事情を知らない藤堂には何の事やらさっぱり分からない。果たして依頼人の家で、何が起きたのだろうか。

怪訝な表情のまま煙草に火を点けた藤堂を、明が縋るような目で見上げた。そんな目で見られても、何も聞かされていない藤堂は困るばかりだ。

「あのね、里佳さんの家にいたのは、お父さんの霊だったの」

「へエ」

「でね、里佳さんの彼氏がギャンブル狂だから別れるって、伝えたかったみたい」

明はどうも、話す事で気を紛らわそうとしているらしかった。それならばと、藤堂は黙って聞く姿勢を取る。元々、相槌を打つぐらいしか能も無いのだが。

「伝わって満足して、お父さんはちゃんと成仏したよ」

「そりゃ良かったな」

明は嬉しそうに、少し笑う。藤堂は頭でも撫でてやろうかと思っただが、ゆながうるさそうなのでやめた。

「里佳さんも分かってくれたんだけど、問題はその後」

思い出してしまったのか、明は表情を曇らせて口ごもった。しかし藤堂が急かすより先に、疲れた表情で黙り込んでいた渚が口を開く。

「依頼人には、今すぐ別れの電話を入れるけど、心細いから居てくれと言われたんですわ」

溜息混じりの声に、明が続ける。

「それならって、話が済むまで一緒にいるって事になったんだけど

……怒鳴り込んで来ちゃったの」

「……彼氏が？」

明と渚は、同時に頷いた。話も半ばだが、藤堂は聞いているだけで疲れてくる。

「大変だったんですよ。里佳さんは泣き出してしまって話も出来なくなるし、彼氏の方は逆上して暴れるし」

「罵倒の嵐でした。コップは投げるわ鏡は割れるわ壁は壊れるわ、

そこら中ボロボロだったのです」

「執事さんが何回つまみ出しても、また部屋に入って来るし」

それでは十代の二人も二十歳になったばかりの渚も、参ってしまっただろう。擦れていない娘等にとっては、見るに耐えない修羅場だったに違いない。執事も災難だったようだが、三人とも、よくぞ怪我なく帰ってきてくれたものだ。

自分もついて行ってやれば良かったと藤堂は思ったが、浄霊をしに行つて修羅場に巻き込まれるなど、誰が予想出来ただろうか。何より一緒に行つていたところで、藤堂は何もしなかつただろう。彼は酔っ払いの喧嘩を見かけると、ギャラリーに混じつて見物してしまふ方だ。

「結局、ゆなちゃんが収めたんだけどね」

驚いてゆなを見ると、彼女は誇らしげに胸を張った。またぞろ下らない事を言つて黙らせたのだらうと、藤堂は呆れた顔をする。

「なんつったの？」

「うちの所長は貧乏でだらしない上に無口ですが、ギャンブルもしないし女性を泣かせたりもしないと言いました」

やっぱり下らないことを言つて呆れさせたのだ。藤堂は辟易して、鼻の頭に皺を寄せる。

「……そんだけ？」

明と渚は顔を見合わせて苦笑した。何やら嫌な予感がする。

「里佳さんがね、口から生まれたようなあなたに貢ぐくらいなら、余計な口出さない藤堂さんに貢ぐつて言い出して」

「それでシヨック受けたんですわね、彼。喋りに自信があつたのでしよう。すごすご帰つて行きましたわ」

藤堂は脱力した。下らないプライドもあつたものだ。夜の客商売でもしていた男だつたのだらうか。

「無論、藤堂さんにはゆなが貢ぐ予定なので、丁重にお断り致しました」

ゆなの言葉を聞き流し、それでは父親も浮かばれなかつただらうと、藤堂は考える。

口だけが取り柄の駄目な男に貢いでしまう女の気持ちは、彼には判らない。ろくでもない男に惹かれるのは母性本能のせいだと、藤堂の母は父を睨みながら言っていた。そういうものなのかも知れないと思う。

「散々罵倒した拳句、女性に手を出す男なんて、最低ですわ」

渚はカウンターに凭れて、憤慨した調子でそう言った。ゆなが大きく頷く。

「その通りです。ゆなの父上様も言っておられました。どんなに喧嘩しても、最終的に手を出すような男は絶対に選ぶなと」

ゆなの熱い視線を受け流しながら、あの父親なら、相手が誰であろうと反対するだろうと、藤堂は思う。

喧嘩したら最終的に手が出るのは、男も女も同じことのような気がした。罵倒されても聞き流す藤堂は、女と喧嘩はおろか口論さえした記憶もないが。自分ならゆなの父親が言う条件に合うかも知れないと考えたところで、ぞっとしてやめた。

「問題は喧嘩云々じゃないよ、あのヒト、里佳さんに貢がせてたっというんだから」

眉をつり上げた明は、憤慨した調子でそう言った。逐一よく怒る娘だ。

「解んないなあ。里佳さん、どうしてあんなヒト好きになっただんだろっ」

明は不思議そうに、首を捻ってぼやいた。眉の位置で切り揃えられた前髪が、さらりと揺れる。そんな事は、本人以外には到底理解出来ないだろう。

他人が口を出すことではない。恋路を邪魔するわけではないが、依頼人の好みに口出しすべきではないだろう。

「蓼食う虫も好き好きだと、母上様は言っておられました」

首を捻ったまま、明がゆなを見た。口元が笑っている。

「ソレお父さんのこと？ 藤堂さんのこと？」

「カラくねえよ俺は」

さも愉快そうに、明が笑った。笑うと元々下がり気味の目尻が、更に下がる。ようやく調子が戻ったようで、藤堂は安堵した。乗られると困るが、悪いとなんとなく、こちらも沈んだ気分になる。

「理解出来なくとも、そんな男を選んだのは本人ですわ。私達が口を出す事ではありませんわね」

「そりゃそうだ」

しかしそんな男に貢がされる娘を、父はどんな気持ちで見ているのだろう。すぐ傍にいる娘に気付いて貰えない事は、どんなに歯痒かっただろう。どんなに叫んでも伝わらないことは、どれほど悲しかっただろう。考えても仕方のない事だが、考えずにはいられなかった。

それでも父親は、救われた。具体的に彼女達が何をしたのか知らないが、霊を浄化するというのは、そういう事なのだ。迷う人を救う事、それが浄霊なのだとしたら、成り行きながらこの仕事に就いてみて良かったと藤堂は思う。誰かの役に立ちたいなどと大それた事を考えているわけではないが、何の役にも立たないよりはましだろう。

無論、藤堂には何も出来ない。直接的に霊と対話する術もない。だからこうして彼女達の愚痴を聞くという、些細なことに関してだけでも、役に立ってればいいと思う。

藤堂が満足感に浸っていると、誰かの腹の虫が鳴いた。明と渚が慌てて首を振り、藤堂を見る。彼が首を振って否定すると、二人の視線がゆなに向いた。

「ゆなはお腹がすきました」

あつさりと片手を挙げて自供したゆなは、腹を撫でながら藤堂を見上げる。無表情ながら、その大きな目は期待に満ちていた。藤堂は思わず嫌な顔をする。

「……食いに行きてえの？」

「いいえ、作って下さい」

「俺が？」

「無論です」

こくりと頷いて、ゆなは藤堂のポロシャツの袖を軽く引つ張った。家に帰れば母親の美味い手料理が待っているというのに、わざわざ男の作った不味い飯など食べたがる気持ちが分からない。それ以前に、夕飯時にはまだ早い。

「何もねえぞウチは」

「それでは今からお買い物に行きましよう」

「また店空けるってのか」

生地が伸びるほど服を引っ張って駄々をこねるゆなを見て、明が朗らかに笑った。困惑した面持ちで、藤堂は明へ視線を移す。助けを求めるような目だったが、明は気付かない。

「いいじゃない、作ってあげなよ。買い物しに行って帰って来たら、いい時間なんじゃない？」

ゆなは満足そうに口元を緩めたが、藤堂は渋い表情を浮かべた。経済的にはいいのだろうが、面倒だ。

「ついでにこれから、ゆなのお昼ご飯は藤堂さんが担当で」

「なんでそうなるんだよ。弁当あるだろお前」

怪訝な面持ちで三人を眺めていた渚が、首を傾げた。

「あなた、男性なのに作れるんですの？」

藤堂は片眉を上げて、渚を見上げる。ウェーブを描く金髪を指先で玩んでいた渚は、すぐに顔を逸らした。

「一人暮らししてんだから、作れねえと困るだろ」

藤堂が答えても、渚は得心が行かないような表情を浮かべていた。どんな家で暮らしてきたのだろうと、藤堂は訝る。お嬢様育ちというのは、庶民と感覚が違って当然なのかも知れないが。

「渚さんは作らないのですか？」

ゆなが聞くと、渚は見下すような視線を彼女に向けた。ゆなは力ウンターの上に伸ばしていた腕に頭を乗せ、首を傾げる。

「それでも調理師免許を持っておりますの」

「へエ、すげえな」

気のない声だったが、渚は一気に耳まで赤くなった。ゆなが不満げに唇を尖らせる。馬鹿にされても気にしなくせに、こついう時は口を出してくるのが彼女だ。

「と、当然ですわっ」

「ゆなも作れるのです」

藤堂の服の袖を掴んだまま、ゆなが小さな手を高々と挙げた。明は遠い目で三人を見ている。いかにも輪に入りたくなさそうな面持ちだったが、当然だろうと藤堂は思う。明の性格なら、好き好んで料理自慢などしたくはないだろう。

「じゃ、明日から昼飯は交替で作るか。お前らもうちょっと早く来い。いいだろ高屋敷」

長い睫毛を伏せたまま、渚は頷いた。

「メイは？」

「私は無理、お昼は家で食べてきちゃうから」

明が申し訳なさそうに首を振ると、ゆなが残念そうに肩を落とす。提案したはいいが、何故従業員と交替で昼飯を作る羽目になるのかと藤堂は思う。

しかし、悪くはない。昼飯代の節約にもなる。

「まあ、買い物行くか」

藤堂が立ち上がると、ゆなは丸い頬を仄かに赤くした。嬉しいのだろう。藤堂は子供を持ったような錯覚を抱いた。

「私は帰るね。なんか疲れちゃった」

つられて立ち上がった明は、大きく伸びをした。制服の短い裾が持ち上がって、白い腹が露になる。滑らかな肌に一瞬釘付けになったが、藤堂は慌てて視線を逸らした。

「高屋敷は行くか？」

引き出しから財布を取りながら藤堂が聞くと、渚は凭れていた力ウンターから離れて腕を組んだ。

「行ってあげないこともないですわ」

ん、と生返事をして、藤堂は店を出た。財布も気分も、随分と軽い。

全員が外へ出てからシャッターを閉める途中、藤堂は、あ、と声を上げた。

「お前ら、依頼料は？」

三人は目を丸くして、あ、と呟いた。

第四章 終わりなき連鎖 六

芹香が祐子の家に厄介になり始めてから、早一週間。母親のように世話を焼いてくれる彼女を有り難くも思ったが、反面、日に日に申し訳なさが募って行った。芹香は幼い頃から退治屋になる為に育てられてきたから、碌に料理も出来ない。家事の一つぐらい覚えておけば良かったと、今更ながらに後悔する。

何も出来ない彼女に、祐子は嫌な顔一つしなかった。家政婦に任せきりで掃除もした事がないと言うと、彼女は朗らかに笑った後、おもむろに掃除機を持ち出して来て、使えるかと聞いた。流石にそれ位は分かる。

言われるまま、彼女は祐子に家事を教わった。芹香は一人っ子なので、兄弟姉妹というものを知らなかったが、姉がいたらこんな気分だったろうかと思う。

「いつも済まない」

夕飯の最中、唐突に切り出した芹香に、祐子は目を丸くした。

「何言ってるのよ。いなさいって言ったのはこっちよ、そんな遠慮しないで」

もう社員ではないので敬語は使わないでくれと言ったら、祐子は存外簡単にやめた。堅苦しい喋り方は好かないようだ。

遠慮するなと言われても、そういう訳には行かない。彼女にも仕事があるし、一つしかないベッドは来てからずっと、芹香が使わせてもらっている。いつまでもだらだらと厄介になっているのは、流石に心苦しかった。

しかし行く当てがないのも事実だ。そろそろ職を探さなくてはまずいような気もする。家に帰ることが出来ないから諦めかけていたが、幸い残っていた荷物は、部長が持つてきてくれていた。すぐにここを出ても良かったが、騒ぎが落ち着くまで外に出るなと忠告されているので、勝手な行動は起こせない。

「会社ね、ちょっとまだ落ち着かないのよ。部長は忙しくてあれからあんまり話せないし、ニューズはあんたがいなくなった事で持ちきりだし」

芹香は視線を落とし、僅かにうなだれた。

「済まない……私に何か出来ればいいんだが」

口に運んだ飯を咀嚼しながら、祐子は言葉を遮るように箸を持った手を軽く振った。

「何言ってるの、今出て来られたらこっちが大変よ。ただでさえマスコミが会社に張り付いてるってのに」

苦笑いを浮かべ、芹香は箸を置いた。多忙な日々を送っていた為か、彼女は異常に食事の時間が短い。

「それにさ、困った時はお互い様」

「それなら、あなたに何かあったら言ってくれ。幽霊退治以外は出来ないが」

空になった茶碗の上に箸を置きながら、祐子はさも愉快そうに笑った。

「ホント、天下の白銀様が洗濯機も使えなかったなんてね」

「そ、それは言わないでくれ……」

困ったように眉尻を下げると、祐子は目を細めて楽しそうに笑う。そして徐に立ち上がって台所へ行き、冷蔵庫から缶ビールを四つ取って戻ってきた。二本を芹香の前に置き、再び席に着く。

「お父さん、亡くなったんですってね」

開けた缶から空気が漏れる音にかき消されてしまうほど小さな声で、祐子は呟いた。芹香は虚を突かれて目を丸くし、二三度瞬きする。

「知っていたのか」

「部長が言ってた。ていうか、あんたの家に荷物取りに行ったのアタシだし……大変だったわね」

僅かに眉根を寄せて真剣な表情を浮かべた祐子に、芹香は曖昧に笑いかけた。

「実感が湧かないんだ。泣く暇もなかった」

「泣きたい？」

缶を傾けていた手を止め、芹香は眉根を寄せる。泣きそうだったのは確かだ。しかし今泣きたいとは思わない。

父は目の前で死んだ。あの時は確かに悲しかったし、怒りと共に涙が込み上げた。けれど、今思い出してみても泣きたいとは思わない。泣いている場合ではないのだとも思う。泣いている暇があるなら、職でも探すべきだろう。

困惑して黙り込んだ芹香に、祐子は小さく笑った。

「アタシはね、泣きたかったの」

「亡くなったのか」

驚いて聞き返すと、祐子は頷いた。それを見てから、芹香は缶の中身を一口飲んだ。冷えたアルコールが体中に染み渡る。

酒は苦手なわけでもないが、飲む機会があまりなかった。会社の飲み会にも滅多に参加しなかったから、今こうして毎晩祐子の晩酌に付き合っているのが、不思議なことのように思える。

「そ、お父さんがね、ついこないだ。泣こうと思って知り合いのトコ行ったんだけど、あいつ鈍くてダメだったわ」

思い出してもいるのか、祐子は僅かに笑みを浮かべたまま遠い目をしていた。彼女は早々と缶の中身を飲み干し、無造作にゴミ箱へ投げ入れる。

「ダメね、アタシも意地っ張りだから。あんたみたいに、強くなれないわ」

「いや、私は……」

強い訳ではない。ただ事実を事実として、受け入れきれていないだけだ。

母が死んだ時の事を、芹香は知らない。彼女を生んですぐに亡くなったので、顔さえ覚えていない。祖父母も彼女が生まれる前に他界しているから、死というものを直視する事なく、芹香は今まで生きてきた。

それが突然父の死と直面し、受け入れて泣けるかと言えば、そうでもない。死の瞬間を目の当たりにしたお陰で、そうと認識してこそのいるものの、すっかりと受け止められている自覚はない。

父の遺体がどうなったか、芹香は知らない。けれど今までも何かと世話を焼いてくれていた部長がその死を知っているならば、然るべき手続きを踏んで供養してくれているだろうとは思う。しかし出来ることなら、自分で供養してやりたかった。死という事実について深く考えられないから、それについて回る儀礼のことばかり考えている。

我ながら、嫌な娘だと思う。父の死を軽んじているわけではないが、自身の事で精一杯で、悲しむことも出来ない自分が嫌だった。しかしまともに供養も出来ないのでは、どうしようもない。

「……あなたは どうして、退治屋に？」
暫し続いた無言の間に耐えかねて、缶の中身を一息に飲み干してから唐突にそう聞いた。缶のプルトップを上げながら、祐子は視線だけを上げて芹香を見る。ううん、と曖昧な声が返ってきた。

「復讐」
面食らって新しい一本を取りかけていた手を止めると、祐子は苦笑した。その表情を見て、嘘ではないのだろうと芹香は思う。

「アタシね、昔彼氏を亡くしたの」
缶の縁に口を付けた祐子は、事も無げに言った。何と答えていいか分からず、芹香は缶を開けて黙ったまま一口飲んだ。独特の苦味が喉を通り過ぎる。

「まあ、色々あってね」
詳しく言う気はないようだった。聞くのも憚られたので、芹香は残った煮物を摘みながら酒を飲み進めて行く。

祐子は片腕をテーブルに着いたまま、視線を落としていた。ビールを嚙下する喉が立てる音だけが、静かな室内に微かに響く。聞かなければ良かったと、芹香は後悔した。

「……殺されたのか」

少なくなつた缶の中身を確かめるように振りながら、祐子は鼻を鳴らした。

「そんなカンジ。あんたも多分、知ってる人よ」

彼氏の方なのか殺した方なのか、芹香には判然としなかった。怪訝な顔を見ると、祐子は口角をつり上げて笑う。弧を描いた唇がいやに艶めかしく見え、芹香は一瞬たじろぐ。

彼女には、祐子が時折恐ろしく感じられる。何を考えているのか、全く分からない。それだけではない嫌な空気を、纏っているように思えた。

「知ってるでしょう。浄霊屋の、あの市松人形みたいな子」

驚愕に目を見開き、芹香はまじまじと祐子を見る。何を言われたのか、一瞬理解出来なかった。浄霊屋に知り合いなどそうそういないから、恐らく祐子が言ったのは、芹香が思い浮かべた人物で間違いないだろう。

「そんな……いやしかし、彼女は……」

「信じてくれなくてもいいわ。向こうにも考えがあつたんだろうし、アタシは確かに良くない事をしてた」

缶の底に残つたビールを飲み干して、祐子はテーブルに頬杖をついた。

「でも許せなかったの。許せないのよ……どうしても」

伏せられた目に黒いものが渦巻いて行くのが、見えたような気がした。祐子の表情は変わらないが、芹香はその目に寒気を覚えて身を竦める。

「手伝つてくれる？」

唐突な問いかけに、すぐには反応出来なかった。先ほどまで浮かんでいた確かな憎悪はどこへ消えたのか、上目遣いに上げられた祐子の目は、悪戯っぽく笑っている。芹香には、それが余計に恐ろしく思えた。

「彼女はそんな事をするような人間じゃない」

「真実なんて誰にも分からない」

「だが……」

祐子の目をそれ以上見ている事が出来ず、芹香は視線をテーブルに落とした。米粒一つ残さず空にされた茶碗が目映る。

具体的に何をされたのかは判然としないが、彼女の言う事が真実ならば、それはとんでもない事だ。糾弾されて然るべきだが、芹香は迷う。

祐子の言が真実であろうとなかろうと、復讐は何も生まない。悪霊に肉親を殺された事で恨みの念に取り憑かれ、無害な浮遊霊をも抹消するようになった人間を何人も知っている。

恩人であろうと、否、恩人だからこそ、復讐に手を貸す訳には行かなかった。そんなものに手を染めて欲しくはない。

「あなたの復讐に手は貸せない。私は彼らに借りがある。迷惑は掛けられない」

決然と言い切ると、祐子は再び目を伏せて笑った。酔いが回ったのか、その目は僅かに潤んでいる。

「ああ、藤堂君ね……いいわ」

祐子が呟いた言葉に、どきりとした。あの浄霊屋の件は迷惑を掛けた事もあり、何度か会社に報告していたから、接触があったと祐子が知っているのも頷ける。

しかし芹香は、藤堂の事など何一つ伝えてはいない。そもそもそこに結び付ける理由が分からない。確かに踏んでしまった借りがあるのは、藤堂なのだが。

祐子は空になった食器を手際よく重ね、立ち上がった。

「その代わり、忘れて。何も聞かなかった事にして」

芹香は思わず言い返してしまいそうになったが、すんでの所でやめた。何もしない代わりに、止めるなという事なのだろう。最初からそのつもりだったのかも知れないと勘繰りもしたが、言及はしなかった。

その後はお互い一言も発しないまま、眠りについた。

翌日、夕方を過ぎてても、祐子は帰って来なかった。時刻は午後七時。いつも定時で帰って来る彼女なら、とうに帰宅していて然るべき時間だ。

嫌な予感がした。しかし思い当たるのは、忘れてくれと言われた件だけだ。恩があるだけに関わるのも躊躇われるが、ここで手を拱いているのも嫌だった。

復讐心からは、何も生まれはしない。憎悪は新たな怨念を生み、肥大する。負の連鎖はいつまでも続き、止まる事はない。復讐をやり遂げたところで、残るのは虚無感だけだ。それで満足するかといえはそうではないだろうし、失ったものは戻らない。

芹香はソファから立ち上がり、スーツのジャケットを羽織った襟にはもう、鳳の徽章は付けられていない。

上着を探って携帯電話を取り出して、二度と掛けはしないだろうと思っていた番号を選び、通話ボタンを押した。

「……白銀だ」

コール二回目で電話を取った受付嬢は、名乗った瞬間大声を上げた。芹香は携帯を遠ざけて顔をしかめた後、どこにいるのかとまくし立てる声を遮って、早口に告げる。

「今はそれどころじゃない、騒ぐな。本部長に回してくれ……いな？ 新藤祐子はまだいるか？」

電話口からキーボードを叩く音が聞こえた後、否定の言葉が返ってきた。芹香は更に渋い顔をする。

「新藤主任のGPS情報を、私の携帯に。誰にも何も報告するなよ、急いでくれ」

最早一刻の猶予もない。それだけ言って、芹香は電話を切った。

第四章 終わりなき連鎖 七

「どうして封印して帰ってきちゃうの、何の解決にもなっていないじゃない！」

憤慨した明は先程からずっと、肩にバットを担いだまま渚に説教していた。最初は逐一言い返していた渚も、明の相手をする内に段々と疲れてきてしまったようだ。今や呆れた表情で、言い訳じみた返答を繰り返すようになっていた。

「だ、だから違……」

「そんなにひどい悪霊だったら他の業者に頼めばいいのに、もう」事の発端は、渚の発言。最初は他愛ない雑談だったのだが、渚が井戸に霊を封じた事があると言ったのを、明が叱ったのだ。封じてどうなるのか、と。

幽霊屋敷の場合は、手の施しようがなかったから仕方なく封じたという異例で、通常は封じたまま放置しておく事はない。手に負えない場合は別の業者に片付けてもらうのが通例であり、そう決まっているらしい。そんな連携があつたのかと、藤堂には少々意外に思えた。

「あれは悪霊じゃありませんでしたの」

「尚更問題じゃない！」

「だ、だからあの霊は……」

「霊をほつといたら、そこら辺の邪気を吸って悪霊になっちゃうよ」藤堂とゆなは正直なところ、明の説教に閉口していた。面倒だったので藤堂は止めたが、結局全員明に引っ張って来られてしまった。憤慨する明の前では、渚が何を言っても無駄だ。

藤堂には、依頼も請けていないのに、首を突っ込む事の方が問題に思われた。浄霊屋とて慈善事業ではないのだ。金が入らないのにわざわざ交通費をかけて、全く関係のない件に口を出す必要はないだろうと思う。

しかし優等生の明からしてみれば、そうは行かないのだろう。黙っていられないのは分かるが、引っ張り回される方の身にもなつて欲しい。

「今回はそうじゃな……」

「どんな霊だつて、供養もしないでほつといたら駄目だよ」

「話聞いてやれよメイ」

呆れた藤堂が諫めるも、明はそれも聞いていなかった。流石の渚も、最早それ以上口を挟めないでいる。ゆなが大きな目で明と渚を交互に見た後、無表情のまま藤堂を見上げた。

「ダメなのです。師匠はああなつたら誰の話も聞きませぬ」

「見りゃ分かる。大人しくついてくしかねえな」

前に行く明と渚を見て、藤堂は憂鬱な溜息を吐いた。夕ダ働きに全員ついて行く必要が、果たしてどこにあつたのだろう。勢いで連れて来られたはいいが、せめて自分ぐらいは静かに店番をさせていて欲しいと藤堂は思う。

最近はやうやく、客が入るようになってきたのだ。相変わらず質屋の方は儲からないが、浄霊屋の方は一週間に三四件は依頼が来る。高屋敷の娘が入つたと評判になつていようだから、そのせいかも知れない。

「あれかな？」

寂れた商店街を抜けた先、大きな公園の敷地内にある鬱蒼とした林の中に、それはあつた。明が指差した先には、古めかしい井戸がぽつんとある。

「足元が非常に悪いのです」

腐葉土に沈むブーツを見ながら、ゆながぼやいた。渚もパンプスを気にしていたが、明だけはさつさと井戸へ近付いて行く。

朽ちかけた古い井戸には、不規則に札が貼り付けられていた。入り口を塞ぐ木製の蓋だけはやけに新しく、縁が五力所ほど札で押さえられている。井戸の周りを囲むように一升瓶が置かれてあり、強いアルコールの臭いが鼻を突いた。

「渚さん、剥がして」

しつこく足を気にしていた渚は、細い眉を困ったように顰めた。言い返そうと口を開きかけたが、これ以上明と口論したくなかったのだろう。渋々井戸へ近付き、ゆっくりと蓋に封をする札を剥がして行った。

「もう勝手になさい」

自棄になって吐き捨てた渚が蓋を開けた瞬間、井戸の中から騒がしい笑い声が響き渡り、酒気が強くなった。ゆなが思わず耳を塞ぐ。藤堂は慌てて眼鏡を掛けたが、何も見えなかった。

井戸の中からは、複数の人間が笑う声だけが聞こえてくる。嫌な雰囲気ではないから、確かに悪霊ではないのだろう。しかし井戸に反響して山彦のように響くその声は、藤堂に違和感を覚えさせた。やけに楽しそうに聞こえるのだ。

明が顔をひきつけ、鼻を摘んで井戸から一歩離れた。漂ってくるアルコールの臭いに、耐えられないのだろう。

「な……なんかこれ……」

「酔っ払いの声に聞こえるのです」

への字に曲がった眉の尻を更に下げたゆなに、藤堂は頷いて見せた。声からすると、中年の親父だろう。強い酒気と共に聞こえてくる声は、明らかに酩酊した人間のそれだ。

渚は井戸から三步ほど離れて、漂う酒の臭いを払うように顔の前で手を振っていた。

「だから言ったじゃありませんか……あら」

ぼやいた渚は、何かに気付いたような声を上げた。食い入るように井戸を見つめていた藤堂も同じく、げ、と呟く。

「煩いのが出て来てしまったじゃない。知りませんわよ、絡まれても」

井戸の縁に、半透明の手が掛かっていた。同時に呂律の回らない声が、よっこらせ、と呟く。光景だけ見ると背筋の凍るような思いがするのだが、その声のせいでも間抜けに見える。

「お、なんだいお嬢ちゃん。酒はまだ早えんじゃねえのかい」

明は井戸から這いだしてきた霊を見て、啞然とした。

それは赤ら顔の親父だった。丸まると太った体を窮屈そうに井戸から引つ張り出したが、上半身が出たところでバランスを崩し、地面へ転げ落ちる。無機物に触れない幽霊は、井戸に引つ掛かる事などないはずなのだが。

酔っ払いは痛そうに顔をしかめて膝を撫でながら、井戸の縁に腰を下ろした。実際はそう見えるだけで、単純に座った姿勢で浮いているのだろう。

明は頬を引きつらせて、酔っ払いの霊を指差した。指先がわなわなと震えている。

「な……何やって……」

「んん？ 飲むかい？」

足下の一升瓶を指差して、親父は呂律の回らない口調で問い掛けた。明は慌てて首を左右に振る。

「何やってんの、あんた」

呆れた藤堂が、気の抜けた声を掛ける。泥酔した親父は藤堂を見て、うつんと首を捻った。

「兄ちゃんは生きてんだなあ。生きてちゃ宴会にや、参加出来ねえなあ」

「いや、しないから」

きっぱりと拒否すると、酔っ払いは悲しそうな顔をした。死ねとでも言うのだろうか。たとえ死んでも、こんな辛気臭い場所で開かれる宴会になど、参加したくはない。

「もういいでしょう」

溜息混じりに渚が言うと、親父はぱつと顔を明るくした。

「おう姉ちゃん、久しぶりだなあ」

「お元氣そうで何よりですわ。蓋を閉めますから、さっさとお戻りになって」

「冷たいなあ。ここはいいよ、いつでも皆いるし」

「いいから早くなさい」

渚がぴしゃりと跳ねつけると、親父は肩を竦めて上体を後ろへ傾けた。そのまま倒れ込むように、彼は井戸の中へと吸い込まれて行く。藤堂は驚いて目を丸くしたが、三人は無反応だった。

渚は何事もなかったかのように再び井戸へ歩み寄って蓋を閉め、胸ポケットから取り出した札を元のように貼り直した。そして呆然と立ち尽くす三人を振り返り、溜息を吐く。

「だから言ったでしょう。もう行きますわよ、靴が汚れてしまいましたわ」

文句を言いながら林を出て行く渚の後ろ姿を見ながら、三人は顔を見合わせて、後を追うように歩き出した。明は複雑な表情を浮かべている。

「あの……ごめんね、疑って」

明は小走りで渚の横へ並び、おずおずと顔を覗き込んだ。渚はちらりと明を見たが、鼻を鳴らしてすぐに視線を戻す。

「私が受けたのは、騒音に対する苦情でしたのよ。每晚酒盛りしていてうるさいから、追い出してくれと言われましたの」

井戸を窺うように肩越しに振り返った渚は、丁度後ろにいた藤堂と目が合って、慌てて正面に向き直った。説明を聞いた明が、益々肩を落とす。後悔する位なら人の話はしっかり聞けばいいだろうに、と藤堂は思うが、一度思い込んだら止まらないのだろう。藤堂は何度も、明のこの思い込みのせいで大変な目に遭っている。

「あの井戸の底は幽世かくりよだったのですわ。常世とこよでも現世うつしよでもない、幽霊の世界。だから取り壊されずに残っていたの」

「繋がってるの？」

「そのようですね。だから、騒ぐ声が漏れないようにああして蓋をして、現世の邪気が入らないように封をしましたの」

常世と常夜とこよはあの世、現世はこの世。幽世はその狭間、常世と常夜の手前にある世界。それがどんな場所なのかは、死んでみなければ分からない。藤堂は以前、明からそう聞いた。

邪気とは果たして何なのだろうと、藤堂は時折思う。現世に蔓延するあらゆる負の感情を、総じてそう呼ぶらしいのだが、いまいち腑に落ちない。怨念、憎悪、嫉妬、悲哀。怨念と憎悪は確かに邪気だろうと思うが、嫉妬や悲哀は果たしてそうなのだろうか。

体をなくして魂だけの状態となったものが、幽霊だ。彼らは非常に無防備な状態であるが故に、他人の感情に影響を受けやすい。己の怨念や生前の行いだけでなく、邪気にも影響されて悪霊化するのはその為だ。

霊は供養されて幽世へ送られない限りは、現世を彷徨い続ける。四十九日というのは、供養された霊が幽世へ行く目安の日なのだそう。恨みや強い未練を残していない霊でも、供養もされず邪気を受け続けた霊は、徐々に変貌して行く。これに藤堂は驚いたが、ゆなも初耳だったようだ。渚は当然知っていたが。

そうして最終的に害を為すようになったものを、悪霊と呼ぶ。これには多く種類があるようだが、藤堂は忘れた。長々と話を聞いても、覚えているのは一部だけだ。

「あれで大丈夫なのですか？」
「害はありませんわ。あの札の効力が切れる頃には、彼らも常世へ行っていることですよ」

事務所付近まで戻って来た頃には、辺りはすっかり橙色に染まっていた。夕陽が照らし出す街並みは、いつもと同じ風景である筈なのに、どこか物悲しく感じられる。

「……あれ？」
渚と雑談しながら先を歩いていた明が、怪訝な声を漏らして立ち止まった。反応の遅れた藤堂は彼女より一歩前へ出てから、同じく足を止める。

明の視線の先には、質屋のシャッターに凭れる人影があった。逆光で顔形は覗えないが、体型から察するに女性だろう。藤堂は訝しげに首を捻り、人影へと近付いて行く。

「ああ……祐子さんか」

夕陽を背にしていた祐子はシャッターに凭れていた体を起こし、藤堂を見て華やかな笑みを浮かべた。その表情に、藤堂は違和感を覚える。いつもと同じ笑顔なのだが、どこか陰があるように見えた。「遅いじゃない、待ったわよ」

眉根を寄せて、藤堂は怪訝な表情を浮かべる。何を待っていたというのだろうか。待ち合わせをしていた記憶はない。

背後からゆなが駆け寄って来て、藤堂の腕にしがみついた。

「どなたですか？」

藤堂は見上げて来る大きな目に視線を落とす、ああ、と呟いた。

そういえば、ゆなは祐子と顔を合わせたことがない。

「うちの常連」

「こんばんは」

微笑みかける祐子にじろじろと不躡な視線を送るゆなは、引き結んだ唇をへの字に曲げた。藤堂の腕を掴んだまま、数歩ばかり後ずさりする。子供らしい仕草だが、ゆなの場合、実際何を考えているのか全く分からない。

「後ろの方もですか？」

「へ？」

藤堂には、祐子の後ろに何も見えなかった。眼鏡は掛けっぱなしだった筈なのだが、レンズ越しでも見えない。果たしてゆなは何を見たのかと訝って背後を振り返ると、明が凍り付いたような表情で立ち尽くしていた。渚は藤堂と同じく、不思議そうに首を傾げている。

藤堂の背中を、冷たい汗が伝う。祐子は何も答えない。

日が長くなったとはいえ、時刻は六時をとくに回っている。流石にもう、夕闇がすぐそこまで迫っていた。暮れなずむ街を覆い始めた夜の帳が、体内までも侵食して行くような錯覚に陥る。見知った人物がこんなにも恐ろしいと感じたのは、初めての事だった。

「勘がいいのね。普通気付かないわよ」

恐る恐る祐子に向き直ると、彼女は未だ、うつすらと微笑を浮かべていた。普段となんら変わらないその表情に、藤堂は薄ら寒さを覚える。

「ゴメンね。藤堂君」

祐子の指先が、大きく開いたシャツの胸元に伸びる。豊かな胸の谷間から取り出された札を目にした明が、ようやく我に返った。

「藤堂さん、下がって」

明は刀を抜きながら藤堂の前へと進み出て、祐子と対峙する。彼女を見た祐子の目には、どす黒い憎悪が渦巻いていた。

第四章 終わりなき連鎖 八

藤堂は状況が理解出来ないまま、呆然と立ち尽くしていた。彼の目の前で睨み合う明と祐子は、一触即発の緊張感を漂わせている。女同士の睨み合いとは何故こんなにも恐ろしいものなのかと、藤堂は現実逃避のように考えた。

啞然としていた所で、唐突に腕を引つ張られた。驚いて手元を見ると、ゆなが俯き加減に二人を注視したまま、藤堂の腕を引いている。表情は普段と大差ないが、焦っているような仕草だった。

「藤堂さん……下がった方が良いのです」

「何？」

聞き返すと同時、肩を押されて藤堂は数歩横へ退く。彼をどかしたのは、ゆなの手ではない。

「邪魔よ藤堂、おどきなさい」

居丈高な台詞と共に、渚が明の横へ立った。首を捻っていた彼女も、漂う緊張感には気付いたようだ。

渚は胸ポケットから札を取り出し、軽く振った。現れた執事が肩越しにちらりと背後の藤堂を見て、また正面へ向き直る。守られてもいるかのような状況に、藤堂は複雑な心境になった。確かに彼には、何も出来はしないのだが。

「なんなんですか？ ただの質屋の常連さんが発しているいい気ではなくてよ」

「あの人は……」

つり上げた眉根を寄せて複雑な表情を浮かべた明が、ぼつりと咳く。

「私が昔、不幸にしてしまった人」

ゆなに手を引かれるまま後ろへ下がりつつ、藤堂は明の台詞に目を丸くした。言葉の真意は知れないが、関わり合いがあったのかと、そちらに驚く。祐子はひらひらと札を振りながら、鼻で笑った。

「用があるのは、その市松人形だけよ。高屋敷の子は下がってなさい」

「ちよつと待つてよ祐子さん」

穏やかならぬ空気に耐えかね、藤堂は三人の後ろから声を掛けた。祐子は彼に一瞥もくれず、札を顔の前に翳す。

「……ゴメンね藤堂君。でも許せないの」

祐子が小さく呟いた瞬間、札から黒い塊が這い出して来た。明が刀を握り締めたまま硬直し、渚は驚愕に目を見開く。執事までもが凍り付く中、ゆなは口元に手を当てていたが、変わらぬ無表情を保っていた。

それはただの、黒い塊のように見えた。手も足も生えてはおらず、瓢箪型の胴体だけが宙に浮かんでいる。高さは藤堂の身長より、少し低いぐらいだろうか。ずんぐりとした胴体の上部には、切れ込みを入れたような目が二つあり、時折開いては周囲を見回していた。よくよく見れば表面は人間の皮膚のような質感を持っており、尚の事不気味に感じられる。

目を開いているから意思はあるのだろうか、藤堂は思う。しかし目の前の霊に、人間の面影は殆ど残されていなかった。ここまで変容していると不気味ではあるが、逆に滑稽に思えて、恐怖さえ感じない。

怪訝な表情の藤堂とは対照的に、三人は黙り込んだまま黒い瓢箪を見つめていた。一瞬にして凍りついた空気に、藤堂はあれがそんなに恐ろしいものなのかと訝る。

「な……なんで……退治されたんじゃないの？」

呆然と呟いた明の顔は、青ざめていた。渚は執事に寄り添い、緩く首を振っている。目の前の光景を、信じたくないようだった。未だに緊張感のない藤堂は、片眉を寄せて顎を搔く。

「アタシが使役してるから、無闇に暴れなくなっただけよ。でもね」
祐子の人差し指が、明を指した。明はびくりと華奢な肩を震わせ、一歩後退する。

「狂暴さは変わらないわよ」

祐子の目が妖しく光った。この瓢箪が一体何だというのだろうか。この塊が一体何をするのか、藤堂には想像もつかない。少し指で押ししたら、後ろへ転がって行ってしまいそうに見える。

すっかり気圧されていた明は、頭を左右に振ってきつく刀を握り締めた。腹を括ったのかも知れない。

「藤堂さん。絶対、コウ君達に手を出させちゃダメだよ」

瓢箪の目が、明を見下ろした。胴体の中央部に切れ目が入り、両端がつり上がる。笑っているかのようだった。

「食べなさい」

祐子の声が合図だったかのように、瓢箪の中央に入った切れ目がぱっくりと割れ、大きく開いた。藤堂は思わず、身を竦める。

それは巨大な口だった。尖った歯がびっしりと上下に並び、歯茎も口腔も血のように赤い。粘性のある唾液が糸を引きながら、コンクリートに滴り落ちた。これは確かに忌むべき存在だろうと、藤堂はようやく理解する。

「……なに、アレ」

「五年ほど前まで、巷を騒がせていた大食いの悪霊なのです。通り魔です。魂を食べます。なんかもう色々食べます。浮遊霊が何人も食べられました」

ゆなは藤堂の腕を胸に抱き込み、瓢箪を真っ直ぐに見ていた。淡々とした口振りからはとてもそうとは思えないが、その仕草を見る限り、怯えているようだ。

「食うの？ 霊を？」

「はい。でも鳳さんが退治したと聞いていたのです。あの方が飼っておられたのですね」

そんなものを相手にして大丈夫なのだろうか、藤堂は不安に駆られる。しかし外野の心配をよそに、明と執事は同時に地を蹴った。口腔から覗く細長い舌が、尖った歯をなぞる。その異様な光景に、藤堂は身を引く。

瓢箪の口から触手のように細長い舌が何本も飛び出し、明に襲い掛かった。明は不規則に蠢いて足を捕らえようとする舌を蹴り飛ばし、腕に絡み付いたものを刀で切り落とす。切断された舌の先端は暫く地面でのたうった後、煙のように消える。

僅かに動きが鈍った瓢箪の胴体に、拳を構えた執事が飛びかかる。しかし振り被った腕を舌に跳ねのけられ、慌てて飛び退いた。元々霊体である執事は、捕まったら一巻の終わりだろう。

次々と際限なく伸びて来る舌を一気に斬り払いながら、明は瓢箪の向こうの祐子を見て叫んだ。

「お願い聞いて！ 違うの！」

「何が違うの？ 頼んでもいないのに、あんたはアタシの恋人を消した。まだ四十九日も過ぎていなかったのに」

明は悲しげに表情を歪め、スカートを翻してその場から飛び退いた。しかし何本もの触手がその後を追い、白い足に絡み付く。それを刀の刃が切り落とすが、また新たな舌が迫る。

「そうじゃないの、あのままじゃあの人……」

「言い訳なんて聞きたくないわ」

祐子の声は、あくまで静かだった。しかし藤堂は彼女の張り付いたような無表情に、息が詰まるような感覚を抱く。気のいい常連客だった彼女とは、まるで別人のように思えた。

掌に感じた痛みに、藤堂は己の腕を見下ろす。そこでようやく拳を握り締めすぎていた事に気付き、ゆっくりと力を抜いた。鈍く痛む掌は、爪の形に鬱血している。

死を身近に感じた事は、今までに何度かあった。しかし他人の死に怯えることなど、あったらどうか。出来れば経験したくはなかった。明も執事もいつも通りの動きを見せてはいるものの、不安は拭いきれない。

「おいアレ、吸い込めねえのか」

藤堂の問いに振り返った渚は、苦しげに表情を歪めて首を横に振った。ゆなが落胆して肩を落とす。

「無理ですわ。使役されている霊は、札を破らない限り奪えませんが藤堂は渚に聞こえないように溜息を吐き、再び俯く。

明と祐子に何があったのか、藤堂には想像する事も出来ない。二人の過去は聞いた覚えもないし、聞くことも思わなかった。しかし何があったのか分からなくとも、例え万が一、明の方が悪かったのだとしても、祐子のしている事は間違っていると彼は思う。

何があるうとも、他人の命を脅かしてはならない。人の命を奪うのは、何よりも重いことなのだ。

「昔の話、してあげようか」

手元に落としていた視線を上げると、祐子は真っ直ぐに藤堂を見ていた。どこか悲しげにも見える微笑に、藤堂は顔をしかめる。彼の腕を掴むゆなの手に、僅かに力がこもった。

距離を隔てたまま牽制し合うように視線を交える二人の間で、瓢箪相手に苦戦する明が執事に目配せした。首に巻きつこうとした舌をちぎり取って投げ捨てた執事は、明の視線を受けて小さく頷く。「うちのカレね、病気だったのよ。結婚の約束までしてただけど、保たなくてさ」

明と執事が、瓢箪の左右へ分かれて駆け出した。舌も同じく左右に別れて彼らを追ったが、道幅がそう広くない為、二人はすぐに身を翻して方向転換する。失速が間に合わず勢い良くぶつかった拍子に、触手は電柱に絡み付いた。瓢箪の目が慌てた様子で忙しなく動いたが、一度絡んだ舌は、なかなか解ける気配がない。

「せめて四十九日までとは思って一緒にいたんだけど、その子が余計な事してね」

瓢箪が四苦八苦している間に、胴体の正面へ回った明が刀を構えた。祐子の指が瓢箪を差し、軽く振られる。途端に電柱に絡み付いていた舌が消え失せ、新たに口腔から這い出したものが明の足を捕らえた。

「消されちゃった。カレは常世どころか、幽世にも行けなかったの。可笑しいでしょ、浄霊屋なのに」

絡み付いた舌を振り払いながら、明は次々伸びて来る触手を踏み台にして跳んだ。後を追う舌を執事が纏めて掴み、一緒くたにちぎり取る。刀を両手に持ち替えた明が瓢箪の頭上で大きく振りかぶり、銀色に煌めく刃を脳天へ叩き付けた。

しかしその刃は、跳ね返って再び後ろへ放物線を描く。叩きつけられた刃は、黒い表皮だけを僅かに削り取って、大きく弾き返されてしまっていた。

「え……」

渚の口から、驚愕の声が漏れる。明は苦々しく表情を歪め、伸びて来る舌から逃げるように地面へ降り立った。取り落としそうになった刀を握りしめ、彼女は体勢を立て直す。

「斬れないのですか」

呆然とゆなが呟いた矢先、執事が飛び上がって瓢箪の眉間に拳を叩き込む。大きく開いた口が歪み、反射的に閉じられた目がぎよろりと動いて執事を見た。彼に気を取られている隙に、明は蠢く触手を切り払う。

「迷ったわね。わかりやすい子」

祐子が冷笑した。

藤堂は己の腕を抱き締めるゆなを見下ろして、宥めるようにその手を撫でた。見ていられない。相手の力量まで藤堂に測ることは出来なかったが、明の刀が効かないとなれば、こちらの劣勢は火を見るより明らかだった。

「どうにかなんねえのか」

ゆなは藤堂を見上げ、小さな唇を引き結んだ。大きな目が、涙を湛えて潤んでいる。彼女に聞いても仕方がないのに、そうせずにはいられなかった。

執事の一撃を食らって動きの鈍くなった瓢箪へ、再び明の刃が迫る。触手が足に絡み付いたが、最早彼女は構わなかった。片手を束尻に添え、握り締めた刀を勢い良く瓢箪の片目めがけて突き立てる。今度は手ごたえがあった。

深々と刺さった刃が抜かれた瞬間、細い両目が一瞬大きく見開かれる。明の足を掴んでいた舌が離れて口内へ引き戻されるかと思いきや、彼女の腕を勢いよく叩いた。明は小さく悲鳴を上げ、衝撃で刀を取り落とす。

地面に落ちた獲物を取り返す間もなく、明の足下を触手が掬った。大きくバランスを崩し、よろめいた彼女を支えようと執事が腕を伸ばしたが一瞬遅れ、明の腹に真つ赤な舌が巻き付く。

「メイさん！」

ゆなと渚が同時に叫び声を上げ、藤堂の表情が凍り付いた。祐子は唇を歪めて笑う。それはいつもの快活な笑顔ではなく、暗いものだった。

動きを封じられた明の手足に、次々赤い舌が絡み付いて行く。引きずられて行く彼女を執事が慌てて追ったが、足を払った触手に体勢を崩されてよろめき、地面に膝を着いた。

裾が捲かれて露わになった白い腹に絡み付く舌が、徐々に彼女の体を絞め上げて行く。首に巻き付いた触手を掴んだ明の表情が、苦しげに歪む。

このまま、喰われるのか。藤堂の背筋を寒気が這い上がる。

「祐子さん、やめてくれ！」

藤堂の声に、祐子は小さく首を振った。浮かべられた微笑が、不気味にさえ感じられる。

「これはアタシの悲願なの」

「殺されたから殺すつてののかよ！ そんなの間違つてんだろ、あんなそれで余計苦しむんじゃないかねえのか！」

「バカげてるなんて事、自分でも良く分かつてる」

祐子は俯き、自嘲気味に笑った。そして再び顔を上げ、真つ直ぐに藤堂を見据える。

「キミのそういう優しいとこ、好きだったよ」

ゆなが息を呑み、渚が悔しげに歯噛みする。膝を着いた執事は、両手足を絡め取られて動けずにいた。

明は、駄目なのか。諦めが藤堂の胸をよぎった。

第四章 終わりなき連鎖 九

ここへ戻って来てから、何時間が経過しただろうか。そう長くは経っていないのだろうが、藤堂には何日も時間が過ぎたように感じられた。街並みを橙色に染め上げていた夕陽は既に姿を隠し、それに取って代わった街灯が、舗装された道路を照らし出している。人工的な街の灯りが、夜空を仄かに明るく見せていた。

普段となら変わらない風景に、感傷的になっっている場合ではなかった。戦況は絶望的だ。気を失った明の体は、引きずられるまま大きく開いた口へ近付いて行く。それ以上見ている事が出来ず、藤堂は深く俯いた。

瞬間後頭部に走った衝撃に、彼は前のめりになる。よろけはしたが、ゆなにながつちり掴まれた腕を支点に、なんとか踏みとどまった。藤堂は痛む頭を撫でながら、ぶつかつたものを確認しようと慌てて顔を上げる。そこには、既視感のある光景が広がっていた。

頭上を通り過ぎて行く、長い足。黒のスーツに包まれたしなやかな長身。大きく振り上げられた、白い手袋を嵌めた手。そして翻る、銀色の長い髪。

「白銀！」

藤堂は思わず大声を上げた。瓢箪めがけて躊躇なく飛び込んで行った白銀は、着地すると同時に、振りかざした手刀を勢いよく漆黒の胴体に叩き込む。衝撃で大きく歪んだ瓢箪は地に落ち、後ろへ倒れ込んだ。

体を地面に叩きつけられた衝撃で、触手が明と執事を捕らえたまま宙へ舞い上がる。力の抜けた触手が、空中で二人の体を放り出した。

白銀が凍り付いたような表情で、放り出された二人を振り返る。ゆなは思わず両手で口元を押さえ、渚が悲鳴を上げた。執事はすぐさま着地したが、気を失った明はそうは行かなかった。

落ちる。そう思うと同時、気が付いたら、体が動いていた。藤堂は落下する明の下へ駆け寄り、両腕を伸ばす。そしてその腕に吸い込まれるように落ちてきた体を、しっかりと受け止めた。

思っていたより遥かに軽いが、それでも腕に受けた衝撃はかなりのものだった。びりびりと痛む腕をなんとか引き寄せ、抱きとめた明の体を抱え直す。

しかし胸に抱き込んだ華奢な体を、藤堂は危うく取り落とす所だった。

「な……メイ！　おい、生きてんのかお前！」

制服越しに触れた明の肩は、恐ろしく冷たかった。血の気の失せた顔は紙のように白く、見ていて痛々しい。息をしているのかどうかさえ、分からなかった。

駆け寄ってきたゆなが心配そうに明の顔を覗き込んだ後、藤堂を見上げた。執事の無事を見届けた渚が三人を振り返り、不安そうに眉尻を下げる。

「メイさんは……」

今にも泣き出しそうなゆなの声に反応して、明の臉がかすかに動いた。それに気付いた渚が藤堂に近付き、その腕の中で眉根を寄せる明を、恐る恐る覗き込む。

「忘れてって言ったのに。どうして来たの？」

心配そうに明を見詰めていた白銀が、祐子を振り返った。緩慢な動作で起き上がる瓢箪の向こうで、祐子は険しい表情を浮かべている。白銀は体ごと彼女へ向き直り、睨むような視線を送る。

「友人としてではない。私は本社執行部役員として、お前を止めに来た」

「仕事熱心ね。一人でこいつと戦うって言うの？　あんだだって無事じゃ済まないわよ」

「どうかね」

明がゆっくりと目を開き、間近にあった藤堂の顔に驚いて息を呑んだ。ゆなの表情がぱっと明るくなる。

しかし明は慌てて周囲を見回した後、無理に抱き上げられた猫のように、藤堂の腕から逃れようとした。面食らった藤堂は、肩を竦めて振り回される腕を避けながら手を離す。

「ちよ、ま……」

「ご、ごめんなさいっ」

無意識に暴れていたのだろうか。地面に降りた明は、驚いた声を上げる藤堂に早口で謝った。存外元気そうな様子の彼女に、渚が安堵の息を吐く。

「これが鳳コーポレーション社員としての、最後の仕事だ。やり遂げるさ」

明の無事を確認して安心したのも束の間、全員が驚愕に目を見開く。藤堂は一瞬、彼女がなんと言ったのか理解出来なかった。その台詞を数回反芻してようやく、は、と間の抜けた声を出す。

何を思ったのか、瓢箪を挟んで対峙する二人に向かって、明が一歩踏み出す。藤堂は慌ててその首根っこを掴み、引き止めた。

「手出すな。ありやなんかある」

戸惑う視線が藤堂を振り返って宙を泳いだ後、ゆっくりと正面へ向き直った。握り締めた小さな拳が、小刻みに震えている。噛み締められた唇が、白くなっていた。

明が何を思うのか、藤堂には分からない。けれどその何かを堪えるような思いつめた表情から、思わず目を逸らした。

「戻れないのか」

白銀の問いに、祐子はもう答えなかった。小さく溜息を吐いた白銀は肩越しに振り返り、明を見る。

「いいのか、説明しなくて」

凜とした声に、明はびくりと肩を震わせた。戸惑う少女は視線を彷徨わせて、助けを求めるように藤堂を見上げる。目を細めてその視線に応え、藤堂は顔を上げた。

「そいつが邪魔で、祐子さんと話も出来ねえんだ」

「……分かった」

梅雨を感じさせる生ぬるい夜風が、持ち主の通り名と同じ色の髪を靡かせる。街灯に照らされて機械のような輝きを放つ銀糸に、藤堂は一瞬目を奪われた。

「悪いがお前の飼犬は消させて貰うぞ、新藤」

言い終わる前に、祐子の指が白銀を差した。瓢箪の口が大きく開かれて真つ赤な口腔が露わになると同時、数十本もの細長い舌が飛び出す。不規則に蠢いて迫り来る不気味な触手を見ても、白銀は眉一つ動かさず、目前へ迫った舌を片手で横へ払いのけた。

両足目掛けて襲い掛かる舌を跳び上がった避け、伸縮性のあるそれを踏み台にして更に高く、白銀は跳躍する。不規則に蠢いていた舌は彼女を追うように一塊になり、一斉に空中へと伸びた。

「頭は悪いようだな」

形の良い唇が弧を描き、切れ長の目が細められる。その表情を見た時、藤堂は胸を締め付けられるような感覚に襲われた。恐ろしかった訳ではない。藤堂自身その感覚が何なのか分からなかったが、彼女とは住む世界が違うのだと、そう思った。

白銀は追い掛けて来た舌を再び踏み台にし、更に高く跳んだ。空中で体を反らせて頭を下にし、彼女は落下しながらすれ違いかけた舌を纏めて左手で掴む。触手の先端が暴れ回って背中を叩くが、白銀は動じない。痛そうな素振りさえ見せなかった。

声望高い退治屋は、自由落下するに任せて地面へ向かって手を伸ばし、触手を掴んだまま瓢箪の手前に掌を着いた。倒立の姿勢から腕のバネだけで体勢を変え、両足で着地し直す。捕まれた触手が暴れ回り、自身の胸をも叩く。瓢箪の向こうで、祐子が目を見開いたまま呆然としていた。

「こいつに手加減させるな新藤。どうせ私は喰えんぞ」

しかし傍目には、瓢箪が手加減しているようには到底見えなかった。先ほどまでの動きと大差ない。力量の差が開きすぎているだけだ。

白銀は両手で舌を握り直し、片足を瓢箪の胸に着いた。

嫌な予感がした。藤堂はそつと、両手で耳を塞ぐ。ゆなは小さな拳を握り締めたまま固唾を呑んで見守り、渚は執事に寄り添ったまま、啞然と口を開けている。ただ一人明だけは、思い詰めたような表情で俯いていた。

白銀は暴れる舌を強く引くと同時に、胴体を蹴り飛ばした。大きく開かれた口から獣じみた悲鳴が響き渡り、どす黒い血が口腔から吐き出される。

それが本当に血だったのか、夜目には判断出来なかった。纏めて引っこ抜いた舌を放り捨て、白銀は顔に掛かった液体を手の甲で拭き取る。

「私を食えるか？」

銀色の髪が異形の吐き出した血に濡れて、斑に赤黒く染まっていた。瓢箪の目が忙しなく動き、大きく開いた口がわなわなと震えている。挑発的な台詞に怒ったのか、今まで微動だにしなかった胴体がようやく動いた。

瓢箪は鋭い歯が並んだ口を、更に大きく開く。胴体の殆どが巨大な口と化した異形は地面すれすれを滑るように移動し、白銀へ迫って行く。

退治屋は再びその美貌に薄い笑みを浮かべ、目前まで迫った瓢箪の下顎を、爪先を持ち上げて踵で止めた。勢い余って倒れこみそうになった上半分を片手で掴んで止め、白銀は瓢箪の細い目を見上げる。

「お前も元は人間だろう。何故こうなった？」

異形の悪霊は、何も答えなかった。ただただ、口を閉じようと顎に力を込める。しかしその目は、言葉の意味を探すかのように瞬きを繰り返していた。

白銀は一瞬、悲しげに目を伏せる。血塗れの白い顔に陰が差した次の瞬間には、彼女は指先を口腔へ向けて手刀を構えていた。

「知っているか、新藤」

唐突に呼び掛けられた祐子は、肩を震わせてその声に反応した。

「こうなるともう、浄霊は不可能だ」

白い手袋が、光ったように見えた。

白銀は勢いよく腕を口内へ突き入れ、手刀を口腔に叩き込んだ。空気が詰まった袋を割ったような破裂音と共に、大気が震えるほどの絶叫が木霊する。

異形の体が、膨らみすぎた風船のように弾けた。しかし後には破片すら残らず、千切り取られて落ちていた筈の舌も消え失せている。白銀の顔に飛び散っていた血の跡すら、なくなっていた。

思えば藤堂は、抹消という言葉の意味をよく理解していなかったように思う。だから今こうして目の当たりにしてみても、呆然とするしかなかった。

両腕を下ろした白銀は、僅かに顔を俯かせたまま、暫くその場に立ち尽くしていた。凜とした横顔からは、彼女が抱く感情の片鱗すら窺い知る事が出来ない。しかし藤堂には何故か、その薄い背中が悲しそうに見えた。

顔を上げた退治屋は、俯いたまま微動だにしない祐子へ真っ直ぐに歩み寄り、手袋を外してその肩に手を添えた。祐子の顔が、更に下を向く。白銀は呆然とする五人を振り返り、明を呼んだ。

「浄霊屋、話せるか」

胸の前できつく両手を握り締めた明は、顔を上げて、はいと答えた。返答に頷き、白銀は促すように祐子の背を押す。

「私に浄霊を依頼したのは、あなたの恋人本人だったの」

ゆっくりと近付いてきた祐子を真っ直ぐに見据え、明はそう言った。祐子は弾かれたように顔を上げ、目を丸くする。

「彼は気付いていた。あなたの悲しみを受けて、変質して行く自分に」
「彼はまともだったわ」

「見た目はね。悲しみに暮れるあなたの想いは、霊体である彼にとつては邪気ではなかった。悲しむことは供養じゃないの。残された人が死を受け入れて、死を悲しんであげる事でようやく、供養される」

明はゆっくりと息を吐いて、更に続けた。

「彼はあなたを連れて行ってしまおうとした。でも私に依頼をしに来た時点では、彼の中にはまだ、まともな自分がいたの。あなたを連れて行きたくなかったから、私に依頼しに来たんだよ」

祐子は険しい表情で、唇を引き結んだ。

「でも私が浄霊しに行った時、彼はあなたの魂を引きずり出す寸前だった。ゆっくり浄霊なんてしている暇はなかったの」

「何故そのままにしておいてくれなかったの」

え、と明が呟いた。祐子の肩を抱く白銀が、厳しい表情を浮かべる。叱りつけたいのを堪えているような顔だった。藤堂は顔をしかめ、祐子を睨んだ。

「連れて行かれたって、良かったのに。連れて行って欲しかったのに。そつとしておいてくれれば、こんな事にはならなかったわ。アタシには彼が全てだったのに！」

「バカ言うな」

怒気を孕んだ藤堂の声に、祐子は驚いたように身を硬くした。何故こんなにも腹が立つのか、藤堂自身分らない。

「良くねえだろ。あなたの彼氏はイヤだったんだろ？」

祐子の体から、徐々に力が抜けて行く。

「あんたが良くて、そうじゃねえ人はいただろ。あんたが帰った時、親父さん泣いてたって言ったじゃねえか。どこまで嘘か知らねえけどさ」

果たして論点がそこにあつたのかどうか、藤堂には最早分からない。頭に血が上って、まともな思考も出来ない。ただ、明から聞いた小磯親子の話と、祐子自身が語った父親の話が縋り交ぜになって、彼の胸中を揺さぶっていた。

泣き出しそうに顔を歪ませた祐子の体を、白銀が支えた。明は悲しそうに眉尻を下げて、祐子を見つめている。

「彼氏忘れるとは言えないけど、これ以上苦しもうとするなよ。メイもな」

祐子の眉根が寄せられ、目が細くなる。苦しげな表情を浮かべた彼女の目から透明な滴がこぼれ、頬を伝い落ちた。

「……ごめんね」

祐子は掠れた声で、小さく小さく呟いた。彼女は両手で顔を覆い、白銀に支えられるまま体を預ける。

「ごめんね……」

静かに涙を流す祐子の背を撫でながら、白銀が顔を上げて藤堂へ微笑みかける。感謝の意を示されているのだろうと思ったが、その整った笑顔も、泣き続ける祐子も見えていられなくなり、藤堂は視線を逸らした。

第四章 終わりなき連鎖 十

ひとしきり泣いた後、祐子はその場にいた全員に頭を下げて謝った。渚は執事と顔を見合わせ、肩を竦める。

「まあ、無事に収まって良かったですわ」

「メイさんもこの通り生きておりますから、お気になさらず。罪を憎んで人を憎まず、です」

ゆなは藤堂の腕を抱き込み、抑揚のない口調で言った。大人びた彼女の口振りに、祐子はようやく普段通りの笑顔をみせる。それを見て、明も安堵したような笑みを浮かべた。

「ありがとう。……明ちゃんも、ごめんね」

明はおかつぱの黒髪を揺らして、左右に首を振った。

「私も説明不足だった。最初から、ちゃんとやっておけば良かったのに」

「あー……もういいわ、辛気くさくなるから」

憑き物が落ちたかのようにけろりとした祐子に、藤堂はついて行けていなかった。これがつい先程まで泣き濡れていた女だろうか。

殺されかけたというのにあっさり許してしまう明にも驚いたが、祐子の豹変ぶりには開いた口が塞がらなかった。

真面目くさって説教じみた事を言った自分が馬鹿らしく思え、藤堂は溜息を吐いて肩を落とした。何故あんなに腹が立ったのか、自分でもよく分からない。元々あまり怒らない性分だし、何かに苛立つても、声を荒らげる事は滅多になかった。

落ち着いた今となっては、祐子の様子が普段と何ら変わりないのが不思議でならない。浅くはあるが短い付き合いでもないのに、藤堂には未だに祐子がよく分からなかった。

そもそも女は分からない。祐子などは特に、違う生き物としか思えない。男と女とは脳の作りからして違うのだから、やっぱり違う生き物なのではないかと藤堂は考える。

「藤堂君も、ありがとう」

唐突に振られて気のない視線を向けると、祐子は見た事のないような表情を浮かべていた。困ったような、それでいてどこか嬉しそうな笑顔に、藤堂は一瞬怯む。

「……いや、別に」

藤堂は身を硬くしたが、答えた時には既に、祐子は笑顔が消してしまっていた。そんな彼女の様子に、藤堂は更に困惑する。

結局彼女は、引くに引けなかっただけなのではないだろうか。本当は、父親が死んだ時点で、祐子の中で復讐心は失われかけていたのではないのだろうか。

だから、藤堂の指摘に涙を流した。今こうしてあっけらかんとしている所を見る限り、そうとしか思えない。自分で分かっている、敵を見つけてしまったから、動かずにいられなかった。そう思うと、今普段通りに振舞っている彼女が、痛々しくも見えた。

「それにしてもあんたホント、何なのよ。人間？」

祐子の訝しげな視線を受けて、白銀は微苦笑した。本人からすれば苦笑いするしかないだろうが、祐子の言葉には藤堂も同意せざるを得ない。

「残念ながら人間だ。一週間じつとしていたから、少々鈍ったが」

はあ、と感嘆とも驚嘆ともつかない息を吐き、祐子は呆れたように肩を落とした。

「あれで？ やっぱ人間じゃないわ」

「サイボーグか何かですか」

奇異の視線を向けるゆなを、祐子が笑った。しかし明は、失言したゆなを睨む。何も言わない事が逆に恐ろしい。

「それはないわよ。ちゃんと柔らかかったから」

「何したんですかどこ触ったんですか！」

祐子の発言に、明が過剰に反応を示した。目を見開いて詰め寄る彼女に、祐子は両手のひらを体の前に翳して身を引いた。藤堂は祐子の発言に引く。

「な、何もしてないわよ……」

祐子は怯えた表情で否定したが、白銀は俯いて顔を赤くしていた。痴女だとは常々思っていたが、まさかそこまでとは、と、藤堂は更に引く。

困り果てる白銀を見て、渚がくすりと笑った。フランス人形が笑ったようなその仕草に、藤堂は安堵する。渚なら、祐子を糾弾し始めてもおかしくないと思っていた。

対して白銀に慣れたかと思われた明は、最早いつものように熱い眼差しを向けていた。あれだけの立ち回りを目の前で演じられた後では、懂れる気持ちは分からなくもない。しかし明のこれは、度を超えすぎているように思われる。一瞬嫌な想像が脳裏をよぎったが、藤堂は慌てて打ち消した。

「あなたはこれから、どうするんだ？」

話を変えたかったのか、白銀は唐突にそう切り出した。祐子は首を捻って小さく唸る。

「とりあえず、退治屋は辞めるわ。ポチもやられちゃったし、退治屋でいる意味もないし、普通のOLに戻る」

ポチという呼び名には、誰も突っ込まなかった。

「普通のOLだと思ってたよ、俺は」

ゆなの手を虫でも払うような仕草で退けさせた後、ジーンズのポケットから煙草を取り出して火を点けながら、藤堂は溜息混じりに言った。反対側に首を捻った祐子は、ああ、と声を漏らす。

「そういえば言っただけだね。びっくりした？」

「いや。こないだ来た時、鳳の社員章付けてただろ。あん時は驚いたけど」

「陰のある女っていいでしょ」

背中を丸めて顔を覗き込む祐子の襟元から、豊かな胸の谷間が覗いた。やはり痴女だ。しかし有難くも感じられるから困る。藤堂は吸い寄せられるように胸元を見ながら、短く否定する。

「別に」

明らかに視線を下へ向けた藤堂に、祐子は呆れて片眉を顰める。
狭い眉間に皺が寄った。

「胸ばつか見てんじやないわよ。ホントムツツリねあんた」

「こんな堂々としてんのに、むっつりも何も無いって。つうかね、そこにありや見るだろ。あんたの場合、見せてるようにしか見えな……おっと」

目の前に立ちはだかったゆなは煙草が当たりそうになり、藤堂は慌てて手を避けた。ヘルメットを被った頭が、目線の下にある。表情は窺えないが、この娘の事だから、普段と大差ないだろう。

「ダメです」

何がどう駄目なのか、藤堂にはさっぱり分からなかった。きつぱりと言い切ったゆなに驚いて忙しなく瞬きした後、祐子は更に背中を丸めて、彼女の目線の高さまで屈む。

「藤堂君はやめときなさいよ。このダメ男、胸しか見ないから」

「それならそれで、ゆなは藤堂さん好みの女になります。その内あなたや白銀さんにも負けられないような、欧米人並のダイナマイトボデーにメタモルフオーゼしてみせます」

「それじゃ整形だバカ」

さも楽しそうに笑って、祐子はゆなの頭をヘルメット越しに撫でた。ゆなは両手を合わせて、目の前に迫った胸を拝む。

「どうかあやかれますように」

「頑張ってねえ。牛乳たくさん飲みなさい、牛乳」

「えっ……」

驚きの声を上げた渚に、全員の視線が集まった。明が桜色の頬を膨らませて嘔き出す。

「渚さん、牛乳嫌いだもんね」

「なっ……」

真っ赤になつた顔を背けた渚は、唇を引き結んで身を守るように腕を組んだ。気にしていたのだろうか、藤堂は少々意外に思う。ゆなが渚を振り返って、にやりと小さな唇だけで笑った。

「仲間なのです」

「お、お黙りなさい」

裏返った声で怒鳴る渚を、明は更に笑った。朗らかな笑い声につられたのか、困り顔だった白銀も頬を緩ませる。

一時はどうなるかと思っただが、無事に収まって良かったと藤堂は思う。和やかな空気の中、排水溝に煙草を捨てた藤堂は、ふと思いついて白銀を見た。

「あんだ、会社辞めんのか」

一瞬反応の遅れた白銀は、二三度瞬きしてから、ああと呟く。明が目を丸くした。

「色々あつてな。今日まで新藤の家に厄介になっていた」

「ああ、それで……」

仲がいいのかと言おうとしたが、俄かに硬直した白銀が耳まで赤くなるのを見て、言葉を止めた。元々肌が白いせいも、夜目にも目立って見える。案外赤面症の気があるのかも知れない。

「ち、違う！ 何も無い！」

「……祐子さん、何したの」

過剰な反応を示した彼女を訝って、藤堂は呆れた目を祐子に向けた。慌てて首を振るその様子を見る限りでは、確かに何もしていないのだろうと藤堂は思う。困ったように頬に掌を当てた祐子は、僅かに首を傾けた。

「何もしてないったら。ウブねえこの子ったら」

「ゆなを見習って頂きたいものです」

「ゆなさんはもう少し慎みを覚えなさい」

ぴしゃりと叱咤され、ゆなは渚を見上げて小さく肩を竦めた。全く反省はしていなさそうだが、渚はその仕草を了解の意と取ったように、それ以上何も言わなかった。彼女は存外素直だ。

「それよりあんだ、会社辞めちゃってどうするのよ、これから」

顎に手を当てて祐子が聞くと、白銀は眉尻を下げた。困り顔の彼女を見て、明が勢い良く身を乗り出す。藤堂は嫌な顔をした。

「それなら是非うちに！ 今なら昼食付きですから！」

「ソレお前作ってねえだろ」

「いや、しかし……」

手を取って詰め寄る明に、白銀は狼狽して言い淀んだ。更に限界まで近付いた明の顔を避けるように、身を反らせる。

「じ、事情があるんだ。迷惑は掛けられない」

「そんな事言わずに！ なんなら藤堂さんち間借りしても……」

「いやそれは問題だろ」

突っ込む藤堂の声は、明の耳には入っていないようだった。更に口を開きかけたが、横から袖を引いたゆなに気付くと、彼女は視線を落とす。

「それは聞き捨てなりませぬ」

助け舟を出されたと思っただのか、白銀が表情を緩めた。藤堂は次に続く言葉を予想して、この場から逃げ出したい衝動に駆られる。

ゆなの言葉は混乱しか生まない。

「藤堂さんはゆなと六畳一間で暮らして行く内に、間違いを犯すベきなのです」

明が呆れた顔をした。藤堂には、彼女もゆなと大差ないような気がするのだが。

「俺二十歳以下興味ねえから」

「凄いですよ。つるつるですよ」

「お前の発育事情になんか毛ほども興味ねえよ。つつかソレ発育不全じゃねえの、病院行け」

渚が頭痛を堪えるように額を押さえ、溜息を吐いた。己の間違いに気付いたのだろう。ゆなの辞書に、慎みという言葉は載っていないのかも知れない。

祐子までもが面食らって口を噤む中、ゆなは更に食い下がった。

藤堂は身を引いて逃げる。

「何故です。若い体は素晴らしいですよ」

「無理。色々無理。どっちかつー……ッ」

後頭部を襲った衝撃に前のめりになった藤堂は、驚いた拍子に舌を噛んだ。渚が小さく悲鳴を上げたのが聞こえたが、頭を抱えて痛みを堪える藤堂は反応出来ない。

「セクハラはダメだよ」

いつの間にか、明がバットを肩に担いで仁王立ちしていた。あれで殴られたのかと、藤堂は後頭部をさすりながらぞっとする。よく死ななかつたものだ。白銀にはまた踏まれるし、今日は後頭部の厄日だろうか。

何を言いかけたのかも、すっかり頭の中から抜けてしまった。藤堂は非難がましい目で、明を睨む。

「いてえよお前、殺す気が。つうかなんで俺だけ？」

「ゆなちゃんバットで殴れって言うの？」

「人殴るのにバット使わないでくんねえかな」

噛んだ舌が痛くて、上手く回らない。藤堂はバットで人を殴つたにも関わらず悪びれる風もない明に、呆れて肩を落とした。何故こゝも際物ばかり集まってしまつたのだろう。

未だ痛む頭をしつこく撫でさする藤堂を無視して、渚が困惑する白銀を見上げた。

「行く当てがないなら、うちにいらして下さいな。お部屋が余りますの」

「何それ嫌味？」

藤堂の突っ込みは、全員無視した。

「いや……しかし」

言いよどむ白銀の背後から祐子が近付き、肩に両手を置いた。困惑した面持ちで、彼女は祐子を振り返る。あれほど凜々しくつり上がっていた眉が情けなく下がっているのを、藤堂は意外に思う。押しに弱いのかも知れない。

「いいじゃないの、お言葉に甘えさせてもらえば。あんたどうせ、幽霊退治しか出来ないでしょ」

う、と言葉に詰まって、白銀は視線を宙に流す。

「それはそうなんだが……」

尚も渋る白銀を見かねて、明が再び彼女に詰め寄る。期待に満ちた眼差しに圧倒され、白銀は藤堂を見て助けを求めるような目をした。その視線に気付いた明は、勢い良く藤堂を振り返る。

ようやく頭痛の治まった藤堂は、二人の視線を受けて渋い顔をすする。何故こういう選択ばかり任されるのだろう。

しかし、悪い気はしない。藤堂は二人に向かって、口角を上げて笑って見せた。

「いいんじゃないの。あんたが居て困ることねえよ」

明は目を輝かせて、白銀を見上げた。逐一自分にお伺いを立てる必要はないのではないかと、藤堂は思う。

白銀は藤堂と明を交互に見た後、曖昧に微笑を浮かべた。抜けるように白い頬が、仄かに赤く染まっている。

「……堤^{つみせりか}芹香と言う。宜しく頼むよ、藤堂さん」

明に掴まれたのと反対の手を差し出し、芹香はそう言うてはにかんだ。戦っている時はあれほど凜々しくいけに、相変わらず笑った顔は可愛いと、藤堂はぼんやりと思う。

思えば彼女と初めて会った時も、こうして手を差し伸べられたのだ。あの時とは立場が全く逆だが、藤堂にとっては感慨深いものがある。

「いいよ藤堂で。宜しく」

差し出された手を握り返すと、芹香の頬の赤味が増した。あれ、と呟く藤堂の声を聞いた彼女は、慌てて掌を引っ込めて俯く。傍で見っていた祐子は、何故かにやけていた。

ゆなが藤堂と芹香を交互に見て、肩を落とした。

「これは勝てそうにありません」

明はぼやくゆなを見て、芹香を二度見した後、藤堂を振り返って鬼のような形相になった。

第五章 救う人々 一（前書き）

虫が出るので注意してください。

第五章 救う人々 一

騒がしい繁華街の裏通りに、薄汚れたビルがあった。三階建てのこぢんまりとした建物で、立地条件が悪い為か、人の出入りもまばらだ。道路に面した一階店舗への入り口は、両開きのガラス戸となっており、近付いて覗けば店内の様子が容易に見取れる。

ブランド物のバッグや貴金属類が並ぶこの店は本来、寂れた質屋だった。しかしつい数ヶ月前、あるうことが浄霊屋を始めた。

入り口から見て正面、一番奥に位置するカウンターには、日がな一日中、暇そうに煙草を吹かす男が座っている。まばらに無精髭を生やしたその顔付きは精悍なものだが、奥二重の瞼が半ばまで落ちているせいで、間が抜けて見える。

不器用で無愛想、更に口下手という凡そ客商売には向かない性質の藤堂匡はしかし、この店の主だ。

その横に腰を下ろした女は、不満そうに白い頬を膨らませて、組んだ指に顎を乗せていた。きつく巻かれた金髪は背中まで伸ばされ、瞳の大きなつり目を縁取る睫毛は、上向きに隙間なく生えている。

西洋人めいた容貌だが、彼女は純日本人だ。家業の退治屋を捨てて浄霊屋となった、高屋敷本家の一人娘である、高屋敷渚。

「まだ出来ませんか？」

ふてくされた表情で、渚は藤堂に不満をぶつける。そう言われても藤堂が飯を作っている訳ではないので、返答のしようがなかった。何より、空腹なのは藤堂も同じだ。

「さあねえ……つつか、堤もまだか」

「依頼を一件片付けてから来るそうですから、もう少しかかるのじやありませんこと？」

渚は指を組んだままカウンターの上で腕を伸ばし、猫のように伸びをした。大物の新入りのせいで急激に忙しくなったとはいえ、昼飯時は流石に暇だ。

渚は最近、暇な時間を見つけては、霊媒師見習いと一緒に講義を受けるようになっていた。業種を浄霊・退治屋に改めた後だったのだが、講師は彼女の前向きな姿勢に、両手を挙げて喜んだ。

つい先日、藤堂は初めて霊を抹消する場面に出くわし、その意味を知った。消された霊は幽世へは行けず、その後輪廻の輪に組み込まれることさえない。退治屋の仕事とは、霊の存在そのものを消滅させることだ。真面目な渚が嫌がるのも無理はない。

藤堂が煙草をもみ消した時、自動ドアが開いた。吸い殻を灰皿に投げ捨てながら、顔を上げる。

「あれ、もうお昼済んだの？」

入店してきたのは、セーラー服姿の少女だった。今時珍しい黒髪は肩の少し上で真っ直ぐに切り揃えられ、歩く度にさらさらと揺れる。大きな垂れ目と幅の広い唇、皮膚が薄いのか血の色が透けてばら色に見える頬が、いかにも少女らしい。

知恩院明はカウンターに近付くと、渋い表情の二人を見て不思議そうに首を捻った。藤堂は頬杖をついたまま、親指で背後の扉を指し示す。

「逆。腕によりをかけるとか言って、ゆながまだ作ってんの」

「どうせ、かかっているのは時間だけですわ」

憤慨する渚を見て、明は苦笑いした。藤堂の腹の虫が、ひもじそうに鳴く。

「そろそろお客さん来始める頃なんだけ……」

言いながら何の気なしに足下を見た明の表情が、俄かに凍り付いた。怪訝に細い眉を寄せた渚が、カウンターから身を乗り出して床に視線を落とす。引きつった表情を浮かべ、みるみるうちに青ざめて行く渚の顔を見ながら、藤堂は何かを予期して耳を塞いだ。渚の口が大きく開かれる。

絹を裂くような悲鳴が事務所中に木霊し、キャビネットのガラスが震えた。明がそろりとその場から離れ、凍り付いた無表情のまま床を指差す。

「と、藤堂さん……これ……」

「ああ、夏だからなあ。この辺飯屋だらけだから、多いんだよ」

「呑気に言ってる場合じゃありませんわ!」

明が小さく悲鳴を上げた。渚はその声に反応して、咄嗟に立ち上がる。カウンターの下から音もなく這い出してきたものは、藤堂の予想通りの姿をしていた。

頭部から伸びる二本の長い触角。蛍光灯の光を反射して不気味に黒光りする羽。忙しく動く、棘の生えた三対の足。

紛うことなく、立派なゴキブリの姿だった。しかも、最近では滅多に見なくなつたクロゴキブリだ。まだ存在していたのかと、藤堂は感動さえ覚えた。

渚は背後の壁にぴったりと背をつけ、息を殺していた。明はその場から動けないように、助けを求めような視線だけを藤堂に向ける。しかし藤堂は無視して煙草に火を点けた。

「ちよつと、藤堂さん何呑気に……ひっ」

苛立つたような明の声にも小さな悲鳴にも、藤堂は反応しなかった。空腹のあまり、動きたくないのだ。

床の上を恐ろしい速さで這い進む黒い嫌われ者は、入り口付近まで辿り着いた所で突然方向転換し、カウンターへ戻つて来る。震え上がる明と渚は、固まつたまま動けずにいた。

摘んで捨ててやっても良かったが、そんな二人の様子が面白いので、藤堂は放っておく事にする。

「こ、こつち来た! ちよつと藤堂さん!」

「俺のせいじゃねえよ」

我関せずとばかりに煙草を吹かす藤堂の背後から、彼を呼ぶ声が聞こえた。藤堂は気の抜けた目でそちらを一瞥した後、改めて二人の様子を窺う。激しく狼狽する彼女らは、呼ぶ声には気付いていないようだった。

明がまた悲鳴を上げ、部屋の中央へ逃げた。カウンターの下に隠れた虫を見て青ざめた渚は、ゆっくりと横移動して行く。

「何をなさっているのです」

藤堂宅へ続く扉から顔を出した少女は、不機嫌そうに小さな唇を尖らせていた。呼んでも来ないので、痺れを切らしたのだろう。

小柄な少女だった。くすんだ水色に染められた髪は傷んで所々跳ね、尻を覆い隠すほど長く伸ばされている。ふつくらとした頬は幼い少女のそれだが、肌がやけに青白い。への字に垂れ下がった眉は少々太いが、目が大きい為か、そう気にはならなかった。

黒江ゆなはカウンターの中へ入ってきた黒光りする虫を見つけると、愛らしい仕草で小首を傾げた。藤堂はやおら椅子から立ち上がりつつ煙草を揉み消し、ゆなを振り返る。

「未知との遭遇ですか」

「してない」

カウンターのの中から逃げた渚と硬直する明を見て、ふうむ、とゆなが呟いた。そして玄關に置いてあった藤堂のサンダルをつっかけ、店の方へ降りる。

「なんなのです、お二人とも情けない。たかが虫ごとき、そんなに怯えくさってからに」

ゆなは藤堂の足下に屈み、小さな手でむんずと虫を鷲掴んだ。カウンターの陰に隠れて見えなくとも、その動作から、ゆなが何をしたか理解したのだろう。明と渚が、同時に悲鳴を上げる。藤堂はゆなの剛胆さに呆れた。

果たして年頃の娘が、ゴキブリを素手で掴むものだろうか。毎度の事ながら、ゆなの行動には驚かされる。あの子煩惱な親の下で育って何故こうなってしまうのかと、藤堂は頭を抱えなくなった。

「ゴキブリがなんだというのです」

ゆなは虫を掴んだ手を、カウンターの上に突き出した。蒼白になった明と渚は、悲鳴を上げる事も出来ずに立ち尽くしている。

「ゴキブリが何をしたというのです。さあ言っごらんさい、お二人とも」

「ゆ、ゆなちゃんやめて……それ外に……」

ゆなはカウンターから出て、腕を突き出したまま明に近付いて行く。カウンター脇の壁に張りついていた渚が、ゆなの手の中で揺れる触角を見て震え上がった。

「は、早く捨てなさい汚らわしい！」

感情の読み取り辛い大きな目が、渚を見上げた。そこで彼女は己の失言に気付き、じりじりとゆなから逃げ始める。藤堂はゆなが出て来た扉脇の壁に凭れ、成り行きを見守っていた。

ゆなが唇だけを笑みの形に歪めた。渚はその表情を見た瞬間、弾かれたように藤堂に飛び付く。藤堂は僅かに眉をひそめたが、避けることもしなかった。

藤堂の腕に縋りつく渚を見て、ゆなの表情が険しくなる。

「ゴキブリは太古の昔から同じ姿で生き続ける、珍しい生き物なのです。生きる化石を汚らわしいとは何事でしょう。そしてそこはゆなの指定席です、おどきなさい」

「こ、来ないでちょうだい！」

「……何を騒いでいるんだ」

呆れた声に入り口を見ると、長身の女が立ち尽くしていた。白い細面に凜々しくつり上がった眉と、切れ長の目。凜とした美貌に、腰まで伸ばされた長い銀髪がよく映えている。黒いパンツスーツを纏った体はすわりとして細かったが、シャツの生地を押し上げる胸は豊かで美しい。

「おう、お疲れさん」

藤堂は呑気に片手を挙げて挨拶したが、他の三人は無言だった。

三者三様に、硬い表情を浮かべている。

「おはよう、藤堂」

堤芹香は整った顔を困ったように歪め、挨拶の言葉を口にしながらカウンターに近付いて来る。傍目には、ただ無意味に大騒ぎしているようにしか見えなかっただろう。

「何をやって……」

芹香はそこで、言葉を止めた。

渚を睨むゆなも、ゆなの手の中で暴れる虫に視線を注いだままの渚も、芹香の背後にいた明も、その表情には気付かなかっただろう。しかし藤堂は確かに、彼女が浮かべた今にも泣き出しそうな表情を見た。

最強の退治屋もゴキブリは苦手なのだろうか、彼は意外に思う。万人が苦手とする虫を驚掴みにして平然としている、ゆながおかしいのだろうか。

赤面症といい、芹香も案外、可愛いところがある。藤堂は心中そう独りごちて、ゆなの頭を軽く叩いた。無表情のまま顔を上げた彼女の頭上で、入り口を指差す。

「ゆな、それ外にポイしてこい」

「あい」

ゆなは素直に頷くと、サンダルで床を擦る音を立てながら、小走りですぐ外へ出て行った。呆然とゆなの背中を見送っていた渚がようやく我に返り、勢い良く藤堂から離れる。気の抜けた視線を渚に向けた藤堂は、紅潮した彼女の顔を見て、軽く肩を竦めた。

程なくして、名残惜しそうに何度も入り口を振り返りながら、ゆなが戻ってきた。藤堂は彼女に向かって手招きする。

「手洗って来い、飯食うぞ。高屋敷、突っ立ってないで中入れ」

声を掛けられてはっとした渚は、逃げるようにカウンター裏の扉へ入って行った。ゆなもそれに続く。

「堤、メシは？」

びくりと肩を震わせ、芹香は僅かに視線を上げた。未だに表情が硬い。

「あ……ああ……食べる」

「私、店番してるね」

「頼むわ」

カウンターの中へ入る明に片手を挙げて見せながら、藤堂は玄關に上がる。青い顔をした芹香も、それに続いた。どことなく、動きがぎこちない。

短い廊下の突き当たりにある居間に入ると、ゆなと渚は既に丸い卓袱台を囲んで座っていた。大人数用のものではないので、皿を四つも乗せると窮屈そうに見える。

「お前、オムライスにどんだけ時間かけてんの」

「デミグラスソースを手作り致しました」

「アホか」

短く悪態を吐いて、藤堂はフローリングの床へ直に腰を下ろした。ダイニングキッチンには卓袱台とゴミ箱しか置かれていないから、狭いながらも殺風景だ。

渚と芹香は声を揃えていただきますと言って、手を合わせた。ゆなが誇らしげな表情で、大様に頷く。藤堂は何も言わずに手だけ合わせ、スプーンを取った。

「明日は芹香さんですか」

ゆなはのんびりと食事しながら、横に座って黙々とスプーンを口に運ぶ藤堂を見上げた。口の中のものを飲み込んで、藤堂は左右に首を振る。

「堤はダメだ、当番から抜け。台所焦がす」

「す、済まん……」

「お気になさらないで。人には得手不得手があるものですわ」

食事する手を止めて俯く芹香を慰めた渚は、何故か得意そうな顔をしていた。調理師免許を持っているというだけあって、確かに彼女の作る昼食は美味い。すぐにでも嫁に行けると言ったら、セクハラだと怒鳴られたのだが。

渚はゆなに視線を移し、細い眉をつり上げる。まだ怒っているようだった。

「あなたも、余計な事さえしなればね」

口いっぱいオムライスを頬張っていたゆなが、無表情のまま視線だけを渚に向けた。

「長い触角」

「えっ……」

ゆなが呟いた一言に、渚は食べる手を止めて固まった。凍りついたような彼女の様子に構わず、ゆなは更に続ける。

「つやつやとした真つ黒な体」

芹香が静かに、硬直した。段々と青褪めて行く白い顔を眺めながら、やっぱり苦手なのかと、藤堂は再確認する。

「とげとげのある足。猛スピードで飛び回る……」

「ゆな、メシは静かに食いなさい」

「あい」

素直に従って食事を再開したゆなは、もう何も言わなかった。渚は渋い表情で、のろのろとスプーンを動かしている。あれでは食欲も失せるだろう。藤堂は少し、渚に同情した。

一方、芹香はまだ俯いていた。藤堂は彼女の肩を、スプーンを持った手で軽く小突く。

「平気？」

顔を上げた芹香は、今度は僅かに頬を赤らめた。形の良い唇が何か言いたげに動いたが、彼女は結局、無言で頷いた。

店の方から、明の声が聞こえてきた。客でも来たのだろうか、藤堂は食べるペースを速める。しかし食べ終わる前に、明が扉から顔を出した。

「もう食べ終わる？ ちょっと行ってくるね」

「ゆなも行きます」

皿に残ったオムライスを一気にかきこむと、ゆなは傍らに置いてあったヘルメットを被りながら立ち上がった。明は頷いて、店に引込む。

仕事が入ると、ゆなは必ず明について行く。言動も行動も突飛だが、自分が何の為にここにいいのか、また何をすべきか、ちゃんと理解しているようだ。

ゆなが出て行った後、後片付けは自分がするのだろうか、藤堂はぼんやりと考えながら煙草に火を点けた。

第五章 救う人々 二

明とゆなが出て行った後、店番がいなくなると怒った渚が、早々に事務所へ戻った。渚は大抵いつも怒っているが、疲れないのだからかと、藤堂は思う。食事後すぐに動きたくない彼は、食器を片付ける芹香を、煙草を吹かしながら眺めていた。

彼女は初めて事務所に顔を出したその日に鍋を焦がし、皿を一枚割った。藤堂は食えないような食べ物というものを生まれて初めて目の当たりにし、それで幽霊退治しか出来ないという祐子の言葉の意味を、ようやく理解したのだ。だから芹香を咎めはしなかったが、食事当番からは抜いた。

「やんなくていいよ、お前皿割るから。そこ置いといて」

振り向いて渋い顔をした芹香は、何も言わずに重ねた皿を流し台に置いた。つくづく台所の似合わない女だと、藤堂は思う。先入観がそう思わせるのかも知れないが、彼女には生活感がない。似合わない上に、家事も碌に出来なさそうだ。

それでも、やろうとするだけマシだろう。少なくとも藤堂のように、出来るのにやらないよりはいい。

「……女が家事しなきゃなんねえってのは、時代遅れだからなあ」
済まなそうに眉尻を下げる彼女が可哀相に思えて、藤堂は慰めるように呟く。

家庭的な女を望む男は、夢見がちだと馬鹿にされる。藤堂はそんな愚痴めいた実姉のぼやきを聞きながら育ったので、どうでもいいと思うようになっていた。姉は家事をするより仕事をしてほしいという、ごく有り触れた女性だった。あちらはいつまでも独身生活を謳歌している藤堂と違って、さつさと嫁に行ってしまったが。

「……任せきりだったんだ、家政婦に」

「お前は仕事出来るから、いいんじゃないの。ゆなはアレ、修行中だから」

藤堂には、言い訳のようにぼやく芹香が微笑ましく感じられた。歳の差が開いているからか、彼女にしる渚にしる、同僚というよりは妹のように思える。藤堂には妹どころか、弟さえいないが。

「学校で掃除するようなものか」

「そんなもん。情操教育？」

「それとは違うな」

藤堂は煙草の火を消して立ち上がり、流し台の前に立った芹香の横へ移動した。食器を洗おうと手を伸ばすと、芹香はその手を避けるように、流し台の脇に置かれた冷蔵庫の前へ移動する。

常に明が横にいるから、かなりの長身なのだとはかり思っていたが、芹香の目線は藤堂より少し低い。学生時代、ウドの大木と貶されてきた事を思い出した。

「なんで会社辞めたの？」

何の気なしに問い掛けると、彼女は僅かばかり眉をひそめた。聞かれたくなかったのだらうと、藤堂は少し後悔する。要領が悪いのか頭の回転が遅いのか、たまに自分から話を振ると、余計な事ばかり言ってしまう。

「色々あつてな。居づらくなって、辞めた」

それ以上言及する事も出来ず、藤堂は生返事だけして流し台へ視線を落とした。芹香は食器を洗う彼の手元を見つめたまま、離れるでもなく懐古するような表情を浮かべている。なんとなく、居心地が悪かった。

「不思議だな」

「ん？」

感慨深げな声に短く聞き返すと、芹香は少し笑った。小振りな冷蔵庫に凭れる彼女の目は、穏やかに澄んでいる。

「私は物心ついた頃にはもう、あの会社にいた。それが今になって転職して、こうしてあなた達という事が、不思議だ」

洗い終わった食器を拭きながら、藤堂は驚いたように眉を上げて、すぐ隣にある整った横顔を見た。

そんなに昔から、退治屋として働いていたのだろうか。それなら家事が出来ないのも頷けるが、何故、という疑問もあった。

何故退治屋なのか。それは明にも渚にも言える事だが、終ぞ聞いたことはない。わざわざそんな危ない職に就かなくとも、今はどんな店も慢性的な人手不足に悩まされているから、どこでも雇ってもらえるだろう。

「そんな昔から？」

職に就いた理由など聞くんもりもなかったたので、藤堂はそう聞いた。芹香は頷く。

「ゆなぐらいの歳の頃には、ある程度の事はしていたな。正式に雇用されたのは十八の時だが」

「そっからずっと？」

「ああ、毎日忙しかった……言い訳ではないが」

皿を洗い終わっても芹香が動かなかったたので、藤堂はやかに水を入れて電気コンロに置いた。

彼女が入って一週間ほど経つが、常に明が纏わりついているか外出するかしていたから、ゆっくり話す時間がなかった。別段話そうと思うような事もなかったのだが、彼女の穏やかな表情を見ていると、もう暫くこうしていたいような、それも気恥ずかしいような、複雑な心境になる。

芹香は事務所にいる時、必ず明にしがみつかれて困った顔をしているから、笑顔を見るのも久しぶりのような気がした。そう考えると、なんとなく得をしているように思える。相手が有名人であるからというのが理由かも知れないが。

横にいと実感が湧かないが、世間的には有名人なのだ。本人が騒がれたくないと言うから宣伝材料にはしていないが、彼女を見て拳動不審になる依頼人が何人もいた。そんなに有名な退治屋を知らなかった藤堂は、彼女に申し訳なくも思う。

「のんびりしているな、ここは」

「退屈？」

芹香は微かに笑みを浮かべたまま、視線だけを藤堂へ向ける。

「いや。楽しい」

「そ」

その目が嬉しそうに見えて、藤堂は視線を逸らした。真っ直ぐに見られない。純粋な目を向けられると、自分が嫌に思えて仕方がなくなる。藤堂が目を見て話せる知り合いなど、旧知の友人か祐子ぐらいのものだ。

同僚達の目はあまりに真っ直ぐで、藤堂はまともに見る事が出来ない。全員が全員、彼が失くしたものを何がしか持っている。それだけで、ひどく眩しく思えてしまう。

インスタントのコーヒーを入れて渡すと、芹香はありがとうと咳いた。渚に入れてやった時は、インスタントなど不味くて飲めないと騒いでいたものだが。藤堂には、それでも結局飲み干した彼女がよく分からない。

「浄霊屋に、憧れていたんだ」

藤堂は思わず目を丸くした。憧憬の対象である彼女が、憧れるものがあつたのかと、驚く。

「なんで？」

短く問い返すと、芹香はコーヒーを一口啜って息を吐いた。

「他人の業によって悪霊になった霊は、原則として浄霊屋に任せる事になっている。知っているな？」

「ああ、まあ」

明にそんな話を聞いたような気もする程度だが、逐一問い返していは話が進まないなので、曖昧に肯定した。

「何度か仕事を任せたが、彼らは皆、いい人たちだった。根からの悪人が死んで悪霊化した、救いようのない悪霊であっても、なんとか救おうとした」

夢見るような表情を浮かべる芹香から、藤堂は再び視線を逸らす。かねてより綺麗だと思っていたが、今日になって更にその認識が強くなった。そして恐ろしいほどに、眩しく感じられる。

憧憬でも、羨望でもない。ただ、眩しかった。若さだけではない、藤堂がなくなった何かが、彼女にはある。

「羨ましかったんだ。私のような退治屋には、消すことは出来ても、救うことは出来ない」

「浄霊屋になりや良かったのに」

流しの上の窓を開け、藤堂は煙草に火を点ける。窓の外、すぐそこに苔むした塀が見えた。隣家との距離が異常に近いのだ。

芹香は両手でカップを包み込むように持ったまま、思いつめたような表情で俯いた。また余計な事を言ってしまったと、藤堂は再三ながら後悔の念に駆られる。

「母がな、浄霊屋だったんだ」

「へ」

藤堂は妙な声を出したが、芹香は構わず続けた。

「だが、強い悪霊を無理に浄霊しようとしてな。駄目だった。産後すぐで、体力がなくなっていたのもあったが」

何も言えなかった。慰めるのも妙だし、何より掛ける言葉が見つからない。こんな時になんと言ったらいいかさえ分からないから駄目なのだ、藤堂は心中己を叱咤する。

「だから父は、私を退治屋にした。誰にも、どんな霊にも負けない退治屋にな」

藤堂は口を開きかけてやめ、ああ、とぼやいた。困り果てて頭を掻く。言葉が出てこなかった。カップから立ち上る熱気に当てられ、頭が回らない。

そもそも藤堂は、込み入った話をするのが苦手だ。今までずっと避けてきたし、他人とそんな話をする程深い間柄になる事もなかった。人付き合いを避けてきたと言うなら、そうなのだろう。

「……なんで、そんな事俺に言うの」

流しへ灰を落しながら、藤堂は迷った拳句そう言った。芹香は僅かに目を丸くした後、首を捻る。

「さあ」

「さあつて」

「あなたなら、黙つて聞いてくれそうな気がした」

そんな答えが、返ってくるような気はしていた。藤堂は予想と違わぬ答えに安堵する反面、残念なようにも思う。何故そう思うのか、自分でもよく分からなかった。

どう返して欲しかったのだろう。タバコを銜えたままの唇の隙間から煙を吐き出しながら、藤堂はそう自問する。

祐子が父親の話の始めた時も、何故自分に言うのかと疑問に思った。同情するでも叱咤するでもなく、黙つて聞く姿勢を取る自分だからだと答えを出して、それで納得したが、今のようにそれを残念だとは思わなかった。

頼つて欲しいのだろうか。人付き合いの苦手な自分が、そう思っているのだろうか。それも中々、考え辛い事だ。

考えても仕方がないと、藤堂はそこまで考えて諦めた。水を流して煙草の火を消しながら、ふと、芹香を見る。色素の薄い目は、未だ真つ直ぐに彼を見ていた。

「あの常務、堤つたよな。親父さん？」

芹香の瞳が揺れた。またやってしまったと、藤堂は思わず顔を逸らす。何故自分はこうも不器用なのかと、罪悪感さえ覚えた。

何も答えない芹香を見る事も出来ず、藤堂は薄いコーヒーを啜る。恐らくは、凶星だったのだろう。けれど返答がないという事は、何かあつたに違いない。行く当てがないと言つていたから、何かあつたかは、なんとなくだが予想はつく。

無言の間に耐えられなくなって意味もなく首を振り、藤堂はカップを持ったまま廊下へ向かう。自分から振つておいて逃げるようだと、情けなくも思う。

正直に答えられるのも、濁されるのも嫌だった。そろそろ渚が怒鳴り込んで来てしまいそうな気もしていた。そんな思考が言い訳に過ぎない事も、重々承知している。

「……藤堂」

扉に手を掛けた瞬間、背後から声が掛かった。藤堂は恐る恐る振り返る。

「あなたは優しすぎる」

芹香の顔が寂しそうに見えて、藤堂は何も答えられなかった。答えないまま、扉を開けて店へ出る。そして空っぽのカウンターを見て、怪訝に眉根を寄せた。

「おい、高屋敷いねえぞ」

え、と驚いた声を上げ、芹香が玄関から出てくる。藤堂は誰もいないカウンターにカップを置き、眉間に皺を寄せたまま顎を掻いた。

「どこ行っただんだアイツ」

「依頼が来たんだろうか」

「何も言わずに出てく奴じゃねえよ。案外几帳面だから、あれ」
うっんと唸り、藤堂は結局カウンターに着いた。急な依頼が入ったのだらうと、そう思うことにする。

芹香は怪訝に首を捻りながら、藤堂の横に腰を下ろした。座った途端、その目が入り口を見て止まる。つられてそちらを見ると、大学生と思しき青年が三人、扉の前で何事か話していた。

藤堂が客だろつかと思つた矢先、彼らはカウンターに着いた二人に気付いて自動ドアを潜った。

「すげえ、白銀がいる」

「辞めたってホントだったんだ」

不躰な三人の視線に、芹香は僅かに身を引いた。この場に明がいたら、さんを付けると怒鳴っていた事だろつと藤堂は思う。実際彼女はそれをやって、後で渚にこっぴどく叱られた。無論反省はしていたが、何故堪えられないのかと、藤堂は呆れたものだ。

「従業員が出払ってるんで、浄霊は出来ませんけど」

「あ、大丈夫。どっちでもいいんで」

藤堂の問いに掌を振りながら答えた大柄な青年の目は、彼ではなく芹香の胸を見ていた。よくよく見れば、他の二人の視線も同様の場所へ注がれている。

気持ちは分かる。藤堂とてついこの間までは、彼女の胸ばかり見ていた。しかし同僚として働くようになった今は、その視線に気が付いていい気はしない。

自分の事は完全に棚上げして不愉快になった藤堂は、椅子を勧める事も忘れて細めた目を三人に向けた。

「で……依頼内容は？」

三人は同時に顔を見合わせ、お前が言えとばかりに、お互いの腕を肘で小突いた。藤堂に睨まれて気後れしたのかも知れない。藤堂は己の行動を恥じる。これでは明と一緒にだ。

「それがその……」

困ったように頭を掻いて、大柄な青年が口ごもった。そしてちらりと、真ん中の青年を見る。気の弱そうな茶髪の彼は、入ってきてからずっと、暗い表情で俯いていた。ややこしくなりそうだと考えながら、藤堂はコーヒを啜る。

「この間、中古で車買ったんです」

肩を落とした青年は、暗い声でそう言った。最近は何倒なので名前を聞かない事になっているが、三人もいると混乱しそうだと思ってしまう。聞いてもどうせ、彼は覚えていられないのだが。

「妙に安かったから変だと思っただんですけど、キレイだったし、買ったちゃったんですよ」

最近は何先を考えず、曰く付きのものを買ってしまふ若者が問題視されている。若者は幽霊に対する危機意識こそ強いものの、そのものが見えなければいい、といった一種楽観的な傾向にある。

安くていい中古車があれば、訝っても自分なら買ってしまっただろうと藤堂は思う。しかし本当に悪霊に取り憑かれているような代物だったとしたら、後で除霊や退治を依頼するのに、余計な金がかかる。タダより高いものはないのだ。

「それで何の気なしにボンネット開けたら、お札がびっしり貼ってあって……」

「販売業者から、説明は受けなかったのですか？」

黙って聞いていた芹香が、ようやく口を開いた。疲れているのか、青い顔をした青年は無言で頷く。後の二人は、困ったように顔を見合わせていた。

「特に何かあるわけじゃ、ないんです。問題なく乗れますし……でも、やっぱりあれだけびっしり貼ってあるのを見ちゃうと、気持ち悪くて」

「俺も見たんですけど、凄いやつだったんですよ」

ひよろりとした眼鏡の青年が、横から口を出す。真剣な表情だったが、その目はやっぱり芹香の胸を見ていた。

「封じる方が安く済みますからね。大方業者が陰陽師に依頼したんだろう……何も言わずに売ったとなると、罪に問われるぞ」

怪訝な面持ちの藤堂に、芹香はそう説明してから立ち上がる。長身の彼女に、三人が驚いた顔をした。

「私が行きます。放っておいたら、どうなるか分からない」

「本当ですか！　ありがとうございます」

青い顔をしていた青年の表情がぱっと明るくなり、深々と頭を下げた。芹香は僅かに頷いて、カウンターから出る。それを見た眼鏡と大柄の青年が依頼主の頭越しに目配せし合い、薄く笑った。

安堵の表情とも取れたが、藤堂はその顔に違和感を覚えた。マスコミに垂れ込まれるのではないかと、そう懸念する。ニュースの内容を聞く限り、行方を捜しているような節があるから、つい訝ってしまう。

三人に先導されて事務所を出ようとする芹香に、藤堂は思わず声を掛ける。

「堤」

振り返った芹香に何と言ったらいいいのか、藤堂は迷った。本当なら、気をつけると一声掛ければ良かったのだろう。けれどやっぱり一人で行かせるのも、危ういような気がした。

藤堂は結局立ち上がり、カウンターから出る。ついて行けば牽制になるだろうと、そう思った。

「俺も行く」

芹香は驚いたように目を丸くした。それもそうだろう。藤堂が行った所で何が出来る訳でもないし、何より彼は芹香が入ってから、従業員の頭数が増えた事もあって、事務所から出なかつた。

藤堂の目には、芹香が微かに笑つたように見えた。

「行こう」

これでは本当に妹を心配する兄のようだと思ひながら頷くと、藤堂は店を出てシャッターを閉めた。

第五章 救う人々 三

依頼人宅は、駅から恐ろしく遠かった。三十分はかかるというから、車も欲しくなるはずだ。藤堂はうんざりしながら、依頼人達の後ろをついて行く。

彼らは三人でルームシェアしているようで、よくよく聞いてみれば、車も代金を折半して買ったのだと言う。学生同士ならば珍しい話ではあるが、よくもこう個性もバラバラの三人が集まってしまったものだ。

「すいません、遠くて……」

駅を出て二十分。既に疲れた様子の藤堂を振り返り、三代と名乗った更に疲れた表情の青年は、申し訳なさそうに詫びた。事務所で話していた時もあったが、彼が一番まともそうだ。

「ああ……君ら毎日ここ通ってんの？」

敬語を忘れた藤堂が溜息混じりに問うと、大柄な明石あかしが苦笑する。藤堂の方が年上なこともあってか、対等な話し方をされても気にする様子はなかった。

「そうなんです。駅から大学までは、電車で五分なんですけど」

「駅から家まで遠くちゃ、意味ないよなあ」

眼鏡の由井ゆいが、うんざりしたようにぼやいた。全くだ、と藤堂は思う。

藤堂に歩調を合わせて隣を歩く芹香は、流石に涼しい顔をしていた。この蒸し暑い中、スーツをきっちり着込んでいるにも関わらず、汗一つかいていない。藤堂は額に浮いた汗を手の甲で拭い、再び溜息を吐いた。

元々体力が違うのは分かっているが、自分が情けなくもなる。昔はこれしきの事ではある程、軟弱ではなかったのだが。

「俺も学生ん時は金なくて、ポロいワンルームでその日暮らししてたわ。金は今もねえけど」

「え、浄霊屋って儲からないんすか？」

藤堂が疲れきった声でばやくと、明石が驚いたように目を丸くした。驚かれても、何故儲からないのか藤堂には分からない。芹香が苦笑した。

「浄霊屋はそれ自体の知名度が低いからな。よく分からん業者に依頼するよりは、退治屋に行くだろう」

「忙しくなったの、高屋敷が入ってからだしな」

言いながら腕時計を確認すると、駅を出発してから三十分ほど経過していた。駅から三十分ではなかったのだろうか。こんな事なら来なければ良かったと、藤堂は後悔の念に駆られる。しかし今更引き返す事も出来ない。

もうそろそろ六月も終わるのだが、梅雨前線は未だに頑張っているようだ。蒸し暑い上に、雲行きも怪しい。ただでさえ湿っぽい空気に容赦なく体力を奪われて行くのに、その上雨に降られでもしたら洒落にならない。

「あ、そこです」

三代が指差した先には、巨大なマンションが堂々と構えていた。あれはファミリー向けではないのかと藤堂は訝ったが、学生向けの狭いマンションでは、ルームシェアする意味もないだろう。

敷地内へ入ってエントランスホールを抜けると、子供用の遊具が設置された中庭に出た。予想通り、ファミリー向けマンションのようだ。中庭を囲むように各部屋の扉が並び、時折どこからともなく子供の声が聞こえる。藤堂はコの字形に折れ曲がった廊下を歩きながら、横目で中庭を眺めていた。

何の気なしに眼鏡を掛けると、小さな滑り台で遊ぶ子供がレンズ越しに見えた。その傍らで、母親らしき女性が穏やかな表情を浮かべている。眼鏡を掛ける前までは確かに何も見えなかったから、あれも幽霊なのだろう。

ふと横を見ると、芹香が中庭の親子を見詰めていた。どこか寂しそうなのその表情を見て、彼女は母親を知らないのだと考える。

芹香は父親と二人で、どんな生活をしていたのだろう。藤堂は両親も姉も犬もいる騒がしい家庭で育ったので、片親という感覚がよく分からない。

彼女の父親は、亡くなったのだろうか。ついこの間祐子からそういった話を聞いていたから、それと結び付けて考えてしまっているだけなのかも知れない。しかし今渚の家にいるという事は、やっぱり身寄りがないのだろうか。

芹香はどうして、一人になってしまったのだろうか。疑問を抱きはするが、聞くのは憚られる。突っ込んだ話をする程、仲がいいつもりもない。そういう事は、明に任せておけばいいのだ。

そうは思えど、尻の座りが悪いような心地はしていた。何も聞かずに無理矢理引っ張り込んだのはこちらだから、今更聞きづらい部分はある。それでも事情さえ聞かないままではいるのは、如何なものかと思う。

そして藤堂はふと、思考を中断する。何故こんなにも、気にしているのだろうか。

「藤堂さん、こっちです」

ぼんやりしていた藤堂は三代の声を聞いて我に返り、慌てて少し離れた彼らの後を追った。

エントランスから一番遠い廊下の突き当たりに、柵が設けてある。三代が鍵を差し込んで抜くと、すうと音もなく横に開いた。開いた柵の向こうにある地下へと続く狭い階段を、三人は藤堂達に先立って一人ずつ下りて行く。

コンクリート打ちっ放しの壁に手を添え、藤堂は三人に着いて先を行く芹香に続く。一步階段を下りる度、ひんやりとした空気に包まれて行くような心地がした。じんわりと全身を湿らせていた汗が、一気に引いていく。

「地下は涼しくていいなあ」

明石は次々と流れる汗をタオルで拭いながら、独り言のようにぼやいた。

「お前が暑苦しいんだよ。お前だけだぞ、そんなに汗かいてるの」
先頭に行く三代は、肩越しに明石を振り返りながら階段を下りき
った。続いて明石が駐車場へと下りて行く。

「そんな事ねえって、なあ由井」

「いいや、お前だけだなデブ」

「ひっでえな」

言葉と裏腹に、明石の声は楽しそうだった。彼らの会話を聞きながら、藤堂は大学生の頃つるんでいた友人達を懐かしく思う。

どんなグループにも明石のようないじられ役がいたし、由井のよ
うな皮肉屋もいた。藤堂はどちらかというところ、一歩引いた三代のよ
うな位置付けをされていたように思う。

靈感のない藤堂がこの職に就く事を、一体誰が予想していただろ
う。藤堂自身考えてもみなかつたし、あの頃はただ、現在が楽しか
った。過去を振り返る事も、未来を諦める事もなかつた。夢を持っ
ていた覚えはないが、いつだって、どうにかなると思っていた。現
在が全てだったのだ。

それが今は、夢もなく過去を振り返る事もせず、漠然とした不安
だけを抱いて日々過ごしている。夢など昔からなかつたが、少なく
とも今のように、明日の飯を心配するような事はなかつた。明日の
事は、明日考えればいいと思っていた。

老けたという事なのだろうか。それともまた、違うような気がし
ている。

「これです、この車」

三代が指したのは、何の変哲もない青い軽自動車だった。封じら
れているのだから当然だが、霊の姿も見えない。

隣で車を見つめる芹香の様子を窺うと、彼女は顔をしかめていた。
同じく三代の表情も曇っているが、明石と由井は先ほどまでと大差
ない様子だった。恐らく彼ら三人の中で三代だけは、靈感が強い方
なのだろう。

「どうなの、堤よ」

「難しいな」

切れ長の目が細められ、睨んでいるような顔付きになる。芹香は車に視線を落としたまま、スーツのポケットから白い手袋を取り出した。

「ボンネットを開けて頂けますか」

全体に細かい文字が書かれた手袋に指を通しながら、芹香は三代に声を掛ける。彼は慌ててポケットから鍵代わりの小さなリモコンを取り出したが、開ける段になってためらう。少し迷って、三代は明石に鍵を渡した。

明石は躊躇なくリモコンを操作し、ボンネットに掛けられたロックを解除する。ゆっくりと開いて行く蓋の裏側に貼られた札を見て、藤堂は嫌な顔をした。

「なんだこりゃ」

思わず、そう呟いた。蓋の裏側には、一面に大小様々な札がびっしりと貼り付けられている。これほどまで嚴重に、一体何を封じているのだろうか。

顔をしかめる藤堂をよそに、芹香は車に近付いて蓋の裏側に貼り付けられた札の内、一枚を無造作に剥がした。あ、と三代が声を上げる。明石と由井も驚いて肩を震わせたが、何も起きなかった。札を剥がした張本人はまじまじとそれを見て、納得したように小さく頷く。

「高屋敷家のものだな」

「高屋敷イ？」

渚の家だ。藤堂が奇妙な声を上げると、芹香は大様に頷いた。怪訝に眉を顰めた明石が、太い首を捻る。

「高屋敷家ってあの、すごい依頼料取るトコですよな？」

「ええ。本家と血縁関係にある家に依頼すると、封印するだけでも法外な依頼料を請求されます。彼らに悪意はないのですが……」

芹香はそう言って、困ったような顔をした。剥がした札を丸めながら、彼女は視線を上げて藤堂を見る。

「業者が頼んだなら、これは婚姻関係にある家の者の仕業だろう。あちらは少々頼りないから、依頼料も安い」

少しひそめた声で、芹香は言う。藤堂は首を捻った。

「そうなの？」

「大体はな。渚がいなくて、良かったかも知れん」

「なんで？」

芹香は聞き返した藤堂に向かって、苦笑いを浮かべる。

「出来が良くない。身内がこんなものを使ったと知ったら、あれはまた怒るだろう。仕事は確実なんだがな」

この女はそんな事まで分かるのかと、藤堂は些か呆れた。除霊屋の繋がりというのは、よく分からない。

「だからたくさん貼ってあったんですね」

三代の声は、安堵したようなものだった。弱い札だと聞いて、そう強い悪霊ではないと思っただのかも知れない。

「恐らく。二束三文にもなりませんね、この札は」

「売れんの？」

「本来はな。これは売れないが……藤堂、剥がすのを手伝ってくれ。これでは除霊もままならん」

凄く凄いと明から散々聞かされていたが、実際何が凄いのか、藤堂はついこの間まで知らなかった。そして今ようやく、彼女が凄くという理由を理解し始めている。

うつたえる依頼人達を尻目に、芹香は更に札をまとめて剥がした。藤堂も車に歩み寄り、端から札を剥がして行く。心なしか、生臭いような黴臭いような、不快な臭気が漂って来る。

札を剥がして空いた箇所から、蓋の裏本来の色が覗いた。しかしそのまだらな色に、藤堂は首を捻る。

「……なんだ、これは」

芹香の声が、俄かに硬くなった。彼女が剥がした札の下から、水が飛び散ったような跡が見える。濃い茶色をしたその跡を見て、藤堂は思わず眉をひそめた。

「血の跡じゃねえの、これ」

「ボンネットの裏に血痕か……少なくとも、事故車ではないということだな」

肩越しに振り返り、芹香は呆気に取られたように立ち尽くす三人に声を掛ける。

「申し訳ありませんが手が離せないなので、どなたか警察に連絡して下さい」

青年達は三人一斉に、顔を見合わせた。由井がポケットから携帯電話を取り出しながら、駐車場を出て行く。流石にここでは電波も入らないだろう。

藤堂はそれを横目で見ながら、更に札を剥がす。仕事と思っているせいか、徐々に露わになって行く血の跡を、不思議と恐ろしいとは感じなかった。しかしこんな所に付着した血痕が、ここまでばかりと残るものなのだろうか。いくらなんでも、業者が洗わなかったとは考えにくい。

大方剥がし尽くしたところで、藤堂はシャツの裾を引かれる感覚に振り返る。しかし誰もいなかったので、訝りつつ視線を落とした。そこには、見覚えのある小さな幽霊が立っている。

「なんだ、コウ」

藤堂の後ろで、額にほくろのある少年の霊が、心配そうな表情で彼を見上げていた。藤堂の守護霊は問いかけられても何も言わず、左右に首を振る。藤堂が驚いて大きく瞬きをすると、コウは小さな指で、芹香の背中を指し示した。

「何？」

「どうした」

視線だけを向けた芹香に、藤堂は顎でコウを示して見せた。彼女は差された先に視線を落とし、目を丸くして首を傾げる。少し考えた後、ああ、と呟いた。

「あなたの守護霊か」

「そう。コウっつーんだと」

コウは芹香を見上げて、気の抜けた笑みを浮かべて見せた。愛くるしいその表情を見て、芹香の頬が仄かに赤らむ。そしてゆっくりと顔を上げて藤堂を見ると、二三度瞬きした。

「……いいな」

「なにが？」

子供好きなのだろうかと藤堂は思ったが、女というのは大概子供が好きなものだ。彼女も多分に漏れずそうなのだろうか、意外ではあった。

コウは更に、藤堂の服の裾を引っ張った。彼は最近、何故か口を利かない。少し前までは喋っていたように記憶しているのだが。

「なに、堤に任せんの？」

コウは意思が通じた事が嬉しかったのか、破顔して何度も大きく頷いた。藤堂は肩を竦めて芹香を見たが、彼女は未だ、愛しいものを見るような目でコウを見つめている。

「堤、残り頼むわ」

言いながら藤堂はコウに引っ張られるまま、後ろへ下がった。芹香は呼ばれてようやく我に返り、暫く名残惜しそうにコウを見つめた後、車へ向き直る。

実際、服を引っ張られていた訳ではないのだろう。霊体は人に触れても、無機物に触る事は出来ない。恐らく、コウの気付いて欲しいという念が、藤堂を振り返らせた。幽霊の想いとは、かくも強いものなのだ。

「霊の怨念が強ければ強いほど痕跡が濃く残るというが、これはひどいな」

どこから出てきたのか、三代が持ってきたゴミ袋に剥がした札を捨てながら、芹香はそう言った。三代の表情が凍りつく。少し離れた場所で見えていた明石も、表情を引きつらせた。

藤堂は蓋の裏を見て、僅かに眉根を寄せた。茶色い跡は、押し付けられたように歪んでいる。車に何があったのか想像してしまい、藤堂は顔を背ける。

「……濃いな。三人とも、離れていた方がいい」

最後の一枚に手を掛けて、芹香は背中越しに言った。藤堂は怯えた表情を浮かべる二人を見て軽く肩を竦めた後、コウを見下ろす。真っ直ぐに芹香を見つめていたコウは、藤堂の視線に気付くと、彼を見上げて頷いた。大丈夫なのだろう。

「剥がすぞ」

芹香は残った最後の札を、一気に剥がし取った。瞬間、生臭い臭気が鼻を突く。藤堂は思わず鼻を摘んだ。

大きく目を見開いた芹香は、手元の札を改めて見て、苦い顔をしながら。親指で札の端を捲り、引き裂く。それは綺麗に、二枚の札に分かれた。藤堂は普通の札の厚みを知らないし、芹香も手袋をしていたから、気付かなかったのだ。

「え、何それ、二枚？」

藤堂が聞くと、芹香は険しい表情のまま彼を見て、更に札の端を捲った。

「三枚だ……見誤った」

車から、地の底から響いて来るような声が聞こえた。

第五章 救う人々 四

開いた蓋の裏側から、断末魔にも似た絶叫が聞こえる。それに混じって車のブレーキ音とクラクションが、脳を直接侵食するかのようになり響く。周囲一帯に漂う生臭い空気が、一層濃くなった。

藤堂は顔をしかめて、駐車場の壁際まで下がる。濃厚な臭気にも玉突き事故の現場に出会ったような騒音にも、耐えられなかった。

「……ホントに平気なの？」

鼻を摘んだ藤堂は、鼻声でコウに問い掛ける。きよんととして藤堂を見上げた少年は、殆ど頬が肩に着くような角度まで首を傾げた。子供らしいその仕草に、しかし藤堂は呆れて肩を落とす。当てにならない。

どこからか吹いてくる生温い風が、全身に纏わりつく。濃縮したような重たい空気に、呼吸さえままならない。

「動くなよ。出て来るぞ」

芹香が背中越しにかけた声を聞いて、動きたくとも動けないだろうと藤堂は思う。タイミング悪く戻ってきた由井は、駐車場全体を覆う臭気に鼻を摘んだ。

不意に、巨大な鉄の塊同士がぶつかったような轟音がとどろく。車の衝突音だろうと藤堂は呑気に思ったが、青年達は同時に息を呑んだ。悲鳴を上げる事さえ、忘れていたようだった。

血痕がこびりついた蓋の裏から、黒い塊がずるりと這い出してくる。明石と由井が逃げるように駐車場の壁に張り付き、三代は呆然と立ち尽くす。徐々にその全貌を現す霊を見て、藤堂は思わず、げ、と呟いた。

黒い石が連なって巨大な岩のようになった霊を見て、芹香が苦い顔をした。よくよく見れば、岩かと思われた塊は苦悶の表情を浮かべた人の顔で構成されており、ぽっかりと開いた口から各々悲鳴を上げている。どす黒い顔達の目には、光がなかった。

「集合霊だ。引き寄せられたな」

苦々しく呟いた芹香を、数十対もの目が一斉に見る。視線を向けると同時に彼女へ迫った集合霊はしかし、真つ向から繰り出された拳とぶつかって止まった。拳が触れた箇所から波紋が広がるように霊の顔が歪んで行き、円の中心付近にあったものが弾ける。空いた場所は、別の顔がずれて埋めた。

拳を引いた芹香は、僅かに表情を曇らせていた。藤堂も怪訝に片眉を寄せる。あれだけまともなぶつかっていれば、破裂していてもおかしくなかったはずだ。

顔の幾つかを失った霊は、一回りほど小さくなって僅かに後退した。しかし動きが衰える事はなく、鳴り響く不協和音も止まない。然したるダメージもないようだ。

「これ、どうにか出来んの？」

藤堂が問い掛けると同時に、霊達の口が大きく開かれた。芹香は一瞬目を見開いて慌てて後ろへ退くが、次の瞬間には両耳を塞いできつく目を閉じた。

「いたっ」

何が起きたのか、藤堂には分からなかった。同じく明石と由井も不思議そうな顔をしていたが、三代は両耳を押さえて呻く。

芹香が小さく舌打ちを漏らした。音波でも出したのだろうか、藤堂は考える。耳を塞いだ隙に、芹香の眼前へ霊体が迫る。

「問題ないが……これは抹消するしかないかも知れん」

遅れて藤堂の声に答えた芹香は、霊体とぶつかる寸前、片足を上げてその体を止めた。触れられるということは、靴にも何がしかの術が掛けられているのかも知れない。

霊体を構成する顔の内一つが本体から離れ、大きく口を開いたまま彼女の首筋を掠める。芹香は咄嗟に片手を伸ばし、後ろの四人に被害が及ばないように霊の頭を食い止めた。しかし僅かに髪が切れ、銀色に煌めきながら床へ落ちる。首筋に一筋傷が付き、じわりと染み出した血の滴が、白いワイシャツの襟を汚した。

流石に痛かったのか、芹香は僅かに眉をひそめ、鷲掴んで止めた頭を握り潰した。風船が弾けるような音が鳴り響き、集合霊の顔達が一様に苦しげな表情を浮かべる。彼らは感覚を共有しているのかも知れない。

「ひどい……」

三代がぼつりと呟いた。芹香の所行に対してなのか霊の様子に対してなのか、藤堂には判断出来なかった。

足に力を込めた芹香のパンプスのヒールが、霊体にめり込む。しかし破裂させるには至らず、顔達が叫び声を上げるのみだった。つんざくような悲鳴に耐え切れず、藤堂は両手で耳を塞ぐ。

お互い一步も引かぬ膠着状態の中、芹香が肩越しにコウを見た。彼女の視線が逸れた隙にまた一つ霊の顔が飛び出したが、退治屋の手はそれを許さない。勢い良く掌に当たった顔は大きく歪み、衝撃で弾け飛ぶ。また甲高い悲鳴が木霊した。

藤堂の横にいたコウが、ふわりと宙に浮かんだ。少年は藤堂をちらりと見た後、闇を切り取って作られたような悪霊へ向かって飛んで行く。それに先導されるように、小さな守護霊達は一斉に藤堂の下から飛び立った。

子供等は小さな両手を大きく広げ、後ろから集合霊をがっちりと抱え込んだ。同時に芹香が足を離し、一步下がる。ひ弱な手で抱えられた巨大な霊は、脈打つように全身を動かしたが、逃れる事は出来なかった。

「全力で行く。寸前で離れるよ」

白い手袋が、淡く光った。コウが頷くと同時に、芹香は右腕を大きく引き、集合霊に力一杯手刀を叩き込んだ。子供達が示し合わせでもしたかのように同時に手を離して、それぞれ散り散りに黒い塊から離れる。霊の顔全てが苦痛に歪み、断末魔の悲鳴を上げた。

芹香の手が、更に横へ動く。大きく裂けた黒い顔達は、尚も金切り声を上げ続ける。内部へめり込んだ手が、黒い塊を一気に切り裂いた。

ぱん、と弾ける音が鳴り響く。音と共に集合霊は消え、芹香が息を吐いた。

「お前が本体か」

塊が消えた後には、髪の毛の長い女が頂垂れて立っていた。その体が半透明に透けている事から、幽霊であると知れる。藤堂の位置から女の顔は見えないが、芹香は複雑な表情を浮かべていた。女の背後に浮かんでいたコウガ、芹香の側へ移動する。

女は何も言わなかった。あれほど喧しく鳴り響いていたクラクシヨンもブレーキ音も、もう聞こえてこない。しかし藤堂の腕には、知らぬ内に鳥肌が立っていた。寒い訳ではない。霊が発したもののなにか、淀んだ生温い空気のせいで、寧ろ暑い位だ。

寒気がする。彼らが離れるだけでこんなにも霊の影響を受けやすくなるとは、思ってもみなかった。有り難くもない能力を持って生まれてしまったものだ。

ふと気付くと、女は顔を俯かせたまま首だけを向けて藤堂を見ていた。光を失った目と目が合った瞬間、視界が一瞬暗くなる。嫌だと思っても、逃れる事は出来なかった。

五感は、耳と目しか働かない。触覚も嗅覚も塞がれてしまったかのように、何も感じなかった。しかし大勢の男女が笑っているのは聞こえる。視界一杯に広がるアスファルトに、血の塊が吐き出された。口いっぱい、生臭い鉄の味が広がる。折れた歯が吐いた血の中に混じり、地面を転がって軽い音を立てる。頭を割らんばかりの耳鳴りが、頭蓋に反響している。その内視界が真っ暗になり、また開ける。同時に、開かれた車のボンネットが見えた。嫌な予感がする。笑い声が耳鳴りのように木霊する。浮遊感と共に再び視界が暗くなり、次に開いた時には車の機械部分が見えた。背筋が寒くなる。そんな筈はない。そんな事が出来る筈がない。視界が反転し、振り下ろされる金属バットが見えた。視界が真っ赤に染まる。次々に鈍器が振り下ろされるが、何も感じない。笑い声と共に片側だけ視界が暗くなり、意識が途切れた。

気付けば藤堂は、地面に膝を着いていた。背中を伝う汗が、シャツを湿らせる。煩い程に脈打つ己の心臓の音に、生を実感した。

「メイを……メイを呼べ。助けてやれ」

藤堂は絞り出すようにそう呟いてから、恐る恐る顔を上げた。芹香の不安そうな目が真っ直ぐに藤堂を見ていたが、女の霊はもう、彼から顔を背けていた。彼女が何故あんなったのかまでは、藤堂には分からない。犯人グループが誰だったのかも分からないが、彼女がされた事だけは、しっかりと理解した。

芹香の背後で、コウが気の抜けた笑顔を見せる。怪訝に思った藤堂は立ち上がるようにしたが、足に力が入らなかった。自分の情けなさに、力なく失笑する。

コウが芹香の横をすり抜け、霊の前に降り立った。女の背後にいた子供達が、藤堂の下へ帰って来る。コウ以外の守護霊は普段見えないのだが、姿を見せないだけなのだろうか、藤堂はぼんやりと考える。

あどけない笑顔が、女を真っ直ぐに見上げている。女は僅かに顔を上げ、コウを見たようだった。

誰一人として、一言も発しない。コウが小さな指で上を差した時、淀んだ空気が揺らいだ。長い髪に隠れていた女の顔が天井を見上げ、両目から大粒の涙を零す。藤堂の背中を伝っていた冷や汗が、すうと引いた。

彼女がどうして集団暴行を受け、死に至ったかは定かではない。藤堂に見えるのは霊が覚えている記憶だけで、その時の心情も感情も、分かりはしない。けれど彼女が零した涙を見て、苦しかったのだろうかと思う。

女の足が、徐々に透けて行く。コウは天井を指差したまま、浮かべた笑みを深くした。その表情を見た女の唇が微かに動いたが、藤堂の位置まで声は聞こえてこない。

コウが女に向かって、小さな手を振る。全身が消える間際、彼女はかすかに笑ったように見えた。

「あつちー」

服の裾を摘んで風を送りながら、藤堂はうんざりとぼやいた。ジヤケットを脱いだ芹香も、流石にワイシャツの袖を捲っている。抜けるように白い腕は、しなやかな筋肉で引き締まっていた。

女の霊が成仏した後、藤堂達は暫く何も言えなかった。遅れて警察が到着してからも、何を話せばいいやら皆目分ならず、芹香が説明するのをぼんやりと聞いていた。

警察に軽く事情を聴取されてから解放されたが、藤堂は浮ついた気持ちのままだった。依頼人達が依頼料は後日振り込みますと言うのを聞くまで、ずっと呆けていた。

芹香は足を引きずるようにして歩く藤堂を見て、苦笑した。彼女の首には、にこにここと機嫌の良さそうなコウが抱き付いている。余程彼女が気に入ったのか、先ほどから離れようとしなない。

「まさか浄霊しちまうとはね」

「ああ……驚いた」

ぼやく藤堂に同意して、芹香はどんよりと曇った空を見上げる。

眩しそうに目を細める彼女が、藤堂には陰鬱な曇天より遙かに眩しく見えた。

「子供は強いな。迷う人に、真っ直ぐに道を示してやれるんだ。あなたも、助けたいと願ったからかも知れないが」

「そういうもんなの？」

「そういうものだ。……ああ、大丈夫だよ。すぐ治る」

首の傷を覗き込むようにして見たコウに、芹香は笑って見せた。よくよく見れば皮膚が僅かに腫れ、傷に沿って赤紫色に変色している。安堵したように頷く少年の手が、彼女の頭を撫でた。透けた小さな掌越しに、銀色の髪が煌めいて見える。

藤堂はこの少年に護られているのだと思うと、どうにも複雑な気分になる。コウが果たして何故自分の守護霊となったのか、知りたくもあり、知るのが怖いような気もした。

守護霊が如何にして守護霊となるのかは、未だに分かっていない。守護される側にはそれだけの理由があるという以外のこと。どのようにして守護霊が選ばれるのか、またどんな霊がそうなるのかも、無闇に口を利かない彼らは黙して語らない。彼ら自身、知らないのかもしれなかつた。

「痛くないの？」

穏やかな表情を浮かべていた芹香が、怪訝に眉を上げた。藤堂は首を指差して見せる。

「もう平気だ。済まんな」

「痛そうだけど」

「これぐらいでいちいち痛がっていたら、退治屋は務まらん」

ふつんと鼻を鳴らし、藤堂はようやく辿り着いた駅の、改札口を抜ける。のんびりとホームへ向かう彼の歩調に合わせ、芹香は歩く速度を落とした。

「あんま怪我すんなよ、女なんだから。メイもよく、顔に傷作ってっけど」

ホームの適当な位置で立ち止まって芹香を振り返ると、彼女は少し離れた場所で、目を丸くしていた。藤堂は首を捻る。

「なに？」

「……あ、いや」

電車の到着を告げる駅員の声に会話を遮られ、芹香は黙り込んだ。また妙な事を言ったかどうかと、藤堂は内心ひやりとする。

ホームに滑り込んだ電車に乗り込み、空いた席に並んで腰を下ろした。乗客の視線が刺さるが、藤堂は気に留めないように目を逸らす。芹香は良くも悪くも目立つから、行きもこうして、嫌と言うほど通行人から不躰な視線を送られた。

「父にも、同じような事を言われたんだ」

目を見張った藤堂を見て、芹香は苦笑した。

「私のように肉弾戦派の退治屋は、霊に攻撃が通じるように、刺青を入れるだろう」

「ああ……」

小田原と言ったか、以前見た鳳の退治屋は、そういえば刺青をしていた。あれはとても肉弾戦するようには見えなかったが。

「あれの呪文は皮膚に直接彫りこんだ方が、高い効果が得られる。しかし父は、それを嫌がった」

「そりゃ、娘の手に刺青入れたい親父なんかいねえだろ」

「そうでもない。……これは、父が考案したんだ」

芹香は手に持っていたジャケットから、手袋を取り出して見せた。何か書いてあるものとしか認識していなかったが、改めて見ると、恐ろしく細かい文字でよく分からない言葉がぎっしりと書かれている。こんなもの、藤堂には考案するどころか、書くことさえ出来ないだろう。

「布地に書いても、彫りこむのと同じ効果が得られるようになる。これを書けるのは私と、研究に携わった一部の人間。それから、父だけだった」

長い睫毛を伏せて、芹香は手に持った白い手袋を握り締める。眉間には、僅かに皺が寄っていた。

彼女の父親に何があったのか、藤堂は知らない。聞いてはいけなような気がしている。しかしそれは、父親の愛が確かに存在した証なのだろう。

寂しげな横顔に頭でも撫でてやろうかと思ったが、藤堂が手を伸ばす前にコウが撫でていたので、やめた。

第五章 救う人々 五

芹香と共に事務所へ戻ってみると、明が般若のような形相で仁王立ちしていた。入ってきた二人を見たゆなも、カウンターに突っ伏して顔だけを上げた姿勢で、半目になって明らかな侮蔑の視線を送っている。芹香の表情が引きつった。

「遅いよ、どこ行ってたの！」

「ゆなが行く時はついて来てくれないのに、どこへ行っておられたのです」

ほぼ同時に私情丸出しの不平を述べた二人に、藤堂は疲れた溜息を吐く。これだから、店を出たくないのだ。

「依頼が来たから、行ってきただけだろ。そんな怒んなよ」

「藤堂さんまで行く必要ないでしょ！」

「まあ、そうなんだけど」

言い訳はしなかった。店を空けてしまったのは、自分が悪いからだ。明が怒っているのは、その事に対してではないだろうが。

藤堂は肩を怒らせる明の横を通り抜け、煙草に火を点けながら、カウンターに腰を下ろした。ゆなが横で睨んでいる。こちらは藤堂が誰かと二人でいる事が、気に食わないのだろう。

「藤堂も、ちゃんと仕事をしたぞ。な？」

芹香が背中に負ぶさって肩口から顔を出していたコウに同意を求めると、彼は明に向かって何度も頷いた。しかし明は更に眉をつり上げて、勢いよく藤堂を振り返る。

「仕事したのは藤堂さんじゃなくてコウ君でしょ！」

「ああまあ、そうなんだけど」

どうでもよくなった藤堂は、明の勢いに流されて肯定した。やったのがコウだというのは事実だが、今回一番大変な目に遭ったのは藤堂だ。負った精神的ダメージは疲労に変わり、全身に蓄積されている。無駄に疲れただけかも知れない。

怒る明に、コウが悲しそうな顔をした。彼だけは藤堂の味方で間違いないだろう。明相手では、些か心許ないが。

「あつ違つよ、コウ君が悪いんじゃないよ……あれ？」

コウの顔を覗き込んだ明が、訝しげな声を漏らした。彼女の視線の先、芹香の首には、集合霊に付けられた傷がある。襟が汚れていたから、近付けば明でなくとも気付くだろう。

明が見上げた瞬間、芹香の顔が強張る。見えなくとも明がどんな表情を浮かべたのか、藤堂には予想出来た。

「なんですかこれなんで怪我してるんですか！」

「いや、ちよつと手こずつて……」

しどろもどろになる芹香から視線を外し、明は再び勢いよく藤堂を振り返った。鬼のような形相だ。これはあの霊より怖いかも知れないと、藤堂は頬杖をついて煙草を吹かしながら呑気に考える。

「何してたのよ藤堂さん！」

「何もしてねえよ」

「何もしないから怪我するんでしょ！」

全くだ。藤堂は納得したが、明は尚も憤慨していた。これは暫く収まりそうにない。

「何騒いでんのよあんたら」

入口から聞こえた声に、明が驚いてそちらを向いた。

肩越しに振り返った芹香の後ろから顔を出したのは、新藤祐子だった。赤みがかつた茶に染められた髪をかき上げて、彼女はドアの前に立ち尽くす芹香の背中を叩く。しかしすれ違いかけた所でコウに気付き、立ち止まって目を見張った。

「あら何この子、どこで憑けてきたの」

「藤堂の守護霊だ。懐かれた」

「へエ、藤堂君と一緒に巨乳好きなんだ」

祐子の言葉に、コウは不思議そうに首を傾げた。明が笑う。

「藤堂さんと一緒にしたら、コウ君が可哀相ですよ」

「言つわねえメイちゃん。子供ってそういうもんよね」

相変わらず大きく開いたシャツの襟を摘んで風を送りながら、祐子は芹香を避けて店内へ入ってくる。外はまだ暑いのだろう。

「元気？」

誰にもなく問い掛けた祐子は、彫りの深い顔に笑みを浮かべて見せた。焼けた肌に、うっすらと汗が浮かんでいる。

「皆さん元気すぎて大変なのです」

ショートカットの髪を揺らし、祐子はカウンターへ歩み寄る。両手で頬杖をついたゆなの顔を覗き込み、ヘルメットを被った頭を撫でた。

「元気なのはいい事よ」

ゆなの頬が、僅かに赤らむ。嬉しいのだろう。

「ホント、ちっちゃいわねえ」

「小さいのは今だけなのです。その内、祐子さんのように大きくなってみせます」

「頑張つてね」

ゆなのヘルメットを軽く叩き、祐子は楽しそうに笑った。ゆなは祐子の胸に向かって手を合わせ、真剣な表情で拝む。

ついこの間あんなことがあったばかりなのに、何故彼女はこんなにもこの事務所に順応しているのだろう。祐子の順応性にも驚くが、ゆなや明の寛容さにも呆れる。渚がいたらどうなっていただろうと思ったところで、藤堂はふと、顔を上げた。

「そっぴや、高屋敷帰ってねえか。アイツ、気がついたらいなくなつてたんだわ」

あ、と明が呟いて、店内を見回した。広くないのだから隠れていても居れば分かるし、隠れる意味もない。明の様子を見る限り、帰つてはいないのだろう。

祐子は目を丸くして、大きく瞬きした。

「渚ちゃんなら、昼間に見ただけ。高屋敷の人と出てったわよ」

「高屋敷？」

俄かに表情を硬くして、芹香は問い返す。

「本家か？」

「誰だつたつけなあ……あそこ、親戚の家が多すぎていちいち覚えてないわ」

芹香は更に表情を曇らせた。藤堂は煙草の火を消しながら、訝しげに眉をひそめる。

「アンタ仕事してんの？」

「話の腰折らないでよ」

祐子は迷惑そうに藤堂を見ながらカウンターの入り口側に置かれた椅子を引き、腰を下ろした。芹香が扉から離れ、キャビネットに寄りかかる。

「何かあったのかも知れんな……そもそもあの厳格な家が、渚の家の出を許した事がまず疑問だったが」

「連れ戻されてしまったのでしょうか」

抑揚のないゆなの声から感情は読み取れなかったが、心配しているのだろう。元々垂れ下がった眉が、更に下がっている。芹香は顎に手を当て、考え込むような表情を浮かべた。

「いきなり連れ戻すほど、常識知らずな方々ではない。文句があればまず、こちらに連絡して来るだろう」

そんな懸念をするほど、渚は厳しい家で育つたのだろうか。藤堂は高屋敷家が有名だということしか知らないし、そもそも苗字の違う遠い血縁者でさえ、一括りに高屋敷家と呼ばれていることさえ知らなかった。

先ほどから黙りこんだままの明をふと見ると、彼女は眉をつり上げていた。藤堂はその表情に、思わず嫌な顔をする。

「何よもう、大人って勝手すぎる！」

唐突に大声を上げた明に、全員の視線が集まった。肩を怒らせた彼女は憤慨した様子で、つかつかと藤堂へ歩み寄ってカウンターを両手で叩く。

「明日になっても帰って来なかったら、絶対乗り込んでやるから！いいよね、藤堂さん？」

芹香の言葉を聞いていなかったのだろうか、藤堂は呆れた。しかし息がかかりそうなほど顔を近付ける明の剣幕には逆らえず、思わず頷いてしまう。

祐子が呆れたように肩を竦め、椅子の背もたれから身を乗り出して、芹香を見上げた。

「それよかあんた、今日どうすんのよ。あの子帰って来ないと、家帰れないんじゃない？」

「あ」

合鍵を作っていないのだろうか、藤堂は思う。彼女達は別々に帰る事がないから、なくて不便はしないのかも知れないが。

困った顔をした芹香を、祐子は笑った。

「またウチ来ればいいわよ。藤堂君じゃ何するかわかんないし」

煙草に火をつけながら、藤堂が肩を落とした。明は立ち上った煙を避けて、カウンターから一步下がる。

「しねえよ。どっちかつつーとアンタだよ心配なのは」

「どんな心配よ」

「お前達、私をなんだと……」

ふと横を向いた芹香の顔を、コウが覗き込んでいた。寂しそうなその表情を見て、芹香は言葉に詰まる。コウが寂しがるからうちに泊まりなさいとも、藤堂には言えない。そんな事を言ったら、今度こそ明に殺されてしまいそうだ。

藤堂は浅く溜息を吐き、コウに向かって手招きした。彼は藤堂と芹香の顔を見比べた後、素直に藤堂の下へ戻る。子供は若い女性の方が好きと言うが、本当なのかも知れない。

「とにかく今日帰って来なかったら、連絡取るなりするしかねえな。アイツ一応、従業員だし」

「そうだよ、絶対怒鳴り込む！」

「うるせえよメイ」

拳を握って意気込んだ明に、藤堂は短く溜息を吐いた。

渚は結局、夕方を過ぎても帰って来なかった。その日は暑さの為か客も来店せず、憤る明を無視して渚を心配しながら、各々家路に着いた。

結局閉店まで事務所で話し込んでいた祐子と共に、彼女の家へと帰った芹香は、夕食後の晩酌にまで付き合わされていた。節約に努める祐子は晩酌をビールから発泡酒へと切り替えたようだが、煙草を吹かしていた。芹香がいた時は、気を遣って吸わなかったのかも知れない。これでは発泡酒に変えた意味がないような気もする。

「あの刀、破魔刀よね」

テーブルに頬杖をついた祐子は、問い掛けるでもなくそう呟いた。芹香はタコの刺身を摘みながら、小さく頷く。

「そつだろつな。あれは扱いが難しいと聞いた」

「ちよつと迷うと斬れなかつたりね」

祐子は缶に口を着けて残っていた中身を一気に飲み干し、新しい缶に手を伸ばしながら続ける。

「こんな事言うモンじゃないと思うけどさ、得体の知れない子よね」

祐子は長い爪に当たらないように、指の腹で缶を開けた。空気の漏れる小気味よい音がする。安い発泡酒を一口嚙下し、芹香は苦笑した。

「気付いていたくせに」

「アラ、ばれた？」

おどけた仕草で肩を竦めて見せ、祐子はぺろりと舌を出した。その舌で缶の縁に付いた飛沫を舐めとり、縁に口をつける。芹香はそれに つられて、缶の底に残っていた中身を飲み干した。

暫し続いた沈黙の間、時計の音がやけに響いて聞こえていた。秒針が立てる規則的な音に、芹香は尻の座りが悪くなる。

「高屋敷本家の子つてさ、身内に婚約者いる筈よね」

「ああ、従兄弟がそつだと聞いたが」

祐子は頬杖をついたまま首を傾げ、テーブルへ無造作に置いてあった缶を芹香の前に置き直した。

「変ねえ。あの子藤堂君好きみたいだけど」

「えっ……」

缶を取ろうとした芹香の動きが、止まった。祐子が小さく噴き出す。

「やあねあんたも、ホント鈍いんだから」

「あなたが聡すぎるだけだ。……しかし渚はもう二十だろう。結婚していて然るべきだが」

持ったままだった缶を置き、祐子は頷く。頬杖をついた姿勢から緩慢な動作で身を起こし、煙草に火を点けた。甘い香りが鼻腔を擦る。一見快活そうに見える彼女の仕草には、逐一陰性の艶がある。

「変よね。連れ戻されたんなら、その辺かしら」

芹香は眉間に皺を寄せて、厳しい表情を浮かべた。祐子は両肘をテーブルに着いて、両手にそれぞれ煙草と発泡酒を持ったまま、首を捻る。

「何度も言うがな、あそこのご両親はそんな方々じゃない」

「何よ、知ってるの？」

芹香が頷くと、祐子は意外そうに眉を上げた。

「提携関係にあるのだから、元締めと挨拶ぐらいはするさ」

ふうんと鼻を鳴らしたが、祐子は得心が行かないような様子だった。タバコの煙が細く立ち上り、室内の生温い空気に拡散して行く。「元締めって言い方もよく分かんないけど……高屋敷はウチに輪かけてぼったくるじゃない。そんなのがいい人とは思えないわよ」

祐子の言は尤もだ。高屋敷家は依頼された仕事は確実にこなすが、その分法外な金額を請求する。しかし芹香には、ぼったくりというのは少々違うような気もしている。

「あの人達は、少しずれている。渚もそうだが」

「何がずれてんのよ」

芹香は困ったような表情を浮かべて視線を彷徨わせ、口を噤んだ。他人の噂は好きではないし、祐子にわざわざ教えるような事でもない。あまりいい話でもないから、他言するのも憚られる。

そんな芹香の心中を察したのか、祐子は煙草の火を消しながら緩く首を振った。吐き出される煙が、彼女の顔の前を通り過ぎる。

「まあいいや。あんたも辞める直前に、また会社のバイク壊して放つといたみたいだしね。部長が怒ってたわよ」

「う……………」

芹香は言葉に詰まって、缶の縁に口をつけた。祐子はにやにやと笑みを浮かべている。

「アレ、五台目だっけ？」

「……………六台目だ」

祐子は高らかに笑い声を上げた。乗り捨てたりするのが悪いのだが、大抵急いでいたから、そうせざるを得なかった。

「あんた、藤堂君どう？」

唐突な問いかけに、芹香は思わず缶を傾けていた手を止めた。質問の意を図りかね、彼女は眉を顰める。

「何がどう、なんだ」

祐子は赤い唇を弧に歪め、企むような笑みを浮かべた。芹香は思わず身を引く。彼女は、祐子のこの顔が苦手だ。

「やあねえこの子ったら。どうって言ったらアレしかないでしょアレ」

「……………酔ってるのか？」

元々色黒なせいで顔色からは判断出来ないが、よくよく見てみれば、祐子の目は重たそうに半分閉じられていた。艶やかに潤んだ目が、上目遣いに芹香を見ている。

祐子は背中を丸めて頬杖をついたまま、片手に持った発泡酒を口元へ持つて行き、缶を殆ど垂直になるまで傾けた。嚙下する度に喉が動き、首筋を液体が伝って行く。

「やあだ、酔ってないない」

口元を手の甲で拭いながら否定したが、彼女の目は明らかに潤んでいた。寝かした方がいいたろうかと、滅多に酔わない芹香は冴えた頭でそう思う。

「酔っ払いは大体そう言うな」

「話逸らさないですよ。あんたまだ若くて綺麗なんだから、もつとがつつきなさい」

「何の話だ」

祐子の晩酌に付き合つのは好きだが、酔っ払いの相手をするのは本意ではない。芹香は五本目で彼女を止めておけば良かったと後悔しながら、目を逸らして安い酒を飲む。

父を失くしてからもそこまで寂しいと思わなかったのは、祐子がいてくれたお陰もあった。彼女が何やかやと世話を焼いてくれたから、完全に一人になつてしまつたとは、思わなかった。感謝こそしているものの、絡まれるのは流石に御免被りたい。

「あのねえ、人間恋よ恋。恋しなきゃ生きてけないの。人生面白くないの。恋愛しなさい」

祐子の口調は普段とそう変わらないが、手振りのせいで酔っ払いが管を巻いているようにしか見えなかった。芹香は心中、溜め息を吐く。元々絡む性質の祐子が酔うと、こうもひどくなるのかと呆れる。

「出来る事ならそうしたいが、こんな長身ではな」

「何身長コンプレックス？」

本音ではなかった。とりあえず話を逸らそうと言つただけの事だが、祐子は身を乗り出して食いついてくる。二十歳を過ぎた頃、父から彼氏の一人でも作れと言われたのを思い出して、芹香は口元に笑みを浮かべる。

そんな暇がなかったというのが、実際の所だ。好いた惚れたとはよく聞く話ではあったが、自分には関係のない事だと、頭から決めてかかっていた。何しろ仕事が忙しかったから、そんなものに割く時間がなかったのだ。

「大丈夫よ、大丈夫」

何がどう大丈夫なのか、芹香には分からなかった。祐子の目は最早、すっかり据わってしまっている。

「あいつ胸しか見てないから。巨乳大好きだから」

瞬間的に、頭に血が上った。芹香は目を見開いて、テーブルを叩く。衝撃で並んだ空き缶が揺れ、何本かが倒れた。

「胸のことは言うな！」

声を荒げてから、はっとした。祐子にはやにやと、嫌な笑みを浮かべている。芹香は己の顔が一気に熱くなるのを知覚した。

「やーねえ可愛いんだから。でかくて悪いこたないわよ」

「う……うるさいもう寝ろ！寝る！」

「あんたホント赤面症ねえ。おやすみ」

満足げに鼻を鳴らしてひらひらと手を振る祐子から顔を逸らし、芹香は溜息を吐いて席を立った。

第五章 救う人々 六

その日、明が事務所に顔を出したのは、昼食を食べ終わった後だった。明は店に出てきた面子の中に、渚の顔がないのを確認するなり憤慨し、眠たげな藤堂の顔を見て、行こうといつものように言い出した。おう、と意欲を示したのはゆなだけで、藤堂と芹香は顔を見合わせて呆れた。

流石にアポイントなしで押しかけるのは気が引けたのか、芹香は道中、高屋敷家に電話を掛けていた。これこそが普通の人間の対応だと、藤堂は内心感動さえ覚える。感情に任せて突然怒鳴り込む明や、放っておくととんでもない事を口走るゆなとは、雲泥の差がある。今まで女性陣に振り回されるだけ振り回されてきた藤堂は、芹香が入ってくれて良かったと、心の底から思った。

事務所の最寄り駅から三十分ほど離れた静かな駅の裏手に、渚の実家はあった。広大な敷地内に植えられた木々の緑が、燦々と照る太陽の中、色鮮やかに煌めいている。デコラティブながら堅固な門から母屋までの距離は、一体どれほどあるのかと疑問に思うほど遠い。この距離を、歩けと言っただろうか。

外国の別荘地にも迷い込んだのではないかと不安になる程の豪邸に、藤堂はすっかり気圧されていた。渚が家事は女の仕事などと古い事を言っていたから、てっきり日本家屋が出てくるものとはかり思っていた。単なる偏見に過ぎないが。

「……お前ホントにここに乗り込んだの？」

「そうだけど？」

事も無げに答える明に、藤堂は呆れた溜息を吐いた。物怖じしないのはいい事だが、明の行動は軽率に過ぎる。更に、バットを持っただまうろつくのはやめて欲しい。

「ゆなもこんなお家に住んでみたいものです。毎日ウニやイクラを踊り食いしたいのです」

大きな目を輝かせて敷地内を覗き込むゆなは、無感情にそう言った。目の前の豪邸に圧倒されたまま、藤堂は力なく頷く。

「ああ、いいねえ軍艦巻。ウニなんかここ三四年は食ってねえわ」
その最後の記憶も、実家に帰った時、姉の愚痴を聞いたお礼に食わせて貰ったものだった。藤堂にとって高級食材は、自分の金で食べるものではない。

「現実から目を背けちゃダメだよ。これが所得格差つてもものなんだから」

「メイ、そういう問題じゃない」

短く突っ込んだ芹香は、徐に門の横に取り付けられたインターホンを鳴らした。こちらも物怖じしない性格のようだが、元々大企業の課長という立場であった分、明の無鉄砲とは明らかな差がある。電話番号を知っていたし、高屋敷と鳳とは提携関係にあるようだから、主と顔を合わせた事ぐらいはあるのかも知れないと、藤堂は思う。そう思いたかった。

ややあつて、スピーカーから返答の声が聞こえた。やけに事務的な声に、藤堂は無意味に緊張する。彼は権力に弱い。

「お嬢さんが勤務中に忽然と消えてしまった事について……っ」

「さ、先ほど連絡した堤です」

あらぬことを口走ったゆなを慌てて押さえ込み、芹香はどもりながら告げた。また少々の間があつて、スピーカーから動揺したような声が聞こえて来る。芹香が有名なせいなのか、ゆなの発言に対してなのか、藤堂には判断がつかなかった。出来れば前者であつて欲しいと思う。

無意味に視線を巡らせてようやく、藤堂は門柱に取り付けられたカメラに気付いた。別段珍しいものでもないが、見られていると思うと、余計に緊張する。

スピーカーから、どうぞと声が聞こえた。音もなく門が開くとほぼ同時、明が躊躇なく敷地内へ足を踏み入れる。少しは遠慮して欲しいものだ。

既に疲れた表情の芹香に続いて、ゆなと共に一步踏み出し、藤堂は後ろへつんのめった。慌てて足下を確認すると、地面がゆっくりと動いている。

「なにコレ、家ん中に動く歩道？」

「ほう、これは素晴らしい。歩かなくて済むのです」

ゆなは周囲を忙しなく見回しながら、感嘆の声を漏らした。彼女は藤堂と同じく、動き回るのは苦手なのだ。

「お金持ちは違うよね」

明が風にはためくセーラー服の裾を押さえながら、皮肉めいた台詞を吐いた。藤堂は心の底から同意する。

歩道の左右に広がる広大な庭は、森林公園のような様相を呈していた。木々の隙間から差し込む木漏れ日が煌めいて、四人の顔へ斑に影を落とす。穏やかな表情で庭を眺める芹香の髪が眩しい程に輝き、藤堂の目を細くさせた。梅雨が明けたばかりで未だ蒸し暑くはあるが、その分類を撫でる青い風は心地良い。

「遠いのです」

長い髪を二つにまとめて掴んだまま、ゆなは早くも不満の声を上げた。コットンワンピースの裾がはためき、時折華奢な膝が覗く。貧乏ゆすりでもするように、ハーフブーツの踵が規則的に地面を叩いていた。

徐々に近づく邸宅の巨大さに、藤堂は呆然とした。真っ白な壁に、淡いグレーの屋根。等間隔に並んだ大きな窓には、全てにレースのカーテンが掛けられており、中の様子は覗えない。これでは渚の金銭感覚が狂っている理由も分かる。

あの幽霊屋敷もかなり大きく感じたが、こちらとは比較対象にもならない。ごく普通の家で生まれ育った藤堂には、何坪あるのか想像もつかなかった。

「あの家、何人住んでんの？」

「渚が家を出たから、今は高屋敷さんのご夫婦だけだ。使用人の寮は、あの裏にある」

芹香の返答に、藤堂は顔をひきつらせた。藤堂の家など、この中の一部屋に収まってしまふのではないかという気さえする。そもそも使用人が住む寮が同じ敷地内にあることが不思議だ。

「ワケわかんねえ」

「ぼやく藤堂を振り返り、芹香は含み笑いを漏らした。

「渚の家も凄いぞ」

「二人しかないのに？」

「二人しかないのに」

藤堂の台詞を反芻して、芹香は楽しそうに笑った。藤堂が喉を鳴らして笑うと、ゆなが彼の手を握る。この娘でも緊張する事があるのかと訝って見下ろすと、彼女は何か、渋い表情を浮かべていた。屋敷の手前まで辿り着くと、見事な装飾の施された両開きの扉が、自動的に開いた。獅子が輪を銜えた形のドアノブは、ただの飾りなのだろう。

「……ひっ」

広い玄関ホールに敷かれた赤いカーペットの左右、ずらりと並んだ使用人と思しき人々を見て、藤堂は思わず声を上げる。ホールの奥、左右には短い階段が設えられており、扉から見て正面に白い大理石の彫像が置かれている。天井から下がる巨大なシャンデリアに付けられたボールクリスタルが、電球の光を乱反射させ、ホール全体を煌かせていた。

使用人達は機械のような正確さで揃って頭を下げ、お待ちしておりました、と静かに言った。声までもが見事に揃っている。その様子に気圧され、藤堂は身を引いた。

「どうぞ、こちらへ」

この威圧感には流石の明も圧倒されたのか、バットを抱き締めたまま、進み出たメイドが促すのに反応出来ずにいた。以前来たとは言っていたが怒鳴り込んだそうだから、こんな風に歓迎はされなかったのだろう。どんな様子であったのか詳しく聞いた訳ではないが、よくぞ追い返されなかったものだ。

こんな事ならスーツでも着てくれば良かったと、藤堂は後悔した。正装したところで圧倒されることには変わりなかった。ただろうが、私服姿の彼は、この家にあまりにも似つかわしくない。

うろたえる三人を尻目に、真つ先に進み出たのはやはり芹香だった。背筋を伸ばしてホールを進む彼女につられ、明も後について行く。藤堂は最後まで動揺していたが、ゆなに手を引かれるようにして歩き出した。

一歩踏み出す度に、硬い靴底越しにも、柔らかなカーペットが深く沈む感触が伝わってくる。足を取られて転びそうだ。恐々歩く藤堂と対照的に、女性陣の足取りは普段と変わりなかった。心強く思ったが、己の小心ぶりが情けなくも感じられる。

ひつつめ髪のメイドに通されたのは、広々とした応接室だった。中央に置かれたガラステーブルを囲むように、黒い革張りのソファが置かれている。レースカーテンの引かれた大きな窓からは柔らかな陽光が差し込み、壁際の飾り棚に整然と並べられたコレクショングラスを輝かせている。部屋の隅に置かれたコーナーキャビネットも、ガラス戸に光が反射して中身こそ見えないが、繊細な象眼細工が施されている為、それ自体が部屋を彩っている。

全く以って場違いだ。藤堂は今すぐにでも踵を返してしまいたかったが、ゆなにがっちりと手を握られているので、そうもいかない。ここまで来て、逃げ帰るわけにもいかなかった。

「お掛けになって、少々お待ちください」

言われるがままソファへ腰を下ろすと、ここまで案内してきたメイドと入れ替わりに、銀のトレイを持ったメイドが入ってきた。静かにテーブルへグラスを並べる彼女は若かったが、その手つきはいやに慣れている。若いのに使用人とは大変だと、藤堂は出されたグラスに手を伸ばしながら思う。

蒸し暑い中を歩いて火照った体に、よく冷えた紅茶が染み渡る。

この紅茶葉もまた高いのだろうと、藤堂はどうでもいい事を考える。グラスの中で、氷が涼やかな音を立てて転がった。

ようやく落ち着いてふと足下を見ると、ガラステーブルの真鍮製の猫足が、白熊の毛皮を踏みつけているのが目に入った。また尻の座りが悪くなる。

「あれは幾らぐらいするのです?」

深く一礼したメイドが出て行くのを横目で見届けてから、ゆなは藤堂を見上げて聞いた。藤堂はぐるりと室内を見回して、グラスをテーブルに置く。

「どれの話? あのグラス? このソファ?」

「もうどれでもいいです」

「ソファなら、全部合わせて三、四百万てとこじゃねえの。家具は扱わないからよく知らねえけど」

ようやく室内のものが高級品であると認識したようで、背もたれに背中を預けていた明が、慌てて浅く座り直した。ゆなは気にする風もなく足をふらふらと揺らしながら、壁際の飾り棚を指差す。

「あっちのグラスはいかほど?」

「ヴェネチアンかね。ユーロ下がってっから、今なら四五万?」

明が信じられないとでも言いたげに表情を引きつらせ、身を乗り出して芹香の向こうの藤堂を見た。

「……あれ全部で?」

「なワケねえだろ。一つが万単位」

「それもねえ、渚が大分壊してしまっただ」

感慨深げな声を聞いた瞬間、芹香が反射的に立ち上がった。彼女以外は三人共、一様に目を丸くして硬直する。室内は適度に空調が効いて涼しい筈なのに、藤堂の背中に汗が滲んだ。

己の行動を、心の底から後悔した。あろうことか、人様の家に飾られているものを値踏みしている所を、見られてしまった。更に口振りから察するに、聞いていたのは主人だろう。

しかし芹香は動じる事なく、ガラステーブルを挟んで向かい側へ移動した家主へ、掌を差し出した。

「お久しぶりです、高屋敷さん。お元気そうです」

「堤君も、元気そうで何よりだ。大変だったね」

両手で芹香の手を握り返してのんびりとした口調で答えながら、高屋敷家の主はふつくらとした幸せそうな顔に、柔らかな笑みを浮かべた。着ているものは高級そうだが、薄くなつた頭頂部とふくよかな体格のせいか、優しい校長先生といった風体だ。

苦い笑みを浮かべた芹香から、凍り付いた表情の藤堂に向き直つた瞬間、家主は目を丸くして硬直した。藤堂は思わず背筋を伸ばす。「そちらが藤堂です。これが知恩院。一番端が黒江と言います」

芹香に説明されると、高屋敷はびくりと肩を震わせて我に返つた。そしてまじまじと藤堂を見た後、につこりと笑みを浮かべる。その表情に、藤堂の肩の力が抜けた。先ほどの表情は何だったのかと訝るより先に、怒られなくて良かったと思う。

「ああ……君が藤堂君か。うちの娘が済まないね」

「はあ、いや……」

なんと答えていいのか分からず、藤堂は中途半端に腰を浮かして差し出された手を握り返しながら、曖昧に言葉を濁した。手を離れた高屋敷は、緩慢な動作でソファへ腰を下ろす。

「娘が喜んでいたよ。あのバッグを随分と欲しがっていてね」

「はあ……」

そういえば本人もそう言っていたと考えながら、藤堂はソファに座り直した。どう反応をしたらいいやら、迷っていた。そもそも自分は何故ここにいるのだろうか、根本的な事に対して疑問を覚える。高屋敷は懐かしそうに目を細め、飾り棚へ視線を移した。藤堂もつられてそちらを見る。

「あの子は料理しか出来なくてね。家事は好きなんだが、料理以外はからつきしなんだ。グラスもいくつ壊されたか」

「そ、そりゃ……」

料理が出来るだけマシな気もしたが、そんなことは言えなかった。それよりも藤堂は、壊されたグラスとやらの金額を計算している自分が嫌になる。質屋の性だろうか。

反応に困って横目で芹香を見ると、彼女は俯いたまま気まずそうな顔をしていた。芹香は料理が全く出来ない。

「あの子が荒れていた頃は、あなた方にも随分と迷惑をかけたようだね」

明と芹香を交互に見て、高屋敷は穏やかな顔に苦笑いを浮かべた。渚が荒れていた事は明から聞いていたが、大企業である鳳にまで何かしでかしたのだろうか、藤堂は呆れる。

「そ、そんなこと……」

明は慌てて顔の前で両手を振ったが、一度ここへ怒鳴り込みに来たのだから、否定するのも妙だと思ったのだろう。困ったように眉根を寄せて、視線を膝に落とした。

主人は全く気にしていない風だが、藤堂は気まずい。俯く明の頭を横目で見ながら、心中彼女の浅はかさを呪った。

第五章 救う人々 七

「……そういえば、用件は何だったかね？」

居心地悪そうに俯いたまま渋い顔をしていた芹香が、ようやく本来の目的を思い出したようで、慌てて顔を上げた。無駄話をしている場合ではなかったと反省しつつ、藤堂も姿勢を正す。

「大変申し上げ難いのですが……お嬢さんが」

「ああ、知っているよ」

え、と明が呟いた。藤堂も怪訝な面持ちで、高屋敷をまじまじと見る。もしかこの父親がと邪推するが、そうだとしたらこんな風になにこやかな対応はしないだろう。

「さつき言っていたら。黒江さんだったかな」

「会話の円滑な進行に貢献出来てこれ幸いです」

藤堂には、ゆなの言葉に突っ込む気力もなかった。しかし芹香が言うように、娘を無理矢理連れ戻す程、分別のない人物とも思えない。口振りから察するに、ゆなに言われて知ったということだろう。インターホン越しにゆなの台詞を聞いていたなら、もっと慌てていて然るべきだろうと藤堂は思う。のんびりと雑談している場合はなかったのではないだろうか。娘が失踪したと言われて、何故こゝも平静でいられるのか。

「あの……もしかして、どこにいるかご存知なんですか？」

藤堂と同じ疑問を持ったのだろう、明は恐る恐るそう聞いた。持った疑問は同じだったが、明の方が遙かに頭の回転が速そうだと、藤堂は自分を情けなくも思う。

「それがね、今調べさせているんだが……ああ、待っていたのかい。済まないね」

明がぽかんと口を開けた。呆れたような表情だったが、気持ちは藤堂にも分かる。行方も知らないのに何の心配もせず雑談していたとなると、親としての神経を疑う。

会話が途切れるのを待っていたのだろう、音もなく入室してきたメイドは全員に向かつて一礼してから、主に携帯電話を差し出した。見事なプラチナブロードの、西洋人めいた女だった。彫りの深い顔立ちから察するに、実際日本人ではないのかも知れない。

高屋敷は差し出された携帯を受け取って画面を見た途端、険しい表情を浮かべた。藤堂は芹香と顔を見合わせ、ゆなが首を傾げる。両親が連れ戻したと散々主張していた筈の明は、緊張した面持ちで高屋敷を見ていた。

高屋敷は暫く画面を眺めた後、ふむ、と顎を撫でる。彼の硬い表情は変わらなかったが、その声に反応して、明が膝に両手をついて身を乗り出した。

「どうなんですか!」

感情に流されるまま声を荒らげる明を、高屋敷は片手を挙げて制止した。やけに冷静な仕草だったが、その表情は緊張しきっている。

「親戚の家にいるようだ。有沙、すぐ仁科君に連絡を」

何故に突然親戚の家へ行く必要があったのかと藤堂は疑問に思ったが、それならば誘拐ではないのだろう。そもそも誘拐というのもあの屈強な執事がいるから無理な話ではある。しかし高屋敷の険しい表情には、違和感を覚えた。

明が複雑な表情を浮かべて、ソファに座り直す。親戚の家ならばと、安心したのかも知れない。

しかし芹香は腑に落ちないような困惑したような面持ちで、眉間に皺を寄せていた。彼女は高屋敷と提携関係にある会社にいた分、藤堂達よりは渚の事情を知っている。

「婚約者の家ですか」

明が目を丸くした。藤堂も思わず、は、と間拔けな声を漏らす。婚約者がいたことさえ知らなかったが、今はそれどころではない。何故、今行く必要があったのだろうか。

「そつなんだが……いや、今は違うんだ」

「どうという事です」

短い問いに、高屋敷は小さく唸った。返答に窮しているような表情だ。

「うむ……いや、本人の意思なら、私も何も言えないんだが……」
高屋敷は口ごもり、懐からハンカチを取り出して額を拭いた。明の眉がつり上がる。藤堂は慌てて明を止めようとしたが、芹香が掌を翳してそれを制した。

「たとえ渚さんが自分の意思で行ったんだとしても、彼女は私達に何も言わず行方を眩ますような人じゃありません」

決然と言い切った明に、高屋敷は驚いたように目を見張った。

「渚さんの事情は知りません。でも何かあったと思うのが、普通ではないんですか？」

高屋敷は打ちのめされたように口を噤み、肩を落とした。明の勢いに圧倒されて流されるままここへ来たが、藤堂は露ほども渚の身を案じていなかった自分に気付く。それが、深く恥ずべきことのように感じられた。

何を考えていたのだろう。ただ居なくなっただけと安易に考え、下らない事ばかり気にして、振り回されるに任せていた。これでは意思がないと罵られて当然だと、彼は心中自嘲する。明の真つ直ぐな言葉が、胸に突き刺さるようだった。

高屋敷は俯いたまま、膝の上に置いた拳をきつく握りしめた。彼も藤堂と同じように、悔いているのかも知れない。

「何事もないのだとしても、勤務中に事務所からいなくなったことは問題です」

明はゆっくりと告げた後、立ち上がって藤堂を見下ろした。

「行こう、藤堂さん」

嫌な気はしなかった。またか、とも思わず、親がすぐに動かないのならこちらが行くべきであると、そう考えた。

親戚の家にいるなら、危険ではないのだろう。しかし高屋敷の表情を見る限り、あまりいい事ではないように思える。もしかしたら高屋敷自身、何が起きているのか分からないのかもしれない。

「君達が……行くと言うのかね」

明を見上げて呆然と呟いた高屋敷に、芹香が頷いて見せた。スーツのポケットから携帯を取り出し、芹香はパネルを操作する。

「GPS情報を、送って頂けますか」

「あ、ああ……」

慌てているのか、高屋敷が覚束ない手つきで携帯を操作する間、ゆなはグラスに残っていた紅茶を飲み干して立ち上がった。高屋敷は驚いてゆなを見上げる。

「君も行くのかね」

ゆなはヘルメットが落ちないように両手で押さえながら、大きく頷いた。

「渚さんはお友達なのです。何があったのか存じませんが、お友達に危険が迫っている可能性があるのなら、ゆなも行かねばなりません」

抑揚のない口調で言い切ると、ゆなは藤堂に向かって小さな手を差し伸べた。大きな目が促すので、彼は億劫そうに重い腰を上げる。何があったかも分からないのに行く、というのは些か理性的でないような気もしたが、そんな考えさえ馬鹿馬鹿しく思えた。

ゆなの言うとおりのだ。友達が危ないかも知れないのなら、何も出来なくとも、迎えに行くべきなのだ。

芹香は三人がソファを離れてから立ち上がり、高屋敷に向かって深々と頭を下げた。

「お邪魔致しました」

高屋敷は答えなかった。携帯を握りしめたまま俯き、苦しげに眉根を寄せている。代わりに傍らに畏まっていたメイドが、四人に向かって頭を下げた。

厳しい表情で高屋敷を見詰めていた明が、黙り込んだまま部屋を出た。三人もそれに続く。玄関ホールには既に誰もいなくなっていたが、大きな扉は、近付くと勝手に開いた。何のために取っ手がついているのだろうか、藤堂はぼんやりと考える。

「渚さん、どうしちゃったんだろ」

ゆつくりと動く歩道に乗って、明は首を捻った。

「ただの職務放棄ならいいんだがな」

「良かねえよ」

真顔で呆ける芹香に短く突っ込み、藤堂は欠伸を漏らした。緊張が解けたら、一気に疲れてきてしまった。それでもやっぱり、このまま行くのだろう。

職務放棄でなかったとしたら、渚は無理矢理連れて行かれた事になる。それなら何故、騒がなかったのだろう。黙って連行されるような女ではないはずだし、彼女にはあの執事がいる。万が一人が黙っていたとしても、なんとかかしてくれた筈だ。

もしも親戚が、渚を誘拐したのだとしたら。そう思うと、すぐそこにいたにも関わらず、異変に気付けなかった自分の不甲斐なさに呆れる。後悔しても時間は元には戻らない事も分かっているが、罪悪感は拭えなかった。

「仁科さんて言ったっけ。どういう人なんですか？」

明の問いに、芹香は顎に手を当てて視線を落とした。知ってはいるようだが、血縁は勿論、婚姻関係にある家やその縁者を含め、全てをまとめて高屋敷家と呼ぶから、簡単には思い出せないだろう。

説明されても藤堂にはよく分からなかったのだが、高屋敷家というのがブランド名だとすると、本家というのが本店で、血縁関係にある家が支店。そして婚姻関係にある家はフランチャイズなのだという事で、明に無理矢理納得させられた。

悩む芹香の表情は、この件について発言する事自体を迷っているかのようなだった。障りでもあるのかと訝ったが、確かに主が口を噤んだのに、第三者が第三者へ伝えるというのも妙な話ではある。

「仁科家は、渚の伯父の家なんだ。つまり婚約者は従兄弟に当たる」

「いとこと結婚するのですか」

ゆなは首を傾げて芹香を見上げた。藤堂は黙って会話を聞く。従兄弟は四親等に当たるから、法律上、婚姻は可能なはずだ。

「そうだ。あそこは早くして家長とその奥方を亡くし、今は兄弟が二人で暮らしているんだが……婚約者は確か、弟の方だな」

「弟？ 普通長男じゃないんですか？」

「実力の差だな。一族中で一番力があつたのが、仁科の弟の方だったんだらう」

芹香が課長という役職に就いていたから鳳もそうだったようだが、世間は実力至上主義という事らしい。会社での昇級など年齢で決まるものとはかり思っていた藤堂には、意外に感じられた。今時、年功序列など流行らないのだらう。

「しかし高屋敷氏は、今は違つと言つていたな……婚約者が長兄でない事に、批判でも出たんだらうか」

「どんな人なのです？」

歩道から飛び降りながら、ゆなが聞いた。

屋敷から出てよくよく見てみれば、周囲に建ち並ぶ家もかなりの大きさがある。連れて来られただけなので気付かなかつたが、この辺りは、都内でも有数の高級住宅街だった。そんな中でも、高屋敷の豪邸は際立つて見えるから恐ろしい。

「いい退治屋だとは聞いているが、私も詳しくは知らんな。名前も知らん」

「会つたことないんですか？」

「残念ながら。しかし兄の方は、あまりいい噂は聞かない」

悪い噂の方が何倍も早く広まるのが、世間というものだ。無理もないと藤堂は思ったが、明は不思議そうに首を捻った。

「高屋敷本家の婚約者なら、もっと噂が広まっておかしくないと思つただけ……」

「お前も知らなかつたんだらう？」

「婚約者がいる事も知りませんでした」

静かな駅前まで辿り着くと、後ろから車の走行音が聞こえてきた。道の脇へ避けながら藤堂が振り返ると同時、黒塗りの高級車が急停車する。

「待つてくれ！」

慌てた声で叫びながら開いた扉から出て来たのは、高屋敷だった。四人が驚いて目を丸くしていると、彼は懐から小銃と小さな箱を取り出す。ゆながびくりと肩を竦めて、藤堂の後ろへ隠れた。

「高屋敷さん、それは……」

「鳳さんのところで開発された破魔銃だ、持つて行ってくれ。護身用程度の威力しかないが、きっと必要になる」

押し付けるように銃と箱を芹香に渡すと、高屋敷は一步下がって四人に頭を下げた。

「申し訳ないが、私にはこの件に口出しは出来ない。……娘を、頼みます」

絶るような高屋敷の目を、藤堂は呆然と見つめていた。ゆなが不思議そうに首を捻り、明と芹香は顔を見合わせる。

暫しの沈黙の後、明が高屋敷に微笑みかける。見る者を心の底から安堵させるような、優しい表情だった。

「何があつたか知りませんが、お任せ下さい。必ず、連れ戻しますから」

明の返答を聞いた高屋敷はゆっくりと表情を緩め、再び深々と礼をした。

第五章 救う人々 八

彼と初めて会ったのは、十五歳の誕生日だった。三つ年上の彼は、その時既に退治屋として独立しており、まだ十代だというのに、やけに大人びて見えた。婚約者として紹介された事を抜きにして考えてみても、彼には強く惹かれた。あれはきっと、一目惚れだったのだろう。

それからひと月に一度、食事に誘われるようになった。どんなことを話していたか、今となっては思い出せない。食事に行った帰りも、会話している間さえ、何を話しているのか分からなかった。緊張していたのだろうと思う。ただ彼の澄んだ瞳だけが、今でも脳裏に焼き付いている。

彼が死んだのは、それから二年後。十七になった年の秋だった。涙が涸れるほど泣いた後、無性に腹が立って、両親や執事に散々八つ当たりした。腫れ物に触るように接する両親の姿に余計に腹を立て、ひどく荒れた。同業者達に迷惑ばかりかけ、何度注意されたか分からない。あの頃のこと、あまり思い出したくない。

幼い頃から面倒を見てくれた執事が死んだのは、そんな時だった。どんなに無茶な依頼を請けても嫌な顔一つせず、ついて来てくれた彼。何をしても咎める事なく、忙しい両親の代わりにただ傍にいてくれた、たった一人。今となっては恥ずかしい事だが、その時になってようやく、目が覚めた。

大人しくあの世へ行くことを拒んだ執事は、自ら使役される道を選んだ。しかし真っ直ぐに成仏して欲しかった彼女は、深く悔いた。自分が半人前だから、死んで尚、執事が心配してしまうのだと。

結果、それまでのように同業者に迷惑をかけるような事はしなくなつたが、今度はがむしゃらに働くようになった。両親が心配するほど、連日仕事に明け暮れた。こなした依頼の数に比例するように彼女自身の知名度も上がり、とうとうあの幽霊屋敷を任された。

有頂天だった。これでやっと世間に認められたと、そう思った。やっと執事を解放してやれると思ったのに、そこは渚の想像を遙かに越える場所だった。一目見た瞬間、自分の力では無理だと悟った。しかし、引き下がるわけにも行かなかった。

そこで彼女は、明に止められた。無理だという事ぐらい分かりきっていたし、荒れていた頃、明にも迷惑をかけた事があつた。大人しく引いた方がいいと理性では分かっていたのに、罪悪感と虚栄心が入り混じり、結局頭に血が上ってしまった。自棄になって戦う事となったが、あれがなければ、今のこの生活はなかつただろう。

更に藤堂という男は、彼女に懐かしさすら覚えるような感情を抱かせた。ひどく、動揺した。態度も表情も全く違っていたが、その真っ直ぐな目だけは、恐ろしいほど似ていた。それは憧憬であつたのかも知れない。それでも高揚する感情を、抑えることが出来なかつた。

浄霊屋に入ってから、毎日楽しかった。まだ浄霊は出来ないが、それでも携わることが出来るだけで嬉しかった。それなのに、何故突然。

「……なに？」

階下から聞こえた乾いた音に、渚は弾かれたように飛び起きた。何の音なのか、よく分からない。聞き覚えのない音だったが、何故か不安を煽られた。同時に、誰かが来たのだろうかと考える。

まさか、彼らが。

そう思うと居ても立ってもいらなくなり、渚は大声で執事を呼んだ。

仁科家はそれなりに大きかったが、高屋敷の豪邸を見た後では、ごく普通の家のように感じられた。親戚とはいうが、本家以外はこんなものなのだろう。

仁科と書かれた表札を確認してから、明が開いたままの門から入って、インターホンを鳴らす。藤堂は片眉を寄せた。

「誘拐しといて出る奴はいねえだろ」

「誘拐じゃないかも知れないじゃない」

藤堂の見越した通り、暫く経つても応答はなかった。藤堂と明は顔を見合わせ、肩を竦める。ふうむ、とゆなが呟き、徐にドアノブを掴んだ。

「……あ」

芹香が呟く。普通の家のものより一回りほど大きい扉は、何の抵抗もなく開いた。藤堂は呆れる。

「もしやゆなには、触れるだけで鍵を開けてしまっピッキングの才能が……」

「そりゃ才能じゃねえよ超能力だよ。元から開いてただけだろ」

目を輝かせて藤堂を見上げるゆなの横から手を伸ばし、明は扉に手をかけてそろそろと開いた。

開いた扉の向こうには、本家と同じくシャンデリアの吊された玄関ホールが広がっている。向こうより小振りなものではあったが、それでもこんな家に鍵を掛けないとはどういう見なのだろうと、藤堂は訝った。

「ひっ」

シャンデリアの灯りだけが照らし出すホールを覗き込んだ明が、小さく悲鳴を上げた。途端、薄暗い室内に無機質な明かりが灯る。

「いらっしやいませ、浄霊屋の皆さん」

ぐぐもった暗い声を聞いた瞬間、芹香がドアを開け放って玄関ホールへ飛び込んだ。明が慌ててそれに続き、藤堂もゆなに引つ張られて中へ入る。

ホールの隅、扉を背にして立っていたのは、黒髪を後ろへ撫でつけた陰気そうな男だった。藤堂は彼の魚類を思わせる顔に既視感を覚え、眉をひそめる。

「お前……高屋敷の親族だったのか」

芹香は呆然と呟いた。口振りから察するに、彼は鳳の社員なのだろう。

「これは元白銀課長、ご存知ありませんでしたか。まあ無理もない…… お前も気付かなかったのかい、藤堂匡」

三人が一斉に、藤堂へ疑惑の視線を向ける。仁科は喉の奥で笑った。笑い声が癪に障る。

「僕だよ藤堂。仁科竜司だ」

竜司が浮かべた陰気な笑みを見た瞬間、藤堂の脳裏に過去の記憶が蘇った。既視感どころではない。彼のこの暗い笑顔は、確実に見た事がある。

十六の頃であつただろうか。藤堂は霊が見えない事を学校側から糾弾され、全く唐突に退学処分を受けた。何故それが悪いのか藤堂には皆目分からなかったのだが、他の子供に影響を与えるだのなんだのと、御託を並べられて納得させられた。

そう言われても、どうにもならないのが靈感というものだ。押し問答の末、両親も結局、引き下がるしかなかった。よくよく調べてみれば、その時裏で学校を操っていたのが、この竜司だったのだ。

藤堂が無気力になったのは、あれが原因であつたように思う。謂われのない迫害を受け、学校はおろか、それまでの友人達さえ失った。そしてたつた一人の権力者の言葉で動く世間というものを、深く呪った。

何が悪かつたのかは、終ぞ不明なままだつた。竜司に対して、何かしたような記憶もない。ただその時から藤堂は、他者との関わり合いを厭うようになった。下手に深く関われば、当然靈感がないことも露見する。そうすればまた、あの時のようになるのではないかと、そう考えて怯えていた。

時が経つにつれ、嫌な記憶は頭の片隅に追いやられて行つたが、思春期に構成された人格は、結局矯正されないままだつた。何故自分がこうであるのかも分からないままに、藤堂は孤独に甘んじた。

全ての原因となつたこの男を、今の今まで忘れていた。思い出そうとしたことさえなかった。否、思い出したくなかつたのかも知れない。

「……藤堂さん？」

凍り付いたように動かない藤堂に、明は不安げに声をかけた。顔を覗き込むようにして見上げてくるゆなの表情も、普段と大差はないが、どこか曇っている。そんなにひどい顔をしていたらどうかと、藤堂は困惑気味に眉根を寄せた。

「あれだけしてやったのに、まだ懲りてないんだね藤堂」

藤堂には、彼の言葉の意味が分からなかった。懲りるとは、何の事なのだろうか。彼に何かをした記憶もない。

「無駄話はいい。渚はここにいるんだな」

痺れを切らしたのか様子のおかしい藤堂を慮ってか、芹香は唐突に話をすり替えた。竜司は更に笑みを深くする。

「いますよ。なんせ渚は、僕の婚約者ですから」

「婚約者は亮輔の方だろう」

「その亮輔が死んだのだから、僕になる筈でしょう」

芹香の表情が、厳しいものになった。明が驚愕に目を見開く。

しかし藤堂は、納得した。これは昔から、こういう男だった。自己中心的で、常に自分が特別視されていなければ気が済まず、家長であるが故に横暴を働き放題だったのだ。

「死んだって……どういう」

問い返しかけた明を遮り、芹香は竜司を睨んだ。

「お前が渚の婚約者であろうと、不当に拘束する理由にはならん」

「課長、そんなに眉をつり上げては綺麗な顔が台無しですよ」

竜司の言葉に、芹香は反応しなかった。噛み合わない会話を続けていても無駄と判断したのか、黙ったまま胸ポケットから手袋を取り出し、両手に嵌める。竜司はスーツの懐から細かな文字の書かれた札を二枚抜き取り、嫌な笑みを浮かべた。明がそれを見て、慌てて刀を抜く。

ゆなが三人から離れようと、藤堂の腕を引いた。藤堂は表情を曇らせたまま、それに従う。

「課長。あなたと僕は、恐らく相性が悪い」

芹香が怪訝に眉根を寄せると同時に、竜司が手にした札から、青い炎がゆつくりと出てきた。大人の拳ほどの大きさのそれは、次々と札から出てきては、竜司の周囲を浮遊する。藤堂は目を細めて、飛び回る炎を注視した。

「なにあれ、人魂？」

「そう、鬼火だよ。狐の霊が見せる、まやかしの炎って言われてるけど……あれ……」

明は言い淀んで、隣に立つ芹香を見上げた。凜とした横顔が、憎々しげにしかめられている。

「高屋敷の十八番だ。実体化している」

そんなものまで実体化してしまうのかと、藤堂は驚いた。渚の自慢話を聞く限り、普通の霊飼いは悪霊以外を使役する事が出来ないそうだから、確かに高屋敷というのは凄い家なのだろう。

明は表情を曇らせて、鬼火へ向き直った。

「……燃えちやいますよね」

「ああ。確かに間合いを取れない私とは、相性が悪そうだ。あの中のどれかが、本体の狐だとは思うんだが……っ」

竜司の周囲を漂っていた鬼火が、何の前触れもなく恐ろしい速さで芹香の目前へと迫る。既の所で後ろへ飛び退いた彼女の反射神経もさる事ながら、明の反応も速かった。

明は逆手に持ち替えた刀を地面に対して平行に保ち、先端を炎に突き立てる。鬼火は水を掛けられたような、じゅう、という音と共に消えたが、それが合図だったかのように、揺らめいていた炎が一斉に飛びかかって来た。芹香は高屋敷から譲り受けた銃を取り出し、迫り来る鬼火を避けながら舌打ちを漏らす。

「必要だという意味は分かったが、これでは素人が撃っても当たらんぞ」

顔めがけて飛び込んできた炎を避け、芹香は呟く。横をすり抜けて行く際僅かに髪を焼いたようで、蛋白質の焦げる嫌な臭いが一瞬漂った。

「ゆなちゃん！」

次々と鬼火を差し貫いていた明が、慌てた声を上げた。しかし正面から向かって来る炎を見てもゆなは表情を変えず、無言でヘルメットを脱いで目の前に突き出した。勢い付いていた鬼火の動きは止まらず、ヘルメットに衝突する。

途端にじゆう、と音がして、炎が消えた。幾重にも札が貼られたヘルメットの防御力は、並大抵のものではないらしい。

ゆなの無事にほつと息を吐いたのも束の間、動きを止めようと目論んだのか足目掛けて飛んでくる炎を、明は身を翻して避けた。しかし一回転した拍子に靡いたスカート裾に火が点き、明は慌ててそれを掌で叩く。

下を向いて消火を図る明の頭上を、芹香の撃った弾が飛んで行った。藤堂は一瞬ひやりとする。撃っても無駄と判断したのか、芹香は銃を下ろしてその場から退こうと一歩踏み出した。その胸元に、炎が飛び込む。

鬼火を次々と切り払っていた明が、反射的に上体を反らした芹香の目の前へ切っ先を突き出す。刀に貫かれて炎は消えたが、ワイシヤツの襟は焦げていた。露わになった胸元を気にしている間もなく、芹香はゆなの下へ駆け寄る。

「もう、きりがない！」

苛立たしげに叫びながら、明は纏まって迫る炎を一刀の下に斬り捨てた。いくら消しても、鬼火は後から湧いて出て来る。

藤堂は着ていたパーカーを脱ぎ、前線から退いた芹香の肩に掛けた。目を丸くした彼女の胸元を見ないように気をつけながら、掌を出す。無論、白い下着など見ていない。

「ソレ貸して。どれが本体分かる？」

パーカーの胸元を掻き寄せながら、芹香は片眉を寄せた。差し出された掌の上に高屋敷から譲り受けた銃を乗せ、彼女は竜司へ視線を移す。

「まだ分かん」

「見てれば分かる？」

「多分な……あなたが撃つのか？」

手にした銃を眺めながら、藤堂は僅かに頷く。見た目より遙かに軽いから、実銃ではなく電動のエアガンだろう。一緒に渡された箱の中身はBB弾なのだろうと、藤堂はそう推測した。

「分かったら教えて」

ゆなの頭上から、ハンドガンを持った腕が伸びた。不思議そうに見上げる彼女の視線の先で藤堂の目が眇められ、顔付きが一変する。珍しく真面目な彼の表情を見たゆなの青白い頬が、仄かに赤く染まった。

背後から狙う藤堂に気付いて、明が身を屈めた。軽い発砲音が立て続けに鳴り響き、彼女の周囲を飛び回っていた炎が消える。更に仁科の持つ札から鬼火が這い出して来るが、藤堂はその殆どを撃ち落とした。取りこぼしを明が斬り捨てる。

「……藤堂さんにこんな特技があるとは存じませんでした」

「大学ん時、クレー射撃やってたから」

熱い視線を向けるゆなを嫌そうに一瞥して、藤堂は更に続けて撃ち込む。感覚などすっかり忘れているものと思っていたが、体は覚えていたようだ。

「銃の形が全く違うと思うんだが」

突っ込みながらも芹香は、切れ長の目を細めて注意深く鬼火の動きを観察していた。そして徐に、人差し指を突き出す。

「あれだ。今撃つたものの横。あれだけ、ずっと逃げ回っている」

「あいよ」

竜司の表情が強張る。慌てて札を目の前に翳すが、藤堂が撃つ方が一瞬、速かった。

「クソッ」

短く吐き捨てた竜司の声は、しかし響き渡った獣じみた悲鳴に掻き消された。同時に、彼が持っていた札の内一枚が、一瞬の内に燃え尽きる。室内に漂っていた鬼火が、煙のように消え失せた。

所々制服を焦がされた明が、ようやく安堵の息を吐いた。竜司は残った札を目の前に翳し、口角を上げる。

「あれぐらいで、いい気になるなよ」

銃を下ろした藤堂は、竜司が手にした札から出てきた霊を見て、息を呑んだ。

第五章 救う人々 九

ゆっくりと、若い男が札から出て来た瞬間、場の空気が凍った。

竜司は暗い笑みを口元に浮かべているが、目は笑っていない。

「え、ウソ、あれ……」

明が呆然と呟いた。青年は床に降り立って、緩慢な動作で顔を上げる。眉との間が近い切れ長の目は、虚ろに混濁していた。霊となつて青ざめた暗い顔をしていてもかなりのものだから、生きていれば相当な二枚目であつたらう。しかし。

「と、藤堂さん！」

悲鳴じみた声を上げて驚愕を表した明とは反対に、藤堂は困惑していた。確かにあれは、二十代の頃の自分に似ている。しかし藤堂に兄弟はいないし、そもそも若くして死んだような親族もない。

戸惑つてもいるのか、芹香は苦々しく表情を歪め、明に向かって緩く首を振った。

「違うぞメイ、髭がない」

相変わらずの無表情のまま、脱いだヘルメットを小脇に抱えたゆなが明を見た。

「目がすっかり開いているので、違うのです」

「お前らそんなんで俺のこと判別してんの？」

そもそも藤堂は死んでいない。死にかけた事はあるが、死んだ記憶はない。

呆然とする四人を、竜司が小馬鹿にするように笑った。

「これが亮輔ですよ。似ているでしょう、藤堂に」

仁科亮輔にしなりよすけは僅かに俯いたまま、虚ろな目をあらぬ方向へ向けていた。何も見てはいないのだろう。

「僕は弟がね、誇らしかつた。彼は本当に素晴らしい退治屋だつたよ。僕が家長でなくなつても、仕方がないと思つた。しかしどうだ。何の因果か弟は成長するにつれ、お前に似てきたんだよ藤堂」

全員、開いた口が塞がらなかった。つまりこの男は、藤堂をこそ恨んでいたということなのだろう。

しかし藤堂には、恨まれるような事をした覚えがなかった。他人に危害を加えるような子供ではなかったし、大きな喧嘩など、したこともない。精々冗談で、友人とどつき合う程度だった。そもそも竜司とは、碌に喋った記憶もない。

ふと顔を上げると、明が怪訝な面持ちで藤堂を見ていた。彼は慌てて首を振り、否定する。

「亮輔が強くなって行くにつれ、忘れていた恨みが蘇ってきた。亮輔が事故死してからも、恨みの念は募るばかりだったんだ。それでも、何もしないでいるつもりだったんだよ、渚がお前の所へ行くまではね」

藤堂には、何も言えなかった。自分が忘れていただけで、何か重大な事をしてかしたのではないかという不安さえ抱いた。しかし、全く思い出せない。

「渚だけなら、まだ許せた。だが課長までとなれば、僕も黙っているわけには行かなかったんだ」

「お前は何がしたいんだ」

厳しい口調で芹香が問うと、竜司は口角を上げた。

「あるべき場所へ戻って頂きたいだけですよ、課長。黙って戻って下されば、僕もこんな事をしなくて済む」

彼らには何らか因縁でもあるのだろうか、藤堂は訝しく思う。

鳳とは広い会社のようなだから、知らない同僚がいても不思議ではない。しかし、芹香は竜司を知っていた。何もなくとも、近い部署にはいたのだろう。

「断る。力尽くで、と言うなら、相手になるまで」

「社長が悲しんでおられましたよ。僕もね」

芹香の表情が凍り付いた。手袋を嵌めた手が、掴んでいたパーカの胸元を握りしめる。社長というのはそんなに恐ろしい人物なのだろうかと考えながら、藤堂は彼女の背に掌を添えた。

芹香はなんとも形容のし難い面持ちで藤堂を見上げてから、竜司へ向き直る。同時にその表情が一変し、両の眉が普段通りに凜々しくつり上がった。

「私が今居るべきは、こちらだ」

静かな返答を聞いた瞬間、竜司の目つきが鋭くなった。それに反応したかのように、亮輔の足が地を蹴る。

明の横をすり抜けて芹香の方へ行こうとする彼の行く手は、しかし長刀の刃によって遮られ、弾き返された。僅かに後ろへ飛ばされてよろけた亮輔が体勢を整えている内に、明は刀を振り被って彼の頭上へと振り下ろす。鋭い双眸が刃の軌道を追い、紙一重で避けた。横へ退いた亮輔は大きく一步踏み出して明との間合いを詰め、握り締めた拳を繰り出す。明は後ろへ飛び退きながら、体の前に刃を持って行くが一瞬遅れ、胸のスクarfを拳が掠める。赤い布地が裂け、宙を舞った。

「仁科亮輔か……私と似たような退治屋だったな。噂を聞かなくなつたとは思っていたが、まさか亡くなっていたとは」

緊張した面持ちで呟いた芹香を見上げ、ゆなは頷く。藤堂はどこか上の空で、その声を聞いていた。

「ゆなも聞いた事があります。鳳の白銀に次ぐ退治屋だと」

「そんなすげえの？」

気のない藤堂の声に、ゆなと芹香は同時に頷いた。顔が似ているだけで、藤堂とはまるで違う類の人物のようだ。

しかし明と戦っている姿を見ると、どうにも複雑な気分になる。

亮輔を相手取っている明も藤堂と同じ心境のようで、困惑したように顔をしかめていた。

「もう、なんか調子狂う……！」

明が苛立たしげに吐き捨てる。標的を捉え損ねた拳は、そのままの勢いで床へ向かって下ろされ、代わりに長い足が振り上げられた。身を屈めた姿勢からの蹴りに明は息を呑み、体の前へ持ってきていた刃の背に手を添えて、足を受け止める。

亮輔の体が刃に弾かれて僅かに後方へ滑るが、すぐさま足が戻された。半身を引いた勢いで刀の下を潜らせた拳が、明を襲う。防御が間に合わない。

明は蒼白になって目を見開く。ゆなが息を呑み、芹香が反射的に飛び出しかけた、その時だった。

「おやめなさい！」

怒鳴りつけるような声に、亮輔の拳が明の顎に触れる寸前で止まった。濁っていた目に、微かな光が宿る。

身を硬くしていた藤堂は、安堵して肩の力を抜いた。竜司は憎々しげに顔を歪め、扉から出て来た渚を睨み付ける。

「勝手に出て来るなど言っただろ」

「もう勝手になさい。こんな事をさせられるぐらいなら、消えた方がマシだと亮輔さんなら言いますわ」

遅しい執事を従えてホールへ出てきた渚は、凍り付いたまま微動だにしない明と亮輔へ、真っ直ぐに近付いて行く。

「だらしない！」

渚は亮輔の目の前に立ちはだかり、一喝した。そして驚愕に目を見開く彼の双肩を両手で掴み、自分の方を向かせる。亮輔と真正面から向き合った渚は、一瞬辛そうに顔をしかめた。しかし次の瞬間には、大きく振り上げた右手で、力任せに彼の横面を張っていた。

ホール中に響き渡った甲高い音に、全員が痛そうに顔をしかめる。亮輔は両腕を下ろして弛緩したまま、呆けたような表情を浮かべていた。その目に、徐々に光が灯って行く。

「目が覚めまして？ あなたほどの方が捕まって強請りのネタにされるなんて、情けないにも程がありますわ！」

亮輔はぼかんと開けたままの口を僅かに動かしたが、声は出せないようだった。切れ長の双眸は本来のものに戻ったのだろう、夏の空のように澄んだ色をしている。

渚は肩を怒らせたままつかつかと竜司に歩み寄り、気後れして一歩引いた彼の手から、札を取り上げた。

「話は全て聞きましたわ。消したいなら消してごらんさい！ 藤堂憎さにこんな事をしていたなんて、悩み損よ！」

渚の剣幕に唾然としていた明は、彼女の大声を聞いてようやく我に返った。ためらいがちに片手を拳げ、制止するような姿勢を取る。しかし頭に血が上がった渚には、見えていないようだった。

「ま、待つてよ渚さん……なんなの？ どうなってるの？」

勢い良く向き直った渚の厳しい表情を見て、明は僅かに身を引いた。そんな明の様子には構わず、渚は亮輔を含めた五人の方を向いたまま、竜司を指差す。渚の憤怒の形相に、彼は身動き一つ取れなくなっていた。

「この男はね、抵抗したら亮輔さんを消すと、私を脅してここまで連れてきたんですわ。理由も何も言わないままね」

「だから無抵抗だったのか」

未だ混乱から立ち直れないまま、藤堂はそう聞いた。渚は竜司を指差していた腕を下ろしながら、頷く。

「ええ、そうよ。私が結婚しないまま独立したから、反発するのは当然だと思いましたの。私のせいなら、亮輔さんにも申し訳ないと思っただ……」

そこで言葉を詰まらせた渚を、亮輔は悲しげな目で見つめていた。先ほどの亮輔の行動は一体何だったのだろうと、藤堂は疑問に思う。渚は目が覚めたかと聞いていたから、操られでもしていたのだろうか。

言い淀んだ渚は再び眉をつり上げ、藤堂を睨んだ。藤堂は思わず姿勢を正す。

「そうしたらなんなの、あなたのせいだと言うじゃない！ 吐きなさい藤堂、竜司さんに何をしたの！」

藤堂は渋い顔をして、渚から目を逸らした。責められても、彼は何一つ覚えてはいない。顔をしかめたまま竜司を見ると、彼は咄嗟に下を向いた。

肩を落とした竜司を見た藤堂は、あ、と呟く。

「そうかお前アレだ、俺がああ頃付き合ってた彼女に告白してフラれたんだ。お前だったろアレ」

固唾を呑んで藤堂の言葉を待っていた明が、は、と間の抜けた声を漏らした。渚は目を見開いたまま微動だにせず、芹香は頭痛を堪えるように額を押さえる。ゆなは何故か、真っ直ぐに亮輔を見つめていた。

指摘されて一気に真っ赤になった竜司は、目を白黒させて酸欠の金魚のようにぱくぱくと口を動かした。肩を落とした芹香が、力なく溜息を吐く。

「考えないようにはしていたが……そんな事だろうと思った」

藤堂は首を捻り、疲れたように肩を落とした芹香に顔を向けた。

「分かってたんなら先に言えよ。つうか何かあったの？」

「……言いたくない。というか、どうしてあなたはそんな大事なことを覚えていなかったんだ」

「大事か？ どうでもよくね？」

芹香は呆れた目で藤堂を一瞥した後、再び溜息を吐いて顔を逸らす。渚が奇妙な声を上げた。

「あつ……あなたそんな、そんな下らない事で……」

「く、下らないだと！ 僕のプライドをズタズタにされたんだぞ、下らないとは何だ！」

俯いて黙り込んでいた明が徐に顔を上げ、激昂する竜司へゆっくりと歩み寄る。啞然としていた渚は近付いてきた明の表情を見て、思わず横へ避けた。明の左手が、すつと拳げられる。

小気味良い音が鳴り響いた。藤堂は痛そうに顔をしかめる。平手で打たれた竜司は、何が起きたのか分からないといった表情で、呆然としていた。

「甘えてんじゃないわよ藤堂さんと同い年のくせに！ 藤堂さんなんか独身で彼女もいないし、好きな人もいないような朴念仁だけど、そんな風に駄々こねたりしないんだから！」

「メイちゃん、俺ちよつと今、心が痛い」

明の啖呵には、藤堂の方が傷ついた。怒鳴りつけられた竜司は、叩かれた頬を掌で押さえたまま微動だにしない。一瞬、室内に静寂が落ちた。

黙りこんでいた竜司の頬が、徐々に赤く染まっていく。藤堂はどことなく既視感を覚えるその光景に、嫌な顔をした。

「……いい」

竜司の呟きに、明の顔が青褪めた。

「君こそ僕の探していた方だ。結婚してくれ」

真剣な表情で告げる竜司とは反対に、明の全身に鳥肌が立った。

彼女はよろけながら二三歩後退するが、竜司はそれを追ってゆつくりと一歩近づく。

「い、嫌よ！ あなたと結婚するぐらいなら、ゴキブリと結婚した方がまだマシ！」

それもどうなのかと藤堂は思ったが、突っ込む気力もなかった。

「……ちよいと宜しいですか渚さん」

どこか感慨深げに明と竜司を見ていたゆなが、唐突に渚を呼んだ。言い合う二人を無視して、渚はゆなに歩み寄る。ゆなは渚の持った札を指差してから、何かを破るような仕草をした。渚は僅かに首を傾げる。

「破れと？」

「はい。破れば実体化が解けて、解放されますね」

首を捻ったまま思案していた渚は、おずおずと亮輔を見た。彼は精悍な顔に優しげな笑みを浮かべ、頷く。眉根を寄せて切なげに表情を歪めた渚を、藤堂は複雑な心境で見ている。

札から解放された霊は、すぐに天へ昇る。元々無理矢理繋ぎ止めているから、それも当然なのだろう。

「さあ、びりーっとうござ。ゆなが一瞬の隙を突いて見せます」

渚と亮輔を交互に見ていた芹香は、目を伏せて俯く渚の肩に、そっと手を置いた。眉尻を下げたまま見上げて来る彼女に、芹香は大きく頷いて見せる。

渚は表情を引き締め、ゆつくりと札を両手で持つてから、大きく息を吐いた。藤堂は知らず汗をかいていた掌を、緩く握りこむ。

力の籠もった渚の手が札を破いた瞬間、ゆなが亮輔に向かつて、両腕を伸ばした。掌を上に向けて、人差し指をちよいちよいと動かす。

「へい、カモーン」

気の抜けるような声と共に、亮輔の姿が霞んだ。ゆながきつく目を瞑る。渚は破いた札を握り締め、祈るように両手を組んだ。

「……入ったか？」

芹香の声に、ゆなはゆつくりと目を開けた。その表情が、穏やかな笑顔へと変わる。藤堂は、ほっと胸を撫で下ろした。

「きれいになったね、渚ちゃん」

それはゆなの声ではなかった。何かを懐かしむような若い男性の声は、優しく渚に語り掛ける。顔は恐ろしく似ていたが、声は似ないものなのだと、藤堂はぼんやりと考えた。

「ごめんね。……あなた方にも、兄がご迷惑をお掛けしました」

続いて亮輔は神妙な面持ちの藤堂と芹香に向き直り、深々と頭を下げた。無表情のまま固まっていた渚の顔が、徐々に泣き出しそうに歪んで行く。

顔を上げた亮輔は、渚の顔を見て、困ったように微笑を曇らせた。ゆつくりと手を伸ばし、彼女の頭を撫でる。

「泣かないで……じいちゃん、済みません」

渚の傍らに佇んでいた執事は、小さく首を横に振った。こちらも神妙な面持ちだが、細い目が僅かに潤んでいる。彼にとっても、感慨深いものがあるのだろう。

亮輔はちらりと明を見てから、体ごと藤堂を向いた。真正面から顔を合わせるのほは些か気が引けたが、未だ言い合つ明と竜司を見る事も出来ず、藤堂は結局亮輔と向き合う。

「あの子にも、俺が謝っていたと伝えておいて頂けますか。それから兄に、じゃあな、と」

「はいよ」

短い返答だったが、亮輔は満足そうに頷いた。それから再び、渚に向き直る。

「渚ちゃん。君のこと、好きだった」

「わ、私だって……！」

反射的に顔を上げた渚の頬は、瞬く間に紅潮して行った。亮輔は少し笑って、慈しむような手つきで彼女の髪を撫でる。

芹香の手が、羽織ったパーカーをきつく握った。その仕草を横目で見た藤堂は、彼女は何を思うのだろうと、ぼんやりと考える。彼女は渚と亮輔の事は、何も知らなかった筈だ。同じ女だから、分かる事もあるのだろうか。

渚の頬を、涙が伝う。亮輔はそれを指先で拭い、頬を撫でてやった。

「幸せになつてね」

寂しげな笑顔を浮かべた目が、閉じられた。渚の頬に伸びていた手が力なく下がり、体が崩れ落ちる。芹香が慌てて、それを抱きとめた。

藤堂以外の三人は、ゆなの頭上を見上げていた。きっとそこにはまだ、亮輔がいたのだろう。けれど実体化していない霊を、藤堂は肉眼で見る事が出来ない。

それでも彼は、空中を見上げた。当然のように何も見えなかったのだが、己と同じ顔をした全く違う男が、そこで笑ったような気がした。

第五章 救う人々 十

亮輔が成仏した後、四人は竜司にしつこく迫られていた明を回収して、逃げるようにその場を後にした。明と芹香が服を焼かれたせいで妙な格好になっていたので、帰りの電車では、いつも以上に好奇の目で見られた。一昨日の大学生ではないが、車が必要だと、藤堂は心の底から切実にそう思う。

翌日、疲れ果てて寝込んだ渚以外は、再び高屋敷家を訪問していた。事の次第を報告する為と、借りた銃を返す為だ。出来れば二度とは高屋敷家を訪れなくなかった藤堂も、所長なのだからという理由で、明に無理矢理引っ張って来られてしまった。

昨日より遙かに大層な出迎えを受けて狼狽していた四人は、応接間で待ち構えていた高屋敷に、深々と頭を下げられて更に戸惑った。「本当に、済まなかった」

高屋敷はガラステーブルに額を擦りつけんばかりに平身低頭して何度も謝罪の言葉を述べた。困ったように眉根を寄せた芹香が止めたが、高屋敷はそれでも気が収まらないらしく、更に三回ほど重ねて頭を下げてから、ようやく顔を上げる。

「妻にも散々怒られたよ。どうも私は、過敏になりすぎていたようだ」

「あの……どういう」

おずおずと問い掛けた明に、高屋敷は困ったように顎を撫でた。

そして傍らに立っていた金髪のメイドと顔を見合わせ、苦笑する。

「お恥ずかしながら、私は渚が荒れていた頃の事をね、まだ引きずっているんだ」

ああ、と納得したように呟いた後、明は慌てて口を塞いだ。その仕草を見て、高屋敷は更に苦い顔をする。

「あの子がどんなに悲しんでいたか、知っていたつもりだった。だが駄目だね、男親は。何も分かかっていない」

高屋敷はそう言つて、力なく首を横に振つた。寂しそうにさえ見えるその表情に、藤堂は親心を想う。

子供は知らない内に大きくなるものだと言つていたし、藤堂自身、家を出る際に両親からそう言われた。当時はその言葉を軽く取つていたが、今では時折、その意味を考える。そういった類の台詞を吐く時に親が浮かべる、寂しさと嬉しさの入り混じつた、複雑な表情の意味も。

考えなくとも、今なら分かる。子供を持った訳ではないし、同じような気持ちになる訳でもないが、藤堂自身大人になつたという事なのだろう。今でも従業員である女性陣から学ぶ事の方が多いのだから、子供のまま大人になつてしまつたようにも思える。

子供の頃の嫌な記憶を封じ込めて、思い出そうともしないまま、大人になつてしまつた。その実、それに人格形成の一端を担われてさえた。愚かといふべきか、臆病といふべきか。藤堂は心中自嘲する。

彼を怨むつもりは毛頭無い。藤堂は元々そう活発な子供でもなかつたし、好きな人を取られたという彼の気持ちも、分からなくはなかつた。しかし、つい昨日まで共に笑つていた友人達に後ろ指を差されて、追われるように学校を去つた記憶も、消そうと思つて消えるものではない。

あれから藤堂は暫く人間不信になり、結果、何にも反抗せず誰にも興味を示さない、つまらない人間になつてしまつた。それはしかし、彼のせいではない。怨むべきは竜司の横暴を許した学校、ひいては世間であると、彼はそう考えている。

「渚がもし、自ら竜司君のところへ行つたのだとしたら、と思うとね……何も出来なかつた」

「私は違つと申しましたのに」

マネキン人形のようなメイドが、端正な顔に困つたような笑みを浮かべて言つた。この女は一体なんなのだろうと、藤堂は訝る。丁寧な物腰ではあるが、主に対する使用人の態度とは、少し違つた。

メイドは怪訝な面持ちの四人に向き直ると、優美な仕草で頭を下げた。藤堂は思わず芹香を見るが、彼女は首を横に振る。顔を上げた女は、ただの使用人では持ち得ないような空気を纏っていた。

「私からも、お礼を言わせて下さい」

「ええと……あなたは」

明はためらいがちに聞いた。女は彫りの深い西洋人めいた顔に華やかな笑みを浮かべ、掌を自分の方へ向ける。

「高屋敷有沙たかやしきありさと申します」

「……お、奥様ですか！」

一瞬の間の後、芹香が慌てて立ち上がりかけたのを、有沙はそつと片手で制した。芹香はソファへ座り直しながら、整った眉を困つたように歪めて、彼女を見上げる。

「お気になさらないで。私は高屋敷に輿入れしましたが、元はただの使用人ですから」

言いながら有沙は、夫と顔を見合わせて上品に笑った。つまり高屋敷が、メイドと結婚したという事なのだろう。藤堂には、渚の料理上手の理由がようやく分かったような気がした。

「だから渚にも、家の決まりなど気にして欲しくなかったんだが……私の勘違いだったようだね」

そこで高屋敷は、再び頭を下げた。慌てて制した芹香以外は、未だ呆気に取られている。

「顔を上げてください。私共が勝手にした事ですから」

僅かに視線を上げた高屋敷は、困り顔の芹香を見ると、眉根を寄せて表情を曇らせた。

「しかしこうなったのも、私が何もしなかったせいだろう。君達には、お礼をしなければと思っっているんだが」

「ゆなは言いました。お友達が危ないなら、助けに行くのが当然だと」

高屋敷夫妻を不思議そうに見ていたゆなが、唐突に抑揚のない声で告げる。高屋敷は少し驚いたような顔をして、大きく瞬きをした。

「だからゆな達は、当然のことをしたのです。お礼をされたら、それは当然のことではなくなってしまうのです」

真つ直ぐに視線を合わせたままきっぱりと言い切ったゆなを、高屋敷は目を丸くして、まじまじと見つめていた。明と芹香は、ゆなへ好ましげな視線を送っている。

ゆなは純粹だと、藤堂は心からそう思う。あの母親に育てられただけの事はあるがしかし、普段の行動とはどう考えても結び付かない。性根は真つ直ぐなのだろうが、真つ直ぐすぎて突き抜けてしまったのかも知れない。

穏やかな笑顔でゆなを見つめていた有沙は、ゆつくりと藤堂に向き直った。二十歳の娘がいる割に、そう歳が行っているようにも見えない。華やかなその美貌に、藤堂は一瞬目を奪われる。

「遅くなつてしまいました。娘の就職祝いに贈り物をしたいと、用意しておいたものが御座いますの。皆様、少々ご足労頂けますか」
遠回しに、こちらへ礼をしたいと言っているのだろう。藤堂はゆなと顔を見合わせてから、頷いて立ち上がる。ここで断るのは、礼儀に反するような気がした。

高屋敷夫妻に先導されて外へ出ると、玄関扉のすぐ前に、黒塗りの高級車が停まっていた。もしかと思つて高屋敷を見ると、彼はにこやかな表情で頷く。藤堂は啞然として何も言えなくなった。

車には傷はおろか塵一つ付いておらず、見事に黒光りしている。どう見ても新車だろう。しかし問題は、そんな事ではない。新車だろうが中古だろうが、そんな事はどうでもいいのだ。

「あの……これまさか」

「お受け取り下さい。ああ、娘の代わりにね」

問い掛けた明を含め、全員が絶句した。

まさかこんなものを贈られるとは、思つてもみなかつた。車が必要だと藤堂は確かに考えていたが、こんな大層な車を礼に貰う羽目になるなどと、誰が予想していただろう。こんなものを運転する勇氣は、少なくとも藤堂にはなかつた。

藤堂はちらりと、芹香を横目で見る。彼女は藤堂の視線に気付くと、慌てて首を横に振った。大型バイクに乗っていたから免許は持っているのだから、流石の彼女も、これを運転するのは怖いだろう。

有沙はロングスカートのポケットから小さなリモコンを取り出し、藤堂の手に握らせた。突っ返す事も出来ず、藤堂はそれを押しただく。

「なんと言ったらいいやら……」

「渚の代わりに、お持ち帰り頂けますか」

娘への就職祝いだと言うから、有沙の言葉に対して礼を言うのも妙な気がした。困り果てる藤堂を見かねて、ゆながヘルメットを両手で押さえながら頭を下げる。

「渚さんには、ちゃんと伝えておきます」

「そうしてくれると助かるよ。……本当に、ありがとう」

高屋敷夫妻は再度腰を折り、並んで頭を下げた後、家の中へ戻って行った。後に残された四人はそれぞれ顔を見合わせ、顔を引きつらせる。

「……どうするのこれ」

「運転して帰るしかありません」

「私は軽かバイクしか運転した事がないぞ」

女性陣の視線が、一斉に藤堂に向いた。藤堂は言葉に詰まって、後退りする。

こんな車を運転するのは嫌だ。恐ろしくてエンブレムは確認出来ないが、車自体が貧乏人を寄せ付けない威圧感を放っている。更にこれは新車だ。実家にある、薄汚いワゴン車とは違う。しかしこのまま置いて行く訳にも行かない。

手の中のリモコンを見下ろし、藤堂は溜息を吐きながら車のドアを開けた。新車特有の匂いが、更に彼を緊張させる。肩越しに背後を見ると、全員視線を逸らしていた。

「……もういいよ、俺が運転すりゃいいんだろ。乗れ」

肩を落としたまま運転席に乗り込む藤堂を見て、三人は揃って小さく笑った。

「ねえ、渚さんのところ、お見舞いに行こうよ」

吹っ切れて煙草を吹かしながら片手で運転する藤堂の顔を、明は後部座席から覗き込む。どこか楽しそうな声だった。ああ、と曖昧に返答し、藤堂はカーナビのパネルを操作する。カーナビの主流は音声認識型なのだが、彼にとっては手を動かすより喋る方が面倒なので、タッチパネル式に切り替えたのだ。

車を運転するのも何ヶ月ぶりだろうと、藤堂は考える。最後に運転したのは、去年の夏に鹿倉一家と海へ行った時だったように思う。あちらの車は借り物だったが、どうせ鹿倉の持ち物だからと、今のように緊張したりはしなかった。

「前の駐車場、空いてっかな」

「あそこいつもガラガラじゃない。駐車代高かったっけ」

「覚えてない」

店の斜向かいに駐車場がある事だけが、救いかも知れない。藤堂は車の維持費や家賃の事を考え、憂鬱な気分になる。保険の手続きも面倒だし、余計な金ばかりかかる。かといって、知らぬ振りをして渚に車の管理を任せるのも、気が引けた。

何の気なしにダッシュボードを開けると、何故か充電器が入っていた。そこでやっと、藤堂は銃を返しそびれた事を思い出す。譲ってくれるということなのだろうか。やはり車も、こちらへの礼の品なのだろう。あまりの格差に、自分が情けなく思えた。金持ちの感覚は、貧乏人には理解し難い。

渚は何を思っただけで自分と向き合っていたのだろうと、藤堂は灰皿を引っ張り出して煙草の火を消しながら考える。渚は藤堂を気にしていたのではなく、彼に婚約者の姿を重ねていたのかも知れない。あの不自然な態度も、そう考えれば説明がつく。中身はまるで違ったが、確かに顔だけは似ていた。

亮輔と決別した以上、渚の藤堂への態度も、変わって来るのかも知れない。渚を我が儘な妹のように思っていた藤堂は、少し寂しくも感じる。

けれどきつと、それでいいのだろう。そうして何かと決別することで成長出来るのなら、その方がいいに決まっている。

藤堂自身の心に溜まっていた澱も、今になって思い出すことで、極少量ながら掬われた。不安が少し解消されたからといって、今すぐこの捻じ曲がった性格が矯正されるとは思えない。しかし忘れていた嫌な思い出と決別し、少しでも変わる事が出来ればいいと、藤堂は思う。

そうして態度を改め、彼女達と同じように、真っ直ぐに物事を見られるようになったら。純粋な彼女等や守護霊達と、真っ直ぐに向き合えるようになったなら。

きつと、もう少し器用に生きられるだろう。そう心中独りごちて、藤堂は真っ直ぐに、前を向いた。フロントガラス越しに見える空は、あの青年の瞳のように澄んでいた。

その日は、茹だるように暑かった。時刻は午後十二時半。気の弱そうな線の細い青年が、薄汚れたビルの一階にある質屋を外から覗き込んでいる。何度も店内の様子を覗っては店の前を行ったり来たりする彼の手には、百貨店のロゴが入った紙袋が提げられていた。

「あのう……」

背後からの声に驚き、青年は情けない叫び声を上げて振り返った。彼の肩を叩いた少女は、困ったように眉根を寄せている。

この暑い時期にも関わらず長袖のセーラー服を着込んだ少女は、青年の目には日本人形のように見えた。大きな垂れ目は夏の日差しを受けて輝き、幼いラインを残した頬が、ばら色に染まっている。肩口で切り揃えられた黒髪が、湿気を帯びた風に靡いて揺れた。

「ご依頼ですか？」

「へ？」

気の抜けた声を出した青年を、少女は訝しげにまじまじと見た。青年は困ったように首の後ろを掻く。なんと答えるべきか、迷っているようだった。

二人の間に気まずい空気が流れ始めた時、店の自動ドアが開いて金髪の女が顔を出した。外の熱気に当たった為か、細い眉が鬱陶しそうに歪められる。彼女は少女と青年を交互に見て、呆れたような溜息を吐いた。

くつきりとした二重瞼と、上を向いた濃い睫毛。そしてつり上がった目と細い眉が、彼女の目元を強く印象付ける。背中まで伸ばされた金髪はきつめに巻かれており、風に吹かれても乱れることなく優美な曲線を描いていた。フレアスカートの裾から覗く足は、すらりとして細く美しい。

「何してらっしゃるの。お客様なら、早く入れて差し上げればいいじゃない。暑いものだから」

「あ、うん」

青年を見上げた少女は、どうぞ、と言って彼を店内へ促した。青年は軽く頭を下げ、店の中へ入る。店内にはクーラーが効いてはいしたが、設定温度が高いのか、あまり冷えていなかった。

カウンターは、もぬけの殻だった。青年は困り顔で金髪の女を見て、あの、と問い掛ける。

「今日は、藤堂さんは……」

「あら、藤堂に御用なんですか？ 珍しい」

大きく目を瞬かせて、女は驚いた顔をした。そしてカウンター裏の扉を開け、声を掛ける。ややあつて、気の抜けた返答が聞こえた。返答を聞くと、フランス人形のような女は開けた扉を押さえたまま青年を振り返って、すまなそうに眉尻を下げた。

「ごめんなさいね。丁度お昼休みでしたの」

「そうなんですか！ すいません」

青年が頭を下げて謝ると同時に、女が開けた扉から、カップを片手に持った人物がのっそりと出て来た。おかつぱの少女が、彼にはよくと告げる。

「ああ……三代君か。あんた先週、振り込んでくれてたろ」

出て来て早々怪訝そうに顔をしかめたのは、三十前後と思しき長身の男だった。目と眉の間が近い精悍な顔付きだが、常に眠たげに瞼が落ちている為、どこか間が抜けて見える。しかし普段ならまばらに生えている筈の無精髭は綺麗に剃られ、伸びかけのまま放置されていた髪も、満足には言い難いが以前よりは整えられていた。

三代康平みよしたけは一旦顔を上げて、再び店主に向かって頭を下げた。質屋兼除霊屋の店主、藤堂匡は未だ訝しげに眉を顰めている。

「お礼にと思って。藤堂さんには、あの後何もお礼出来ませんでしたから……これ、お中元です」

言いながら紙袋をカウンターに置いた三代を、藤堂はまじまじと見る。彼は中元など贈られた例がない。

「別にいいのに。律儀だねアンタ」

藤堂は手に持ったカップをカウンターに置きながら椅子を引き、腰を下ろした。立てて置かれた紙袋を寝かせながら、若いのに結構な事だと感心する。

「藤堂さん、何かしたの？」

艶やかな黒髪を揺らしてカウンターに近付き、知恩院明は不思議そうに首を傾げた。彼女は入り口側の椅子を引き、三代に勧める。

藤堂は煙草に火を点けながら、明の問いに首を横に振った。

「俺じゃなくて、堤とコウ」

「ああ、コウ君が浄霊したって時の」

「浄霊？ その子が？」

高屋敷渚は驚いて目を丸くし、藤堂の背後を指差した。明が頷くと、彼女は困惑した面持ちで首を捻った。浄霊修行中の渚からしてみれば、複雑な心境だろう。

明が引いた椅子に腰を下ろした三代は、ハンカチを取り出して額に浮かんだ汗を拭っていた。外は相当暑かっただろう。藤堂はもう少し冷房を強くしたかったが、寒いと渚が怒るので、これ以上設定温度を下げられない。

「堤呼ぶ？」

藤堂が聞くと、三代は慌てて首を振った。

「いえ、いいんです。お昼休みなら、かえって申し訳ないですから」「そう？」

聞きはしたが、藤堂に再び立ち上がる気はなかった。浅く椅子に腰掛けたまま、のんびりと煙草を吹かしている。

「それでその、また依頼をしたいんですが……」

携帯電話を取り出しながら、三代は申し訳なさそうに首を竦めた。片眉を上げ、藤堂は怪訝な表情を浮かべる。紙に書いてもらおうかとも思ったが、今更なのでやめた。

「今日は俺じゃなくて、従兄夫婦の依頼なんです」

言いながら、三代は何やら携帯を操作していた。自分の事ではないなら、逐一覚えてもないだろう。

「従兄は最近、中古で家を買ったんです。でも台所に子供を連れて行くと、怖がつて泣くって言うんですよ。不動産屋に聞いたそうなんですけど、最近買い上げたばかりでよく分からないって話で」

「両親は、何か見えないの？」

「従兄も奥さんも、靈感がないんです。俺も忙しくて、見に行つてやれなくて」

ふうん、と呟いて、藤堂は顎を掻いた。流石にこの証言だけでは判断出来ないのか、明も首を捻っている。

夫婦揃って靈感がないというのも、珍しい話だ。少なくとも藤堂は、自分以外に靈感を持たない人間を見た事がない。もつとも、逆上りが出来ないのと同じように恥ずかしい事だから、隠しているだけかも知れないが。

「一度見に行かないと分かりませんね。お宅はどちらです？」

明が聞くと、三代は携帯の画面を彼女に見せた。開かれたメモ帳には住所が書かれていたが、背中を丸めて覗き込んだ明には、場所が分からなかったようだ。反対側に首を捻って、上目遣いに三代を見上げる。

「ここから電車で、三十分ぐらいでしょうか……うちと同じように、駅から遠いんですけど」

明の視線を受けて、三代は軽く説明した。藤堂は彼が前回来た時もあったが、律儀な青年だ。

「お日にちは？」

どこことなく不安そうだった三代の表情が、安堵したようなものへ変わった。彼は携帯を手元へ戻し、パネルを操作する。

「連絡させます。今日は請けて貰えるかだけ、聞きに来たので」
その場で手早くメールを打ってから、三代は立ち上がった。時期的にはそろそろ夏休みに入っている頃だが、大学生は忙しいのだから。それにしてもわざわざ出向いて来るとは、几帳面な青年だ。

カウンターから一步離れて、よろしくお願いしますと言いながら頭を下げ、三代は店を出て行った。

三代の姿がガラス越しにも見えなくなつてから、明は空いた椅子に腰を下ろして藤堂の顔を覗き込んだ。藤堂は煙草をもみ消しながら、身を引いて近付いた顔と距離を取る。何故年頃の娘がこうも躊躇いなく顔を近付けて来るのかと、藤堂は些か呆れた。

「藤堂さん、さっぱりしたね」

「暑かつたから」

「若く見えるよ」

そう、と呟いて、藤堂は前髪の毛先を摘んだ。床屋で切つたので些か重い、確かに伸ばしっぱなしよりはマシだろう。暑苦しいのでいつそ坊主にでもしてしまいたかつたのだが、頭の形が悪いのでやめた。

渚は複雑な面持ちで、藤堂の頭を見下ろしていた。彼女は来るなり藤堂の顔を見て、若作りだと悪態を吐いた。恐らく髭がないせいだろうが、こちらは本意ではない。寝ていたら、床屋が勝手に剃つただけだ。藤堂の髭はなかなか伸びない。

「芹香さんとゆなちゃんは何？」

体を戻して頭を傾けながら、明は藤堂の背後の扉を覗いた。言われてふと時計を確認すると、時刻は一時を回っている。

「ゆなが期末テスト近いんだと」

「あれ、もうそんな時期なんだ」

藤堂は頷いて、明の驚いた声に同意する。実際藤堂も、もう夏なのかとうんざりした。藤堂は店番ばかりしているので、日中はあまり外に出ないから、気候の変化もそう感じない。近頃、一年が過ぎるのが異常に早く感じる。

「でもあの子、あれ以上勉強する必要なんてありませんわ」

ガラスのキャビネットに凭れた渚は、指先で毛先を遊びながら溜息混じりに言った。へえ、と明が意外そうな声を上げる。

「ゆなちゃん頭いいんだ」

「頭いいも何も、あいつ東大の入試問題解いてたぞ」

明が顔を引きつらせた。当然の反応だろう。

勉強を見てくれと言われた時は、藤堂もやる気だった。藤堂は賢い方ではなかったが、中学生のテスト問題ぐらいなら解るだろうと、高を括っていた。

しかしゆなが取り出した問題集を見た途端、大人三人は一様に凍りついた。絶句した挙げ句、不思議そうな顔をするゆなを置いて渚は店へ出て、藤堂は食器を洗い始めたのだ。哀れなのは残りの一人だったが、未だに出てこないところを見る限り、適当にあしらってはいえるのだろう。

背後のドアが開く音に振り返ると、黒江ゆなが顔を出していた。年齢の割に小柄で、やけに青白い顔をしている。小さな顔から零れ落ちんばかりに大きな目は、何かを訴えるように藤堂を見ていたが、への字に下がった眉は普段通りの無表情を保っている。くすんだ水色に染められた長い髪は、シフォン地の白いシュシュで一つに纏められていた。顔には出さないが、彼女も暑いのだろう。

小さな唇を尖らせたゆなの表情は、藤堂の目には不満そうに見えた。何を言い出すものかと、藤堂は思わず顔をしかめる。

「藤堂さん、何故にゆなの勉強を見てくれないのです」

「堤が見てんだろ」

「芹香さんはエスケープ致しました」

は、と呟くと、ゆなの後ろから疲れた顔が覗いた。白い細面と同じく色素の薄い切れ長の目が、僅かに細められている。無造作にコンコルドで上げられた銀色の髪は、蛍光灯の光を受けて無機質に輝く。常ならば凜々しくつり上がっている筈の眉は、情けなく下がっていた。

「おはようございます」

「メイ、もう午後だ」

堤芹香は明の挨拶に力なく突っ込みながらドアの縁に片手を掛け、溜息を吐いた。ゆなが長身の彼女の顔を見上げ、店の方へ下りる。続いて出てきた芹香は藤堂の横の椅子を引き、倒れ込むように腰を下ろした。

渚に暑苦しいと怒られたという彼女は、珍しく半袖のワイシャツを着ている。事務所が暑いのは、冷房の温度を下げさせてくれない渚のせいだというのに。

「ああ、目が痛い……」

「お疲れさん」

掌を脛の上に置いて天井を仰いだ芹香を労うと、彼女は掌を僅かに持ち上げて、視線だけを藤堂に向けた。どことなく恨めしげなその目に、藤堂は軽く肩を竦める。

あのテキストに書かれた文字の羅列を見れば、芹香でなくとも疲れるだろう。藤堂など、一目見ただけで目眩がしたほどだ。

「あなたでも駄目だったんですの？」

「私より、お前の方が頭の出来はいいだろう。私は大学には行っていないんだぞ、こっちが教えられてしまった」

黒のスラックスに包まれた長い足が、カウンターの下に投げ出されている。珍しく疲れきった様子の芹香は、長い睫毛を伏せたまま再び溜息を漏らした。何を問われているのかさえ分からない問題集よりも、薄着で更に目立つようになった起伏の激しい体のラインを見る方が、藤堂の目には毒だった。

煙草に火を点けて、藤堂はカウンターの下からノートパソコンを取り出す。本来なら毎日行うべきなのだが、いつも忘れてしまうので、こうして思い出した時にだけ帳簿をつける。

とりあえず当面の家賃は払えそうだが、車の維持費がかなりの痛手となっている。元々渚の持ち物だから、彼女が半分負担してくれてはいるものの、電気代は藤堂持ちなので辛いものがある。収入が増えた分、支出も倍に増えてしまったような気がする。しかし全員の取り分を、少しずつ減らすというわけにも行かない。

「ゆなちゃん、どうしてそんな問題やつてるの？」

藤堂の横に張り付いたゆなは、明の問いに首を傾げて見せた。不思議そうな面持ちだが、不思議なのはこちらだと、藤堂は呆れる。

「予習です」

ゆな以外の全員が脱力した。つまり、テスト勉強とは何の関係もないのだろう。有名な私立中学へ行っているようだから、勉強は出来るのだろうと思っただけだが、よもやここまでとは考えてもみなかった。

頭がいいのと勉強が出来るのとは違つとよく言つが、全くその通りなのだ、藤堂は実感する。渚が頭痛を堪えるように額に指先を添え、力なく首を横に振つた。

「先を行き過ぎですわ」

「先取りすぎて悪い事はありません。さあ藤堂さん」

「意味わかんねえよ、さあ何？ つうか暑いからどけ」

ゆなは頭が良すぎて突き抜けてしまつて居るのだと、藤堂はそう解釈した。それもまた、傍迷惑な話ではあるが。

藤堂はパソコンの液晶画面に映し出された出納帳を見ながら、溜息を吐く。収入と支出が、殆ど同じ額だった。先月分も、ギリギリの黒字だ。見ているのも嫌になつて、帳簿はいじらないままパソコンを閉じる。

それにしても客が来ない。業務連絡用に使つて居る明の携帯には依頼が入ってくるが、わざわざ来店する客は、梅雨が明けてからめつきり少なくなつた。メールでも依頼を受け付けて居るのに、この暑さの中、店にまで来る稀有な依頼人もそうそういないだろう。

藤堂は、そろそろ限界だった。これが家の中なら上半身裸になるところだが、この女だらけの中でそれは流石に憚られる。

「……高屋敷、冷房強くして」

「ダメです」

「上着貸してやつから」

渚は一瞬黙り込んだ。明の横でカウンターに寄りかかった彼女は、藤堂と目が合うと顔を赤くして視線を逸らす。

「け、結構です」

「仕舞いにゃ脱ぐぞ」

「おやめなさい」

明が溜息を吐いて立ち上がった。ゆなは期待に満ちた目で藤堂を見つめていたが、彼は無視する。将来は祐子のようになってしまうかも知れないと、藤堂はどうでもいい心配をしていた。

壁に取り付けられたパネルのカバーを開け、明は冷房の設定温度を下げた。涼しい風が一気に天井から吹き込み、藤堂はようやく安堵の息を吐いた。

第六章 交錯する記憶 二

三代が去ってから、五人は暫く暇を持って余していたが、三十分もすると携帯に依頼が入り、明が出て行った。やはり依頼人も、この暑い日に外へ出たくはないらしい。

明と入れ違いに来た若い女性の依頼人は、カウンターに座った芹香を見るなり拳動不審になって大騒ぎし、握手を求め始めたので、芹香と一緒に追い出した。彼女がここで働いている事は公にしているから、偶然来ただけなのだろう。

その後、三代の従兄弟と名乗る男性から藤堂の携帯に連絡が入ったので、様子を見に行くと言った渚が出て行き、結局残ったのは藤堂とゆなだけだった。藤堂だけが残るのはいつもの事だが、ゆなが一緒に留守番をするのは初めてだろう。

静かな午後だった。藤堂は欠伸を漏らしながらぼんやりと外を眺め、こんな日に外へ出たくはないものだと考える。これ以上客が来ても今日中の依頼は請けられないから、対応が面倒なので、誰も来ないことを祈るばかりだ。

藤堂が相手をしないので暇を持て余したゆなは、ひたすら問題集を解いていた。この調子なら普通に進学してもいいところまで行きそうだが、本人にその気は全くないようだった。霊媒師をやるより堅実だろうと、自分の事でもないのに藤堂は残念に思う。

「勉強好きなの？」

ゆなは顔を上げて藤堂を見て、無表情のまま首を傾げてから、再び視線をノートの上へ落とした。

「好きか嫌いかなどありません。やらねばならぬので、やるだけのこと」

「真面目だね」

ふうむ、とゆなが鼻を鳴らした。その手は一定の速度を保ったまま、ノートに解答を書き続けている。

「学生の本分は勉強です。勉強だけしていれば良いのだと、ゆなは小学生の時までは思っておりまして」

また妙な価値観を持っていたものだ。藤堂が小学生の頃など、どうすれば疑われずに学校を休めるかと、そんな事ばかり考えていた。藤堂は生来不真面目な性分だ。

ゆなは小さな手で分厚いテキストのページを捲り、少し悩んだ後、またノートにシャープペンシルを走らせる。藤堂には、彼女が何を書いているのか全く分からない。字が汚いせいもある。

「でもゆなは中学校に上がった頃、とうとう取り憑かれてしまったのです」

「悪霊に？」

「そうです。もう、すごいのに」

抽象的すぎて藤堂には全く分からないが、あの札だらけのヘルメットをもともせず取り憑いたなら、確かに凄い悪霊だったのだろう。

「父上様と母上様が、とても泣いておられました」

藤堂はゆなの両親を思い出して、あの両親ならそれは泣くだろうと考える。

「ゆなにはそれが見えていたのに、体が言う事を聞きませんでした。とんでもなく歯がゆかったのです。ゆなの大事な人を泣かせる霊が、恨めしかったのです」

「それで霊媒師になりたがってたのか」

ゆなは頷き、図形や文字で埋め尽くされたノートを捲る。ゆなの手は止まる事がなく、見る見る内にまっさらなページへ解が書き込まれて行く。

「皆が言うように、勉強しているだけではいけないのだと思ったのです。だからゆなは、霊媒師さんのところに弟子入りしたかったのです。でも」

「反対されたから、あんな事になったワケね」

ゆなは心なしに文字を書くスピードを緩めて、小さく頷いた。

「父上様と母上様の泣くところを見るのが嫌で、霊媒師になろうと志したのに、ゆなは本当に愚か者でした」

ゆなの手は止まらないし表情も変わらないが、彼女は悔いているのかも知れなかった。藤堂は黙ってゆなの小さな頭に掌を乗せる。

「志が高いのはいい事だよ」

ゆなは藤堂に顔だけを向けて、微かに頬を染めた。小さな唇が笑みの形を作るのを見て、藤堂は好ましげに目を細める。

「どっちかじゃなくてな、両方やりやいい。お前器用だから、適当に出来るだろ」

「はい。必ずやり遂げてみせます」

ゆなは間違いなく、変人の類だろう。それでも藤堂より遙かに真面目だし、性根は真つ直ぐで、夢もある。突拍子もない発言にばかり気を取られて、馬鹿だ馬鹿だと言っていた己を恥じた。馬鹿と言う方が馬鹿とは、真実だったのだろう。

実際、藤堂は馬鹿だった。勉強は出来なかったし、勿論浄霊も出来ない。志を持つゆなに、何もしてやる事が出来ない。だからせめて、近くで見守っていたいと思う。

「でも、なかなか浄霊は出来ませぬ。救いたいと強く念じれば、出来ると聞いたのに」

藤堂は煙草に火を点けながら変な顔をした。念じれば出来るというのが、よく分からない。そんな曖昧な事でいいのだろうか。

しかしそれならば、霊体であるコウが易々と浄霊してみせた理由も分かる。霊は体という壁をなくした魂だけの存在だから、抱いた感情がより強く発露する。その分霊の感情が他人に及ぼす影響も大きく、悪霊がいるだけで悪寒や耳鳴りがするのは、その為なのだ。明は言っていた。

「人を救うということは、ほんとうに難しいものです。メイさんはすごいのです」

ゆながそう締めくくった時、視界の端で自動ドアが開いた。

「あれ、今日二人？」

顔を上げると、入口に常連客が立っていた。目と目の間が少々近く、彫りの深い顔立ちをしている。赤味を帯びた茶髪は短く切られており、焼けた肌と相俟って彼女を若々しく見せていた。

新藤祐子はベアトップの上に着た薄手のカーディガンを脱ぎながら、カウンターに歩み寄って腰を下ろした。相変わらず強調された胸元を見て、藤堂は暑さを忘れる。つくづく単純な生き物だと、自分でも思う。

「こんにちは祐子お姉さん」

「なにその歌のおねえさんみたいな呼び方……あら、勉強してんの？ 偉いわねえ」

祐子が頭を撫でると、ゆなは誇らしげに胸を張った。そんな彼女を見てどこか嬉しそうに微笑んだ後、祐子は持っていたコンビニの袋をカウンターに置く。

「差し入れ。みんな帰ってきたら食べて」

「ワリーね。アイス？」

吸いさしの煙草を消して、藤堂は袋の中身を探る。祐子がその手を叩いたが、彼は動じなかった。

「がつついてんじゃないわよ」

「いいだろ別に」

棒アイスの袋を破りながら、藤堂は忘れかけていた三代の手土産を横目で見た。中身は確認していないが、生ものだったらこんな所に置いておいてはまずい。

視線に気付いたのかゆなが立ち上がり、コンビニの袋と紙袋を無造作に掴んだ。藤堂は袋を持って家へ続く扉を開けたゆなの姿を、横目で追う。

「冷蔵庫に入れます」

「ヨロシク」

扉の向こうに消えたゆなの背を見送ってから、藤堂は祐子に向き直る。彼女は目を伏せて、薄く笑みを浮かべていた。どこか寂しげなその表情に、藤堂は思わず視線を逸らす。

今更気まずいなどという感情は、祐子に対しては抱かない。ただ、見てはいけないものを見てしまったような気がした。

「平和だね」

は、と間拔けな声を漏らすと、祐子は小さく笑った。カウンターに頬杖をついた彼女の目は、真っ直ぐに藤堂を見上げている。

「色々、忘れたワケじゃないけどさ。馬鹿だったなって思う」

独り言のように呟く彼女の表情は、懐古するようなものだった。伏せた目から、感情は窺えない。口を挟むのも良くない気がして、藤堂はアイスを齧る。冷たいそれは飲み込むと同時に、急激に体温を下げた。

俯いた祐子に、芹香の寂しげな表情が重なる。何故今思い出すのか自分でも分からなかったが、祐子にしろ彼女にしろ、しっかりと向き合って欲しかったのではないかと思う。

それなら、とんでもなく失礼な事をしかしてしまったことになる。しかし人の話を突っ込んで聞くのは得意ではないし、少しでも嫌な顔をされると、藤堂は何も言えなくなる。

他人と深く関わり合う事を避けていたから、藤堂は今でも、込み入った話をするのが苦手だ。従業員達とはたまに話す機会もあるし、聞いた方がいいのではないかと思う事もあるが、自分からは聞き出せない。それが申し訳なくも、もどかしくも思う。

明に家庭の事情を聞いた事もないし、芹香が会社を辞めた理由も、結局聞いていない。明はともかく芹香の方は、聞かなければならぬような気がしている。そもそも藤堂は、最初に彼女と長く話した時以来、気になって仕方がなくなっていた。

「なくしたから、忘れられないんだよね。新しく彼氏作っちゃえば良かったのに、それも行かなかった」

「今から作ればいいだろ」

祐子はふと真顔になって、藤堂を見上げた。射抜かれたように、目が離せなくなる。黙っていないで何か言っただろうと思っていたのに、結局何も言えなくなってしまった。

祐子は暫く無言のまま、穴が空くほど藤堂の顔を見つめていた。やがて開いた唇がやけに赤く見えて、藤堂は目を奪われる。

「藤堂君、付き合ってくれる？」

「え、ゴメン」

藤堂は祐子の言葉より、即答した自分に驚いた。不誠実に過ぎるが、今まで告白を断った事など、ただの一度もない。祐子が嫌という訳ではない。寧ろ彼女ほどの器量を持ったひとなら、願ったり叶ったりだ。

それがどうして、咄嗟に口を突いて出たのが典型的な断り文句だったのか。祐子は驚いたように両眉を上げていたが、藤堂は更に驚いた。とんでもない返答をしてしまったような気がして、頭が焼けるような錯覚に陥る。

いつもこうだ。返答に窮すると、心にもないことを口走る。心にもなかったのかどうかは、藤堂自身にも判断出来ないのだが。

お互いに、暫くそのまま無言でいた。冷や汗と一緒に、溶けたアイスが指先まで垂れてくる。祐子はそれを見て唐突に嘔き出し、藤堂から離れるように椅子へ凭れた。

「変わったね」

朗らかに笑う祐子に、藤堂は困惑して眉根を寄せた。また、いつもの冗談だったのだろうか。とてもそうは見えなかった。そうは思いたくない。

どこことなく恥ずかしいような気になって、藤堂は視線を落とす。

溶けかけたアイスを口に放りこんで、べたつく指を舐めた。頭の芯が一気に冷える。

「あなたは変わんねえな」

「そう？ これでもちよつとはスッキリしたのよ」

言いながら、祐子は亀のように首を突き出して藤堂をじっと見た。祐子の顔は、いつでもすつきりしているように見える。あっけらかんとした口調が、そう思わせるのかも知れない。

「キミ、好きな人いるんでしょ」

は、と間の抜けた声を漏らして、藤堂はにやつく祐子の顔をまじまじと見た。祐子の意図は酌めないし、藤堂にそんな自覚はない。そもそも高校生の頃理不尽に痛い目に遭って以来、恋をしたような覚えはない。

それを拒んでいたのではないかと、今では思える。またあんな目に遭ったらと思うと、安心して恋愛など出来なかった。痛い目に遭った事などすっかり忘れていたが、一種のトラウマとなっていたのだろう。

「いい事よ。ゆなちゃんには残念だけど」

「いや、何の話……」

「なにをニヤニヤしているのです」

いつの間にか、藤堂の背後にゆなが立っていた。祐子に気を取られていたので全く気がつかなかったが、その口振りから、告白辺りの会話は聞いていなかったのだろうと推測する。

ゆなは両手に、ガラスのコップを持っていた。小さな手では非常に持ちにくそうだが、藤堂の家にはトレイがないので、手で持って来るしかなかったのだろう。

コップを一つ祐子の前に置き、残った一つを持ったまま、ゆなは藤堂の隣に腰を下ろした。中身の残ったカップがあるから当然だが、藤堂の分を持つてくる気はないようだ。

「あら、ありがと……まあねえ、だらしない弟がやっとしっかりしてきたから、嬉しくて」

「ほう、ご兄弟がいらしたのですか」

祐子は笑いながら頷いた。ゆなが出した麦茶を一気に飲み干す彼女を眺めながら、間違はなく自分の事だろうと、藤堂は思う。弟と言われても悪い気はしないが、告白されたすぐ後では、複雑な心境になる。

藤堂はカップの底に残ったコーヒーを飲み干して、一つ息を吐く。ゆなは彼につられて、両手で持ったコップに口をつけた。

「妹もいるわよ。小さいのと大きいのと、一人ずつ」

頭を撫でた祐子を不思議そうに見上げた後、ゆなはふつくらとした頬を林檎のように赤く染めた。小さいのはゆなの事だろうが、大きい方は芹香だろうか。そう考えると微笑ましく思える。

知らず笑みを浮かべていた藤堂の頬を、ゆなが人差し指でつついた。

「兄妹ですね」

「そーね」

祐子は二人の様子を見て満足そうに笑うと、膝に乗せてあったカイデイガンを腕に引っ掛けながら立ち上がった。

「じゃ、そろそろ帰るね。ごちそうさま」

「またどうぞ」

ゆなの台詞に、祐子は満面の笑みで応えて店を出て行った。ガラス越しに大きく伸びをする彼女が見えた後、フラレちゃった、という呟きが微かに聞こえた。ゆなが目を丸くし、藤堂を見上げる。

藤堂はゆなから顔を背け、首を竦めた。途端、藤堂の携帯が鳴り始める。液晶には、高屋敷と名前が出ていた。

何かあったのだろうかと訝りながら電話を取った瞬間、藤堂は大声で怒鳴られた。怒鳴られたはいいが、声が大きすぎて何を言っているのか全く分からない。

「……………何？」

スピーカーを耳から遠ざけて問い返すと、早く来いという渚の怒鳴り声が答える。藤堂は傍らで聞いていたゆなと顔を見合わせ、同時に肩を竦めた。

第六章 交錯する記憶 三

「渚さん、落ち着いてください」

慌てた様子で電話してきた渚に急かされて店を出たのが、つい十分ほど前。藤堂が車を運転するので電話を代わったゆなは、ずっと渚を諫めていた。渚は藤堂が電話に出た時点で既に喚いていたのだが、まだ騒いでいるのだろうか。

渚の就職祝いに彼女の両親から貰ったこの車は、結局藤堂しか運転していない。明とゆなは勿論、芹香も高級車の運転は嫌だと言って、触ろうともしない。

渚は渚で、免許は持っているものの、自分で運転するのが面倒なのだそう。駄まで歩く方が面倒なようにも思えるが、今までずっと運転手に送り迎えされていたのなら、それも仕方ないのだろう。彼女なりに、体力をつけようとしているのかも知れないが。

国道を走りながら、藤堂はバックミラー越しにゆなを見た。元々への字に曲がった眉が、更に下がっている。流石のゆなも困り果ているようだが、憤る渚より、普段の彼女の発言の方が数倍迷惑なように思える。

「……今行きますので、待っていて下さい」

ゆなは少し語調を強めてそう言うてから、電話を切った。藤堂の携帯を持ったまま首を捻り、ふうむ、と唸る。

「どうしたの」

気のない声で問うと、ゆなは首を傾げたままバックミラーに映る藤堂の目を見た。ヘルメットが僅かに傾く。

「目が一つしかない霊が出たそうです」

藤堂は片眉を顰めて、訝しげに表情を歪めた。それだけである渚が応援を要請するだろうかと思うが、彼女の事だから、気味が悪いから見たくないなどという、くだらない理由かも知れない。

「妖怪じゃなくて？」

「そんなものは存在しませぬ」

冗談のつもりだったのだが、ゆなの返答はシビアなものだった。ゆなの真面目な顔を見るのは、久々な気がした。彼女は大抵無表情でいるから普段と大差はないのだが、纏う空気が緊張しているの
でそれと分かる。

変容しているという事は、悪霊なのだろうか。しかし依頼人からは、具体的な被害報告もなかった。子供が怖いと泣くぐらいで悪霊と決め付けるのは良くないのだろうか、形が変わっているなら、話は別だ。

「渚さんは悪霊と仰っていましたが、妙ですな。勘違いのような気がします」

何故そう思うのか、藤堂は聞かなかった。説明されたところで、どうせ理解出来ない。

バックミラーから視線を外して前を向き、国道から住宅街へと入って行く。カーナビによれば、もうすぐの筈なのだが。そう考えながら軽く辺りを見回すと、こちらへ向かって手を振る人影が見えた。その慌てた仕草から、渚だろうと判断する。

藤堂はそこまで車を走らせて、家の脇にぴたりと着けた。ゆなが車のドアを開けた瞬間、渚が怒鳴り声を上げる。

「何を遊んでらしたの！」

時間はそう経っていない筈だが、渚は限界まで眉をつり上げて憤慨していた。怒られる謂れはない。ゆなは車を降りながら、渚を見て小首を傾げる。

「普通に参りました。ホシはどんな状態ですか？」

「犯人じゃねえよ」

「どうもこうもありませんわ！ 気味が悪い……あれでは子供が泣くのも当然だわ」

口振りから察するに、渚が事務所にいた二人をここへ呼んだ理由は、藤堂の予想通りなのだろう。女性らしいのはいい事なのだろうが、その度に呼ばれては堪ったものではない。

ゆなはどこか渋い表情を浮かべ、小振りな一軒家へ入って行く渚の後に続く。藤堂は車をロックしてから、敷地内に入った。

きつちり後ろへ撫でつけた白髪頭と、逞しい肉体を持った異様な風体の執事が、玄関扉を押さえたまま藤堂に向かつて会釈する。儼つゝい容貌に似合わず丁寧な仕草だったが、彼の表情は困惑したようなものだった。渚を諫めるのも彼の仕事の内だが、霊である彼は口が利けないから、中々難しい事ではあるだろう。

玄関扉を背にして左側に廊下が続いているが、突き当たりで更に折れている為、問題の台所は見えない。お邪魔しますと声を掛けると、不安そうに眉を下げた男が廊下の奥から顔を出した。微かに子供の泣き声が聞こえる。

「こちらがご主人の桐沢泰昭さん。きりさわやすあき 桐沢さん、あれが所長の藤堂です。それが黒江」

桐沢は渚に紹介されてようやく、藤堂とゆなに向かつて頭を下げた。藤堂はつられて会釈したが、ゆなは廊下の端へ寄って、家主の向こう、廊下を曲がった先を注視している。

「康平から話は聞いています。すいません、わざわざ所長さんにまでご足労頂いてしまって……」

「いや、構いません。俺じゃなくて、そいつがやるんで」

ゆなの背中を指差すと、桐沢は不思議そうな顔をした。当然だろう。高屋敷の娘の手に余るものが、こんな小娘の手に負えるなどと普通は思わない。

そもそも、渚が何を思つて藤堂等に来いと言つたのか分からない。見たくないなら、執事に任せればいいだけの話だろう。藤堂とゆなが現場に駆けつけた所で、出来る事はないのだ。まさか執事まで、霊の異形に気圧されたともいうのだろうか。流石にそれはなさそうだが。

桐沢は中へどうぞと三人を促したが、渚は廊下から動こうとしなかった。執事が困つたような表情のまま、渚の傍らに立つ。

「高屋敷、どうしたのお前。そんなひどいの？」

振り向いた渚は、見るからに怯えた表情を浮かべていた。執事はそっと、彼女の肩に手を置く。彼を見上げた渚は少し落ち着いたように、小さく息を吐いた。

「じいやが、出来ないと言うの。私もあれを直視するのは……ちよ、ちよっとゆなさん、先にご挨拶なさい！」

躊躇いがちに言いながら部屋を見た渚は、慌てて室内へ入って行った。藤堂は困り果てて、眼鏡を掛けながら廊下を進む。執事が申し訳なさそうな顔をしていた。

廊下を曲がると、子供の泣き声はつきりと聞こえて来る。突き当たりのリビングでは、若い女性が赤ん坊をあやしていた。リビングの手前ではゆなが立ち尽くしており、無表情のまま、あらぬ方向を見つめている。視線の先は、恐らく台所なのだろう。

渚はリビングで子供をあやす母親に、何やら話しかけていた。泰昭はその傍らで、所在なげに佇んでいる。

「あれが藤堂です。藤堂、こちら奥様の結衣さん」

廊下から出て来た藤堂を示し、渚が簡潔に紹介した。結衣は火がついたように泣き喚く赤ん坊を抱いたまま、頭を下げる。

「ごめんなさい、うるさくて。お仕事に障ってしまつかしら」

「ああ、耳に入っていないみたいなんで多分問題ないかと……ゆな、どうなのそっち」

聞きながら台所を見た藤堂の目に、渚が言った通りの霊の姿が飛び込んできた。藤堂は思わず顔をしかめる。

それはバスタオルにくるまれた赤ん坊のようだったが、確かに目が一つしかない。鼻もあるべき位置には存在せず、額に親指大の管のようなものが生えていた。耳と口だけは本来の位置に収まっているものの、見れば見るほど気味が悪い。

確かにこれでは、渚が怯えるのも分かる。何の反応も示さないゆながおかしいのだと思うが、しかし霊の姿には違和感を覚えた。赤ん坊なら、例え捨て子や生まれる前に死んだ子供であろうと、必ず誰かが哀れみ、成仏を祈る筈だ。

現世に溢れる邪気によつて、本来ならば何の害もない浮遊霊が悪霊化するの、霊が体内にそれらの感情を溜め込む為だ。だから彼らは人を憎み、世を憂い、現世に害を及ぼす。しかし未発達な赤ん坊は変質する以前に、感情を溜め込むことさえ出来ない。

ゆなは今し方気付いたかのように藤堂を見上げ、左右に首を振つた。

「あの子は霊ではありませんぬ」

藤堂は首を捻つて渚を見た。ゆなの発言に虚を突かれて目を丸くしていた渚は、藤堂の視線を受けて我に返る。眉をつり上げてつかつかとゆなに歩み寄り、宙に浮かんだ赤ん坊を指差した。

「あれのどこをどう見たら霊ではないと言つもの！ 気配だつてありますわ！」

退治屋として、高屋敷家の跡取りとしての、自尊心を傷つけられたのだから。渚は激昂してゆなに詰め寄つたが、ゆなは小さな唇を尖らせるばかりだった。

「ちゃんと見てあげて欲しいのです。あれは悪霊でなければ、浮遊霊でもありませんぬ」

「でも、形が……」

尚も食い下がる渚に、ゆなは僅かに眉を顰めた。そして徐にヘルメットを外し、両手で抱える。

唐突なゆなの行動に、渚が息を呑んだ。藤堂も思わず目を見張る。霊避けのヘルメットがなければ、悪霊は彼女に取り憑き放題だ。憑いて下さいと言わんばかりに、ゆなは異形の嬰兒を見上げる。渚が慌ててゆなの肩を掴んだが、彼女は首を横に振つた。

ゆなの身には、何事もなかった。悪霊ならば総じて肉体を欲して取り憑こうとする筈なのだが、赤ん坊の霊は動かない。藤堂はゆなと霊を交互に見た後、片眉を寄せる。

「あれは記憶です。この家に縛られた霊、地縛霊の記憶が現れたもの。この記憶に捕らわれているのでかなり薄いですが、そこにいらつしゃいます」

ゆなは台所の入り口から少し避け、床を指差した。薄すぎて藤堂にはよく見えなかったが、渚は凍り付いたようにゆなの指差した先を見つめている。赤ん坊の霊に気を取られて、気付かなかつたのだらう。

ゆなはゆつくりと、台所へ入って行く。一番奥まで進んだところで立ち止まり、彼女はその場に屈んだ。

しゃがみこんだゆなの正面に、殆ど見えなかった女が、うずくまって膝を抱えているのが見える。痩せこけて疲れた顔をした女は、驚いたようにゆなを見つめていた。彼女の目には当然の事ながら生氣がなく、抱えた足は痛々しいほど細い。

「ゆなの声が聞こえますか」

女は目を丸くしたまま、黙って頷いた。たまたま霊力の強い土地や家で死んで、そこに縛られた霊を地縛霊と呼ぶが、大抵は周囲に漂う邪気に晒されて悪霊になってしまう。

強い想いを抱いて死んだ人間は、それがどんな念であれ、現世に囚われる。俗に言う、浮かばれないという現象だ。それが現世や他人に対しての悪意であれば四十九日を過ぎた時点で悪霊となり、害を為すようになる。一方悲哀や悔恨、遺された者への愛情であれば、すぐには悪霊にならず、地縛霊や浮遊霊となる。しかし現世の邪気に晒され続ければ、彼らも結局悪霊化する。

この女がどれほど長くここにいたのか藤堂には見当もつかないが、完全に人間の形を保っている上、まともに意識があるということは、悪霊ではないのだらう。桐沢夫婦は中古でこの家を買ったというから、彼らが越してくるまで、人の出入りがほとんどなかったのかも知れない。

「あなたは何を悔いておられるのです」

ゆなの問い掛けに、女は不意に顔を上げ、宙に浮いた一つ目の赤ん坊を見て泣き出しそうに表情を歪めた。現世に囚われていたのは、確かにあれが原因なのだらう。痛々しい彼女の姿に、渚の手が拳を握る。

魂だけの存在となつた霊は、現世や他人に与える影響が大きい。強く想つたものや生前の記憶が、ああして具現化することはままあるようだ。それも結局は霊の仕業である為、靈感のある者にしか見えないのだが。

「あの子は既に成仏しております。あれはあなたの記憶なのです。もつとしっかりとご覧なさい」

戸惑う女に、ゆなは人差し指を天井へ向けてみせた。

「あなたはもう、ご存知のはずなのです。あちらへの道を」

女はゆなが指差した先を見て大きく何度も瞬きした後、不意にゆなへ向き直り、枯れ枝のような両腕を伸ばしてゆなを抱きしめる。縋りつくような仕草に、彼女は不思議そうに首を傾げた。しかし次の瞬間、ゆなは凍りついたように動かなくなる。

藤堂の位置からは、女の口が僅かに動くところしか見えなかった。何も聞こえてはこない。浮遊霊や地縛霊の殆どが直接的には語れないというが、ゆなには何か聞こえていたのだろうか。

「あら」

青い顔をして赤ん坊を見つめていた渚が、唐突に声を上げた。ゆなと霊を見ていた藤堂は、顔を上げて視線を移す。確かにそこに浮かんでいた筈の嬰兒は、既にいなくなっていた。女があれを記憶だと認識したことで、消えたのだろうか。

女は暫くゆなに語りかけた後、微かに笑みを浮かべ、忽然と消え失せた。きつとあれで、成仏したのだろうか。

ゆなは天井を見上げて両手を合わせてから、しゃがんだまま頭を下げる。祈るような仕草だった。渚はそんな彼女を見つめたまま、何も言わない。

子供は真つ直ぐに道を示してやれるのだと、芹香は言っていた。まさしくその通りなのだろう。ゆなは真つ直ぐに、迷う人に道を示して見せた。霊媒師として危ない道を歩むよりも、ああして語り掛けて浮遊霊を成仏させてやる方が、どんなに安全だろう。しかしそれでは、ゆなは納得しないのかも知れない。

暫く手を合わせていたゆなは徐にすつくと立ち上がり、リビングへ入って行く。藤堂は、あの記憶はなんだったのだらうと、ぼんやりと考えていた。

「終わりました」

渚が慌ててゆなの後を追い、怪訝な面持ちの桐沢夫婦に頭を下げた。こちらの子供はいつの間にか泣き止んでおり、母親の腕の中で小さな寝息を立てている。

「この家には地縛霊がおりましたの。この子がきちんと導いて差し上げましたから、もう大丈夫」

渚が説明すると、夫妻は顔を見合わせた後、我が子を見た。霊が見えないと言うから、俄かには信じ難いだらう。藤堂とて眼鏡がなければ何も見えないから、やっぱり信じられなかったかも知れない。しかし夫妻は、乳児の安らかな寝顔を見て、納得したのだらう。

二人揃って、安堵の息を吐く。それから桐沢がゆなと渚に頭を下げ、結衣もそれに倣った。

「ありがとうございます。買って早々、家を手放してしまうところでした」

「除霊さえすれば、どんな幽霊だらけのおうちでも、ちゃんと住めるのです」

ゆなは胸を張って、夫妻にそう言った。桐沢は微笑ましげに彼女を見ている。

「お子さんは、地縛霊の悲しみに反応していたのかも知れませんかね」

結衣がはつとして、口元に手を当てた。

「ああ、台所に入るとなんとなく悲しくなるのは、そのせいだったのかしら」

「そうでしょうね。でももう、悲しくなることはありませんわ」

そして渚は、ゆつくりと笑顔を浮かべる。安心させようとするかのような、優しい表情だった。

「この家には、幸せな人しかいないのだから」

渚の言葉に、夫妻は顔を見合わせて小さく頷いた。

ゆなが結衣の腕の中で眠る赤ん坊の、ふっくらとした頬をつつく。ふにゃふにゃと頼りなく口を動かした我が子を見て、桐沢夫妻は幸せそうに笑った。

第六章 交錯する記憶 四

桐沢家を出た三人は、そのまま車で帰路を急いでいた。事務所に誰もいなかったら、また明に怒られる。

「あの子供、なんだったの？」

藤堂が正面を向いたまま聞くと、ゆなは首を捻った。返答に窮しているわけではなく、癖なのかも知れない。

「サイクロピア、単眼症という奇形です。脳の形成不全が原因で、発育途中で目が分裂せず、ああなるようです。目だけでなく、鼻の穴も額に一つしかありません」

「子供が奇形だったから、悔いていたの？」

渚の言葉に、ゆなは僅かに眉を顰めた。彼女の発言は、些か安易に過ぎるようにも思われる。奇形児として産んでしまったことを悔いていたなら、あの姿を記憶に留めてはおけないだろう。何より、そんな事で成仏出来ない程後悔するとは、藤堂には思えない。

「あの方は妊娠が発覚する前からその後、日常的に恋人から暴力を振るわれており、遂には殺されてしまったそうです。恋人の方は既に捕まっておりますが、あの方は子供を死なせてしまったことを、深く悔いておられました」

「聞いたの？」

ゆなの声は、些か不機嫌そうなものだった。霊から直接話を聞いたならば、渚の言葉には不快感を覚えてしまうだろう。

「はい。死なせたといってもお子さんは、生まれてすぐに息を引き取ったそうです。単眼症の原因としては、ビタミンA不足や抗癌剤の副作用などが挙げられますが、DVによるストレスも、その一因と考えられているようです。全て恋人のせいなのです」

黙り込んだ渚は、思い詰めたような表情で俯いていた。己の発言を恥じているのかも知れない。しかしゆなの全て恋人のせいという発言も、藤堂には軽率に思われた。

一概に、全てが父親のせいとは言えない。奇形児として産まれたのは父親のせいかも知れないが、あの母親が現世に縛られた原因は、子供への愛情なのだと、藤堂には思える。

親の愛とは、子供が思うより遙かに深いものだ。どんな子供であつてもいとおしいと思うだろうし、自分のせいではないといえ、それを死なせてしまったとあつては、浮かばれないだろう。

腹を痛めて子供を産んだ母親と違い、父親は本当にこれが自分の子供なのかと、疑い続ける事があるという。近年増加傾向にある家庭内暴力も、それを一因とする父親側の愛情の欠如が原因とも言われている。子供どころか配偶者すら持たない藤堂には到底分かり得ないが、実際、男性側の立場としては、疑つてしまふ気持ちも分からない。実際、男性側の立場としては、疑つてしまふ気持ちも分からない。

しかしそこで妊婦に暴力を振るうかどうかは、また別の話だ。延命治療も、死にたくないという、人の根元的な感情さえ失われつつある時代だ。不義の子供だろうと奇形児であろうと、新しい命は何よりも大事な宝である筈だ。それを蔑ろにする人間に憤りを感じこそすれ、しかし藤堂にはどうすることも出来ない。

「渚さん、人を見かけで判断してはなりません。執事さんはきつと分かつておられました。穿つた見方をせず、真つ直ぐに相手を見て、正しい判断を下すべきなのです」

渚は俯いたまま、はい、と呟いた。しおらしい渚と叱るゆなとはなかなか珍しい光景だと、藤堂は呑気に考える。

彼女にしても、悪気があつて発言した訳ではなかっただろう。その分、ゆなの言葉が重く感じられたのかも知れない。

一方藤堂も、些かどきりとした。ゆなは時折どこか達観したような、大人より大人びた面を見せる。それが嬉しくはあるが、己を省みて恥ずかしくも思う。

「次、間違いないようにすれば良いのです。いくらでも次はあります。助けてくれる人もいます。ゆなも、藤堂さんとメイさんに助けられました」

迷った時に助けられることがどれほど有り難い事か、ゆなは知っている。霊媒体質の彼女は、今までずっと除霊屋に助けられてきた。差し伸べられる手が近くにある事がどれほど幸せなことか、渚もよく分かっているだろう。

渚は顔を上げて真剣な表情でゆなを真っ直ぐに見つめ、大きく頷いた。ゆなは微かに笑う。

後部座席でのやり取りを微笑ましく思いながら駐車場に車を止め、藤堂はドアを開けた。ガラスに日光が反射して、斜向かいにある店内の様子は覗えない。ゆなと渚は車を降りて、真っ直ぐに事務所へ向かう。

「メイさんと芹香さんは、もう帰っていらっしやるかしら」

藤堂以外の誰かが先に帰社しても、合鍵の隠し場所を教えてあるから困る事はない。しかし従業員が増えた今、明は事務所を空けると怒るので、藤堂は出来る限り事務所を離れないようにしていた。ただ単に、外に出るのが億劫というのもあるが。

「芹香さんは仕事が早いので、帰っていると思われます。メイさんが帰っていたら、怖いのです」

他愛ない雑談をしながら事務所へ向かう二人の後をのんびり追って行くと、店内に人影が三つ見えた。芹香どころか明も帰っている上に、依頼人まで来ているようだ。明が怒っていそうだと、藤堂はうんざりする。

ゆなが首を傾げながら藤堂を見上げ、自動ドアの前に立つ。開いたドアの向こうに、眉をつり上げた明が見えた。

「藤堂さん何してたの！」

明の怒鳴り声に出迎えられ、三人一斉に肩を竦めた。明の隣に座った芹香は疲れた顔をしており、哀れむような目を三人に向ける。

カウンターの手前に腰を下ろしたずんぐりした体型の男は、椅子の背もたれから身を乗り出して振り返り、食い入るようにゆなを見つめている。髭を生やした熊のような男を見て、藤堂と渚が嫌な顔をした。

「高屋敷に呼び出されたんだよ……つうか何してんだタヌキ」

鹿倉清澄はゆなを凝視したまま、藤堂に向かって軽く片手を挙げた。よく日に焼けた腕ははちきれんばかりに太く、腹も少々目立つ。細い目は温和に垂れ下がっているが、ゆなを見詰める熱い視線は恐ろしかった。

ゆなは鹿倉の視線にも動じる事なく事務所の奥へ進み、カウンターの奥へ入った。藤堂の椅子に座っていた明が立ち上がるが、ゆなが腰を下ろす様子はない。案外先の先まで読んでいるのかも知れないと考えながら、藤堂は定位置に着いた。

対面に座った藤堂を見て、鹿倉は顔をしかめる。

「何って、依頼に来たんだよ」

「え、依頼だったんですか？」

明の驚いた声に、またぞろ鹿倉が下らない事ばかり言っていたのだらうと、藤堂は呆れる。灰皿を引き寄せながらふとカウンターを見ると、コップが全てなくなっていた。明が片付けたのだらうか。

渚は注意深く鹿倉を見ながらカウンターの脇へ移動し、壁に背を着いた。セクハラじみた発言をされるのが嫌なのだらう。

「そうだよ、そうじゃなきゃこんな暑い中来ねえって……それよかオイ、匡」

煙草に火を点けながら、藤堂は鹿倉の剣呑な声に視線だけを上げて眉を顰める。鹿倉は恨めしげに彼を睨んでいた。恨まれるようなことをした覚えはない。

藤堂は横目で芹香を見る。彼女は視線を落としたまま、作り置きしてあった麦茶を飲んでいた。涼しげな横顔は、やはり少し疲れているようにも見える。依頼人に絡まれた拳げ句、帰ってきてみたら明にも纏わりつかれた、といったところだらうか。

「また一人増えてんじゃねえか。また女。しかもお前好み。しかも有名人」

鹿倉の低い声は、しかし悲しげにも聞こえた。酔っててもいるのではないかと、藤堂は訝る。

「なんでお前ばっかりそうなんだよ！」

怒鳴り声を上げながらカウンターの拳で叩く鹿倉に、芹香が渋い表情で藤堂を見た。ずっとこんな愚痴を聞かされていたのかも知れない。それはそれで哀れだ。

「お前どうせ、十九歳以上はカミさんしか興味ねえだろ。どうでもいいからさつさと本題入れば」

うつむ、と鹿倉が唸った。今度は困ったような表情を浮かべている。どんなに言いにくい事でも軽く口から出す鹿倉には珍しいことだから、藤堂は嫌な顔をする。

彼が言いよどむ時は、碌な事がない。よっぽど嫌な事でない限り、彼は言葉に詰まったりしないのだ。

「それがなあ……」

鹿倉は芹香にちらりと視線を向け、坊主頭を掻いた。言いにくそうな様子だが、何故芹香を見るのだろうか。さて彼らの間に直接的な面識はあっただろうかと考えたところで、藤堂はふと気付く。彼らは幽霊屋敷での一件が終わった後、一度顔を合わせていたのではなかっただろうか。

「お前、まさかアレ……」

鹿倉は黙り込んだまま頷く。厳しい表情を浮かべていた芹香が、更に顔をしかめた。

「あの屋敷ですか」

「ああ、まあ言いにくいんだが……とにかく最初から話すよ」

鹿倉は椅子に座り直して姿勢を直し、真剣な表情を浮かべた。藤堂の腕に抱きついていたゆなが、彼から離れて真っ直ぐに立つ。明は唇を引き結んで聞く姿勢を取り、渚は表情を険しいものへと変えた。それぞれに明白な緊張の色が窺える。

どこことなく、空気が重い。藤堂は、知らず緊張している自分に気付く。心持ち居住まいを正しながら、灰皿の上で煙草を弾いた。

「あれからあの屋敷、結構報道されるようになっただろ。幽霊屋敷の実態を探れ！ とか」

鹿倉の問い掛けには、芹香が頷いた。

「鳳を辞める前、私の方にも見てくれと依頼がありました。流石に断りましたが」

「やめとけって言ったんだけどなあ。それからテレビ効果で、観光客が増えてな」

藤堂はテレビをあまり見ないが、渚がその件に関してばやいていたように思う。報道するのはいいが、折角静まっている霊を刺激するようなことは、しないで欲しいものだ。

「いいことじゃねえか」

「そうそう、うちの商店街も土産物出したりして売り上げが倍増……て、そうじゃねーよ」

鹿倉に突っ込まれ、藤堂は軽く肩を竦めた。手元で燻っていた煙草の火を消し、新しいものを取る。何か言えばすぐに乗ってしまう辺りが、鹿倉らしい。お陰で藤堂の緊張は解けた。

ああいった場所が報道されるのは、悪い事ではないようだ。地域住民のみならず、近隣地域に住む人々への警告にもなる。観光客等も馬鹿ではないから、そういった有名心霊スポットへ行く時は、きちんと陰陽師から札を買って行くようだ。単純に、地域の活性化にも繋がる。

ただ渚がばやいていた通り、悪霊が大勢居る場所に連日人が押しかけると、霊達が騒ぎ始める。あの屋敷には元々悪霊ばかり集まっていたから、霊の力が強くなりすぎて、封印が緩んでしまう事もあるようだ。彼女は、それを懸念していた。

一つ咳払いして、鹿倉はカウンターに身を乗り出す。藤堂は近付いた熊のような顔を避けて身を引いたが、明は身構えた。こちらも渚と同じく、真剣な表情を浮かべている。

「あのな、どうも誰かが剥がしちまつたらしいんだ。札を」

芹香が大きく目を見開いた。しかし彼女が何か言う前に、渚が両手でカウンターを叩く。その勢いと店中響き渡った音に、鹿倉が驚いて肩を震わせた。

「有り得ませんわ！」

細い眉をつり上げて金切り声を上げた渚を横目で見てから、芹香は頷いて同意を示す。藤堂には、芹香はともかく渚が憤る理由が分からなかった。

「鳳の陰陽師が使う札は全て、高屋敷家から譲り受けたものです。

社内で作成したものを使う事もありますが、あの屋敷には高屋敷本家から頂いた特別強力な札を使った上、簡単には剥がれないよう守をかけてあります」

「鳳に委託する札を書くのは、お父様よ！ あの護符が、たかが観光客に剥がせる筈がありませんわ！」

俯いたまま顔をしかめていたゆなが、首を捻った。藤堂も怪訝に眉根を寄せる。

「くさいですね」

渚の剣幕に気圧されていた鹿倉がゆなに向き直り、大きく頷いて見せた。

「そう、仮にもプロがやった事だろ。一介の観光客に剥がせるワケがねえと、町内会でも疑問の声が出たんだよ。でも実際、札は剥がされてる。霊障が始めてんだ」

渚は唇を引き結んで、俯いた。実際のところ彼女が父親をどう思っているのか、藤堂は知らない。しかし先程の様子を見る限り、少なからず尊敬してはいるのだろう。それなら、動揺しても無理はない。

渚にしても芹香にしても、耳が痛い話ではあるだろう。彼女達のせいではないにしろ、お互いの元の所属先が行った事を、否定されたのだ。黙り込んだまま口を開かない明も、彼女らの心情を察しているのかも知れない。

「だからな、こう考えた。鳳の中の誰かが、剥がしたんじゃないかと」

芹香が更に表情を硬くした。何も言わない所を見ると、否定出来ない根拠はあるのかも知れない。

彼女が会社を辞めた理由を、藤堂は知らない。聞いたが結局濁されてしまったので、聞けず仕舞いだった。

しかし藤堂は邪推する。芹香のこの反応が、辞めた理由に繋がっているのだとしたら。鳳内部で何かが起きていたからこそ、彼女が退社する道を選んだのだとしたら。

鳳は一体、何をしようとしているのだろうか。

「札を剥がせば幾らでも、また依頼が来る。自作自演で幾らだって稼げんだろ。……あんまりこういう邪推すんのは好きじゃねえんだが、そうとしか考えらんねんだよ」

鹿倉は、きつく拳を握っていた。被害を受けている身からすれば、耐え難い事だろう。子供の頃ならまだしも、大人になって丸くなつた彼が、猜疑心を持ってしまうほどに。

「そんな事……そんなにお金欲しいの？ 馬鹿げてますわ」

「人間てなそういうモンだよ。幾らだつて金が欲しいのさ」
それが真実であるのかどうかなど、今この場にいる誰にも分からない。会社から離れた芹香にも、判断は出来ないだろう。

しかし藤堂は、無性に腹が立った。安っぽい正義感から来る感情ではなく、友人が横暴による被害を受けている事に対して、言い得ぬ苛立ちを覚えた。

そんな自分を、客観的に見ている部分もある。苛立ちを覚える事で、自己満足に浸っているのではないかとさえ思う。少しでも変わることが出来たと、勝手に思い込んでいるだけではないのだろうか。それでも困っている鹿倉の助けになつてやりたいと思うのは、事実だった。

「そんで、うちに来たワケか」

鹿倉は躊躇いがちに頷いて、亀のように首を竦めた。断られると思つたのかも知れない。受けてやりたいのは山々だが、不安ではあつた。

藤堂は隣の芹香に目を遣る。彼女は視線を受けて、しかめていた表情を真顔に変えた。

「鳳にいた頃は、上の者の都合が付かず手を出せなかった。だが、今ならこれだけ実力のある者がいる。なんとかなるだろう」

芹香はそこで言葉を止めて、明と渚を見た。二人は藤堂へ期待に満ちた眼差しを向けている。

結局、最終的な判断は藤堂に任されるのだ。判断を任せられた所で、どうせ藤堂は何もしないのだが。

「……お前ら、やれる？」

渚が大きく頷いた。明は満面の笑みを浮かべて見せ、同じく首を縦に振る。

「勿論！」

「ゆなも行きます」

藤堂は鹿倉に向き直り、唇の端を上げた。

「請ける」

心底安堵した表情を浮かべ、鹿倉はカウンターに両手をついて深々と頭を下げた。

第六章 交錯する記憶 五

鹿倉からの依頼を請けた翌日。被害が出始めているなら早い方がいいと明が急かすので、早々に幽霊屋敷へ行く事となった。藤堂はあまりの唐突さに閉口したが、渚と芹香は予想していたようだ。すっかり準備して来ていた辺りは流石と言えるが、明の発作的な行動に慣れるのも考えものだ。

元来出不精な藤堂は同行を嫌がったが、足として連れて行かれる事となった。今回は高屋敷から譲り受けた破魔銃があるからまだ気が楽だが、それでも店を空けるのはどうかと思う。単純に、暑い中外へ出るのも嫌だった。

前回同様、連れて行かなければ舌を噛んで死ぬと騒ぐので、渋々ゆなの同行も了承し、結局総出で現場へ向かう。渚はそちらも想定していたようで、事前に作って来た護符を、ゆなのヘルメットに貼っていた。至れり尽くせりだが、少しはゆなを止める方に頭を回して欲しいものだと、藤堂は呆れる。

藤堂の運転で現場に向かう一行は、一様にして表情を硬くしていた。それぞれ何を考えているのか藤堂には読めないが、単に緊張しているだけなのかも知れない。

緊張もするだろう。あの屋敷が尋常でない事は、靈感がない藤堂でさえも、前回訪れた時に理解した。仮にもプロの退治屋が十人ばかりでもどうにか出来なかつた場所にたつた五人、執事を含めて六人だけで、立ち向かおうと言うのだ。実質二人は役に立たないから、甚だ無謀とも思える。

屋敷周辺には、相変わらず通行人はおろか、猫の子一匹見当たらない。朽ちかけて蔦が這つた塀に寄り添うように車を停めると、真っ先に明が外へ出た。制服のプリーツスカートを風に靡かせ、屋敷を見上げる彼女の表情は、未だに硬い。抜き身の刀が、熱い太陽光を受けて尚冷たい光を放っていた。

「随分と喧しいな」

続いて車を降りた芹香が、明の横へ立つ。すらりとした長身を黒のライダースーツに包んだ彼女の横顔は、普段と変わらず凜々しかった。邪魔になるのを懸念して纏めたのだろう、高い位置で括られた銀髪は、燦々と輝く太陽の光を反射して、機械のように煌めいている。

「とりあえず、敷地内を見てみましょうか？」

既に札を取り出していた渚は、言いながら軽くそれを振った。筋骨隆々の執事が、札から窮屈そうに這い出してくる。渚は傍らに畏まった執事を一瞥し、尖った顎で屋敷を示した。繊細に煌めく金髪が、ふわりと揺れる。

「必要ない。どうせこの屋敷にいるのは、生前重ねた悪行によって悪霊化した、救いようのない霊ばかりだ」

凜とした声は、普段より少し硬かった。芹香でさえ緊張しているのだろうかと考えつつも、藤堂は横目で彼女の見事な肢体を盗み見る。切れ長の目が車の中を向いたので、慌てて視線を逸らした。

「……ゆなは、本当に大丈夫なのか？」

のそのそと車から出てきたゆなは、芹香を見上げて大きく頷いた。渚の札が追加されたヘルメットは、普段より一回りほど大きく見える。華奢な首は、大きなヘルメットを支えているだけで折れてしまいそうだ。

「ホントにそんなんしかいないの？」

藤堂は車をロックして、煙草に火を点けながら屋敷を見上げる。

前回来た時同様気味の悪い空気が漂っているが、前のような不安感はない。仲間が多いせいなのか、自分自身に護身の術があるからなのか、自分でも分からなかった。

芹香は両手に黒の革手袋を嵌めながら、藤堂の問いに小さく頷く。革のライダースーツでは暑くないのだろうかと藤堂は思ったが、動きやすい方を選んだのだろう。セーラー服で飛び回る明よりは、賢明なのかも知れない。何より目の保養になる。

「本業の方の事務所に、田舎のヤンキーが屯したりはしないだろう。引き寄せられているとは言っても、向こうもその辺りはちゃんと選んでいる」

「ああ、なるほど」

藤堂は妙に納得した。

「ただしその分、こちらは暴力的ね。侵入者には容赦しませんし、ほぼ確実に、好戦的に形が変わっておりますわ。何をしてくれるか、見当もつきません」

「あの霊喰いと同じようなものですか」

渚とゆなが補足すると、ふうんと鼻を鳴らし、藤堂は煙草を弾いて灰を落とす。

「そりゃ危ねえな」

呑気な藤堂に、渚が溜息を吐いた。

屋敷を見つめたまま黙っていた明が、唐突に錆びた門扉を開け放った。鉄製の扉が軋む嫌な音がする。

「とにかく突撃！」

「あい」

表情を引き締めて宣言した明の言葉に反応したのは、相変わらずゆなだけだった。明を先頭に敷地内へ足を踏み入れると、重苦しい空気が全身に纏わりつく。

心なしか、足が重い。地面はからからに乾いているし、コウがしがみついている訳でもない。気持ちの問題なのだろうと思ったが、それでも一步踏み出す度に、全身に鳥肌が立って行く。小さく舌打ちを漏らし、藤堂は吸いさしの煙草を携帯灰皿にねじ込んだ。

服の裾を握ったままついてくるゆなの表情は、流石に硬かった。渚と執事も緊張した面持ちだが、明と芹香には気後れした様子もない。来たからにはやらなければならぬと腹を括っているのか、単に肝が据わっているだけなのか。しかし明も前回はかなり怯えていたから、仲間がいるという安心感があるのかも知れない。

「藤堂さん、いいんだよ。車で待ってても」

扉に手を掛けたところで、思い出したように藤堂を振り返った明が、不安そうな面持ちでそう言った。

「ああ、まあ、ここまで来たから」

眼鏡を掛けながら返答すると、明は一瞬、驚いたように目を丸くした。素直に従うと思われていたのだろう。

確かに、藤堂が中まで入る意味はない。何の役にも立たないし、下手をしたら、また霊の記憶を見ってしまうかも知れない。

しかしこんな寂しい所に一人で待っているというのも、些か不安だった。何より黒江夫妻から娘を預かっているという責任感もあるので、一人で安全圏に留まっているのも憚られる。

「……そっか」

明が少し、笑ったように見えた。彼女は改めてドアノブに手を掛け、力を込めて握り締める。明の肩に力が入り、渚が身構えた。明は一つ息を吐いた後、両開きの扉を一気に開け放つ。

室内から流れ出した黴臭い空気をまともに吸い込んでしまったように、渚がむせた。淀んだ空気を厭うてか、明も両の目を細めて僅かに身を引く。

目の前には、広々とした玄関ホールが広がっていた。蜘蛛の巣と埃に塗れた大きなシャンデリアが一つ、高い天井から下がっている。ホールの左右に扉が一つずつあり、正面には中二階へ上がる階段が設えられている。内装は高屋敷家とそう変わらないが、向こうより規模が小さい。

灯りのない室内は、割れた窓から入り込む光だけで、仄かに照らされている。明が一步屋内へ足を踏み出すと、色褪せたカーペットから砂埃が舞った。

「カビ臭いですわ」

渚の口から、不満の声が漏れる。廃墟と化した室内には見る限り何もいらないようだが、何かの気配だけは、藤堂でさえ肌で感じられる。醜えた臭いに顔をしかめて思わず顔を背けると、肩にコウがしがみついているのが見えた。

コウは小さな唇を引き結び、玄関ホールを睨みつけていた。季節は夏だというのに、外からの光があまり入らないせいか、空気が冷えている。寒気とも嫌悪感ともつかない感覚が背筋を這い上がり、藤堂の全身を震わせた。

「こつちに出てきたのです」

ゆなは、藤堂の腕を抱き締めていた。小さな手に力を込め、更に強く縋りつく。一番勦が鋭いのは、彼女なのかも知れない。

壁といわず天井といわず、至る所から半透明の霊がゆつくりと出てくる。体のパーツをバラバラに繋ぎ合わせたような姿のものもいれば、殆ど人間のままの姿を保っている者もいた。中二階の壁をすり抜けて出てきた巨大な髑髏の顔が、大きな口を開けて笑う。

「藤堂さんもゆなちゃんも、そこから動かないでね。思ってたより多いかも」

明は体の前に刀を構え、硬い声を背後の二人に掛ける。ゆなは無言のまま頷いたが、藤堂には動く気もなかった。

「個々の力は大した事ありませんわ。集合霊ではないだけ、マシかも知れませんか」

渚の前に、執事が進み出た。鋭い双眸が、次々と現れる霊を威嚇するように細められる。彼は両手を組んで指を鳴らし、静かに拳を握った。筋肉質な腕に、太い血管が浮く。

真つ直ぐに前を見つめていた芹香が、手袋の端を摘んで嵌め直した。革の手袋が、僅かに光る。彼女の凜とした横顔が、藤堂の目には楽しそうに見えた。

「殲滅する」

短く呟いた芹香の声が合図だったかのようになり、渚以外の三人が一斉にホールの中央へ飛び出した。大きく口を開けた髑髏を、明が勢い良く刀を横へ振って一刀の下に斬り捨て、刃の向きを変える。そのまま柄を両手で持ち替えて頭上へ振り上げ、掴みかかろうとする黒い腕を鋼の刃で弾き返した。半透明の霊体は、銀色の燐光を放つ刃に触れた瞬間、霧散して消え失せる。

明の背後へ、赤茶色の煙のような霊が音もなく迫って行くのを、片端から霊体を殴り飛ばして抹消していた執事が見咎め、軽々とそちらへ向かって飛び上がる。緩慢な動きで明の背に触れようとした煙に猛然と突っ込み、上方から肘鉄を食らわせた。

着地した執事はすぐさま体の向きを変え、明と背中合わせになる。二人は肩越しに目配せして、迫り来る霊をそれぞれ跳ね除けながら再び駆け出していく。祐子の一件で共闘して以来、彼らは時折妙に息の合った動きを見せるようになっていた。

大拳して押し寄せる半透明の異形の群れを、黒い手刀がまとめて薙ぎ払う。埃の舞う薄闇に、幾つもの破裂音が連続して響き渡った。姿勢を低くした芹香の死角に当たる床から、常人の倍はあるうかという体格の霊が飛び出して来る。彼女は身を起こすと同時、一瞥もくれないまま霊の顔面に裏拳を入れた。

相手が一瞬よろめいた隙に、左足のヒールを軸にして体を反転させながら右足を上げ、はちきれんばかりに太った腹を蹴り飛ばす。ぱん、と風船が割れるような音がした。

「まるで相手になりませんな」

ゆなが感心したように呟いた。

「当然ですわ」

感嘆の声に返した渚は、藤堂とゆなを護るように一歩前に出ていた。未だこちらに狙いを定める者はいないが、霊媒体質のゆなに気付けられるのも、時間の問題かも知れない。その時の為に、渚は留まっているのだろう。

「芹香さんと同じやは当然ですけど、メイさんも、同業者の間ではそれなりに名の知れた浄霊屋ですもの。あれぐらいは、やってもらわなくっちゃ」

明の事は藤堂には初耳だったが、何も言わなかった。渚の言葉よりも、目の前で繰り広げられる戦闘に釘付けになる。殆どこちらが一方的に叩きのめしているような状況だが、如何せん、相手の数が多すぎる。

それでも最初よりは出てくる数が減ってきただろうかと考えている内に、床から出てきた一体が、こちらへつるりとした顔を向けた。藤堂は思わず身構えたが、明の反応の方が速かった。横から殴りかかるうと振り被った霊を袈裟懸けに斬り捨てると同時に、藤堂等に狙いを定めた者に向かって駆け出す。

しかし床から出てきた顔のない霊は、明より速かった。ほぼ一瞬で距離を詰めた霊は渚をすり抜けて行こうとしたが、彼女の札はそれを許さない。体の前に掲げた左手の平には、梵字の書かれた札が握られていた。渚の目前まで迫ったところで動きを止められた霊は、懸命に前へ進もうとする。

「無駄と知りなさい」

冷やかな声が、顔のない霊に掛けられた。右手に持った札が、目も鼻も口もない霊の顔の前に翳される。札が微かに光った瞬間霊の姿が薄くなり、空気に拡散して行った。

三人の無事を確認した明が、安堵の息を吐いたのも束の間。背後から迫る気配に気付いて反射的に振り返り、明は振り下ろされた巨大な刃物を横へ飛び退いて避けた。肘から先が鉦と化した霊はやけに大きな口を歪め、更に明に向かって腕を振る。

刀を寝かせて鉦を受け止めた明は横から迫る霊に気付き、体重をかけて鉦を押し返す。同時に、柄を軸に刃を反転させつつ、腕を伸ばしたまま得物を引き戻す。横から来た者の両腕が掴みかかるのを姿勢を低くして避けながら、胴を水平に斬った。斬られた霊はそのまま消滅したが、押し返された霊はすぐさま体勢を立て直し、空中へ飛び上がる。

明の反応が、一瞬遅れた。苦い表情を浮かべた彼女は刀の向きを変えて迎撃の姿勢を取ったが、頭上へ振り下ろされる鉦は、横から飛び込んで来た芹香の拳に叩き折られた。同時に本体も消える。

芹香は着地すると同時、天井から恐ろしいほどの速さで落ちてきた霊を見て口角を上げる。避ける素振りもない彼女が頭上へ拳を翳すと、勢い付いていた霊はそのままぶつかって弾け飛んだ。

その間に明が芹香から離れ、執事を囲んでいた霊の群れを纏めて斬り捨てる。執事は狼の如く鋭い双眸を周囲に巡らせ、太い腕を伸ばして大きく振り、明の取りこぼしを薙ぎ払った。

床からせり出した頭を無造作に踏み潰し、芹香は横から繰り出された巨大な拳を、背中を反らせて紙一重で避ける。風圧で靡いた髪が僅かに切れたが気に留めることもなく、拳を突き出したまま目の前を通り過ぎようとした霊の喉元に、手刀を叩き込む。破裂音と共に、霊が消滅した。

「減ってきたな」

両手側から迫ってきた霊の片方に弾丸を撃ち込みながら、藤堂は呟いた。もう片側を破魔札で抹消しながら、渚が頷く。

「ここに屯している霊が多いと言っても、無限じゃありませんもの。……あら？」

渚が何かに気付いたように、ふと背後の二人を振り返った。ゆなはつられて後ろの扉を見て、そこから出てきた霊を見て目を見開いた。

巨大な肉の塊のように見える霊は、指のない手を藤堂とゆなに向かって突き出す。藤堂が銃を構えたが、それより早く、霊の両腕が二人を捕らえた。渚が慌てて札を投げたが、二人を一緒くたにして腕の中に抱きこんだ霊は、見た目からは想像もつかないような素早さでそれを避ける。

「ちよ、何だよコレ……！」

動揺した藤堂が言い終わるより早く、その全身が肉の塊に包み込まれる。渚の悲鳴に振り返った芹香が、一気に青ざめた。

「藤堂！ ゆな！」

ゆなは悲鳴を上げること出来ないうまま、肉の塊に吞まれた。異変に気付いた明が、即座に駆け寄る。しかし二人を体内に収めた肉人はその場で飛び上がり、天井へ吸い込まれるようにして消えた。

第六章 交錯する記憶 六

これは私の、悲願だった。かねてから、この屋敷だけは、なんとかしたいと思っていた。だから今ここに立つだけの力を持てた事、肩を並べられる仲間がいる事、それが誇らしい。

誰かの役に立ちたい。迷える霊を救ってやりたい。今を生きる人の為に、持てる力を使いたい。その気持ちだけが、今の私を動かしている。

誰かを救うということは、容易ではない。手を差し伸べたつもりでその実、更なる深みへ落としている事さえある。それが原因で、誰かが傷付くこともある。私は感情の赴くままに行動してしまうから、特にその傾向が顕著だ。

最初は深い虚を抱えたあの人を、助けてあげたいと思った。恐らく彼は、私の最初の望み通り立ち直ってくれた。けれど彼自身ではなく、周りの環境が変わりすぎてしまった。変わらなくとも、彼の心は真つ直ぐだったというのに。

私が悪い。何故止めなかったのか、それだけがただ、悔やまれる。身を引き裂かれるような衝撃だった。

あの人は、恐らく最初から気付いていた。彼の孤独にも、何ものにも染まらない心にも。だから、彼を想った。

私もそうだった。純粹だからこそ変わって行く彼を、近くで見えてあげたいと思った。けれど私だけは、彼を想ってはいけない。

何かに執着してはいけない。それは何よりも罪深い事で、結局自分自身が抱いた感情とは別物だからだ。

それでも、私は苦しい。

明は掴みかかろうとする霊を振り払い、中二階へ駆け上がる。執事がその後を追いかけようとするが、渚の怒声に止められた。

「軽拳妄動は慎みなさい！」

びしゃりと渚に叱咤され、明は階段を上ったところで立ち止まった。気ばかりが急いで、何も考えられない。頭の中が真っ白になっていた。

渚は札を胸に当てたまま、ゆっくりとホールを進む。除霊の札なのか、湧いた霊は誰一人として彼女に近付く事が出来ず、二の足を踏んでいた。その内何人かは結局、呆然と立ち尽くす芹香へ向かって行く。

芹香は動かなかった。微かに唇を戦慄かせ、拳を握り締めている。渚と執事が慌てて駆け寄ろうとしたが、到底間に合わない。凍り付いたような無表情を保つ横顔に、拳が迫る。

明が悲鳴を上げた。瞬間、芹香は色素の薄い瞳を肉迫した拳へ向け、頬に触れる寸前で、掌を顔の前に翳す。床を這って近付いてきた霊の頭を踏み潰し、掌に当たった拳を握り込む。冷めた視線を向けられた霊の動きが、止まった。

「失せる」
握り締められた半透明の拳が、割れた。間髪容れずに手刀を叩き込まれた霊は、大きな音を立てて破裂する。

ああ、怒ったのだ。明は芹香の様子を見て、そう思う。

芹香は渚と執事が中二階へ上がるのを待って、追いつがる霊を階段下へ蹴落としてから、明に大丈夫かと声を掛ける。自分はひどい顔をしていたのだろうと、明は頷きながらそう思う。

「私の札は、効かなかったのかしら」

「耐性が出来ていたのかも知れんな。お前の札は、父親のものと同じ方が一緒だろう」

中二階へ上って来ようとする霊を振り払いながら、芹香は左右に一つずつある扉を交互に見た。

「しかし、ここの構造が分からんと追い掛けようがないな……」

「二手に分かれましょう。じいや、行きますわよ」

渚は迷うことなく左側の扉を開き、執事を促した。彼は飛びかかってきた霊を振り切って、渚が開けた扉へ駆け込む。

二人が入った先を確認しないまま、明は反対側の扉を開いた。目の前に現れた霊に驚愕して一瞬動きを止めたが、慌てて右手の刀で刺し貫く。霊が消えたところで、明は肩越しに振り返って芹香を呼んだ。

「芹香さん！」

ホールにいる霊の数は、今や当初の半分にも満たない程まで減っている。生者と見れば見境なしの悪霊も、流石に抹消されるのは嫌なのか、ホールから悔しげに見上げる者も少なくはなかった。

中二階に残った最後の一人を手刀で抹消してから、芹香は扉の中へ入った。

扉の向こうには、更に廊下が続いていた。左右にずらりと扉が並んでいるものの、何かが出て来るような気配はない。不気味な程の静寂に、明は気後れしてその場に立ち竦む。

「メイ、大丈夫だ。藤堂もゆなも、そう簡単にくたばりはしない」その言葉には、何の根拠もない。しかし明は、芹香の浮かべた微かな笑みを見て、幾分気が楽になった。この人が一緒なら大丈夫だと、この人が言うなら必ず二人は無事していると、そう思う。

明が大きく頷くと、芹香は先立って廊下を歩き始めた。静寂に包まれた廊下に、ヒールの硬い音が響く。明にとっては、何が出るか分からないという恐怖より、焦燥感の方が強かった。早く行かなければ、彼らがどうなるか分からない。

それにしても何故、彼らを連れて行く必要があったのだろうか。確かに無抵抗なのは藤堂とゆなだけだが、捕らえる必要があるとは、どうしても思えなかった。

「何が目的なんでしょう」

芹香は肩越しに振り返り、緩く首を左右に振った。

「さてな。この分では、向こうも同じ造りだろう。上で落ち合えればいいが」

その返答に、明は違和感を覚えた。ふと見ると、芹香の手がきつく拳を握っている。

心配なのだろう。あれほど明白な怒りを露わにした彼女は、今まで見たことがなかった。芹香は藤堂とゆなを攫った霊よりも、止められなかった自分自身に憤りを感じているのかも知れないと、明は考える。彼女はそういう人間だ。

芹香は今まで、あの会社でどのように過ごして来たのだろう。何を守ってきたのだろう。会社を辞めた理由を聞いた事はないが、おぼろげながら内情を知る明には、大体の想像がつく。

恐らくいつかは、鳳という大企業を相手取る事になる。芹香は黙して語らないが、明にはそんな気がしてならなかった。彼女が退社の理由について何の説明もしないということは、言えない訳があるということだろう。

芹香があれほど入社を渋ったのは、恐らくそれが理由であると、明は思っている。この小さな事務所の少ない人数で、鳳相手にまともに立ち回れるとは、確かに思えない。それでも、最終的に入社を決断してくれたのは、きつと、認めてくれたということなのだ。

いつまでも、芹香に助けられている訳には行かない。今は背中を追いかけただけの立場だが、その時は。

その時には必ず、この孤独な人を、護りたい。

「主が上げるなど言っているんだよ」

考え事をしていた明は、突然聞こえた声に驚いて肩を竦めた。芹香が俄かに緊張した気配を見せる。

「よくものこのこと来れたもんだね、堤と知恩院の娘が」

廊下の突き当たりには割れた窓があり、左右には上りと下りの階段が設置されていた。窓から差し込む光が、薄暗い階段を照らし出している。

上り階段の手前に、声の主はいた。骨と皮ばかりになった痩せた体に、白いワンピースを纏った半透明の女は、長い前髪の隙間からぎよろりとした目を二人に向けている。その目に見られた瞬間、明は寒気を覚えて身を竦めた。

「あんた達の親はあんた達とおなじように、ここへ来たよ」

芹香の表情が硬くなる。明はよもやこの女がとも思ったが、見る限り、そう長く現世にいるようにも感じられない。

除霊屋だった明の両親は、ここで死んだ。爆発的に霊の数が増えたのはごく最近の事とは言え、両親が存命だった頃から、ここには主と呼ばれる化け物じみた悪霊がいた。何人もの除霊屋がここを訪れ、死んだという。この屋敷の場所を知る除霊屋がとうとういなくなった頃、住人は諦めた。

その頃はまだ、鳳コーポレーションもそう大きな企業ではなかった。力のある退治屋といえば高屋敷家だったが、彼らも一度、この除霊を諦めていた筈だ。

「ああ、似てるねあんだ。母親そっくりだよ……確か、暮羽くれはと言ったかな？」

女は濁った暗い目で、じっと芹香を見ていた。どことなく不安感を煽られるその視線を受け止める切れ長の目が、徐々に驚愕に見開かれて行く。放たれた言葉に驚いたのかとも思ったが、その割にはゆっくりとした動きだった。

明は怪訝に芹香を見ていたが、ふと、穏やかならぬ噂を思い出した。改めて女を見て、その姿を確認する。濁った女の目から明らかに異質なものを感じ取って、懸念を確信に変えた。明は慌てて芹香の腕を掴み、体ごと揺さぶる。

「見ちゃダメ！ 幻覚だよ、真実じゃない！」

聞いた事がある。目を見つめることで幻覚を見せ、対象が自失している隙に、ゆっくりと魂を引きずり出して食らう霊がいると。まさかこれがそうとは思いつかなかったが、青褪めて行く芹香の様子を見る内、そうとしか考えられなくなった。

しかし明に、止める術はなかった。気付くのが遅すぎたのだ。紙のように白い顔をした芹香は、目を見開いたまま微動もしない。明は悔しげに唇を噛む。

こうなったらもう、視界を塞いでも無駄だろう。自力で立ち直らせるか、幻覚を遮断するか、どちらかしか方法はない。

こついつた霊を相手取るなら、技術に富んだ陰陽師である渚の方が適している。消してしまえばいいという話ではない。一度幻覚を見せられたが最後、それに囚われて、心神喪失状態から永遠に抜け出せなくなる可能性さえある。

芹香はよろめくように壁に凭れ、とうとう頭を抱えた。一つに結ばれた髪が背中当たって広がり、肩を隠す。深く俯いているせいで表情は見えないが、明はその仕草を見て青くなる。女が嘲笑した。「幻覚じゃないよ。真実だ」

明には、芹香が何を見ているのか分からない。止めなくてはいけない。そう思うのに、体が竦んで動けなかった。女から放たれる、寒気を覚えるほど強い怨みの念に、圧倒される。

この女の深い怨念は、一体何なのだろう。何をこつまで怨んでいるのだろう。霊の記憶が見える藤堂なら、分かったかも知れないのに。

しかし悩んではかりもいられない。明が迷うと、この刃は通じない。迷えば斬れなくなってしまう。

「大人しくしていた方がいいんじゃないの？ 私の目を見たら、あなたは永遠に囚われてしまうよ」

明は女の顔から視線を逸らして、下を向いた。意を決して刀を握ったが、視線を落とした所でふと気付く。

女の手首の内側に、傷があった。ミミズ腫れのような浅いものから深く抉れたものまで大小様々だったが、正常な肌が見えないほど、多くの傷跡が残っている。間違いなく、自傷した痕だろう。余程深い思い入れのあるものでない限り、霊体に傷は残らない。

女の深い怨念の理由が、分かった。具体的に何を怨んでいるのかは分からない。けれど自傷というのは概ね、追い詰められた末に生を実感する為の行為だといわれている。

悪霊の能力は、自身の怨みや執着の矛先によって変わる。幻覚を見せるといって稀有な能力を併せて考えると、怨んでいるのは記憶の中の何かに違いない。

彼女は、傷ついたのでだろう。そうするまでに至った経緯は分からないが、自殺で死んだのだとするなら、彼女は真実悪人ではなかったことになる。

幽世において、自殺は大きな罪であるとされている。自ら命を絶つのは摂理に反することであり、幽世への道すら開かれないうまま、死んだ瞬間悪霊となる。自殺者の霊が浮かばれずに現世に囚われるのは、その為だ。

だからこれなら、浄化できる。救う事が出来る。

明は刀の切っ先を、女の目の前に突きつけた。視線を僅かに上げ、女の口元だけを見る。ひび割れた薄い唇は、弧を描いて笑みを浮かべていた。

「あなたに私が切れるの？」

「斬らない。あなたを浄化する」

女の含み笑いが聞こえた。それが怨嗟の声のようにも聞こえ、明は顔をしかめる。

「私を直視出来ないあなたに、そんな事が出来る？」

「……あなたは深い虚を抱えたまま死んだ」

女は切っ先を避けないまま、黙り込んだ。目を合わせる事が出来ないで表情は見えないが、何も言わない女に、明は改めて確信付く。そして更に、言葉を続ける。

「幻覚はあなた自身の心の闇。深く悲しい記憶。あなたは闇に侵されて死んだ。……自殺だったんだね」

言い終わるか終わらないかの内に、女の姿が突然消えた。明は慌てて振り返る。

「やめて！」

女は壁に縋るように凭れた芹香の、目の前にいた。肩で息をする彼女は、何の反応も示さない。

あの人を失いたくはない。女を抹消するのも嫌だ。けれど、迷ってはいられない。迷っていれば芹香は食われ、刃も通じなくなってしまう。明は悲痛に表情を歪め、女に刃を向ける。

女が大きく口を開いた、その瞬間。芹香が勢い良く顔を上げて彼女の腹へ腕を回し、しっかりと腰を掴んだ。硬直する女の体を明の方へ向かせ、芹香は短く告げる。

「メイ、やれ」

何故、という疑問は、その力強い声にかき消された。明は大きく頷き、女の額に切っ先を向ける。女は身動き一つ取れないまま、悪鬼の如き形相で明を睨んでいた。

「死後どんなに悪い事をしたんだとしても、あなたはもう救われていい。あなたが食べた魂も、一緒に送るから」

女の顔付きが変わった。戸惑うように視線を彷徨させた後、深くうなだれて、緩く左右に首を振る。

救われたくない人はいない。明は女の額に切っ先を埋めながら、そう考える。どんな悪霊であろうと、必ずそうなった理由がある。人が性根から悪であると、信じたくなかった。

女の腕に走った傷跡が、徐々に消えて行く。芹香は目を伏せて、薄くなって行く女を見つめていた。

「生きてても死んでからもいい事なかったけど、生まれ変われるんなら、次に期待するよ」

「次はきつと、いい事があるよ」

女の口元が、かすかに笑う。その唇が更に動いたような気がしたが、声までは届かなかった。

明は女が消えた後も、暫く俯いたまま神秘的な表情を浮かべていたが、唐突に顔を上げた。

「なんで平気だったんですか？」

明は芹香を見上げて眉根を寄せ、そう聞いた。芹香は困ったように顔をしかめる。

「母はここへは来ていない」

え、と呟くと、芹香は苦笑した。

「暮羽は私の伯母だ。私が産まれる前に、ここで死んでいる。顔も知らなかった。確かに少し、似ていたがな」

明は啞然とした。あれは演技だったというのだろうか。まんまと騙された。

「さあ、先を急ごう」

流石は鳳一の退治屋と言うべきか。何事もなかったかのように、芹香は階段を上って行く。明はしばらく一歩踏み出す度に揺れる彼女の銀髪を眺めていたが、ふと我に返り、慌ててその背を追いかけた。

第六章 交錯する記憶 七

あの時は、もう駄目だろうと思った。何故こんな事になるのかと、不幸ぶつて嘆いてもいた。まさか彼らが来るなどとは、露ほども考えていなかったのだ。あまりにも、私は愚かだった。そんな自分を、深く恥じた。

同時に、嬉しかった。今まで友人も仲間も作らず一人で仕事をしてきた私にとって、誰かに助けられるなど、考えてもみない事だった。気恥ずかしくも有難くもあつたが、一番に、彼らに感謝したかった。けれど私は、素直に礼を言うことが出来ない。そんな自分が、齒痒く思えた。

彼らには、とても大事なことを教わった気がする。彼らは私を許し、手を差し伸べ、友人と呼んでくれた。だから今、私は私に出来る事をしたい。礼を言えない代わりに、私に出来る限り、彼らの為に尽くしたい。

今度は必ず、私が助ける。

執事は、長い廊下の左右に並ぶ扉を一つ一つ開けて確認しながら進んでいた。渚はその様子を横目に見ながら、逸る気持ちを抑える。二人は無事であるだろうか。無事でいてくれなかったら、事務所はどうなってしまうだろうか。ばらばらになってしまうのだろうか。そんな悪い考えばかりが頭に浮かぶ。

「じいや、部屋の中になんて階段はありませんわ」
執事は渚を振り返り、申し訳なさそうに頭を下げた。もしかしたら、彼も慌てているのかも知れない。そう思うと、少しほっとする。不安なのは自分だけではないのだと考えると、少しは気が楽になった。

しかし、安心してのんびりしてもいられない。暗闇の向こうにぼんやりとした明かりを見付けて、渚は歩調を速めた。

「やっと突き当たりかしら」

執事が頷く。そのまま近付いてみると、呆気なく廊下の突き当たりに出た。壁の手前、左右に上りと下りの階段が設えられている。明かりは外からの光だったようで、渚は僅かに開いた窓を眩しそうに見てから、上り階段のある右側を向く。

渚は迷うことなく階段を上ったが、執事は下り階段を覗き込んで顔をしかめた。階段の途中で肩越しに振り返った主に気付くと、彼は下り階段を気にしながら渚の後を追う。

「何かありませんか？」

執事は首を左右に振った。何かあったのだとしても彼には伝える事が出来ないから、どちらにせよ渚には分からなかっただろう。何より天井に吸い込まれて行ったのだから、下にいるはずはない。下に何かあると、まずは彼らを助ける事が先決だ。

一歩足を踏み出す度に耳障りな音を立てる階段は、渚には恐ろしく長く感じられた。彼女は碌に階段を使った例がないので、どんなに短いものでも長く感じてしまう。元々体力もない。

それでも、ここで引き返すわけには行かなかった。藤堂もゆなも、渚にとつて、なくてはならない人間だ。大事な、友人なのだ。彼らが危ないのだと思うと、とても立ち止まる気にはなれなかった。

運動など、最後にしたのはいつだったろう。子供の頃から、滅多に外へ出たりはしなかった。心臓の音が煩いほどに響き、足が鉛のように重たく感じられる。頭が熱くて膜がかかったようにぼんやりとするが、泣き言を言ってもいられない。

ようやく上階が見えてきた時、歩みの遅い渚の後ろをゆっくりとついて来ていた執事が、歩調を速めた。何か上にいたのだろうかと考えながらも、渚は確認する事も出来ずに疲れた息を吐く。あと少しの距離のはずが、永遠に辿り着かないように思えた。

主を追い越して行った執事は早々と階段を上りきり、正面を睨み付けていた。逞しい肩が怒り、二の腕の筋肉がはちきれんばかりに膨れ上がっている。

階段を上りきった先には、あの肉人がいた。執事はあれを睨んでいたのだらう。大きな両開きの扉を塞ぐように、霊は微動だにせず立ち尽くしている。

醜悪な霊だった。辛うじて人の形を残してはいるものの、丸い顔には目も鼻も口もない。たっぷりとした肉の塊が折り重なっているだけのようなその姿に、渚は思わず眉を顰めた。

「二人はどこにいるの？」

指のない手が顔をまさぐり、垂れ下がった肉を捲り上げた。そこには肉に埋もれてぽっかりと穴が空いており、微かに動いている。口なのだと認識して、渚は寒気を覚えた。

「又シんとくにおる」

奇妙な声だった。高いような低いような、くぐもった聞き取りにくい声だったが、辛うじて言葉の意味は分かった。きつとあの扉の向こうに、藤堂とゆなはいる。

「又シつて、主の事かしら」

この屋敷の霊は全て、主と呼ばれる悪霊が統率している。四十年程前に日本一と謳われていた除霊屋が、主の手によって殺されてからは、全ての除霊屋がこの屋敷から手を引いていた。高屋敷家の人間も一度はここへ来たようだが、結局手も足も出ずに逃げ帰ってしまったのだと聞いている。

それでも、当時は屯す悪霊の数も少なかったのだという。街全体に影響を及ぼす程霊が集まり始めたのは、ごく最近の事だ。

今の除霊技術は、昔より遙かに進歩している。統計的には個々の靈感の強さも、かなり上がってきているようだ。だからこの少ない人数で、ここまで辿り着けたのだらう。

渚がテレビ局からの依頼を請けたことには、力を世間に認められた事が嬉しかった以外に、もう一つ理由があった。昔の除霊屋が戦った霊というものの力を、見てみたかった。そして今現在の除霊技術がどれだけ通じるのか、試してみたかったのだ。

「その向こうね。お退きなさい、邪魔よ」

「通せない」

執事が一步、肉の塊に近付いた。俄かに空気が緊張する。渚は人差し指を霊へと向け、短く告げた。

「消しなさい」

執事が駆けた。相手との距離を一気に詰め、握り締めた拳を弛んだ腹に叩き込む。肉人はしかし、動かなかった。確実に当たったと思われた執事の拳は腹の肉に埋もれるだけで、何らダメージを与えたようにも見えない。執事は間髪容れずに肉塊を殴りつけたが、体が揺れる以外の反応はなかった。

肉が厚すぎて衝撃が届かないのかとも、渚は考えた。しかし、そんな筈はない。実体化していない霊は即ち靈魂だけの存在だから、余程強力な霊でもない限り、殴られれば確実にダメージを負う。体がないから、防御の術がない筈なのだ。それが何故、執事の拳を受けて立っていられるのだろうか。

執事は苦い顔をして肉人の顔面を蹴り飛ばした後、一旦距離を取った。これでは手も足も出ない。明なら刀がある分、どうにかなたかも知れないと渚は思う。

しかし、明にばかり頼っている訳にも行かない。二人が来るまでには、なんとか退かしてしまいたかった。下らないプライドだが、ここに来た以上、全て誰かに任せるのだけは嫌だった。

肉人が一步も動かないのを見るや、執事は顔をしかめて再び飛び掛かっていった。指のない手が執事に向かって振り上げられるが、彼はそれを難なく跳ね除けて、再び胴を蹴り込む。腹は揺れたが、どつしりと構える霊はやはり、微動だにしなかった。

渚は胸ポケットから札を取り出し、じっと見詰めた。これが通じない事は分かっている。ゆなが易々と攫われてしまったということ、渚の札だけでなく、ヘルメットに貼られた全ての札が通用しないということなのだろう。

渚が気を取られている隙に、肉塊がようやく動いた。藤堂とゆなが攫われた時と同様、見た目からは想像も出来ない程の速さだ。

執事は全身を揺らしながら渚に迫る肉人の腰あたりを鷲掴み、扉へ向かつて投げ飛ばした。質量がある為か、入れた力の割には飛ばず、扉の手前で落ちる。

渚は細い眉をひそめて、悩む。札が効かない霊など、本当にいるものだろうか。確かに耐性が出来るという事は有り得る話だが、その下に貼られていた札まで無効化出来るとは、到底思えない。

ゆっくりと起き上がる肉塊を目を細めて注視していた渚は、ふと気付く。あれは最初に渚が札を投げた時、避けたのではなかっただろうか。

「じいや、それを押さえておきなさい！」

執事は肩越しに渚を振り返って頷き、起き上がった肉人の背後から、腕ごと両手でしっかりと捕まえた。ぶよぶよとした塊がそこでようやく全身で抵抗を始めるが、執事は腕が当たろうと頭がぶつかるうと、眉ひとつ動かさない。代わりに肉塊を戒める腕へ更に力が込められ、浅黒い肌に血管が浮いた。

渚は注意深く塊の様子を観察しながら近付き、その腹部へ札を当てた。つんざくような絶叫が木霊し、腹の肉が脈動する。その気味の悪さに渚は思わず顔をしかめたが、すぐに首を振って表情を引き締めた。気味が悪いからといって、逃げてはならない。

燃え盛る炎に水を掛けたような音が、断続的に聞こえてくる。不快な悲鳴は更に続き、渚はそこでようやく理解した。これは一個の霊ではない。

腹の肉が、札が触れた箇所から徐々に減って行く。執事もその喧しい叫び声には、流石に顔をしかめていた。

これは融合霊だ。これほどの間消えずに耐えているところを見ると、かなりの数を取り込まれているのだろう。ゆなをヘルメットごと体内に取り込んででも平気そうに見えたのは、内側から破壊されていたから、分からなかっただけだったのだ。芹香の手刀ほどの破壊力があれば一度で抹消出来た筈だが、攻撃力に乏しい陰陽師の札は、こういった霊の退治には不向きだ。

胸をざわつかせる絶叫を耳へ入れないように気を逸らしながら、渚は眉を顰めて考える。一気に消すには、どうすればいいのだろう。流石にこの巨体を包み込めるほど、大量に札を持ってきてはいない。しかしこの調子では、全て消しきるまでに何時間かかるか分からない。

こんなところで時間をかけていては、二人がどうなるか分からない。今この瞬間だって、彼らは命の危険に晒されているかも知れないのだ。こんなところで、悠長に考え込んでいる暇はない。

「……そのまま押さえておきなさい」

渚は徐に札を離し、胸ポケットからペンを取り出した。本来は除霊用の札を書く為の、特殊なインクを使ったものだ。高屋敷家が独自に開発したもので、札自体と文字、書く者の念、そしてこのペンの相乗効果で、高屋敷家の陰陽師が書く札は、他に並ぶものがないほどの高い威力を誇る。

出来るかどうかは、分からない。このペン先が霊体に触れられるのかどうかさえ不明だが、これしか手がない。最早賭けに出るしか、渚に道はなかった。

暴れまわる肉人を押さえ込む執事の表情が、苦しげなものへと変わっている。先程からかなりの回数殴られ蹴られているから、消耗しているのだろう。

最早一刻の猶予もない。渚は意を決してペン先を腹へ向け、筆を走らせる。絶叫が木霊した。

「書けた！」

肉の塊を重ねたような腹に、梵字が浮かび上がる。喜んでいる暇もなく、渚は手を動かす。文字が増えるにつれて痙攣が激しくなっていくが意に介さず、更に書き続けた。

最初より二周りほど小さくなった肉塊を押さえ込む執事の腕の力が徐々に弱くなり、同時に抵抗も弱まって行く。緊張の為か、ペンを持つ渚の手が汗ばんで滑る。それでも、手を止めるわけには行かなかった。

あと一息。全神経を集中させて、渚は指先に力を込める。

「えっ……」

力を入れた瞬間、ペンが汗ですりりと滑った。硬い音を立てて床へ落ちたペンを見て、渚の顔から血の気が引いた。動かないで、と祈るように思う。

しかし相手も、その隙を見逃す程愚かではなかった。疲れ切った執事の腕を全身を震わせてほどき、肉人は渚に向かって指のない手を振り上げる。渚の表情が凍り付いた。

「頭を潰せ！」

これまでか。諦めかけた瞬間、声が聞こえた。今まさに振り下ろされんとする腕の動きが止まり、肉塊の背後から憤怒の形相と、執事の大きな拳が覗く。渚には、暫く状況が把握出来なかった。

動きの止まった手が、小刻みに痙攣する。執事の拳は、肉人の顔から生えたように突き出ていた。肉の塊が大きく震え、執事の腕が頭部から抜かれる。

やや遅れて、何か破裂したような音が響いた。融合霊が完全に消滅した後、渚は我に返る。同時に、執事が目の前に手を差し出しているのが見えた。いつの間にか座り込んでいた自分に気付き、彼女は慌てて立ち上がった。

「渚さん！」

血相を変えた明が駆け寄って来るのを見て、渚は心の底から安堵した。明の背後からは、芹香が歩み寄って来る。先ほど叫んだのは、彼女だったのだろう。

「大丈夫だった？」

スカートについた埃を払いながら、渚は鼻を鳴らした。

「当然ですわ」

気丈なその返答に、明は小さく笑った後、扉に向き直って表情を引き締めた。

「……よしっ、行こう」

明の手が、扉にかけられた。

第六章 交錯する記憶 八

にこにこ愛らしい笑みを浮かべる少女を眺めながら、藤堂は呆然としていた。肉の塊に捕まってもう駄目かと思ったら、天井をすり抜けてただっ広い部屋まで連れて来られ、混乱している内に呆気なく解放された。部屋にいたのは、一人の少女。

入り口の正面には、巨大な窓を背にして金髪の少女が立っており、傍らには朽ちかけた木製のデスクが置かれている。恐らくここは、屋敷の持ち主の部屋だったのだろう。

ゆなは藤堂の足下でうずくまり、青い顔をして口を押さえていた。連れてこられる際に酔ったものと思われるが、こんな状態なのに車酔いはしないのが不思議だ。

「ねえ、おにーさん」

ビスクドールのような少女は、見た目に違わぬ愛らしい声を掛けながら藤堂を見上げた。コウと同じ位の歳だろうか、藤堂はぼんやりと考える。彼より少し、幼いかも知れない。

しかし愛らしいのは容姿ばかりで、少女はなんとも言えない嫌な空気を纏っていた。何より透けているから、生きている人間でもない。ここに生きた少女が一人いたら、それはそれで問題だが。

「どうして二人だけここに来てもらったか、わかる？」

多少舌足らずだが、その口振りは少女のものとは到底思えなかった。返答に困って足下のゆなを見ると、彼女は未だに青い顔をしている。吐いてしまった方が楽だろうにと考えながら、藤堂は少女に向かって首を横に振った。

作りもののような少女は、鈴を転がすように笑った。可愛らしい仕草である筈なのに、藤堂にはその笑い声が恐ろしく感じられる。

珍しく出てこないコウは、どうしているのだろう。藤堂の背後には確実にいるはずなのだが、この状況で姿が見えないと心配になる。彼なら、何かしら行動を起こしていてもおかしくはない。

逆に言えば、出てこないということは危険ではないのだとも取れる。しかし藤堂にはとても、そうは思えなかった。もしかしたら守護霊達は、藤堂が影響を受けないようにするのが、精一杯なのかも知れない。

霊感がなくとも、肌で感じる。少女からは、ひしひしと底知れない悪意が伝わってくる。これは今まで見た中で一番、恐ろしいものだ。

「わたしの事、助けて欲しいの」

助けて欲しいのはこちらだと、藤堂は思う。この状況を打開する手だてはない。破魔銃はあるが、この霊相手に効くかどうか分からない。

とにかく話を聞いている間は、何もされないだろうと判断した。せめてあの三人がここへ来るまでは、話を長引かせなければならぬ。しかし藤堂は初対面の霊と長話が出るほど、器用な男ではない。ゆなの復活を切に願う。

「それは、手助けしろってこと？」

「そう！」

少女はさも嬉しそうに、はにかんだ。見る者の目を奪うほど華やかな笑顔だったが、藤堂は薄ら寒いものを感じて一歩後退りする。何が恐ろしいのか、自分でも分からなかった。

「わたし、カンペキになりたいの。なんでも出来るようになりたいの」

「そりゃ随分、大それたこつて」

藤堂はちらりと、足下のゆなを見る。大きな目が、縋るように藤堂を見上げていた。小さな手は、しっかりとヘルメットを押さえている。乗り物酔いではないのかも知れない。

明が言うには、ゆなは異常に感受性が強いのだそうだ。霊媒体質である点を考えても、霊から受ける影響が強すぎる。彼女はもしかしたら、既にこの目の前の霊に、影響を受け始めているのかも知れない。

だとしたら、この霊は一体、なんなのだろう。完璧になりたいと言うが、既に強大な力を持っているように思える。

「あなたたちは、わたしにないものを持つてる」

とてつもなく、嫌な予感がした。藤堂はゆなを隠すように、横へ移動する。ゆなは縋りつくように藤堂の足を掴み、ふくらはぎに額を当てた。真下に居るから顔は見えないが、その仕草だけで、彼女の辛さが充分伝わってくる。

そんなゆなの様子などに留めるふうもなく、少女は小さな人差し指を藤堂に向けて、無邪気に笑った。

「あなたのその、記憶を見る力が欲しい」

「これだけ持つてつてもえんなら、こっちは願ったり叶ったりだけだな」

藤堂は自分の頭を人差し指で叩いて、そう返した。

こんな能力はいらない。これがあるせいで、コウは藤堂を護らなければならぬ。藤堂自身、霊の記憶を見たところで苦しむだけだ。あつたところで、何の得もない。

あんな悪夢は、二度と見たくない。この嫌な能力を持つて行つてもらえるなら、それは有難いことだ。

しかし本当に、力を奪われるだけで済むのだろうか。それだけで終わるとは、到底思えない。

「物欲がない人ね」

少女は少し鼻白んで肩を竦めてから、更にゆなを指差した。言われなくとも、彼女がゆなの何を欲しているのか、藤堂には分かった。誰もいない今、自分が護つてやらなければならないと思うのに、藤堂には何も出来ない。

びくりと肩を震わせたゆなの背後に、コウが現れる。心配そうにゆなの顔を覗き込む少年の表情は、怯えているようにも見えた。己の非力さが、藤堂には悔しくてならない。

「その子の体が欲しいの。くれる？」

「ダメ」

間髪容れずに答えると、少女は頬を膨らませて藤堂を睨んだ。睨まれたところで、それだけは許諾出来ない。

「なんで体が欲しいの」

少女は不思議そうに首を捻った。不思議なのはこちらだ。

常々思っていた。何故、霊は体を欲するのか。自分の体を取り戻すならともかく、何故他人の体を欲しがするのか。体があつていい事は、果たしてあるのだろうか。

霊体と肉体の違いは、脆弱性と触れられるものの違いにあるという。霊体は無機物に触れないから、物理的な痛みを感じる事はないが、その分心が弱い。あらゆるものに影響され、形が変わってしまう。生きている人間でも影響を受けやすい人はいるが、それとはまた違うようだ。形が変わると心が変わるとでは、確かに違うのだろうか。

心の脆弱性という弱点こそあれど、彼らが再び肉体を手に入れる必要など、ないように思われる。土地に縛られた地縛霊でもない限りどこへでも行けるし、何にも触れないから、物理的に傷付く心配もない。肉体を持っているより、遥かに便利ではないのだろうか。

「なくしちゃったから」

あつけらかんとした返答に、藤堂は怪訝に眉を顰めた。

「なくしちゃったから、取り戻したいの」

ああそうか、と、藤堂は納得した。

意味はないのだ。具体的な理由はないし、手に入れて何をすることもないのだろう。かと言って、手に入れたらそれで満足して成仏する訳でもなさそうだ。体を手に入れたがるのは、悪霊の習性と叫ぶべきものなのかも知れない。

この少女は永遠にあらゆるものを欲しながら、このままの姿で、この場に留まり続けるのだろうか。本人が満足することはなく、無論全てを手に入れることなど出来はしない。どんなに悪い霊でも救いたいという明の真意が、分かったような気がした。

「なんで完璧になりたいの」

藤堂は敢えて、そう聞いた。少しは違った反応を見せるかも知れないと踏んだのだが、しかし当ては見事に外れた。少女は満面の笑みを浮かべ、その問いに答える。

「パパに消されちゃうから」

思いもよらない答えだった。藤堂は一瞬硬直し、その意味を考えて鳥肌を立てる。

パパとは果たして何なのだろう。本当に父親の事だろうか。仮にそうだとしても、完璧にならなければいけない理由にはならないように思う。意味が分からない。分からないから、尚更恐ろしかった。藤堂は粟立った肌をさすりながら、顔をしかめる。

「ねえ、ちょうだい」

少女は藤堂を見上げて、にっこりと笑った。藤堂は更に洗面を作り、心持ち身を引く。足を抱き締めるゆなの腕に、力が籠もった。

「いや、待ってもうちよっ……」

どこかから、叫び声が聞こえた。藤堂は驚いて背後の扉を振り返ったが、この隙に何か行動を起こされても困ると、すぐに少女へ向き直る。しかし彼女は、驚いたように目を丸くしていた。

「しんじやった」

「は？」

怪訝な声を漏らした瞬間、扉が勢いよく開いて藤堂の背へ強かにぶつかった。一瞬呼吸が止まり、藤堂は激しく咳き込みながら前のめりになる。つんのめった拍子に、ゆなの手が離れた。

「あ、藤堂さん！」

恨みがましい目を背後へ向けると、嬉しそうな顔をした明が立っていた。その向こうで渚が呆けたような表情を浮かべ、執事が少女を睨んでいる。明のすぐ後ろに立った芹香は、藤堂の顔を見て安堵の息を吐いた。

開けていた扉を離して室内へ入った瞬間、明の表情が一変した。

藤堂の足下でうずくまるゆなに渚が駆け寄り、コウの反対側から顔を覗き込む。ゆなは苦しそうに眉を顰めたまま、渚を見上げた。

「お前が主か」

明の横へ立った芹香が、剣呑な声で少女に聞いた。藤堂は彼女らの切り替えの早さについて行けない。

「あ、あなたが堤さんだね」

「……だつたら何だ」

芹香は少女の朗らかな様子に出鼻を挫かれたようで、僅かに眉を顰めた。明が芹香の横で顔をしかめている。

「わたしは嫌なんだけどね、パパがね、戻ってきてくれて言つてたよ」

この少女は、何を言っているのだろうか。藤堂は訝したが、芹香は目を見開いて凍り付いた。

芹香は今回、初めてここまで来たはずだ。少女が芹香を知っているのも不思議だが、彼女の反応も妙だと、藤堂は思う。

何を知っているのだろう。思えば藤堂は、誰の事も深くは知らない。明の家族構成も未だに知らないし、具体的に芹香に何があつたのかも、知らなかった。

「お前まさか、火の鳥か」

ゆなの背を撫でていた渚が、弾かれたように顔を上げた。彼女の傍らに立っていた執事は、少女から主人を護るように立ち位置を変えらる。

室内の空気が変わった。ひしひしと肌に伝わる緊張感が、藤堂に畏怖にも似た感情を抱かせる。置いて行かれていたような疎外感すら覚えたが、今この状況に対して抱いた感情ではないのかも知れない。何も知らない、何も出来ない自分が、齒痒かった。

何も知らなくても、いいと思つていた。何も出来ないのは、仕方のない事なのだと思つていた。それが今はこんなにも、藤堂を揺さぶる。誰かの為ではなく、彼女達に何か出来ればいいのにと、そう思う。

それでも藤堂に、為す術はないのだ。

「火の鳥？」

渚が顔を上げ、呟いた藤堂を見た。表情が硬い。

「鳳の社名の由来ですわ。鳳コーポレーションの社長が使役する、
霊の通称」

どくり、と心臓が大きな音を立てた。

鳳の社長が使役する霊がこの主であつたのだとしたら、鳳とは一体、何なのだろうか。戻ってきて欲しいと芹香に言う少女の台詞は、社長の言葉なのだろうか。そうだとしたら、社長という人物は、芹香に何が起きたのか、知っているのだろうか。

藤堂は、彼女の身に何があつたのか知らない。ずっと気になつてはいるものの、結局聞けず仕舞いだつた。他の事には興味も示さないのに、それだけは気にしている自分が不思議だつたが、今はそんな事を考えている場合ではない。

この屋敷で一体、鳳は何をしようとしているのだろうか。

「戻るの？」

「断つたらどうする」

「どっちでもいいや。わたし、パパが好きなひとは嫌いだから」

少女は満面の笑みでそう言うと、両手を大きく広げた。途端、その背中から火柱が二つ飛び出す。体の左右で燃える炎は、翼のように見えた。これは確かに、火の鳥と呼ばれて然るべきだろう。

オレンジ色に輝く炎を見た明の、顔付きが変わつた。怯えたようなその表情に、藤堂は違和感を覚える。彼女は今まで、臆す事はあれど顔に出すことはなかった。

「あれ、何？ 燃えるの？」

恐る恐る藤堂が聞くと、炎の羽を生やした少女を見つめたまま、芹香が答える。

「実体化しているから、燃えるさ。炎で呪つた鷲と融合している。あれは融合霊だ。子供の姿をしているが、本体がどの霊なのか私にも分からない」

どの霊か、と言つたということは、既に複数の霊と融合しているのだろう。藤堂は炎から守るように、顔の前に掌を翳す。

「呪う？」

「詳しくは知らん。ああいう霊がいるという事だけ聞いていた」

離れた場所に居ても、炎の熱気が伝わって来る。静まり返った室内に、火が弾ける音だけが断続的に響いた。

誰一人として動こうとしないところを見ると、芹香が言うように、あれはまやかしではないのだろう。しかし実体化しているという事は、どこかに術者がいる筈ではないのだろうか。それ以前に、果たしてあんなものを、どうにか出来るのだろうか。あの火に吞まれたら、ひとたまりもないだろう。

「おにーさんとその子をくれたら、何もしないであげよ」

要求が微妙に変わっている。藤堂は顔をしかめながら顎を撫で、小さく唸った。

「記憶見るならあげるけど。俺だけじゃダメ？」

少女以外の全員が、目を見開いて一斉に藤堂を見た。藤堂は更に一步下がろうとしたが、既に背中が扉についている。何故こんな目で見られなければならないのか、彼には分からない。

芹香の表情が厳しいものへと変わった。その横で、明が藤堂を睨んでいる。

「死にたいのか、藤堂」

「力を奪うってことは、魂を奪うってことだよ」

そんなことは知らなかった。霊の記憶など見たくもないが、死にたくもない。

渚が大きな溜息を吐いて、立ち上がった。細い眉がっり上がった。いる。ついさっきまではしかめっ面をしていたから、腹を括ったのだろう。

「よろしくてよ。私達があなたに負けたら、藤堂は差し上げますわ」
藤堂は我が耳を疑った。藤堂にとっては、全くよろしくない決断だ。勝てるという自信があるのはいいが、取引に命を使われては困る。

「よしー！」

何がどう良し、なのか藤堂には分からなかったが、明の緊張も解けたようだった。明は刀を両手に持ち直し、体の前に構える。彼女のその姿を見て、藤堂も心持ち姿勢を正した。

少女は目を丸くして二三度瞬きし、首を傾げる。

「燃えちやうよ、いいの？」

「易々燃やされてやるほど、私達もか弱くはないさ。彼を持って行かれると、こちらも困る」

芹香は手袋の端を摘み、指先を詰め直した。少女の目が、僅かに細められる。

「あなたやっぱり、嫌い」

火の鳥が、飛んだ。

第六章 交錯する記憶 九

舞い上がった水蒸気が、視界を遮る。文字通り飛び掛かってきた少女の体を護るように覆う炎の羽を止めたのは、明の刀だった。銀色の刃に燃え盛る炎が映り込み、ちかちかと瞬いて見える。

「その刀、知ってる」

炎に護られる少女は、楽しそうに笑った。明が眉を顰めて憎らしげな表情を浮かべる。漆黒の瞳にも、炎が映り込んでいた。

これに明以外が、手を出す事が出来るのだろうか。芹香の手袋は勿論、渚の札だって所詮は紙なのだ。燃えてしまつに決まっている。上手く隙間を縫うにしても、あまりにも的が小さい。

「あなたが殺したんだね」

「うん」

明の眉間に皺が寄り、双眸が細められる。今まで見た事もないような、憎悪を剥き出しにした表情だった。藤堂は何故か、親を殺されたのだと、そう直感する。

炎を食い止めていた明の腕に力が籠もり、少女の体を押し返した。よろめいた隙に渚の札が投げられるが、羽に当たって一瞬にして燃え尽きた。炎の勢いが僅かに弱まる。

「効きましたわね」

渚が口元に笑みを浮かべて呟いた。藤堂にはその意味が分からなかったが、火の勢いが弱くなつた事を言っているのだろうか。

刀の切っ先が、少女目掛けて繰り出される。羽を突き抜けて刺さつたと思われた刃はしかし、少女の体には届いていなかった。それでも憎悪に表情を歪めた明の追撃は止まず、ただただ、炎ばかりを斬る。

これでは、他の三人が全く手を出せない。闇雲に斬りつける明を止めようと身を乗り出した藤堂の肩を、芹香が掴んだ。振り返ると、彼女は眉間に皺を寄せて厳しい表情を浮かべている。

「止めるな。その内隙が出来る、その時まで待て」

つまり、黙って見ているということだろうか。何もするなと言われれば、何も出来ない藤堂は引き下がるしかないが、あんな明を見ていたくはない。あれほどまで真剣に激昂する明は、初めて見た。

藤堂は複雑な心境で、視線を落とす。ゆながいつの間にか、すつきりした顔で立っていた。渚が何かしたのだろう。

「所詮、融合しただけなのです。別の霊です」

ゆなの言葉に、藤堂は首を捻った。

明が羽ばたく炎を斬る度に、火の粉が舞う。足下を掬う炎を飛び上がって避け、明は更に羽を刺し貫く。防戦一方の少女は、表情を曇らせていた。

ひたすらに斬りつける明から逃げ回るのは流石に疲れたのか、少女が背中を向けて逃げる姿勢を取った。炎が明の制服の袖を舐める。生地は一瞬にして燃えたが、落ちたのは袖だけだった。

明の刀が閃いた。逃げる少女の背に追いつき、羽に対して垂直に下段から斬り上げる。かすかに鳥の鳴き声が聞こえた。

炎の羽が、少女の体から離れた。一際大きく燃え盛った炎は、少女の体から完全に離れた瞬間、小さな破裂音と共に消え失せる。

大きな目を更に丸くして、少女は背後を振り返る。そこにはもう、羽があつた痕跡さえ残されていなかった。

明が一旦息を吐いたのも束の間、少女は恐ろしい速さで彼女の目の前へと迫り、目を見開いたまま小首を傾げた。仕草だけは少女のままだが、光のない茶色い瞳は、明に陰鬱な視線を送っている。

「うそつきのくせに」

地の底から響いて来るような声だった。その言葉の意味も分からないまま、藤堂は思わず肌を粟立たせ、身震いする。

明が険しい表情で一步下がると、芹香が飛び出した。流石に見た目だけなら子供である霊を殴りつけるのは憚られたのか、捕らえようと腕を伸ばす。少女は空中に浮かんだまま伸ばされた手を避け、芹香の背後へ回った。

「あなたはパパを裏切った」

芹香は視線だけを背後へ向け、冷たく言い放つ。

「裏切ったのはそちらだ」

肩越しに振り返った芹香を見て少女の目が細められた瞬間、古びた机が音を立てて動いた。俗に言うポルターガイスト現象だが、これを起こせる霊は限られているのだという。少女と融合した霊の内、一人の能力だろう。

腐った机の破片が、勢いよく芹香に向かって飛んで行く。尖った先端を彼女の前へ出た明が刀を振って弾き返したが、幾つか捕らえ損ねて制服が破れ、足に血が滲む。

「パパはあなたを、右腕にしてあげると言っていたのに」

破片で切られた頬の傷口から流れる血を手の甲で拭いながら、芹香は少女を睨んだ。

「あの人は、私が離れた理由を知っているのか？」

少女は首を傾げた。何を言っているのか分からないといった仕草だ。

少女の言うパパとは、鳳の社長の事なのだろう。その社長が、社を離れた芹香に戻れと言っている。つまりはそういう事なのだろうが、藤堂は社長をあの人と言う彼女に、違和感を覚えた。

不意に、芹香がその場へ屈み込む。明はその背後にいた少女を睨んだまま、刀の切っ先を繰り出す。少女は飛び上がって避けようとしたが間に合わず、足に先端が突き刺さった。しかし少女の姿は消えない。

少女のものではない甲高い絶叫が木霊した瞬間、机が激しく揺れ動いた。強い力で引つ張られたように、音を立てて天板が剥がれ、明に向かって飛んで行く。

立ち上がった芹香が慌てて腕を出したが、執事が飛び出す方が速かった。執事は大きな拳を板切れ目掛けて突き出し、叩き割る。ささくれ立った断面や飛び散った破片が刺さり、拳から血の雫が落ちた。

「裏切り者！」

今度は少女の声が叫ぶ。ガラス窓がびりびりと音を立て、激しく震えた。藤堂は目を見開いて凍り付く。あれを飛ばされたら、避ける術がない。

「芹香さん！」

声を上げると同時に、渚が芹香に向かって札を投げた。芹香が受け取った分厚い札は、三枚貼り合わせてある。窓ガラスに徐々にひびが入って行き、大きな音を立てて割れた。

明と執事が左右に立ったのを確認し、芹香は札を体の前に翳す。割れた窓ガラスの破片が次々と彼らへ襲いかかって行くが、当たる寸前で床へ落ちた。ガラスの破片は霊の能力によって飛んでいるから、除霊の札で防げるのだろう。

傷ついた足を抱えて憎々しげに顔を歪ませた少女が、扉付近で成り行きを見守る三人を見た。更にガラスの割れる音が響き渡り、破片が舞い上がる。

顔をしかめた渚が、札を取り出しながら藤堂を振り返った。

「撃ち落とさない藤堂！」

居丈高に怒鳴られ、藤堂は一瞬たじろぐ。舞い上がったガラスの破片は、少数であるとは到底言えない。

「あれは流石にちょっと……」

しかし、そうも言っていない。防御に徹していた三人が慌てて振り返ったその横を通り過ぎ、ガラスの破片が向かって来る。藤堂は半ば自棄になって構えた銃でその内幾つかを撃ち落とすが、到底間に合わない。煌めく破片が、もう目前まで迫っている。

藤堂は思わず目を瞑ったが、痛みは襲って来なかった。恐る恐る目を開けると、渚の背中がすぐ側にある。彼女の手には札が握られており、床にはガラスの破片が散らばっていた。最初からそうすれば良かっただろうにと思ったが、また怒られても嫌なので何も言わなかった。

「藤堂、今の内に撃て！」

安堵する間もなく、藤堂は芹香に急かされて再び銃を構えた。血の一滴も滲まない傷口を押さえる少女の眉間に、銃口を向ける。少女は藤堂を睨んだまま、避ける素振りも見せなかった。その憎悪の籠もった視線に一瞬身震いしたが、藤堂はそれを振り払うように表情を引き締め、トリガーを引く。

エアガンの、安い発砲音が響いた。白い額にぼつりと穴が空くと同時に、少女の体が燃え上がる。何が起きたのか、藤堂には一瞬理解出来なかった。

「な……なんで……」

渚が呆然と呟く。赤々と燃える炎に包まれた少女は、ゆっくりと唇の端をつり上げた。額に空いた穴からは、やっぱり出血しない。撃った張本人である自分を睨んでいるようでその実、何も見ていないかのような虚ろな瞳に、藤堂は身震いした。

炎に包まれた少女が動く前に、明が刀を構えて突進する。飛び散る火の粉が僅かに髪を焼き、頬の産毛を舐めて行く。姿勢を低くして繰り出した刀は寸前で飛び上がった少女には届かず、明は彼女を見上げて怒鳴った。

「絶対許さない！」

乾いた声だった。泣くのを堪えているような、籠められた憎しみを抑えきれないような、悲痛な叫び。藤堂はその声に、身動きが取れなくなる。明の憎悪が直接伝わって来るような、奇妙な感覚だった。

少女の纏う炎が明の指先を焼き、袖口に移ったがすぐに消えた。下方から斬り上げる刀を避けて高度を下げた少女の肩に、すぐさま向きを変えた刃が迫るが、彼女は陽炎のように揺らめいて消えた。明は目を見開いて辺りを見回すが、少女の姿はない。

「どこ行つたのよ！」

明は苛立たしげに怒鳴った。あの破魔刀の一撃を受けても消えなかった霊が、今更逃げる筈もないだろう。

「かがめ！」

芹香の怒鳴り声に、明は弾かれたようにその場にしゃがみ込む。明の背後から現れた炎の塊を黒い手刀が切り裂いたが、その中に少女はおらず、火が消える気配もない。芹香が驚いたように目を丸くした。先ほどは確かに渚の札で炎の勢いが弱まった筈だが、今度は全く変わりなかった。

炎が揺らぎ、その中から指先が這い出す。出てきたものを確認しようともせず、芹香は反射的にその場から飛び退いた。明も立ち上がり、数歩ばかり離れる。

炎から這い出してきた少女は、逃げた芹香を追おうとしたかに見えたが、突然方向転換した。炎が向かうその先には、ゆながいる。「まずい……逃げる！」

芹香が叫んだが、ゆなは目を見開いて硬直していた。動けない彼女に、火の玉となった霊が迫る。

その時ゆなの傍らでしゃがみこんでいたコウがふわりと浮き上がり、藤堂を振り返った。彼が何をしようとしているのか察して、藤堂は息を呑む。

「ば……燃えちまうぞ！」

身を乗り出して叫んだ藤堂に、コウは気の抜けた笑顔を見せた。その表情に、藤堂の全身の力が抜けて行く。

不思議な感覚だった。コウが笑うだけで、状況が好転した訳でもないのに、安堵してしまう。守護霊と守護される人間というのは、どこかで繋がっていると言うが、その通りなのだろう。

藤堂の背後から、小さな守護霊達が一斉に飛び出した。瞬間、覚えのある強い目眩が藤堂を襲う。他人の記憶など、見たくはない。頭痛を堪えてきつく目を閉じ、藤堂はその場に膝を着いた。

「コウ君！」

行く手を遮るように立ち塞がった子供達に、火の玉が衝突する。明が悲鳴じみた叫び声を上げたが、彼らに火が移る事はなかった。炎を纏った少女が、驚いたように目を見開く。

異臭が、藤堂の鼻を突く。

視界が突然開け、コンクリート打ちっ放しの狭い部屋に、全身が濡れになった女が立ち尽くしているのが見える。足下の水溜りは虹色に見えたから、溜まっているのはただの水ではないのだろう。女は唇を動かして何か言ったが、そう離れてはいないのに、声が聞こえてこない。嗅覚はあるが、聴覚は塞がれているようだ。女は徐々に片手を胸の前まで上げ、こちらをじっと見つめた。ライターを持った彼女の手は、小刻みに震えている。女は震えの止まない手で何度もライターの火を点けようとしたが、なかなか上手く行かなかった。とうとう左手を挙げ、自分の手首を掴む。ライターの火は大きく揺れた後瞬く間に女の全身に燃え広がり、蛋白質の焦げる嫌な臭いを漂わせた。しどどに濡れた全身が炎に包まれ、赤々と燃え上がる。苦しみ悶える女は、それでもよろめきながら近付いて来る。火の粉が跳ねて、鼻先を掠める。

嫌だ。

「藤堂！」

渚の怒鳴り声で、藤堂は我に返った。目を開けると真っ先に、左右から覗き込むゆなと渚の顔が見える。ゆっくりと瞬きしてから周りを見回すと、座り込んだままうなだれた少女が見えた。その頭を、コウが撫でている。

少女の周囲を覆っていた炎は、目を離している間に消えていた。コウに火が移ったような様子はないが、執事が手を出せなかったのだから、霊体が燃えないというわけではないのだろう。

あれは恐らく、実際の炎ではなかったのだ。少女の記憶を見た藤堂は、そう確信する。

「見た目で判断してはなりません」

ゆなが徐に立ち上がり、そう言った。うなだれた少女を複雑な面持ちで見つめていた明が、弾かれたように顔を上げる。雷に打たれでもしたかのように、驚いた表情だった。

「本体はその子なのです。炎は、その子の記憶です」

渚は眉根を寄せたまま、首を捻る。

「でも、記憶は実体化しませんわ」

ゆなは渚を見上げ、左右に首を振った。

「思い込みなのです。鷲の霊が実体化していたので、今度の炎も燃えるものだと思います。霊は周囲に与える影響が大きいですから、こちらの思い込みで燃えたのですね」

「だからこいつらは燃えなかったのか」

藤堂は呟きながら、背後を見た。体の透けた子供達が、彼に頷いて見せる。子供達は気付いていたのだろう。あれが、少女の記憶であると。無理心中を図られ、焼死した少女の、忌まわしい記憶だったのだと。

少女は座り込んで俯いたまま、微動だにしない。先ほどまでの暴力方が嘘のようだった。コウ達が何か言ったのかも知れない。

ゆなは藤堂の服の端を摘み、軽く引いた。

「あの子の記憶は、浄化するに値するものでしたか？」

藤堂は、返答を躊躇った。あの少女は、母親と共に死んだのだろう。しかし安易に首を縦に振る事も憚られる。

明は、あの少女に誰を殺されたのだろうか。藤堂は親だと直感したが、そうとは限らない。肉親か、はたまた恋人か。彼には分からないが、あれほどまで怒っていたのだから、近しい人間ではあるのだろう。

明は果たして、浄化出来るのだろうか。そう易々行くとは思えない。あの刀は、迷えば斬れなくなる。斬るという、浄化するという強い意思がなければ、あの刀は正常に作用しない。祐子の一件が落ち着いた後、本人からそう聞いた。

「今のメイでは、浄化出来んぞ。それにこれは……」

「私がやる」

黙り込んでいた明が、少女の前に進み出た。藤堂は思わず、え、と呟く。

「この子は、誰かに使役されてたんでしょ？ それなら、この子が悪いんじゃないよ」

明の憎悪は、少女ではなく術者に向けられていたのかも知れない。藤堂は、今更になってそう思う。少女が斬られても消えなかったのは、単純に力が足りなかった為ではなく、明に抹消しようという意思がなかったからなのだろう。

「だがなメイ、これは……」

「手遅れなんて、絶対はない」

芹香の言葉を遮り、明は刀の切っ先を少女の頭に向けた。彼女には常に、絶対に浄化するという強い信念がある。人を救いたいという深い想いがある。それを持ち得るからこそ、明には浄霊が出来る。明が迷う事はない。藤堂は、そう信じている。

「大丈夫だから」

刀の切っ先が額に触れた瞬間、少女は華奢な肩を大きく震わせた。大きな目が明を見上げ、僅かに揺れる。怯えたような表情だった。

明は少女にやさしく微笑みかけ、ゆっくりと切っ先を進めた。刃が埋まるにつれ、足の傷が消えて行く。浄化されて悪霊でなくなつた為に使役関係が解消され、実体化が解けたのだろう。

しかし、少女の表情は変わらない。それどころか、体の震えが酷くなつて行くばかりだった。藤堂は怪訝に首を捻る。

「刀を抜け、その子は浄霊出来ない！」

芹香が慌てて声を上げる。明は眉を曇らせて刀を引き抜いたが、少女の震えは止まらない。事の成り行きを見守っていた執事が、痛ましげに顔をしかめて俯いた。

小刻みに震える少女は、緩く左右に首を振る。両手で頭を抱え、小さく呻いた。

「わたし、わたし……」

少女は目いっぱい涙を溜め、掠れた声で呟いた。

「わたし、こんなことしたくなかったのに……」

彼女は確かに、正気に戻ったのだろう。しかし震えながら涙を零すその姿は、いっそ正気に戻さないで置いてやった方が良かったのではないかと思うほど、痛ましく見えた。

浄化出来ないのなら、消してしまった方が彼女の為なのだろうか。それもあまりに不憫に思える。

「おいたわしや」

ぼろぼろと涙を零す少女を黙り込んだまま見つめていたゆなが、ゆっくりとヘルメットを外した。

第六章 交錯する記憶 十

震える少女を見つめたまま、ゆなが両手を広げた。渚が慌ててそれを止め、左右に首を振る。ゆなは大きな目で渚を真っ直ぐに見上げ、少女を指差した。

「放っておけと仰るのですか」

最後まで霊を想うのは、必ずゆなだった。憑かれて困るならいっそ、憑かれても救うことが出来るようになりたいと、彼女はそう考えている。どこへ行くにも師と仰ぐ明について行って、どんなに危ない状況でも、弱音は吐かない。今何も出来なくとも、出来るようになる為に学び、救いたいと願う。そんなゆなのひたむきさが、藤堂には眩しく感じられる。

「そうは言っておりませんわ」

困ったように眉根を寄せ、渚は一步後ずさりした。真剣なゆなの表情に、気圧されたのかも知れない。

仲間を守ろうとするのは、必ず渚だ。たとえ本懐は遂げられなくとも、各々の安全を第一に考え、適切な意見を述べる。視野が狭いとも取れるが、無鉄砲だったという昔の彼女から考えると、仲間、延いては人を大事にするようになった、という事だろう。

そしてそんな渚に守られることが、藤堂には齒痒く思える。

「ああなったら、もう消すしかありませんのよ」

現世に留まり過ぎた悪霊は、例え罪を浄化しても道が絶たれていくから、幽世へ送る事は出来ない。幽世への道を示す術がなくなれば、抹消するか強制的に幽世へ送るか、二つに一つ。明は手遅れなどないと言ったが、そうではないと信じたかったのだろう。

「どんなに辛くとも、消すしか道はない。渚の言葉は尤もだ。」

「だがしかし、このまま消してしまうのは哀れです」

ゆなは渚から顔を逸らし、少女を見た。小さな手で頭を抱える彼女の姿は、あまりにも痛々しい。

「だからあなたがやると仰るの？」

渚の声は、責めるようなものだった。

「強制的にあちらへ送る事が出来るのは、霊媒師だけなのです」

藤堂には初耳だった。浄霊の術とは、明に伝えられた限りなのだとばかり思っていた。

しかし霊媒師ならあの世へ送れると言っても、ゆなは未だ、浄霊に成功したことがない。そんな彼女にこの場を任せるのは、あまりにも酷に思えた。

渚は決然と言い切るゆなに、戸惑ったように明を見た。ゆなも、つられて明を見上げる。その視線を受け、明はしっかりと頷いてみせた。

「ゆなちゃんなら、出来るよ」

いつでも真つ先に行動を起こそうとする明は、必ずしも無謀である訳ではない。彼女が先立つて行くことで、救われる人がいる。激情を抑えられない明は時に周囲を振り回すが、間違ったことは絶対にしない。間違いを正し、歩むべき道を明示する。誰よりも先に悲しみ、怒り、笑う。明は、藤堂には恐ろしいほど輝いて思える。

師からお墨付きを貰ったゆなは微かに笑みを浮かべ、少女へ向き直った。大きく息を吸い込んで、ゆつくりと吐く。どこか悲しげに少女を見下ろしていた執事が、渚の傍らへ戻った。彼には何か、思うところがあったのかも知れない。

芹香は眉根を寄せて俯いていたが、不意に顔を上げてゆなに歩み寄る。華奢な肩に後ろから両手を置き、見上げたゆなに微笑みかけた。

「助けてやってくれ。危なかったら、私が引つ張り出すから」

芹香は誰かが間違えば必ず叱咤し、時には制裁を加える事さえある。けれど彼女自身が間違いを犯すことは、一度たりともなかった。己の信念を貫き、正しい道を歩む。選択が正しければそつと背中を押してやり、力が及ぶ限り守り抜く。たとえ孤独に襲われようと、それによって悩むことにならうと、彼女は信念を曲げない。

いつしか藤堂は、真つ直ぐな芹香から目を逸らすことが出来なくなっていた。

「それは心強い」

ゆなは再び、少女に向かって両手を伸ばした。今度は誰も止めない。誰一人として口を利かず、固唾を呑んで見守っている。

「さあ、おいでなさい」

少女の体が霞んだ。ノイズが走ったように全身がぶれ、一瞬にして消え失せる。

身を固くしたゆなが、きつく目を閉じた。彼女は霊の意思とは無関係に自分に憑かせることが出来るから、恐らくもう、入ったのだらう。

明は両手で刀を握り締め、祈るように胸の前へ持ち上げた。ゆなが小さく呻く。苦しげにしかめられた顔を見て芹香が動きかけたが、ゆなは止めるなどばかりに、勢いよく首を振った。

自分には、何が出来るだらう。

ゆなのようなひたむきさもなければ、渚のように誰かを守ること出来ない。明のように先導することも出来ないし、芹香にあるような信念もない。

ゆなの手から、ヘルメットが滑り落ちる。両手が自分の体を抱き締めるように二の腕を掴み、背中が丸まった。ゆなは何度も大きく呼吸を繰り返し、体を震わせる。藤堂は苦しそうな彼女を見ていたくなかったが、目を逸らすわけには行かなかった。

目を逸らしてはいけない。折角ゆなが一人前になろうとしているのに、苦しんでいる姿が可哀相だからと、自分だけ見ない振りですわけには行かない。見届けなくてはならない。

出来る限りを、してやりたい。けれど、藤堂には何も出来ない。誰に何があろうと、見守る事しか出来ない。

「ゆな」

藤堂の声に、ゆなは眉を顰めたまま顔を上げた。

「お前なら、助けられる」

何も出来ないから、せめてと、藤堂はそう思った。何も出来ないなら、信じて見守っていていよう、と。上手い言葉は掛けてやれないが、ゆなはきつと、分かってくれる。

ゆなは唇を引き結び、大きく頷いた。瞬間、彼女の全身の力が一気に抜ける。

芹香が咄嗟に肩を掴んで抱き寄せると、ゆなは笑った。どこかきこえない、いつもの笑顔だった。

そしてその細い腕が、ゆっくりと持ち上がる。同時に彼女の体から白い煙が抜け出して、天井へ向かって行く。

小さな人差し指が差した先で、煙は消えた。

屋敷から出ると、外は既に日が暮れていた。それほど長い時間ここにいたのかと思うと、藤堂はどつと疲労感に襲われる。車を運転するのも嫌だったが、他の四人は彼より遙かに疲れているだろう。

全員、明らかに疲労困憊していた。各々ゆなを労った後は、一言も口を利かないでいる。喋る気力もないのだろう。

屋敷の扉に嚴重に封をしてから、渚は執事に自分を担いで行けと命じた。執事は疲れたふうもなく、素直にそれに従う。ゆなは藤堂にしがみついたまま、引きずられるようにして歩いている。明など片袖が焼け落ちている上制服の所々に焦げ跡があり、足にも傷が残っていた。

しかし芹香だけは相変わらず、しっかりとした足取りだった。体力の問題なのだろうが、藤堂は何もしていないのに疲れている自分を情けなく思う。

「明日は休みにすっか」

「賛成……疲れちゃった」

明は今にも死にそうな声で言って、深い溜息を吐いた。車の口ツクを解除すると同時に、執事の腕から降りた渚が、彼を札に戻しながら真つ先に車へ乗り込む。その動きも、どこかきこえなかった。彼女は藤堂よりも体力がない。

藤堂はゆなを助手席に押し込んでから、運転席へ回った。ドアを開けてふと顔を上げると、屋敷を見詰める芹香が視界に入る。

「どうかした？」

芹香は緩く左右に首を振り、車に乗り込んだ。藤堂には時折、彼女が分からなくなる。何を考えているのか分からないのは、全員そうなのだが。

芹香には、聞きたい事が山ほどある。それは単なる好奇心ではなく、聞いておかなければならない事のように思われた。今日の事も、彼女が会社を辞めた理由も、あの常務の事も。

それだけではない。もう、自分でも気がついていて。彼女をまともに見られなかった理由も、今更目を逸らせなくなつた理由も。自覚するのが怖かつただけだ。

藤堂は全員家まで送り届けてしまおうと車を走らせていたが、明の家を知らない事に気が付いた。とりあえずは真つ先に、ゆなの家へ向かうべきだろう。あまり遅くなると、ゆなの両親は気が狂わんばかりに心配し始める。

「……言っておかなければならない事があるんだ」

片手で煙草に火を点けながら、藤堂は横目で後部座席の芹香を一瞥した。膝に視線を落とした彼女の表情は硬い。眠そつに舟を漕いでいたゆなが、目を開けて座席から身を乗り出した。

藤堂は視線を正面に戻し、灰皿を引つ張り出した。ようやく話す気になつたのかと、安堵感すら覚える。

彼女はずっと、藤堂等に何らか隠しているような節があつた。個人的な事情であれ世間的な問題であれ、いずれは聞かなければならない事であるように思われていた。自分から話してくれるのであれば、それに越したことはない。

「私は鳳に追われている」

全員が一様に目を見開いた。え、と渚が呟く。藤堂はハンドルを握つたまま、前方から意識を逸らさないようにするのが精一杯だった。まさかそう来るとは、考えてもみなかった。

何も今話さなくとも時間は幾らでもあっただろうと思うが、最近では、事務所に全員が揃うことも少ない。芹香は全員が居る場で話しかかったのかも知れないが、藤堂からしてみれば、しっかりと腰を落ち着けて聞きたかった。運転しながらでは、話は聞きづらい。斜め聞きしていいような話とも思えなかった。

「過激派の反乱があつてな。穏健派に属していた社員は、殆どが退職に追いやられている。私も会社にいられなくなった」

「反乱つて……」

渚が呆然と呟いたが、芹香は俯いたまま首を左右に振る。憂えているような仕草だった。

「中立派の上司に後のことを任せてあつたから、今までは問題なかったが、ここを収めた以上、関係者に口止めしても噂が流れるだろう。見付かるのは時間の問題だ」

もし仮に鳳の人間に見つかつたら、その時は、どうするのだろうか。素直に彼女を渡すわけにも行くまい。あの大企業を相手取つて、戦おうとでもいうのだろうか。

だから芹香は、こちらへ来るのを渋つたのだ。彼女は、迷惑は掛けれないと確かに言っていた。詳しく聞かなかったこちらの落ち度ではある。

「……黙っていて、済まない。お前達には、迷惑をかけるが」

「何を仰いますやら」

ゆなは芹香に向かつて、片手を伸ばした。不思議そうな顔をして、芹香はその手を軽く握る。条件反射だろうか。

神妙な面持ちで話を聞いていた明が、苦笑いを浮かべた。

「元々は、私が何も聞かずにしつこく誘っちゃったからいけないんです。謝らないで下さい」

気がつけば、ゆなの家の近所まで来ていた。藤堂は周囲を走る車がないことを確認して、速度を落とす。

「心配しなくとも、私達は鳳の方々に対抗出来ない程、弱くはありませんわ」

芹香は目を丸くして、二人を見ていた。握った手を、ゆなが軽く振る。

「迷惑なことなどありません。芹香さんはゆなのお友達です。お友達が大変な時には、出来る限り力になります」

ゆなの言葉が、藤堂の胸に沁みだした。同時に、少しでも不安を抱いた自分を恥じる。

何も怖がることはない。ここを収めたのだから、追っ手を恐れる必要などない。今は誰が欠けても、全員が困る。だから今日ゆなを信じたように、何があっても信じなくてはならない。

藤堂は緩く口角を上げ、バックミラーに映る芹香に向かって、笑みを浮かべて見せた。

「お前がいなくなったら、全員困る。そんときゃそんな時だ」

バックミラー越しに見えた芹香の笑顔は、普段となんら変わりなく、ただ綺麗だった。

自宅の前に着くと、ゆなは車内に手を振りながら車を降りた。家が近いという明も、一緒に降りて行く。お疲れさん、と声を掛け、藤堂は二人を見送る。

車を再び発進させながら、藤堂は考える。深く聞かないのが、優しさというものなのかも知れない。彼自身、そう思っていた。しかし聞かないでいられるほど、藤堂は優しくはなれない。

芹香は何故、一人追われる身となったのか。以前明から聞いた内部抗争の件が理由ではあるのだろうが、彼女の味方には常務がいたはずだ。結局聞けず仕舞いだったから詳しくは分からないが、芹香と堤常務は血縁関係にあると見て、まず間違いないだろう。

何故、彼は動かないのか。彼は未だ、社内に残っているのだろうか。それなら何故、芹香を護ってやらないのか。芹香は何故、一人になってしまったのか。

本人がそれを話そうとしないから、この場で聞くのは躊躇われた。言いたくないのか、言う必要がないと思っっているのか。定かではないが、今日のことと併せて聞かなければならぬだろう。

否、聞いたかったただけだ。単純に知りたかっただけで、そこに必然性はない。

渚の家の前に着くと、後部座席の二人は反対のドアから別々に降りた。二人で暮らすには大きすぎる家に、藤堂は何度見ても圧倒される。

「お疲れさん」

「お疲れさま」

渚は素っ気なく返して、門を開けて中へ入って行った。車の前を通って、芹香が渚の後を追う。

「堤、ちよつと」

車の窓から身を乗り出した藤堂を、芹香は体ごと振り返った。

「明日話せる？」

続けて問うと、芹香は目を丸くして大きく瞬きした。門柱に取り付けられた灯りが、彼女の髪を照らし出している。

「……行けばいいか？」

「ああ……ウン」

深く考えていなかった。藤堂は軽くなった頭を搔いて、頷く。芹香は小さく笑った。

「分かった、また連絡する」

「ああ、お疲れさん」

「お疲れ様。あなたもゆっくり休んだ方がいい」

曖昧に笑い返し、藤堂は芹香が門の中へ入るのを見送る。背中揺れる銀髪が初めて見るもののように思えて、どこか気恥ずかしくなった。

第七章 過去の人 一

二日酔いにも似た頭痛を覚えて目を覚ました藤堂匡は、寝ぼけ眼を擦りながら携帯を確認して、一気に青ざめた。時間は十七時十五分。眠りに就いたのが午前四時頃だったから、半日以上は寝ていた計算になる。これでは頭も痛くなる筈だ。

一通だけ来ていたメールには、買い物に付き合わされているから、夕方頃に行くと書かれていた。

そういえば、と、藤堂はメールを打ちながら考える。彼にとって は休みなどないのが当然だから気にしていなかったが、休日を設けてやるべきではないだろうか。日曜日は来ても来なくてもいいと言っていたが、休日の方が依頼は多いから、結局全員が毎日出勤して来ているような状態だった。

盆の時期は比較的安全だそうだから、一度休みを作ってやろう。実家に帰って、墓参りもしなければならぬ。

タンスに置いた携帯電話が震えたので、着替えながら画面を覗き込んだ。今から行くとだけ書かれてある。彼女が来る前に、自分の腹を満たしたい。

蒸し暑いダイニングへ入って、卓袱台に置いたままのリモコンを拾う。もう夕方だというのに室温が三十度を超えており、藤堂はうんざりしながら冷房をつけた。

冷蔵庫を開けると、中には色鮮やかなゼリーが積まれていた。一昨日もらった礼の品だろう。真夏日が続くこの時期だから有り難くは思うが、残念ながらゼリーで腹は膨れない。色とりどりのカップを避けて奥の方を探ると、昨日の昼食の残りが出て来たので、皿を引っ張り出して冷蔵庫のドアを閉めた。

呼んだはいいが、どう切り出せばいいのだろう。老婆心からの行動だったが、細かくこう聞こうと考えていた訳ではない。どんなに上手く聞いたところで、彼女が答えてくれるとは限らない。

味気ない食事を終えて煙草に火を点けたところで、チャイムが鳴った。滅多に使わないこの家の玄関は、流し台の真正面にある。狭いDKだから仕方ないのだが、入って真つ先に台所があるというのはいかなものかと、藤堂は常々思う。

玄関の戸を開けると、堤芹香は珍しく片手に鞆を持って立っていた。細身のジーンズのせいも、いつもより更に足が長く見える。薄手のキャミソールの上に半袖の長いカーディガンを羽織っているが、それが余計に白い胸元を強調させている。凝視しないように目を逸らしながら、藤堂は上がってとだけ言った。

「お邪魔します」

開けた扉から入った芹香が横を通り過ぎる間際、かすかな芳香が鼻先を撫る。コンコルドで無造作に上げられた髪と、抜けるように白いうなじが眩しく見えた。

藤堂は、無意味に緊張していた。考えがまとまっていない事もある。それよりも、休みの日に会う同僚というのが主因のように思えた。私服というだけで全くの別人のように見えてしまうから、不思議なものだ。

「渚に散々連れ回されたよ」

クツションを引き寄せながら、芹香は卓袱台に着いた。その渚が、床へ直に座りたくないと言って持ってきたものだ。洗いそびれていた皿を流しへ置いて、藤堂はふうんと鼻を鳴らす。

「電車？」

「ああ。執事が荷物持ちでな」

単語しか喋らないのによく意図が酌めるものだと感じたが、毎日のように話していれば、そうなるかも知れない。現に明などは、藤堂が何も言わなくとも、彼が何を考えているのか理解しているような節がある。藤堂は滅多に口を出さない分、顔に出るのだ。

冷蔵庫から麦茶を取り出してコップに注ぎながら、藤堂はまだ、悩んでいた。そもそもどう聞けばいいのかも、よく分からない。こっとういっただけは、口下手な自分が歯痒く思える。

「何時頃から？」

「一時だったな……ああ、ありがとう」

コップを受け取ると、芹香は一気に半分ほど飲み干した。そんな素振りなど全く見せないから忘れかけていたが、やっぱり外は暑かったのだらう。

「そっからずっと買い物か。高屋敷も飽きねえな」

「執事が大変そうだったよ。最後には、顔が見えなくなるほど買い物袋を持たされてな」

想像して、少し笑った。そしてふと気付く。

渚と執事の話をしようと思つて、芹香を呼んだ訳ではない。しかしどう切り出すべきか、迷っていた。あの時のように、寂しそうな顔をさせることがなければいい。口から産まれていれば、幾分楽だったらうに。

「あのさあ」

煙草に火を点けながら、藤堂は唸るように切り出した。

「あの子、お前んとこの社長が飼つてた霊？」

「そうだが」

あつさりと肯定され、拍子抜けした。目を丸くする藤堂に、芹香は苦笑する。

「あの屋敷の主があれとは思わなかったがな」

「事情は知らねえのか」

「残念ながら……だが社長の飼い霊が主だったということは、そういう事なんだらう」

「あそこは鳳が幽霊屋敷にしたってこと？」

末端の社員が近隣住民から金をせり取ろうと画策しているかと思えば、社長が暗躍しているような節もある。つくづく鳳というのは、胡散臭い企業だ。

「あそこが幽霊屋敷と呼ばれるようになったのは、鳳コーポレーションが設立される前だと聞いている。あの屋敷を利用しようとしていると考えた方が、賢明だらう」

「どつちにしろ、ロクなこつちやねえな」

芹香は暗い表情で頷いた。案外簡単に口を割ってくれたが、考え込むような表情に、藤堂は不安を煽られる。

「社長が何を考えているのか、私には分からん。それどころか、社員の誰一人として知らない可能性がある」

「なんで？」

「一度、屋敷を封印しただろう。結果的には剥がされたが、あれにはどこからも反対意見が出なかったんだ」

ふうんと鼻を鳴らし、藤堂は灰皿を引き寄せて煙草の火を消す。

「逆にさ、あそこで何かやってつから、封印した方が都合良かったって可能性はないの？ 上は知ってたとか」

煙草に火を点けながら顔を上げると、芹香は顎に手を当てて考え込んでいた。会社を辞めたのにまだ悩まされるとは、彼女も大変だと他人事のように考える。

「有り得るかも知れんな。札を剥がしたのが過激派の守銭奴共だとすれば、社長が私に戻れと言ったのも頷ける」

「随分お前にこだわってんね」

芹香は一瞬、悲しそうに眉を顰めた。口下手な代わりに、観察力ばかり身に付いてしまっただけじゃない。

藤堂はそこで、芹香は鳳の社長と何かあったのではないかと勘繰る。そう考えれば仁科がちらりと言った言葉も説明がつくし、拘る理由も分かる。疑問なのは、それを快く思わない己自身だった。

「……いや。関係ない」

返答の意味はよく分からなかったが、彼女が何を考えているのかぐらいは、鈍い藤堂にもおよその見当はつく。何かあったのだろう。これ以上、彼女の口から社長の話を聞きたくなかった。

「お前、なんで追われてんの」

芹香は僅かに切れ長の目を細めた。

「昨日も言ったが」

「じゃなくて。なんで一人で追われてんの。その……」

社長は、と言おうとして、やめた。あまり余計な事を考えたくない。全く関係のない事ばかり気にしてしまう。

芹香はようやく言葉の意味を理解したようで、ああ、と呟く。「誰も知らないからだ。社長も私が社を離れた事は知っているようだが、過激派の動きまで把握しているかどうかは分からない」

結局、社長の話になってしまった。藤堂は一人気まずくなつて、皿を洗おうと立ち上がる。芹香は、そんな彼に何も言わなかった。何故嫌なのか、分からなかった。芹香は滅多に感情を吐露しない。だが彼女が浮かべる表情から、少なくとも慕っているであろう事は分かる。それが恋情であるのかどうかは別として。

藤堂は顔をしかめて、スポンジを握り締める。

それがなんだと言うのだ。彼女が誰に惚れていようと、藤堂には関係のない事だ。それでも、小骨が刺さつたように何か喉につかえていた。

「……社長はな、何かと私を気にかけてくれた。何かあれば、私を助けてくれた」

そう、と呟いて、藤堂は皿を水切りの上へ置く。

「尊敬していたよ。あの人がいいたから、会社を離れる事も躊躇つた」肩越しに盗み見た芹香の横顔はいつも通りに凜々しかったが、どこか寂しげにも見えた。懐古するような彼女の話しぶりに、胸が痛む。

「あの日、もう駄目かと思つた時、あの人に来てはくれまいかとさえ思つた」

藤堂は口を挟まなかった。相槌を打つ事さえ憚られ、何も言えない。あの日というのはいつの事なのかと思つたが、聞くことも出来なかった。聞きたくもない。

「甘えていただけなんだ。たかが『白銀』を必要とする人に縋ってしまうほど、心細くて堪らなかった」

え、と呟いた。芹香は視線を床に落としたまま、苦笑いを浮かべる。

「あの人も同僚も、私を見てはくれなかった。彼らにとっては、私
が会社を辞めて白銀でなくなれば、価値などないも同然なんだ」

「少なくとも。相手がどうであれ、彼女は気にしている。しかしそ
ちらは今、関係のないことだ。」

「そりゃ……ねえだろ」

長い睫毛が伏せられ、色素の薄い瞳を隠している。藤堂は流し台
を背にして、呆然と芹香を見下ろしていた。

「私にあったのは、名だけだ。私自身には、何もなかった。あなた
達に会うまでは、友人と呼べる者もいなかった」

孤独だったと、言うのだろうか。あれほど有名だった白銀が。否、
そうではないだろう。

孤独なのは、芹香だった。必要とされていたのはつまり、白銀と
いう名前と力だけだったのかも知れない。膨らんでそれだけが一人
歩きする通り名を、彼女はどう思っていただろう。そう呼ばれる事
さえ、快くは思っていなかったのかも知れない。

「私を私として見てくれたのは、常務だけだった……察しの通り、
堤久礼太は私の父だ」

「……じゃあ、親父さんは」

芹香は膝の上で、拳をきつく握り締めた。手の甲に、痛々しいほ
どくつきりと筋が浮く。

「死んだよ、殺された。かつての部下にな」

藤堂は、背中に冷や水を浴びせられたような錯覚に陥った。

かけてやる言葉が見つからない。下手な慰めなど言っても、彼女
は喜ばないだろう。

「でもな、泣けなかった。薄情な娘だろう」

愕然とする藤堂に気を遣ったのか、芹香は顔を上げて微かに笑み
を見せた。無理に作っているような表情が、痛々しい。

藤堂はつくづく、気を遣わせてしまう自分を情けなく思う。こん
な時、気の利いたことでも言ってやればいいのに、それが出来な
いから彼は自分に呆れる。

寂しかったのだろうか。少なくとも、彼女の内に孤独感があつた事は、藤堂の思い過ごしではないだろう。頼れる人もいなかったのなら、泣いている暇などなかった筈だ。

「……泣かなかつただけじゃないの」

芹香は目を丸くして、驚いたように藤堂を見上げた。

「我慢してたんだろ」

「いや……」

藤堂は戸惑つたように視線を外す芹香の目の前に屈み、その頭に掌を置く。子供にするような手つきで軽く撫でてやると、彼女は何とも形容のし難い、気の抜けた表情を浮かべた。その目が僅かに揺れ、徐々に涙が浮かんで行く。

祐子は、芹香に自分の境遇を重ねたのかも知れない。父親を亡くし、一人になつた彼女に。だから芹香が止めに来るであろう事も分かつていながら、追われる彼女を匿つたのではないだろうか。或いは、止めて欲しかったのだろうか。

頭を撫でてやりながら、藤堂は口元に笑みを浮かべて見せた。

「泣いていいよ」

睫毛が濡れていた。芹香は藤堂の胸へ倒れ込み、頬を伝つて零れ落ちた涙を隠そうとするように、顔を埋める。白い指先がおずおずとシャツを握るのを見て、藤堂は胸が詰まるような感覚を抱いた。

泣きたい時は、泣けばいい。我慢しなければならぬ状況であつたとしても、泣かなければ胸に溜まつたものは流れて行かない。

「目の前で死んで行く父を置いて、逃げてしまった」

懺悔でもするかのように、芹香は掠れた声で呟いた。床に座り直しながら、藤堂は彼女の背中を宥めるような手つきで撫でる。意外に思えるほど薄い背は、微かに震えていた。

「結局私は父に、何もしてやれなかつた。怖かつた」

ほとんど涙声で聞き取りにくかつたが、その分彼女の想いは伝わつた。頼りない肩の骨張つた感触がただ、痛々しい。

「怖かつたんだ……」

芹香はもう一度、消え入りそうな声で呟いた。彼女のような人間にとって、弱い部分を吐露する事は容易ではなかったろう。それを吐き出して貰えたのが他ならぬ自分であつた事が、藤堂には嬉しかった。

何故そう思うのか、もう気付いていた。気付かないようにしていたのか、本当に気付かなかつたのか、己でも判らない。けれど確かに、祐子の言つた事は正しかった。

「そりゃ、誰でも怖い。お前が逃げたのが悪いんじゃないよ」

恋と自覚する事を恐れていた理由も、もう思い出した。そもそも誰かに依存する事自体を恐れ、ずっと避けてきた。他人に深く関わる事も、思い入れる事もなく、全てから逃げていた。

逃げない事で、救われる人がいる。真っ直ぐに向き合えば、少なくとも、寂しい思いをさせる事はない。

額が触れた胸が、やけに熱い。泣いて彼女の体温が上がつたのか、自分の体が熱いのか、藤堂には分からなかつた。ただこんな場面で妙な気分になる自分が、恨めしい。

芹香はそのまま暫くの間、肩を震わせて泣いていた。藤堂は蛍光灯の白い光を反射して柔らかに輝く銀髪を、見るでもなく眺める。冷房が効いている筈なのに、胸が熱くて堪らなかつた。

「……あの」

藤堂は躊躇いがちに声を掛ける。肩の震えが止まっても、芹香は顔を上げなかつた。

「ゴメン、あの」

「あなたは」

藤堂は思わずどきりとした。掠れた声が、やけに甘く聞こえる。普段の彼女の声からは、想像もつかないような響きだった。それも自分の考え過ぎなのではないかと、そんな懸念を抱く。

白い耳が赤く染まつているのを見た瞬間、彼女の体が恐ろしく華奢に感じられた。背中に添えた掌が、自然と汗ばむ。

「私のような女は、嫌いか」

シャツを握る指に、力が籠められた。藤堂は何も言わずに、彼女の髪を纏めていたコンコルドを外す。滑らかな髪がするりと解けて背中へ落ち、芹香は弾かれたように顔を上げた。

白い細面に朱が上り、目元まで赤く染まっている。頬に残った涙の痕を親指の腹で拭い、藤堂は背中に添えた手を肩へ回した。

「嫌いじゃないけど」

彼女の言葉の意味が分からないほど幼くもないが、藤堂は曖昧に返す。顔を寄せると、芹香は視線を外したまま、困ったように眉尻を下げた。その表情にまた、息が詰まる。

最後に誰かを好きになつたと自覚したのは、いつだっただろうか。もう暫く、こんな風に浮ついた気持ちになることはなかった。

「それは……」

「ゴメン。好き」

背中へ回した腕で上半身を抱き寄せると、息を呑む音が聞こえた。ようやく藤堂を見た色素の薄い目は、羞恥の為かまた別の理由でか、泣き出しそうに潤んでいる。その目に笑いかけると、芹香は微かに笑みを浮かべて見せた。綺麗な顔だと、そう思う。

小鳥のように速い鼓動が、触れ合った胸から伝わる。顔を覗き込むようにして唇を重ね、そのまま向こう側へ体重をかけたが、芹香が胸を押し返したので止めた。

「あ、ゴメン。つい」

「いや、その、そうではなくて」

耳まで赤くして、芹香は言い淀む。反応が妙にぎこちない。

「……ここでは、嫌だ」

藤堂は目を丸くした後、小さく笑って頷いた。

第七章 過去の人 二

昨夜は散々だった。連絡するのを忘れていたせいで、気がついた時には渚からの着信履歴がとんでもない数になっていた。芹香は慌てて祐子の家に泊まると連絡を入れたが、こつぴどく叱られたようだ。根回しをしようと電話をした藤堂も、祐子にしこたま怒られた。結局何故怒られたのかよく分からなかったが、この歳になって怒られている自分は一体なんなのだろうと思う。

翌朝目覚めた藤堂は、隣で眠る芹香を見て心臓が止まりそうになった。寝ぼけた頭で、何があったのか反芻する。怒られた事ばかり浮かんできたので、思い出さない方が良かったかも知れない。

欠伸を漏らしながら起き上がり、藤堂は携帯を確認する。時間はいつもより少し早い。祐子からメールが入っていたが、着替えを持って行くという以外はろくでもない内容だったので、返信しなかった。祐子からのメールには、大抵どうでもいい事しか書いていない。芹香を起こさないようにそっと起き上がり、藤堂は洗面所へ入る。窓を閉め切っているせいか、恐ろしく蒸し暑かった。足に張り付くジーンズの生地が鬱陶しい上に、肩から背中にかけて痛かったが、不思議と不快ではない。気持ちの問題なのだろう。

歯磨きを終えた所でチャイムが鳴ったので、慌てて干してあったシャツを外して頭から被った。玄関の扉を開けると、紙袋を手にした新藤祐子がやついている。藤堂は思わず嫌な顔をした。

「すつきりね藤堂君」

祐子にはやついたまま紙袋を差し出した。今日はフォーマルな服装だが、相変わらずシャツの胸元は大きく開いている。少し日に焼けたように見えたが、言ったら怒られそうなので何も言わなかった。

「こないだあんたが来た時には、髪切ってたけど」

「やあねえトボけちゃって、このスケベ」

「どつちが？」

袋を受け取りながら、藤堂は顎を掻いた。床屋に剃られた髭が生えきっていないので、手触りが少々寂しい。

「で、どう？」

「どうもこうもねえよ、言ったる。あいつ握力どんだけなん……ちよ、痛っ」

聞かれたから答えただけのつもりだったが、藤堂は頭を叩かれた。祐子はまだにやけた笑みを浮かべている。何がそんなに楽しいのだから。

楽しむのは勝手だが、叩くのはやめて欲しかった。頭をさすりながら、藤堂は肩を竦める。

「泊まつといて何もなかったら不能かホモよ。おねーさん心配してたのよ、あの子ネンネでしょ」

「あんたもつくづく死語使いだな」

「お黙り」

祐子が再び片手を振り上げたので、藤堂は慌てて身を引いた。機嫌がいいのか悪いのか、さっぱり分からない。

「しっかしあんた手早いわねえ。淡泊だと思ってたけど」

「俺もそう思ってたけど」

「やだ、やめてよちよつと。純情ぶつたノロケ聞く気なんかないわよ」

何故そう思ったのか藤堂にはよく分からなかったが、祐子は嫌そうに顔をしかめて顔を背けた。藤堂は困惑して首を捻る。

開けた扉に凭れ、祐子は小さく溜息を吐いた。どことなく険しいその表情に、藤堂は思わず身構える。帰ろうとしないうところを見ると、説教の一つでもしたいのかも知れない。

「お父さんのお墓参り、行ったのかな」

些か拍子抜けして、藤堂は眉を顰める。

「行ったんじゃないの？ 聞いてない」

「あの子泣いた？」

「泣いてた」

そう、と呟いて、祐子は少し俯いた。今度は何事か、考え込むような表情を浮かべている。祐子の考えることは、藤堂には分からない。

「じゃあ、大丈夫かな」

「何？」

小さく首を振り、祐子はドアを押さえて身を起こした。

「なんでもない。じゃーね」

藤堂の返答を待たず、祐子はドアを閉めた。残された藤堂は首を捻り、少し悩んだ後、扉に鍵を掛けて寝室へ向かう。

芹香はまだ、眠っていた。起こすのも忍びないので、タンスの上に紙袋を置いて再びダイニングへ入る。気付けば時間は十時を回っており、藤堂は心中祐子を恨む。この分だと、朝食はゼリーだけになりそうだ。

冷蔵庫から麦茶を取り出してコップに注ぎながら、ふと、祐子は何か懸念していたのではないかと考える。芹香の父親の事は昨夜詳しく聞いたが、供養がされていないということはなさそうだ。ならば一体、何を心配していたのだろうか。

流し台の上の窓を開け、藤堂は煙草に火を点ける。

浮かばれないかも知れない。殺された上、娘の命まで狙われては、おちおちあの世へ行ってもいられないだろう。しかし、もしそうなら真っ先に、娘に会いに来るのではないだろうか。

「匡」

名前を呼ばれたことに驚いて振り返ると、いつの間に着替えたのか、芹香が寝室の扉を背にして立っていた。長袖の開襟シャツを折って着ているところを見ると、夏に入る前、祐子の家へ置いて行ったものなのだろう。

顔が赤い上、視線があらぬ方を向いている。寝乱れた髪を手櫛で整えながら、彼女はおずおずと発声した。

「洗面所を借りる」

「……ああ、うん」

思い出さないようにしていた記憶が蘇ってきたが、気にしない事にした。芹香は結局藤堂を見ないまま、洗面所へ入って行く。

濡れたシンクに煙草を押し付けて火を消し、換気扇の下に放置されたゴミ袋へ吸い殻を捨てた。そろそろ捨てに行かなければ、いい加減臭ってきそうだ。いつでもゴミが出せるのは便利でいいが、安心感があるせいか、度々捨てに行くのを忘れてしまう。

こんな事になるとは、思ってもみなかった。呼び出した時には下心など微塵もなく、話を聞こうと考えていただけだというのに。後悔はしていないし結果的には嬉しい事だが、他の女性陣にばれてしまったらと思うと、憂鬱だった。明には特に黙っていたい。

冷蔵庫を開けて貰い物のゼリーを取り出したところで、芹香がダインングに入って来た。まだ顔が赤い。

「なに照れてんの」

黙ったまま左右に首を振り、芹香は俯いた。しかしゼリーのカップを目の前に差し出すと、素直に受け取る。少し可笑しかった。

「もう高屋敷来るから。多分」

洗濯機の音が、微かに聞こえる。窓から吹き込む青臭い風が、髪を揺らした。あれほど冷たく見えていた銀髪が、急に色づいて見える。うん、と呟いた芹香の頭に掌を乗せ、軽く叩くように撫でた。

嬉しいような、困ったような表情を浮かべた顔をようやく上げ、芹香は眉を顰めた。その顔さえも、藤堂には可笑しく思える。胸につかえていたものが取れたかのように、気分が軽い。

「藤堂さん！」

芹香の顔が一気に青褪め、藤堂から距離を置いた。藤堂は凍りついたまま、恐る恐る廊下を見る。瞬間、店へと続くドアが開いて、顔を強張らせた知恩院明が顔を出した。

何故明が、こんな時間に。そう思ったところで、渚が連絡したのだと気がついた。さっさと渚に連絡をしていれば、こんなことにはならなかっただろうに。

「どうしてもう来てらっしゃるんですの」

高屋敷渚は厳しい表情を浮かべて、明の後ろから室内へ入って来た。藤堂は思わずたじろぐ。渚が近付いて来るのを見て、芹香の顔が引きつった。

「ゆ、祐子の家は、ここから近いだろう」

「関係ありませんわ」

渚に詰め寄られ、芹香はゼリーを片手に持ったまま身を引いた。子供ではないのだから、外泊ぐらいでそんなに怒る必要はないだろうと藤堂は思う。

ちらりと横を見れば、明が鬼のような形相で睨んでいた。藤堂は半ば自棄になって、誰と何をしようがこちらの勝手だ、と思っただけだった。わざわざ自分から火に油を注ぐような真似をするほど、彼は愚かではない。

渚は唐突に藤堂を振り返り、片手を差し出した。藤堂は目を丸くして、え、と呟く。

「さあ、大人しくそれを渡しなさい」

一瞬、何のことが藤堂には分からなかった。は、と更に呟いて、渚の顔と差し出された手を交互に見る。

「黙って食べようとしてたんでしよう！」

「え、なにを？」

渚の手が、藤堂の手からゼリーをひったくった。何を怒られているのか、藤堂には全く分からない。

恐る恐る明を見ると、彼女もきよんとしていた。恐らく怒っている理由が、それぞれ違っていたのだろう。まさか渚は、このゼリーが欲しかっただけなのだろうか。渚なら、それも有り得ない事ではない。

啞然とする三人のことなど、渚の視界には入っていないようだった。彼女は藤堂から取り上げたゼリーのパッケージを見て、目を輝かせる。

「やっぱり線引屋のゼリーじゃない！」

「あの、高屋敷さん、なんの話……」

渚は藤堂の問いかけを無視した。流しの下への引き出しから勝手にスプーンを取り出し、卓袱台に着く。鼻歌でも歌いだしそうなほど、嬉しそうな顔をしていた。

藤堂は芹香と顔を見合わせ、首を捻った。明が呆れた目で渚を見ている。貰った時点で、紙袋から中身を判断したのだろうか。しかしあれは、百貨店の袋だったはずだ。否そんなことよりも、渚はただ単にゼリーが食べたかっただけなのだろうか。

怯えていたことが馬鹿馬鹿しく思えて、藤堂は力なく笑った。明は頭痛を堪えるように額を押さえ、左右に首を振る。

「芹香、高屋敷に全部食われるぞ。メイも」

「いや、私は……」

「私はいらぬ。渚さんにあげて」

渚は上機嫌にゼリーを口へ運んでいる。明の方は、何を怒っていたのか結局分からなかった。渚のお陰で明に睨まれずに済んだと思えば、ゼリーに感謝すべきだろう。

「芹香さんが泊まりに行ってるって言うから、何かと思った」

「芹香にスプーンを差し出しながら、藤堂は低く呻いた。

「だから祐子さんのとこだって。ウチじゃなくて」

「そんなこと一言も言っていないけど」

明はどこか冷めた目で、藤堂を見ていた。芹香はさっさと渚の方へ逃げてしまふ。あちらとしても、明の質問責めにあつのは御免だろつ。

逃げ出したくてたまらなかった。明の視線は痛いし、どこことなく気まずい。

「お前はなんでこんな早いんだよ。いつも昼過ぎだろ」

「渚さんが、大変だって言うから」

「何も聞いてなかったのか」

頷いて、明は迷惑そうに渚を睨んだ。しかし睨まれた本人は気にする事なくゼリーを口に運び、代わりに隣にいた芹香が怯えたように肩を竦めた。

「芹香さんに何かあったのかと思っただよ。そしたら、ここに
いるし」

「ああ……」
それなら表情が硬かったのも納得出来る。しかし渚が真つ先にこ
こへ来た事に、何故疑問を持たなかったのだろうか。

案外明は、あまり深く考えて行動出来ないのかも知れない。元々
そういつた嫌いはあったが、普段は落ち着いているから、感情に流
されているだけなのだと思っていた。藤堂の他人に流される性質が
うつつたのだろうか。

「……そういえばさ、もう個人行動しない方がいいんじゃないか
冷蔵庫を開けてゼリーを取り出しながら、藤堂は肩越しに明を見
た。店番をしようとしたのか、廊下へ出て行きかけていた明は、藤
堂を振り返って首を捻る。

「そうだね……渚さんは執事さんと一緒だからいいけど、私達は誰
かと離れない方がいいかも」

明はダイニングに戻って、渚の隣へ腰を下ろした。卓袱台を囲む
形で、藤堂も床に胡座をかく。彼がゼリーの蓋を開けた頃には、渚
も芹香も既に食べ終わっていた。

「メイは、ゆなと一緒の方がいいだろうな」

明は芹香に頷いて見せ、ちらりと掛け時計を見た。ゆなが来るま
では、まだ時間がある。

早々とゼリーを平らげ、藤堂は煙草に火を点けた。味が濃すぎて
口に合わなかったが、渚はあれが好きなのだろうかと全く関係のな
い事を考える。誰が誰と行動しようが、彼にはどうでもいいことだ。
「そうですね。まだ教える事あるし……」

三人分のゴミとスプーンを纏めていた渚が、眉を顰めて首を捻つ
た。

「でも、それだと芹香さんが一人になってしまいますわ」

「匡がいるだろう。コウもいる」

「匡？」

明が怪訝な声を上げた。芹香の顔が一気に青ざめる。

「今匡って言いました？」

顔を引きたらせた明に、芹香は慌てて左右に首を振って見せた。

藤堂はもう、どうでもよくなってしまった。

「い、言っていない、気のせいだ。眼科に行け」

「眼科行ってどうすんだよ、耳鼻科だろ」

大きな溜め息を吐いて、渚が立ち上がった。不毛な会話に入るのが嫌なのだろう。

明の鋭い視線が、顔に刺さる。藤堂は台所に立つ渚の背中を眺めながら、何故こんなにも怯えなくてはならないのだろうと思う。何も後ろめたい事はない。ただ偶然惚れてしまっただけだ。

明には、確かに悪いと思う。彼女からしてみれば、憧れの人を取られたような心境だろう。それも、こんなだらしない男に。

「……ゆなには黙つといて」

視界の端で、芹香が目丸くするのが見えた。明の表情は確認出来ない。見るのが怖かった。

渚は三人に背を向けたまま、何も言わなかった。会話は聞こえていただろうに、ただ黙々と昼食の支度をしている。

「良かったね」

藤堂は怪訝に片眉を寄せて、ようやく明の顔を見た。浮かべられた表情は、どこか嬉しそうにも見える。

「だから言ったじゃない。いつかいい人が出来るって」

「あ？ ああ……そうだな」

そういえば、そんな事を言われたような気もする。怒鳴られるものとはかり思っていたから、拍子抜けしてしまった。怒られたかっただけでもないが。

明はそれきり何も言わず、立ち上がって出て行った。女心は分からない。

藤堂は芹香と顔を見合わせ、首を捻った。渚が何も言わないから、どこことなく気まずい。ゆなが早く来てくれる事を祈るばかりだった。

第七章 過去の人 三

黒江ゆなは、藤堂宅へ入ってくるなりむくれていた。昼食を食べ終わっても一言も口を利かず、白い頬を膨らませて藤堂を睨んでいる。明がばらしたのかも知れない。だから言うなと言ったのにと、藤堂は心中溜息をつく。

「ゆなさん、早く事務所に出なさい。メイさんが一人になってしまっじゃない」

「ゆなはストライキ中なのです」

藤堂は背後の会話を、聞くでもなく耳に入れる。芹香は皿洗いをさせようにも、皿を割るから任せられないし、いつも後片付けをしているゆながこの状態だから、彼は仕方なく食器を洗っていた。

申し訳ないような気分だった。悪いことをしたつもりはないが、ゆなが後片付けを放棄するほど怒るとは思っていなかった。色恋沙汰など所詮個人の自由なのだから、怒られる謂われもないのだが。

渚は困り顔でゆなを宥めていたが、やがて溜息を吐いて立ち上がった。無駄だと判断したのだろう。

「芹香さん、そんな顔をしないで」

食器を拭きながら肩越しに背後の様子を窺うと、ゆなは未だに藤堂へ恨めしげな視線を送っていた。その横で、渚が芹香の顔を覗き込んでいる。

「藤堂が悪いんですわ、藤堂が。出ましょう」

「いや、それは……」

助けを求めるような目で見られたが、藤堂にはどうする事も出来なかった。悪いと言われたら、そうなのかも知れない、とも思う。だから敢えて言い訳はしないし、口を挟む気もなかった。悪い事をしたとは思っていないが、申し訳ないとは思う。

渚は藤堂には何も言わず、芹香を引っ張って店へ出て行った。ゆなと二人にされると、尚更気まずい。

果たして明は本当に、ゆなに告げ口したのだろうか。ゆなはまた渚のように、全く違う事で怒っているのではないだろうか。そうならまだいいと、藤堂は食器を片付けながら考える。

「何故に藤堂さんは、自分の口から話そうとしないのです」

食器を全てしまい終えた藤堂に、ゆながようやく声をかけた。

「ゆなは藤堂さんが誰を好きでも、怒ったりはしませぬ」

藤堂は体ごとゆなに向き直り、流し台に凭れた。見上げてくるゆなの表情は、未だに硬い。

「藤堂さんはいつもそうなのです。大事なことは全部抱え込んでしまいます。昔の事だって、話してくれませんでした」

「忘れてたんだよ、アレは」

「つい昨日の事は、忘れてはおりませんでしたように」

ゆなから目を逸らし、藤堂は頭を掻いた。結局のところ、彼女が怒っていたのは、藤堂が隠そうとしていたからなのだろう。良かれと思つてした事が、裏目に出ってしまった。

確かに藤堂は、自分からは何も語ったりしない。自分の事を話するのは得意ではないし、何より彼は口下手だ。どうせ上手くは伝えられないと、最初から諦めている部分もある。

「藤堂さんが気を遣ってくれているのは分かります。でも、ゆなは話して欲しいのです。皆さん、それを気にしておられました」

思い返してみれば、自らについて何を話した事もなかった。わざわざ伝える事など、ないと思つていた。話したくなかったと言えば、そうだったのかも知れない。

深い付き合いになるような友人は、ここ数年いなかった。そもそも旧知の仲である鹿倉ともあまり会わないから、自分のことを話すということ自体、考えが及ばなかった。話を聞くばかりで、話すことはない。しかし友達付き合いをする上で、それでは駄目なのだと、今更ながらに思う。

「霊の記憶を見る時、藤堂さんはとても辛そうにしておられます。少しでも、話して下さい。きっと楽になります」

藤堂は少し眉根を寄せてから、曖昧に笑った。一人で抱え込むなと言いたいのだろう。

「ごめんな」

ゆなは大きく頷いて、立ち上がった。

「分かって下されば、良いのです。明さんの事も、その内聞かなければなりませんね」

「そうだな」

結局、助けられてばかりいる。散々気を遣われているのに気付かない自分が、あまりにも情けなく思えた。子供と思っただけで見てくびっていたが、子供だからこそ、分かるものもあるのだろう。

何かあつたら今度は話そうと、藤堂はそう思う。それで少しは、気も紛れるかも知れない。

店へ出ると、渚は既にいなかった。携帯電話を耳に当てた明と芹香が、並んでカウンターに座っている。

「はい、今から行きます……あ、ゆなちゃん」

電話を切った明は、出てきたゆなに気付くと、振り返りながら席を立った。

「依頼来たから、行こう。行ってきます」

「行ってらっしゃい」

芹香が返すと、ゆなは明と一緒に手を振り、事務所を出て行った。どうにも忙しない。

仕事が増えるのはいいが、ただでさえ人数が少ないのに、これ以上忙しくなったら、手が回らなくなってしまうそうだ。ゆなが浄霊に成功したとはいえ、彼女は厳密には従業員ではない。実質行動出来るのは三人だけだから、些か辛いものがある。

定期的に休みを作るうえにも、これでは難しいかも知れない。夏なのだから、少しは休ませてやりたいのだが。

「メイに、怒られたよ」

取り留めもなく考えを巡らせていた藤堂は、思わず間抜けな声を漏らした。芹香は藤堂を見て苦笑いを浮かべる。

「何故話さないのかとな。そこまで信用がないのかと、昨日渚にも責められた」

「ああ、俺もゆなに怒られた」

煙草に火を点けながらぼやくと、芹香は喉を鳴らして笑った。怒られたと言う割に、随分と機嫌がいい。

実際彼女は、嬉しいのかも知れなかった。何も言わない事を怒るほど、親身になって貰えることが。一人で過ごして来たというから、友人と呼べる間柄にある人間が出来たことが、嬉しいのだろう。

叱られるのは嫌だななどと考えておきながら、藤堂自身、嬉しく感じている。怒られて嬉しいと言つと、どことなく気味が悪いが。

「馬鹿だったな。さつさと言つてしまえば良かったものを……追い出されてしまうのではないかと、不安だった」

「え、なんで？」

藤堂は思わず問い返す。芹香は怪訝に眉を顰めて、僅かに首を捻つた。

「……私達の事ではないぞ」

しまった、と思った。当然だろう。芹香が怒られていたのは、一昨日の事に関してだ。昨日の事しか頭にないような自分が、恥ずかしく思えた。

「いい子だな、あの子達は」

ああ、と返して、隣を盗み見た。整った横顔が、どこか嬉しそうに緩んでいる。

最初と比べたら、芹香もよく笑うようになった。藤堂にはそれが嬉しくもあり、見る度に気恥ずかしくもなる。自分は間違いなく、彼女に惚れているのだろうとも思う。

それでも疑念は拭えなかった。藤堂は鈍い性質の人間だが、気付かない程愚かではない。

芹香は社長を気にしている。それがどんな人物で、具体的に何があったか、推し量る事は到底出来ない。それでも、嫌な勘というのは大抵当たってしまうものだ。

無論、芹香を疑うわけではない。彼女が告げた気持ちに嘘偽りはないと信じているし、嘘を吐いたところで、得はない。疑っているのは、未だ未練があるのではないかという、そういった類の事だった。

「匡」

思わずびくりとする。飛んでいた意識を戻して視界に映した芹香は、真顔だった。何を言われるのかと、その凛々しい美貌を見ながら内心はらはらする。

「私は、幸せかも知れない」

藤堂は一瞬、固まった。唐突に何を言い出すものかと、怪訝に思う。

しかしその言葉の意味を反芻して理解すると、思わず笑みが零れた。笑い出した藤堂を不思議そうに眺めていた芹香が、つられて噴き出す。肩を震わせて笑う彼女の頬に朱が上るのを見て、込み上げるものを感じた。

「何、いきなり」

「いや、分かん」

幸せと言うなら、そうなのかも知れない。

頬にかかった長い髪を避け、藤堂は子供のように破顔した恋人の顔を覗き込む。芹香は少し驚いたように眉を上げたが、逃げる事はしなかった。代わりに頬が更に紅潮する。

瞼が落ちるのを待つて触れた唇は、やけに熱かった。元々体温が高いのか顔に熱が籠もっているせいなのか、定かではない。ただ、疑念も何もかも、どうでもよくなった。

「……熱いな」

熱いのはお前の顔だと言いたくなかったが、やめた。藤堂は顔を離し、視線を入り口へ向ける。

いつも通りの風景だった。のんびりと通り過ぎる老人の姿も、代わり映えない町並みも、何故だか嬉しく感じられる。そんな自分の心境の変化が、藤堂には意外に思われた。

ぼんやりと眺めていた自動ドアが、唐突に開いた。藤堂は驚いて目を丸くしたが、視線を落してみると、段ボール箱を持った少女が立っている。珍しい依頼人だと思ったが、手元の大きな箱が揺れるのを見て、首を捻った。

「お嬢ちゃん、どうしたのそんなの持って」

物珍しそうに店内を見回していた少女は、藤堂に問いかけられて、抱えていた箱を突き出した。藤堂は思わず身を引く。

「買ってほしいの」

隣の芹香と顔を見合わせ、藤堂は再度首を傾げる。カウンターに置かれた段ボールは、蓋が閉じられているので、中が見えない。おもちゃか何かだろうか。

未成年がものを売るには、両親の同意書が必要だ。そう説明しても、少女には分からないだろう。適当に理由をつけて、断った方が賢明だ。

うつんと唸り、藤堂はカウンターの外側から見上げて来る少女に、視線を移す。

「開けるよ」

少女が頷くのを待ってから、藤堂は箱を開けた。中身を確認して、思わず嫌な顔をする。

箱の中で、子猫が鳴いた。綿毛のような白い毛並みと細い尾が、ゆらゆらと揺れている。藤堂と目が合うなり香箱を作っていた猫が立ち上がり、彼を見上げてまた鳴いた。芹香が頬を染める。

暫く子猫を見ていた藤堂は、呆れた目を少女に向けた。

「……お嬢ちゃん。ウチはペットショップじゃないよ」

「なんでも買ってくれらるんでしょ？」

「生き物はダメ。モノと一緒にしちゃダメ」

「ペットショップでは売ってるよ」

藤堂は、ぐつと言葉に詰まった。助けを求めようと隣を見ると、芹香は子猫を見詰めたまま微動だにしない。役に立たない。

「質屋に売るのはね、モノなの。生き物じゃないの」

「モノってつくよ」

ああ言えばこう言う。少し言葉を知り始めた歳の子供は、これだから困る。

「猫は生きてるだろ。そのバッグは生きてないだろ」

「バッグは死んでるの？」

「死ぬ死なないじゃなくて……この猫どうしたの」

埒があかないので、話を変えた。少女は首を傾げて不思議そうに藤堂を見る。

「もらったの。でもおうちにはいらなくて、お母さんに言われたから」

啞然とした。娘が娘なら親も親という事だろうか。

質屋には、この手の人間が稀に訪れる。実家に居た頃にも、犬を押し付けられたと言って、父が嘆いていた事がある。

こんな時代だからと、両親は諦めていた。死が今生の別れではなくなつた今だから、命の重さが分からない人間が増えている。霊が見えない藤堂にとっては、死とは耐え難いほど重いものなのだが。

日常的に霊を見るようになったら、そうは思えないのかも知れない。除霊屋達は霊と生者との違いをしっかりと認識しているから、誰かを亡くせば、当たり前前に悲しむ。しかし靈感の強い一般人は、死というものを上手く認識出来ない。

命だなんだと言いながら、霊は存在するというのは、確かに矛盾している。死ぬ事で命が失われるというのなら、霊というのは一体何なのだろう。失うのは、体だけではないか。

死んでも、盆にはまた会える。その安心感が、人々に命の重さを忘れさせた。目に見えない命の尊さを説くなど、元より難しい事ではあつたのだ。

殺人という犯罪は、減少傾向にあるという。代わりに、無闇に浮遊霊を抹消する退治屋や、人の死を悲しむ事の出来ない人間が増えている。嫌な世の中だと、藤堂は思う。そんなニュースを見たくないから、彼はテレビを観ない。

「……分かった。買い取れはしねえが、うちで預かる」

「いいよ。あげるね」

少女は案外、素っ気なかった。食い下がられても困るが、結局どこに持つて行っても同じ結果になったのではないかと、藤堂は思う。店を出て行く少女の背中を見送った後、藤堂は子猫の首根っこを摘んで箱から出した。愛らしい声で忙しなく鳴いてはいるが、暴れる様子はない。元々人に慣れているのかも知れない。

芹香が両手を出したので、つまみ上げた猫を抱かせてやった。黙り込んだまま、彼女は表情を緩めた。

「猫好き？」

白い指が、真っ白な喉を撫でる。ごろごろと鳴く猫を見つめたまま、芹香は頷いた。小さいものが好きなのかも知れない。彼女はゆなの頭も、よく撫でている。

「違いが、分からないのだろうな」

胸に乗せられた小さな前足を指先で摘みながら、芹香は呟いた。藤堂は煙草に火を点けながら、ふうんと鼻を鳴らす。

「道徳的な問題だね」

「何が大事なのか、分からない時代だから」

その先は、芹香の口からは出なかった。

世間一般的に大事なものなど、藤堂には分からない。生命を売買することは良くないとは思うが、何がどういけないのかは、結局上手く説明できない。

しかし個人として大事なものを、今の藤堂は持っている。御転婆な友人達も、猫と戯れるこの女も、今では等しく大事に思う。誰が欠けても嫌だ。命を狙われる彼女を守ることは出来ないが、せめて彼女に何かしてやればいいと思う。

随分と、変わってしまったものだ。藤堂はそんな自分を可笑しく思う。変えてくれたのは、間違いなく彼女達なのだろう。

無性に礼が言いたくなって、藤堂は唇だけで、ありがとうと呟いた。

第七章 過去の人 四

執事の大きな拳が、部屋に残った最後の悪霊を破壊するのを見て、渚はようやく安堵の息を吐いた。再度注意深く室内を見回した後、肩掛けのポーチから出した札を、部屋の四隅に貼って行く。依頼人は、部屋の外で待っているはずだ。

「じいや、行きますわよ」

浄化の札を張り終えて執事を振り返ると、彼は窓の外を指差していた。渚は怪訝に細い眉を顰め、ガラス越しに外を見る。

「あら、あの屋敷じゃない」

窓からは、つい一昨日除霊を終えた、幽霊屋敷の屋根が見えた。距離から考えるに、三駅ほどは離れているだろうか。

彼らは、家中に霊が湧くのをごまかして、という依頼を請けて、ここへ来ていた。そういった依頼自体は、全体的に見て少ない。悪質な不動産屋が、霊の集まりやすい場所であることを隠して、部屋を貸したりする為だ。

しかし今回は少々、事情が違うように思われた。まず、この家は築二十年。これまで霊が湧いたことなど、一度もなかったという。それ以前に、家を建てる際に行うお祓いは、高屋敷家の人間に行わせたそうだから、どんなに未熟な者であったとしても、必ず異変に気付く筈だ。更に、近くにはあの屋敷。どうにもきな臭い。

依頼人に聞くより、事務所の人間に相談した方が良さそうだ。渚は心中そう独りごちて、扉を開ける。廊下には、不安げな面持ちの婦人が立っていた。

「全て終わりましたわ」

渚が告げると、依頼人はほっと息を吐いて頭を下げた。

「ありがとうございます」

「札は一ヶ月間、剥がさないようになさって下さい。後ほどお見積りを出しますから、二週間以内にお振り込み下さいね」

「ええ、分かってます。まあまあ、綺麗になっちゃって」

室内を覗き込んだ依頼人は、嬉しそうに頬を緩めた。その顔を見てなんとなく、渚まで嬉しくなる。

「何かございましたら、またご連絡下さいね」

「はいはい」

満足そうな笑みを浮かべた婦人は、玄関まで渚を見送りに来た。

依頼に来た時のやつれた姿から考えてみると、まるで別人のように見える。

「本当に、助かりました」

「いいえ、仕事ですから。それでは」

優美な仕草で一礼して、渚は玄関を出た。途端に真夏の日差しが頭上から降り注ぎ、全身が火照る。渚は慌てて日傘を差し、顔をしかめた。

「なんだか、怪しいですわね」

日傘を少し避けて執事を見上げると、彼は大きく頷いた。肉体を持たない幽霊は、日差しの影響など受けないから、そこだけは羨ましいと渚は思う。

「あちらを叩いたら、今度はこちら……向こうに残っていた霊が、逃げて来たのかしら」

渚は俯いて、日傘が作る影に視線を落とした。言ってみたはいいが、実際そうとは思えない。向こうが駄目だからこちらへ、などといった、大拳して住人のいる家に押し寄せたりはしない。湧き始めたのが梅雨の頃だというから、時期的にもずれているし、こんなに早く大移動を終えたりはしない筈だ。

あの地が元々、霊を呼びやすい土地だという可能性はある。しかし建設前に祈祷したのは、渚の身内だ。ピンからキリまでいるとはいえ、仮にも陰陽師なのだから、年月が経って効果が薄れる術を施すような、愚は犯さないだろう。

ならば、何が原因なのだろうか。考えうる可能性は幾つかあるが、どれも決め手に欠ける。

渚は駅に着いてから暫く考え込んでいたが、改札を抜けると、事務所へ戻る方向とは反対側のホームへ向かう。どうせ、聞かなければならない事は他にもある。

「じいや、お父様のところへ行きましよう」

執事は黙って、渚に着いて来た。彼は渚の意図を酌んでいるのかも知れない。

物心つくずっと前から、彼は忙しい両親の代わりに渚の傍にいた。何があっても彼女の傍を離れたりはしなかったし、どんな我が儘にも付き合ってくれた。そして死んで尚、彼はその姿勢を変えない。

彼は使用人の鑑だ。使用人の立場以上は踏み込まないけれど、渚が辛い時には、必ず親身になって、話を聞いてくれた。渚の気持ちを酌み、常に先を見て行動していた。

今更になつて思う。執事ともつと、沢山話しておけば良かった。実体化した霊は、必ずどこかに支障を来す。食べる必要がないから総じて味覚はないが、それとは別に、必要な感覚の内一つを失う。執事の場合は、口が利けなくなった。何がなくなるかは霊によって違うが、一番多いのはこのパターンであるらしい。

死とは、恐ろしいものだ。盆には会えると慰められても、成仏が人の幸せと言われても、俄かには受け入れがたい。実体化すればまた話は別だが、通常の霊なら尚のこと、実体を持たないから触れられないし、盆にしか帰っては来ない。

霊は間違いなくその人だし、本人であることに変わりはない。それでもその人は、失われてしまう。死んだ時点で、人はこの世のものではなくなる。実体化して現世に居ても、住む世界は隔たっている。その距離が、渚には悲しくて堪らない。

けれど、悲しんでばかりはいられないのだ。渚は実家のインターホンを鳴らしながら、背筋を伸ばす。返答の声と共に、門が開いた。敷地内に一歩足を踏み入れると、懐かしさが込み上げて来た。そう長い間、離れていた訳ではない。けれど変わらない庭園の風景も真っ白な家も、何故だか、いとおしく感じられた。

あの幽霊屋敷の事を知るには、因縁のあつた明と芹香の過去を知るのが、一番早いと思つた。主の話聞いた限りでは、明の方ともかく、鳳コーポレーションはかなり深く関わっているように思われる。かといつて本人達に根掘り葉掘り聞くのは、些かデリカシーに欠ける。

しかし彼女達とは赤の他人である父に事情を聞くのも、やはり気が引けた。彼女達の過去について父は知らない可能性もあるが、少なくとも、鳳の内情ぐらいは知つていよう。

聞かなければならない。あの街に住む、人の為に。屋敷の主に大切な誰かを殺された、明の為に。そして鳳という大企業から追われる身となつた、芹香の為に。

渚は使用人達に出迎えられ、豪華なシャンデリアの下を悠々と進む。メイド頭が慌てて止めに來たが、知つた事ではない。

「お、お嬢様！ 旦那様はもうすぐ応接間に……」

「私に指図しないでちょうだい」

渚は階段脇のエレベーターに乗り、真っ直ぐ父の部屋へ向かう。使用人の居る応接間よりは、父の自室で静かに話したかつた。

赤い絨毯が敷き詰められた長い廊下の突き当たりに、目指す父の部屋はある。ノックもそこそこに扉を開けると、父は長机に腰掛け、入室してきた渚と執事に気付くと、彼はゆつくりと顔を上げ、やあ、と声を掛ける。少し、顔が疲れているように見えた。

「元気そうだね、渚。仕事はどうだい」

「お父様、私は世間話をしに來たものではありませんわ」

父は僅かに眉を曇らせて、うん、と呟いた。既に使用人から、渚の様子を聞いたのかも知れない。存外聡い人だから、渚がここへ來た理由に、気付いている可能性もあつた。

「鳳が何をしようとしているのか、聞きに参りましたの」

渋い表情で、父はゆつくりと立ち上がった。促されて部屋の隅に置かれたリビングセットに腰を下ろすと、父はセンターテーブルを挟んで、向かい側に座る。執事は渚の傍らに立っていた。

使用人が、茶を出しに来る気配はない。真つ先に家長である父親の部屋へ向かった渚に配慮したのか、父が事前に人払いをしていた為なのか、定かではなかった。

「先に言っておくが、私もあちらの詳しい内情は知らない。何を聞いても、行動を起こさそうとはしない事。いいね？」

渚は頷いたが、動かないでいられる自信はなかった。

「今、鳳さんは大変な事になっている。過激派の面々が上層部に楯突き、穏健派の殆どを追い出したからだ」

それはつい昨日、芹香から聞いた。渚は黙ったまま相槌だけ打つ。「どさくさに紛れて、堤君が抜けただろう。それは過激派も想定していたようだ」

「追われているではありませんでしたの？」

「今は探しているよ。中立派の誰かが、彼女に関するデータを全て削除したそうだから、難航しているようだ」

「今は？」

うん、と呟いて、父は言いにくそうに顔をしかめた。顎を撫でながら暫し黙り込み、視線を落とす。渚は無言の間に苛立ちを覚える。

父は顔を伏せたまま、小さく溜息を吐いた。

「過激派の方々はね、人を殺した」

渚は思わず、両手で口元を覆う。人の命を奪う事がいかに重い罪であるか、彼女はしつこく母に説かれ、理解もしている。一般的な意見としては、人の幸せとは、成仏することだと言われている。しかし退治屋は、それとはまた別のことを教わる。

霊と人とは、根本的に違う。その人の霊であっても、霊はその人ではない。霊を想ってはならない、想うぐらいなら死んだ事を悲しむべきだと、母はそう言った。

近しい人を亡くすまで、渚にはその意味が理解出来なかった。しかし今なら分かる。霊とは魂だけの存在であり、人の欠片に過ぎない。ほんの少しでも感情のバランスが崩れれば、全くの別人へと変貌してしまう。それほど不安定な存在だ。

彼らは個として、自我を保っていられない。実体化して使役する事で、執事は形を保っているが、実体化させないまま放っておけば、現世の邪気を受けて変質してしまう。

そんな危うい状態のものを、人と同じであると言えるだろうか。少なくとも、渚には言えない。生きている人間と、霊は違う。死ぬということとは、個としての人が失われるということだ。

その人が、いなくなるということ。それは残された者にとって、何よりも、耐え難い悲しみだ。

「目撃者である彼女は逃げたが、過激派は追わなかった。身を隠している訳だから、告発する事はないだろうと踏んだんだ。しかし事情を知らない末端社員の間で、会社に対する不満が広がっていてね」「白銀が抜けたんですもの。彼女に憧れて入社したような社員のことを考えれば、当然でしょうね」

「それもあるが、末端社員の間にも不審感が広がった一番の原因は、穏健派の大多数が退社に追い込まれた事だよ。流石にこれはまずいと思ったんだろう、彼らは今、堤君を探している」

渚は怪訝に眉根を寄せ、顎に手を添えて首を傾げた。

「何故ですか？ 今更、穏健派の長を会社に戻しても、また抗争が激化するだけだと思いますわ」

「鳳内部ではね、彼女は死んだ事になっている」

そこで一旦言葉を止め、父はテールブルベルを鳴らした。渚には、沈黙が痛い。続きを急かしたかったが、使用人にこんな話を聞かれない、流石にまずい。

渚には無言の間がとつともなく長く感じられたが、実際には五分もなかっただろう。規則的に扉を叩く音がした後、銀のトレーを持ったメイドが入って来る。失礼します、と声を掛けて二人の前にアイスコーヒーを置き、一礼して出て行った。

一緒に出されたストローは挿さずに、父はグラスへ直に口を付けて一気に半分程まで飲み干した。向こうも渚と同じく、緊張していたのかも知れない。

「ニユースは見るかい」

「ええ。ニユースでは、白銀が抜けたと報道されておりますわね」

「そうだ。鳳内部では、そちらが体面を保つ為の嘘だと説明されている」

コーヒーにポーションミルクを入れてかき混ぜながら、渚は表情を曇らせる。

「そんな事、信じますかしら」

「信じるさ」

父は大様に頷き、決然と言い切った。

「鳳内部の者にとつては、常務の娘である彼女が社を離れる事の方が、信じられない筈だよ。もつとも、その常務もいないんだが」

そういうものだろうか。些か腑に落ちなかったが、渚は企業に入った事はないので、そういうものなのかも知れないと思う。

「過激派は力が欲しいんだ、人を統率し得るだけの力が。お金もね」

「力やお金で、人は従いませんわ」

父はかすかに笑みを浮かべ、小さく頷いた。嬉しそうにも見えるその顔はあまりにも会話の内容にそぐわず、渚は反対に顔をしかめる。

娘の表情の変化に気付いたのか、父は一つ咳払いすると、表情を引き締めた。

「彼らは、堤君を使役しようと画策している」

渚は思わず声を上げた。使役するという事はつまり、霊として封じること。霊として、使役するには。

その先は、考えたくなかった。渚は鼻の頭に皺が寄るのを、自覚する。

「……彼らは何をして来るか、私には分からない。君をこのまま堤君と働かせているのも、正直私は心配だ」

「私は一人だけ安全な場所にしようとは思いません」

渚は同意を求めるように、執事を見上げた。彼は大きく頷いて、主人の目を真っ直ぐに見つめる。

「そう言うと思ったよ」

視線を移した父の顔は、やはりどこか、嬉しそうに見えた。気恥ずかしくなって、渚はすぐに目を逸らす。

もう、帰って彼らに報告した方がいいだろうか。そう考えたが、聞かなければならない事がもう一つあることを思い出し、渚は再び父に視線を戻した。

「あの屋敷は、一体何なんですか？ あそこの主は、鳳の社長さんの使役する霊でしたわ」

父の表情が、一変した。目を見開き、グラスに手を伸ばしたまま、凍り付いたように動かなくなる。

これは言葉自体に驚いたのではないと、渚は確信した。父の表情の変化ぐらいは読める。この驚愕は恐らく、渚の言葉自体に反応したが故ではない。渚がその事実を、知ってしまった事に対してのものだ。

「ご存知でしたのね」

厳しい声が出たという自覚はあった。父は険しいものへ変わった娘の表情に動揺し、視線をさまよわせて俯く。

一瞬、静寂が室内に落ちた。父は恐る恐る長い息を吐いて、肩を落とす。

「彼は、実直な青年なんだ」

「そんな事は聞いていません」

びしゃりと言いつつと、父は緩く左右に首を振った。

「知らないんだ。本当に……私は、何も知らない。彼があそこで何をしようとしているのか、彼の意図も、私は知らない」

打ちのめされたように肩を落とす父を見て、渚はつり上がっていた眉尻を下げた。嘘と決め付けるのは簡単だが、この様子を見る限り、とてもそうは思えない。

何も言えなかった。これ以上問い質しても、納得の行く答えは出ないだろう。

「ただ、一つだけ、分かっている事がある」

顔を上げた父は、眉間に皺を寄せていた。渚は浮かせかけた腰を、再びソファに沈める。

「過激派は靈に誰かを奪われた者と、金目当ての者と二種類いるが、目的は、靈体をこの世から廃絶する事で一致している。一方穏健派は彼らを止め、悪霊だけを抹消する為に存在していた」

「知っておりますわ」

「だが中立派だけは、動きが見えない」

渚は怪訝に眉を顰めた。父は大きく息を吐き、苦しげに表情を歪める。口に出す事自体を、ためらっているようだった。

「会社の事を考えれば、過激派をまずどうにかする筈だと、私は思う。しかし彼らは、どちらにも肩入れしない。中立派の殆どが、管理職に就いているにも関わらず、だ」

「中立だから、無闇に手を出せないだけなのではありませんの？」

「尚更だよ。彼らは仲裁しようとしな。派閥に分かれているとは言っても、彼らは同じ会社の構成員だ。止めようと思えば、幾らでも止められる……何より」

父は、そこで一呼吸置いた。少し疲れた顔をしている。

「社長は忙しい身であるとは言え、抗争の事ぐらい知っている。止めないんだよ。常務が死んでも、会社の顔である堤君が離れても」

「それは……」

確かに、妙ではある。普通の会社なら、内部で抗争が起きている事を社長が知っているならば、止めようとする筈だ。社長自身が関わっているなら話は別だが、父の言い方から考えるに、そういう訳ではないのだろう。

「どちらかの派閥に属しているならまだしも、彼は中立派なんだ」

少しずつ、渚の中で何かが繋がって来る。

あの屋敷で、あの少女は芹香に、何と言ったのだったか。芹香はどんな顔をしていただろう。あの屋敷の封印を解いたのは過激派だったようだが、封じる事を決定したのは、誰だったのだろう。鳳内 部で芹香の手助けをしていたのは、誰だっただろう。

竜司は。竜司はあの時、なんと言っていた。彼は、中立派ではなかっただろうか。鳳内部の人間には、死んだと報告していたというなら、彼は何故

渚はゆっくりと立ち上がり、父を見下ろした。

「……一つ聞かせて」

父はゆるゆると顔を上げ、渚に不安げな視線を向けた。

「お父様はどうして、そこまでご存知なの？」

父は苦虫を噛み潰したような顔をして、渚から顔を逸らした。渚は暫くそんな父を見つめた後、執事を促してドアを開けさせる。しかし部屋を出て行きかけたところで、室内を振り返った。

「分かつておりますわ。一番の得意先である鳳コーポレーションと対立したら、高屋敷はやって行けない。親戚の何人が路頭に迷うか知れません。お父様は、何も知らない振りをなさっていて下さればいいの」

静かな声を俯いたまま聞いていた父は、唐突にテーブルへ両手を着いて、額を擦り付けんばかりに頭を下げた。

「済まない、渚。私には何も出来ない。堤君のことも、知っていたんだ。だがこれだけは、信じて欲しい」

顔を上げた父は、目に涙を浮かべていた。

「私は本当に、何も知らない。鴻清十郎（おんせいじゅうろう）が何をしようとしているのかも、中立派の目的も……本当に」

すまない、と消え入りそうな声で呟き、父は項垂れた。渚は暫く黙って父を見つめていたが、やがて深く頭を下げ、部屋を出て行った。

第七章 過去の人 五

三時間ほどで事務所に戻って来た明は、カウンターの上で眠る子猫を見るなり、訝しげな顔をした。一方ゆなは猫を見付けるなり駆け寄って、目を輝かせてその寝顔を覗き込んでいる。時折動く耳に合わせて、ゆなの視線も動く。

藤堂はカウンターから距離を取ったまま首を捻る明を、怪訝な面持ちで眺めていた。ただいまと言ってから十分間、彼女は一言も口を利かない。芹香は丸くなった猫の背中を撫でながら、藤堂と同じく不思議そうに明を見ていた。

猫が嫌いなのだろうか。最近では、四足歩行の動物は、臭いから嫌いだと言う子供が多いようだが、その類かも知れない。そういえば彼女は、タバコの煙も得意ではなさそうだ。

甘えるような鳴き声が、芹香の手元から聞こえてくる。目を覚ましたのかと藤堂が考えるより先に、子猫はのっそりと起き上がって伸びをした。

「にゃー」

猫につられたように、ゆなが呟いた。芹香が子猫とゆなを交互に見て、頬を仄かに染める。小さいものなら、なんでも可愛いのだろう。小さいと言うと、ゆなは不機嫌になるのだが。

凝視するゆなに向かって小首を傾げた猫は、愛らしい声で鳴いた。ゆながそれに応える。芹香が噴き出した。

「お前人間じゃなかったの」

ゆなが藤堂を見上げると、子猫も同じく彼に顔を向けた。

「そうかもしれない。実はゆなは、夜になると猫になってしま
「嘘つけ」

言葉を遮って吐き捨てると、猫が鳴いた。くるくるとよく動くピ―玉のような目は、しきりに辺りを見回している。愛くるしいその様子を、ただ一人明だけは、険しい表情で見つめていた。

「ねえ……その猫、どうしたの？」

明の声は、少々硬かった。相変わらず猫と距離を取ったまま、動こうとしない。問い掛けに答えるのも忘れ、そんなに嫌いなのかと藤堂は考える。

「子供がな……飼って欲しいと」

芹香は事実をそのまま言いかけたが、寸前でイントネーションを変えた。流石に買い取りを頼まれたとは、言い辛いだろう。正義感の塊のような明が、また怒り出すかも知れない。

しかし明は、硬い表情を変えようとしなかった。顔をしかめたまま、居心地悪そうに身じろぐ猫を注視している。流石に怪訝に思ったのか、ゆなが首を傾げた。

「にゃんにゃんはお嫌いですか」

「そういうわけじゃ、ないんだけど……」

明の表情が、不安そうなものへと変わって行く。藤堂はゆなと顔を見合わせたが、芹香は黙って明を見つめていた。明の様子に、彼女も何か、思うところがあるのかも知れない。

「私が連れて帰る。渚の家なら、執事を含めて三人いるから、問題ないだろう」

暫く明の様子を見ていた芹香は、落ち着かせようとするかに、柔らかな声音でそう言った。ゆなが落胆の声を上げたが、明は頷く。渋い表情は変わらないが、不安げな色は消えている。

明はあの猫に、何か感じたのだろうか。猫は元々霊的な力が強いから、それを何かと勘違いしたのかも知れない。こんな状況だから過敏になるのは当然だが、不安なら言っただけ欲しいものだと思う。一度怒られたから、自分の事はもう、完全に棚上げしている。

カウンターの上で居心地悪そうに身じろぐ猫を、芹香が抱き上げて腕の中に収めた。大人しくなった子猫は、芹香の胸にすり寄って丸くなる。

「……なんだコイツ、オスか？」

「何故です？」

思わず言ったはいいが、説明するのも憚られる。藤堂は頭を掻いて、視線を逸らした。猫を注視する明が、視界に入る。

何を気にしているのだろう。藤堂が触れたのだから、この猫が霊である可能性はない。こんな何の力も持たない子猫を実体化して使役したところで、何の役にも立たないだろう。まさか猫がこちらに害を為す訳でもあるまい。

何より、芹香とゆなが気付かない事はない。見た目に騙されはするだろうが、何がしかは感じ取れる筈だ。霊体を透けないようにする術もあるそうだが、こんな子猫にわざわざそんな事をするような、奇妙な霊飼いもないだろう。

「そういえば、メイさん、一昨日のことなのですが……」

ゆなが切り出しかけた時、外から騒がしい足音が聞こえた。自己主張するかのように大きな音を立てながら、近付いてくる。随分と慌てているようだ。

さて急ぎの依頼かと考えながら顔を上げると、自動ドアが開くと同時に男が一人、飛び込んできた。がっしりした体格と、顎ひげをたくわえた熊のような顔を認めた瞬間、藤堂は眉間に皺を寄せて嫌そうな顔をする。

「オイ匡！ やべえ、やつちまった！」

必死の形相で駆け込んできた鹿倉清澄は、カウンターに両手をついて、藤堂に顔を近付けた。途端に鼻を突く、汗と泥の混じったような臭いに、藤堂は思わず顔をしかめる。社長とはいえ、彼も現場仕事はするから、仕方がないといえはそうなのだが。

「何？ とうとう幼女でも攫ってきた……」

「違いようちのバカがだよ！」

鹿倉は一步カウンターから離れてその場に膝を着き、深々と土下座した。これには藤堂も、驚いて目を見開く。全員、何も言えなかった。

沈痛な面持ちで頭を上げた鹿倉は、すまん、と絞り出すように言った。藤堂を見上げる細い目が、心なしか涙ぐんでいる。

「幽霊屋敷を収めたのがお前らだって、言っちゃまったんだ。鳳の奴らに」

「なっ……」

声を上げた藤堂は、反射的に明を見た。彼女は驚愕の表情で、子猫を見詰めている。

呆然と目を見開いていた芹香が、ゆつくりと、腕の中の子猫へ視線を落とした。猫は甘えた声で鳴き、彼女の腕の中から飛び降りる。藤堂の胸を不安がよぎった。

軽やかな身のこなしでカウンターへ降りた猫は、続いて床へと飛び移る。つぶらな瞳で見上げてくる猫を見て、鹿倉は不思議そうに首を捻った。

子猫は更に、高い鳴き声を上げる。先ほどまでのものとは正反対の、不安を掻き立てられるような、不気味な声だった。ゆなが凍り付いたような表情で、凭れていたカウンターから身を起こした。

「猫本来のものと思っていた……抜かったな」

立ち上がる芹香を見ても、藤堂には状況が飲み込めなかった。鹿倉も床に膝をついたまま、猫と芹香を交互に見ている。

これが一体、何だというのだろうか。こんな小さな猫に、何が出来るというのだろうか。藤堂の疑問とは裏腹、場を包む空気は俄かに緊張の色を見せ始めている。

「鹿倉さん、あなたはそのまま帰った方がいい。わざわざ伝えに来て下さった事、感謝します」

「ああ……ええと、どうしたんだ？」

カウンターに立ってかけてあったバットを取り、黙り込んでいた明が店を飛び出した。開いたドアから、子猫が後を追うように出て行く。甲高い鳴き声が耳にこびりついて、離れない。嫌な胸騒ぎがして、藤堂は掌で口元を覆う。

芹香はワイシャツの胸ポケットから手袋を取り出しながら、カウンターを出た。厳しい表情を浮かべる芹香の腕を掴み、藤堂は彼女を引き止める。

「待てよ、あの猫なんだっただ」

芹香は椅子から立ち上がりかけた姿勢の藤堂を見下ろして、僅かに眉を顰めた。

「私が本当にここにいるかどうか、確かめに来たんだ。あの子供は、何も知らなかったのだろうが」

「確かめに来た？ 猫が？」

「猫ではない。恐らくな」

芹香はそれ以上、何も説明しようとしなかった。

藤堂は立ち上がった鹿倉と顔を見合わせ、眉を顰めた。意味が分からなかった。あれが鳳のスパイだったとしても、言うのだろうか。どう見ても、ただの子猫だったのだが。

ゆなは芹香の横をすり抜け、小走りで事務所を出て行く。藤堂は半信半疑のまま、浮かせかけていた腰を完全に上げて席を立った。芹香はそれを追って、落としていた視線を上げる。

「匡、今すぐ戻るよう、渚に連絡してくれ」

「それはいいけど……」

外から悲鳴が聞こえた。明のものでもゆなのものでもないだろう。しかし芹香は叫び声を聞いた瞬間、血相を変えて飛び出して行く。

鹿倉と共に残された藤堂は、呆然と立ち尽くす。まさかこんな早くに手が及ぶとは、思いもしなかった。白昼堂々、往来で乱闘を繰り広げられるのも困りものだが、悠長にそんなことを考えている場合ではないだろう。

「何があつたか知らねえが……お前、どうするんだ」

携帯電話を手にとった所で、鹿倉が心配そうに声を掛けてきた。

彼は藤堂に守護霊がいる事を知らない。

「見守る」

「見守るって……大丈夫なのかよ」

渚にメールを打ちながら、藤堂は鼻を鳴らした。大丈夫なのかと、そう言われても、今はこれが仕事だ。厳密に言えば、今の状況は仕事とは関係ないのだが、想定はしていた事だった。

いつかは必ず、追っ手が来ていた。ただでさえ有名なあの幽霊屋敷で、あれだけ派手に立ち回れば、鹿倉の部下が何も言わなくとも、露見するのは時間の問題だったろう。

今すぐ戻れと簡素なメールを送った後、藤堂はカウンターから出る。店の前で何が起きているか、見届けなければならぬ。一人だけ安全な場所で、のんびりしている訳には行かない。

しかし身を案じてくれる鹿倉に何一つ説明しないでいるのも、申し訳ないような気がした。藤堂は鹿倉の正面に回ると、カウンターにもたれかかる。

「鳳がな、芹香を連れ戻そうとしてんだ」

鹿倉は驚いたように目を見張った。よくよく考えてみれば芹香がこちらへ来た事についても、何も話していなかったように思う。鹿倉も何も聞かないし、藤堂も話さない。

それでも別段構いはしないと、今まではそう思っていた。旧知の仲である鹿倉だからこそ、藤堂が何も言わない事を、責めたりはしない。しかし友人だからこそ、それでは駄目なのだ。甘えてばかりいてはいけないと、藤堂は彼女達に教わった。

「何でだか知らねえけどさ。でもやっぱ、連れ戻されちゃ、こっちは困るから」

太い首を捻り、鹿倉はたっぷりと蓄えた顎ひげを撫でた。

「本人は、なんて言っただ」

藤堂は煙草に火を点けながら、軽く肩を竦める。少し背筋を伸ばしてガラス戸の向こうを見ると、ゆながこちらと道路側を、交互に見ているのが視界に入る。少し焦った。

「戻りたくはないと思うよ」

手を伸ばして灰皿の上で煙草を弾き、曖昧に返した。鹿倉も、そうか、と素っ気なく応える。

鹿倉と真面目な話をするのは、何年ぶりだろう。果たして今まで真面目な話など、彼としたことがあっただろうか。気恥ずかしくもあるが、嬉しくもある。

転校を余儀なくされてから、藤堂は鹿倉と会わなくなった。元の高校自体は別々だったが、お互い高校に慣れるまでは、中学時代の同級生とばかり遊んでいた。転校して忙しくなったせいで、会う機会がなくなつたのだと記憶している。

それでも、縁は続いていた。転校した先で、藤堂にも友人は出来ていたし、鹿倉にも高校で出来た友人はいただろう。数ヶ月に一度連絡を取り合う程度だったが、欠かした事はなかった。奇縁といふべきか、腐れ縁と呼ぶべきか。

大学に入ってから久しぶりに会つた鹿倉は、藤堂を見て、少し驚いたような顔をしていた。あれは多分、藤堂の微妙な変化を感じ取つていたのだろう。あの頃の藤堂には、つるむ仲間こそいたものの、中学時代のように親友と呼べるような友人はいなかった。

思えば、長い付き合いなのだ。藤堂の変化を一番近くで見守つていたのは、恐らく鹿倉だ。そして彼女達と出会うまで、一番彼の身を案じていたのも。

「付き合つてんだろ」

熊のような顔が、笑つていた。藤堂は口元へ持つて行きかけていた手を止め、鼻で笑い返す。

「ウン」

「そんじゃあ、向こうにや渡せねーな」

藤堂が頷くと、鹿倉は意外そうに眉を上げた。当然だろう。何にも執着心を見せる事のなかった自分が、渡せないと明言したのだ。執着していなかった訳ではないが、肯定したのは、これが初めてだろう。

呑気に歓談している場合ではない。外ではきつと、明も芹香も戦つている。それでも、こみ上げてくる笑みを、堪える事が出来なかった。そんな藤堂を見て、驚いた顔をしていた鹿倉が、どこか嬉しそうな笑みを浮かべる。

「お前も変わったな」

「まあね」

一人ではなくなることに、心の底から失くしたくないと思うものが出来たこと。それが藤堂を変えた。心に大きな痛手を負ってからというものの、誰一人信用せずに来た彼を変えてくれたのは、間違いなく彼女達だった。

今はそれを感謝したい。それでも藤堂には、彼女達を守る事が出来ない。手伝うことも出来なければ、何の助けにもなれない。だからこそ、信じようと思う。

目を逸らさずに、真っ直ぐに見ること。それが何よりも大事なことなのだ、今はそう思える。

「お前帰れ」

身を起こしながら、藤堂は携帯を確認した。渚から、どうしたのかと返信が来ている。急がせなければならぬ状況だが、向こうの仕事は終わったのだろうか、今更ながら心配になる。切迫したこの状況で、そんなことを心配している自分が、おかしかった。

鳳が来る。悩んだ末にそう返して、藤堂は携帯を閉じた。鹿倉は彼の肩に手を置き、軽く叩く。

「頑張れよ」

のんびりしている暇はない。藤堂はその声に頷いて、店の奥を指差した。

「うちの玄関から出る。表危ないから」

鹿倉は黙ったまま、カウンターの裏へ入った。藤堂は一つ息を吐き、大きく手招きするゆなに向かって頷いて見せる。

自分があの場合に立つ意味は、恐らくない。守護霊達は彼を守ろうと戦うだろうが、それも、藤堂があの場合にいるからだ。居さえしなければ、小さな守護霊達は、無駄な労力を使う必要はない。

それでも見届けなければならぬ。たとえ霊の記憶を見ってしまうことになるかと、この手で霊を消す銃を撃つ羽目になるかと。誰一人欠けない事を、確認する為に。

何があっても、目を逸らさない。そう心に決め、藤堂はゆっくりと、ドアへ近付いて行った。

第七章 過去の人 六

反射的に事務所を飛び出した明は、同じく駆けてきた子猫と対峙していた。否、あれは猫ではない。明は両手で刀を構えたまま、真っ白な子猫を睨み付ける。

一目見た瞬間、あれは霊だと気付いた。猫とは元々霊力が強い生き物だが、明には霊との微妙な差異が分かる。ただ、芹香とゆなが何の疑いもなく接していたから、言い出し辛かったのだ。そもそも猫の姿で何をしに来たのか、分からない部分もあった。真っ先に襲ってくると思っていたのだが、案外向こうも慎重だったようだ。

確かに猫の気配は、霊のそれと判別し難い。どんなに強い靈感を持った者でも、間違える事がある。退治屋が霊の気配を感じて行ってみたら、猫だった、というような事も、ままある。

それでも、明には分かる。しかしその理由を友人達に告げる勇氣は、彼女にはまだなかった。

「あなた融合霊でしょ。本体は人間だね」

猫は更に鳴いた。あの声で、居場所を告げているのかも知れない。動物との融合霊は総じて妙な能力を持っているから、迂闊に手を出すことも出来なかった。それが尚の事、明を苛立たせる。

対峙する明と猫を物珍しそうに眺めながら、中年の女性がゆっくりとした足取りで、横を通り過ぎて行く。遅れて出て来たゆなは、両手を拳の形に握り締めていた。

猫の姿が、陽炎のように揺らぐ。徐々に人の形へ変わって行く霊を目の当たりにした通行人が、悲鳴を上げた。

「大丈夫ですおばさま。あれは幽霊です」

逃げるように駆け出した女性には、ゆなの声は聞こえていなかった。完全な人の形を取った霊を見て、明は憎々しげに顔をしかめる。悲鳴を聞きつけて飛び出して来た芹香は、明と向かい合う霊を見て、苦虫を噛み潰したような顔をした。

明は腹の底から沸々と、怒りが込み上げて来るのを感じた。意識しなくとも自然と眉がつり上がり、頭が燃えるように熱くなる。刀の柄を握り締め、糸のように細い目をした男を、更に睨み付けた。

「あなた触ったでしょう！」

猫背の霊は、明の怒鳴り声に僅かに肩を竦めた。芹香が目丸くして、は、と呟く。

「あなた芹香さんの胸触ったでしょう！ 信じらんない！ ヘンタ
イ！」

霊の細い目からは、感情の片鱗さえ窺い知ることが出来なかった。しかし僅かに肩を竦める仕草から、困っているのであることは辛うじて分かる。明はその様子を見て、更に苛立つ。

芹香は何も言えなくなっていた。何を言っているのだとも言い
たげな表情で、呆然と立ち尽くしている。ゆなは呆れ返るばかりで、
表情さえ変えられない。元々無表情だが。

「……だつて、猫だし。悪い？」

「悪いに決まつてるでしょヘンタイ！ 触っていいのは私と藤堂さ
んだけなんだから！」

一応僅かに残った理性で藤堂への譲歩はしたが、明は腹が立つて
仕方がなかった。己の感情をコントロールする事が出来ないから、
こうして周囲を困らせる羽目になる。落ち着いてから心苦しくは思
うものの、一度憤慨してしまうと、自分でもなかなか収めることが
出来ない。

男はふうんと鼻を鳴らして、芹香に顔を向けた。明の相手をする
事を諦めたようだ。

「戻ってくれませんか？」

「嫌だ」

芹香の即答を聞いて、明は少しだけ落ち着いていた。男は首を捻って
ふうんと唸り、頬を搔く。

「あなた達が芹香さんを追い出したんじゃない！ 今更戻れなんて、
どういふこと？」

少しは落ち着いたが、明の怒りは収まらなかった。憤慨する明に、男は更に困ったような顔をする。人を食ったようなその態度が、更に明の神経を逆撫でした。

鳳が何を考えているのか、明には分からない。そもそも追われているとは芹香から聞いたが、連れ戻そうとしているのか殺そうとしているのか、詳しい事は知らない。何故そうなったのかも、結局聞けず仕舞いだっただけだ。

それでも。

明は考えながら、憤る己を制する。それでも、あの人を守りたい。何も伝えて貰えなくても良い。明自身、仲間達に言っていない事が山ほどある。隠し事は絆が強くなればなるほど、言い出せなくなるものだということは、明が一番よく知っている。

だからこそ、何も聞かない。彼女には彼女の事情があるし、明には明の事情がある。それでいい。

きっと藤堂は、彼女の事情を知っている。だから彼は今、事務所から出て来ないのだ。だから旧知の仲である鹿倉と、未だに話をしている。

藤堂は変わった。しかし明は変わらない。周りの感情に押され、流されているだけだ。贖罪のつもりではないにしろ、だから何が何でも、彼の大事な人を護りたい。

そう考える事自体が罪であると、分かっているのに。

「こつちも、少し事情が変わったの。即戦力が欲しいんだ」

「私がそちらに肩入れするとも思っているのか」

凜とした声に、明は背筋が伸びるような感覚を抱いた。

彼女は強い。一人で居たからこそ、彼女は強かった。だからこそ、一人ではないのだと証明したい。

「じゃあ、皆来るまで待っていて。僕、戦闘には向かないの」

拍子抜けした。待っていると言われて素直に待っていたくはないのだが、事務所を特定された以上は、向こうが来るまで待つて迎え撃つしかない。しかしそれでは、明の腹の虫が収まらないのだ。

明は刀を片手に持ち替え、体の前に構えた。猫との融合霊は、困ったように眉根を寄せる。

「浄霊屋が、抹消する気？」

明は浄霊屋ではないと言いたくなかったが、やめた。

「セクハラは犯罪だよ。現世で犯罪行為をした霊は、たとえ誰かが使役している霊でも、抹消するのが決まりでしょ」

「メイ、少し無理があると思うんだが……」

芹香の呆れた声は最早、明の耳には入っていないかった。

男はぐるりと首を回して、舌舐めずりでもするように唇を舐めた。明は眉をつり上げて、彼の動向を注視する。

「まあいいや、もうすぐ来るから。どうせ僕も戦わされるし」

両腕を下げたまま掌を開いた男の指から、尖った長い爪が伸びる。猫と同じ構造に変異しているのかも知れない。

明が身構えたのとほぼ同時、男は高く飛び上がった。慌てて刀を頭上に掲げ、防御の姿勢を取った明の頬を、鋭い爪が掠めて行く。ばら色の頬に赤い筋が三本走ったが、明は痛がる素振りも見せず、やや後方へ着地した男を振り返りながら、水平に刀を振った。煌めく刃が首筋を正確に狙って迫るが、それが辿り着く寸前で地面に屈んだ男は、大きく身を反らして避ける。流石に猫と融合しているだけの事はあると言うべきか、異常なまでの柔軟さだった。

小さく舌打ちを漏らした明は振り切った刀の向きを変え、男に向かって打ち下ろす。男は瞬時に体勢を変え、四つん這いになってその場から逃げた。鋼の刃は、虚しく空を切る。明は男を追って地を蹴ったが、その時にはもう、彼は間合いの外にいた。

伊達に猫と融合してはいないという事か。明は悔しげに歯噛みして、刀を引っ込める。

諦めた訳ではない。無駄に消耗する事を恐れたただけだ。

「あれ、もうやめる？」

男の声は聞かない振りをして、明はちらりと芹香を見た。明より彼女の方が速いのだが、果たして猫に追い付けるかどうか。

芹香は僅かに首を横に振り、事務所の中を見詰めたまま微動だにしないゆなへ、視線を落とした。渚がいない今、ゆなに目標を定められたら、ひとたまりもない。

接戦は、避けた方がいいように思われる。しかしこの男は、あちらに加勢が来る前になんとかしておきたい。

「あなたどうして死んだの？」

男は僅かに表情を硬くした。聞かれたくない事だったのだろう。浄霊するという道も捨てきれていないのだが、死んだ理由を聞かなければ、とてもそういう気にはなれない。

「教えない」

短く返答して、男は明に飛びかかった。明は振り被った長い爪から身を翻して逃げたが、男は着地した瞬間、彼女の背中へ向かって片腕を振る。それとほぼ同時に振り返った明は刀を縦に構えて両手で柄を握り、爪を弾き返した。金属同士がぶつかり合ったような、高い音が響く。

耳障りな甲高い音が木霊した瞬間、男はあからさまに顔をしかめてその場から飛び退いた。耳のいい獣であるが故か、大きな音に弱いようだ。怯んだ男に気付いたのか、芹香がようやく動く。

細かな文字が書かれた白い手袋が、僅かに光る。芹香は男が退いた先に飛び込み、その首の後ろを掴んだ。反応の遅れた男は、目を見開いて悲鳴を上げる。肉体のある人間は何も感じないが、霊がある手袋に触れると、術者に害意がありさえすれば、掠めるだけでも激痛が走る筈だ。

「お前達は、私をどうするつもりだった？」

男の首から、白煙が立ち上る。断末魔にも似た絶叫が、大きく開かれた口から継続的に迸る。暴れる男は芹香の腕をがむしゃらに掻いたが、戒めが解かれる事はなかった。

鋭い爪が肌を掠める度、白い腕に幾つもの赤い線が走る。痛みを感じないのではないかと疑うほどの無表情を保ったまま、芹香は男を見下ろしていた。

男の苦痛に歪んだ表情に、明は胸の痛みを覚える。無論、芹香に悪気がある訳ではない。退治屋の彼女には、こういったやり方しか出来ない事ぐらい、明も重々承知している。しかしこれではあまりにも、残酷に思えた。

「首が落ちる前に吐け。お前達は何をしようとしている？」

「言えるか！」

そうかと呟き、芹香は存外あっさり男の首を離した。よろめいて倒れこむようにその場に膝をついた男は、真っ赤に爛れた首を押さえて呻く。

実体化した霊は、少しの傷なら時間が経てば治る。しかしあそこまで傷つけられてしまったら、札に戻って術者に頼るしか、治癒の方法がない。その術者も、現れる気配がなかった。

明は眉根を寄せ、苦しげに呻く男から視線を逸らす。あまりにも痛々しかった。ついさっきまで、抹消してやるうと思っていたはずなのに、今は哀れにしか思えない。

「あんだ、こんな事ばかりしてるんだ。嫌われるよ」

男の声は、掠れていた。最早逃げる気力もないのだろう、芹香に向かつて皮肉ぶった笑みを浮かべたまま、その場から動かない。彼女は何も答えなかった。

彼が何故死んだのか、本人の口から聞かない限りは、藤堂でなければ分からないだろう。生前の悪行が祟ってしまったのか、それとも時間経過と共に悪霊化したのか。それすら定かではないが、どちらにせよ、哀れには思う。

今彼が傷ついているのは、鳳の霊飼いのせいだ。霊飼いに捕まりさえしなければ、もしかしたら、彼は誰かに浄化してもらえていたかも知れない。

芹香は俯く明を見て、視線で男を示した。意味が分からず、明は怪訝に表情を歪める。

「浄化しろ。今なら出来るだろう」

明は思わず目を丸くした。男は面食らった様子で眉を上げる。

芹香は最初から、その為にこの男を傷付けたのだらうか。哀れむ心がなければ、救うという確かな意思がなければ浄霊出来ない事を、彼女は知っていたのだ。そして明の心が、ただの説得では動かないことも。

明はそこで気がついた。芹香は恐らく知っている。明の事も、恐らく両親の事も。祐子には気付かれていたようだが、まさか、芹香までとは。

否、彼女が勘付かない筈はないだらう。芹香は明が知る限り、一番の退治屋だ。液晶テレビの向こう側で、出来る事なら霊を救いたいと漏らした、ただ一人の退治屋。一緒に働くようになった今も尚尊敬の念を抱く、たった一人の強いひと。

気付いていても、彼女は明と普通に接してくれた。何も伝ええない事を、怒らずにしてくれた。

明は芹香に向かって、大きく頷いた。

「楽になりたい？」

明は首を押さえたままうずくまる男の目の前に立って、そう聞いた。男は眉間に皺を寄せ、返答をためらう。

「あなた悪霊になって、日が浅いんでしょ。破壊衝動より、まだ理性の方が勝ってる」

男は黙り込んだまま、明から視線を逸らして下を向いた。うなだれた男の首が深く抉れているのを見て、明は僅かに眉をひそめる。痛いだらう。痛いはずだ。

刀を持った手をゆっくりと持ち上げ、明は切っ先を男の額に向けた。彼は何も言わないし、逃げる気配もない。悪霊が説得で改心する事はないが、まだ人としての理性が残っているから、浄化されたくない筈もないだらう。

銀色に輝く切っ先が、男の額に吸い込まれて行く。きつく閉じられた男の目尻から、涙が一粒零れ落ちた。うずくまった体が、透明度を増して行く。

「メイ、避ける！」

突如として叫んだ芹香の声に反射的に顔を上げ、明はその場から飛び退いた。背後から飛んできた札が、男の体に当たる。明の顔が一気に青ざめ、男の叫び声が木霊した。何かが弾けたような音と共に、男の姿が消え失せる。

明は混乱して真っ白になった頭で、思う。
消されて、しまった。

呆然と立ち尽くす明の視界に、店から出て来た藤堂の姿が入った。明はゆっくりと振り返り、凍り付いたような表情の、藤堂の視線が向いた先を見る。

「残念、避けてしまいましたか」

芹香が憎々しげに表情を歪め、声を発した男を睨んだ。明は男の姿を目にした瞬間、思わず呟く。

「あなた、あの時の……」

黒いスーツの袖口から覗く、呪文の彫り込まれた手は、確実に見た事がある。白髪混じりの髪と、酷薄な笑みを浮かべた唇も。そして、胸で金色に輝く、鳳凰を象った徽章も。

見間違う筈もない。あれは間違いない、黒江家から金を絞り取るうと画策し、失敗した元鳳社員。しかし彼は、解雇された筈ではなかっただろうか。

混乱する明を尻目に、芹香は怒りも露わに小田原を睨み付けた。

「小田原、貴様……」

一歩近付いた芹香を制するように、小田原は片手を挙げた。以前とは、まるで態度が違う。

「おっと元課長。今日は私だけではありませんよ」

小田原はゆっくりと道の端へ避けた。その後ろからひよろりとした男が一人、悠然と近付いてくる。芹香が目を見張った。

「川重専務！」

腫れぼったい目をした男は、細い目を更に細めて、にっこりと微笑んだ。

第七章 過去の人 七

藤堂は啞然としていた。明に向かつて札を投げた男にも、その後ろからやってきた男にも、確かに見覚えがある。明もゆなも、凍り付いたように動かなかった。

札を投げた、あの男。あれは確か、解雇されたものではなかったか。その後ろから来た細身の男は、幽霊屋敷を初めて訪れた時、あの場にいた者ではなかったか。

藤堂は冷たい汗が背中を伝う感覚に、身震いした。まさか、あんなに前から。あれほど前から、内部崩壊の兆しはあったのだろうか。それなら。

それなら鳳の社長は、一体どこで何をしているのだ。

「お久しぶりです元課長。お元氣そうで何よりです」

「白々しい挨拶はいい。貴様が穩健派の中枢をあこの屋敷で無駄死にさせたこと、私が知らなかったとでも思うのか」

青白い顔をした男は、柔和に笑みを浮かべて小さく頷いた。

「ご存知でしたでしょうか。数少ないあなたの味方が、殆ど亡くなったのですから」

川重かわしげは不気味なまでに穩やかな笑顔のまま、そう言った。藤堂は彼のその佇まいに、寒気さえ覚える。

この男が殺したというのだろうか。死者が何人いたか、詳しいコースの内容まで藤堂は覚えていない。しかし決して、少なくとも人数ではあった。

「お前は何がしたいんだ。社長がいらないのをいいことに社を乗っ取り、何をしようとしている」

「知れた事」

懐から札を取り出した川重は、更に笑みを深くした。しかしどう見ても、目は笑っていない。底知れぬ恐ろしさを感じて、藤堂は思わず一歩後退する。

こんな所で、戦おうと言うのだろうか。幸い人は通らないが、道幅が広い訳ではない。家屋を壊してしまう恐れもある。

「お戻りに？」

「戻らん。だがここは人の目がある、やり合うなら……」

「避難勧告を出しております。これ以上、会社の評判を下げたくはありませんので」

「用意周到なことだな」

吐き捨てた芹香は、スーツの二人の背後へ視線を向けた。小田原が怪訝に眉根を寄せ、振り返ったところで目を見開く。間に合ってくれたかと、藤堂は安堵した。

「あなた方、私を待たないつもりでしたの？」

屈強な執事を従えて歩み寄って来たのは、渚だった。小田原が俄かに動揺の色を見せる。流石に高屋敷家の一人娘の顔ぐらいは、知っているのだろうか。

しかし川重は渚を見ても、表情を曇らせることさえなかった。それどころか、益々浮かべた笑みを深くする。

「高屋敷さんのお嬢様ですか。お久しぶりです」

「あなたが過激派の頭目でいらしたのね」

親しげな川重の声とは反対に、渚の言葉には険があった。小ばかにしたように鼻を鳴らした彼女は、執事と共に藤堂達の方へ近付いてくる。

「大企業の専務ともあろう方が、お金に目が眩むなんて」

「温室育ちのお嬢様には、分かりますまい」

川重が、手にした札を軽く振った。その札から、丸太のような腕が伸びてくる。続いてつるりとした頭と、太い首が出た。更に這い出して来る、太い筋肉の束だけで構成されたかのような、逞しい体。

藤堂はその巨体を目の当たりにして、絶句した。二メートルはあろうかという大男に、渚が顔をしかめる。執事が小さく見える程の霊だったが、あの少女のような、底知れぬ恐ろしさは感じない。感覚が麻痺しているのかも知れなかった。

あれと、戦うのか。そう考えただけで、目眩がした。藤堂とゆなを守るように、彼らに背中を向けて立ちほだかった渚は、執事を顎で促す。破れた袖から伸びる腕には既に力が入っているようで、浮き出た血管がはっきりと見て取れた。こちらも頼もしいものだが、あの大男とは、一回り以上体格差がある。不安ばかりが、藤堂の胸をよぎった。

川重は、更に懐から取り出した札を振る。這い出して来たのは、狼のように鋭い目つきの、やはり体格のいい青年だった。こちらは執事より一回りほど小さく、殆ど人間の形を残してはいるものの、唇が左右に大きく裂けている。微かに唸り声を上げているところを見ると、犬との融合霊だろうか。

「誠に残念ですが、あなた方には死んで頂きます」

その声はしかし、どこか楽しそうに聞こえた。川重が一步下がったのが合図であつたかのように、距離の隔たつた三人へ、小田原と霊達がそれぞれ迫る。

執事へ向くかと思われた小田原の拳は、しかし明に向かつて振り下ろされた。執事が飛びかかった狼男の牙を拳で受け止め、弾き返してから、明に駆け寄る。藤堂は怪訝に眉を顰めたが、響き渡つた衝突音に驚いて、目を見張つた。

「なんて事……」

渚は呆然と呟いて、緩く首を左右に振つた。丸太のような腕が、アスファルトに突き刺さっている。筋肉達磨と対峙する芹香は、怯む事なく舞い上がった粉塵を避けて、巨体の懐へ飛び込む。振り被つた拳は巨大な掌に止められたが、じゅう、と嫌な音が聞こえた。

標的を明から執事に変えた小田原は、姿勢を低くして彼の懐に入り込む。年齢を感じさせない動きだったが、一方執事も速かつた。執事は握り締めた両の拳を、小田原の頭上へ振り下ろす。すんでのところまで横へ避けた小田原は、執事の脇腹へ手刀を叩き込もうと腕を振つた。しかしその腕は執事の手にしっかりと掴まれ、服に触れる寸前で止まつたまま、それ以上進まない。

狼男の爪を刃で受け止めた明は、逃げようとする体をそのまま押し返して、アスファルトに叩き付けた。尻を着いた男に向かって刀を振り下ろすが、男はすぐさまその場から飛びのく。空中で体勢を整えて塀を蹴り、狼男は大きく口を開けたまま、明の喉笛目掛けて飛び込んで行く。

振り下ろした刀を引き戻し、明は突っ込んでくる男に向かって、切っ先を向ける。勢いよく飛んできた男は一瞬驚いて目を見開いたが、片手で刀を弾いた。その手から白煙が立ち上り、男の視界を奪った隙に、明はしゃがみ込む。彼女の頭上すれすれを通り過ぎた男は、空中で体を捻って向きを変えながら着地した。

「流石にタフだな」

形の良い唇が緩やかな弧を描き、笑みの形を作った。芹香は次々繰り出される拳を避けながら、さも愉快そうに呟く。藤堂はその表情を見て、言い知れない不安を覚えた。祐子の一件で感じたものと、同じ感覚だ。

芹香は、楽しんでいるのではないだろうか。抹消する事それ自体ではなく、戦う事を楽しんでいるように見える。何が彼女を駆り立てるのか、藤堂には分からない。出来るなら救いたいと言った彼女のその言葉に、嘘偽りはないと信じている。

元々、住む世界が違いすぎていた。彼女には、仕事しかなかった。それとはつまり霊を抹消する事であり、戦うこと。娯楽も自由な時間もなく、それしかなかったのだとしたら。

だとしたら彼女には、それが全てだったのだろう。楽しんでいるのは事実かも知れない。それでも、幸せだと漏らした時のあの表情に、嘘はなかった。そう信じているし、疑う余地もない。

「じいや！」

渚が大声を上げた。小田原の手が執事の腕を掴み、白煙を上げさせている。執事はすぐさま小田原の手を振りほどいたが、腕にはしつかりと跡が残っていた。執事の目がつり上がり、浅黒い腕が小田原の首を狙う。

喉元へ執事の腕が入り込む寸前でその場に屈んだ小田原は、再び彼の腕を捕らえようと、手を伸ばす。小田原は、先に腕を落としてしまおうとしているらしかった。しかし執事も、易々と何度も捕まってしまうほど鈍くはない。

「組み合わせが悪すぎますわね」

激しい攻防を繰り返す三組を見つめながら、渚が呟いた。ゆなが頷いて、その独り言に応える。

「メイさんより芹香さんの方が速いですから、本当なら、オオカミの人は芹香さんに任せられた方が良いでしょうね」

藤堂はつられて明の方を見る。お互いに小さな怪我こそしているものの、どちらが劣性であるとも言えない。

しかし確かに明が追えば向こうはひらりと逃げ、向こうが襲い掛かれば、明は逃げる間もなく防御の姿勢を取っている。受け止めているだけ流石と言えるだろうが、これでは防戦一方だ。犬の足に追いつくだけの速さを明は持っていないから、このまま行くと体力の消耗が懸念される。

「逆に芹香さんには、打撃しか術がないでしょう。確かにダメージは受けているようですが、あちらは恐らく、メイさんが斬ってしまった方が早いわ」

「向こうの思い通りになってしまいましたな」

ゆなの口調は淡々としたものだったが、唸るような声から、彼女の苦い感情は聞き知れる。

芹香の方は腕のひっかき傷以外に、怪我らしい怪我がなかった。しかし幾ら拳を当てても巨体に傷跡がつくだけで、消える気配もない。

体格差が開きすぎて動きを止める事も出来ない上、向こうも愚かではないようで、彼女が引いた隙を狙って拳を打ち込んで来る。破壊力なら身内で一番であろう、手刀の構えを取るだけの時間が取れない。腕を引く間もないのだ。これではいくら芹香が速くとも、時間ばかり掛かってしまうだろう。

渚とゆなはそれ以上言わなかったが、執事の方も退治屋を相手にしているから、少しでも状況が変われば、抹消されてしまう恐れがある。但しこちらは体力に限界のない霊体と生身の人間だから、圧倒的に執事が有利だろう。しかし。

「あの小田原は……どうすりゃいいんだ」

殺人は違法だ。ただの悪霊が罪を犯したなら抹消で済むが、霊飼いの使役する霊が殺人を犯せば、術者が咎められる。執事が小田原を間違つて殺してしまえば、糾弾されるのは渚だ。それだけはなんとしても、避けなければならぬ。

呟いた藤堂を肩越しに一瞥し、渚は力なく首を振った。どうしたらいいか、分からないのだろう。

あまりにも、齒痒かった。しかし藤堂は手を出す事が出来ない。ここから一步でも動いたら、全員の邪魔になってしまう。たかが護身用の破魔銃では、何の役にも立たないだろう。

「お前、なんとか出来ないの？」

「私があつた男を相手にする訳には行きませんし、下手に横から手を出したら、こちらに矛先が向くかも知れませんわ。ゆなさんの安全を最優先で考えないと」

藤堂は視線を落としてゆなを見た。感情の読み取れない無表情だが、唇を噛んでいる。藤堂よりも、彼女の方が遙かに悔しいだろう。激しい攻防を繰り返していた執事と小田原に、僅かな変化が見られた。動きの衰えない執事に対して、小田原の防御が間に合わなくなつて来ている。ここまで保つたのが奇跡と言えるだろう。

「お父様に、鳳の事を聞いて参りましたの」

執事と小田原を目で追う渚が、険しい表情で言った。藤堂は片眉を顰めて、彼女の背に視線を移す。

「詳しい事は後でお話ししますけれど、彼らは人を殺す事に、なんの抵抗もありませんわ」

「あちらさんの話聞いてりゃ分かるよ。アイツら、何しようとしてんだ」

渚は札を握り締めたまま、振り向かなかつた。

「芹香さんを、使役しようとしています」

藤堂とゆなは、同時に目を見開いた。一瞬耳を疑つたが、肩越しに見える渚の横顔から、ただの推測ではないのだと知れる。

芹香を力づくで連れ戻したところで、彼女が過激派に荷担するとは到底思えない。少し考えれば分かる事だつたのだ。殺そうとしているのかと思えば、戻れと川重は言った。

向こうはこちらを殺しにかかっている。だからといって、立ち向かうと決めた以上、引き下がる訳には行かない。ここで退けば、芹香がどうなってしまうか分からない。

「ご存知でしたか」

思いの外近くから聞こえた声に驚いて顔を上げると、すぐ横に川重が立っていた。渚は眉をつり上げて、藤堂の横に立った彼を睨み付ける。

「どうしようもない愚か者ですわね。人の命をなんだと思つていらつしやるの？」

「人の命は大事ですよ。ただし、この世にはもっと大事なものがある。あなたは愚かと言いましたが、それも、生まれた時から満たされてきた人間の、浅薄な意見に過ぎません」

結局、この男は金儲けの事しか考えていないのだ。それだけの為に社を乗っ取り、挙句の果てには人を殺めようとさえしている。藤堂など、金などなくともなんとかなると、最初から諦めているのに。「ご覧なさい」

川重は真つ直ぐに、芹香を指差した。戦況が変わる気配はないが大男の体には確実に傷が増えている。

「楽しそうでしょう、彼女は」

突き出された拳を軽々避けた芹香は、伸びた腕を踏み台にして飛び上がる。男は片腕を上げて頭を庇おうとしたが、長い足が顔面を捉える方が早かつた。衝撃音と共に男の頭があらぬ方を向いたが、彼は即座に手で頭の位置を戻す。

足で薙ぎ払うかのように男の頭を蹴り飛ばした芹香は、間合いを取って着地したが、地に足を着けた瞬間、目前に拳が迫る。避けようにも間に合わず、彼女は顔の前で握った両手を重ね、手の甲で受け止めた。かなりの衝撃があつたように見受けられたが、芹香は眉一つ動かさない。それどころか

微笑っていた。

「彼女は昔からそうでした。戦う事しか知らず、それだけを楽しんでおりました。それが今更……」

川重は嘲笑した。彼女が今楽しんでいっているという事実は、藤堂には否定出来ない。しかし、それとこれとは全くの別問題だ。

「理性が邪魔をして戦えないと言ふのなら、こちらが戦力として迎えるまで。彼女の為だと、思われませんか」

藤堂の胸に、暗い影が落ちる。一体この男は、人をなんだと思っているのだろうか。

芹香は、何も知らなかった。余暇を潰す方法も知らず、友人との接し方も、知らなかった。だから何も話せなかった。生まれてすぐ母親を亡くした彼女は、幼少の頃から、殆どの時間をあの会社で過ごしてきた。友人を作る事もままならず、ただ、退治屋になる為だけに育てられていた。

忙しい父親の為だったのだと、本人は言っていた。退治屋である父を尊敬していたから、苦痛ではなかったのだと、それでも寂しそうに、彼女は言った。彼女の心の支えは、父親だったのだろうか。

けれどその父親さえも、奪われた。他でもない、目の前で嗤笑する、この男に。

「思わねえよ」

底冷えする程、冷たい声だった。腹の内から込み上げる感情は、確かに熱を持って全身に行き渡って行くのに、頭だけは、妙に冷たく冴えている。今まで覚えた事もない程の、深い怒りだった。

分かつていた。何も出来ない自分への憤りが、余計にそれを増長させるのだと。

「あいつは退治屋の事以外、何も知らなかった。あんたらに働かされるだけ働かされて、存在理由がそれしかなかった。戦う事に縋って生きてただけなんじゃねえのか」

「付き合いの浅いあなたに、何が分かると仰るのですか？」

冷たい手で撫でられたような感覚が、背中を走った。

彼女が零した涙が、涙で焼けた声が、脳裏に蘇る。胸の内に蟠った孤独を零し、震える手でできこちなくこの背に縋った、あれが本当の、芹香だったのに。表面上でさえまともに向き合っていないかったこの男に、何が分かると言うのだろう。

「知ったような口利いてんじゃねえ」

止められない。最早、後には引けない。

渚が目を見開き、ゆなが悲鳴を上げた。小さな霊達が、一斉に川重を取り囲むのが、狭まった視界に入る。藤堂はもう何も考えられず、襲い来る耳鳴りに、顔をしかめた。

第七章 過去の人 八

強い耳鳴りが、藤堂の思考を奪う。川重の両手両足に纏わりついた子供達は、一様に彼を鋭い目つきで睨んでいる。彼らは藤堂の感情に、呼応して動いているのだろう。霊の事など何も分からない藤堂にそう確信付かせるほど、彼自身深い憤りを感じていたし、守護霊達の表情も、険しいものだった。

川重の悲鳴が聞こえる。子供達の小さな手が、彼の体内へ潜り込む。人体をすり抜けられる彼らは、その奥にある魂を、引きずり出そうとしているのかも知れなかった。

魂を抜かれれば、人はすぐに心停止する。生霊となって抜け出た場合は別だが、無理に抜かれた魂を体に戻す事は出来ない。

渚の制止する声が、遠くに聞こえる。他の子供が川重に纏わりついたのに対して、ただ一人コウだけは、真っ直ぐに芹香の下へ向かった。二十人ほどいる守護霊達の内、彼だけには、何故だか自由意思があるのだ。

守護霊達が離れた瞬間、誰かの記憶が、荒れ狂う濁流のように藤堂の頭の中を駆け巡る。今戦っている霊達の内、誰かの記憶だろう。或いは全員の記憶が、奔流となって押し寄せているのか。

嫌だとは、思わなかった。見たくもないものだが、頭を冷やすのには、丁度良い。あんな男が一人死のうと死ぬまいと、今の藤堂にはどうでも良かった。

「藤堂さん、ダメ！」

明がこちらへ意識を逸らした瞬間、狼男が彼女の肩に食らいついた。明は目を見開いて、肩口に食い込んだ牙を見る。傷口から血が滲み出て、白いセーラー服を赤く染めた。

メイ、と叫んだ筈の聲は、果たして届いていただろうか。己の口から声が出ていたのかどうかさえ、分からない。藤堂は頭痛を堪えきれずにその場へ膝を着き、臉を落とす。

臉の裏に、古びた狭い室内の光景が映る。七畳ほどの部屋は閑散としており、家具らしい家具は殆どなかった。部屋の隅では、薄っぺらい煎餅布団に横たわった女性が、苦しげに呻いている。見るからにやつれた姿の彼女は、しきりに何か謝っているようだった。乾ききってひび割れ、紙のように白くなつた唇から、血が滲んでいる。目頭が熱くなり、涙が頬を伝い落ちて行く。現実には泣いているのか記憶の持ち主が泣いているのか、藤堂には判断出来なかった。頭の中で、少年の声がする。金さえあればと、悔しげで悲痛な声が聞こえる。金さえあれば、母さんは。

これは誰の記憶だ。

テレビのチャンネルを変えた時のように、瞬時に場面が切り替わった。薄暗い路地裏の風景が、早回しのように流れて行く。何も聞こえないが恐らくは、走っているのだろう。あまりの息苦しさに、こめかみが痛む。今回は痛覚もあるようだが、鼻が利かない。そう考えた矢先、道に散乱していたゴミ袋に足を取られて転んだ。地面に着いた両手の甲には、入れ墨が入っている。膝が痛むと同時に、顔が上を向いた。覗き込んでくる男が三人、視界に入る。その内の一人、青白い顔をした気の弱そうな男が、懐から出した手をこちらへ向けた。額には、冷たく硬質な感触。一気に血の気が引いていく。意識はそこで途切れた。

「小田原を浄化しろ！」

現実に戻ると同時、藤堂は腹の底から声を上げた。それまで頭を沸かしていた怒りが、嘘のようにすうと引いて行く。殺してはならないと、頭の中で声がした。少年の声のように聞こえたそれは、コウの言葉だったのだろうか。

獣の咆哮にも似た絶叫が、大気を震わせる。開けた視界へ真っ先に飛び込んで来たのは、肩に食らいついていた狼男の脇腹を刺し貫く、明の姿だった。明が逆手に持った刀を腹から抜くと、叫び声と共に、男は彼女から離れる。藤堂に気を逸らされていた為か、一度では抹消出来なかつたようだ。

「メイさん、戻りなさい！」

後ろへ飛び退いて狼男と距離を取った明は、黙って首を左右に振った。深手を負ったにも関わらず、渚と代わる気はないようだ。渚は顔をしかめて、拳を握り締める。何も出来ない事に一番腹を立てているのは、渚かも知れなかった。

食い破られた皮膚に空いた穴が、遠目にもはっきりと見て取れた。抉れた傷口から流れ出す鮮血が、徐々に明の袖を染めて行く。しかし彼女は痛がる素振りも見せず、狼男を睨み付けていた。向こうより出血が少ないのは、傷が肩にあるせいだろうか。食らいつかれたのが心臓より上だった事が、不幸中の幸いだろう。

一方男の脇腹からも、どす黒い血が止めどなく流れ出していた。呼吸に合わせて、男の白いシャツが赤く濡れて行く。

小田原は執事に羽交い締めになれ、最早抵抗する気力もないようだった。抵抗しようにも、あれでは動けないだろう。そこで藤堂はようやく川重を思い出し、振り返る。

守護霊達は既に大半が戻って来ていたが、何人かは、未だ川重の手足にしがみついていた。下手に動かないようにしているのだろう。魂を無理矢理引きずり出されそうになった為か、川重は苦々しい表情で地面に膝をついている。

「彼は……」

ゆっくりと立ち上がった藤堂に、渚がおずおずと問い掛けた。藤堂は胸につかえた息を大きく吐き、渚を一瞥してから、川重へ視線を移す。

「霊だ。そいつに殺されたんだよ」

荒い息を吐く川重を顎で示すと、彼は藤堂を見上げて、目を細めた。何故分かるのかとでも言いたげな表情だったが、藤堂は無視した。捕まえてしまおうかとも思ったが、脅して霊を引っ込めさせようにも、向こうはこちらに人が殺せない事を分かっているから、無意味だろう。

つまりこのまま、あの霊達を抹消するまでは終わらない。

芹香の方へ飛んで行ったコウは、大男の首に後ろからしがみついていた。全身を押さえつけている訳でもないのに、不思議と男の動きが鈍っている。怪我とは、関係ないのだろうか。今あの男の動きを止めているのは、恐らく、コウの強い意思だ。

相手がかがいている間に、芹香は呼吸を整えていた。間合いに入らない程度の距離を取ったまま、彼女は深く呼吸を繰り返す。コウの表情も苦しげなものへ変わっているから、あまり長くはもたないだろう。

お互い傷を負った明と狼男は、離れた場所で睨み合っていた。未だ明の間合いの内ではあるが、あの速さでは、それにどれほどの意味があるだろう。

「じいやさん、こちらへ」

え、と渚が呟いた。ヘルメットを外したゆなは、執事に向かって手招きしている。

藤堂は、些か不安だった。確かにゆなは強力な霊媒体質だが、実体化した霊を憑かせる事が、出来るのだろうか。

亮輔の時は札を破って使役関係から解放していたし、屋敷の主の時は、明が実体化だけを解いた状態だった。川重に札を出せと脅しても、易々とは渡さないだろう。

「出来んのかよ」

「出来ない事はない筈ですわ。ただ、入りにくい可能性が……」

小田原の体を両手で持ち上げた執事を見て、言いかけた言葉を止め、渚が目を見開いた。藤堂も驚いて、両の眉を上げる。

彼は、やるつもりなのだ。渚の身以外は心配しないのかと、一瞬訝ったが、そうではない。執事ももう、この除霊屋の全員を、仲間として見ている。彼は、ゆなを信じているのだ。

ゆなは両手を広げ、迎え入れる体勢を取る。明が傷を負っている今、最早こうするしか、道はなかった。

不意に、芹香の呼吸が落ち着いていた。明が血に染まった刀を、きつく握り直す。

ここで終わらせなければ。ここで終わらなければ、恐らく長引くだけ長引いて、戦況が不利になる。明は深手を負っているし、芹香は疲労の色が濃い。これ以上時間を掛ける訳には行かない。

「さあ、お入りなさい」

執事がゆなに向かって、小田原を放り投げた。ぶつけて無理矢理押し込むつもりなのかも知らない。いささか間抜けだが、他に方法もないだろう。

狼男が、地を蹴った。明は刀を体の前に構えて迎え撃つが、寸前で横へ回り込まれる。しかし相手の方も、傷を負って動きが鈍っているのか、明は易々と彼の眼前に刃を向けた。高い金属音が、静寂に響き渡る。

ゆなに向かって投げつけられた小田原は、彼女の体に吸い込まれるようにして消えた。否、吸い込まれたのだろう。霊体を体内に収めたゆなは、眉を顰めて苦しげに表情を歪める。屋敷の主の時もそうだったが、普通の霊を憑かせるのとは勝手が違うようだ。

小田原を投げた執事は、二三步よろめいた。霊体とはいえ退治屋を相手にしたら、流石の彼も消耗するだろう。小田原の動きが鈍っていたのは、執事を相手にして、気力を消耗していたからなのかも知れない。

渚は明と執事を交互に見て、眉間に皺を寄せた。加勢させるか否か、迷っているのだろう。しかし、執事は明よりも遅い。更に彼自身も傷付いている今は、明の足を引っ張るだけの結果に終わるかも知れない。

藤堂は渚の肩に手を置いて、首を横に振った。渚は顔をしかめたまま藤堂を見上げ、執事に向き直って札を振る。執事はそのまま、札に戻った。渚は唇を噛み締め、俯く。

ゆつくりと深呼吸を繰り返すゆなを見下ろし、藤堂は彼女の背を撫でた。ゆなの肩にこもっていた力が、少しだけ抜ける。

「そいつ、貧乏暮らしが長かったみてえだな。母親、病気で亡くしてる。金がなくて治療出来なかつたんだらうよ」

哀れみの気持ちだが、霊を浄化する。確固たる意思があつて初めて、浄霊は成り立つのだ。

「……なるほど」

ゆなは背中を丸めたまま顔だけを上げ、呟いた。しかしその目はすぐにきつく閉じられ、彼女は小さく呻く。渚がゆなの肩に両手を添え、小さな頭に頬を寄せた。

大丈夫。ゆなは必ず、浄霊出来る。

狼男の爪を受け止めた明は、即座に弾き返して刀を引き戻す。男は腹部が痛むのか、顔を歪めてその場に踏みとどまった。足に力が入るのに合わせ、腹の傷から再び血が溢れ出す。

藤堂は何故霊体が血を流すのかと、明に聞いた事がある。普通の霊は勿論血など流さないが、実体化した霊は、死んでからよほど長く時間が経った霊でない限り、傷付けば出血するのだそうだ。それは霊自身の記憶であり、傷付けば痛い、血が流れるという、当然の知識から来るもの。無論流れすぎても、失血するという事はない。

血は生の証。実体化した霊から血が流れるのは、確実に生きていたと、己自身に証明する為。だから手遅れになった霊は、消える寸前でもない限り血を流さない。だから霊食いも屋敷の主も、傷口から出血しなかった。

今やほぼ全ての人間が、霊を見る。そんな中で、人の命というものの定義があやふやになる理由は、藤堂にも分からなくはない。藤堂にも人の命について説明は出来ないし、成仏すれば幸せになれるというのなら、死は恐ろしくないのかも知れないと思う。

しかしそんな世界だからこそ、霊が見えない自分は、人の命がいかに大切なものを理解していたと思うのだ。死ぬのが恐ろしいと感じるのは、人間の根源的な感情であると思っている。生き物として当たり前な感情は、忘れないでいたかった。

だからあの時、藤堂は川重に対して明確な怒りを覚えた。人を人とも思わない言動に、死んだ人間をも私欲の為に利用せんとする、彼の態度に。

何より藤堂は、失いたくなかった。ようやく見つけた、たった一人を。彼女が何を考えていようと、戦う事が彼女の全てであるうと、己の気持ちだけは確固として変わらない。

芹香が口元に、かすかな笑みを浮かべた。俄かに空気が張り詰め、コウから逃れようと抵抗していた大男の動きが止まる。その目は、真っ直ぐに芹香を見下ろしていた。

「……コウ、離れる」

藤堂の言葉に頷いたコウは、男の頭を離して彼の下へ戻ってきた。不安そうな表情を浮かべた少年は、未だ苦しむゆなと、狼男と打ち合う明を交互に見て、藤堂の顔を見上げる。せめてもと頷いて見せると、彼は藤堂の腰に両腕を回して、縋るように抱き付いた。

誰もが不安なのだ。それでも、やらなければならぬ。芹香の為に。川重を止める為に。これ以上、小田原のような犠牲を増やさない為に。

藤堂はゆなを振り返り、唇の端を上げて見せた。不安げな目が、こわごわ藤堂を見上げる。

「ゆな、お前なら大丈夫だ」

ゆなは目を丸くしたが、すぐに表情を引き締めた。大きく頷いた彼女の目には、最早迷いも苦しみもない。澄んだ色をした、真っ直ぐな目。

霊媒師としての、延いては、霊媒師としてのものではない。人を救おうとする、人の目だった。

「小田原さん」

語りかけるように呟いたゆなは、背筋を伸ばして真っ直ぐに立ち、空を指差した。

「お母さまが、待っておられます」

ゆなの体から、白い煙が抜け出した。川重が憎々しげにそれを睨むが、子供等に押さえつけられている為、身動きが取れない。藤堂には煙にしか見えなかったが、あれは確かに小田原だったのだろう。浄化された白煙は、夕暮れの空に消えた。

手を振って小田原を見送ったゆなは、藤堂と渚の顔を交互に見てから、芹香に視線を移した。

無言のまま対峙する二人の間には、他者を寄せ付けない張り詰めた空気が漂っていた。藤堂は芹香の表情を見て、胸を鷲掴みにされたような感覚を抱く。

「楽しいか？」

大男は、薄く笑った。問い掛けた芹香は小さく頷いて、姿勢を低くする。揃えた指先を真っ直ぐに伸ばし、彼女は大きく腕を引いた。白い手袋が発光する。

男の腕が、高く振り上げられた。握り締められた拳に、太い血管が浮く。

「私もだ」

二人は同時に動いた。空気を切り裂くような風切り音は、どちらが立てたものだったのだろうか。

一切の音が、遮断されてしまったように感じられた。振り下ろされた拳が、突き出された手刀とぶつかる。藤堂の目にはスロー再生のように見えたが、実際は一瞬の出来事だったのだろう。

芹香の手が、丸太のような腕に吸い込まれて行く。男は大きく目を見開き、凍り付いたように動かなくなった。巨大な拳は芹香の鼻先へ触れる寸前で、止まっている。今度は確実に、切り裂いた。藤堂はそう確信する。

これで、終わりか。藤堂は一瞬胸を撫で下ろしかけたが、芹香は表情を曇らせていた。

大男の腕が、音を立てて弾け飛んだ。肩から先だけが、消失している。藤堂は、我が目を疑った。あの手刀をまともに食らって消滅しなかった霊が、未だかつていたのだろうか。男は悲鳴を上げるように大きく口を開いたが、その喉から声が出る事はなかった。

男は肩を押さえて、苦悶の表情を浮かべる。苦々しく顔を歪めた芹香は、彼の間合いの外へ飛び退いた。藤堂は呼吸を忘れていた己に気付き、ゆっくりりと、深く息を吐く。

あれを、倒せるのだろうか。傾いた日差しが肌を刺し、焼け付くように暑いのに、頭の芯は冷え切っていた。

第七章 過去の人 九

激しい攻防を繰り返していた明と狼男に、僅かな変化が見られた。変わらぬ速度で刃を繰り出す明に対し、男の動きがあきらかに鈍っている。己が流した血に濡れて、足下が滑るのだ。

銀色に輝く刃が、どちらのものともつかない血の色に染まっている。頭部を狙って突き出された切っ先を、男は首を横へ逸らして紙一重で避ける。彼は明の腕が伸ばされている隙に、屈んで懐へ入り込んだが、彼女は男が腕を振る前に、後ろへ飛び退く。男はすぐさま彼女を追い、顔目掛けて長い爪を振り下ろした。

明は顔面に襲い掛かった男の爪を弾き返し、柄を両手に持ち替えると同時に一步踏み込んで、胴を狙って刀を振り抜く。男は足を揃えて飛び上がり、爪先が刀に触れるすれすれで避けたが、着地の際に足を滑らせてよろめいた。なんとか両足で踏みとどまって転倒だけは免れたが、明はその隙を突いて振り抜いた刀を手元へ戻し、男の頭部へ切っ先を繰り出す。

狼男は顔を突かれる寸前でその場に屈んだが、それが間違いだった。明は突き出したままの腕にもう片手を添え、屈み込んだ男の頭上へ、渾身の力を込めて刀を振り下ろす。男は逃げようと地面に手を着いたが、到底間に合わなかった。

獣じみた絶叫が木霊する。鋼の刃は正確に男の脳天をとらえ、その体を真っ二つに切り裂いた。

破裂音が夕暮れの空に響き渡り、男の姿が消え失せる。明は刀を振り下ろした姿勢のまま、アスファルトに膝を着いた。

「メイ！」

芹香が叫んで駆け寄ろうとしたが、足を踏み出した所で、弾かれたように大男を振り返る。腕を押さえて痛みを堪えていた大男の、目の色が変わった。腕を取られて、頭に血が上ったのかも知れない。川重が喉を鳴らして笑う。

刀を支えにして辛うじて立ち上がった明は、大男を見上げて苦々しく表情を歪めた。手負いの明が加勢しても、無意味だろう。渚が彼女に駆け寄り、その肩を抱く。

「メイ、戻れ」

芹香の声は硬かった。明は渚に支えられたまま、唇を引き結ぶ。芹香の言葉の意味を考えて、藤堂は眉間に皺を寄せたが、大男が動くのを見て息を呑んだ。

芹香の胴より太いのではないかと思われる程遅しい足が、アスファルトを踏み締める。爛々と目を光らせた男は、芹香に向かって拳を振り上げた。

「早く戻れ！」

明に向かって叫ぶと同時に、芹香はその場から飛び退いた。大男の拳がアスファルトを直撃し、砂煙と共にコンクリート片を舞い上げる。凄まじい威力だった。

渚に肩を借りて藤堂とゆなの下へ戻ってきた明は、思い詰めたような表情で俯いていた。かなり出血したから当然だが、顔色が青白く変わっている。しかし相変わらず、彼女が痛そうな素振りを見せることはなかった。

両手を顔の前で交差させ、砂煙が目に入るのを防いだ芹香の眼前に、大きな拳が突き出される。彼女は両手でそれを受け止めながら横へ流して衝撃を軽くしたが、すぐさま下方から迫って来た膝に驚いて目を見開き、舌打ちを漏らした。咄嗟に突き出した足のヒールが、男の膝にめり込む。

芹香は男の膝を踏み台にして飛び上がり、男の頭上を舞った。宙返りしながら両手を伸ばし、男の顔を掴む。手袋が触れた箇所から白煙が立ち上り、逃れようともかく男の腕が振り回されたが、頭を鷲掴んだ手は離れない。

芹香は空中で体を反転させ、男の背後へ自由落下するに任せながら、掴んだ頭を下方へ押し込んだ。男の背が限界まで反るが、流石に首の筋肉だけでは芹香の力に敵わない。

男の膝が曲がり、巨体が後ろへ倒れて行く。背を反らしているせいで受け身を取る事も出来ず、男は芹香に押し付けられるまま、頭からアスファルトへ倒れ込んだ。

思わず耳を塞ぎたくなるような轟音が、静寂に響き渡る。それでも、男は消えなかった。芹香の表情に、焦りの色が見え始める。藤堂は巨大な山を相手取って戦っているような、錯覚を覚える。

「メイ、早くしろ！ 消えたいのか！」

男が起き上がる前に怒鳴り声を上げた芹香は、倒れた彼から距離を取った。男の上半身が、むっくりと起き上がる。彼の頭は、手の形にただれていた。

唇を引き結んだ明は、刀を持った手を藤堂に突き付けた。藤堂は驚いて眉を上げる。

「ずっと黙ってて、ごめんなさい」

「は？」

更に突き出された刀を恐る恐る受け取ると、明は眉尻を下げて、微笑した。言葉の意味が分からず混乱する藤堂の目の前で、明の姿が煙のようにかき消える。

ゆなと渚が、目を見開く。声を上げることさえ忘れているようだった。ゆなの視線が忙しく動くが、探してみても明は見えない。

藤堂は絶句したまま、暫く身動きが取れなかった。

何故、消えたのか。その理由も、戻れという芹香の言葉の意味も、考えたくなかった。藤堂は拳を握り締め、歯噛みする。

分かっていない。信じたくないだけだ。

ひゅ、と風切り音がした。藤堂は慌てて顔を上げ、芹香と大男の様子を確認する。

消えた明に驚いている暇はなかった。起き上がった大男が振り向きざま、芹香に向かって丸太のような腕を振る。彼女は背を反らして拳を避け、上体を横へ逸らしながら身を起こしつつ、目の前の腕を弾いた。バランスを崩した男が僅かによるめいた隙に飛び上がり、その顔めがけて拳を振るう。

男が口角を吊り上げた。芹香は目を見開く。拳は正確に男の眉間をとらえていたが、男の手もまた、芹香の首を掴んでいた。

藤堂の顔から、一気に血の気が引いた。隻腕の男は、ブロック塀に彼女の体を叩き付ける。芹香が呻き声を上げた。

「芹香！」

「おやめなさい藤堂！」

反射的に飛び出しかけた藤堂を、渚が慌てて羽交い締めにした。

コウが藤堂と同じく、慌てた様子で大男に向かって行くが、渚に睨まれて動きを止める。

「あなた達が行ってどうなると言うの！」

そんな事など、頭では分かっていた。藤堂やコウが飛び出して行ったところで、あの手を引き剥がすことなど出来はしない。抵抗する術を持たない藤堂では、逆に殺されてしまうだろう。

それでも、体が勝手に動いた。何も出来ないと分かっているのに、歯痒くて堪らなかった。何も出来ないのが当たり前だと思っていたのに、今は何も出来ない事が、こんなにも口惜しい。

芹香の首を掴んだ手に、徐々に力がこもって行くのが、傍目からでも見て取れた。芹香は男の手を両手で掴み、引き剥がそうと試みる。力が拮抗している為か男の手が離れる気配はなく、またそれ以上、首に指が食い込むこともない。

歯を食いしばって耐えていた芹香の眉が歪み、酸素を求めるように唇が開かれる。白い顔が徐々に赤く変色して行く。

渚が札を取り出し、男に向かって投げた。背中に当たりはしたが、札の形に傷跡が残るばかりで、まるで意味を為さない。あれは一体何の霊なのだろうと、藤堂はまともな思考も出来ずに考える。

「正義漢ぶって反抗しているからそうなるんだ！」

川重の笑い声が、頭の中に響く。持てる術の殆どを失い、最早彼には、己を取り繕う余裕さえないようだった。

街を赤々と照らし出していた夕陽が完全に沈み、暗闇が世界を覆う。吹き抜けた生温い夜風に、藤堂は身震いした。

このまま、失うのか。何も出来ないまま、ただ見ているしかないのだろうか。今まで手にした何もかもを失ってしまったかのような深い喪失感が、胸を浚う。

藤堂の体から、一気に力が抜けて行く。胸に風穴が空いたようだった。

「行きなさいポチ！」

癖のある高い声が聞こえると共に、真っ赤な縄が、大男の腕に巻き付いた。その腕が凄まじい力で芹香の首から引き剥がされ、男は驚愕に目を見開く。解放された芹香はその場に崩れ落ち、喉を押さえて激しく咳き込んだ。

その声にも赤い縄のようなものにも、見覚えがあった。藤堂はゆっくりと、声のした方を見る。大きく目を見開いた川重が、わなわなと唇を震わせる。

芹香から引き剥がされた大男の体中に、赤い触手が巻き付いて行く。一瞬の内に動きを封じられた男は、触手の伸びて来た先を、鋭い目つきで睨みつけていた。

「貴様……新藤祐子！」

川重が怒鳴りつけるように叫んだ。彼の視線の先には、悠々と歩いてくる祐子の姿がある。その傍らには、倒した筈の霊食いが控えていた。真っ黒な表皮も瓢箪型の胴体も、以前見た時となんら変わりが無い。

「やーねえ、往来でフルネーム叫ばないで下さいよ専務。新藤課長って呼んでちょうだい」

祐子のあっけらかんとした口調も、普段と大差はなかった。渚が呆然と瓢箪を眺めている。

藤堂は暫く凍り付いたように動けなかったが、笑顔の祐子を見た瞬間我に返り、弾かれたように駆け出した。自分の意思で走ったのは、久しぶりだ。

藤堂は地面に膝を着いて呼吸を整える芹香の側へ屈み、その肩を抱く。芹香は視線を上げて藤堂を見ると、疲れた顔で微笑んだ。

小さく安堵の息を吐き、藤堂は肩を抱いた腕に力を込めた。細い肩が、かすかに震えている。

芹香の無事を確認した祐子は、霊食いの真つ黒な体を軽く叩く。大男を捕まえたまま伸ばした触手を引き戻し、霊食いは大きく口を開けた。男は抵抗する間もなく、その口腔へ吸い込まれる。あまりにも、呆気なかった。

「し、新藤さんあなた……どうして……」

渚が震える声で呟くと、祐子は彼女に向かってにっこりと笑みを浮かべて見せた。藤堂は芹香を支えて立たせながら、川重の表情を盗み見る。悔しげに歯噛みする彼にはもう、何の術も残されていないようだった。

「その内話すわよ……ゴメンね、遅くなっちゃって」

藤堂に向き直った祐子は、軽く肩を竦めて謝った。謝られても、謝られる意味が分からない。そもそも祐子が何故未だに霊食いを飼っているのかさえ分からないから、藤堂は混乱するばかりだった。

あの霊は、芹香が確かに抹消した筈だ。更に祐子は、退治屋を辞めたのではなかったか。課長と呼べとはどういう事なのか。未だに鳳にいるということなのだろうか。

誰一人として、何も言えなかった。凍り付いた場の空気をもともせず、祐子は川重に歩み寄って目の前に屈み込む。そこでようやく、残っていた守護霊達が川重から離れて、藤堂の下へ戻った。

「とうとう……動いたというのか、社長が」

川重が祐子を見上げ、掠れた声で呟く。芹香は僅かに眉を顰めたまま、祐子と川重を見つめていた。社長というのがどういった人物であるのか、藤堂はいよいよ分からなくなってくる。

芹香の話聞く限りでは、悪人であるとは思えなかった。しかしゆなの一件で芹香が社長と口に出した時の小田原や、今の川重の表情を見る限りでは、恐ろしい人物なのではないかとも思える。その人となり、全く見えてこない。

「ああ、違う違う。社長とは関係ないの」

「だったらお前は、何をしに来たんだ。中立派は永遠に不可侵である代わりに、どちらにも肩入れしないのが鉄則の筈だ」

「うるさいわねえ」

祐子は小さく溜息を吐いて、霊食いに向かって手招きした。

「だから関係ないって言ってるんじゃない。ポチ、さつさとこいつふんじばって。食べちゃダメよ」

「どついう事なんだ、祐子」

芹香を見上げた祐子は、気まずそうに視線を落とした。しかしすぐに立ち上がって川重の首根っこを掴み、霊食いに向かって彼を押し。赤い舌が、川重の腹に巻き付いた。

祐子は両腕を組んで、悩ましげに眉根を寄せる。ちらりと芹香を横目で見ると、赤い唇で弧を描いた。

「あんだ、キレイになつたわね」

「は？」

「処女捨てたから？」

芹香の顔が、一気に赤く染まった。渚も目を丸くして頬を赤らめているが、ゆなは呆れた目をしていた。

誤魔化したのだ。藤堂はそう思ったが、敢えて言う事もしなかった。その内言つと言っていたから、今聞いても無駄だろう。

「それよりあんだ達、さつさと迎えに行きなさい」

藤堂は、え、と呟いた。芹香は藤堂の手元の刀を見て、店を振り返る。

「居場所は？」

「藤堂君がよく知ってる所よ」

祐子に向き直った芹香は、目を細めて訝しげな顔をした。

本当は、藤堂は明が消えた時に気付いていた。彼女が何なのか、彼女がどこへ行ったのか。ただ、信じたくなかっただけだ。

藤堂は渚とゆなの視線を背中に受けながら、黙って店へ入った。床にぱつんと転がった、バットの形をした鞘に刀を納め、カウンターのの上に置く。

明は結局、こうなるまで自分の事を話さなかった。恐らく彼女の口からは、彼女自身のことは聞けないだろう。それ自体は別に、構いはしない。悔いているのは、何も聞こうとしなかった自分自身だった。

藤堂はカウンターに両手を着いて、深く息を吐いた。真実を知るのが怖かった。彼女がなんであろうと、今まで通りでいられる自信はある。それでも。

それでも、後悔している。明はあんなに自分を案じてくれたというのに。彼女は余計なことを聞かなかったが、恐らく、藤堂の心中など見抜いていた。知る事も話す事も、怖いのだと。いつか訪れる離別の時を恐れるがあまり、深く関わりあうことを、厭っているのだと。

だから明は、自分のことを殆ど話さなかったのではないだろうか。だから付き合いが深くなるにつれて、言い出せなくなってしまうたのではないか。そう考えると、哀れに思えてならなかった。

「匡」

カウンターに手を着いたまま振り返ると、すぐ後ろに芹香がいた。白い首に、赤い手形がくつきりつついている。右腕のひっかき傷が、やけに痛々しく見えた。

ゆっくりと振り返り、藤堂は芹香と向き合う。眉尻を下げた彼女は、ためらいがちに口を開く。

「メイは……」

言いかけた芹香に覆い被さるように、藤堂は彼女を抱き締めた。驚いて目を丸くした芹香は、暫く逡巡した後、おずおずと彼の背中に両手を添える。

「芹香、俺なんとなく、気付いてたんだよ」

「芹香は黙ったまま、藤堂の背を撫でた。」

「あいつ、冷たかった。怪我しても、次の日には傷跡さえ残ってなかった。なんか口に入れたとこ、見た事なかったしさ。なんであの細腕で重い刀振り回せるのか、疑問に思ってたけど言えなかった」

そうかと呟いて、芹香は藤堂の頭に掌を乗せた。体温の高い彼女の手が、頭をぼんやりとさせる。

「言い出せなかつたんだよな、あいつ。悩んでたのにさ」
銀色に煌めく髪が、視界を遮る。こめかみが熱くてたまらなかつた。

「匡、いいんだ」

静かな声が、胸につかえた。それだけで、許されたような気がした。藤堂は震える息を吐いてから、明がよくそう言うように、行く、と呟いた。

第七章 過去の人 十

軽く芹香の傷の手当てをした後、四人は藤堂馴染みの定食屋を訪れた。休憩中の札が掛かつてはいるものの、店内には明かりが灯っている。カウンターに着いた人影が、外からでも見て取れた。藤堂は今時珍しい手動の引き戸に手を掛け、ゆっくりと開く。

愛想の欠片もない店主の野太い声が、おう、と軽く告げる。藤堂はそれに輪をかけて無愛想に、黙ったまま片手を挙げて見せた。休憩中にも関わらず入店してきた事に対しての、お咎めはない。

「よう、質屋」

聞き慣れたダミ声が、藤堂に向かって掛けられる。カウンターに一人腰を下ろした禿頭の男は、ビールの入ったグラスを持った手を、軽く挙げた。

カウンターの内側では、先ほど声を掛けてきた店主が、立ち尽くしたまま腕を組んで俯いていた。藤堂は真っ直ぐにカウンターへ近づき、親父の横に腰を下ろす。

「儲かっているそうだな。良かったじゃねえか」

禿頭の親父はそう言って笑い、ビールを飲み干した。空になったグラスが差し出されると、店主は黙って酒を注ぐ。どことなくぎこちないやり取りに、向こうはもう、こちらが何をしに来たか分かっているのだろうと、藤堂は思う。

芹香は藤堂の隣に座ったが、渚とゆなはテーブル席に向かい合って腰を下ろした。藤堂はジーンズのポケットから煙草を取り出し、火を点ける。

「んなこたどうでもいいんだよ。この期に及んで誤魔化すのか」

店主の腕が伸び、芹香と藤堂の前に、ビールが注がれたグラスを置いた。彼も何がしか関わっているのかも知れない。

芹香は店主に軽く頭を下げたが、藤堂は置かれたそばからグラスを取って、一気に中身を飲み干す。独特の苦味が喉に染みだした。

「うちの両親はなあ、それなりに有名な浄霊屋だったんだよ」

金貸しの親父は唐突に切り出して、一呼吸置く。それから彼はグラスに口を付け、舐めるように酒を飲んだ。誰一人、口を挟もうとはしない。

「俺には親譲りのバカ強い靈感だけはあったんだが、生憎足が不自由でな。家業は姉貴が継ぐ事になった。でも姉貴は、成人する前に死んじまってよ」

藤堂は正面を向いたまま、タバコの煙を目で追っていた。カウンターから出た店主が、ゆなと渚の前に、麦茶の入ったコップを置く。渚は少々心外そうに眉をひそめたが、文句は言わなかった。

「交通事故だった。海に見える、見通しのいい場所だったんだけどなあ」

藤堂は目を見開き、親父をまじまじと見た。彼はカウンターに視線を落としたまま、口元に寂しげな笑みを浮かべている。そんな場所に、藤堂は明と二人で行った覚えがある。

空になった藤堂のグラスを取った店主は、更にビールを注いで、彼の目の前に置いた。

「嘆き悲しんだのは両親よ。姉貴には才能も、強い靈感もあった。正義感も人一倍でさ。浮かばねえでフラフラしてる所を、高屋敷の奴に頼んで札に封じてもらったんだわ。強力な術かけて、透けねえようにしてもらってな」

「……当時の高屋敷家と手を組んでいたのは、最高の除霊屋と謳われていた夫婦でしたね」

芹香が口を挟むと、親父は彼女を見て眩しそうに目を細めた。藤堂の目には、何かを懐かしんでいるようにも見えた。

「あんた産まれてねえのに、よく知ってんなあ……姉貴を封じてすぐ、オヤジもオフク口も、幽霊屋敷に突っ込んで死んじまった。残されたのは、俺と姉貴封じた札だけよ」

渚が唇を引き結んで、俯いた。ゆなは感情の読み取れない顔を親父に向けたまま、黙って話を聞いている。

「姉貴は、両親の遺志を継ぐなんて抜かしやがった。てめえも死んでやがるってのにさ……幸い刀も手元に戻ってきてたし、姉貴は靈だが、充分力もあつた。でもなあ、俺が浄霊屋やったって、姉貴の邪魔になるだけだろ」

「不自由な足で浄霊の場に立ち会つのは、確かに無理がありますわね」

「そう。だから俺は両親の遺産で金貸し始めて、姉貴は一人で浄霊屋営んでた。お前と会うまではな」

藤堂は煙草をもみ消しながら、小さく溜息を吐いた。グラスを取つて、再び一息に中身を呷る。

飲まなければ聞いていられなかった。真つ向から向き合わなければと思うのに、それが出来ない。考え込んでしまう性質の藤堂は、飲んで頭を空っぽにしないと、何を言い出すか自分でも分からないのだ。

親父は懐から古びた紙切れを取り出し、カウンターに置いた。文字は掠れ、所々破けているが、それは確かに札だった。

ここに、明は毎日帰っていたのだ。そして今も恐らく、この中に居る。きつと今はまだ、傷ついた体を癒やしている。

「姉貴は……明は、靈だよ。俺の靈力使つて、未だに実体化してんだ。透けてねえし喋れるんだが」

「痛覚は、ないのですね」

親父は苦笑いを浮かべ、ゆなに向かつて頷いた。藤堂は煙草に火を点けながら、グラスにビールを注ぐ店主の手元を眺める。

「アンタなんで、金貸しやってんの？」

煙を吐き出しながら、藤堂はようやく発声した。酒のせいかな煙草が悪いのか、僅かに声が掠れている。金貸しは遠くを見るような目で、何もない虚空を見詰めていた。

「金がない人つてのは、幾らでもいるんだよ。俺には幽霊退治なんか出来ねえから、せめてそういう人を救いたかった。中には借りっぱなしでトンスラこいた奴だつていらアな」

「あんた自身は儲かんねえワケだ」

余計な口を出すと、親父は鼻で笑った。

「儲けようと思つてやってんじゃねえよ。俺の貸した金を元手に興した事業が成功して、倍以上返つて来ることだつてある。そんな返しに来た人の笑顔がさア、忘れらんねえんだ」

いい親に育てられたのだから。明が真つ直ぐなら、この男も真つ直ぐなのだ。藤堂は知らず口元に浮かべていた笑みを誤魔化すように、酒を呷る。

金が全てではない。大事なものは、それを使う人の方だ。金で買えないものはあるし、金で買えるものの価値は、金でしか決まらない。持てば持つほど意味を失くすものなど、欲しがつても仕方がない。その為に他人を陥れようなどと、愚かにも程がある。

「ああ、ヤダヤダ。死んだワケでもねえのに、しんみりしちゃつてよ。もう死んでっけど」

親父は大きく伸びをして、首を鳴らした。藤堂もそうだが、彼も辛気臭い話は得意ではないようだ。

「で、こつからは内緒話なんだけどな」

ビールを一口飲んでから、親父は満面の笑みを浮かべて椅子の背もたれから身を乗り出し、再び口を開いた。ひそめた声がわざとらしく思え、藤堂は小さく鼻を鳴らす。

「姉貴がよく話してるんだよ、ゆなちゃんのこと」

ほう、とゆなが相槌を打った。親父はとろけるような笑顔を浮かべ、彼女に向かつて頷いて見せる。所帯は持っていないものと思われるが、案外子供好きなのかも知れない。

「俺も霊媒体質でさ。今は高屋敷さんところから札貰つて抑えてるが、昔はひでえもんだつた」

「ゆなと同じなのですね」

「そうさ。どんなに辛くても、俺みてえに泣き言垂れずに、お前さんは頑張つてるつてよ。才能もあるし、努力も人一倍だつて。いい霊媒師になるつてな」

なあ、と呟いて、親父は擦り切れた札に視線を落とす。札は何も応えないが、明がこの場にいたら、勝手に話すなと怒っていただろう。

明は、弟とゆなを重ねているのかも知れない。弟と同じようにゆなを大事に思い、彼女の成長を見守っている。段々とたくましくなっていくゆなを、明はどんな気持ちで見ているのだろう。そう考えると、藤堂には切なくも思えた。

「渚ちゃんにはさ、家への恩があるだろ。昔ちよつとモメた時も、姉貴へコんでたよ」

コップに口をつけていた渚は、一口麦茶を飲んだ後、顔を赤らめて俯いた。彼女自身にとっても、あまりいい思い出ではないのだろう。

「だから今こうやって一緒に働くようになって、喜んでんだ。恩返しとかじゃなくてさ、同年代の友達が出来たって」

若くして死んだ明は、まだまだ遊び足りなかっただろう。明は対等に、真っ直ぐに、渚と向き合っていた。渚は顔を赤らめたまま、はにかんだように笑う。

親父はグラスの底に残った中身を飲み干した。芹香に視線を移し、目を細めた。

「あんたはいい退治屋だ」

芹香は空になったグラスをカウンターに置いて、藤堂越しに親父へ向き直った。

「うちは母親が元々退治屋ですよ。あんたみたいに、本当なら救いたかって言う珍しい人だった」

「……お母様が」

「ああ、刀使って浄霊してたのは親父の方だ。あんたを見ると、オフクロ思い出すよ」

芹香に憧れていたのは、事実だったのだろう。ただし明は、母親に対するそれと重ねているのかも知れない。度を超していたのは、感情に歯止めが効かない霊故だったのだ。

霊は歳をとらないし、姿形も変わらない。精神的にも死んだ時の年齢のままだから、明は辛かっただろう。本当のことを言えないまま、結局こうなるまで、彼女は隠し通してしまった。

明は、全員を想っている。しかし誰が彼女に、彼女自身の事を聞いただろう。他人のことばかり気にして自分の話が出来ない明は、結局今の今まで、言いそびれてしまっていたのだ。

少しでも、気遣ってやれば良かった。そうすれば少しは、違っていたかも知れないのに。藤堂はそう考えて、後悔の念を抱く。明日になれば、彼女は何事もなかったように、事務所に顔を出さだろう。それでも、何もなかったことにしてはいけない。

向き合わなければならぬ。誰の過去とも、自分自身の過去とも、深い付き合いはしたくないと、忘れた振りをして、拗ねている場合ではないのだ。

「お前の事も言ってたぞ、質屋」

考え込んでいた藤堂は、その声で現実に戻された。横を見ると、親父はにやにやと笑っている。

「ヒトの乳しか見てなくて、どうしようもねえってよ」

「ああ、そりやしょうがねえわ」

「藤堂さんはゆなだけ見ていればよろしいのに」

抑揚のない声でゆなが言うと、渚が嘔き出した。彼女は随分とゆなの発言に慣れたようだが、芹香は苦笑している。

親父は札を藤堂の前へ滑らせ、頭を下げた。禿頭に反射した蛍光灯の光が直撃し、藤堂は目を細める。札に添えられた指が、かすかに震えていた。

「頼む、お前がこいつを持っててくれ」

藤堂は危うく煙草を取り落とすところだった。眉根を寄せ、怪訝に親父のつるりとした頭を見下ろす。

「姉貴には痛覚がねえから、俺が持つてても、危ない時に戻してやれねえんだ」

「それはいいが……あんたは」

いいのか、と言葉を続ける前に、親父は勢いよく顔を上げた。その真剣な表情に圧倒され、藤堂は身を引く。しかし芹香に背を押され、引いた分だけ再び近付いた。

向き合えという事だろうか。藤堂は煙草の火を消して、金貸しと視線を合わせる。

「姉貴は死んでるんだよ。札から出しゃいくらでも会えるつつつても、俺にとっちゃ死んでんだ。それが事実だ。いつまでも、引きずってるワケには行かねえ」

藤堂は黙って、札を受け取った。よれた頼りない札は、安っぽい灯りに照らされて、それでも輝いて見える。

親父はそつと札から手を離し、藤堂に体ごと向き直った。

「姉貴を、頼む」

彼は、疲れた顔をしていた。きつと、悩んだのだろう。悩んだ末に、この決断を下したのだろう。

それならばと、藤堂は煙草の火を消す。応えてやるのが、彼へのせめてもの労いなのだ。断りたい訳ではない。寧ろ、大事な肉親をただの同僚が預かっていいものなのかと思う。けれどそれも、彼が決めた事だ。

藤堂は押し黙ったまま、深く頭を下げた。膝の上に置かれた親父の手が、きつく拳を握っている。顔を上げると、彼は笑っていた。

「頼むぜ」

カウンターを向いてグラスの中身を呷った男の背中が、やけに小さく見えた。

藤堂の背後で芹香が立ち上がり、店を出て行く。渚とゆなも、顔を見合わせて席を立った。藤堂も立ち上がりかけたが、ふと、思いとどまる。

「カネさん、あんた、名前は」

親父は深い皺の刻まれた顔を藤堂に向け、徐に手を出した。

「知恩院晃だ」

「姉弟揃って輝いてんな」

「しゃらくせえ、頭がかい。お前は」

藤堂は差し出された手を握り返しながら、目を細めて笑った。

「藤堂匡。アンタの姉貴には、また世話んなるわ」

「精々ケツ拭ってもらえ」

男は手を離し、藤堂に向かって振った。彼はそれ以上何も言わず、店を出る。肉親に会いたいと、何故か無性にそう思った。

「結局口出さなかったな、このオヤジ」

意味もなくグラスを揺らしながら、晃は笑う。無愛想な店主は鼻を鳴らして、空のグラスを片付ける。

「あんたに似てたから誘ったなんて、ヤロウには口が裂けても言えねえな」

「そんなに似てっかい」

「似てるよ、アイツ。無口で無愛想で不器用で、でもちゃんと、大事なモンは分かっている。向こうの方が男前だな」

店主はまた、鼻で笑った。晃は煙草に火を点け、藤堂が使っていた灰皿を引き寄せる。

「結局所帯は持たなかったなあ、あんたは」

空になったグラスに、店主は酒を注いだ。何かしていないと、落ち着かないのかも知れない。昔は何もしていなくても落ち着いていたが、歳をとったという事なのだろう。

「昔の女が年中来るからな。怖くて結婚なんか出来ねえよ」

「ちげえねえ」

喉を鳴らして笑い、晃はビールを呷る。水滴がグラスの表面を滑り、彼の手を濡らした。

晃はカウンターの中へ手を伸ばし、ビール瓶を取った。

「あんたも飲めよ」

瓶の口を向けられると、店主は素直にグラスを取って差し出した。晃はグラスの縁に瓶の口を着け、目一杯中身を注ぐ。白い泡が溢れた所で、彼はようやく瓶を置いた。

店主はグラスの縁に口を着けて泡をすすり、口元を拭いながら扉を見た。

「メイは、幸せかな」

煙を吐き出しながら、晃は喉の奥で笑う。

「幸せさ。聞くんじやねえよ」

その後、二人は一言も口を利かなかった。黙り込んだまま、夜が更けきるまで、静かに飲み続けていた。

第八章 生を知る 一

藤堂匡は、カウンターに座ってぼんやりと煙草を吹かしていた。目と眉の間が近い精悍な顔つきだが、奥二重の瞼が半ばまで落ちており、常に眠たげな表情を浮かべているように見える。冷房の効いた室内にいても暑いのか、うちわでしきりに風を送っていた。

だらしなくカウンターに頬杖をついた藤堂は、店外の風景を見るでもなく眺めていた。気だるげに重そうな足を引きずる人々は、目新しくもなんともない。繁華街から逸れたこんな路地を通るのは、地元住民ぐらいのものだ。

やがて外を眺めるのにも飽きて、藤堂はカウンターに置かれた札に視線を落とす。かなり古い札のようで、所々破れている上、文字も掠れて殆ど読めなくなっている。新しいものであつたとしても、藤堂にはどうせ読めない。これだけ古いと封印が緩むらしく、中に居る霊は、自由に出入り出来てしまうのだと聞いている。

つい昨日の事が、一年も前の出来事のように思える。それほど色々あつたし、疲労を今日に持ち越してしまふほど、大変だった。無事に終わって良かったといえはそうなのだが、お陰で目の下にくつきりと浮かんだ隈が、昼を過ぎても消えない。

取り留めのない思考を巡らせていると、音もなく自動ドアが開いた。藤堂は頬杖をついたまま視線だけを上げて、近付いて来る人物を見上げる。

「おはよう、匡」

長身の、目が覚めるような美人だった。白い細面に、切れ長の目と高い鼻。形の良い唇は、かすかに笑みを浮かべている。見事な銀髪が、蛍光灯の光を反射して輝く。

おう、と短く返して、藤堂は煙草を灰皿に押し付けた。外は暑かつただろうに、涼しげな顔を崩さない堤芹香は、カウンターに乗せられた札へ視線を落として目を細める。

「お前、背中は？」

短く問い掛けると、芹香は苦笑いを浮かべた。昨日かなりの勢いで扉にぶつかっていたから、念の為に医者に診てもらえと言っていたのだ。

カウンターの中に入って、藤堂の横へ座る芹香の白い腕には、昨日の傷が残っていた。浅い怪我でもなかったから、そう簡単に治るものでもないだろう。藤堂の視線に気付くと、彼女は隠すように腕を掴んだ。

「問題ない。異常はなかった」

「どれだけ頑丈な体してんの」

些か呆れたが、反面、安堵した。大きな怪我がないに越した事はない。残ったのはひっかき傷程度、すぐに治るだろう。出来る限りは、怪我などして欲しくないのだが。

何にせよ、店への被害がなくて本当に良かったと、藤堂は思う。穴だらけになった道路は、どこから話が行ったのか、夜の内に修復されていた。聞けば、鳳から警察を通じて避難勧告が出されることは、よくあるそうだ。公共物の破損も、想定範囲内にあるのかも知れない。

「お前、いつから気付いていたの」

芹香は藤堂の手元でくすぶる煙草を眺めながら、僅かに唇を引き結ぶ。言い辛いのかも知れない。

「初めて会った時には」

「抱きつかれてたもんな」

芹香は頷き、指を組んでカウンターに乗せた。彼女の爪は、常にどこかしら欠けている。すらりとして色の白いきれいな手だが、所々に痣があった。

これは昨日出来たものだろうか。残ってしまったものでなければいいのだが。そう考えながら、藤堂は彼女の手指先で触れる。白い指が小さく震え、色素の薄い瞳が藤堂を見上げた。

「確信を持ったのは、祐子が霊喰いを使っていたからだが」

動揺したのか、芹香は早口にそう言った。藤堂も確かに、あの時は違和感を覚えた。

「人間相手じゃ、一呑みってワケ行かないもんね。魂引っ張り出して食うんだっけ」

言いながら指先を滑らせるように掌へ触れると、芹香はおずおずと、組んだ指をほどく。掌を合わせて指を絡め、藤堂は彼女の顔を覗き込む。長い睫毛が伏せられ、朱が上った頬に淡い影を落とした。「ヒトの目の前でいちゃつくの、やめてくれない？」

二人同時に顔を上げ、反射的に手を離れた。そしてカウンターの外側にいた少女を見て、藤堂は呆気に取られる。

今時珍しいおかつぱの黒髪が、肩口でさらさらと揺れている。下がり気味の目とばら色の頬が、彼女を年齢より幼く見せた。夏だというのに長袖のセーラー服を着た少女は、怒ったように眉をつり上げている。

「め……メイ……」

知恩院明は身を引いた藤堂に限界まで顔を近付け、黙り込んだまま彼を見つめる。藤堂は何故いつもこう顔を近付けてくるのかと、混乱した頭で考えていた。隣の芹香は、耳まで顔を赤くしている。言い訳も出来ない。

不意に、明の口元が緩む。目尻が更に下がり、幼子のような顔になった。藤堂は大きく瞬きをする。

明は丸めていた背を伸ばし、啞然とする藤堂と目を丸くする芹香を、交互に見た。

「ありがとう」

満面の笑みを浮かべた明は、ゆっくりと、そう言った。何に對しての礼なのか、藤堂には分からない。

「藤堂さん、悩んでたでしょ」

「え、なに？」

問い返すと、子供のように朗らかに笑って、明は人差し指でカウンター上の札をつついた。

「私に何も聞かなかったこと。分かるんだよ、何考えてるか。藤堂さんの霊力もらったから」

藤堂はぼかんと口を開けたまま、まじまじと明を見ていた。靈感のない自分に、彼女に分けられるような力があつた事が、驚きだつた。論点はそこではない事も、分かつていたのだが。

「……そうなの？」

「ちよつとだけなら、分かるよ。そんなの、私が言わなかったのが悪いのに」

明の笑顔が曇つた。

藤堂には分かっている。一番不安だつたのは、彼女だ。隠していた事を伝えるということ、それがどんなに言い出しづらいことが、藤堂もよく分かっている。

更に結局自分の口から言い出せず、身内とはいえ第三者づてに伝えることになれば、それは辛いだろう。真面目な彼女の事だから、自分から言いたかつたに違いない。それでも過ぎた時間は、元には戻せない。

「ごめんね」

消え入りそうな声で呟いた明は、唇をわずかに噛んで下を向いた。藤堂はカウンターから身を乗り出して腕を伸ばし、俯いた彼女の額を、宥めるように軽く叩く。

「あやま……」

「気にする必要などありません」

藤堂の言葉を遮るように、抑揚のない特徴的な声がそう言った。まだ子供らしさの残る高い声だが、感情が聞き取れない。明は弾かれたように振り返り、大きく瞬きをする。

「メイさんは何も悪くないのです」

大きな鞆を抱えた小柄な少女は、自信に満ちた声でそう言った。暑さの為か、普段なら青白いはずの顔が紅潮している。小さな鼻と口、ふつくらとした頬が、子供の面影を残す。大きな目からかなり離れた位置にある眉は、への字に曲がっていた。

テストが始まった為、いつもより一時間ほど遅れて事務所に来た黒江ゆなは、真っ直ぐ明に歩み寄って彼女を見上げ、かすかな笑みを口元に浮かべた。安心させようとしているのだろうが、その表情はどこかきこちない。外が暑かったのだろう。

「ゆなも皆さんも、気にしてはおりませぬ」

「そんなことで怒るほど、狭量ではありませんもの」

背後から聞こえた声に目を丸くして、藤堂は肩越しに振り返った。きついウェーブのかかった金髪を揺らし、高屋敷渚が藤堂宅へ続く扉から出てくる。昼食の後片付けを終えたのだろう。

きつい顔立ちだが、彼女の笑顔には品があつた。つり上がった目を縁取る長い睫毛は揃って上を向き、フランス人形を思わせる。艶やかに光る唇が、緩やかな弧を描いていた。

「言えない秘密ぐらい、誰にだってありますわ」

穏やかな声を聞いてようやく、明は安心したようだった。小さく頷き、目を細めて笑う。

「ありがとう」

いつもと変わらない、明るい表情だった。藤堂は胸につかえていたものが取れたような感覚に、安堵の息を吐く。

頬を緩めていた渚が、不意に芹香を見て表情を引き締めた。微笑ましげに明を見ていた芹香は、視線に気付いて首を傾げる。長い銀髪が、肩口から滑り落ちた。

「鳳さんのことを、お父様に聞いて参りましたの」

今更何を言い出すものかと、藤堂は思わず眉根を寄せた。過激派に関しては、昨日決着がついたはずだ。それとはまた別に、何か聞いていたのだろうか。

「社長の事か」

藤堂はようやく、あの屋敷で鳳の社長が何かしているのではないかと、勘繰っていたことを思い出す。ついこの間、芹香とそれについて話をしたばかりなのに、すっかり忘れていた。あまり社長について、考えなくなかったのだが。

明の表情が、険しいものへと変わった。彼女も何かしら、異変には気付いていたのだろう。

「というよりは……中立派が怪しいと、お父様は言っておられましてわ」

藤堂は思わず首を捻った。一度芹香から聞いただけなのでうる覚えだが、中立派といえば、芹香の逃走の手助けをしてきていたという部長がそうだった筈だ。

「世話になったから、あまり考えなくなかったが……高屋敷氏は、流石に訝っておられたか」

「過激派があれだけ暴れているのに何もしないのは、流石におかしいですもの」

「え、だって中立派は不可侵だって昨日……」

全員の視線が向いたので、藤堂は驚いて口を噤んだ。明とゆなは怪訝な面持ちだが、後の二人は厳しい表情を浮かべている。何だと言うのだろう。

「中立派の殆どが、役員のポストに就いている」

芹香の言葉に顔をしかめた明は、思案するように視線を宙へ流す。「あの川重って人は、専務だったんですね？ そんな偉い人がいたから、ヘタに手を出せなかったんじゃないですか？」

「あれだけやったら、流石に解雇出来ますわ」

藤堂は胡散臭そうに鼻を鳴らして、片眉を寄せた。

「でも確か、一度は小田原を解雇してたよな。社長がどうのって言うてなかった？」

藤堂の視線に目で応え、芹香は困ったように眉根を寄せる。思えば最初に社長の名前を聞いたのは、芹香の口からだった。あの時も確か、どんな人物なのかと訝ったような気がする。

「あれはハツタリだ。経理部からの告発を受けて、私が人事部長に掛け合っただ。法外な依頼料の殆どを、懐に入れていたようだからな」

「人事部長は、穩健派でしたものね」

渚は納得したように呟いたが、明は小鼻を膨らませた。また怒鳴り始めそうだったので、これ以上話がややこしくなるのを危惧した藤堂は、彼女の口を掌で塞ぐ。思い切り睨まれたが、藤堂は見ない振りをした。

「じゃあ、実際社長は噛んでなかったんだな」

明から隣の芹香へ視線を移すと、彼女は頷いた。

「忙しいからな。社長は滅多に会社に顔を出さないし、連絡もなかなかつかない。だから大体の事は、社長を通したりはしない……あの人は中立派だ、その時点で何かに気付くべきだったんだが」

「仮にも組織の長ですもの、見てみぬ振りをする必要なんてありませんわ。不穏分子があれば、早めに叩き出して然るべきだと……あら？」

渚はそこまで言っつて首を捻り、芹香を見た。

「何故、『中立』なんですの？」

その通りだと、藤堂も思う。中立でいる必要はない。過激派連中が会社の信用を落としているなら、それこそ中立派にも所属せずに過激派を肅清すべきではなかったのだろうか。それが中立派として見てみぬ振りをしていたのであれば。

そもそも社長に会社を守る気など、更々なかったという事か。

「鳳は、慢性的な人手不足に悩まされていた。社長自身が中立でいることで、過激派と穏健派のどちらからも、会社への不満が出ないようにしているのだと、私は考えていたんだが……こうなった以上、そうとも思えんな」

「これ以上人員が不足しないように、ということですか。それにしても、くさいですな」

ゆなはお下げに結った髪を掴んで揺らしながら、ううむと唸った。藤堂の手を力任せに引き剥がした明が、それに同意する。藤堂は離された腕をカウンターに乗せ、再び頬杖をつく。

「会社が内部崩壊を起こしたのに出てこないのもそうだけど、こうなるまで放っておいたのも、怪しいよ」

藤堂は頬杖をついたまま、目を眇めて頬を撫でた。最近では毎朝髭を剃るようになったので、手触りが物足りない。

「知らないってことは……ねえか」

「退社した社員の話は、人事から行っているようだが……何にせよ、放って置かれているな」

「その割に、芹香さんに戻れって言いますよね」

芹香は僅かに眉を顰めた。見てはいけないような気がして、藤堂は目を逸らす。彼女の一挙手一投足が気になって仕方がないから、見ないようにするしかなかった。この期に及んで自分はまだ、疑っている。

「社長さんが社に対してどういった考えをお持ちだったかは、この際関係ありませんわ」

指先で絹糸のような輝きを放つ金髪を巻いていた渚は、その手を離して全員の顔を見回した。

「問題は、あの屋敷で社長さんが何をなさっているのかではありませんこと？」

芹香は頷いたが、明は目を丸くした。ゆなは何を悩んでいるものか、腕を組んで唇を尖らせている。

「あの屋敷に、利用価値があるの？」

明の疑問はもつともだ。霊が溜まる屋敷で何をしようとしていたのか、皆目見当もつかない。しかしあの屋敷の主が社長の飼っていた霊だった事も、また事実なのだ。

あの主に、何をさせていたのだろう。仮に屋敷を守らせていたのであれば、何か理由があつた筈だ。

「屋敷に霊を集めてたのが、社長とか」

藤堂が言つと、渚は顎に指先を添えて、考え込むような表情を見せた。芹香は眉間に皺を寄せて俯く。どこか辛そうにも見えた。そう見えてしまうのも、無意味に懸念しているせいかも知れないが。

「あの火の鳥は完璧になりたいと言っていたのだもの、社長さんが霊を集めて、希有な能力を吸い取らせていたのだとしたら……」

「だとしたら、どうするのです」

抑揚に乏しいゆなの声に、藤堂の頭が一気に冷えた。

「社長さんが何かしようとしていたのだとしても、ゆな達には関係のないことです。考えてどうするというのはです。それにもう、あの子はおりませぬ」

明と渚は、揃って下を向いた。確かに、関係はない。ここで議論していても仕方のないことだ。

「あの会社から解放された芹香さんを、これ以上悩ませてどうするのです」

心臓を鷲掴みにされた気分だった。

その通りなのだ。具体的に、何かが起きている訳ではない。ここで勝手に議論して、どうなる訳でもない。何か企んでいそうだからといって、まさか大企業の社長を糾弾する訳にも行かない。

芹香は顔をしかめたまま、何も言わなかった。握り締められた白い手が痛々しく見えて、藤堂は目を細める。

無言の間が続いた。藤堂はちらりと外を確認する。客らしき人影もなかった。

「ちよつと、休むか」

明が怪訝な顔をした。

「盆休み。一週間ぐらい休んだ方がいいんじゃないかねえの、俺も実家帰りてえし」

「唐突だね。まだお盆じゃないし」

「思い立ったが吉日」

にやりと笑うと、明と渚が顔を見合わせて、ようやく顔を綻ばせた。

第八章 生を知る 二

藤堂は夏休みと定めた日数の内、二日は実家に帰っていたが、残りは鹿倉一家に誘われて沖繩へ行っていた。迷惑をかけた詫びに旅費は持つというから、藤堂もあつさりついて行ったのだ。

しかし実際のところは、子供のお守りとして連れて行かれたに過ぎない。一緒に行った芹香は楽しそうだったが、体力のない藤堂は早々にだらけていた。それでも夜には元気になってしまつから、人間というのは不思議なものだ。

短い夏休みが明けた日。一番に事務所へ顔を出したのは、ゆなだった。テスト期間が終わつて、夏休みに入ったのだろう。

ゆなは挨拶もそこそこに、カウンターへ腰を下ろした藤堂を見るなり、駆け出した。日焼けした腕にまともなぶつかつて来られて、藤堂は思わず悲鳴を上げる。

「痛つ、ちょ、離せお前！」

素直に手を離れたゆなは、頭天边から爪先まで藤堂を見て、にやりと笑つた。

「黒くなりましたね藤堂さん。黒くて硬くて大きくて素晴らしいのです」

「何が硬いの、お前の頭？」

言いながら、藤堂はゆなのヘルメットを拳の裏で叩いた。ゆなは不満げに唇を尖らせる。何が気に食わなかったのか、藤堂には分からなかった。逐一ゆなに付き合つていては、こちらが疲れてしまう。藤堂の横へびつたりとくっ付いたゆなは、店内を見回して首を捻つた。

「皆さんまだなのですか？」

曖昧に返事をして、藤堂は肩越しに背後の扉を見る。溜まった洗濯物を干していたから、まだ時間が掛かるだろう。ゆなに視線を戻すと、彼女は恨みがましい半目で藤堂を見ていた。

「そんなに熱い夜を過ごしたのですか」

「ちげえよ、洗濯物」

「新婚さん気分ですか。藤堂さんにはゆなという伴侶が」
「ないから」

藤堂は既に疲れていた。明は渚に預けているから、渚が来るまで一人でゆなの相手をしなければならぬ。手際の悪い芹香に任せず、洗濯ぐらい自分ですれば良かったと後悔した。

呑気なものだ。暑さは変わらないが、休み前より幾分疲れが取れている為か、気分は良かった。このまま依頼が来なければいいのに、とさえ思う。

背後の扉が開く音がした。ゆなは首を巡らせて、真後ろの扉を振り返る。

「おはようございます」

「おはよう。早いな」

芹香の肌は、相変わらず白いままだった。赤くなるだけで焼けないそうだが、それもまた痛々しい。

芹香は携帯電話を片手に持ったまま、店側へ下りてきた。体に張り付いたTシャツを押し上げる豊かな胸に視線が行きかけたが、藤堂はさり気なく目を逸らす。隣でゆなが、両手を合わせて拜んでいた。

「今、メイから連絡が入ってな。随分慌てて……」

芹香が言いかけたところで、自動ドアが開いた。セーラー服を来た少女が飛び込んで来るのを見て、藤堂は片眉を寄せる。明が慌てている時は、碌な事がないのだ。彼女は片手に、丸めた紙を持っていた。

「と、藤堂さん！」

慌てた様子で駆け込んで来たのは、明だけだった。藤堂は渚の姿がない事を訝しく思ったが、彼女は体力がないから、明に置いて来られたのだらう。幽霊は炎天下をどんなに走っても疲れないから、楽でいい。

真つ直ぐカウンターに駆け寄って、明は藤堂の肩を掴んだ。日焼けした肌に圧力がかかり、焼けるような痛みが走る。藤堂は再び悲鳴を上げた。

「いてえよお前ら、嫌がらせか！」

「呑気に日焼けしてる場合じゃないの！ 見てこれ！」

明は筒状に丸めた紙を広げ、カウンターの上に叩き付けた。衝撃で机が揺れ、上に乗っていた灰皿がかたかたと音を立てる。灰が零れるのを気にして、藤堂は片手でそれを押さえた。

三人は顔を見合わせてから、明が持ってきた紙を覗き込んだ。パソコンから出力した地図のようだが、所々に赤いペンで、丸印と日付が書かれている。

藤堂はゆなと揃って首を捻ったが、芹香は眉を曇らせた。

「メイ、これは……」

「ここ数日で、突然悪霊が大量発生した家の位置です。他の業者に聞いた所は、正確な場所を教えてもらえなかったりしたので、曖昧に丸がついてますけど」

藤堂は早々に地図から視線を外し、煙草に火を点けた。手持ち無沙汰になると、落ち着かなくなる。

「そんなの、どうやって聞いたの」

「渚さんが聞いて……どうでもいいでしょそんなこと！」

答えたはいいが憤る明に軽く肩を竦め、藤堂は再び地図を確認する。所々に書き込まれた日付を見る限り、夏休み中まで仕事をしてきたようだが、問題はそこではないのだろう。

赤い丸印は、遠目で見るといびつな円を描いているように思えた。これが何を意味するのか藤堂には分からなかったが、横目で見た芹香の表情は硬かった。

「何かあるな」

明は真剣な表情で、大きく頷いた。勝手に納得されても、藤堂には理解出来ない。ゆなを見ると、彼女もヘルメットを押さえたまま、未だに頭を傾けていた。

怪訝な面持ちの藤堂とゆなを見て、明は円の中心を指差した。その辺りの地名には、聞き覚えがある。

「ここが、幽霊屋敷」

暫くの無言のあと藤堂は、え、と聞き返した。ゆなは目を丸くして、顔を近付けてまじまじと地図を覗き込む。理解力に乏しい藤堂に、明は呆れた溜息を吐いた。

「つ、ま、り！」

突然聞こえた声に、藤堂は驚いて入り口を見た。白いレースの日傘を畳みながら、渚が事務所内へ入って来る。随分と疲れた顔をしているのは、途中まで明に走らされていた為だろう。

渚はカウンターに近付いて明の横へ立つと、人差し指で地図を叩いた。細い眉が急角度を描いている。

「屋敷で何か起こっているのよ！ いくらなんでも、こんな偶然はありえませんか！」

ふうんと鼻を鳴らして、藤堂はカウンターに頬杖をつく。大方休みの間に、二人で盛り上がってしまったのだろう。二人とも怒りっぽい性分だが、渚は明より理性的な筈だ。その彼女まで憤っているという事は、大変な状況ではあるのだろう。

しかしかには大変だろうと、依頼がない限りは、藤堂達には関係のないことだ。勝手に怒るのはいいが、休み前にゆなが言ったことを忘れられては困る。

「具体的に、どうなってるの？」

渚は首を竦めて口ごもった。カウンター上の地図を叩き、明が藤堂に顔を近付ける。猪突猛進型に思えるのは、幽霊だからなのだろう。彼女は実体化しているから理性は一応あるが、普通の霊と同じように、感情に流されやすい。

「全然関係ない人たちの家に、悪霊が湧き出すようになったんだよ！」

「なんで？」

「知らないよそんなの、それを調べに行くんじゃない！」

渚を黙らせるのは案外容易だが、一度頭に血が上った明を落ち着かせるには、並大抵の努力では済まない。このままでは押し問答になりそうだ。

藤堂は明の説得を早々に諦め、横目で芹香を盗み見る。眉間に皺を寄せて俯く彼女は、何事か考え込んでいるようだった。

また彼女は、一人で悩むのだ。今まで相談する相手も碌にいなかったのなら、それも仕方のない事だとは思う。それでも、藤堂は寂しく思う。何も相談しない自分に対してゆなが怒ったのと、同じような感情なのかも知れない。

「いいよ、藤堂さんが行かないなら私が……」

「ちよつと待ちなさいよ」

煙を吐き出しながら制止する藤堂の声に、明は口をつぐんだ。

「だから、どうすんの？」

ゆなは唇を引き結んだ明を見上げて、藤堂の言葉に同意するように頷く。渚は顔をしかめて俯いていた。

「行ったところで、何が起きているのかはきつと分かりませぬ。幽霊屋敷で誰かが何かしているのだとしたら、それは確かに鳳の社長さんなのでしょう」

目を細めた芹香は、口を挟もうともしなかった。明と渚を止める気も、屋敷へ行く気もないのかも知れない。或いは、そのどちらも違うのか。

「他の誰かだったら、行けばいいかも知れませぬ。でも、相手は社長さんです。誰も何も知りませぬ。渚さんのお父上様だって何も知らなかったのなら、ゆな達が行って何が出来るというのです」

諭すようなゆなの声を黙りこんだまま聞いていた明は、とうとう肩を落として俯いた。やっと落ち着いたのだろうが、悔しげな表情を浮かべる彼女に、藤堂は同意も出来る。

あまりにも、無力だ。除霊屋は警察ではない。依頼がなければ動く大義名分がないし、嫌疑が掛かっているだけで動く訳には行かない。下手に動けば、こちらが潰される可能性もある。

ならば、どうすればいいのだろうか。そう考える前に、答えは出ている。何があったとしても、黙って見ているしかないのだ。為す術はない。高屋敷が何も知らないというのだから、調べて分かる事でもない。

「俺らに出来るのは、依頼があつた時、その人を助けに行く事だけだろ。社長相手じゃ、何も出来ねえよ」

渚が小さく頷いた。明は釈然としない様子だったが、広げられていた地図を取って、元通り丸める。

芹香はそれでも、顔を上げなかった。何を考えているものか、藤堂には分からない。休みの間に彼女と少し話はしたが、社長が何を企んでいるかは、知らないようだった。

藤堂は胸の痛みを覚えて、眉を顰める。今の芹香はあまりにも、辛そうだった。かと思えばついこの間、昔はよく無茶をして、社長に止められたのだと語っていた彼女は、楽しそうに見えた。つまり、そういうことなのかも知れない。

快くは思わない。不愉快だと言った方が正しいだろう。それでも、聞けなかった。臆病なのだ。

「……ん？」

地響きのような音が、微かに聞こえる。藤堂はさては地震かと訝って店内を見回したが、何も揺れてはいなかった。

「匡！」

気のせいだろうか。そう思った矢先、真つ黒に焼けた熊のような男が店内へ飛び込んだ。真つ直ぐカウンターへ向かって来た鹿倉清澄は、細い目を限界まで見開き、太い眉をつり上げている。先ほどの地響きは、彼の足音だったのだろうか。

明と渚が慌てて道を開けると、鹿倉はカウンターにぶつかる寸前で手を付き、立ち止まった。上半身をカウンターの上に乗り出しているせいで、藤堂との顔の距離が近い。

「た、た、大変だ！」

「大変なのはお前の黒さだよ」

暑苦しい顔を近付けてくる鹿倉から逃げるように背を反らし、藤堂は顔をしかめた。虫でも払うように手を振るが、鹿倉は動じない。何故この男はこうも来る度に慌てているのかと、藤堂はうんざりする。

ひどく慌てた様子の鹿倉に、明が眉を顰めた。藤堂も、いやな予感はある。大きく息を吸って飲み込んだ、鹿倉の口から出る言葉を、聞くのが嫌だった。

「また、出た」

明と渚の表情が、凍りついた。ゆなは表情を変えないまま、両手で口元を覆う。Ｔシャツの袖で額の汗を拭いた鹿倉は、少しだけ力ウンターから体を離れた。第一声を発して、落ち着いたのかも知れない。

「札はまだ、ギリギリ保ってる。今朝、近所の拝み屋が来てな。浮遊霊共が悪霊化するペースが、異常に早まってるらしいんだ」

関係ないと、悠長な事を言っている場合ではなかったようだ。悪霊化が早まったということは、何がしかの影響を強く受けているということだ。あの場所でそれほど影響力の強いものといえば、あの屋敷しか思いつかない。

どうすればいいのだろう。炎天下を走ってきた為か、上がったままの息を整える鹿倉を見つめながら、藤堂は焦りにも似た感覚を抱く。体中が熱を持ったようだった。

「このままじゃまた、こないだまでと同じような事になっちゃう」何も出来ないのだと言って、先ほど明と渚を諫めたばかりだ。そのすぐ後で、分かった、と言う訳にも行かない。それでも確実に、被害は出ている。

黙りこんで俯いていた芹香が、漸く顔を上げた。凜々しい横顔には、最早一点の曇りもない。

「依頼しますか」

え、と鹿倉が呟いた。渚が目を丸くして、芹香を見る。

「せ、芹香さん？」

「依頼があれば、行く理由が出来るだろう。向こうがしている事は、恐らく退治屋の仕事の内には入らない。こちらの業務遂行の邪魔をするなら、業務執行妨害で通せばなんとかなる」

芹香は鹿倉を見上げたまま、渚にそう返した。彼女はずっと、そんなことを考えていたのだろうか。そうだと思いたい。

こんな時まで、何を気にしているのだろう。藤堂は心中、自嘲する。依頼があれば、行動を起こすだけの根拠が立つ。理由さえあれば、乗り込むことも出来るだろう。今はそれだけ考えていればいい。余計なことを気にしてはいけない。

鹿倉は不安げな面持ちで、悩む藤堂の様子を窺っていた。藤堂は彼に向かって、曖昧に笑って見せる。暫くの間の後、鹿倉は全員の顔を見て、頭を下げた。

「依頼する。させてくれ」

藤堂が頷くと、明は顔を綻ばせた。しかしさすがに不謹慎だと思っただのか、すぐに掌で口元を隠す。

「準備が必要ですから、明日伺います。メイ、それでいいな？」

芹香に聞かれると、明は黙って首を縦に振った。今日の今日では、藤堂の心の準備も出来ない。渚も札を用意する必要があるだろう。

今度こそは、あの屋敷で何が起きるか分からない。それでも、依頼を請けた以上は行かなくてはいけない。藤堂は初めて心の底から、行きたくないと思っていた。

「これ、鍵な。頼んだぜ」

よれたニツカポツカのポケットから鍵を取り出し、鹿倉はカウンターの上に置いた。前回は開いていたが、鹿倉が開けておいたのかも知れない。やけに新しいから、最近になって取り付けたのだろう。鍵が放つ無機質な光に、藤堂は寒気を覚えて腕を擦る。

出て行く鹿倉の背中を見送ってから、藤堂はふと隣を見る。目のすぐ上で切り揃えられた前髪に隠れて、芹香の表情は窺えなかった。休みの間にもう少し話し合えば良かったと、藤堂は後悔する。

「ゆなちゃん、今回は……」

「行きます」

渋面を作った明は、肩を落として溜息を吐いた。ゆなは藤堂の服の袖を握り、鹿倉が置いていった鍵を見つめている。

行かなければいけない。それでも。

「ユーウツ」

ぼやいた藤堂の顔をまじまじと見た明は、黙って拳を握った。

第八章 生を知る 三

全体が葬式ムードの町に、蝉時雨が降りしきる。うだるような暑さの中、疲れきった表情で歩道を歩く人々は、車道を駆け抜けた黒塗りの車を、見るでもなく眺めていた。彼らの目に生気が感じられないのは、暑さのせいだろうか。

暗い町の中でも特に人通りのない一角へ入って行った車は、朽ちかけた洋館の前で止まる。黒光りする車からまず出てきたのは、刀を持ったおかつぱ頭の少女だった。照りつける日差しの中、眩しそうな素振りすら見せず、彼女は真っ直ぐに洋館を見上げる。

「暑いですわ」

文句を垂れながら車から降りた渚は、洋館を見上げる明を見て、眩しそくに目を細めた。運転席から降りた藤堂は、同じく明に視線を向けて顔をしかめる。セーラー服の白い生地が光が反射して、ひどく眩しい。

続いて出てきたゆなは、明の隣に立ってしつかりとヘルメットを被り直した。幾重にも貼られた札は、古くなったものを新しいものに交換してある。

ゆなは邪魔にならないようにとの配慮からか、髪を一つに結んでいた。しかし彼女は特に何をするわけでもないのに、意味がないようにも思える。気分の問題なのだろう。

「前よりも、ひどくなっているな」

最後に芹香が降りてくるのを待って、藤堂は車をロックした。盗み見た横顔はいつものように凜として美しかったが、どこか陰が落ちているようにも見える。

無理もないだろう。靈感のない藤堂でさえ、この場から逃げ出しかたくて堪らなくなっている。それほど、目の前の屋敷からは、人を寄せ付けない不快な空気が漂って来ていた。夏だというのに、この周囲だけ冷えきっているかのようだった。

黒縁の眼鏡越しに見た屋敷の周囲は、以前来た時からさほど変化はない。しかし屋敷自体から放たれる威圧感は、以前の比ではなかった。ここに訪れる者全てを拒むかのような、胸の内をざわつかせる空気。敷地内に足を踏み入れる事さえ躊躇われた。

錆びた門に手をかけた芹香は、久しぶりにスーツを着ていた。社長と対面することを想定したのかも知れないが、どちらにせよ暑そうだ。会社にいた時は、よほどひどい現場でない限りはスーツでいたようだが、動きにくそうでもある。

「昨日一晩、考えてみましたの」

札を振りながら、渚は暗い表情で呟いた。札から出てきた、ロマンスグレーにして筋肉隆々という異様な風体の執事は、渚を守るように隣へ寄り添う。彼は心なしか、普段より幾分厳しい表情を浮かべていた。

門を開きかけた手を止め、芹香が肩越しに渚を振り返る。渚は、俯いたまま顔を上げようとしなかった。

「もしかしたら社長さんには何の悪意もなくて、ここで何かしようとしているのも、ここに悪霊を集めて、いっぺんに退治しようとしているのではないかと……」

明が驚いたように目を丸くして、刀を握り締めていた手の力を僅かに抜いた。ゆなが無表情のまま、首を傾げる。

「集めるだけ集めていたのはそうだとして、退治をしておられた形跡はあるのですか？」

俯いたまま首を左右に振り、渚は小さく溜息を吐いた。聞くところによれば、彼女の父親と鳳の社長は、昔から懇意にしているのだという。だから彼女は父親から、社長の話を聞いたのだろう。

それとも、悪事を働いているのだと、今更考えたくなくなってしまうのだろうか。何にせよ、昨日までの彼女の様子からは考えられない発言だと、藤堂は思う。一晩経って、頭が冷えたのかも知れない。明と同様に怒りっぱい彼女だが、こういう冷静な判断が出来る分、向こうより大人だ。

「分かりませんわ。抹消すれば、何の痕跡も残りませんから。そういう可能性も、なくはないということですよ」

渚の不安に気持ちが揺らいだのか、明は首を竦めて上目遣いに彼女を見上げた。

「そうだとしたら、無駄足ってこと？」

「そうでもないさ」

錆びて朽ちかけた門の蝶番が、不快な音を立てた。手に付いた赤錆を払って手袋を嵌めながら、芹香は敷地内へ足を踏み入れる。彼女の歩みには、躊躇がなかった。芹香は芹香で、一晚経って考えがまとまったのかも知れない。

ふと足元を見ると、今にも泣き出しそうな表情で、コウが洋館を見上げていた。怪訝に思っただけを捻ると、少年は継るような目で藤堂を見つめる。

「そうだとしたら、手伝うぐらいは出来るだろう」

藤堂と目を合わせたまま、コウは大きく首を左右に振った。芹香の言葉に対する否定であるのか、行くなと言っているのか。めつきり喋らなくなった彼の意思は、藤堂には伝わり難い。

行くなと言われても、引き下がる訳には行かなかった。確かにこの屋敷には、入りたくない。それでも、コウに言われたから車で待っているとは言えない。ここで丸投げしたくはなかったし、ここまで来たのだから、という気持ちもある。

何より、不安だった。何が聞かれれば、明言は出来ない。ついに行って、見ていなければならぬような気がしていた。そうではないと。

「そうではないと、どうなるのだろう」

「どちらの可能性も、行ってみるまでは捨てきれませぬ。ここで長々相談していても、真実は分からないのです」

渚は伏せていた顔を上げ、ゆなを見た。感情の読み取りづらい無表情は、いつもと大差のないものだ。それに背中を押されたのか、渚は曇らせていた表情を引き締める。

変わりのないゆなの様子に、安心したのかも知れない。明は一足先に洋館へ近付いて行く芹香の背中を見た後、後ろの三人を振り返った。

「百聞は一見にしかず。行こ！」

明はコウの表情には、気付かなかったのかも知れない。すぐに洋館へ向き直り、敷地内へ入って行く。それに渚とゆなが続き、藤堂はしんがりで門をくぐる。コウは藤堂にしがみ付いたまま離れようとしなかったが、藤堂を止めようとしなかった。仮に止められていたとしても、藤堂は聞かなかつただろうが。

全身に纏わりつくような、粘ついた空気が漂っている。そのくせ妙に冷えていて、全身に鳥肌が立つ。一歩一歩足を踏み出す事さえ、藤堂には辛かった。一番霊の影響を受けやすいゆなは、ヘルメットをしつかりと押さえたまま、渚の服の裾を握っている。藤堂の傍にいるよりは、渚と居た方が安全だろう。

鉛でも流し込まれたかのように、足が重い。気を抜くと泥濘に捕らわれて、永遠に抜け出せないのではないかという不安にさえ襲われる。この屋敷が纏う空気のせいもあるのだろうが、コウが行かせまいとしているのかも知れない。

ゆつくりと館の前へ進んだ芹香は、取っ手に取り付けられた南京錠を外すと、大きな扉を躊躇なく開け放った。藤堂は一瞬身構えたが、薄暗い玄関ホールに、霊の姿はない。些か拍子抜けしたが、この間のように湧いて出てくる可能性はある。

開けたそばから明が真っ先に入って行ったので、芹香はそのまま、片手で扉を押さえて道を開けた。明に続いて厳しい表情の執事が入り、ゆなの手を握った渚が、その後を追う。気乗りのしない藤堂も彼女らに続こうとしたが、背筋を這う冷たい感覚に身震いし、足を止めた。

完全に、足が竦んでしまっている。藤堂自身は、体が動かないほどの恐怖は感じていなかったのだが、足が言う事を聞かなかった。これも、コウのせいだろうか。

踏み込もうとした姿勢のまま硬直した藤堂を見て、芹香が首を捻る。臆していると思われるのも癪だったが、動かないものは仕方ない。何より彼女も霊感は強いから、コウが引き止めているなら、それと気付くだろう。

「どうした」

「いや、コウが」

不思議そうに瞬きをした彼女は、藤堂の足元に視線を落として、ああ、と納得したように呟いた。扉を背中で押さえたまま、考え事をするように顎へ手を当てる。

芹香の視線が、館の中へ向いた。玄関ホールを見回す明は、しきりに首を捻っている。霊の陰も形もないことを、怪訝に思っているのだろう。

「行きたくないのか」

コウに視線を戻して、芹香はそう聞いた。藤堂の腰に顔を押し付けていたコウは、彼女を見上げて首を横に振る。彼自身が臆している訳ではないらしい。

「匡を行かせたくないのか」

コウの薄い眉がしかめられた。返答に困っているような表情だが、行かせたくないと言えば、その通りなのだろう。曖昧だが、それぐらいはなんとなく分かる。

自分の守護霊が何を考えているのか、藤堂には分からない。けれど彼の意思ぐらいなら、少しは伝わってくる。彼が今藤堂を引き止めているのは、恐らく何かを予期しているからだ。同じく藤堂にも、明言は出来ないが、予感だけはしている。行かなければいけないよ、うな、気がする程度ではあるが。

「大丈夫だよ。匡は私が守る」

「そういう問題じゃないと思う」

言いながら藤堂は、これでは立場が逆だと自分を情けなく思う。芹香は頼りがいがありすぎる。自分が女だったら、間違いなく惚れていただろうとも思う。そうでなくとも惚れてはいるが。

ふと視線を落とすと、コウがこちらを睨んでいた。藤堂は思わず顔をしかめる。文句があるなら言えいいだろうにと思うのだが、そういう訳にも行かないのかも知れない。守護霊に関しての制約は、藤堂には分らない。

ふてくされたように唇を尖らせたコウは、渋々といった様子で、藤堂から少し離れた。ようやく足を動かせるようになった藤堂は、扉を押さえながら玄関ホールへ入って行く。入った瞬間再び寒気に襲われたが、一人で鳥肌を立てている訳にも行かない。

芹香が扉から背を離したので、藤堂は後ろ手で閉めた。カビと埃の臭いが、呼吸をする度に鼻を突く。

前回吸い込まれた天井を見上げると、相変わらず薄汚れたシャンデリアがぶら下がっている。既に随分と老朽化しているあれが頭上に落ちてきたら、ひとたまりもないだろう。霊が無機物に触れないことを、これ程までに有難いと思う事も、他にない。

「何もいませんわね」

ハンカチで口元を押さえた渚が、くぐもった声でそう言った。確かに、見る限りでは何もいない。注意深く周囲を見回していた執事が、渚の声に頷いた。確かに霊の姿はないようだ。しかしそれが逆に、恐ろしく感じられる。

「でもなんか、嫌なかんじ」

長袖を着た腕をさすりながら、明がぼやいた。

「とにかく、行くか」

「どこに？」

出鼻をくじかれて、芹香は渋い表情を浮かべた。藤堂を振り返った彼女は一つ咳払いをした後、既に何度も確認した室内へ視線を巡らせる。ホールの左右に扉があるが、まさかここで手分けして探す訳にも行くまい。

そもそも、探したところで誰かがいるのかどうかさえ分からない。ここで社長が何かしている、というのもただの憶測であり、確証などありはしないのだ。

それでも、確実に何かが起きている。ここへ来るまでの町の様子から考えてもそれは明らかだったし、前回来た時よりも、遙かに空気が淀んでいる。依頼自体は、再び悪霊が溜まり始めた原因を突き止め、解決して欲しいというものだから、原因さえ分かればなんとかなるだろう。

「全員で行くのも非効率的だが……探すしかないな」

言いながら、芹香は扉へ歩み寄っておもむろに開いた。藤堂は一瞬身構えたが、何か飛び出して来る訳でもなく、ただ広い部屋があるだけだった。破れた大きなソファが置いてあるから、応接間だったのだろう。

室内を覗き込んで暫く見てから、芹香は振り返って首を左右に振った。何もなかったのだろう。この調子で探しては、時間がいくらあっても足りないような気がする。

「手分けするのも、危ないかも知れせんわね。何かあるのか、全く分からないのですから」

「社長さんが善意で何かやっているのならば、簡単に済みそうなのですが」

ゆなが呟くと、芹香が静かな声で答える。

「そうとも限らんからな」

明が驚いたように芹香を見上げたが、藤堂の位置から彼女の表情は窺えない。何かを諦めているような、怒りを押し殺しているかのような、冷たい声だった。

芹香が開けた方とは反対側の扉へ近付き、執事はゆっくりとドアを開いた。僅かに開けた隙間から頭を突き出すような形で室内を覗き込み、肩越しに振り返って首を左右に振る。こちらにも、何も無いようだった。

「中に扉とかは、ないんですか？」

明が問いかけると、執事は更に首を振る。大きな洋館だが、面積が広いだけで、部屋数は少ないのかも知れない。

「そういえば、廊下の突き当たりに下り階段あったよね」

明の言葉に頷いたのは、今度も執事だった。シヨートカットで主の部屋まで行ってしまった藤堂は、前回道中で何があったのか知らない。

「じいやは気にしてありませんわね」

「そちらも同じ構造だったなら、どちらへ行っても同じか」

言いながら、芹香が中二階に繋がる正面の階段に向かった。明が慌てて後を追った。六人の一番後ろを歩きながら、藤堂は怪訝に眉根を寄せる。

芹香は何か、焦っているように思われる。何か知っているのか、知らないから焦っているのか。どちらにせよ彼女の性格上、知っているのだとしたら全員連れては来ないだろう。

もしも来るなど、言われていたら。それはそれで、藤堂は尚のこと訝っていた。出来る事ならついて来たくは無いと思っていたが、来るなど言われたところで、きつと引き下がりしなかった。矛盾している上に不純な動機だが、些かほつとした。

行きたくないと思ったのは、何故だったろう。大企業の社長を相手取って戦いたくなかったから、だろうか。そうと決まった訳ではない。渚が言ったように、向こうは悪事を働いているのではないかも知れない。

コウが引き止めたからだろうか。行くべきではないと、彼が判断したからだろうか。そうだとしたら、未だに他人に流されているのだからと、藤堂は心中溜息を吐く。少しは変わったと、思っていたのだが。

「何もいないね」

中二階の階段を上って左側の扉を開けた明は、落胆とも取れるような気の抜けた声を漏らした。

「私一番後ろに行くから、芹香さん先に行ってください」

ああ、と呟いた芹香は、一度肩越しに振り返る。藤堂と目が合ったが、何も言わずに正面へ向き直った。彼女のその態度に、藤堂は何故か不安を煽られる。

声を掛けられなかったことが、嫌だった訳ではない。そこまで子供ではないし、話す事もない。

ただ、彼女の髪が翻るのを見て、胸が痛んだ。このまま芹香がいなくなってしまうような気がした。それすらもただの懸念に過ぎないし、嫉妬心から来るものであることも、重々承知している。

嫉妬、なのだろうか。

藤堂は自問したが、納得の行く答えは出そうになかった。それは少し、違うように思われる。

彼女は誰に何を言われても、社長の下へは戻らなかった。戻れば誰も傷つきはしなかったし、彼女自身悩むこともなかっただろう。もしかしたら、過激派の手からも守ってくれたかも知れない。それでも、彼女はこちら側を選んだ。

そんな事を気にしている訳ではないのだ。今自分が気にしているのは、そんな事ではない。もっと単純で、下らないこと。

「藤堂さん？」

背後から聞こえた声に、藤堂は肩を震わせた。横を向くと、顔を覗き込む明の不安げな目と目が合う。

「どうしたの？」

答えられなかった。藤堂は曖昧に笑って、正面へ向き直る。こんな時に馬鹿な事を考えるなど、怒られるに違いない。それとも、説得されるだろうか。

諦めたのか、明はそれ以上、何も聞かなかった。いや、聞けなかったのだろう。

足元が、大きく揺れた。

第八章 生を知る 四

全身を揺さぶられるような衝撃につんのめって、藤堂はその場に膝をついた。揺さぶられるような、ではない。世界が揺れている。渚が悲鳴を上げて執事に抱きついた拍子に、ゆなの頭が彼女の背中にぶつかった。

背後から轟音が聞こえて、渚は更に叫び声を上げる。聞こえてきた方向と、ガラスが割れたような高い音から察するに、玄関ホールにあったシャンデリアが、とうとう落ちたのだろう。来る時間ともう少し遅かったら、全員下敷きになっていたかも知れない。藤堂はそう考えてぞっとする。

よるめいたゆなを執事の手が支え、片腕に抱き込んだ。大きな揺れが続いているにも関わらず、彼自身は微動だにしない。霊は地震の影響を受けないのだろう。

「ちよつと、何これ！」

苛立たしげに叫んだ明は、慌てて足下に屈んでいた藤堂の頭を掴む。彼女も執事と同じく、揺れてはいない。気になってふと視線を移すと、ゆなと渚を抱えて踏ん張る執事の向こうで、芹香が壁に手をつけて顔をしかめていた。

「何コレじゃなくて地震だろ。なんで俺の頭掴むんだよ、お前どうせ地震関係ねえだろ」

「長い！ やだ、長い！」

「やだつて言われても」

怖いものなしの明も、虫と天変地異は苦手のようにだ。確かに長いのが、周りに靡しかなくて良かったと藤堂は思う。店は大丈夫だろうか。

大きな揺れが収まった後も、明はまだ藤堂の頭にしがみついていた。ゆなは早々に執事から離れたが、渚は未だ、彼の胸に顔を埋めたまま離れようとしない。

「妙だな」

壁から手を離れた芹香は、未だ動かない五人を置いて、廊下の突き当りまで進んだ。ガラスにひびが入った窓から外を覗き、怪訝に首を捻る。

「何？」

明の腕を離させてから立ち上がり、藤堂は短く問い返す。芹香は彼を振り返り、窓の外を指差した。

「人が歩いていないから確実ではないが、外はなんともなさそうだ。その木は揺れてもいなかった」

あの状況で、そこまで見ていたのだろうか。彼女なら地震など物ともしないだろうとは思っていたが、そこまで冷静でいられると、些か複雑な気分だ。ゴキブリはあんなに怖がっていたというのに。藤堂はどちらも平気だから、基準が分からない。

「ここだけが、揺れていたということですか」

「そうなるな……っ」

ゆなの問いに頷いて視線を階段へ移した芹香が、目を見開いて後ろへ飛び退いた。その足下に、巨大な鎌が突き刺さる。いや、透けているから、刺さった訳ではないのだろう。

明が取り落とした刀を拾い、慌てて芹香の下へ駆け寄った。鋼のような輝きはなく、全体が暗い灰色をした鎌は、一旦後ずさりするように二人から離れる。

鎌はそれ自体が意思を持っているかのように再び首をもたげ、芹香へ襲い掛かった。彼女が避ける前に明が刀を突き出し、鎌を受け止める。弾き返した隙に芹香が廊下へ逃げ、明も廊下側へ戻った。さすがにあの狭い場所では、戦えないだろう。

二人を追って廊下へ出てきたのは、下半身と両手が鎌状に湾曲した奇怪な霊だった。カマキリのような顔には、赤ん坊の拳ほどもある目しか存在せず、その目も曇りガラスのように濁っている。実際に、カマキリとの融合霊なのかも知れない。

「これちよつと、危ないかも」

呟いた明は正面から襲い掛かる鎌を刀で弾き返し、その勢いのまま力マキリの頭部へ振り下ろす。しかし反対側から繰り出された鎌に驚き、慌てて後ろへ飛び退いた。

刀一本では、太刀打ちできないかも知れない。しかしあの巨大な刃を見る限り、明以外が手を出したら簡単に切られてしまうだろう。この狭い廊下では、刀で受け止めるか後ろへ逃げるか、それしか方法がない。

霊の鎌が、避けた明に向かって振り下ろされた。慌てて刀で受け止めた彼女の腹部へ、反対側の鎌が迫る。明はそれを蹴って跳ね返したが、壁をすり抜けて行った後すぐに戻ってきた為、結局また後退するしかなかった。

「メイさん、こちらへ」

明のすぐ後ろの扉を開けたゆなは、彼女に向かって手招きする。明はすぐに部屋へと駆け込んだが、霊の方はついて行かなかった。鼻も耳も口もない顔を、扉を押さえるゆなに向ける。

ゆなは慌てて逃げようとしたが、鎌が振られる方が速い。鈍色の刃がヘルメットに当たる寸前、飛び出した執事の拳が鎌へ当たり、勢い付いたまま壁に激突した。

老朽化した壁に亀裂が入り、砕けた破片がゆなの頭上へ落ちる。霊の動きが止まったと見るや、ゆなは明が入った部屋へと駆け込んだ。執事が壁から腕を抜くと、鎌の刃に当たって切れたのだろう、赤黒い血が床へ落ちた。

執事は更に拳を構えて攻撃しようとするが、それより早く、霊が空中で後転した。下半身の巨大な鎌が執事の顎を狙うが、彼はすんでの所で後ろへ飛び退いた。避けた彼へ、更に鎌が迫る。

「背後から狙うのは好きじゃないんだがな」

執事に向かって振り被った姿勢で、霊の動きが止まった。その腹から、黒い革手袋を嵌めた手が突き出ている。その手の甲は、燐光を放っていた。

「元タイーブンではありませんせぬ」

空気を入れすぎた風船が割れるような音が、廊下中に響き渡った。霊を抹消した芹香は、扉から顔を覗かせるゆなの頭に掌を寄せ、軽く叩くように撫でる。

「平気か」

「ノープロブレム」

普段どおりの調子でゆなが答えると、芹香は口元に笑みを浮かべて頷いた。しかしすぐに視線を廊下の突き当たりへ向け、表情を引き締める。

「下りよう」

遊んでいる暇はない。何か起きているなら、早く止めなくてはならない。これ以上ここを放置しては、周辺の住民に被害が及ぶばかりだ。

芹香が再び歩き出すと、執事がその後ろに着いた。期を窺っていたのか、札を持った渚がゆなの手を取って、二人に続く。

藤堂がその後ろに着くと、部屋から出てきた明が、何か言いたげに彼を見上げた。足を止めて怪訝に眉を顰めると、明は緩く左右に首を振る。

何かに勘付いたのだろうか。しかし言わないということは、言わなくてもいい事なのだろう。言いたくないのかも知れない。

藤堂は言及せずに、再び歩き出す。繋がれたゆなと渚の手に力が籠もっているのが、傍目からでも分かった。

暗い階段に足を掛けると、爪先から這い上がって来るような寒気を覚えた。拒絶されているのか、本能的に危機を感じているのか、藤堂には判断出来ない。しかしそのお陰で、この下に何かがあるのだという確信を抱いた。

この下に、何かがある。誰が何をしようとも、これ以上住民に迷惑を掛けるようなら、止めなければならぬ。友人一家が危ない目に遭うよりは、自分が動いた方が幾分ましだ。

逆にここで誰かが、何かを止めようとしているのだとしても。その時は、手助けすればいい。それが仕事だ。

階段を下りていくにつれて、足の動きが鈍くなる。心なしか、饅
えた臭いが漂っているような気もする。前を歩く四人の歩調が変わ
る気配はないから、自分だけなのかも知れないと、藤堂は思う。ま
たコウが嫌がっているのだろうか。

後ろを振り返って明の様子を確認すると、彼女は俯いたままだっ
た。藤堂の視線にも気付かない。ただ、粘度の高い空気が濃くなっ
て行くのには、気がついていようだった。霊は呼吸をしないから
顔色では分からないが、動きが少々鈍くなっている。

「息苦しいのです」

「空気が重いですね。なんだか臭うし……」

溜息混じりにぼやいた渚は、ふと振り返って目を丸くした。藤堂
は彼女の視線に気付いて、怪訝に眉を顰める。

「ちよつと藤堂、あなた真っ青じゃない」

藤堂は更に、表情を歪める。自覚がなかった。確かに息苦しさは
あるが、呼吸が出来ないという訳ではない。

渚の声に反応して、俯いていた明が、暗い表情のまま顔を上げた。
疲れているようにも見える。

「コウ君達の力が、ちよつと弱まってるんだよ」

え、と渚が呟いた。先を歩いていた芹香が立ち止まって振り返り、
不安そうに眉尻を下げる。その表情を見て、藤堂は何故だか少し、
落ち着いた。

「匡、平気なのか？」

「いや、俺は別に」

しかし足が重くなっているのは、確かだった。前回来た時も同じ
ような感覚はあったので、また少し酷くなっている、程度にしか思
わなかったのだが。

だとしたらここ自体の問題ではなく、守護霊達のせいだったのだ
ろうか。ならばコウが屋敷に立ち入るのを止めようとしたのは、自
分の力が弱まっているせいなのだろうか。それでもここまで来て
しまった以上、一人で戻るのも心細い。

「とにかく急がなきゃ。歩ける内に」

明に背中を押され、藤堂は一步階段を下りた。歩ける内という意味がよく分からなかったが、彼女は何でも誇張する癖がある。少々不安にもなったが、歩けなくなる程ひどくはならないだろうと、藤堂は自分を落ち着かせる。

心なしか、芹香の歩くペースが速くなっている。焦っているのは元々だったが、ここへ来て更に気が急いってしまったのだろう。そんな彼女の様子にさえ、藤堂は不安を募らせる。

薄暗い階段には、点々と明かりが点っていた。それも古めかしい裸電球がぼつぽつと下がっているだけで、足下を照らす程度の光量しかない。暗さも手伝ってか、恐ろしくさえあった。

「あつた、扉だ」

そろそろ帰りたくなってきた藤堂にとって、その声は救いだった。コウの様子に続き、明の言葉に不安ばかり煽られていたが、ここまですればもう大丈夫だろうと、安堵する。

否。これから、なのだ。

階段の正面、扉の前にはスペースが全くなかった。全員が下り切ることも出来ないだろう。全員がついて来ている事を確認し、芹香は扉を開ける。焦っているのだろうが、彼女も案外無謀だ。

扉が開いた瞬間、饅えた臭いが鼻を突いた。かび臭いような汗の臭いのような、嗅いだことのない臭い。それも到底、いい香りとは言いがたい。埃っぽくも感じる生温い風が階段へと吹き上げ、まともにも吸い込んだ藤堂は少しむせた。

扉の向こうは、藤堂には見えない。ただ凍りついたように動かない芹香の背中が、一瞬震えるのが分かった。

「堤君じゃないか」

柔らかな、若い男の声だった。親しげな声から考えるに、知り合いだろう。あの部屋にいるのは予想していた通り、鳳コーポレーションの社長に違いない。

「どつ……して」

震える声で、芹香が呟くのが聞こえた。

「そんな所にいないで、入りなさい。後ろの君たちも」

芹香のすぐ後ろにいた執事が、主に意見を求めるように振り返った。渚は彼に頷いて見せる。動かない芹香の横を抜け、執事が部屋へ入って行った。渚とゆなが、彼の後を追う。

怪訝に首を捻りながらも、藤堂は階段を下りて行く。真っ先に目に入ったのは、漆黒のスーツを身に纏った、金髪の男だった。不健康なまでに白い肌が蛍光灯のチープな明かりに照らされて、淡く発光して見える。薄い唇は弧を描いており、華やかな外見からは年齢の判断がつかない。あの優男が、鳳の社長だろうか。

そして彼の隣にいた初老の男性を見て、藤堂は思わず息を呑んだ。優しい顔立ちでありながら、どこことなく威圧感を抱かせるあの佇まいは、確かに一度見た。今となっては、忘れようがない。

目を見開いたまま動かない芹香を横目で見ると、彼女はようやく唇を動かした。震えながら、形の良い唇がゆっくりと動く。

「父さん……」

震える声を聞いた瞬間、先に入室していた三人の視線が、一斉に芹香へ向いた。

「お……おとう、さん？」

部屋の入り口で立ち止まる藤堂の背後から顔を覗かせた明が、呆気にとられたように呟く。全員、芹香の父親が死んだ事は知っている。それがここにいるということは、つまり。

「ばかな……飼って……」

蒼白になった芹香の腕を掴み、藤堂は軽く引いた。色素の薄い瞳が藤堂を見上げ、微かに揺れる。継るような目だった。藤堂は痛ましげに眉根を寄せ、掴んだ腕を軽く叩いてやる。

ようやく足を動かした芹香を支えるようにして部屋に入り、藤堂は改めて堤を見た。半透明の彼は、確かに霊なのだろう。彼が悪霊になったとは考えにくい、普通の霊を使役出来るのは、高屋敷家の人間だけの筈だ。

「ああ、そうじゃないよ」

女のような笑顔だった。これが社長だと言われても、俄かには信じがたい。しかしそう思わせるだけの雰囲気、彼は纏っていた。端的に言えば、威圧感がある。

しかしそれも堤とはまた、別の感情から来るものだった。堤のそれは物腰や纏う空気に緊張させられるが故のものだったが、こちらは違う。畏怖、とでも言うべきか。柔らかな物腰と優しい外見とは裏腹に、彼からは何故か、言い知れぬ恐怖を感じた。

「堤君には、言いづらい事なんだけど」

青年は少し表情を曇らせて、横目で堤を見る。彼は能面のような無表情を崩さず、何の反応も見せなかった。あんな人物だっただろうか、藤堂は訝る。

「私のことを、凄く心配してくれていてね。浮かばれないまま、ここへ来てしまったんだ」

芹香は、何も答えなかった。呆然と父親を見つめたまま、微動もしない。

「その……あなたはここで、何を？」

おずおずと問いかけた明は、些か腰が引けていた。彼女もさすがに遠慮しているのだろう。それとも藤堂と同じように、威圧感を覚えていたのか。

「君は知恩院ご夫婦の娘さんですね。若いのに、かわいそうに」

明の表情が俄かに硬くなった。この男は、明が霊である事を知っているのだろうか。否、あの少女の使役者であったならば、知っていて当然だろう。

「何をしているのかと、聞いているのですわ」

続いて問いかけた渚の声は、硬い。怒っているというよりは、返答を急いでいるような声だった。

男は渚に向き直り、ためらいがちに微笑を浮かべた。

「最近、穴が広がってきているんです」

「穴？」

「そう。常夜へ続く、穴が」

ゆなが息を呑み、身を硬くした。常夜は、罪人が行く場所。常世を天国と言うならば、常夜は地獄と呼ぶべき場所だ。そこは幽世で罰を受けると決定された霊が行く、悪霊だけの世界。

そんな場所へ続く穴が空いてしまったら、どうなるのだろうか。ここ最近、悪霊が突然湧き始めたという依頼が増え始めたのは、そのせいだったのだろうか。

「この屋敷は、随分長い間放置されていましてね。人が住まなくなつた場所には、霊が溜まる。悪霊ばかりが集まつたせいで、境界が緩んでしまつたんです」

そんなことが、有り得るのだろうか。藤堂は疑問に思ったが、誰も何も言わなかった。

「あの主を使つて、ある程度の均衡を保っていたんですが……一箇所が緩むと、他の所も駄目。ああ、知恩院君、私が彼女を飼い始めたのは、君のご両親が亡くなつた後ですよ」

「両親が死んだ頃、あなたは生まれてなかつたでしょうね」

男は大様に頷いた。目を見開いたまま、渚は小さく首を横に振る。信じたくないとも言いたげな、力の抜けた仕草だった。

「それでは、ここ最近の騒動の発端は……」

「残念ですが」

男の沈んだ声に、藤堂は息が詰まるような感覚を抱いた。この屋敷に、手を出さなければ良かったとでも、言うのだろうか。

この屋敷を封印することに対して反対意見が出なかつたのは、そつとしておきたかつたからだとしても、言うのだろうか。上層部は、知っていたのだろうか。ならば、何らかの対抗策を講じていて、然るべきだったのではないのだろうか。

「社員には、言えなかつたんです。たとえ社員にでも、口外すれば混乱は免れない。中立派に属する上層部の人間だけが、本当の理由を知っていました。過激派連中に教えたら、それこそ抹消すると言ひ出して聞かなかつただろうから」

「その過激派を押さえる為に、穏健派を？」

明が問うと、青年は頷いた。

「済まなかったね、堤君。無闇に社員を解雇する訳にも、行かなかつたんだ。分かってくれるかい？」

芹香はやっぱり、何も答えなかった。ただ青褪めたまま、父親を見つめている。当然だろう、無事成仏したと思われたのに、浮かばれないままこんな所にいたのだから。

呆然と立ち尽くしていた渚が、震える唇を開いた。

「私達、なんてこと……」

「いいんですよ、高屋敷さん。あなた方は悪くない。何も言わなかった私が悪いんです」

青年はゆっくりと、こちらへ近付いて来た。藤堂は思わず一步後ずさる。

「堤君」

芹香の肩が跳ねた。無言で見つめる穏やかな瞳に気付くと、彼女は恐る恐る元上司へ近付いて行く。

「手伝ってくれるね」

心臓が、一際大きく脈を打った。頭の中に、己の鼓動の音だけがどくどくと鳴り響く。

丁度正面に居る芹香の表情は、藤堂からは見えない。あんなにも彼女の背中は小さかっただろうか。そんな関係のない考えばかりが、藤堂の頭の中を巡る。

「それなら、私達も……」

「知恩院君。霊体である君に、無茶をさせる訳には行きません。高屋敷君のお父様には、散々お世話になっているんです。君にも危ないことはさせられない。執事さんも霊だ。その小さなお嬢さんも、ここで事を成すには非力すぎる」

全員をやんわりと拒絶してから、青年は最後に、藤堂を見た。真っ直ぐで、曇りの無い目。あれに見られたら、拒否する気など起きないだろう。

「あなたには、何も出来ません」

言い返す気もなかった。その通りだからだ。何も出来ないから、見守ることが出来ればいいと思っていた。今ここへ来て初めて、それでも駄目なのだと思付いた。

どうして自分には、何も出来ないのだろう。霊の記憶を見るぐらいの事しか、藤堂には出来ない。それもここではきつと、何の役にも立たないのだ。

「具体的に、何をするのです？」

渚が一步、青年に近付いて、更に食い下がった。

「高屋敷では、ご協力出来ない？」

「高屋敷家に、ご迷惑をかける訳には行きません。これは私個人の

……そうですね、野望とでも言いましょうか」

野望といえども、誰かの為にしている事には変わりない。それを邪魔してしまったのなら、こちらで出来る範囲の協力はすべきだろうと、藤堂も思う。

「堤君、お父上たつての希望でもあるんだ。君は暫く戻れないだろうが……どうかな」

芹香は青年と見つめ合ったまま、何も言わなかった。藤堂は背中がじくじくと痛むような、焦りにも似た感覚に、呼吸さえままならない。

しばらくとは、どれ程の時間だろう。この青年がずっとやってきた事が、芹香一人入ったところで、すぐに終わると思えない。

ここへ来るまで抱いていた不安は、これを予期していたせいなのだろうか。離れる事になるから、ここへ来たくなかったのだろうか。どれ程の間、離れなければならぬのだろうか。

問いかけることも、藤堂には出来なかった。罪悪感もある。この屋敷を抑えていたという少女を、善意とはいえ浄化してしまったのは、こちらなのだ。あの少女が襲い掛かってきた理由はただ単に、悪霊化していたから、正常な判断が出来なかったというだけなのかも知れない。

無言の間が、痛かった。己の心臓の音だけが頭の中に、耳鳴りのように鳴り響いている。芹香の頭が、僅かに動く。

芹香は。彼女は未だ、彼を

藤堂はそこで、目を逸らした。絶対に目を逸らさないと誓った彼女から、目を逸らしてしまった。もう、彼女の表情は見えない。

「わかりました」

静かな声が、死刑宣告のように重く肩に押し掛かる。

「お手伝いさせて頂けますか」

誰の顔も、見られなかった。ただ握り締めた拳を見下ろし、藤堂は唇を噛み締めた。

第八章 生を知る 五

まるで通夜のようだった。事務所に戻っても、誰一人として一言も口を利かず、肩を落として俯いている。こんな時空気を変えるのは大体明だったが、彼女自身、喋る気にもならないほど落ち込んでいた。

誰が死んだ訳でもない。ただ、少しの間離れるだけ。それでも、いつ戻れるか分からないという言葉の意味は、理解しているつもりだ。そこまで子供ではないし、子供であるのは外見だけだと自負している。明はこの中の誰よりも、長い年数を過ごしてきた。

あの青年は悪人ではないと、明は思う。自身が幽霊だから、他人の感情の変化には敏感だ。だから彼が嘘を吐いているとは思えなかったし、疑うつもりもない。悪意など、微塵も感じなかった。

ただ、心にぽっかりと穴が空いたような気分だった。敵とみなした相手を撃退した時も、彼女がこの事務所からいなくなる事など、全く予想していなかった。何がなんでも、例えこちらが劣勢になっても彼女が拒絶したとしても、ここに留まってもらうつもりでいた。まさかこんな形で欠ける事になるとは、思ってもみなかった。

出会いは突然だった。迷う彼女を無理矢理引っ張り込んだのは明自身だが、それを間違った事とは思っていない。結果的に、彼女は救われたのだと、そう信じている。

それに、彼女からしてみれば青天の霹靂だったろうが、明はずっと思い描いていた。あの人と仕事が出来たら、どんなに楽しいだろうと。そんな子供じみた夢が叶ったのは突然だったから、別れもまた然り。それで納得出来るほど人間が出来ていない事を、明自身重々承知している。

今生の別れではない。離れるのは今だけで、いつかはきつと帰って来る。必ず役目を終えて、ここに帰ってきてくれる。そう頭で考えてみても、心がついて行かなかった。

寂しかった。藤堂も渚もゆなもいるのに、心に空いた穴へ風が吹き込むような虚無感が、明の胸を空っぽにする。そして、ずっと大事にしていた宝物をなくしてしまったような、絶望的な喪失感。

暗闇に独り、置いて行かれてしまったような気分だった。いつもの仲間が一人欠けるだけでも、こんな絶望に捕らわれている。これが明自身の感情ではなく、他の三人が抱いている感情なのだとしても、明は辛かった。

止めれば良かっただろうか。あの時継りついても引き止めていれば、こんな気持ちにはならなかっただろうか。

けれど、それでもきつと、彼女は行っただろう。明だけではない。他の誰が止めても、彼女は行ってしまっただろう。父親の最期の願いを、叶える為に。彼の邪魔をした罪悪感に勝てず、継りついて引き止める自分に困った顔をしながらも、行ってしまったに違いない。自分の無力さに呆れる。

否、本当は分かっている。理解しているけれど、そう思いたくない。それを肯定したら、恐らく自分は耐えられなくなる。きつと憤慨するまま、感情のままに責め立てて、彼に辛い思いをさせることになる。

藤堂が。彼があの時止めていれば。彼があの時目を逸らしたりしなければ、彼女はきつと、どこへも行かなかった。あんな誘いなど断っていた筈だ。彼女は迷っていたのだ。

社長と共に人を救うか、このままこの事務所に留まるか。迷いながらも彼女は最後に、藤堂を見た。いつもそうするように、選択を彼に託した。孤独から救ってくれた人に、選択を任せただ。

でも藤堂は、目を逸らした。止めようともせず、何を言うでもなかった。結果、彼はとうとう今までのように流されるに任せ、芹香は、行ってしまった。

けれどそれを肯定したら明はきつと、止まらなくなる。藤堂を責めて傷付けて、関係を修復出来なくしてしまう。それだけは、嫌だった。

肌をちりちりと痺れさせる、重い沈黙が続く。頬杖をついたまま煙草を吹かしていた藤堂が、徐に立ち上がった。静寂に、椅子を引く音が響く。家へ続く扉を開ける藤堂へ視線を移したのは、明だけだった。

誰も咎めなかった。いつも真つ先に藤堂を怒鳴る渚でさえ、何も言わずに俯いている。藤堂の背中が扉の向こうへ消えた瞬間、明の頭の中に、怒涛の如く彼の感情が流れ込んできた。明は思わずカウンターに片手をつく。

「メイさん？」

不安そうな渚の声が、かすかに聞こえた。

悲哀、憤怒、憎悪、憐憫、罪悪、嫉妬。あらゆる感情が、濁流のように押し寄せる。実体化して良かったと、頭の片隅で思う。実体化していなければ、激しい感情に呑み込まれて、明まで戻れなくなる。

それだけではない。明の頭の中に流れ込んできたのは、負の感情だけではなかった。彼の心に深く根を張る、何よりも強い想い。火傷しそうなほどに熱を持った、腫れ上がった傷のような感情。

気がついたら、涙が零れていた。

「メイさん！」

全身を揺さぶられる感覚に、明はようやく我に返った。ぶれる焦点を正面に合わせると、すぐ目の前に渚の顔が見える。彼女は今にも、泣き出しそうな顔をしていた。

「あなた、どうしたの？」

返答に困って視線を逸らすと、への字に曲がった眉を更に下げたゆなが目に入った。普段と大差はないが、明にはその変化が分かる。困っているような、悲しそうな表情だ。ゆなはカウンターから身を乗り出して、明の顔を覗き込んでいる。

心配しているのは、自分だけではない。全員が不安なのだ。それでもこうして、気遣ってくれている。申し訳なくも思ったが、反面、嬉しかった。

これを幸せと、呼ぶのかも知れない。心は少し欠けているけれど、そうだとしたら、一人で泣いている場合ではない。ちゃんと笑って、大丈夫だと、そう言わないと。

明は手の甲で涙を拭ってから、二人に向かつて笑みを浮かべる。しつかり笑えているか不安だったが、ゆなも渚も、安堵したように表情を緩ませた。

「なんでもない。大丈夫だよ」

「泣いておいて、大丈夫も何もありませんわ」

渚はふんと鼻を鳴らして、明から顔を背けた。恥ずかしいのかも知れないと思うと、何故だか笑えてくる。明が嘔き出すと、渚は頬を緩ませた。

「芹香さんは」

カウンターに突っ伏した姿勢で顔だけを上げたゆなは、小さく呟いた。二人の笑顔が引つ込む。

「ちゃんと、戻ってこられるのでしょうか」

明は思わず目を丸くした。懸念していたのは、自分だけではなかった。このまま彼女が戻って来ないかも知れないと思っていたのは、明だけではなかったのだ。

そして、明は視線を落とす。藤堂も、そう思っていただろうか。必ず戻って来ると言って、慰めた方が良かっただろうか。彼の消沈ぶりは、たとえ感情が流れ込んで来なかったとしても、容易に見て取れただろう。

けれど今は、触らない方がいいのかも知れない。ゆなも渚も、彼を止めなかった。悩むという事は、悩む時間が必要だということだ。ならばそっとしておくに越した事はない。

「戻って来るよ。戻れないとは言っていないもの」

「でも、戻れるとも言っておられませんでしたわ」

渚の言葉に、明の背中が一気に冷えた。鉛を飲まされたように、息が詰まる。元々体温など持っていないし、呼吸もしていないというのに。

いつ戻るか分からない。それはつまり、戻るか戻れないのか、それすらも分からないという事だ。そんなこと、考えないように、していたのに。

「社長さんは、中立派は知っていると云っておられましたね」

ゆなの言葉に、明は渚と同時に頷いた。彼が嘘を言っているとは限らないが、真実である可能性もまた、半分なのだ。

明にも、信じたい気持ちはある。邪魔をしてしまった罪悪感もあるし、無闇に人を疑いたくはない。それでも、戻らないかも知れないと言っのなら。

「行こう。祐子さんの所に」

「必要ないわ」

三人一斉に、入り口を振り返った。よく日に焼けた彫りの深い顔に、短く切られた赤みがかった茶髪。肉感的な体は、グレーのスーツに包まれていた。

新藤祐子は真っ直ぐ三人の元へ歩み寄り、赤い唇に緩やかな弧を描いた。普段通りの笑みの形を作ってはいるものの、彼女の表情はどこか硬い。

「来たからいいわよ。……藤堂君と芹香は？」

う、と小さく呻いて、明は視線を落とした。しどろもどろになる明とは対照的に、ショーケースに背を預けて腕を組んだ渚は、毅然とした態度で祐子と向き合う。

「藤堂は奥ですわ」

「芹香は？」

「……社長の所に」

祐子の表情が一変した。ゆなが勢い良く立ち上がるのと同時に、眉をつり上げた祐子はカウンターの裏へ駆け込む。彼女の胸に怒りと戸惑いが渦巻いているのを感じて、明は身動きが取れなくなる。

扉に手を掛けようとした祐子の前に、ゆなは両手を広げて立ちふさがった。黒目がちで感情の読み取れない大きな目に、強い意思の光が宿っている。

「何してんのよあのバカ！ 何考えてんの！」

「落ち着いて下さい。藤堂さんにも芹香さんにも、恐らく何も見え
てはおりませんでした」

「あんた達行つたんでしょ、どうしてあの子が気付かないのよ！」

祐子は肩を震わせて、悲痛な声で叫んだ。渚はその肩に後ろから
そつと手を置き、振り返つた祐子に向かつて、首を左右に振つて見
せる。

「芹香さんの、お父様がいらしたの」

祐子の目が、驚愕に見開かれる。明は彼女から溢れ出る感情に胸
が詰まり、制服の胸元を掴んだ。

「天井に、穴が空いていたわ。あれを抑えているのだと、私達は思
いましたの。そう説明されて」

「……ごめん」

肩の力を抜いて、祐子は前髪をかき上げた。深い溜息を吐き、彼
女はカウンターから出て、店側に置かれた椅子を引く。

倒れ込むように腰を下ろした祐子を見ながら、明は思う。彼女は
今日、全てを話しに来たのだと。彼女の事だから、全てではないの
かも知れない。それでも、少しだけ遅かった。

それだけの事だ。誰も悪くない。

「祐子さん、話しに来てくれたんですね？」

猫のそれにも似た目が、明を見上げた。疲れた顔をした祐子は、
小さく頷いて見せる。普段の彼女からは想像も出来ないほど、しお
らしい仕草だった。

「……藤堂君は」

「今はそつとしておいてあげて欲しいのです。きつと今、一人で悩
んでおられますから」

そう、と呟いた祐子は、また一つ息を吐いた。思索するような表
情を見て、明は口を開く。

「私達が聞きます。藤堂さん、一人で悩んじゃうタチだから。今は
余計な事考えて欲しくない」

「そうね……あいつに必要なのは、決断力だわ」

聞こえてるだろうし、という眩きには、何も言わなかった。祐子はふと入り口に視線を移したが、すぐに三人へ向き直る。ゆなは扉の前から離れ、カウンター裏の椅子に座った。藤堂の定位置には誰も座ろうとせず、空いたままにしてある。

「率直に言くと社長はね、穴を塞ごうとしてるんじゃないの。広げようとしてるのよ」

嫌な予感が的中した。藤堂と芹香は父親の霊に気を取られて気付かなかつただろうが、あの地下室の天井には、穴が空いていた。

気味の悪い空気が流れ出しているのには、気がついていて。あの屋敷を覆う粘ついた空気の原因が、あの穴から流れ出す常夜の空気が障気であったことも。それでも、彼は塞ごうとしているのだと思っただのだ。

「何の為に……ですか？」

「分からない。ただあの穴は、常夜に繋がってる。今は完全に開いてるワケじゃないからまだいいけど、あれが開ききつたら日本は勿論、世界中悪霊だらけになるわよ」

開いた口が塞がらなかつた。そんな事をして、何の得があるというのだろう。常夜側に得はあるかも知れないが、少なくとも、生きている人間には害になるばかりだ。

「中立派の方々は、皆さんご存知なんですか？」

渚の表情は硬かつた。当然だろう。知っていて何も言わず、あまつさえ手を貸していたとなれば、鳳コーポレーションはとんでもない悪徳企業だという事になる。

「知らない筈よ」

祐子の返答に、渚は怪訝に眉根を寄せた。

「あなたは どうしてご存知なの？」

「それは言えない。こっちにもまだ、する事があるの」

祐子の事情は、聞いても無駄だろう。幾ら聞いてものらりくらりと誤魔化されるに決まっている。

「どうして抹消したはずの霊食いを連れていたんですか？」

僅かに目を細めて、祐子は俯いた。

「あの穴から引っ張り出したのよ」

数十年前に動きを止めた筈の心臓が、大きく打った気がした。どう
いう事だ。

「それって……」

祐子は重々しく頷いて、ちらりと肩越しに背後を見た。客が来る
ことを懸念しているのだろう。

「そう。今までの説を根底から覆す事になる。でも事実なの」

「そんな、消えるのではなかったの？」

退治屋が抹消した霊は、全て消える。この世からもあの世からも、
魂はおろか存在自体が消え失せ、二度と輪廻の輪には組み込まれる
事がなくなる。明は除霊屋だった両親からそう説明されていたし、
世間の認識もその通りのはずだ。

そうでは、なかったのだろうか。

「まず、強い未練を残さなかった場合、死者の魂の行き先は幽世で
決まってる。そこで裁判が行われるっていう見解は変わらない。で
もね、おかしいと思わない？ どうして常夜があるのよ」

「おかしくは……」

ない筈だ。悪い事をしたら、罪は償わなければならぬ。ただ、
そこは辛い場所だというから、浄霊屋がいるのだ。

浄化することで、悪霊は己が生前、或いは死後に犯した罪を認識
して、悔い改める。そうしてようやく幽世への道が開かれ、裁判に
かけて貰える。そこに違和など、少なくとも明は感じたことがなか
った。

「おかしいのよ。そもそも常夜は必要ないじゃない。性根から腐つ
てるような犯罪者は皆、死んですぐ悪霊になっちゃうんだから。悪
霊は皆、現世に留まってるってコトなのよ」

「それは……止むを得ない罪を犯した人が、常夜へ行くってことじ
ゃないんですか」

祐子は僅かに眉を顰め、左右に首を振った。伸びた襟足が、ワイシャツの襟を撫でる。

「そういうのを判断するのが、幽世でしょう。虫殺したぐらいで、地獄行きにはならないわ。裁判にかけると同時に、軽犯罪を悔い改めさせるのが幽世の仕事なんだから」

「そう……ですけど」

何が言いたいのか、自分でも分からなくなってきた。ただ、少しでも動いたら足下が崩れて行くような不安が、胸中を満たす。

「最近の学説じゃ、常夜は抹消された霊達が行く場所ってコトになつてんのよ。勿論、一般には公表されないけどね」

信じていたものが、崩れて行く。それでは、金目当ての退治屋に抹消された浮遊霊は。彼らも、常夜へ行ってしまふのだろうか。存在が消え失せるだけならまだいい。死んで尚、苦しむ心配もない。

しかし、それとは違う。存在がなくなるなら、少なくとも苦しくはない。苦痛も何も、感じるこがなくなる。

常夜は地獄だ。精神的にも肉体的にも、あらゆる苦痛を味わう事になる。地獄の責め苦は、一定の刑期を終えるまで続くという。それがどのぐらいの間なのかは、誰も知らない。

明の胸に激情が込み上げ、喉が震えた。大きく左右に首を振り、祐子に詰め寄る。

「なんで……なんでそんなこと、公表しないんですか！」

「退治屋の殆どが、失業する可能性があるのよ」

はつと、渚が息を呑んだ。祐子の一言で一気に頭が冷え、明も口を噤み、彼女から少し離れる。

「ただでさえ抹消することに対して人権擁護団体が煩いっていうのに、そんな事公表したら、どうなると思う？ 問答無用で退治屋が廃止されるハメになりかねないわ。生きてる人を救ってきたアタシ達も、一緒くたに排斥されるの」

「罪には罰。冤罪が存在するのは、あの世もこの世も変わりないという事なのですね」

ゆなが抑揚のない声で、納得したようにそう言った。思いつめた表情で俯いていた渚が、ためらいがちに顔を上げる。

「芹香さんは、どうなってしまいますの？」

ゆなの眉が、更に下がった。祐子は膝に視線を落として、眉根を寄せる。

「穴を広げるには、生きている人の魂が必要なよ。地獄にいる霊に感情を、憎悪を向けられる魂が。あの子はうってつけて事」

「エサって、こと？」

「そう。常夜への穴を貫通させるには、向こうにいる霊達に、自力でこじ開けさせるしか術がないの。目の前にちらつかせれば、無理にでも出て来るわ」

悪霊には、憎悪しかない。生きている人間に対する憎悪と、嫉妬更に自分を地獄へ送った人間となれば、その感情は膨れ上がるだろう。

「でも、でも魂を抜かれてしまったら……」

呟く渚の顔は、傍目に見てはつきりと分かるほど青褪めていた。

ゆなは両手で口元を覆い、目を見開いている。

「無理矢理魂を引きずり出されたりしたら、確実に命はないわ。悪霊の活動が活発化するのには夜だから……もう、時間がないかも知れない」

自分が息を呑む音が、耳に入ったような気がした。明はカウンタ―に立てかけてあった刀を掴み、駆け出そうとする。その両肩を、渚が掴んだ。明は大きく頭を振り、引き止めた渚を振り返る。

「離して、行かないきゃ！ 行かないきゃ芹香さんが……！」

「このお馬鹿、藤堂を待ちなさいと言ったでしょう！ こうなったらお父様にも連絡しなきゃ！」

「でも、でも……っ」

悲痛な声で叫ぶと同時、背後で、扉の開く音が聞こえた。

第八章 生を知る 六

何を、しているのだろう。藤堂は心中、自嘲気味に笑う。

勝手に拗ねて勝手に引きこもって、こうして廊下でぼんやりとしている。何がしたいのか、自分でも分からなかった。何をすべきかさえ、分からなくなっていた。

フローリングの低い温度が、直に触れた素足の裏へと伝わってくる。その冷たい感触を求め、背中で壁を擦りながら、その場に腰を下ろす。シャツの裾が捲れ上がって、素肌が壁に触れた。ひやりとした硬い感触が、熱を持った体を冷やして行く。それでも、頭だけは一向に冷えなかった。

いつ戻れるか分からないというのは、戻れない事と同義だ。それが理解出来ない程幼くはないし、またいつかという言葉を鵜呑みに出来るような純粹さも、いつしか失ってしまった。戻れないであろうことも分かっていたのに、止めようともしなかった。

拗ねて卑屈になって、全てを放棄した結果が、これだ。笑い事ではないのに、笑うしかない。藤堂は意識的に唇を歪めたが、笑みの形など作ってはいなかっただろう。ねじ曲がった性根は、大人になっってしまった今になって、変わる筈がなかった。

今に始まった事ではない。変わったつもりで、ただ自己満足に浸っていただけなのかも知れない。今まで拗ねていた事を振り返って反省するつもりで、ごっこ遊びに興じていただけかも知れない。それでも友人達を大事に思う気持ちは、偽りではない。

出来ることなら、人の為になることがしたい。それが例え自分を満足させる為の偽善でも、そう思えた事が、明確な変化なのだろうと思う。偽善でも行動を起こす事が出来るなら、少なくとも行為自体は善行と呼べる。行動を起こしたかどうかという疑問には否と答えるしかないが、見守りたいと確かに思った。何も出来ないから、代わりに信じていようと。

たったそれだけの事でさえも、最後までやり遂げられなかった。初めて心の底から愛しいと思った人でさえ、引き止める事が出来なかった。振り返ったその顔を見るのが怖くて、目を逸らした隙に彼女は意思を固め、離れる道を選んだ。

分かっていて。彼女が父親に対して罪悪感を抱いていたのは知っていたし、真正面から力が必要だと言われたら、彼女は断れない。誰が止めていても、きつと彼女は向こうへ行ってしまうていただろう。こちらから離れたのではなく、向こうに戻ったのだとそう思えば、幾分気が紛れた。

けれどそんな思考は、己を正当化するための言い訳に過ぎない。本当は、分かっている。あの時彼女は、最後に振り返った。その視線が向いていた先がどこだったのかも、気付いていた。

あの時藤堂が引き止めれば、目を逸らしたりしなければ、彼女はきつと行かなかった。いくら考えることを拒絶しても、そう思えてしまう。出来る事なら離れたくなかったのに、子供じみた感情が邪魔をした。彼女の気持ちなど、最後に振り返った時点で分かりきっていたのに。

ただ、不安だった。それを免罪符にするつもりはないし、理由をつける事で誰かに許してもらおうとも思わない。それでも、不安だった。

尊敬しているのだと目を輝かせて言った彼女は、あの青年に、未練があるのではないか。そんなどうしようもなく下らない事を、考えていた。そしてそのせいで、何も言えなくなつた。気付くのが遅すぎた、ただそれだけの事なのに、取り戻せない程の距離が出来てしまった。

そもそもあの青年の言葉が真実であつたのかどうかさえ、判断する事が出来ない。他人の感情に敏感な明が何も言わなかつたから、悪意はなかつたのだらうと思う。しかし具体的にどうするかは、何一つ聞いていなかった。また、昔のように戦いに明け暮れる事になるのではないかと、そう思った。

戦うことが彼女の幸せなのではないかと、考えたこともあった。

ついこの間その見識を改めたというのに、今日また、そんな思いが頭をよぎった。けれど、そんな筈はないのだ。

役目を終えるまで、彼女はきつと、戻らない。それは二度と会えない事と、同義なのではないだろうか。感傷に浸っている場合ではないと分かっているのに、胸が締め付けられるように痛かった。

額に浮かんだ汗が、玉となって流れ落ちる。涼を求めて触れた床も壁も、いつしか体温で温まっていた。廊下を満たす熱気が肌に絡みつき、不快感を増長させる。体を動かさずにも湿気を帯びた空気が体温を上げ、全身の毛穴から汗が噴き出す。背中に滲んだ汗がシャツを濡らし、肌張り付かせていた。

額から流れた汗の滴がこめかみを伝って目尻に流れ込み、溜まって行く。きつく目を瞑ると水滴が頬を撫で、顎から胸元へ零れ落ちた。最後に泣いたのはいつだったろうと、霞がかつた頭で考える。

彼女は、幸せという言葉の意味を知っていたのだろうか。二人して怒られた後に呟いた、幸せかも知れない、という言葉が、胸に鈍い痛みを与える。声の調子も抑揚さえも、ありありと思い出せる。あの時確かに藤堂は、嬉しいと思った。幸福という言葉の意味を、強く噛み締めた。それなのに。

それなのにどうして、手を離してしまったのだろうか。今だってこんなにも、深く想っているのに。

店の方から、怒鳴り声が聞こえた。或いは悲鳴だったのかも知れない。聞き知った人の声だった。それでも、この場を動く気になれない。

ドア越しでも、店内の声はよく聞こえた。その会話の内容を、聞くでもなく耳に入れる。彼女達はあんなにも心配しているのに、自分はこの様な所で何をしているのだろう。

祐子話を聞いても、騙された、とは思わなかった。そうなのかも知れないと、薄々感付いてはいた。考えなくなかったというよりは、逃げていただけなのかも知れない。

思えば、いつだってそうだった。物心ついて、霊が見えない事が異常なのだと認識した時も、学校を追われた時も。自分の身に起きた事実を客観視して、現実から逃げていた。深く考えるのが、嫌だった。己が他人より劣っていると考えるより、どうせ、と拗ねてしまう方が楽だった。

だからかも知れない。好意を持って接してくれる他人に対して、深入りする事を拒絶していたのは。言い訳をするつもりはないが、霊が見えないというコンプレックスは、自分で思うより遥かに強いものだった。見えなくてもいいのだと知ったのは、ごく最近のことだ。

容赦なく心の中に入り込んできた彼女達は、いとも簡単に藤堂の劣等感を打ち砕いた。真つ直ぐに生きる彼女達を眩しく思ったし、彼女達がしてくれた事に、報いたいとも考えた。それでも、結局何も出来ない。言われるがままについて行って、後ろから眺めるだけで満足していた部分もある。

明のひたむきさが、ゆなの純粹さが、渚の優しさが、藤堂には眩しかった。真つ直ぐに想ってくれた芹香の孤独を埋めてやりたいとそう思っていた。しかし最終的に目を逸らして全員を裏切ったのは、自分だった。そんな事ぐらい、分かっている。

許して欲しいとは思わない。責めて欲しかった。何故止めなかったのかと、そう言っただけで責めて欲しかった。それも、甘えに過ぎないのだから。

いつまでも甘えているつもりはない。甘えるというのも妙な話ではあるが、実際今までがそうだった。何も出来ないのをいい事に店番と称して何もせず、そのくせ余計な口だけは出して来た。これでは駄目だと思いつつも、状況を打開する手だてはない。

どうせ何も出来ない、諦めてはいけなかったのに。何をするにも守護霊の助けが必要だとしても、何もしないよりはましなのではなかっただろうか。

耳に残る祐子の声が、ドアの向こうから聞こえて来る。

あの世のシステムに疑問を覚えた事は、何度かあった。教科書で習った事と、明から聞いた事を総合して考えてみても、どこか違和感はある。そもそも罪を犯したら皆悪霊になるという話には、疑問しか覚えてはいなかった。

罪を犯せば、幽世への道を閉ざされる。それがつまり、罰を受けるということだ。そんな当たり前のことが、不思議で仕方なかった。悪霊が現世に留まるというのなら、罰というのはつまり。

背筋を冷たい汗が伝った。つまり、現世の邪気を受け続ける事が罰だったのではないだろうか。本当は、常夜は地獄でもなんでもなく、悪意に満ちたこの世こそを、地獄と呼ぶのではないだろうか。それならば、最も罪深きは

やめよう。

考えても仕方のない事だ。天の摂理を、否定出来はしない。誰がどう足掻いても変わらない事を、だからだと考えていられるような時間は、今の藤堂には残されていない。

魂を引っ張り出されるといふのは、痛いものなのだろうか。目には見えなくとも体の一部だから、痛いには痛いのかも知れない。川重の様子を思い出すと、確かに痛そうだった。

問題は、そんなことではないのだ。

指先の震えが、止まらない。暑さは変わらないのに背筋を寒気が這い上がり、汗がすっかり引いてしまった。そのくせ濡れたワイシャツは、相変わらず背中張り付いている。ドアの向こうの沈黙が、耳に痛かった。

小刻みに震える指先に、何かが触れたような気がした。膝の間に埋もれていた顔を上げると、額にほくろのある少年が、しゃがんで顔を覗き込んでいる。大袈裟に首を傾げて不思議そうな顔をしているが、藤堂はその表情を見て、幾分落ち着いた。

透けた小さな指先が、藤堂の震える指を掴んでいる。何も感じないが、確かに見えていた。眼鏡をかけたままだったことを、すっかり忘れていた。

藤堂と目が合うと、コウはにつこりと笑って立ち上がった。早く行こうと、急かしているようにも見える。胸のつかえが取れたような不思議な安堵感に、藤堂はため息を吐く。コウの笑顔に、全てが許されたような気がした。

まだ、遅くはない。

「ありがとな」

呟いて、藤堂は緩慢な動作で立ち上がる。こんな事をしている場合ではない。それでも足は、自然と寝室へ向かっていた。

寝室の隅に置かれたタンスの、一番上の引き出しを開ける。乱雑に詰め込まれた衣類に紛れて、青いビロードの張られた小さな箱が、顔を覗かせている。気休めでしかなかったが、何も持たないよりはマシだった。

蓋を開けて中身だけをジーンズのポケットに入れ、藤堂は再び廊下へ向かった。

どうなるかと、知った事ではない。たとえ大企業と敵対することになると、こちらにも後ろ盾はある。それでもこちらに分はないのかも知れないが、もう、腹は括った。

ドアの向こうから、渚の怒鳴り声が聞こえてくる。何故か自然と、笑みが零れた。

ゆっくりと、店へ続く扉を開ける。屋敷に居た時大きな地震があったのに、店内は無事だ。そんなことを考えられる程、心に余裕があることが不思議だった。

事務所内にいた全員の顔が、一斉に藤堂の方を向く。自分に視線が集まっても彼はもう、臆さなかった。

「迎えに行くぞ」

泣き出しそうに歪んでいた明の顔が、ぱつと明るくなった。そして大きく、首を縦に振る。おう、とゆなが片手を挙げ、渚が満足げな微笑を浮かべた。

きつとどうにかなる。まだ、誰も欠けていない。

「祐子さん、悪かったな」

椅子から立ち上がりながら、祐子は笑って肩越しに手を振った。「来た時は、ブン殴ってやるうかと思っただけだね。さっさと行きなさい」

言いながら、祐子は店を出て行く。明は抜き身の刀を握り締めたまま外へ飛び出し、ゆなもそれについて行った。渚は歩きながら携帯電話を取り出して、どこかに電話を掛け始める。

渚の電話の相手は恐らく、実父だろう。頼るつもりはないが、手が相手だ。現場には来られなくとも、何かしら手は回してくれるはずだ。

渚が店を出たのを確認して、藤堂はシャッターを閉める。背後で急かす明の声が、やけに頼もしく聞こえた。

第八章 生を知る 七

洋館の扉を開けた瞬間、真つ先に飛び出したのはコウだった。玄関ホールにひしめく異形の悪霊達には目もくれず、ひたすらに駆け抜けて行く。扉を開けた明はおるか、全員が全員激しく狼狽し、思わず立ち竦んだ。

彼が誰の頼みでもなく自ら飛び出して行ったのは、初めての事かも知れない。コウが夥しい数の悪霊達の間をすり抜けた時には、渚がとうとう悲鳴を上げた。

藤堂は慌ててコウの後を追おうとしたが、襟首を掴まれて立ち止まる。振り返ると、明が厳しい表情で彼を見上げていた。

「私が道開けるから。藤堂さんは、後ろに行つて」

藤堂が頷くのを待たず、明は彼の前へ出る。明は足を踏み出すと同時に、すぐそこまで迫ってきていた霊達を一刀の下に切り捨て、駆け出した。それを皮切りに、全員一斉に中二階へと向かう。床に散らばったシャンデリアの破片が、一歩進む度に靴底へ刺さる。あの時の地震は地震ではなく、常夜へ続く穴が引き起こしたものだ。たのだらう。

執事はゆなと渚を両脇に抱え上げ、走っていた。ゆなはヘルメットを目の前に掲げて、襲い掛かる悪霊達を跳ね返す。渚は顔をしかめながらも、反対側から迫り来る霊がそれ以上近寄れないよう、札を胸に当てていた。

走るのはごめんだと思っていたのに、藤堂はそうせざるを得なかった。頭皮の下に火でもつけられたように、頭が熱い。忙しく空気を求める肺が、ひどく痛む。動かし続けた足が重い痛みを訴えるが、走るのをやめる訳には行かなかった。

中二階の扉を勢い良く開けた明は、待ちかねていたように飛び出してきた霊を袈裟掛けに斬り捨てた。昼間来た時の静けさからは考えられないような数の悪霊達が、尚も行く手を阻む。

長い廊下の突き当たりにある窓からは、橙色の光が差し込んでくる。もう、夜はすぐそこまで迫って来ていた。今が夏である事が、せめてもの救いだらう。

それでも、時間がない事には変わりない。永遠とも思えるほど長く続く廊下を、明は片手で刀を振るいながら駆け抜ける。そして廊下の突き当たりでほぼ直角に曲がり、飛び降りんばかりの勢いで階段を下りて行った。今までにないほど、彼女は焦っている。

藤堂も明に続くが、ここまで休む間もなく動かしてきた足が鈍い痛みを訴え、上手く進めない。泥濘に捕らわれたようだった。

「藤堂、持っていないさい！」

驚いて振り向くのとほぼ同時に、執事に抱えられたままの渚が、札を投げつけて来た。慌てて受け取ると、足の痛みが嘘のように引いて行く。上がった息が落ち着く事はないから、足の痛みは何らかの霊の影響を受けていたのかも知れない。情けないものだ、つくづく思う。

明の肩越しに、コウの背中が見える。真っ直ぐに進んで行く彼は、藤堂の感情に呼応して動いているのかも知れなかった。藤堂は今、それほど焦っている。連れ戻さなければと、連れて帰らなければと、気がかりが急ぐ。

もう、迷いはない。

階段下まで辿り着いたところで、コウは思い出したように振り返って、藤堂の下へ戻って来た。明は階段にいた最後の霊を刺し貫いて抹消し、扉を開け放つ。

地下室から階段へ吹き上げる生温い風に触れた瞬間、藤堂は総毛立った。寒い訳ではない。寧ろ走ってきたせいで全身が火照り、汗でシャツが体に張り付いている。それにも関わらず、両腕にはびっしりと鳥肌が立っていた。

部屋の前で、明の動きが止まった。肩が微かに震えている。見た目は生身と殆ど変わらないとはいえ、彼女も霊だから、恐らくは穴から吹き込む常夜の空気に影響されているのだらう。

藤堂は明の肩を軽く叩いた後、その横を通って地下室へ入った。真つ先に、眉をひそめた金髪の青年が視界に入る。

その姿を見た瞬間、一気に頭に血が上った。首から上だけ血液の温度が急激に上がってしまったように、ひどく熱い。怒っているのか焦っているのか、自分でも分からなかった。

「芹香返せ」

薄暗い室内に、低い声を通った。淀んだ空気が、僅かに揺らぐ。昼間来た時には気付かなかったが、天井には確かに、直径三メートルほどの穴が空いていた。穴の向こう側は、暗くて見えない。確かに闇に続いているのだと思わせるような、漆黒だった。

天井の穴に気を取られた瞬間、つんざくような絶叫が木霊した。

藤堂は一気に青ざめ、声のした方へ視線を移す。

「芹香！」

初老の男が、部屋の隅に置かれた椅子の傍らに立っている。注連縄でその椅子に縛り付けられているのは、紛れもなく芹香だった。無機質に電球の光を反射する銀髪が、激しく揺れる。頭だけは辛うじて動かせるようだが、首から下は硬直したように動かない。或いは力が籠もりすぎて、全身が緊張しているのか。

なんとか逃れようとしているのか、苦しんでいるのか、芹香は左右に頭を大きく振った。苦痛に喘ぐ喉が、軋む声を上げさせている。呻く彼女の声は、痛々しいほど嘎れていた。

彼女の背中から、堤の手が体内へ潜り込んでいる。川重の魂を引きずり出そうとしていた守護霊達の姿が、藤堂の脳裏をよぎった。目を見開いて苦悶の表情を浮かべる芹香を見て、藤堂は思わず一歩足を踏み出す。

「ダメ！」

すぐ隣から聞こえてきた大声に、藤堂は足を止めた。肩を震わせていた筈の明が、制止の声を上げると同時に飛び出して行く。

堤は娘の背から一旦手を離し、駆け寄る明に体ごと向き直って拳を固める。一気に力が抜けたかのように、芹香がうなだれた。

明は真つ直ぐに堤へ向かつて行き、銀色に輝く刃を勢いよく振り下ろす。握り締められた拳が、それを迎え撃った。刃は吸い込まれるように、拳へと向かつて行く。

斬れる。そう思った矢先、堤の拳に触れた刀が弾き返された。藤堂は思わず目を見開く。

「真正面から行つても駄目よ、入れ墨が残っているのだから跳ね返されて効きませんわ！ それより早く縄を切りなさい！」

明は叫んだ渚を肩越しに振り返つて頷くと、芹香の背後へ回つた。うなだれたままぴくりとも動かない彼女を、明は辛そうに眉をひそめて見下ろす。芹香を縛る縄を刀で切ろうとしたが、伸びてきた堤の手に気付くと、慌ててその場から飛び退く。

死んで尚、破魔の入れ墨はその効力を残している。退治屋にとつてあの入れ墨は、命と等しく大事なものだという。あれがなくなれば、退治屋は務まらない。手袋があるから入れ墨しなくて済んだのだと、芹香から聞いた。

しかし余程思い入れのある傷でない限り、霊体には残らないと聞いている。霊になつても、退治屋であることに捕らわれているのだろうか、藤堂は思う。

死して尚、仕事は忘れない。霊になつても、己が退治屋であつた事は忘れていないのだろう。それなのに。

「なんでだよ……娘だろ」

思わず、そう呟いた。硬い表情で明と堤を注視していたゆなが藤堂を見上げ、眉尻を下げる。渚が背後から二人の肩に手を置き、前に進み出た。

「彼……鴻清十郎だけが使える、術がありますの。鳳コーポレーションが立ち上げられた時に高屋敷が作り、代々の社長だけに伝えて行く事を決めた」

ゆなが渚を見上げ、息を詰まらせた。彼女も表情には出ないが、動揺しているのだろう。

「それは……どのような」

「靈の自我を消し、操るの。わざわざ自分の靈力を半永久的に消耗して使役しなくとも、浮遊靈さえ意のままに出来る。あんまり多くの靈に使える訳ではないけれど」

「靈を使い捨てるって事かよ。じゃあ、親父さんは」

渚は憎々しげに唇を噛み、鴻を睨んだ。そして勢い良く振り返り、執事を見上げる。

「加勢しますわ。じいや、あなたは手を出しては駄目よ」

執事が首を縦に振るのを確認してから、渚は胸ポケットから札を取り出す。明の刀を片手で跳ね返した堤は、一瞬だけ、虚ろな目を渚に向けた。

堤と視線が合うと渚は怯んだが、すぐに眉をつり上げて札を投げた。札はいとも簡単に掴まれたが、そちらに気を取られた堤の背後から、明の刀が迫る。渚は元々気を逸らすつもりで投げただけで、当てるつもりはなかったのだらう。

彼は丸めた札を捨て、その場に屈んで刃を避けながら、拳を握る。明は一瞬逃げかけたが受ける方が早いと判断したのか、振り下ろされる拳を刀の腹で止めた。

しかし刃に拳が触れた瞬間、明の腕が弾かれた。衝撃で取り落としそうになった刀を両手に持ち替え、すんでの所で踏みとどまる。渚が慌てて駆け寄り、更に迫る堤の腕に向かって札を投げた。火花が散ったような音が響き、堤がたたらを踏む。

それだけだった。仮にも高屋敷本家の人間が書いた札だということに、堤に対して然したるダメージは与えられていない。効かないというのは、こういう事だったのだろうか。

「無駄ですよ。彼は当社で白銀に次ぐ退治屋だったのですから」

目を細めた藤堂は、金髪の青年へ視線を移した。憎らしげに睨み付ける藤堂を見ても、彼が浮かべた笑みを消すことはない。

「あんた何がしたいんだ。穴空けてどうする気だよ」

「誰から聞いたんです？」

「いいから答えろ」

腹が立って仕方がなかった。人を食ったような鴻の態度にも、天井に空いた穴にも。あんなものの為に父親を操って、娘に手をかけさせた、鴻本人にも。

「人の幸せというものがなんだか、ご存知ですか？」

唐突な問い掛けに、藤堂は顔をしかめる。ふと見下ろすと、ゆなが服の裾を握り締めていた。鴻を睨むような目で見つめているのはゆなだけで、いつも腰に張り付いている筈の、コウの姿はない。

返答に窮する藤堂に、鴻は更に笑った。藤堂には、その笑みが薄ら寒く思える。

「成仏することですよ。どんな業を背負っていても、幸せになる権利はある筈です」

「だからって、この世とあの世を繋ぐ必要はないだろ」

「この世に浄霊の結界を張るんです。ここに小さな円を描けば、世界中を囲んだ事になる。常夜の住人にも、幸せになる権利はある」

整った顔に浮かべられた笑みが、急に恐ろしいもののように思えた。藤堂は僅かに口を開けたまま、鴻をまじまじと見つめる。

「大丈夫、私が全員浄化しますから。苦しいのは、たったの一瞬だけです」

「……ちよつと待て、あんたまさか」

その先は続かなかつた。肩が寒くて堪らない。彼がしようとしていた事の予想はついたが、理解したくはなかつた。

「常夜の住人が全て現世へ出てくれば、全人類が霊になるまでそう時間はかかりません。あなたも、幸せになりたいでしょう？」

肉体を欲する悪霊は、野放しにしておけば、必ず生身の人間に危害を加える。傷付けるといふ生易しい言葉では済まない。生あるものを殺して、自分が肉体に入ろうとする。

しかし霊媒体質の人間の肉体でなければ、霊達は入る事が出来ない。従って、悪霊は止まらない。たとえ霊媒体質の人間の体を手に入れたとしても、その肉体は所詮自分のものではないから、すぐに腐って行く。

結果、悪霊達は次の器を探さざるを得なくなり、また別の人間を殺害する。連鎖はいつまでも止まらない。それこそ、全人類が死に絶えるまで。

幸せとは、成仏することだ。身内に不幸がある度に、子供は必ず、親からそう言い聞かされる。常世は永遠の安住の地であり、そこに行く事が、目指すべき幸福であると。

それは元々、死を受け入れさせる為の詭弁であったが、人々はいつしか、本来の意味を忘れてしまった。死後の幸せの為に死者を送り出すのだと、そう理解するようになってしまった。確かに死を悲しむよりも、死んで幸せになると考える方が、何倍も楽だろう。死を恐れる事もなくなる。

結果、人々は死を悲しむことが出来なくなった。悲しむどころか、肉親の死を喜ぶ子供さえいるという。それが教育の賜物なら、今のこの世界はきつと、間違っている。

生きているよりも、死んであの世で幸せになりたいと考える人間が増えている。自殺は大罪とされているから自殺者は減ったが、それでも人々は、生きる意味に疑問を覚える。

ふらふらと当てもなく漂っている浮遊霊を日常的に目にする、普通の人間なら、恐らく死後の幸福を信じてしまっだろう。浮遊霊達は虚ろな目をしたまま、ただ徘徊している。幸せに見えるかそうではないかと聞かれたら、そうではないと答える筈だ。現世で生きていれば、辛い目にはばかり遭う。だから霊感があれば、成仏する事が幸福であると、きつと信じただろう。

しかし藤堂にはそれが無い。霊を見る術はあるが、日常的に目にする訳ではない。だから、理解が出来なかった。それは今でも、そう思う。当然のように死を悲しみ、死者を悼む。それこそが、本来の供養である筈だ。

だから、死なせたくなはない。愛しい人を、何よりも大事な人を。それが当たり前の感情で、本来なら、そう思うべきである筈だ。悲しむ事は、罪ではない。

除霊屋になるべくして育てられた子供は、死を直視しろと教えられるという。幸せを願うのではなく、死を真つ向から受け止めてそれを受け入れ、悲しめと。これは渚も芹香も、明もそうだと言っていた。死別を悲しみ、死者を悼み、死を受け入れる。死者が迷わずに行けるよう、送り出す必要があるのだと。

遺族が死を受け入れなければ、死者はあの世へ行く事が出来ない。祐子は恋人が死んだことを悲しみはしたが、死を受け入れてはいなかった。送り出す為の心の準備も出来ていなかったから、彼女の恋人は彼女の悲しみによって、変容してしまったのだろう。

何故、死を悲しむ必要があるのか。その自問に、答えは出ている。けれど、言葉にすることが出来なかった。

「死ぬことを幸せとは思わない」

決然と言い切った藤堂は、きつく拳を握った。鴻の表情が一変する。笑みを浮かべていた唇が引き結ばれ、緩やかな弧を描いていた眉が上がる。そこで藤堂は、理解した。

彼は、何かを恐れている。

「幸せに決まっているさ。悲しみに満ちたこの世で生きるより、あの世で穏やかに暮らす方が、幸せに決まっている！」

「あんた今まで、何してた？ ずっとこんな所に閉じこもって、死ぬことばっか考えてたのか？」

「幸せになることを考えて何が悪いんだい？ あなただって考えるでしょう、幸せというのが何なのか。幸せになりたいでしょう」

反論は、頭の中にはあつた。これを言ったら、少なくとも今のこの膠着状態は解けるだろう。けれど、状況がどうなるかは分からない。更に悪化するだけかも知れない。それでも、黙って聞いてはいられなかった。

「あんた、死ぬのが怖いんだろ」

鴻の目が、大きく見開かれた。的を射たのだと思われたが、彼は藤堂に、何も言い返そうとはしなかった。代わりに、執事に向かつて人差し指を向ける。

ゆなが藤堂の腕を引いた。見下ろすと、彼女は首を大きく左右に振って逃げようと促す。

「捕らえなさい、彼を」

明と渚が、弾かれたように執事を振り返った。その隙に堤の拳が迫り、明は慌てて身を屈める。渚は二人から距離を取り、頭を抱えた執事に向かって怒鳴り声を上げた。

「やめなさいじいや！」

執事の細い目が、きつく閉じられる。今にも倒れてしまいそうなほど、背中を丸めて頭を抱え込んだ彼は、何かを振り払うように首を左右に振った。

執事が葛藤している間に、藤堂はゆなと部屋の隅へ逃れる。それにとれほどの意味があるだろう。執事が本気でこちらを殺そうとしたら、恐らく一分もかからない。彼に対抗する術を、二人は持っていなかった。

あまりにも、無力だ。守護霊達に、共に戦った事もある執事を止めさせるのは嫌だった。

屈んだ明を飛び越えて、堤は渚に殴りかかって行く。渚は驚愕に表情を歪めて息を呑んだが、反射的に片手に持った札を、目の前で迫った拳にぶつけた。火花が散ったような音が部屋中に響き渡り、堤の手から白煙が立ち上る。

そこで初めて堤がよろめいたが、拮抗する力に耐え切れず、渚もその場に尻餅をついた。それを見た執事の表情が、憎悪に歪む。未だ彼の内に理性は残っているようだが、いつまで保っていてくれるだろうか。

「さあ、早く」

鴻の声が、執事を急かす。彼は辛うじて頭を左右に振ったが、両手が震えていた。

堤がよろめいたのが好機とばかり、明が刀の切っ先を彼の頭に向かって突き出す。堤は構えようにも間に合わず、よろけて踏みとどまったままの姿勢では、屈む事も出来ない。

これで終わるものと傍目には思われたが、堤はあるうことが、目前まで迫った刃を両手で掴んだ。明が目を見開く。

反発しあう力が切っ先から手元まで伝わり、明の手が震える。堤の腕も、大きく震えている。刃を握り締めたその手からは、赤い雫が滴り落ちていた。明は刃を伝って流れ落ちる血を見た瞬間、首だけを勢い良く芹香に向ける。

「芹香さん起きて！ お父さんまだ、操られきってないよ！」

しかし芹香は、微動だにしなかった。胸が僅かに上下しているから、生きてはいる筈なのだが。

起き上がった渚が執事と明を交互に見た後、大きく息を吸い込んで、芹香に駆け寄った。堤の顔が彼女に向けられ、明の刀を渾身の力で押し返す。明は一瞬よろめいたがその場で踏みとどまり、渚へ向かって行く堤に追いつがる。

「お願い芹香さん、起きて！」

悲痛な声と、渚の息を呑む音が重なった。堤の拳が渚に迫る。明は刀の柄を握り締め、堤の背中に向かって振り下ろす。

勢いよく振り返った堤は、振り上げた拳を明の腕に向かって下ろした。慌てて刀の軌道を変え、明はそれを弾き返す。息つく間もなく刀を引き戻して、明は更に切っ先を繰り出した。堤は飛び上がったそれを避け、間合いの外へと着地する。

渚の意識が、芹香に向いたその時だった。執事の体から力が抜け、狼のように鋭い双眸が藤堂を睨む。何も出来ないまま捕まってしまうのかと、藤堂は己の無力さを呪った。

ゆなが藤堂の手を握り、不安そうに見上げた。藤堂は彼女に苦笑いを浮かべて見せる。それで少し、ゆなの表情が緩んだ。

「そつだ、捕まえる！」

鴻が叫び、執事が地を蹴った。抵抗に意味はない。無駄に抵抗して、執事に傷を負わせる事の方が怖かった。あれは渚にとって、何よりも大事な霊なのだ。

「やめなさいじいちゃ！」

無抵抗のまま藤堂とゆなが執事の腕に捕らえられた瞬間、渚が怒鳴った。彼女は芹香の体に巻きつけられた縄に掛けていた手を離し、踵を返す。執事は一瞬腕の力を緩めたが、すぐに込め直した。腹部への圧迫に、藤堂は小さく呻く。

「藤堂さん！」

明が気を取られた隙を、堤は見逃さなかった。一気に間合いを詰めて、彼女の首に手を伸ばす。刀の刃がその腕を振り払おうとしたが、逆に掴まれた。白煙と共に、堤の手から血が流れる。

明は首に向かって伸びてくる腕を避けたが、指先が僅かに肩を掠めた。じゅう、と嫌な音がして、制服の肩が破ける。明は目を見開いて刀を持った手を引き、堤から逃れた。その肩が、真っ赤にただれている。

堤との間合いを取った明に、鴻の人差し指が向けられる。明は驚いたように眉を上げ、ぴたりと動きを止める。明の足が止まると同時に、堤は横を通り過ぎようとする渚の前へ腕を伸ばし、その腹に拳を埋めた。くぐもった声と共に、渚の体が崩れ落ちる。藤堂は一気に青褪めた。

「君も、大人しくしていなさい」

鴻は明に向かって静かに告げ、低く笑った。

第八章 生を知る 八

硬直した明の手から、刀がすり抜けて床に落ち、乾いた音を立てた。堤は気を失った渚を片腕に抱え、再び芹香に歩み寄る。藤堂は咄嗟に勢い良く身を乗り出したが、執事の太い腕は、びくともしなかつた。霊の前で生身の人間は、あまりにも無力だ。

全て、自分が悪い。藤堂は深い悔恨の念に駆られたが、過ぎた時間は戻せない。凍りついたように動かない明の表情を見るのが、怖くて堪らなかつた。

あの時芹香を止めていれば、こんな事にはならなかつた。自分に少しでも何か出来れば、こんな事にはならなかつただろう。

「メイ！」

藤堂が叫んでも、明は怯えたような表情のまま反応しなかつた。明の全身が、小刻みに震えている。ゆなは唇を僅かに開いたまま、今にも泣き出しそうに目を潤ませていた。焦燥感にも似た歯痒さに、藤堂は拳を握る。

堤の手が、芹香の背へ伸びた。藤堂はまた反射的に足を動かしたが、執事の腕からは逃れられないまま、虚しく空を切る。ゆなが消え入るような声で、メイさん、と呟いた。

祈っても無駄だ。救うには、行動を起こすしかない。けれど、何も出来ない。

明の体が、とうとうその場に崩れ落ちた。きつく頭を掴んだ両手を震わせて、それでも耐えている。

「やめて、娘でしょ！ そんな事したら死んじゃうよ！」

泣き叫ぶ明の声が、地下室中に木霊した。聞く者の胸を締め付ける悲痛な叫びにも、堤の手は止まらない。

指先が背中に潜り込んだ瞬間、芹香の全身が大きく跳ねる。堤の手が探るように動き、腰の方へ移動した。芹香は苦痛に眉をひそめてはいるものの、目を覚ます気配はない。

このまま、何も出来ずに終わるのだろうか。藤堂の胸を、不安がよぎる。少しでも出来る事があると思っていた自分が、愚かだったのだろうか。

そんな事は、ない筈だ。渚の声に確かに反応したのだから、我に返す事が出来る筈だ。だからせめて、執事だけでも。藤堂は首だけを後ろへ向けて、執事を見上げた。

「……あんた」

藤堂は思わず眉間に皺を寄せて、呟く。

執事は齒を食いしばって、耐えていた。細い目から次々に涙を零しながら、精一杯抵抗していた。渚が捕まった事で我に返ったのかも知れないが、体が言うことを聞かないのだろう。

霊はこんなにも、か弱い存在だ。確かに生身の人間では、悪霊に太刀打ちできない。けれど霊達は他人の感情に晒されただけで姿形を変え、こうして容易に操られてしまう。明も執事も、札を破ればこの世から消えてしまう。たった、それだけで。

霊になれば、何をするにも記憶に頼るしかない。泣くのも笑うのも怒るのも、生きていた頃の記憶がなければ出来ない事だ。記憶を反芻して呼び起こすだけの感情など、生きる人の胸の内から湧き上がるそれには到底敵わない。

だから霊は、他人の感情に感受される。時にはそれに反応して、笑うことも泣くこともある。けれどそれは、他人の感情だ。純粹に、自分自身が抱いた感情ではない。

霊達は、それが誰の感情なのかも分からないままに、激情に揺さぶられる。だから悪霊は、自分自身が何なのかも、判らなくなってしまう。仕舞いには、生者が腹の内に溜め込んだ負の感情に支配され、自我を失う。だから。

だから死は、恐ろしい。

「やめる鴻！ あんた怖いだけだ。死ぬのが怖いから、生きる事から逃げてるだけなんだろ！」

「そんなものを恐れてはいない！」

よく通る若い声だったが、鴻の顔は老人のそれのように疲れ切っていた。その顔に浮かべられた憤怒の表情に、藤堂は目を細める。

「そんな事は怖くない！ 私はあんな……あんな姿になりたくないだけだ！」

「自分のしてる事が罪だつてのは、分かってるんだな」

「罪だよ。私のしてきた事は全て、罪だ」

彼の顔に浮かんでいるのは、怒りだけではなかった。焦りと動揺、僅かながら、悲しみも含まれているように見える。

「悪霊を憎めと教えられた私は、ただ悪霊を消した。悪霊は全て悪だと思っていたのに、違うんだよ。そうじゃないんだ！」

鴻は限界まで目を見開き、鬼のような形相で藤堂を睨み付けた。

「物心ついた時真実に気付いて、私は悔やんだ。生前は悪でなかった悪霊もいる。生きている人のせいで、悪霊になってしまった霊もいる。それを悪戯に罰する事は、罪ではないのか！ 私は世間の為にとしてきた事で、あんな姿になるんだ！」

怖かったのだろう。確かにこの男は、怖かったのだ。死ぬことも悪霊となって消される事も。恐れるあまり進んであの世へ行こうとし、同時に恨みの矛先を現世へ向けた。

思えば哀れな青年なのかも知れない。幸せの本当の意味も知らず、幼い頃に植え付けられた嘘を妄信している。今まで彼は、幸せといえる人生を歩んでは来なかったのだろう。

彼は少し、芹香に似ている。自らを省みる暇もなく、仕事の為だけに生きてきた、芹香と。

ただ違うのは、芹香が我が身を犠牲にしても他人を助けようとしたのに対し、彼は他人を犠牲にして、自分が成仏しようとしている。そんな人間が死んだところで、素直にあの世へ行けない事は分かりきっているというのに。

そうなのだろうか。本当に、それだけなのか。本当に彼は自分の為だけに、他人を犠牲にしようとしているのだろうか。

「藤堂さん！」

明の声に、藤堂は我に返った。苦しげに眉をひそめたまま、明は制服の胸元を握り締めている。

「藤堂さん……札を、破って」

藤堂は一瞬、我が耳を疑った。

「私があつた穴を塞ぐから。お願い」

続いた明の言葉に、頭の中が真っ白になった。札を破るということとは、この世にいらなくなるということだ。明と二度と、会えなくなるということ。

「そんな事したらお前……弟は」

明は誰にも、会えなくなる。彼女が仲間達という時、本当に楽しそうな顔をしているのを、藤堂は知っている。それなのに、離れると、言うのだろうか。

「いいの！ 早くして、みんな死んじゃうよ！」

執事の腕の震えが、触れた腹へと伝わってくる。ゆなは青ざめたまま、何も言わない。

大勢の人の命と、既に死んでいる明を天秤にかけるのは、間違っている。穴を塞げば、芹香も助かるかも知れない。それでも、藤堂は躊躇した。

札を破れば、明とは二度と会えなくなる。盆には戻って来るのだろうが、藤堂には見えない。破らなければ、自分を含めた大勢の人の命が失われる。破っても破らなくても、芹香は死ぬかも知れない。どちらを選ぶべきか、理性では分かっていた。けれど、心がついて行かない。

「早く！」

明の声に急かされ、藤堂はのろのろとポケットから札を取り出す。所々破れて、文字も掠れた明の札。こんなになっちゃっても効力が残っているのは、偏に高屋敷家の札であるからだろう。悠長にそんな事を考えている場合ではない。

選択を迫られる現実から、逃げようとする自分を奮い立たせ、藤堂は札を握り締める。心の中で、誰にともなく謝った。

うなだれていた芹香の顔が、突然弾かれたように上げられた。堤が僅かに、肩を震わせる。確かに未だ、少しは自我が残っているのかも知れなかった。

芹香は血の気の失せた顔を、ゆっくりと後ろへ向け、父を見上げた。

「……父さん」

堤の手の動きが止まった。芹香の表情が苦痛に歪む。その喉が、掠れた呻き声を漏らした。もう、叫ぶ体力も残っていないのだろう。全身の温度が一気に下がり、藤堂は顔が青ざめて行くのを自覚する。芹香が死ぬか、明がいなくなるか。どちらか選べと言われたら、答えは決まっている。藤堂自身が選ばなくとも、明はきつと前者を許さない。だから。

「メイ……ごめん」

苦しそくに顔を歪めながらも、明は笑った。それでいいと、全てを許すような、優しい顔。離別の予感と焦りに、札を持った手が汗ばむ。これで本当に、離れ離れになってしまう。

誰が欠けてもいけないと、そう思っていた。それなのに、こんな事で、自分が弱かったばかりに、明がいなくなる。自分が迷ったばかりに、芹香は、早く。

両手で札の両端を持って、藤堂は一息に、古ぼけた紙切れを引き裂いた。

おにいちゃん。

堤の手が抜かれて芹香が再び俯いたのも、明の姿が消えたのも、藤堂の背後から守護霊達が飛び出したのも、ほぼ同時だった。鴻が目を見開き、子供達を見上げる。

バイバイ。

小さな子供の声が、藤堂の頭の中に直接響いた。子供達は一直線に、天井に空いた穴へと向かって行く。

「常務、早くそれを放せ！」

堤は確かに、何かを持っていた。澄んだ色をしたそれは、ソフトボールと同じ位の大きさだろうか。光に当たると、シャボン玉のように、虹色に輝く。あまりにも美しい球体だったが、それよりも藤堂は、守護霊達に気を取られていた。

「お前ら待て、何する気だ！」

藤堂が叫んでも、守護霊達はもう、何も言わなかった。真っ直ぐに天井へ向かう彼らを、藤堂は為す術もなく見上げる。彼らの行く先は恐らく、ぽっかりと空いた真っ暗な穴。

彼らがあれを塞ごうとしているなら、明は、どこへ行ったのだろうか。札は確かに破った筈だ。破った紙片は、未だ手の中にある。しかし、明の姿が見えない。穴へ向かって行くのは守護霊達だけで、明の姿はない。

堤の手が、魂を放した。それを見た鴻の目が、大きく見開かれる。魂は吸い込まれるように天井へと向かい、すぐに守護霊達に追い付いた。

「バカな、堤……」

鴻の顔も、何故か青ざめていた。堤は何も言わない。藤堂は彼らの様子に違和感を覚えたが、次に天井を見上げた瞬間、胸が締め付けられるように痛んだ。

守護霊達が、魂と寄り添うようにして穴へ入って行く。闇へと吸い込まれる虹色の球体が、ぼんやりと発光している。それを目にした途端、唐突に目頭が熱くなり、藤堂の目から涙が零れた。何故泣いているのか自分でも分からないまま、止める事も出来ない。

塞いでくれ。祈るようにそう考えながら、藤堂は真っ暗な穴へ吸い込まれる子供達を見送る。頬を伝って流れ落ちる涙は、止まらなかった。

なかないで。

聞き覚えのある声だった。あどけない少年の、拙い言葉。横を見ると、すぐ傍に一人だけ、守護霊が残っていた。

「……コウ」

藤堂の涙を拭うように頬を撫で、コウはにっこりと笑った。気の抜けた、いつもの笑顔だった。

コウは真っ直ぐに、芹香の下へ向かった。うなだれたまま動かない彼女に近づくコウを、堤は止めない。守護霊には、関与出来ないのかも知れなかった。

コウは芹香の正面に回り、彼女の体にしがみつくように、ぴったりとくっついた。芹香の眉が、僅かに動く。

芹香の背に片腕を回したまま、コウは藤堂に向かって手を振り、無邪気に笑った。その体が徐々に薄くなり、最後には完全に消え失せる。

「な……なんで……っ」

地面がぐらりと揺れる。呆然としていた鴻は、ゆっくりと天井を見上げて表情を歪めた。全身から力が抜けて行き、彼はその場に崩れ落ちる。

天井にぼつかりと口を開けていた穴が、徐々に小さくなって行く。今も地面が揺れているところを見ると、やはり昼間の揺れは、穴のせいだったのだろう。執事に抱えられているから大した衝撃はないが、藤堂は未だ混乱していた。

あの鴻の表情は、一体何だったのだろう。コウは何故消えたのだろう。明はどこへ行ってしまったのだろう。芹香は

芹香は。

「芹香！」

掠れた声で、藤堂は叫んだ。

彼女は確実に、魂を抜かれた。それはつまり。

視線を移した先では、堤が渚を、そっと床に下ろしていた。藤堂は怪訝に、眉を顰める。執事は未だ、体だけ操られたままだというのに。

「堤……君、まさか」

唇をわなわたと震わせて、鴻が呟く。堤は上司に目もくれず、芹香を縛り付ける縄に手をかけた。鴻は最早、何も言わない。

堤は固く結ばれた縄を解き、そつと娘の肩に手を置いた。透けたその手は、微かに震えているようにも見える。僅かに続いた沈黙の後、震える手の甲に、白い指先が触れた。

「いいんだ……父さん」

俯いていた芹香がゆっくりと顔を上げ、父親に微笑みかけた。穏やかで優しい、静かな微笑。

止めていた呼吸を再開するように、藤堂は大きく、ゆっくりと息を吸い込んだ。徐々に肺が空気に満たされ、いっぱいになる。呼吸と共にいつしか全身にこもっていた力を抜き、藤堂は腹に回されたままの、執事の腕を握った。

「……芹香」

揺れが徐々に、収まって行く。気を失っていた渚が目を覚まし、ゆっくりと起き上がって不思議そうな顔をした。そして天井を見上げ、両手で口元を覆う。

不快な空気を垂れ流していたあの穴は、すっかり閉じていた。渚はぐるりと室内を見渡してから、藤堂を見て目を丸くし、立ち上がって駆け寄る。彼女はそのまま執事の正面に立って彼を見上げ、厳しい表情で睨んだ。

「何故……どうしてなんだ堤、何故……」

執事がそつと手を離し、藤堂とゆなを解放した。鴻が自失した為に、呪縛が解けたのだろう。或いは、渚に睨まれて完全に解放されたのか。

堤は何も、答えなかった。答えられないのだろう。通常の霊は概ね、霊媒師の口を借りなければ、語る事が出来ない。彼の表情は、痛みを堪えているようにも見えた。

解放されたゆなは、真つ直ぐに鴻の下へ向かった。藤堂は止めようとしたが、ゆなの表情が真剣なものだったので、やめた。

ゆなは膝について虚ろな目をした鴻の前に立ち、その頬を力一杯平手で叩く。甲高い音が木霊した。鴻は瞬きを忘れたように目を丸くしたまま、ゆっくりと掌を頬へ当てる。

「痛いですか」

叩かれた頬を押さえる鴻を見下ろし、ゆなは抑揚のない声で聞いた。普段通りの無表情だが、僅かながら眉間に皺が寄っている。鴻は呆然とゆなを見上げたまま、口を開こうともしない。

「メイさんには、その痛みが分かりませんでした。死んでしまったから、分からなくなってしまうのです」

返答を待たないまま、ゆなは執事を指差して続ける。

「彼は大事なご主人に、何も伝える事が出来ません。芹香さんのお父様もそうです。四十九日を過ぎると、霊は二度と、家族や友人、恋人と口を利く事が出来なくなります。あの世で会えるとも限りません。霊と人とは、違うのです」

ゆなは一呼吸置いて、更に言った。

「それは幸せですか？」

鴻の表情が歪んだ。悲しそうにも、苦しそうにも見えない。ゆなの言葉は、藤堂の胸にも深く刺さった。

「あの世のことは、誰にも分かりませぬ。そこが本当に楽園なのか知り得るのは、死者だけです。人の幸せなど、本人にしか分かりません。あなたの一存で、人の幸福を決めて良いのですか。身勝手な幸福を他人に押し付けて、どうするといふのです」

鴻は何も答えない。ただ悲痛に表情を歪めて、それでもゆなから視線を外さなかった。

「死者と生者の境は曖昧です。しかしだからこそ、理解しなければなりません。霊は己の内から湧き出る感情が、真実自分のものなのか、それとも他人のものなのか、自分でもわからないまま、抑える事も出来ません。しかし生きていけば、少なくとも身の内から湧く感情は自分のものです。幸福だと感じる心も、自分のもの。あなたが今幸せだと思ふならそれはあなたの感情ですが、あなたが死後に感じる幸せは、あなたの幸せではないかも知れません」

ゆなは大きく深呼吸して、声を張り上げた。

「あなたはそれでも、成仏することを幸福と呼ぶのですか！」

鴻の顔が、泣き出しそうに歪んだ。その場にへたり込み、叱られた子供のように肩を落とす。ゆなはそこでようやくやうやくから離れ、藤堂の下へ戻って来た。藤堂はゆなを労うように、軽く肩を叩く。

うなだれた鴻は、泣いているように見えた。沈黙が薄暗い室内を包み、淀んだ空気を薄めていく。

「私は……私はただ、幸せを知りたかっただけなんだ」

呟いた声は、少しだけ震えていた。

「私は知りたかった。誰もが求めるなら、そうなって欲しいと思った。誰もが一斉に死んでしまえば、この世のしがらみはなくなる。だからどんな悪人でも、成仏出来ると思ったんだよ……永遠に苦しむ悪霊になど、ならないと」

鴻清十郎は、退治屋になるにはあまりに純粹すぎた。純粹であるが故に他人の幸福を願い、己の罪を恥じた。たったそれだけの事が、こんな大事になってしまった。

「それなのにいつしか、幸そうな人を見る度に憎らしくなってしまう。幸福は成仏する事ではないのかと……私はどうして、幸せにはなれないのかと」

「社長、あなたは……」

言いかけて、芹香は不意に顔を上げた。閉じられた扉を見つめ、僅かに目を細める。

扉の向こうから、足音が聞こえてくる。一人二人という数ではない。地響きのように、何十という数の足音が近付いて来ている。

執事が扉の方を向いて、身構えた。ゆなは藤堂の後ろへ隠れる。

藤堂には何が来ても、これ以上状況が悪化する事はないように思われた。

広い地下室の端と端にある二つの扉が、勢い良く開かれた。

第八章 生を知る 九

二つの扉からなだれ込んできたのは、武装した警官隊だった。一見すれば普通の機動隊だが、彼らが構えた盾には、細かな墨字の書かれた札が、何枚も貼り付けられている。恐らくは、霊体討伐隊なのだろう。警察が今更何をしに来たのかと、藤堂は呆れた。

しかし鴻の顔からは、一気に血の気が引いて行った。警官を見て焦った訳ではないだろう。彼は恐らく、司法によって悪であると判断されることが怖いのだ。

鴻は勢い良く顔を上げ、藤堂達を睨み付けた。

「君達が……君たちが呼んだのか」

「動くな！」

張りのある声が、地下室中に響き渡る。困惑した藤堂は鴻と警官隊を交互に見て、顎を掻いた。

警察を呼んだ覚えはない。そもそも何故彼らが今更になって動いたのかも知らないし、彼らの目的も分からない。困惑して立ち尽くす藤堂を尻目に、警官隊の間から出て来たスーツ姿の男は、真っ直ぐに鴻に歩み寄って行った。先ほど叫んだのは、彼だろうか。

男を見上げる鴻の表情が、悲しげなものへ変わった。同時に、芹香が目を見開く。

「乃木坂部長……」

紺色のスーツを着込み、黒縁眼鏡を掛けた男は、芹香に視線を移して頷いた。芹香を助けたという部長だろうか、藤堂は考える。

「遅くなって済まなかった。無事で良かったよ」

「いや……何故、あなたが」

乃木坂は戸惑う芹香の問いには答えず、鴻の腕を掴んで引つ張り上げた。よろめきながらもなんとか立ち上がった鴻は、悲しみと憎悪の入り混じった悲痛な面持ちで、乃木坂を睨む。そして、ゆっくりと藤堂に向き直った。

「殺してくれ」

藤堂は息を呑み、一瞬呼吸を止めた。

「殺してくれ、これじゃダメなんだ！ 自殺じゃダメなんだ、意味がないんだ！」

藤堂は答えられなかった。乃木坂は眉根を寄せて鴻を一瞥した後、天井を見上げて驚いたように目を丸くする。穴がないことに、今更気付いたのかも知れない。何もかも、遅すぎる。

混乱する内、藤堂は段々と腹が立ってきた。今更やって来た警察に腹を立て、あれだけ説教されたにも関わらず、未だに分かっていない鴻にも苛立った。彼は何も理解していない。それがあまりにも、腹立たしかった。

「死んでから知る幸せに、意味があるのか」

その場に居る全員の視線が、全身に刺さった。藤堂はもう、視線を気にしてはいられなかった。自棄になっているのかも知れない。それでも、言いたかった。

「俺はあんたに説教出来るような立場でも身分でもねえが、少なくともあんたよりは分かってるつもりだから、言わせてもらうけどさ。あんた、死ぬ事ばっか考えんなよ。生きる事考えろ。あんたが死ぬ事には意味ねえが、あんたが生きてる事には意味がある。あんたに救われた人だつて、大勢いるんだろ」

「私がした事は……」

「霊は向こうに送ったが、生きてる人は救ったろ。これからを生きる人を、救ったんだろ。それが罪か？」

黙りこむ鴻は、全身の力を抜いて呆けたような表情を浮かべた。

乃木坂は彼の腕を掴んだまま、困惑したように眉根を寄せる。

「気に病むなよ。それが悪くて天国に行けなくても、生きてさえいれば、いい事ある。いつかは幸せだつて思う時が来る。その為に生きてるんだろ」

「そんな事が……」

鴻は言いよどんで、視線を足下に落とした。

「あるだろうか」

藤堂は苦笑いを浮かべ、腰に抱きついたまま首を傾げるゆなの頭を、意味もなく軽く叩いた。気恥ずかしかったのだ。

死にたいと思った事は、藤堂にはない。彼ほどの罪悪感に駆られた事もなければ、生きていると実感した事もない。彼のように命の危険に晒されながら、生きていた訳でもない。

けれど彼と同じように、生きている内に幸せなど、訪れないだろうと思っていた。死後の世界が幸福なら、それでいいかと、そう思っていた。それでも予想もしなかった幸せは、確かに訪れた。

「あるよ。自分の幸せの為に生きてるんだろ。幸せになりたいと思ってるんなら、叶わない事はないよ」

「良く言った!」

藤堂が言い終わるとほぼ同時に、癖のある高い声が、武装した警官達の間から上がった。驚いて声のした方を見ると、予想通りの人物が、警官達を押しつけながら近付いて来る。

藤堂は驚くよりも、啞然とした。何故彼女は、こんな所にまで現れるのだろうか。

「ゆ、祐子さ……」

「ぶちよ……じゃなかった警部、ここには何も証拠なんてありませんよ」

神出鬼没の新藤祐子は藤堂の言葉を遮り、乃木坂の前に仁王立ちした。彼女の顔を見て、無表情を保っていた乃木坂の顔が、困惑したように歪む。やっぱり祐子は誰といても強いのだと、藤堂はぼんやりと思う。

「怪我人はいない、死者もいない。ここには何も無い。証拠がなければ、司法は裁けないわ」

警官達の間、さざ波のようなざわめきが起こる。微かに複数人が言い合う声が聞こえてくるが、狼狽しきった乃木坂の言葉に、かき消された。

「し、しかし新藤君……」

「何かしたって確証もないのに、こんな大勢連れて来るんじゃないわよ。油売ってるヒマがあるなら、そこら辺に湧いてる悪霊を退治しに行ったらどうなのって言うてんの！」

祐子の啖呵が響き渡った瞬間、ざわめきが止んだ。呆気にとられる藤堂は、祐子の勢いに押されて何も言えなくなっていた。一体彼女は、どこまで噛んでいたのだろう。それ以前に、何故ここにいるのだろう。

祐子は呆然と目を丸くする鴻に顔を向け、優しいな笑みを浮かべた。鴻の目が、僅かに揺らぐ。

「鳳コーポレーションは、既にあなたの手から離れました。あなた自身の事は、これからです。全てあなた次第なんです。ご同行願えますか？」

それだけで、鴻は全て理解したようだった。ゆっくりと頷き、背筋を伸ばす。藤堂の説教の為か祐子の登場の為か、彼は先ほどまでより遥かに落ち着いている。

「常務、堤君、済まなかった」

鴻が静かに謝罪の言葉を述べると、堤父子は、揃って元上司に向かって頭を下げた。彼らの動作には、躊躇も戸惑いもない。鴻も彼らに応えるように、深々と腰を折った。そして今度は、体ごと藤堂等に向き直る。

「浄霊屋諸君。君たちにはいつか、償いをしたい。私は取り返しのつかない事をしたんだ」

「社会的に償った後になりますか」

呟いた乃木坂を、祐子が鬼の形相で睨んだ。乃木坂は怯えたように肩を竦め、視線を逸らす。鴻はもう一度深く頭を下げてから、祐子に促されて歩き出す。

「社長」

黙り込んでいた芹香が声を掛けると、鴻は肩越しに彼女を見る。

「必ず生きて、償って下さい。私も父も、あなたの幸せを願っていますから」

鴻はしばらく芹香を見つめた後、済まなかった、と呟いた。芹香は頷いて、傍らに立つ父親に視線を移す。どこか寂しげに鴻の背中を見送っていた彼は、警官隊がそろそろと出て行くのを確認した後、溜息を吐いたように見えた。

結局、彼のした事は、罪に問われるのだろうか。祐子に聞きたいことは山ほどあったが、聞けるような雰囲気ではなかった。

祐子は鴻の背に掌を添えたまま、思い出したように藤堂を見た。

「藤堂君、明日説明しに行くわ。謝りがてら」

「なんであんたが謝んの」

「まあ色々……あら、いないと思ったならそこにいたのね」

藤堂は怪訝に眉を顰めたが、祐子は満面の笑みを浮かべるばかりで、答えようとはしなかった。乃木坂に急かされ、彼女は地下室を出て行く。結局彼らの行動は、無駄に終わったのだろう。

それもまた、哀れではある。藤堂は未だ混乱の解けきらない頭で、ぼんやりと思う。

「さて」

沈黙を破ったのは、ゆなだった。藤堂が見下ろすと、ゆなはヘルメットを外して、彼に押し付ける。

「芹香さんとの感動の再会は、後に致しましょう」

「は？」

聞き返しながらも渡されるままヘルメットを受け取ると、ゆなは堤に向かって両手を広げた。

「急がねば、あの世へ行つてしまいます。さあ、最後に思う存分、藤堂さんを煮るなり焼くなり。どうぞ」

堤は几帳面に整えられた口ひげに隠れた唇に、僅かに笑みを浮かべた。頭を下げると同時、彼は白い煙に変わり、ゆなの腕の中へ吸い込まれるようにして消える。ゆなの頭が、首の据わらない赤ん坊のようにがっくりと垂れた。

椅子の傍らに立っていた芹香が、ゆっくりと近付いてくる。藤堂と目が合うと、彼女は僅かに視線を落とした。

「申し訳ありませんでした」

動いたのはゆなの口だが、その声はハスキーな男のものだった。声質や抑揚の取り方が、芹香と似ている。

「お恥ずかしいところをお見せしてしまいました。あんな風に操られてしまう前に、何が何でも、私が社長を止めるべきでした。まさか、あなた方にこんなご迷惑を……」

「そんな事はもう、いいんですわ」

渚は苦笑いを浮かべ、芹香を見上げた。

「あなた、私達よりも、芹香さんに話したい事があるのではございませんこと？」

ゆなの体を借りた堤は、曖昧に微苦笑した。そして芹香へ向き直り、目を細める。暫くの間、無言が続いた。藤堂はいつしか汗ばんでいた掌に気付き、そっとジーンズで拭う。

「……芹香、済まない」

芹香は困ったように眉根を寄せ、父を見下ろした。

「何故謝るんです。私はこの通り、生きています」

「気付いていただろう。私は……」

芹香は父の顔の前に掌をかざし、言葉を止めさせた。

「いいんです。きつと、こうなる運命だったから。一人は死んだが、一人はきつと、幸せになる」

藤堂は渚と顔を見合わせ、首を捻った。親子の間では通じているようだが、こちらには会話の内容が掴めない。ふと渚の横を見ると、執事が申し訳なさそうに俯いていた。

「あなたが謝る必要は、ありません」

「何が悪かった訳でもない、か……藤堂君」

突然名前を呼ばれ、藤堂は思わず背筋を伸ばした。見た目はゆなだが、放たれる威圧感の確実に堤のものだ。更に今の藤堂には彼への引け目もあるから、尚のこと緊張していた。

「君には申し訳ないと思っっているが……感謝もしている」

「……ええと」

返す言葉が見つからなかった。それきり黙りこんで視線を流した藤堂に苦笑し、堤は続ける。

「この子を退治屋にしたのは間違いだったと、私はずっと悔やんでいた」

「父さん」

咎めるような声に、堤は娘を見上げてようやく笑った。

「私の願い通り、お前はいい退治屋になった。その代わり、自分を省みる暇さえなかっただろう。お前の悩みぐらい、知っていたよ……済まなかった」

堤は娘に向かって目礼してから、渚を見た。

「だが退治屋にならなければ、君達には会えなかっただろう」

渚は首を竦めて、はにかんだように笑った。堤は唇の端を上げたまま、藤堂に向き直る。

「君で良かった」

藤堂には脈絡がないように思われたが、芹香は僅かに頬を染めた。堤はとうに、気付いているのだろう。

「こんな子だが、私にとっては大事な一人娘なんだ。社長はああ言っただが、私はこの子が心配で、この世に留まってしまうてね……君は不安定だが、芯は太い。信じているよ」

藤堂には、恐縮する事しか出来なかった。肩を竦めて出来る限り小さくなり、何も言えないまま俯く。

堤が急かさない代わりに、渚が藤堂の横腹を肘でつついた。睨むような彼女の顔を見て、藤堂は場違いにも安堵する。

「お嬢さんを幸せにします、とは言えません」

顔を上げた藤堂の第一声に、堤も渚も、執事さえ目を丸くした。芹香だけが、顔を赤らめたまま小さく笑う。

「でもあなたの代わりに、何があっても隣にいます。許してもらえますか？」

驚愕の表情が、徐々に緩んで行く。堤は殆ど閉じてしまいそうなほどに目を細め、ゆっくりと、藤堂に向かって頭を下げた。

彼も、悔やんでいたのだろう。芹香が寂しかったのと同じように、彼も、寂しかったのだ。仕事に明け暮れる父の背中を見て育った芹香は、彼と同じように、仕事しかない人間になった。それを、悔いていたのだろう。

「……頼む」

それだけだった。

堤はそれで、満足してしまったのかも知れない。ゆなの体から白い煙が抜け出して、天井へ上って行く。力の抜けたゆなの体を抱きとめ、藤堂は煙を目で追う。どこまでも真っ白な煙は、天井に当たる前に拡散して消えた。

ゆなは藤堂に支えられたまま、両手を合わせて目を閉じていた。

ゆなにあの会話は、聞こえていたのだろうか。

藤堂は視線を芹香に移し、力の抜けた笑みを浮かべた。芹香は未だ赤い顔をしたまま、彼に笑い返す。それだけで、藤堂には充分だった。

「さて、帰りましょうか」

両手を上げて伸びをしながら、渚が言った。藤堂は頷いたが、ふと思いついて顎に手を当てる。何か、大事なことを忘れているような気がする。

渚はゆなの手を引き、執事と共に扉へ向かう。芹香は一旦入り口側から離れ、落ちていた刀を掴んだ。それを見て、藤堂はようやく思い出す。

「あ……… ちよ、ちよつと待てよ」

刀を拾って身を起こした芹香が、不思議そうに目を丸くした。藤堂はそんな彼女を怪訝に思う。

「メイは？」

渚とゆなは肩越しに藤堂を振り返り、首を傾げる。執事も彼を見て、苦笑いを浮かべた。

「メイはって……」

芹香は首を捻って、そう呟いた。

「藤堂さん、何を寝ぼけておられるのです」

「あなた、気付いていらっしやらないの？」

立て続けに言われ、藤堂は怪訝に眉をひそめる。芹香は藤堂の横を通り過ぎ、渚とゆなと、顔を見合わせて笑った。そして彼らは同時に顔を上げ、藤堂に視線を移す。

執事を含めた四人の人差し指が、藤堂を指した。

「後ろ」

守護霊が消えたのに霊達の記憶が見えないことを、まず疑問に思うべきだった。あの状況で霊の記憶が流れ込んで来なかった事を、不思議に思うべきだったのだ。

藤堂は四本の人差し指と笑顔から視線を外し、ゆつくりと振り返った。そして、泣き笑いのような表情を浮かべる。

背後では半透明になった明が、朗らかに笑っていた。

洋館の真つ暗な廊下を抜けて外へ出ると、既にとつぷりと日が暮れていた。湿気を含んだ夜風の生温さは汗ばむほどだが、地下室の淀んだ空気よりは、遥かに心地良かった。洋館の周囲も、相変わらず人気はないが、嫌な空気はなくなっている。

藤堂は真つ先に車に乗り込み、シートへ倒れ込んだ。走ったせいもあるが、体以上に気疲れしている。続いてドアを開けたゆなが、シートを二つ占領する藤堂の頭を、邪魔そうに叩いた。

疑問は多々残っていたが、明日祐子に聞けば済むだろう。とにかく今は、早く帰って休みたかった。藤堂はゆなに叩かれた頭を意味もなくさすりながら、億劫そうに起き上がってハンドルを握る。

「真面目な方ほど、崩れやすいものですね」

風の音に混じって、渚の声が聞こえた。窓の外を流れる町並みを眺めながら、彼女は憂えたような表情を浮かべている。ゆなの家へと車を走らせる藤堂は、眠たげに欠伸をかみ殺しながら、後部座席の渚を一瞥する。

「どれが本音か、分かりやしねえがな」

「全て本音だろう」

芹香はシートに頭を預け、視線を落としたまま呟く。あれほど狭苦しかった後部座席が、明一人いないだけで、やけに広々として見えた。

ゆなはヘルメットを抱えて、真っ直ぐに前を向いている。青白い横顔は、少し疲れているように見えた。

「誰もあの方に、教えてあげられなかったのでしょうか」

普段通り抑揚のない声だが、ゆなの表情はどこか物憂げだった。疲れているせいも、あるのかも知れない。

「幸せは教わるものではありませんわ。それ以外は……まず、学校教育を変えないと」

「そんなでかい事は出来ねえな、流石に」

藤堂が呟くと、助手席のゆながシートの背もたれから身を乗り出した。後部座席の芹香を見上げ、首を傾げる。

「芹香さんが、総理大臣になればよろしいかと」

「無茶を言うな」

全員一斉に、声を上げて笑った。無論背後の明の声も、藤堂には聞こえている。一時はどうなることかと思っただが、こんな風にまた笑える事を、まずは喜ぶべきだろう。藤堂はゆなの家の前に車を停めながら、知らず知らずの内、口元に笑みを浮かべる。

家の前では、黒江夫妻が並んで手を振っていた。先に連絡しておいたので、出迎えに来たのだろう。ゆなは車から飛び出して、真っ先に母親へ飛びつく。父親が悲しそうに肩を落とした。

「スイマセン、遅くなっちゃって」

「いいえ、とんでもない。その分、ゆなは喜んでいますから」

黒江愛は車内を覗き込んで柔和に微笑み、娘の背中に両手を回したまま、頭だけを下げた。藤堂はつられて会釈する。

「みなさま、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

渚は肩の位置で軽く手を振り、にこやかに告げた。

「おやすみ、ゆな」

「お疲れさん」

愛がドアを閉めても、車が動き出しても、ゆなはずっと名残惜しげに手を振っていた。芹香と渚はシートの背に身を乗り出し、後ろを向いてそれに応える。

藤堂は、そんな和やかな光景を映し出すバックミラーを横目で見ながら、胸が温かくなって行くのを知覚する。これこそ、いつもの光景だ。

家の前まで辿り着くと、渚はドアを開けながら、芹香の様子を窺った。彼女は案外、気を遣う性質だ。

しかし今日は流石に、帰った方がいいだろう。このまま一緒に事務所へ戻っても、話すほどの体力は残っていないし、芹香も疲れている筈だ。藤堂自身、今すぐにでも布団に飛び込みたい。

「お前も今日は、珍しく仕事したな」

揶揄混じりに藤堂が言うと、渚は心外だとも言いたげに眉間へ皺を寄せる。

「失礼ね、私はいつも真面目に仕事をしていますわ」

「いつも執事に任せっきりじゃねえか」

「靈飼いとはそういうものよ!」

声を荒げた渚に噴き出した芹香は、逃げるように車を降りた。思わず笑ってしまったのだろう。門の方へ足早に逃げて行く彼女の背中を、渚が睨む。藤堂は門の前で手を振る芹香に、軽く掌を開閉させて返した。

「もう!」

呆れと怒りの入り混じった声を上げた渚は、フレアスカートを翻して車外へ出ると同時に、勢いよくドアを閉めた。車に罪は無いので、完全なる八つ当たりだ。

脇目もふらずに門へ向かう渚を追うように、藤堂は拳の裏で半分閉まった窓を叩く。渚が顔をしかめたまま、振り返った。

「また明日」

渚は暫く藤堂を睨んでいたが、やがて小さく溜息を吐き、また、とぶつきらばうに告げた。門を開けた芹香が、藤堂に笑いかける。夜風になびく銀髪は、柔らかに輝いていた。

二人の背中が門の中へ消えるまで見送った後、藤堂は車を発進させる。煙草を出そうとポケットに手を入れたところで、指先が硬いものに触れた。あ、と声を上げる。

「渡すの忘れた」

独りごちて暫し悩んだが、引き返すのも面倒になって、結局諦めた。どうせまた、明日会うのだ。きつと明日で、決着がつく。

生きてさえいれば、明日がある。何度後悔しても、何度でもやり直せる。平坦な人生を送ってきたから、今まで明日を待つことなどなかった。だから藤堂は今になってようやく、明日を待つ理由を知ったような気がした。

第八章 生を知る 十

「聞いてませんわ!」

渚の金切り声が、狭い室内に響き渡った。藤堂は換気扇の下で煙草を吹かしながら、あからさまに顔をしかめる。彼の隣に立っていたゆなも、両手で耳を塞いだ。

「だって、渚ちゃんが言ったんじゃないの?」

祐子は困ったように頬に手を当て、溜息混じりに聞き返した。その隣で、乃木坂が小さくなっている。激昂する渚が、怖いのかも知れない。芹香は会話には入らず、疲れた顔で傍観していた。

長い一日が終わった翌日、祐子は約束通り事務所へとやってきた。何故か菓子折りを持った乃木坂と一緒に訪ねて来たので、困り果てた拳げ句にまた店を閉め、藤堂の家に引っ込んで今に至る。

「私は鳳コーポレーションを買い取れなんて、一言も言ってませんわ!」

渚が更に怒鳴ると、流石の祐子も閉口して、困ったように眉根を寄せた。

「株を全部買い占めただけで、会社自体を買い取ったワケじゃ……」

「同じ事だろう」

芹香が冷ややかに突っ込むと、祐子は唸った。乃木坂はまたもや萎縮して、ハンカチで額を拭う。小心というよりは、女に囲まれて戸惑っているだけだろう。

テーブルを叩いた姿勢のまま祐子を睨んでいた渚は、深い溜息を吐いて座り直した。勝手に持ってきて、勝手に自分専用にしたクッションを抱え、彼女は僅かに柳眉を歪める。

「もういいわ、後でお父様を問い詰めます」

「そ、そうしてちょうだい」

祐子はようやく渚から解放され、安堵の息を吐いた。

「それで……祐子さん、あなたはどうして警察に?」

聞いてから渚は、ゆなが出した麦茶を一口飲んだ。あれだけ怒鳴れば喉も渴くだろう。

「ぶちよ……じゃなくて、警部に誘われたのよ」

「誘われてホイホイ入れるのかよ、警察ってのは」

藤堂が横から口を出すと、祐子は彼を見上げて睨んだ。余計な口を挟むなど言いたいのだろうが、黙っていたら黙っていたで、何か言えと言うのだから対応に困る。だからといって、逐一揶揄する必要もないのだが。

「失礼ね、アタシは警官じゃないわよ。協力してただけ」

「新藤君は異例ですよ。十年程前から、警察の方が内部に潜り込んでいたのです。社長のやり方に疑問を持った、中立派社員の告発を受けてね」

ふうん、とゆなが鼻白んだ。

「十年もかけたのに、警察には何も出来なかったという訳ですな。とんだ国家権力なのです」

「税金返せよ泥棒」

「話が進まないからあんた達は黙ってなさい」

祐子に怒られ、藤堂はゆなと顔を見合わせて肩を竦めた。乃木坂はまた、額の汗を拭う。やっぱり、存外気が小さいようだ。大人数を連れて乗り込んで来た時は、威勢が良かったように記憶しているのだが。

「中立派の中には、そんな捜査員が何人かいたワケよ。でも、社長もバカじゃないでしょ。なかなかボロ出さなかったみたいでさ」

「気付いておられたのか、そうでなかったのか……話だけはされましたが、現場に連れて行かれたのは、新藤君だけでした」

「ポチを芹香に消されちゃったから、あの穴から引っ張り出してくれたのよ」

藤堂は濡れたシンクに押し付けて煙草の火を消しながら、怪訝に眉根を寄せた。

「……それって辞めた後じゃないの？」

祐子は藤堂に向かって頷き、鞆からビール製のポーチを取り出した。その中から出て来た煙草を見て、藤堂は彼女に灰皿を差し出す。

「吸うならこっち来て」

「なんでよ」

「いいから」

ふうん、と鼻を鳴らして、祐子は煙草をしまった。立ち上がるのが億劫だったのかも知れない。

「……まあ、辞めた後よ、アタシが初めてあの屋敷に行ったのは。社長に戻ってきてくれて言われて、会社に戻ったの」

「あなたは、元は社長秘書だったな」

思い返してみれば、確かに祐子は退治屋を辞めることを決めた時、OLに戻ると言っていた。

「そ、気に入られてたのよこれでも。だから簡単に執行部に異動させてくれたし……まあそれはいいんだけど」

祐子は一つ咳払いして、横の乃木坂を見た。

「一度辞めて屋敷を見た後よ、警部から話が出たのは。いいタイミングだったわね」

「君はアレだが、あの霊食いは使えるからな。生身の人間を生かしたまま捕縛出来るという点では、うってつけだ」

「アタシがアレってどれよ」

乃木坂は祐子から視線を逸らし、助けを求めるように藤堂を見た。藤堂は彼を無視して、煙草に火を点ける。助けようにも、藤堂自身祐子には弱い。

実際祐子も、何がしたいのかよく分からない。明と一悶着起こしたから、罪悪感があったのだろうか。

「社長の処分は、どうなる？」

芹香が聞くと、祐子は乃木坂に目配せした。彼は懐から携帯電話を取り出し、パネルを操作する。眼鏡を指先で押し上げながら、乃木坂は芹香に向き直った。

「全て自供していますね。詳しくはお伝え出来ませんが、ああいった今までにない事件を裁けるほど、体制が整っていないのが現状です。物的証拠は何一つありませんし、会社も他人の手に渡っていません。ここから先は弁護士次第ですが……恐らくは、法的措置は取られないかと」

「情状酌量の余地があるしね。洗いざらい自白したのも、良かったかも」

「情状酌量？」

渚の問いには、乃木坂が答えた。

「鴻清十郎の両親は、彼がまだ幼い頃に亡くなっています。それからは、使用人に育てられたそうです」

「それでは、色々と分かっておられないのも頷けますな」

ゆなは冷凍庫から棒アイスを取り出しながら、納得したように呟いた。

「会社の経営は、社長が成人するまで父に一任されていた」

芹香の言葉に、え、と渚が問い返した。乃木坂が頷く。

「鴻は、焦ったのでしょね。過激派連中に、堤さんを……」

「あのうね、最初はあんたのお父さんの魂、使うつもりだったらしいのよ」

芹香が俯いたのを見て祐子が話をすり替えたが、彼女は益々深くうなだれた。藤堂は些か呆れる。口が達者なのはいいが、祐子は常に一言多い。

困惑したような芹香の表情に、祐子は慌てて再び口を開いた。藤堂はこれ以上余計な事は言わないでくれと、祈るように思う。

「協力してくれると、思ってたらしいの。あんたも堤常務も。あの人は死ぬ事が幸せだと思ってたから……」

「本当に、悪い事とは思っていらっしやらなかったのね」

死を悲しめない事が、引き金になったのかも知らない。鴻は焦り、芹香に協力を求めた。しかし本当にそれだけだったのか、疑問に思えど藤堂には知る由もない。

それでも、それだけだったとは思えない。鴻は堤の死を、悲しんだのではないだろうか。堤の死と、主を浄化した時期が重なったのは、紛れもなく偶然だったのだ。それまで鴻は、何一つ大きな行動を起こさなかつたはずだ。堤の死に動揺し、事を急いでしまったのではないだろうか。

そして彼は、疑問を持ったのではないだろうか。堤の死に動揺した自分に。死が幸福ではないのではないかという、疑問を持った事に対しても。だからあの時藤堂の言葉を聞いて、落ち着いたのではないだろうか。

こればかりは、本人にさえ分からない事なのかも知れないが。

「幸せにしたい、か」

祐子はぼつりと呟いた。そして何故か藤堂を見る。思わず視線を逸らした先に、俯く芹香が見えた。

藤堂は昨夜、一晩中考えていた。その日起きたことを思い返している内に、疑問が浮かび上がってきたからだ。悩むのに疲れた時、あっさりと明が真実を告げた。あの時コウが消えた理由を。

薄々感づいてはいた。実感が湧かなかつただけだ。

「まあ、また何かあつたら来るわ。会社行つて、色々処理しないと。かなり社員が減つちやつたから」

「残つたのは中立派の半分と僅かな穏健派、過激派の末端……あとは事務員か。何にせよ、会社の方は高屋敷氏任せだな」

「あ、そうだ」

藤堂の声に、立ち上がりかけていた祐子が再び腰を下ろした。迷惑そうな表情だが、元はといえば、社内のいざこざに巻き込まれたのはこちらだ。迷惑がられる筋合いはない。

「鴻が過激派連中を追い出さなかつた理由、聞いた？」

祐子は不思議そうに首を捻つたが、居住まいを正して、藤堂に顔だけを向けた。

「芹香から聞かなかつた？ 過激派って、上の方だけは金目当ての業突張りだったんだけど、末端は違うのよ」

「靈に恨み持つてるんだっけ？」

「そうそう。中立派の人達も、大体そうだったみたい。皆、靈に誰かを殺されて、恨みを晴らす為に退治屋になったの……アタシも半分そうだけど」

祐子はその言葉を止めて、グラスに残った麦茶を飲み干した。アイスをかじりながら、ゆなが首を傾げる。

「悪靈に魂食べられると、消滅しちゃうでしょ？ だから中立派は社長に常夜から靈を引っ張り出してもらって、最後に話がしたいって人達だったのよ。社長の目的は違ったけど」

「引っ張り出せなかったのか？」

「出せるわよ、靈操れるんだから。だから社長に逆らえなかったんじゃない、中立派の人たち。恩があるから。アタシは彼氏に引け目があったから、やってもらわなかったけど」

ふと、祐子は芹香へ視線を移した。芹香は何も言わずに、ただ俯いている。思案するような表情だった。

「……社長のご両親、つまり先代ね。こっちもそうだったの。悪靈に食われて、常夜に行った」

「自分と似たような境遇の方々を、無闇に排斥出来なかったのですわね」

渚が納得したように言うと、祐子は頷いた。そして彼女から視線を外し、肩を竦める。

「まあ実際聞いたワケじゃないから、分かんないけどね。波風立ってたくなかっただけかもだし」

「過激派と穏健派の抗争に世間の目を向けさせる為に、過激派を残しておいた可能性もありますが」

渚と祐子から同時に睨まれ、乃木坂は身を硬くした。藤堂は思わず嘔き出す。嫌味のような発言をする割に、気が小さいようだ。

「じゃ、今度こそ帰るわ。またね」

「この度は、大変ご迷惑を……」

「ああもつこんな時間！ 行きましょ警部！」

祐子の声につられて時計を見ると、時刻は三時を回っていた。この時間では、今日も休みにするしかないだろう。発言を遮られた乃木坂は、祐子に腕を掴まれて立たされる。傍目には、この二人の上下関係がよく分からない。

乃木坂を引つ張って出て行く祐子の背を見送った後、ゆなが食べ終わったアイスの棒を、藤堂の目の前に突き出した。棒には焼き印が捺されている。

「アタリなのです」

「そうかい。レシートやるから交換して帰れ」

ゆなは不満そうに顔をしかめて、棒をかじった。渚が携帯電話を握りしめたまま、おもむろに立ち上がる。

「お休みにするなら、私はお父様の所に行つて参りますけど」

「抗議なりなんなりして来い。ついでに、ゆなも連れて……痛っ」

耳を引つ張られて手の主を見ると、案の定ゆなだった。帰らないとでも言い出すのではないかという懸念が、脳裏をよぎる。しかしゆなは、耳を引つ張られた拍子に屈んだ藤堂の耳元に顔を寄せ、にやりと笑う。

「報告は、真つ先にゆなにして下さい」

藤堂は一瞬、固まった。渚も含み笑っている。何故に女というのは、こういう時ばかり勘がいいのだろう。

気付いてもらえるに越した事はない。無理に追い出して、気まずい思いをするよりはましだ。けれどこちらにも、心の準備というものがある。決心する前に焚き付けられてしまったては、言えるものも言えない。

「明日はちゃんと、仕事しなければなりませんな」

「藤堂が浮かれていなければね」

ぐう、と唸つて、藤堂は二人を睨んだ。妙に楽しそうな彼女達は、睨まれても動じる事なく、にやにやと笑みを浮かべている。藤堂は虫でも追い払うように、手を振った。

「あーうるせえ、お前らさっさと帰れ」

藤堂のその態度に怒るでもなく、ゆなと渚は顔を見合わせて、小鳥がさえずるように笑う。箸を転がしても可笑しい年頃とは、よく言ったものだ。二人はこちらに向かつて手を振りながら、跳ねるように家を出て行った。

残された芹香は、手を振って二人を見送った後、藤堂を見上げた。藤堂は思わず、身を硬くする。

「私に言うことがあるんじゃないのか？」

こっちもかと、藤堂は心中溜息を吐いた。普段は藤堂と張るほど鈍いのに、こういう時だけはやけに聡い。特に最近は、その傾向が益々顕著だ。

彼女は、理解してきたのかも知れない。藤堂は無闇にものを言わない代わりに顔に出るから、読めるようになったのだろう。

「ちよつと、出ようか」

芹香は頷いて、立ち上がった。

店から車で、二十分ほど走っただろうか。行く手には、水平線が見える。まだ日は高いが平日ということもあつてか、道路を走っている車は少ない。霊の活動が活発化する盆の時期は、彼らが集まる水辺は危ないから、無闇に海へ行ったりする者もないだろう。

けれど藤堂は、ここがいいと、何故かそう思った。後ろにいる明のせいかも知れない。それは少々癪に障るし、そもそもこの場所自体人目がない訳でもなかったが、狭い家の中でムードもへったくれもないよりは、幾らかマシだ。

ガードレールに車を寄せて停め、藤堂は車外へ出た。磯の香りが鼻腔を擦り、波の音が郷愁を感じさせる。海などついこの間見たばかりなのだが、今日ばかりは、全てが新鮮に見えた。太陽の光を反射して煌めく水面が眩しく、藤堂は目を細める。

「何故、ここなんだ」

湿り気を帯びた潮風が、彼女の髪をなびかせた。水面と同じく、その銀色も眩しいほどに輝いている。

「メイに、ここで口説かれた」

芹香は一瞬驚いたように目を丸くしたが、言葉の意味を理解したのか、すぐに笑った。

「浄霊屋をやるう、か？」

「よく分かったね」

低い堤防に腰を下ろし、藤堂は煙草に火を点ける。あの日もこんなふうに、海に背を向けて明と話した。あの時はまさかこんな事になるとは、思ってもみなかったが。

思えば明よりも、芹香と出会った方が先だった。あの時の事が、何十年の前のことのように思える。出会ってから、その時間は経っていないというのに。

「大体分かる。あなたの事なら」

芹香はガードレールに凭れて、海を見ていた。正面から少し逸れた位置にいる彼女の顔が、眩しくて見られなかった。

彼女を、真っ直ぐに見られなかった時期もあった。目を逸らさないと決めて早々、つい昨日、彼女から目を逸らした。もう、あんな思いはしたくない。

そんなふうに考えられるようになったのも、きつと、明のお陰だ。振り回されてはきたが、彼女のひたむきな姿勢が、藤堂を変えてくれた。大人になってしまった彼が変わるには、明ぐらい強引に引張ってくれる方が、丁度良かったのだろう。

「メイが、刀使ってくれてよ」

驚いたように藤堂を見上げ、芹香は二三度大きく瞬きした。

「私が？ ゆなじじゃないのか？」

「ゆなには持てねえだろ、あんな重い刀。渚もな」

芹香は思案するように視線を落とした。無言の間など普段は全く気にならないのだが、今日はやけに気にしてしまう。波の音が、煩わしくさえ思えた。

「……お前が入ってから、どのくらいだっけ」

視線を落としたまま、芹香は僅かに首を捻った。

「覚えていないな。随分経ったような気もするが、今まで短かったようにも思う」

「不思議なモンだな。コウは腹ん中入っちゃまうし」

「気付いていたのか」

藤堂は緩く、左右に首を振った。

「メイから聞いた」

あの時堤が取り出したのは、胎児の魂だった。胎児と言うほど成長はしていなかったのだろうが、代わりにコウが入ったのだと、明は言っていた。

母親の腹の中で死んだ子供に、他の魂が入る事は、稀にある事だという。その殆どは気付かれなまま終わるが、ごく少数は、生前の記憶の断片を残したまま産まれる。前世の記憶を残して産まれた子供というのが、大体これに当たる。

無論魂が違っても、血は繋がっている。腹の子はコウであり、藤堂の子でもある。明から聞いた時は複雑だったが、一晚経った今では、それもまた喜ばしい事だと思えた。

「アイツらと一緒にだから、寂しくないよな」

芹香は黙って頷いた。藤堂は携帯灰皿に煙草を押し付けて、火を消す。

守護霊達の力が弱くなっていたのは、コウが運命を予知していたからなのだと、明は言った。妙に芹香に懐いていたのも、そう考えれば説明がつく。藤堂を行かせまいとしていたのは、彼が後悔して傷つくと思ったから、なのだろう。

「お前、鴻の事、好きだったの？」

無言の間が嫌でそう問いかけると、芹香は小さく笑った。

「小学生の頃にな。あの頃はよく、父に連れられて家に来ていた。兄のように思っていたよ」

やっと、胸のつかえが取れたような気がした。藤堂は自分が馬鹿馬鹿しく思えて、力なく笑う。思えば、下らない事を気にしていたものだ。

「結婚しよう」

芹香があからさまに顔をしかめた。藤堂は返事を待たずに苦笑いを浮かべ、灰皿をしまうついでに取り出した指輪を差し出す。透明な石の嵌った、銀色の指輪だった。

「随分なタイミングだな」

「生まれつき間が悪いの」

「なんだそれは」

差し出された掌に指輪を乗せ、藤堂は素っ気なく答えた。銀色に輝く輪を摘んで、芹香はそれを目線の高さまで持ち上げる。

「いつの間にも買ったんだ」

「お前に会う前」

また、怪訝な顔をされた。嘘臭くとも事実だから、そうとしか答えようがない。

「イニシャルが入ってる」

「偶然。いや、奇跡？」

「意味が分からん」

冷たい返答だったが、白い頬には朱が上っていた。

「まあ、なんでもいいだろ」

芹香は暫く黙って指輪を見つめていたが、ふと口元を緩めた。そして徐に、左手に持った指輪を藤堂に差し出す。笑うのを堪えているようでいて、今にも泣き出しそうにも見える。藤堂は喉の奥で笑い、指輪を摘んだ。

白い手の甲が上に向き、止まった。指先が、かすかに震えている。形の良い爪を撫で、藤堂は細い薬指を摘んだ。

指輪は、しつらえたようにぴったりと嵌った。少し距離を保ったまま、二人は同時に笑う。

「幸せになるうか」

目を細めた芹香は、首を小さく左右に振った。長い睫毛の端で、涙の粒が輝いている。

「いいや」

伸ばされた両腕が、藤堂の首に絡む。潮風に混じって、出会った日にも感じた彼女の匂いが、鼻先をくすぐった。

「もう、充分」

腹の底から込み上げるものが、胸を満たして喉の奥を突いた。堪えきれない笑みが、顔をくしゃくしゃに歪める。きつとこれを、幸せと呼ぶのだろう。

手に入れた幸福をきつく抱きしめ、藤堂は静かに、目を閉じた。

どこまでも淀みなく、真っ直ぐだった。拗ねて卑屈になっても、曲がったりはしなかった。誰の色にも染まるようできて、悩んだ末に下すのは、誰の決断でもない。最後の最後に、決めたのは自分自身。

白ではない。何ものにも染まらないけれど、黒でもない。他の何色にも例えられない。だからあなたは

透明なひと。

エピソード

繁華街から少し逸れた裏道に、薄汚れたビルがある。周辺に建ち並ぶペンシルビルよりは幾分大きく見えるが、所詮は旧世代の遺物だ。その時代遅れで古ぼけた外観を嫌って、テナントもなかなか入らない。

ビルの一階には、大手除霊屋の支店が入っている。ここはつい一年ほど前まで質屋を営んでいたのだが、ある日突然、浄霊屋を始めた。そこまでは、よくある話だ。問題はこのしがない除霊屋が、大手除霊屋に吸収合併されたこと。

鳳コーポレーション東京東第六支店と名を改めたこの事務所は、三人の従業員と、一人の霊媒師見習いが切り盛りしている。このメンバーはそれぞれそれなりのポストに就いている上、個々の実力も他支店の支店長をも凌ぐのだが、会社側は彼らを他の支店へ割り振ろうとはしなかった。

シャッターが閉められている為、事務所内の様子を窺う事は出来ない。しかし物珍しそくに、店内を覗こうと試みる通行人の姿が、時折目に付く。平日の昼間に退治屋が閉まっている事も、そうそうない。

この店の従業員達は、全員の奥にある居住スペースに引っ込んでいた。1DKの、狭い家だ。主にはそれなりに愛着もあつたのだが、彼は最近ようやく、ここも事務所として使う決意を固めた。金銭面に余裕が出来た事もあるが、自宅として使うには、手狭になつてしまったのだ。

「ウチの坊主にも、こんな頃があつたよ」

鹿倉清澄は細い目を更に細めて、懐かしそうに呟いた。丸い背中を更に丸くして、彼は床に直接胡坐をかいている。

「触ったら弾けちまいそうだし、怖かつたなア」

「妙な事言つなよ」

迷惑そうにぼやいて、藤堂匡は腕に抱いた我が子を鹿倉から遠ざける。社長直々に支店長を任された彼の顎には、結婚した頃には確かななかった筈の無精髭が、また生え始めていた。

鹿倉は悲しそうに太い眉を下げて、洗い物をする少女を見上げる。「ゆなちゃん、ちょっとコイツに何か言っちゃってよ。俺三万も包んだんだぜ」

黒江ゆなは肩越しに振り返って、渋い顔をした。あどけなさを残した顔に浮かぶ表情の機微は、付き合いの長い者にしか見て取るこゝとが出来ない。

「三人の諭吉がどうしたというのです。お子様にはお金で買えない価値があるのです。幸せはプライスレス」

「こんな時にお金の事なんて、口に出すものじゃありませんわ」

高屋敷渚は小馬鹿にするように鼻を鳴らし、そう言っただけで、彼女の父親は一日にして大企業の社長へのし上がり、彼女自身、業務執行取締役というポストに就いた。しかし彼女がそれを鼻にかける事はない。

元々お嬢様育ちだったから、今更という感もある。威張るところか、月一度の取締役会に出席するのが面倒なのだと言っていた。渚は体力がない割に、現場仕事が好きなのだ。

ゆなと渚に揃って突っぱねられ、鹿倉はがっくりと肩を落とした。藤堂が鼻で笑う。その手はしっかりと、赤ん坊の小さな手を握っていた。渚の手が子供に伸び、指先で赤い頬をつつく。むずかるようにもごもごと口を動かした赤ん坊を見て、渚は嬉しそうに笑った。

つい昨日病院から帰ってきた藤堂芹香は、変わらない様子に安堵していた。この浄霊屋事務所が鳳コーポレーションに吸収合併され、彼女も業務部の部長に就任したのだが、本社に異動になることはなかった。高屋敷社長は自由だ。更に就任してすぐ産休に入ってしまったから、仕事と呼べるような仕事も碌にしていない。

心苦しくはあったが、事務所のメンバーに変わりがないことを、芹香は嬉しく思う。

帰宅したばかりなのだから少し休ませると藤堂は言ったのだが、結局三人とも待ちきれなかったようで、こうして訪ねて来てしまった。ただ来るだけなら、藤堂も追い返していただろう。

しかしゆなと渚は昼飯を作ると言って聞かなかったし、鹿倉には玄関で駄々をこねられ続け、結局折れた。更に早く芹香に会いたいと言われては、藤堂も無碍には出来なかったようだ。

「さあて」

言いながら手を拭いたゆなは、渚の反対側へ座り込んで身を乗り出した。目を輝かせながら赤ん坊の顔を覗き込むゆなの姿が、芹香には微笑ましく感じられた。

「ふにゃふにゃですな」

ゆなは声をひそめてそう呟く。渚は口をつぐんだまま、小さく頷いた。

「鼻からスイカを出す感じだと、母上様が言っておられました」

ゆなは大きな目で、芹香を見上げた。芹香は少し眉根を寄せ、顎に指先を当てる。ゆな自身変だが、彼女の母親もまた、たまに変な事を言う。

「スイカを鼻から出した事がないから分かん」

「そういう事聞いてんじゃないから」

鹿倉が、豪快な笑い声を上げた。彼は既に子供がいるから、他より幾分落ち着いている。旦那など今は普段通りだが、子供を見た瞬間硬直していた。あれは恐らく、呼吸もしていなかっただろう。

「……魂を出されかけた時の方が痛かった」

顎に手を当てたままそう言うと、藤堂は眉間に皺を寄せた。彼も、思い出したくはなかっただろう。けれどなかった事にするのも良くないと、芹香は思っている。

「アレ、そんな痛いのか？」

「気持ちの問題だ」

うつむくとゆなが唸った。藤堂は例えよつのない複雑な表情で、子供を見つめている。

この小さな生き物を守ってやれるのかと、芹香は不安にもなった。けれど今は一人ではないから、なんとかなるだろうという気はしている。旦那はこう見えて器用だから、自分が何も出来なくとも、きつと支えてくれる。

そうでなくとも、こうして肩が触れているだけで嬉しいと、芹香は思う。何も不安がる事はない。今はこんなにも、幸せなのだから。「メイが、おめでとうつてよ」

僅かに沈黙が続いた後、藤堂は唐突にそう言った。守護霊の声は守護される側の人間と、霊以外には聞こえない。

藤堂の肩口から顔を出した明が、芹香に向かってにつこりと笑いかけた。彼女の表情も、どこか幸せそうに見える。明が守護霊になったと血縁者に報告しに行った時も、彼女は今日と同じように、幸せそうに微笑んでいた。

何を幸せと思うかは、人それぞれ違う。他人の物差しで、人の幸せは測れない。明はこうして藤堂の守護霊となって、友人達といられる事が、幸せなのかも知れない。

「メイも、嬉しそうだな」

「お前が帰ってきてから、ずっと浮かれっぱなし」

「あなたが浮かれていたのが、明さんにも伝わったのではなくて？」

藤堂は少し笑って、そうかもね、と呟いた。

「祐子お姉さんは、いつ頃来られるのですか？」

「さあ。時間が空いたら、彼氏と来るつつつてたけど」

彼氏と、という辺りが祐子らしい。知らず口元を緩めていた芹香の頬を、旦那がつついた。

「ニヤニヤしちゃって」

「ニヤニヤしているのはそっちだろう」

「二人共幸せそうで、何よりだよ」

鹿倉がそう言ってからかった時、チャイムが鳴った。芹香は応対しようと腰を上げたが、渚に制されてその場に留まる。昨日も旦那に、何もするなと怒られたのを思い出す。二人共、過保護なのだ。

渚がドアの鍵を開けた瞬間、新藤祐子が飛び込んできた。スーツ姿ではあるが、相変わらず盛大に胸元を開けている。藤堂があからさまに嫌な顔をした。

「ヤダ、もう皆いるのね。ちょっとは遠慮しなさいよ」

本社勤めにはなったが、彼女は退治課の課長として、相変わらず霊喰いと共に奔走している。今日もスーツ姿でいるから仕事中的なだろうが、まさか抜け出して来たのだろうか、芹香は訝る。

「あんたもな」

「あらちっちゃい、ちょっと抱かせて……あ、これ出産祝い。おめでとっ」

「忙しいなあんた」

祝儀袋を押し付けて早々藤堂の手から赤ん坊を取り上げた祐子は、嬉しそうに笑みを浮かべた。渚が呆れた表情で、そんな祐子を見ている。

開いた扉から、恐る恐る顔を出す青年が目に入った。つい最近祐子と付き合い始めた彼は、常に一歩引いた位置から彼女を見ている。そういう形もあるのかも知れないと、芹香は感慨深く思う。

「鴻さん、どうぞ」

芹香が声を掛けると、鴻清十郎は頭を下げながらようやく上がってきた。渚はドアを閉めて、元通り施錠する。曲がりなりにも元社長である彼は、高屋敷現社長の計らいで、専務取締役就任した。色々問題もあったようだが、芹香は詳しく聞いてはいない。

「おめでとっございます、藤堂君」

鴻に、お咎めはなかった。証拠が何一つない事が主だった要因だが、本人の真摯な態度も手伝った事と思われる。

彼は暫く引き継ぎや後処理で忙しかったようで、謝罪に来たのはつい二ヶ月ほど前の事だ。事務所へ来るなり額で地を擦らんばかりに土下座して見せた彼を、責める気は起きなかった。

それよりも、一緒に訪ねてきた祐子に散々怒られたのだと言っていたから、寧ろ同情した程だ。祐子に怒られるのは、芹香も怖い。

藤堂は曖昧に笑って、頷いた。受け取った祝儀袋を持って立ち上がり、彼は一旦寢室へ向かう。

「ホラちよつと清ちゃん見てよ、顔真つ赤よ真つ赤。だから赤ちゃんでいうのね」

「うん、可愛いね」

祐子と鴻が付き合っているとの報告を受けたのは、病院のベッドの上だった。告げた旦那も動揺していたが、芹香は更に動揺した。驚きすぎて産気づいてしまった程に。

祐子に促されるまま子供の顔を覗き込んだ鴻は、あどけない寝顔を見て柔和に微笑んだ。穏やかな彼の表情に、芹香は安堵する。彼も今はきつと、幸せなのだろう。

「いいなあ、子供欲しいなあ」

「そうだね、いいね」

「あんたらまだ結婚もしてねえだろ」

出産祝いを置いて戻ってきた藤堂は、溜息混じりにぼやいた。

「鴻さんは、尻に敷かれそうですな」

「ちげえねえ」

鹿倉はたつぷりと髭を蓄えた顎を撫で、愉快そうに笑う。彼はたまたま謝罪に来た鴻と祐子に出くわし、その場で仲良くなってしまう。祐子も鹿倉も軽い性格だから、馬が合ったのだろう。

「祐子に引つ張って行って貰えば、私は間違えずに済みますから」

「祐子さんは間違いだらけだけどな」

「アタシがいつ間違ったって言うのよ。正しい事しか言わないじゃない」

藤堂は軽く肩を竦め、芹香の隣へ腰を下ろした。祐子と言いつのは避けたいようだが、その割には逐一突っかかる。

彼はあまりにも不器用だ。手先は器用な方なのだろうが、彼の行動も言動も、全てが裏目に出る。かと思えば勘が良かったり、妙な所で鈍かったりもする。そんなムラのある性格が、正直者と評される原因なのかも知れない。

実際藤堂は真つ直ぐなのだ、芹香は思っている。口を利くのが苦手な分、彼の言葉に嘘はないし、間違いもない。芹香は元々良く喋る男を厭う。

藤堂本人は人と向き合う事に苦手意識を持っているようだが、その実、向き合いたいと考えているようにも見える。そんな拗ねたような性格が徐々に変わって行くのを見るのが、楽しかった。隣で見たいといと、そう思った。

けれど彼を好きになつたきっかけは、今でも曖昧だ。きっかけというなら、彼の最初の言動がそうだったように思う。彼は誰もが知る有名人と接触して開口一番、あんたは退治屋かと聞いた。

あの時芹香は、多少なりとも驚いた。驕っていた訳ではないが、自分を知らない人間など、それまで会つた事がなかった。

同時に、嬉しかった。既成概念がなければ、穿つた目で見られないで済む。冷たい女だと言われるのにも、黄色い声を上げられる事にも、正直なところ、辟易していた。

彼が自分のどこを見て好きだと言つたのか、聞いた事はない。仮に祐子が言う通りの理由だとしても、それでも別に構いはしない。今はただ、幸せだった。

「おや」

大人達が下らない雑談に興じている間に、息子は腹を空かせたように、火がついたように泣き始めた。ゆなが祐子の腕の中で泣く子供を見て呟き、芹香を見る。

「ゴメンねー。お姉さんはおっぱい出ないのよー」

「大きさに出そうだけだな」

鹿倉が呟くと祐子は快活に笑い、手を出した芹香に赤ん坊を渡す。しかしのっそりと立ち上がる藤堂に気付くと、首を捻った。

「なんであんたも行くのよ」

祐子を視線だけで見下ろした彼は、芹香を指差した。

「こいつが壊滅的に不器用なの知ってたんだろ」

「ああ、一人で授乳出来ないのね」

「悪かったな」

事実だが、改めて言われると些か不愉快だった。芹香は眉間に皺を寄せて祐子を睨んだが、彼女は既に藤堂を見ていた。

「男の子は大変よ、胸萎むわよ。ねえ藤堂君」

「知らねえよ。萎んでも困らねえよ」

祐子は目を丸くして、まじまじと藤堂を見た。芹香も思わず、寢室に向けかけていた足を止める。

「……困らないのか？」

しかめた顔が、芹香に向けられた。

「なんで困るの」

意外な返答だった。彼が自分の胸ばかり見ていたのには気付いていたから、困るものとはかり思っていた。

「芹香さんがゆなのような洗濯板になっても、困らないのですか」

「流石にそこまでは萎まないわよ」

旦那が安堵の息を吐いたのは、この際見なかった事にした。芹香もなんとなく、安心してしまふ。萎む萎まないは別として。

「もううるせえからお前ら帰れ。出産祝いごちそうさん」

「アタシまだ帰らないわよ。渚ちゃんの夕飯ごちそうになるまで帰らない」

「祐子さんはお仕事なさって下さいな」

呆れた渚の声を背中で聞きながら、芹香は寢室に入って扉を閉めた。畳に腰を下ろすと、手足をしきりに動かしていた子供が、少し落ち着く。あどけない泣き声に、胸がじんと痛む。

「ブツサイク」

据わらない頭を掌で支えながら、藤堂が呟く。

「赤ん坊は皆こんな顔だ。顔がすっかりしてきたら、あなたよりいい男になるさ。なあ晃太」

子供の丸い額には、薄いほくろがあった。あの少年と同じ位置、同じ位の大きさの、ほくろ。これを見た時、コウが自己主張しているのだと、旦那は笑った。

命は尊い。まだ生きる意味に疑問を持つことすら知らない幼子が、生きようと懸命に乳を吸う姿を見る度に、そう思う。下手な理由を付ける事が馬鹿馬鹿しく感じられるほど、この小さな命を大事に思う。

普通に結婚し、普通に子供を育む。これが夢だったと言ったら、旦那は笑うだろうか。笑われても構わない。続いて行く命の連鎖を受け継がれる心を、今は大切に守りたい。

そして我が子を優しい目で見守る旦那が、何よりも愛しい。ふと上げられた視線と目が合うと、お互いなんとなく笑った。額と額を軽くぶつけ、痛いと言った。

腕に我が子の重みを、額に愛しい人の温もりを感じる。深い安らぎの中、芹香はそっと、目を閉じた。

エピローグ（後書き）

これにて完結です。

ここまでお読み下さった方、誠にありがとうございました。

サイトの方に下らないあとがきを載せておりますので、暇で暇で仕方のない方は<http://unonomex.sakura.ne.jp/toumeio.html>へどうぞ。

2010/10/17:とんでもない間違いに気付いたので修正ついでに加筆。

それでは改めて、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0118h/>

透明なひと

2010年10月17日20時40分発行